鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
（155）

梅城跡

第１分冊

二〇一〇年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（155）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　XXX

梅城跡（かこいじょうあと）

（いちき串木野市）

第１分冊

2010年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は南九州西回り自動車道川内道路（市来IC～薩摩川内都IC間）の建設事業に伴って平成11年度から同15年度にかけて実施した栫城跡の発掘調査の記録です。

栫城跡はいちき串木野市のほぼ中央を貫流する五反田川の形成する沖積低地とそれに隣接する台地にあります。台地上では旧石器時代から中世にわたる数多くの遺構・遺物が発見されました。台地斜面（山腹部）では県内初の調査事例となる中世から近世にかけての石切場とその関連遺構などが発見されました。また低地部では古代の土器集中箇所や大量の木器，近世の郷士屋敷跡の調査が主でした。これらのいずれの遺構遺物も地域の歴史を物語る貴重な資料であります。

本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力をいただいた国土交通省鹿児島国道事務所，いちき串木野市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成22年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所　長　山　下　吉　美

報告書抄録

ふりがな	かこいじょうあと
書名	椈城跡
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XXX
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	155
編著者名	冨田逸郎，関　明恵，平　美典，福薗美由紀，抜水茂樹，市村哲二
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
発行年月日	2010年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
かこいじょうあと 椈城跡	かごしまけん くしきのし 鹿児島県いちき串木野市 かんみょうあざもんぜん 上名字門前 あざかこいばな 字椈鼻 あざだいどうあん 字大堂庵	463612	5-10	31° 43′ 29″	130° 17′ 32″	確認調査 19991018 〜 19991022 本調査 20001106 〜 20010126 20010507 〜 20020315 20020507 〜 20030325 20030728 〜 20040312	50,830 ㎡	南九州西回り自動車道川内道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
椈城跡	散布地	旧石器時代		三稜尖頭器	調査後の遺跡調査範囲については消滅したが，その他の部分については遺跡が残存する。
		縄文時代早期	落し穴	石坂式土器・押型文土器・撚糸文土器・磨敲石	
		縄文時代前期		曽畑式土器	
		縄文時代中期		深浦式土器	
		縄文時代晩期	石斧埋納遺構（デポ）	黒川式土器・石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石 敲石・石錘・石錐・砥石・石皿・有溝砥石・削器	
		弥生時代後期		松木薗式土器	
		古墳時代		成川式土器	
		古代	土器集中遺構・柱列	土師器・須恵器・墨書土器・刻書土器・刻印土器・黒色土器・赤色土器・提砥・土錘・木製品（椀・皿・桶底板・木錘）	
		中世	掘立柱建物跡・方形竪穴建物跡・土壙墓 溝状遺構・炉状遺構 石切遺構・柱列 鍛冶関連遺構	土師器・須恵器・瓦質土器・カムィヤキ・青磁 白磁・青花・輸入陶器・備前焼・銭貨・羽口 鉄滓（椀形滓・流動滓・ガラス質滓・鉄塊系遺物） 石臼・茶臼・滑石製石鍋・五輪塔	
		近世	屋敷跡・石垣・石列 排水溝・石切遺構 一字一石経塚・墓壙	薩摩焼・在地系磁器・肥前系陶磁器・砥石・瓦 煙管・六道銭・石工用具・土人形・一字一石経 木製品	

遺跡の概要	本遺跡は，旧石器時代から近世までの長期にわたる複合遺跡である。主体となるのは古代から近世の時代で，古代では墨書土器・刻書土器・鉄鉢などが出土し，中世では掘立柱建物跡をはじめとする数々の遺構や，五輪塔，多数の外来系遺物が出土した。また中世から近世にかけての石切場跡が検出され，県内初の調査事例となったほか，石造物や石垣，石工用具，鍛冶遺構など石切場に関連する遺構・遺物も出土した。さらに，近世では郷士年寄屋敷跡や寺院に関連すると思われる遺構・遺物が検出された。古代から近世にかけての本遺跡は，全体的に寺院の性格を色濃くもちながらも，政治的情勢や立地的特徴に応じて，他の様相が現れるような性格をもっていたと推定される。薩摩における寺院の様相や，石切場，流通の在り方などを考察する上で，貴重な資料を数多く提示してくれる遺跡である。



桝城跡位置図（S=1/50,000）

例　　言

1　本報告書は，南九州西回り自動車道川内道路（市来 IC ～薩摩川内都 IC 間）建設に伴う栫城跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県いちき串木野市上名（発掘時，串木野市上名）に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成は，建設省九州地方建設局鹿児島国道事務所（現　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，平成11年度から平成15年度にかけて実施し，整理作業報告書作成は，平成16～18，21年度に鹿児島県埋蔵文化財センターで実施した。

5　遺物番号は各節ごとの通し番号とし，本文，挿図，表，写真図版の番号は一致する。また，各表の遺物取上番号は発掘現場で使用したままの番号である。

6　挿図の縮尺は各図面に示した。

7　本書中の標高は建設省九州地方建設局鹿児島国道事務所が提供した工事計画図面にある国土座標のＺ座標値を基準とした。

8　発掘調査における遺構実測図の作成及び写真撮影は，各年度の調査担当者が行った。なお，一部の遺構実測については（株）アジア航測等に委託した。

9　遺構図のトレースは，整理作業員の協力を得て，平成21年度の担当職員が行った。

10　遺物の実測，トレースは，整理作業員の協力を得て，平成21年度の担当職員が行った。なお，一部の陶磁器，石器については（株）九州文化財研究所等に委託し，その年度の担当職員が監修した。

11　遺物写真の撮影は本センター職員が行った。

12　執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ～Ⅲ章　平，冨田，市村　　第Ⅳ章　福薗，冨田　　第Ⅴ章　平，冨田，抜水

第Ⅵ章　関，福薗，冨田，抜水

第Ⅶ章　第１節１　冨田，２　福薗，第２節　平，第３節１（縄文～古墳）福薗

１（古代～近世以降）関，２・３　関，第４・５節　平

13　竹中正巳（鹿児島女子短期大学教授）に本遺跡出土近世人骨の分析をお願いし，その結果を付論１として巻末に掲載した。

14　三辻利一（鹿児島国際大学名誉教授）に本遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析をお願いし，その結果を付論２として巻末に掲載した。

15　放射性炭素年代測定ほかの自然科学分析を（株）加速器分析研究所等に依頼し，その結果は委託先会社名とともに付論３～６として巻末に掲載した。

16　遺物は本センターで保管し，展示等に活用するほか，研究者等にも公開する。公開の手続きについては，本センターホームページを参照いただきたい。なお，遺跡出土遺物の注記略号は「カコイ」である。

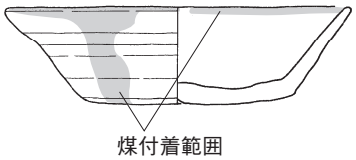
凡　　例

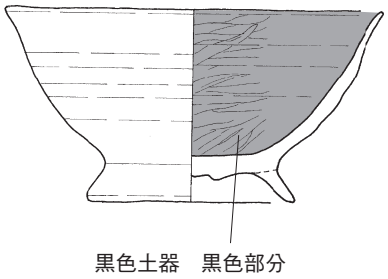
1　基準方位は磁北であり，レベルは海抜絶対高である。

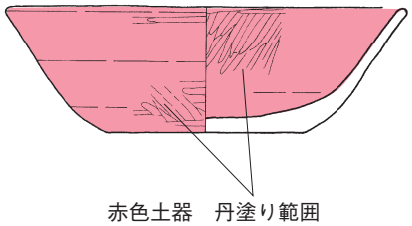
2　使用した土色は『新版標準土色帖　2004年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。ただし，陶磁器の胎土の色調や釉調については，『標準土色帖』を基準としながら，一般的な色調感も加味して表現した。

3　遺構・遺物実測図の縮尺は，挿図中に記した。

4　本書で用いる土器の表現については，次のとおりである。







5　本書で用いる炉状遺構の表現については，次のとおりである。

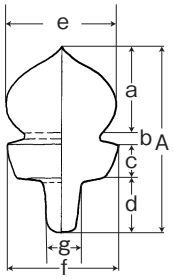
焼土　　炭化物

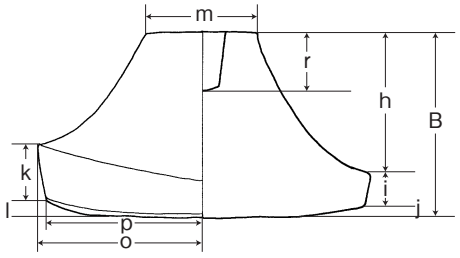
6　本書で用いる鍛冶遺構の表現については，次のとおりである。

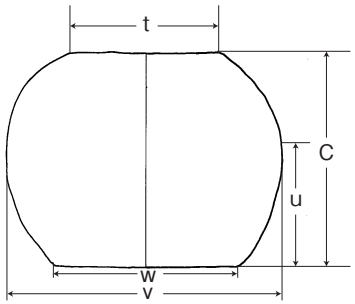
鉄滓　　焼土
炭化物

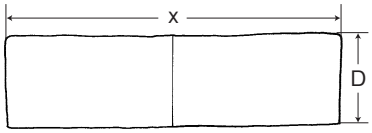
7　本書で用いる羽口・炉壁等の鉄滓付着部分に関しては，網掛けで表現した。

8　本書で用いる五輪塔の計測箇所は次のとおりである。









目　　次

序文
抄録
例言
凡例
目次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至るまでの経過……1
第２節　遺跡の概要……1
第３節　調査の経過……5
第４節　調査の組織……5
第５節　調査の経緯（日誌抄）……9

第Ⅱ章　遺跡の位置と地理的・歴史的環境
第１節　遺跡の位置と地理的環境……15
第２節　歴史的環境……19

第Ⅲ章　発掘調査の概要
第１節　発掘調査の方法……25
第２節　調査の概要……25
第３節　遺跡の層序……26
第４節　報告書における調査区の取扱い……26

第Ⅳ章　台地部の調査
第１節　調査の概要……29
第２節　Ａ～Ｅ調査区……34

第Ⅴ章　山腹部の調査
第１節　調査の概要……97
第２節　Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区……100
第３節　Ｎ調査区……147
第４節　Ｋ調査区……214
第５節　Ｐ調査区……260

第一分冊

第Ⅵ章　低地部の調査
第１節　調査の概要……1
第２節　Ｐ・Ｒ・Ｓ調査区……4
第３節　Ｑ調査区……205
第４節　Ｇ調査区……213

第Ⅶ章　まとめ
第１節　台地部……337
第２節　山腹部……338
第３節　低地部……347

付論１
椿城跡近世墓出土人骨の分析……355
付論２
椿城跡出土の須恵器の蛍光Ｘ線分析……364
付論３
椿城跡における自然科学分析……368
付論４
椿城跡の自然科学分析……368
付論５
椿城跡から出土した木製品の樹種……378
付論６
放射性炭素年代測定結果（ＡＭＳ測定）……379

第二分冊

写真図版

第三分冊

挿　図　目　次

台地部

第１図　台地部の範囲（Ａ～Ｅ調査区）……29
第２図　台地部の層序……30
第３図　台地部土層断面図……31
第４図　Ａ～Ｄ調査区遺構配置図……32
第５図　Ｅ調査区遺構配置図……33
第６図　旧石器時代の石器……34
第７図　集石……35
第８図－１　落し穴１……35
第８図－２　集石・落し穴１位置図……35
第９図－１　落し穴２……36
第９図－２　落し穴３……36
第９図－３　落し穴２・３位置図……36
第10図　Ａ～Ｅ調査区の縄文土器……37
第11図　Ａ～Ｅ調査区の石器１……38
第12図　Ａ～Ｅ調査区の石器２……39
第13図　Ａ～Ｅ調査区の石器３……40
第14図　中世墓遺構図・出土遺物……43
第15図　炉状遺構……44
第16図　炉状遺構周辺ピット図・出土遺物……45
第17図　方形竪穴建物跡１号……46
第18図　方形竪穴建物跡２号……47
第19図　方形竪穴建物跡２号・出土遺物……48
第20図　方形竪穴建物跡３号・出土遺物……49
第21図　掘立柱建物跡１号……50
第22図　掘立柱建物跡２号……51
第23図　掘立柱建物跡３号……52
第24図　掘立柱建物跡４号……53・54
第25図　掘立柱建物跡５号……55
第26図　掘立柱建物跡６号・柵状遺構……56
第27図　掘立柱建物跡７号……57・58
第28図　溝状遺構１・出土遺物……59
第29図　溝状遺構２・出土遺物……60
第30図　溝状遺構３・４・５……61
第31図　溝状遺構６・出土遺物……62
第32図　溝状遺構７・出土遺物……62
第33図　溝状遺構８……63
第34図　溝状遺構９・出土遺物……64
第35図　溝状遺構10……65・66
第36図　土坑１・３・４・５……67
第37図　土坑２……68
第38図　土坑２・出土遺物……69
第39図　大型土坑　平・断面図……70
第40図　大型土坑出土遺物ドット図……71
第41図　大型土坑出土遺物１……72
第42図　大型土坑出土遺物２……73
第43図　大型土坑出土遺物３……74
第44図　大型土坑出土遺物４……75
第45図　大型土坑出土遺物５……76
第46図　大型土坑出土遺物５－写真……77
第47図　大型土坑出土遺物６……78
第48図　大型土坑出土遺物６－写真……79
第49図　大型土坑出土遺物７……80
第50図　大型土坑出土遺物８……81
第51図　大型土坑出土遺物９……82
第52図　大型土坑出土遺物10……83
第53図　大型土坑出土遺物11……84
第54図　大型土坑出土遺物12……85
第55図　大型土坑出土遺物13……86
第56図　台地部一般遺物１……88
第57図　台地部一般遺物２……89
第58図　台地部一般遺物３……90

山腹部

第１図　山腹部の範囲……97
第２図　山腹部土層断面図……99
第３図　Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区の縄文土器……100
第４図　Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区の石器１……101
第５図　Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区の石器２……102
第６図　Ｌ・Ｏ・Ｑ・Ｎ調査区遺構配置図……103
第７図　掘立柱建物跡１……104
第８図　掘立柱建物跡２……105
第９図　炉状遺構配置図（Ｌ調査区）……107
第10図　炉状遺構１～４……108
第11図　炉状遺構５・６……109
第12図　大型土坑１・２……110
第13図　大型土坑３……111
第14図　大型土坑４……112
第15図　大型土坑４出土遺物１……113
第16図　大型土坑４出土遺物２……114
第17図　大型土坑４出土遺物３……115
第18図　大型土坑４出土遺物４……116
第19図　大型土坑４出土遺物５……117
第20図　大型土坑４出土遺物６……118
第21図　大型土坑４出土遺物７……119
第22図　大型土坑５……120
第23図　大型土坑５出土遺物……121
第24図　大型土坑６と出土遺物……122
第25図　大型土坑７と出土遺物……123
第26図　大型土坑８・９……124
第27図　溝状遺構１……125
第28図　溝状遺構１出土遺物……126
第29図　溝状遺構２……127
第30図　溝状遺構２出土遺物１……128
第31図　溝状遺構２出土遺物２……129
第32図　鉄生産関連遺構（土坑１～４）……130
第33図　鉄生産関連遺構断面図（土坑１～４）…131
第34図　鉄生産関連遺構出土遺物（土坑１・３）132
第35図　鉄生産関連遺構出土遺物（土坑５）……133
第36図　古代の遺物１（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）……134
第37図　古代の遺物２（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）……135
第38図　古代の遺物３（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）……136
第39図　中世の遺物１（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）……137
第40図　中世の遺物２（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）……138
第41図　中世の遺物３（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）……139
第42図　溝状遺構１……140
第43図　溝状遺構１出土遺物……141
第44図　溝状遺構２……142
第45図　溝状遺構２出土遺物１……143
第46図　溝状遺構２出土遺物２……144
第47図　近世の遺物（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）……145
第48図　その他　杭（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）……146
第49図　貝殻廃棄土坑……147
第50図　古代の遺物１（N-n9調査区）……148
第51図　古代の遺物２（N-n7調査区）……149
第52図　古代の遺物３（N-n10調査区）……149
第53図　中世墓１・２と出土遺物……150
第54図　中世墓３と出土遺物……151
第55図　中世墓４と出土遺物……152
第56図　凝灰岩の分布と遺跡の位置……153
第57図　石切場全体図……155・156
第58図　石切場拡大図１（①部分）……157
第59図　石切場拡大図２（②部分）……158
第60図　石切場拡大図３（③部分）……159
第61図　石切場拡大図４（④部分）……160
第62図　石切場拡大図５（⑤部分）……161
第63図　石切場立面図１（A～C部分）……165・166
第64図　石切場立面図２（D～F部分）……167
第65図　石屑（コッパ）実測図……168
第66図　石切場埋土状況図……168
第67図　石工用具１……173
第68図　石工用具２……174
第69図　石工用具３……175
第70図　石切場埋土内出土遺物……176

第71図　掘立柱建物跡１（N-n7調査区）……178
第72図　掘立柱建物跡２（N-n9調査区）……180
第73図　石切場内石垣……181
第74図　鍛冶遺構配置図……183
第75図　鍛冶遺構１……183
第76図　鍛冶遺構１出土遺物……184
第77図　鍛冶遺構２……185
第78図　鍛冶遺構３……185
第79図　鍛冶遺構４と出土遺物……186
第80図　鍛冶遺構５と出土遺物１……187
第81図　鍛冶遺構５出土遺物２……188
第82図　鍛冶遺構６……190
第83図　N(n9)調査区遺構配置図……191
第84図　N(n9)調査区鍛造剥片出土分布図……192
第85図　鍛冶遺構７・８……192
第86図　鍛冶遺構９～14……193
第87図　鍛冶遺構15と出土遺物……194
第88図　大型土坑１と出土遺物……196
第89図　大型土坑２……197
第90図　大型土坑２内五輪塔出土状況……198
第91図　大型土坑２埋土状況と出土遺物……199
第92図　大型土坑３と出土遺物……200
第93図　溝状遺構１……201
第94図　溝状遺構２・３－①……202
第95図　溝状遺構３－②・③……203
第96図　道跡１・２……204
第97図　良福寺井戸跡……205
第98図　礫集積土坑１～３……206
第99図　礫集積土坑４……207
第100図　土坑１～５……209
第101図　中世の遺物１（N-n7調査区）……210
第102図　中世の遺物２（N-n9調査区）……211
第103図　中世の遺物３（N-n9調査区）……212
第104図　中世の遺物４（N-n9調査区）……213
第105図　古代の遺物(K調査区)……214
第106図　K調査区遺構配置図……215
第107図　炉状遺構……216
第108図　中世墓１・２と出土遺物……217
第109図　中世墓３と出土遺物……218
第110図　礫集積１と出土遺物１……219
第111図　礫集積１と出土遺物２……220
第112図　礫集積２……221
第113図　礫集積３……222
第114図　礫集積４～６……223
第115図　五輪塔廃棄溝出土遺物……224
第116図　五輪塔廃棄溝……225・226
第117図　相輪・空風輪１……227
第118図　空風輪２……228
第119図　火輪１……229
第120図　火輪２……230
第121図　火輪３……231
第122図　火輪４……232
第123図　火輪５……233
第124図　火輪６……234
第125図　水輪１……235
第126図　水輪２……236
第127図　水輪３……237
第128図　水輪４……238
第129図　地輪１……239
第130図　地輪２……240
第131図　地輪３……241
第132図　地輪４……242
第133図　地輪５……243
第134図　一字一石経塚１……244
第135図　一字一石経塚２……245
第136図　一字一石経塚３……246
第137図　一字一石経塚４……247
第138図　一字一石経塚５……248
第139図　一字一石経塚６・７……249
第140図　一字一石経塚８・９……250

第141図 一字一石経塚９（完掘）・10……251
第142図 一字一石経塚11……252
第143図 一字一石経塚12……253
第144図 一字一石経塚13……254
第145図 一字一石経塚14・15……255
第146図 一字一石経１……256
第147図 一字一石経２……257
第148図 中世の遺物（K調査区）……258
第149図 近世の遺物（K調査区）……259
第150図 良福寺和尚墓出土状況１……260
第151図 良福寺和尚墓出土状況２……261
第152図 四世存方大和尚墓石……262
第153図 九世東岸大和尚墓石……263
第154図 近世墓群……265・266
第155図 ３号・９号墓……267
第156図 25号・49号墓……268
第157図 35号墓……269
第158図 36号・38号墓……270
第159図 39号墓……271
第160図 53号・72号墓……272
第161図 80号・98号墓……273
第162図 100号・111号墓……274
第163図 149号・150号墓……275
第164図 153号墓……276
第165図 155号・160号墓……277
第166図 156号墓……278
第167図 159号・162号墓……279
第168図 161号墓……280
第169図 163号・164号墓……281
第170図 166号墓……282
第171図 近世の遺物（P調査区）……284

写　真　目　次

写真１　石切場全景……154
写真２　石切場拡大１（n6・n7地点）……162
写真３　石切場拡大２（n6地点）……163
写真４　石切場拡大３（n3～n6地点）……164
写真５　採石状況１……170
写真６　採石状況２……171
写真７　ツルハシ・敲打痕……172
写真８　掘立柱建物跡１（N-n7調査区）……177
写真９　掘立柱建物跡１ピット……179

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，市来～隈之城間に南九州西回り自動車道川内道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改編により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化財課が平成８年８月に市来ICと隈之城IC（現薩摩川内都IC）間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，８か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化財課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の発掘調査が実施されることになった。

これを受けて，平成11年度から平成15年度にかけて，毎年度，計画的かつ継続的に各遺跡の発掘調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。なお，事業区間内の遺跡の概要については，以下の通りである。

第２節　遺跡の概要

１　市堀遺跡…いちき串木野市港町に所在し，標高約40ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は3,040㎡である。縄文～中世の遺物が出土したが少量であった。縄文時代早期では，集石１基，落し穴と想定される土坑１基が検出された。遺物は，前平式土器・貝殻条痕文土器と磨石等が出土した。晩期では入佐式・黒川式土器が，弥生時代中期では黒髪式土器が，古墳時代では成川式土器が出土した。古代～中世にかけての溝状遺構１条，焼土域２か所，土坑10基が土師器，須恵器等と一緒に検出された。また，古墳時代～古代で双孔棒状土錘・管状土錘が出土した。

２　安茶ヶ原…いちき串木野市川上に所在し，標高約25ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は16,000㎡である。縄文時代早期・後期の前平式・石坂式・押型文・深浦式・市来式土器が出土したほか，晩期の層位から佐賀県腰岳産の黒曜石10点が集中して見つかり，交流または交易によってもたらされたものと考えられる。ほかに，古墳時代の成川式土器も出土したが，注目されるのは古代～中世にかけての遺構・遺物である。「日置厨」と墨書された須恵器の坏が土坑内に遺棄された状態で出土したほか，矩形に掘り込まれた溝と，２棟の四面庇建物跡がほぼ南北に並んで検出された。その東側では，北側に庇が取り付く片庇建物跡も見つかり，２間 × ３間を主とする掘立柱建物跡５棟も確認され，須恵器・土師器・陶磁器・染付等多くの遺物も出土した。このことから本遺跡は，古代末から中世初期の在地領主層の居館跡と推定される。

３　**桁城跡**……いちき串木野市上名に所在し，五反田川中流の標高約10ｍの低地部から標高約50ｍのシラス台地上にかけて立地する。遺跡から東へ約800ｍのところに坂ノ下城跡が，

西へ約500ｍのところに串木野城跡がある。調査面積は約50,830㎡である。遺跡は台地部・山腹部・低地部の大きく３つで構成される。台地部からは二面庇付掘立柱建物跡２棟のほか，溝状遺構・方形竪穴建物跡・竈・中世墓等が検出された。山腹部からは，石切場跡が検出された。これは鹿児島県で初の調査事例となった。低地部からは近世墓167基・良福寺住職の墓石が検出された。また中世ではカムィヤキ，東播磨系須恵器，樺万丈，青磁，白磁など中世の外来系陶磁が多数出土したほか，古代では墨書・刻書土器も出土した。これらのことから，遺跡は大きく城関連の遺構・石切場・寺院関連の遺構で構成され，古代以降において重要な場所であったことが推定される。

4　霜月田……薩摩川内市都町に所在し，標高約50ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は11,000㎡である。旧石器時代，縄文時代，古代～中世，近世の遺構・遺物が発見された。旧石器時代ではブロックを形成する細石刃・剥片等が出土した。縄文時代では６基の集石が検出され，中原式・押型文・塞ノ神式等の土器や石鏃・石斧・石皿・磨石等が出土した。古代～中世が本遺跡の主となるところで，掘立柱建物跡５棟・竪穴建物跡４基・落し穴３基・土坑３基・焼土１か所が検出され，遺物も土師器・須恵器・陶磁器等が出土した。

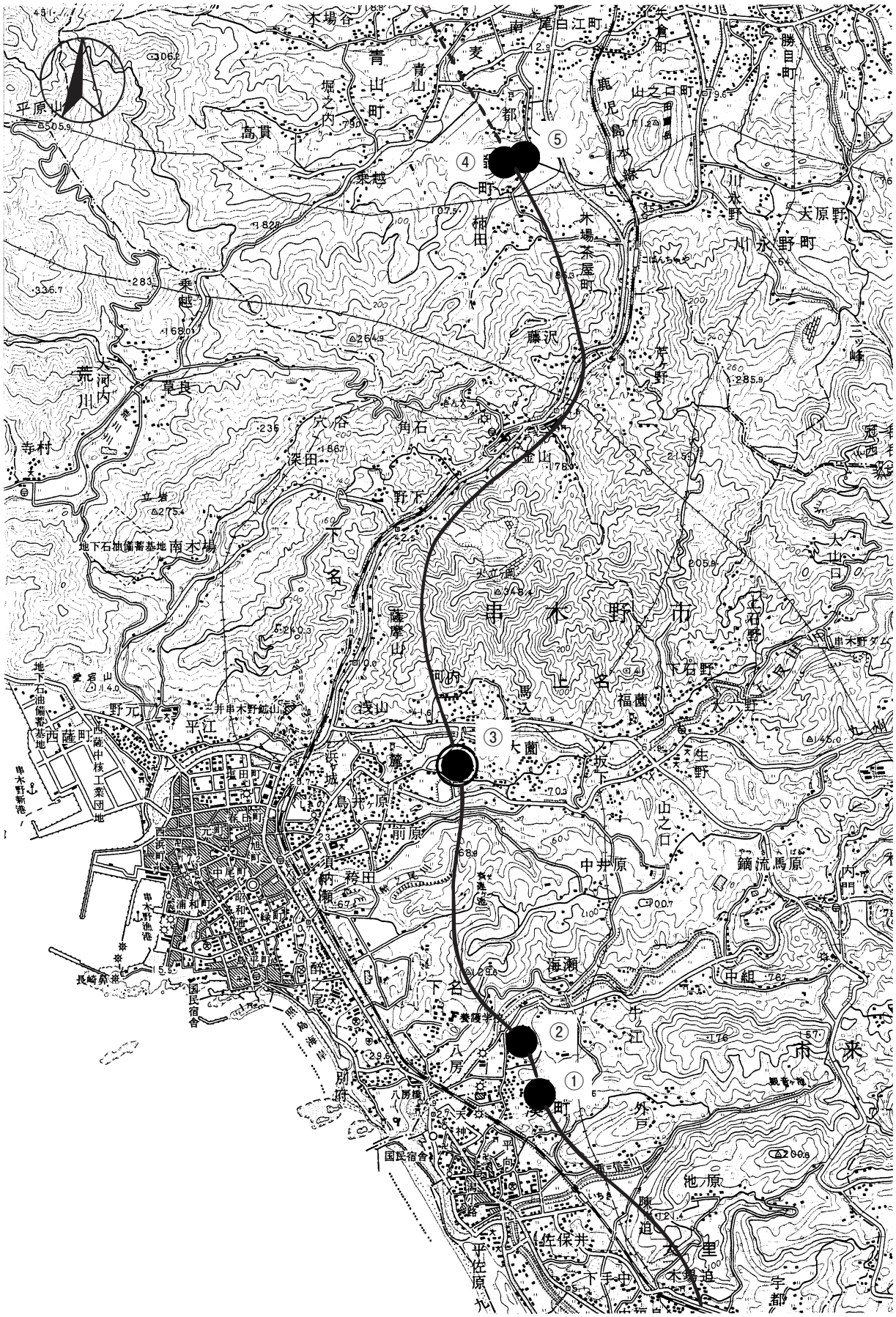
5　都原……薩摩川内市都町に所在し，標高約50ｍのシラス台地上に立地する。調査面積は4,000㎡である。縄文時代早期や古代～中世の遺構・遺物が発見された。縄文時代早期では集石１基，土坑３基が検出され，石坂式・手向山式・塞ノ神式土器や石鏃・石斧・磨石・石皿が出土した。古代では蔵骨器と考えられる９世紀の須恵器壺が埋納されていた。中世では方形竪穴遺構・溝状遺構が検出された。方形竪穴遺構は内部に炭化材と焼土が見られた。溝には土師器・青磁・白磁片が出土した。これらは成枝氏居城の都城跡との関連も考えられる。

※刊行報告書（市来 IC ～薩摩川内都 IC 間）

『市堀遺跡』	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（117）2007.3
『安茶ヶ原遺跡』	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（118）2007.3
『霜月田遺跡・都原遺跡』	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（131）2008.3
『榕城跡』	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（155）本報告

表１　南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査遺跡一覧表（市来 IC ～薩摩川内都 IC）

番号	遺跡名	所在地	（㎡）	調査面積 調査期間	調査担当	時代	概要
1	市堀	いちき 串木野市 湊町	3,040	確認 H13.12 全面 H14.5 ～ H14.7	繁昌・宮田（洋） 石丸・相美	縄文 古墳 古代 中世 近世	条痕文土器・黒色磨研土器 成川式土器 土師器甕・双孔状土錘 青磁 薩摩焼 鹿埋セ報告書（117）2007年刊行
2	安茶ヶ原	いちき 串木野市 川上	16,000	確認 H11.1 全面 H11.1 ～ H11.3 H11.5 ～ H11.10 H12.5 ～ H12.8 H13.5 ～ H14.1	繁昌・栗林 繁昌・栗林 繁昌・野邊 繁昌・元田 繁昌・石丸	旧石器 縄文 古墳 古代 中世 近世 	ナイフ形石器・台形石器 前平式・加栗山式・深浦式・中原式 市来式土器 成川式土器 土師器・須恵器・墨書土器 黒色土器・赤色土器 掘立柱建物跡・竪穴遺構・溝状遺構 土師器・貿易陶磁器・常滑焼 掘立柱建物跡・道路状遺構・薩摩焼 染付 鹿埋セ報告書（118）2007年刊行
3	柊城跡	いちき 串木野市 上名	50,830	確認 H11.10 全面 H12.11 ～ H13.1 H13.5 ～ H14.3 H14.5 ～ H15.3 H15.7 ～ H16.3	前迫・森田 繁昌・森田 平木場・三垣 石丸・西・松元 森田・拔水・吉岡 菅牟田・星野 石丸・平・相美 森田・拔水・吉岡 星野・平	旧石器 縄文 古墳 古代 中世 近世	三稜尖頭器・剥片 落し穴・石斧デポ・押型文土器 黒川式土器 成川式土器 土師器甕・須恵器・黒色土器 墨書土器・ヘラ書き土器・刻書土器 掘立柱建物跡・中世墓・石切場跡 鍛冶遺構・五輪塔・貿易陶磁器 カムィヤキ・滑石製石鍋・北宋銭 石切場跡・近世墓・一字一石経塚 郷士年寄屋敷跡・薩摩焼・染付 鹿埋セ報告書（155）本報告
4	霜月田	薩摩川内市 都町	11,000	確認 H12.6 全面 H12.6 ～ H12.8 H15.6 ～ H16.2	宮田（洋）・三垣 宮田（洋）・三垣 寺原・國師 石原田	旧石器 縄文 中世 	細石刃 集石・貝殻条痕文土器・押型文土器 撚糸文土器・石鏃・石斧・石皿 掘立柱建物跡・竪穴遺構・焼土域 土師器・須恵器・鉄製品 鹿埋セ報告書（131）2008年刊行
5	都原	薩摩川内市 都町	4,000	確認 H12.5 全面 H12.5 ～ H12.6 H14.8 ～ H14.12	宮田（洋）・三垣 宮田（洋）・三垣 星野・菅牟田	縄文 古代～ 中世 	集石・土坑・石坂式・手向山式土器 貝殻条痕文土器・塞ノ神式土器 石鏃・石斧・石皿・磨石 蔵骨器埋納遺構・溝状遺構 土師器・須恵器・白磁 鹿埋セ報告書（131）2008年刊行



南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査位置図（S=1/50,000）

第３節　調査の経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所に改称）鹿児島国道工事事務所（以下，鹿児島国道事務所）は，「南九州西回り自動車道川内道路建設事業」の計画に基づいて，市来 IC ～薩摩川内都 IC 間の建設工事を進めた。

工事区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，鹿児島県教育庁文化財課と鹿児島国道事務所との協議に基づき，鹿児島県知事と鹿児島国道事務所との間で発掘調査に係わる委託契約が結ばれた。これを受けて鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）が埋蔵文化財の確認調査と本調査を進めた。

平成８年８月に市来 IC ～薩摩川内都 IC 間の分布調査が実施され，事業予定地内に８か所の遺物散布地や確認調査の必要な地点が所在することが判明した。この結果に基づき，栫城跡の確認調査は平成11年10月18日から10月22日まで実施した。

本調査は年次的・計画的に実施することとし，平成12年度は調査区域のうち2,000㎡，平成13年度は20,000㎡，平成14年度は20,870㎡，平成15年度は7,960㎡を対象として，埋文センターが実施した。

平成12年度の調査は平成12年11月６日から平成13年１月26日まで，平成13年度の調査は平成13年５月７日から平成14年３月15日まで，平成14年度の調査は平成14年５月７日から平成15年３月25日まで，平成15年度の調査は平成15年７月28日から平成16年３月12日まで実施した。

第４節　調査の組織

〈確認調査・平成11年度〉

起因事業主体者	建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	吉永　和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	総務係長	有村　　貢
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	調査課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	青﨑　和憲
調査担当者	〃	文化財主事	前迫　亮一
	〃	文化財主事	森田　郁朗
調査事務担当者	〃	主　　査	今村孝一郎

〈発掘調査・平成12年度〉

起因事業主体者	建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（平成12年12月まで）
	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（平成13年１月から）
調査主体	鹿児島県教育委員会

調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井上　明文
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	総務係長	有村　　貢
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
調査担当者	〃	文化財主事	繁昌　正幸
	〃	文化財主事	森田　郁朗
調査事務担当者	〃	主　　査	今村孝一郎

〈発掘調査・平成13年度〉

起因事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井上　明文
調査企画者	〃	次　　長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
調査担当者	〃	文化財主事	平木場秀男
	〃	文化財主事	三垣　恵一
	〃	文化財研究員	石丸　良輔
	〃	文化財調査員	西　吾意子
	〃	文化財調査員	松本　信光
調査事務担当者	〃	総務係長	前田　昭信
	〃	主　　査	今村孝一郎

〈発掘調査・平成14年度〉

起因事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	井上　明文
調査企画者	〃	次長兼総務課長	田中　文男
	〃	調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修

調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	森田　郁朗
	〃	文化財主事	抜水　茂樹
	〃	文化財主事	吉岡　康弘
	〃	文化財研究員	星野　一彦
	〃	文化財研究員	石丸　良輔
	〃	文化財研究員	菅牟田　勉
	〃	文化財調査員	平　　美典
	〃	文化財調査員	相美伊久雄
調査事務担当者	〃	総務係長	前田　昭信
	〃	主　　査	脇田　清幸

〈発掘調査・平成15年度〉

起因事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	木原　俊孝
調査企画者	〃	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃	調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
調査担当者	〃	文化財主事	森田　郁朗
	〃	文化財主事	抜水　茂樹
	〃	文化財主事	吉岡　康弘
	〃	文化財研究員	星野　一彦
	〃	文化財調査員	平　　美典
調査事務担当者	〃	総務係長	平野　浩二
	〃	主　　査	脇田　清幸

〈整理作業・平成16年度〉

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	木原　俊孝
調査企画者	〃	次長兼総務課長	賞雅　　彰
	〃	調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
調査担当者	〃	文化財調査員	平　　美典

調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	石丸　良輔
調査事務担当者	〃	総務係長	平野　浩二
	〃	主　　査	脇田　清幸

〈整理作業・平成17年度〉

起因事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	上今　常雄
調査企画者	〃	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次長兼調査第一課長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
	〃	主任文化財主事	繁昌　正幸
調査担当者	〃	文化財主事	吉岡　康弘
	〃	文化財主事	三垣　恵一
調査事務担当者	〃	主幹兼総務係長	平野　浩二
	〃	主　　査	寄井田正秀

〈整理作業・平成18年度〉

起因事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査責任統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長（～７月31日）	上今　常雄
	〃	（８月１日～）	宮原　景信
調査企画者	〃	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次　　長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
	〃	主任文化財主事	宮田　栄二
調査担当者	〃	文化財主事	吉岡　康弘
	〃	文化財研究員	平　　美典
調査事務担当者	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主　　査	蒲池　俊一

〈整理作業・報告書作成作業・平成21年度〉

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査責任者統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　　長	山下　吉美
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	齋藤　守重
	〃	次　　長	青﨑　和憲
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	冨田　逸郎
調査担当者	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	冨田　逸郎
	〃	文化財主事	関　　明恵
	〃	文化財研究員	平　　美典
	〃	文化財調査員	福薗美由紀
調査事務担当者	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主　　査	鳥越　寛晴

報告書作成指導委員会	平成21年12月２日	次長ほか５名
報告書作成検討委員会	平成21年12月11日	所長ほか９名
企画担当者	池畑耕一，鶴田靜彦	

遺物指導（指導順）　渡辺芳郎（鹿児島大学教授），竹中正巳（鹿児島女子短期大学教授），
三木靖（鹿児島県文化財保護審議会会長），大橋康二（佐賀県立九州陶磁博物館学芸顧問）

第５節　調査の経緯（日誌抄）

調査の経緯は日誌抄をもって記述する。煩雑さを避けるため，３ヶ月単位にまとめた。

(1) 確認調査（平成11年度・平成11年10月18日～平成11年10月22日）

調査区を標高約50ｍの台地部と低地部に分け，台地部に７か所，低地部に３か所のトレンチを設定して約130㎡の発掘調査実施。包含層が撹乱されているトレンチが多く，表土から青磁・染付・土師器等が出土した。第１・２・５トレンチからでは遺物包含層を確認できなかったが，第３・４トレンチで遺物・遺構が，第６・７トレンチで遺構を確認した。特に第８トレンチでは，洪水等で流入したと思われるシラスが堆積しており，下層に旧水田と考えられるグライ土層が確認できた。

(2) 発掘調査（平成12年度・平成12年11月6日～平成13年1月26日）

(11月～１月)

調査事務所の設営及び環境整備を行う。トレンチ設定し，掘り下げを開始。

Ａ～Ｄ調査区：Ⅱ・Ⅲ層の掘り下げ，ピット・溝・土坑・竈周辺・集石・焼土等の掘り下げ，実測，掘立柱建物跡写真撮影。溝１号の南側に土坑検出，Ⅲが埋設されている状態であった。

Ｅ・Ｆ調査区：落し穴・土坑・ピット掘り下げ，実測，写真撮影。黒曜石チップ等３点その他礫１点土器２点が出土。

器材の撤収や遺跡の保護作業を行い，平成12年度の調査を終了する。空中写真撮影実施。

調査指導　三木靖（鹿児島国際大学），渡辺芳郎（鹿児島大学）

⑶ 発掘調査（平成13年度・平成13年５月７日～平成14年３月15日）

（５月～７月）

調査事務所の設営及び環境整備を行い，Ｃ調査区から調査を開始する。

Ａ調査区：昨年度調査部分の遺構再検出，掘り下げ，未調査部分の掘り下げを実施。

Ｃ調査区：Ⅲ層～Ⅴ層の遺構検出作業を実施。中世の掘立柱建物跡，方形竪穴建物，溝状遺構，大型土坑を検出。縄文早期土器，黒曜石片，土師器，陶器，磁器，鉄滓等出土。

Ｄ調査区：南側部分の全面調査終了後，造成土を除去し遺構再検出，一部全面調査を開始。溝状遺構検出，掘り下げを実施。

Ｅ調査区：伐採及び表土剥ぎ後，遺構検出作業，土層断面実測実施。

Ｋ調査区：伐採後，確認調査・全面調査開始。中世の土坑，ピット等を検出。青磁，染付，土錘，メンコ，砥石，石塔残欠等出土。

Ｌ・Ｏ調査区：伐採後，確認調査実施。中世の掘立柱建物跡，溝状遺構，大型掘り込み，落し穴を検出。

Ｇ調査区：全面伐開。

Ｉ・Ｊ・Ｍ調査区：通路部分の伐開。

京田遺跡から作業員を24名追加雇用。

（８月～10月）

Ａ調査区：遺構再検出，掘り下げ，出土遺物取り上げ実施。

Ｃ調査区：大型掘り込み掘り下げ，方形竪穴建物跡，ピット等平断面実測。出土遺物取り上げ。

Ｄ調査区：検出遺構写真撮影及び実測実施。

Ｅ調査区：表土剥ぎ，掘り下げ，ピット・溝状遺構・炭化物・焼土等検出，実測，写真撮影実施。

Ｆ調査区：業者による伐採木搬出，掘り下げ。委託による地形測量実施。

Ｇ調査区：確認トレンチ設定・掘り下げ実施。石垣・石列・排水溝・石組・近世の掘立柱建物跡を検出。石列・杭列等平・断面実測，委託による調査用グリッド杭打ち，石垣実測実施。近世の瓦，木製品，寛永通宝，煙管，石板，土製人形等が出土。

Ｉ・Ｊ調査区：伐開。

Ｋ調査区：包含層掘り下げ・遺構検出。

Ｐ調査区：近世墓検出，遺構掘り下げ。

Ｒ調査区：確認トレンチ掘り下げ，出土遺物取り上げ，写真撮影等実施。グリッド杭設置。縄文時代の打製石斧，磨製石斧，磨石，敲石，古墳時代の成川式土器，古代の内黒土師器，刻書土器，須恵器，中世の青磁・白磁，滑石製品，鞴，粉青沙器，備前焼，瓦質土器出土。航空写真撮影実施。

Ｓ・Ｔ調査区：確認トレンチ設定・掘り下げ，井戸1基，良福寺関連の石碑１基を検出。遺物は，古代の内黒土師器，刻書土器，須恵器，中世の滑石製品，鞴，備前焼，瓦質土器，木製品が出土。

現地指導　山中敏史（奈良文化財研究所），三木靖（鹿児島国際大学），上田耕（知覧町教育委員会），竹部光春（石工）

（11月～１月）

Ａ調査区：土坑実測。下層確認トレンチ掘り下げ，Ｃ・Ｄ－４区の調査終了。重機による埋め戻し。

Ｂ調査区：Ｆ～Ｉ－２～４区掘り下げ，下層確認トレンチの設定・掘り下げ。

Ｃ調査区：竪穴建物２号実測・炭化物取り上げ。大型土坑ベルトの除去・完掘・写真撮影。掘立柱建物跡２・３号の完掘・実測・写真撮影。Ｂ～Ｄ－７・８区下層確認トレンチ掘り下げ。

Ｃ調査区：掘立柱建物跡検出，柱穴半裁。

Ｄ調査区：溝状遺構，ピット掘り下げ・完掘，遺構実測，地形測量，写真撮影，遺物取り上げ。

Ｅ調査区：溝状遺構，ピット掘り下げ。遺構・遺物実測。

Ｇ調査区：石列検出・平・断面実測，石垣実測，井戸実測，写真撮影。１号建物跡のピット掘り下げ，実測，ピットの周辺精査と写真撮影。遺構実測終了部分の一部下層確認を実施。

Ｋ調査区：Ｉ・Ｊ－24・25区の掘り下げ，竈跡・五輪塔残欠等の実測。

Ｌ調査区：確認トレンチ完掘，遺物平板実測，土層断面実測，写真撮影。

Ｏ調査区：確認トレンチの清掃・遺物取り上げ。

Ｐ調査区：Ｐ・Ｑ－17・18区伐採。

Ｒ調査区：確認トレンチ（Ｔ３・５）掘り下げ。

Ｓ調査区：Ｐ～Ｓ－18～21区の伐採，確認トレンチ（Ｔ１～３）の設定及び掘り下げ。木製品・杭列・石列を検出。実測，写真撮影。トレンチ１を完掘後，Ｓ・Ｔ－19・20区の表土剥ぎ。中世の掘立柱建物跡，竈跡，近世の建物跡，石溜り，土坑などを検出。

Ｔ調査区：Ｖ・Ｗ－11・12区の伐採。確認調査実施。遺物取り上げ，写真撮影・土層図作成。

現地指導　所崎平（串木野郷土史研究会会長）

（２月～３月）

Ｆ調査区：確認トレンチの掘り下げ。

Ｇ調査区：土層断面実測及び下層掘り下げ。杭列検出。杭列たち割り，断面等実測，遺物取り上げ。

Ｋ調査区：Ｋ・Ｌ－23～26区の掘り下げ，石塔群・ピットの検出，写真撮影・実測。

Ｓ調査区：Ｓ・Ｔ－18～20区のⅢ～Ⅴ層の掘り下げ，遺物取り上げ，遺構実測。土層確認トレンチ掘り下げ，断面実測。中世の礫集中箇所，土坑・杭列・石列・焼土土坑など検出。古代の墨書土器，中世の龍泉窯系青磁，景徳鎮窯系青花，漳州窯系青花，褐釉陶器，粉青沙器，天目碗，カムィヤキ，羽釜，古銭（洪武通宝・朝鮮通宝），近世の薩摩焼，肥前系陶磁器，鉄製品，鉄石英，チャート片，銅製品など出土。航空写真撮影実施。

３月15日をもって本年度の発掘調査終了。各調査区の環境整備，埋め戻し作業，３月18～20日に職員による実測作業や埋め戻し等の現状復帰立合いなどを実施。

現地指導　原口泉（鹿児島大学），山口昌久（東京都立大学），三木靖（鹿児島国際大学）

(4) 発掘調査（平成14年度・平成14年５月７日～平成15年３月25日）

（５月～７月）

調査事務所等設営及び環境整備を行い，Ｒ・Ｌ調査区から調査を開始。

Ａ調査区：中・近世墓掘り下げ。

Ｂ調査区：近世墓掘り下げ及び人骨の検出作業実施。

Ｇ調査区：表土剥ぎ，前年度調査部分の検出を実施。中世の大型土坑，竈跡，溝状遺構，ピットを検出。

Ｈ調査区：確認トレンチ掘り下げ，土層断面実測，写真撮影，確認トレンチ調査終了。

Ｌ調査区：Ⅱ層掘り下げ。中世の遺構検出，遺物検出の後，写真撮影，遺構実測及びコンタ図作成。

Ｏ調査区：表土剥ぎ，Ⅱ層掘り下げ，中世の遺構（石垣）検出，遺構実測，写真撮影。

Ｐ調査区：北側上段掘り下げ。近世の溝状遺構，時期不明の粘土帯状遺構，石列を検出。近世墓掘り下げ，実測，写真撮影。

Ｒ調査区：Ⅱ層掘り下げ。縄文の石斧埋納遺構，中世の溝状遺構，竈跡，大型土坑検出。縄文晩期の黒川式土器・磨製石斧・打製石鏃・石錐・磨石・凹石・敲石，古墳時代の成川式土器，古代から中世の土師器・須恵器・カムィヤキ・青磁・白磁・染付・刻書土器・土錘・滑石製品，近世の陶器・染付・寛永通宝など出土。

（８月～10月）

Ｌ調査区：焼土実測。

Ｏ調査区：大型土坑掘り下げ，石垣を除去後，溝状遺構検出実測・写真撮影。

Ｐ調査区：近世墓群掘り下げ。石垣下傾斜面，溝状遺構掘り下げ・実測・写真撮影。

Ｑ調査区：中世の竈跡検出。遺構掘り下げ・実測・写真撮影。

Ｒ調査区：Ⅱ層掘り下げ，中世の竈跡，大型土坑，溝状遺構，ピット，近世の溝状遺構，近世墓，良福寺住職墓石を検出。遺構掘り下げ・遺物検出・実測及び写真撮影。縄文時代の曽畑式土器・深浦式土器，黒川式土器，打製石鏃・磨石・凹石・敲石・磨製石斧，古代から中世の土師器・須恵器・青磁・白磁・染付・カムィヤキ・土錘・滑石製品・滑石製石鍋・木製品が出土。

現地指導　竹中正巳（鹿児島大学），千田嘉博（国立歴史民俗博物館）

（11月～１月）

Ｇ調査区：Ⅱ層掘り下げ，遺構検出，遺構実測，写真撮影。前年度調査部分の遺構検出作業及び石垣・井戸検出，実測。

Ｍ調査区：確認トレンチ掘り下げ，調査終了。

Ｏ調査区：大型土坑・溝状遺構の調査終了。礫集中遺構検出作業・実測・写真撮影。中世の大型土坑，溝状遺構を検出。古代から中世の須恵器・土師器・内黒土師器・青磁・白磁・鉄滓・流動滓・羽口が出土。空中写真撮影実施。

Ｐ調査区：近世墓群掘り下げ・実測・写真撮影。人骨・寛永通宝・煙管・数珠などが出土。

Q調査区：中央部竈状遺構の調査終了。杭列検出。中世の掘立柱建物跡・土坑・ピットを検出。

R調査区：北側調査終了。古代の土器集中遺構，炉状遺構，中世墓，ピットを検出。縄文晩期の黒川式土器，打製石斧，磨製石斧，凹石，敲石，石錐，有溝砥石，携帯用砥石，古代から中世の須恵器，土師器，内黒土師器，内赤土師器，刻書土器，青磁，白磁，染付，滑石製石鍋，鉄滓，流動滓，洪武通宝，永楽通宝，時期不明の木製品を検出。遺構実測業者委託，空中写真撮影実施。

S調査区：表土剥ぎ，Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ，遺構検出，遺物検出，写真撮影。

現地指導　上田耕（知覧町教育委員会）

（２月～３月）

G調査区：土坑完掘。石垣，溝状遺構検出，写真撮影。下層確認トレンチ掘り下げ。

M調査区：Ⅲ層掘り下げ。

P調査区：近世墓掘り下げ，遺構実測，写真撮影。人骨・寛永通寶・数珠・扇子出土。井戸周辺の遺構検出作業実施。空中写真撮影実施。

Q調査区：竈跡実測，掘り下げ，写真撮影。

R調査区：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，土器集中遺構実測，石垣検出，写真撮影。下層確認トレンチ掘り下げ。古代の土坑，古代から中世の溝状遺構。縄文早期の山形押型文土器，打製石斧，精製浅鉢，古代から中世の須恵器・土師器・内黒土師器・墨書土器・耳皿・青磁・白磁出土。空中写真撮影実施。

S調査区：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，石列実測，遺物検出，写真撮影。中世から近世の石列・杭列検出。古代から中世の須恵器・土師器・内黒土師器・墨書土器・青磁・白磁・木製品（椀）・北宋銭出土。

リース品・倉庫点検。環境整備の後，後始末を行い，３月26日をもって平成14年度の調査終了。

現地指導　上原真人（京都大学），永山修一（ラ・サール学園），中村明蔵（鹿児島国際大学）

(5) 発掘調査（平成15年度・平成15年７月28日～平成16年３月12日）

（７月～９月）

調査施設設営準備及び環境整備を行い，Ｅ・Ｈ・Ｋ調査区から調査を開始する。Ｅ・Ｋ調査区の遺構保護の為に埋め戻した土を除去した後，遺構検出を行う。

Ｅ調査区：埋め戻し土除去，溝状遺構掘り下げ，遺物検出・実測後，調査終了。

Ｈ調査区：確認調査実施。トレンチ掘り下げ，写真撮影後，確認調査終了。

Ｋ調査区：埋め戻し土除去後，遺構検出，実測。実測委託の準備。ピット・石塔等廃棄溝・一字一石経塚・墓抗検出。縄文の刻目突帯文器，中世の五輪塔・宝塔・土師器出土。委託による遺構実測。

Ｊ調査区：確認調査実施。トレンチ掘り下げ，写真撮影，墓石整理後，確認調査終了。

Ｐ調査区：近世墓掘り下げ，写真撮影，遺構実測。古銭，近世の五輪塔・墓石出土。

（10月～12月）

伐開遅延のため，10月27日より現場再開。

K調査区：Ⅲ層掘り下げ，中世の小礫集積・五輪塔敷石・五輪塔残欠検出・一字一石経塚の経石実測。中世の五輪塔廃棄溝延長部を検出。下層確認調査。五輪塔の実測委託。

P調査区：近世墓掘り下げ，写真撮影，遺構実測。人骨・古銭・陶磁器・煙管出土。

N調査区：石垣検出・石切遺構検出，凝灰岩露頭検出，土坑等の検出・実測・写真撮影。石垣の実測委託。

現地指導　松尾千歳（尚古集成館）

（1月～3月）

K調査区：一字一石経塚の経石検出・実測。

N調査区：石切遺構・凝灰岩露頭・鍛冶炉・大型土坑・溝状遺構・焼土域・中世墓検出掘り下げ実測。石垣断面実測。下層確認トレンチを掘り下げ。凝灰岩露頭・石切遺構・五輪塔・石垣の実測委託。古代の土師器・須恵器・提瓶，中世の土師器・青磁・五輪塔，中世の人骨・古銭・陶磁器出土。写真実測・空中写真撮影。

図面整理，事務所内の後片付け，発掘道具等の荷出し，環境整備などを行い，3月12日をもって発掘調査の全てを終了。

現地指導　三木靖（鹿児島国際大学短期大学部），佐藤良二（二上山博物館），上村俊雄（鹿児島国際大学），大澤正巳（九州テクノリサーチ），坂詰秀一（立正大学），松原典明（佛教石造文化財研究所），河瀬正利（広島大学），平田信芳（郷土史家）

(6) 報告書作成作業

整理作業及び報告書作成作業を平成16年4月から平成19年3月，平成21年4月から平成22年3月にかけて，県立埋蔵文化財センターで行った。

第Ⅱ章　遺跡の位置と地理的・歴史的環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

1-1　いちき串木野市の概要と椈城跡の位置

いちき串木野市は2005年10月に串木野市と日置郡市来町が合併してできた新しい市であり，人口31,771人，面積は112,04㎢である（平成20年９月末現在）。薩摩半島の西北西端（北緯31°42′30″，東経130°16′27″）に位置し，北・東を薩摩川内市，南東を日置市と接している。西から南西は東シナ海に面するとともに，日本三大砂丘の一つである吹上砂丘の北限となる。平均気温は18.6℃と温暖で，平均湿度は72.5％である。主要河川として大里川（19.6㎞）・八房川（15.5㎞）・五反田川（11.9㎞）があり，主な山岳として弁財天山（519.1m）・冠岳（516.4m）・行司ヶ塚（418.6m）・矢岳（410.2m）・火立ヶ岡（348.4m）がある。近代日本の黎明をつげた薩摩藩留学生の渡欧の地であるほか，徐福伝説なども伝わる。毎年４月には串木野浜競馬，７月下旬には串木野さのさ祭，８月上旬には七夕踊りといった伝統行事が開催され賑わいをみせている。

椈城跡は，いちき串木野市上名字門前・椈鼻・大堂庵に所在する。北緯31°43′29″，東経130°17′32″が遺跡のほぼ中央となる。地理的には，五反田川中流に面する標高約50ｍの台地から，標高約27ｍの山腹部，現在でも水田として利用されている標高約10ｍ前後の低地部から構成される。遺跡から西へ約500ｍほどのところに串木野城跡が，約1,000ｍほど先に浜ヶ城跡が，東へ約800ｍほどのところに坂ノ下城跡がある。

1-2　いちき串木野市の地形・地質の概要

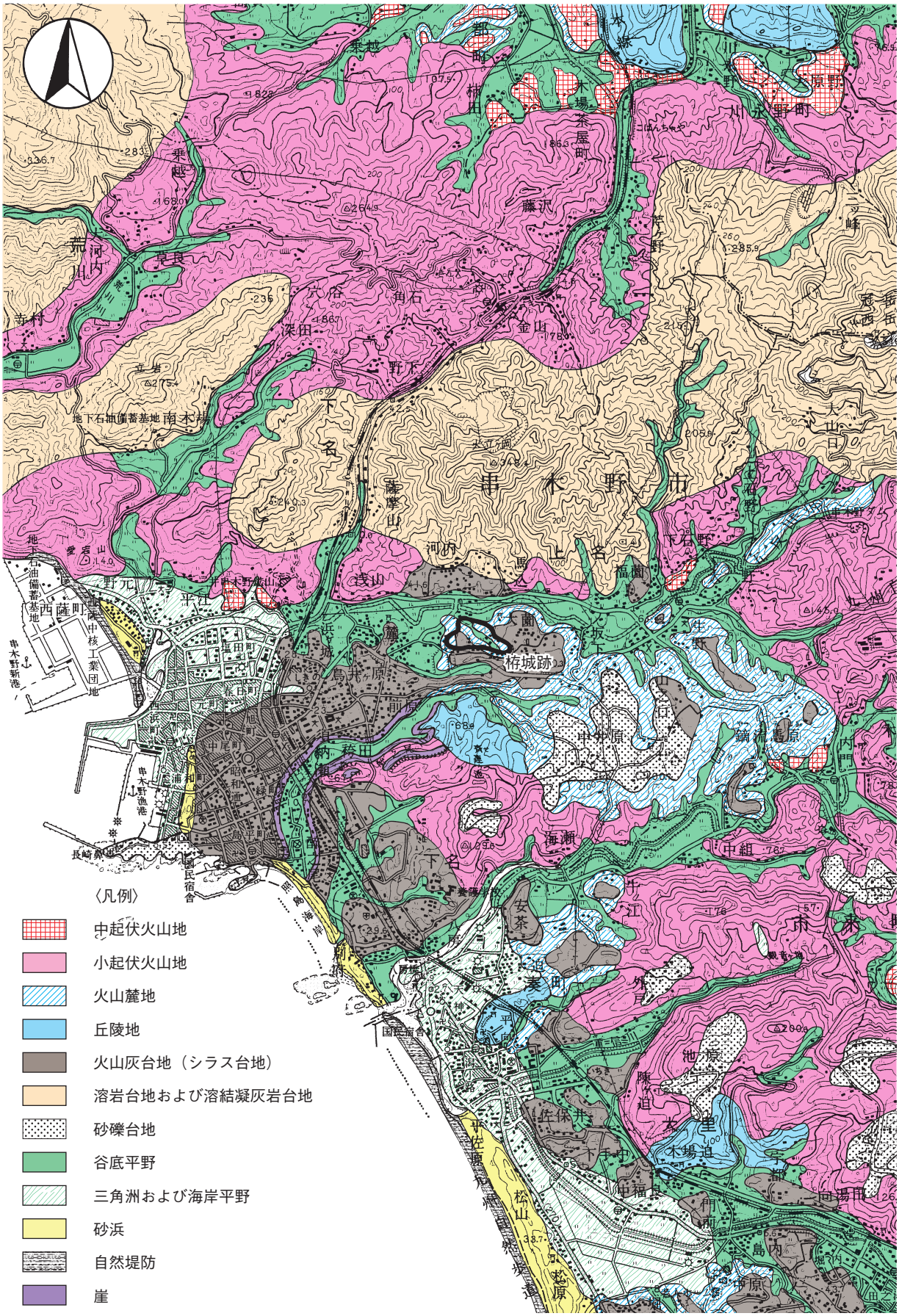
いちき串木野市域は，平成の大合併前の行政区域境となる八房川によって，北部地区（旧串木野市域）と南部地区（旧市来町域）に二分される。八房川は矢岳の北東斜面にその源を発し，旧市来町域に入って川上地区の中央を西へ貫流し東シナ海に注ぐ二級河川で，主流の全長は約15.5㎞であり，支流を含めた流路合計は約22.8㎞となる。これらの川は流域に狭い谷底低地を形成し，河口付近では広い三角洲を形成している。北部は標高519ｍの弁財天山をはじめ，平原山・冠岳など500m前後の山地が東西に連なり，中薩・北薩の分水界をなす。南部は，北東の川上地区と日置市と境を接する東側に山地が多く，西側の八房川下流と南西の大里川下流に低地が開けている。市域は，全般的には火山性岩類からなり，安山岩を主とする火山岩が分布する山岳地帯と，これを取り囲んだかたちのシラス台地とが大部分を占める。いちき串木野市域の山地は，以下のように区分される。

①平原火山地：薩摩川内市の平原山（505.9m）を主峰とする火山地で，中心部が中起伏，周辺部が小起伏となる。

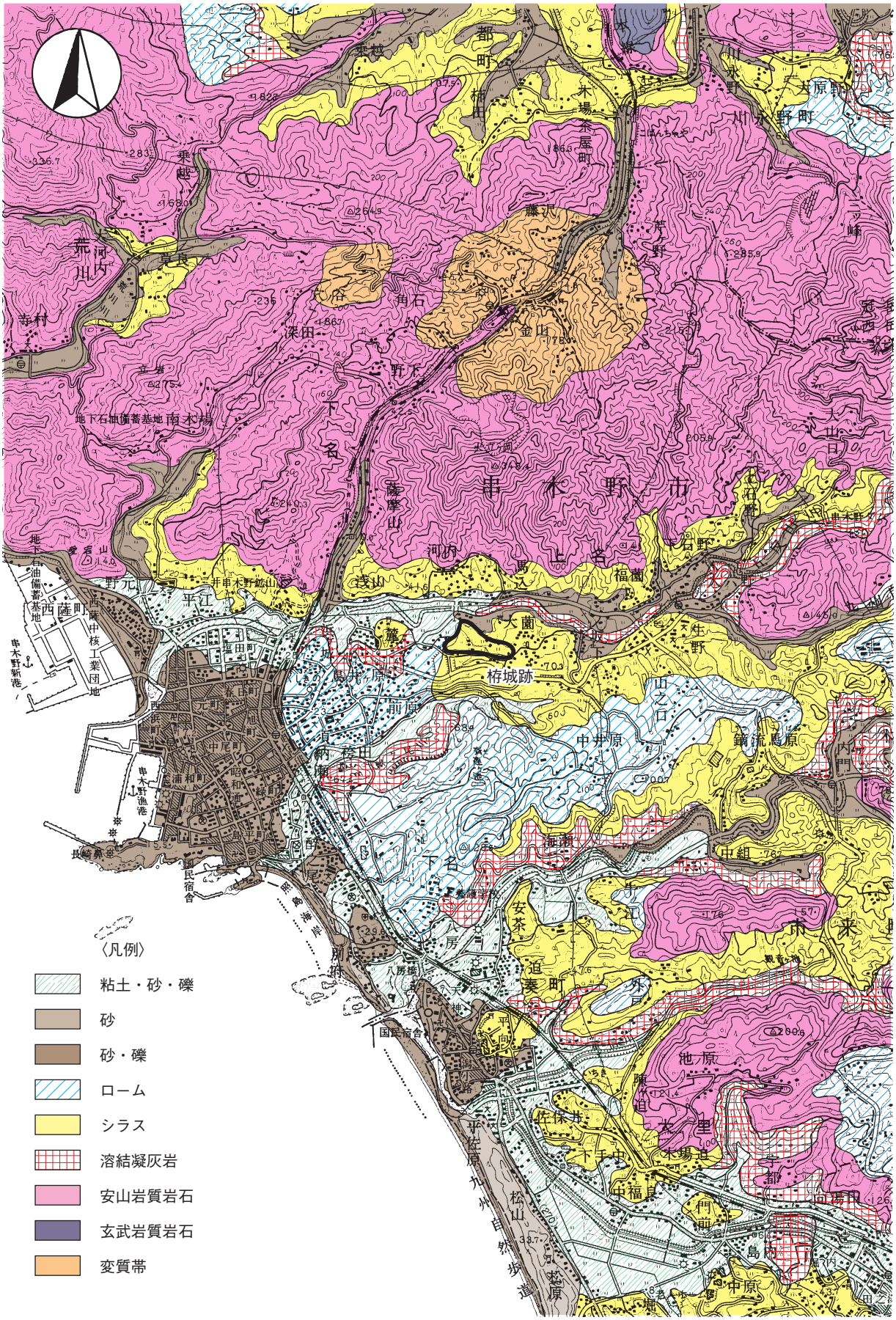
②冠岳火山地：いちき串木野市の冠岳（516.6m）を中心とする中起伏火山地で，東北東方向に走る断層に支配された急斜面が多く存在する。

③矢岳火山地：いちき串木野市と日置市の境にある矢岳（410.2m）を中心とする中起伏火山地。

さて，地域北部は八重山山塊に属する冠岳・弁財天山等の旧期火山群から成る。地域南部は，山地では旧串木野市域境に位置する行司ヶ塚（418.6m）と矢岳が最も高く，これらは矢岳火山地に



いちき串木野市周辺地形分類図（S=1/50,000）



いちき串木野市周辺表層地質図（S=1/50,000）

含まれる。矢岳火山地を四分して，八房川およびその支流の広野川と福ヶ野川等が流れている。この３つの河川は矢岳火山地を浸食して深い谷を作り，その流域は30度以上の急傾斜となっている。矢岳火山地の縁辺に，標高200ｍほどの小起伏の市来火山地が広がる。この地域は，第三紀後半（約3000万年前）から第四紀更新世にかけて激しい火山活動があり，ローム・二次シラス・シラス・溶結凝灰岩・安山岩などの火山性岩石が分布している。ロームは沖積層を除く全域を薄く覆って分布している。溶結凝灰岩は河谷を埋めて分布するほか，南部ではシラスの下部に普遍的に見られる。外観および生成時期の異なった少なくとも４つ以上の溶結凝灰岩が存在するが，同じ溶結凝灰岩でも岩相が変化し一定していない。比較的低い位置に広範囲にわたって分布するため，土地の垣根石・土台石などとして利用されている。北部では，角閃石安山岩よりなる凝灰角礫岩が分布しているが，五反田川右岸では熱水変性をうけ粘土化，珪化，変色が進んでいる。南部では，輝石安山岩が分布する。これらの山地には，熱水変性を受け，金・銀の鉱脈を胚胎するところがあり，古くから産金地として知られている。北部の芹ヶ野地区には，輝石安山岩中の裂力を充填した浅熱水性の含金銀石英方解石脈の金属鉱床が広がり，近年まで串木野金山が操業されていた。

台地は，溶岩台地・シラス台地・砂礫台地がある。溶岩台地は，北部の平原火山地に多く見られる。シラスは五反田川・八房川流域を中心に台地をつくってかなり広く分布するが，河川の浸食を受け，狭長な台地面として存在することが多い。北部では，南西部に低いシラス台地が広がり，南部では，市来火山地の縁辺にシラス台地が散在する。砂礫台地は段丘として現れることが多く，二次シラスより成る低い台地が多いのが特徴である。これらの台地は，「原（はい）」と呼ばれ，畑地として利用されている。

低地は，東シナ海に面して存在し，各河川の流域に谷底平野が散在している。北部では五反田川下流域に沖積が広がり，南部では，八房川および大里川・重信川の河口に三角洲が広がる。このほか，八房川・大里川の主流とその支流および重信川の流域に谷底低地がある。五反田川・八房川河口部では，浸食された溶結凝灰岩上に段丘砂礫層がのり，それぞれ旧串木野市・旧市来町の市街地がその上面に広がっている。五反田川・八房川・大里川その他の中小河川流域に粘土・砂などの未固結堆積物が分布する。東シナ海に面した海岸域には，砂が砂丘を構成して分布する。この砂丘は，日本三大砂丘の一つに数えられる吹上砂丘の北端部にあたり，大里川下流に発達した三角洲の西側は，吹上砂丘の北端として砂地の自然堤防を形成し，その外縁は東シナ海に接している。なお，いちき串木野市域では固結堆積物の分布は見られない。

山地・丘陵地の土壌は褐色森林土が主で，一部に黒色火山灰の黒ボク土がみられる。シラス台地は火山灰に覆われ，黒ボク土が存在し，一部には未熟土も分布している。沖積地にはシラスや安山岩等の風化物を母材とする灰色低地土やグライ土が広く分布し，一部には泥炭土の分布も認められる。また海岸部には，吹上砂丘から続く砂丘未熟土も見られる。

栫城跡は，五反田川中流に面する場所に立地し，標高約50ｍの台地縁辺部から，標高約27ｍの山腹，現在でも水田として利用されている標高約10ｍ前後の低地部から構成されている。これらは地形分類的には火山灰台地（シラス台地）・火山麓地・谷底平野に対応し，表層地質はシラスである。

第２節　歴史的環境

昭和60年刊行の『鹿児島県市町村別遺跡地名表』によると，いちき串木野市内の遺跡は旧串木野市が18か所，旧市来町では15か所が記載されている。その後，平成３年度以降の北薩伊佐地区埋蔵文化財分布調査では30か所の遺跡が確認されている。本市ではこれまで大規模な開発事業が少なかったため，本格的な発掘調査はあまり行われてこなかった。しかし南九州西回り自動車道の建設に伴い，平成８年度以降大規模な発掘調査が行われるようになり，この地域の様相が少しずつ明らかになりつつある。そこで遺跡の説明と併せながら，各時代の概略を時代順に若干紹介したい。

（旧石器～古墳時代）

旧石器時代の調査は多くはないが，大里の松尾平遺跡で台形石器やナイフ形石器が出土し，これらはＡＴ堆積以降のものと考えられている。また明確な包含層は確認されなかったものの，上名字門前の栫城跡から三稜尖頭器が出土しているほか，川上字安茶中の安茶ヶ原遺跡からも狸谷型のナイフ形石器をはじめ，台形石器・三稜尖頭器等が出土しており，旧石器時代の遺跡が存在したことが伺われる。

縄文時代の遺跡では，川上の瀧ノ段遺跡で草創期の土器とともに細石刃や舟形配石炉，石鏃等が出土しており，初期定住の様相を知る上で貴重な遺跡である。特に石鏃は41本と，この時期としては群を抜いて多く注目される。八房川河口から約４km ほどの川上字中組の台地上には，川上（市来）貝塚がある。川上（市来）貝塚は古くからその存在が知られており，大正10年（1921），昭和36年（1961），平成２年に調査が行われている。出土した土器は市来式土器として型式設定され，縄文後期に位置付けられた。平成６年に県指定文化財に指定されている。

縄文晩期から弥生時代にかけての遺跡としては，下名の井手下遺跡がある。井手下遺跡は昭和36年に調査された遺跡であり，発掘と併せて多様な遺物が採集されている。突帯文土器は当時の鹿児島県では出土例が少なく，一時期は井手下式として縄文時代晩期の編年に使用されていた。井手下式は実態が不明確である上に，その後突帯文土器の資料が増加し，現在は型式名として使われることが少ないとはいえ，学史的には大きな意味があった。縄文時代晩期と弥生時代の土器が出土しており，また沖積地として初期の稲作に適していたであろう地形から，付近の微高地に遺跡が存在していたと考えられる。

古墳時代に関しては明確な遺構は確認されていないが，安茶ヶ原遺跡では多数の成川式土器が出土している。また大里の大里田圃遺跡からは多数の成川式土器が採集されており，大里川の流域にも古墳時代の集落跡が存在した可能性がある。

（古　代）

古代になると八房川を挟んで市北部（旧串木野市）は薩摩郡に属し，市南部（旧市来町）には市来院が設置された。市来院はおおよそ現在の市南部域（旧市来町）と日置市東市来町にまたがる範囲であったと推定されている。八房川沿いに所在する安茶ヶ原遺跡からは「日置厨」の墨書土器が出土したほか，大里の市ノ原遺跡第１地点からは多数の墨書土器や掘立柱建物跡が出土しており，公的施設が存在した可能性が想定されている。また栫城跡からも多数の墨書土器や刻書土器，提碪などが出土し，関連性が窺われる。伝承では奈良時代後期（770年代）に大蔵政房が薩摩に下り，市来郡司となって大きく勢力を張ったと言われている。平安時代になると『延喜式』に駅名として

「市来」の名が登場する。しかし，これは具体的位置が現在のところ不明であるほか，古代の官道の想定ルートの点からも市来地域に想定することは難しいとされる。一方，川内地方では大前氏が郡司として代々東郷にいて勢力を増し，一族は大変栄えてこの地方に重きをなした。以上の状況から，旧串木野市の地域は川内と市来の中間にあって，前述した諸氏（特に大前氏）の支配下にあったのではないかと推察される。

（中　世）

鎌倉時代の寛元二年（1244年），院司である大蔵氏の道阿弥陀仏が孫の惟宗政家に市来院の院司職を譲って以降，惟宗姓市来氏が市来院の領主として代々相続するようになった。大里の鍋ヶ城の真向かいには，市来氏の菩提寺として建立されたと推測される来迎寺跡がある。中世の市来院においては，郡司職の市来氏のほかに河上名を領した河上氏も勢力を持っていた。川上（市来）貝塚の東に河上城があるが，北にひと山越えれば中・近世の串木野の中心部となる上名麓へ至り，戦略的に重要な位置を占めている。河上城の北の八房川を挟んだ川上中組の針原遺跡には伝河上氏墓跡がある。承久二年（1220年），冠岳頂峯院に関する文書の中に串木野村領主串木野三郎平忠道の名前が初出する。串木野三郎平忠道は薩摩本地頭郡司職となり川内地方で勢力をはった平忠友の弟で，串木野城を築城したとされ，串木野氏初代と目される人物である。串木野城は南北朝の戦乱期になると，北朝方南朝方ともにどうしても通らなくてはならない要所となった。そのため，防衛上の必要から坂下城，浜ヶ城などの出城を築城したものと考えられる。串木野氏は，興国三年（1342年）に，五代目城主串木野七郎忠秋が南朝方として北朝方の島津貞久との戦いに敗れて知覧に追われるまで，約120年間この地を統治した。上名字大道庵に所在する宝塔は高さ約２ｍほどあり，五代七郎忠秋のものとの伝承がある。

串木野氏滅亡の後，串木野は島津氏の管内に入り，十一代立久の頃の文明六年（1474年）に川上又八郎忠塞が串木野城主に任ぜられ串木野を領することになる。南北朝の戦乱以後も，串木野城は北薩に勢力を張った渋谷衆（渋谷五族）を牽制する上で重要な場所に位置していたと考えられる。坂下城（別名，坂ノ下栫城）において島津義久と渋谷衆との間で戦闘が行われた記録が「三国名勝図会」巻の十に記載されている。それによると「坂之下栫，串木野村上名にあり，永禄十一年五月渋谷衆五十三人戦死と旧記にあり…」と記述され，かなりの激戦であったことが予想される。その翌々年の元亀元年（1570年）正月，渋谷五族が揃って義久の軍門に降ったため，義久はその弟の中務大輔家久を隈之城の地頭に任じて，串木野を兼ね治めさせることにした。その後十年間家久は地頭として串木野を治めたが，天正七年（1579年）家久は日向の佐土原の藩主となったため，江戸期になると代々地頭が置かれて統治されることとなった。上名字日置田には家久が元亀二年に父貴久の御霊を祀るために建立した大中公の供養塔が残されている。

冠岳をはじめとして，この地域では修験道の修行の場が多く存在する。また上名字門前の栫城跡台地部周辺には冠岳頂峯院の末寺の一つである里の坊があったとされ，頂峯院の門前に対して里門前といわれた。

市来湊は大里川・八房川の合流地点にあった河口港で，室町時代には南方または中国の物産の仲介貿易の根拠地であり，1400年代には市来院領主であった市来家親の持船が朝鮮に渡って交易したことが，朝鮮李王朝３代の太宗実録に記載されているという。川上（市来）貝塚から青磁・白磁・

滑石製石鍋が出土したほか，安茶ヶ原遺跡からも青磁・白磁・中国磁器・滑石製石鍋が出土している。また栴城跡からは中国産・東南アジア産などの海外貿易陶磁器をはじめとして，東播磨系須恵器や備前焼・常滑焼・徳之島産のカムィヤキなどの国内産が多く出土しており，なかでもカムィヤキは，現在のところ加治木町の干迫遺跡と並んで出土遺跡の北限にあたる。これらの外来系遺物の存在や「鎮西下知状」などをはじめとする文献の存在は，東シナ海に面するという地の利をいかし，五反田川・八房川を舞台とした活発な交易活動があったことを裏付けている。

（近世以降）

織豊期末に起こった文禄・慶長の役に参戦した島津義弘は，慶長３年（1598）12月，朝鮮の陶工を連れて帰国した。『先年朝鮮より被召渡留帳』によると，朝鮮人陶工は串木野の島平・市来の神之川・鹿児島の前之浜の三か所に上陸したとされ，島平に上陸した陶工が慶長４年（1599），下名に串木野窯を開窯したとされる。この窯跡については昭和９年に発掘調査が行われ，朝鮮半島系の単室傾斜窯が確認された。出土品は黒物とよばれる甕・壺等の日用雑器が中心で，碗・皿などの小物は少なかった。その後，串木野窯を開窯した朝鮮人陶工らは，住民との摩擦があり，慶長８年（1603）にやむなく苗代川に移住したとされている。

江戸時代に入ると幕府は鎖国政策をとり，長崎だけを開港場として外国との交易はオランダ・中国・朝鮮に限定したうえ，交易品は幕府が一括して統制管理した。そして，この禁を犯して交易物資を持っていたり船に積載していたりすると捕縛し，長崎奉行所で裁判処罰した。この裁判記録である「長崎犯科帳」によると，ここに記載された関係者は，県内では市来湊出身者または市来湊に来て取り引きした他国人が一番多い。市来湊は鹿児島から一日行程で，物資の集散地，交通の要所として各地の産物が集まり，甑島・長崎等と盛んに交易を行い，琉球方面，時には中国との密貿易も行われ，それを狙って他国人が市来湊に来るなどして繁栄を極めたといわれる。このような中で，市来湊には大きな回船業者が現れ，大船を擁して大阪・江戸方面までの物資の輸送に従事し，強大な経済力を蓄積していった。仲ノ町・浜ノ町周辺にはかつて湊町の豪商といわれた海江田・えびす若松などの蔵々が軒を連ねたという。市来湊が最も繁栄したのが寛政年間とされ，その1800年前後の時期に川口番所が設置されたと思われる。ここでは抜米や菜種油の積出しの取り締まり，一向宗の取り締まり，異国船の監視などが行われた。

江戸時代には，交通の要地として市域の北部と南部のそれぞれに御仮屋が置かれた。北部の御仮屋は串木野城跡に設置され，南部は現市来支所敷地内にあった。「島津家列朝制度」によると，寛永期頃から地頭は任地に居住せず城下士の重役の掛け持ちとなったので，地頭仮屋は郷の行政役所として機能した。

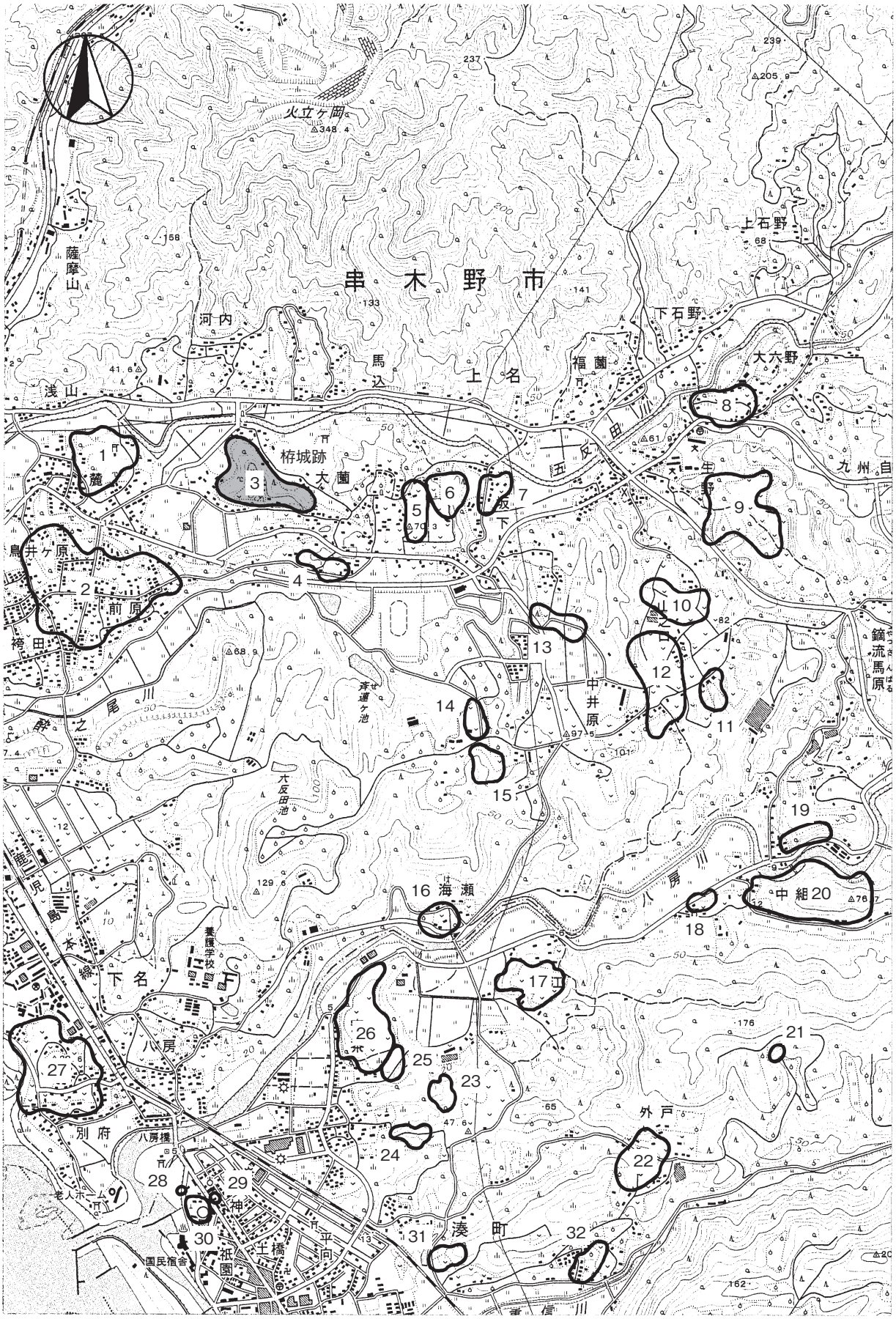
幕末の1865年には五代友厚ら薩摩藩士の若者19名が羽島からヨーロッパへ渡り，産業や文化を学び，帰国後それぞれの分野で日本の先駆的役割を果たした。

北部の五反田川流域近くに所在する栴城跡からは，近世を中心に採掘されたと推定される溶結凝灰岩の石切場跡が検出されるなど，この地域は，かつて採石・石材業が盛んであった。特に旧串木野市の石工は技術的にも名高く，鉄道の敷設工事の拡張に伴い全国で活躍したという。下名字唐船ヶ尾・前平にある唐船塚の南側や北側には溶結凝灰岩を広範囲にわたって切り出した跡があり，昭和40年頃まで石を切り出していた。

一方，南部は西薩一の湊町として繁栄したほか，明治になって御仮屋跡に郡治所がおかれ，一時は日置・阿多・薩摩・出水・甑島各郡を統治する西薩行政の中心ともなった。しかし明治22年に国道３号，大正３年には鹿児島本線（川内線）が開通するなど，陸上交通の発達と共にその価値が失われ，さらに汽船時代になると市来湊は河口港という弱点に加え，水深が次第に浅くなって港として機能しなくなり，さらに市北部に串木野港が建設されるなどして，市南部は西薩の結節点としての地位を失って衰退していった。近年では国家石油地下備蓄基地の建設や臨海工業団地の造成等によって港湾都市としての機能の充実を図るとともに，2007年３月には南九州西回り自動車道川内道路が完成し，本市には市来ICと串木野ICが設置されるなど，近隣地とのアクセスが向上し，今後の発展が期待されている。

引用・参考文献

1　石塚克己　1995「串木野市」『鹿児島県風土記』　旺文社
2　市来町教育委員会編　1991『川上（市来）貝塚』　市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）
3　市来町教育委員会編　1999『落シ平遺跡・瀧之段遺跡・才野ヶ原遺跡』　市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（６）
4　市来町郷土誌編纂委員会編　1982『市来町郷土史』市来町
5　鹿児島県教育委員会編　1985『鹿児島県市町村別遺跡地名表』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（36）
6　鹿児島県教育委員会編　1987『鹿児島県の中世城館跡－中世城館跡調査報告書－』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（43）
7　鹿児島県教育委員会編　1992『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅰ）』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（61）
8　鹿児島県教育委員会編　1993『出水筋』歴史の道調査報告書第一集
9　鹿児島県立埋蔵文化財センター編　1994『針原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（８）
10　鹿児島県立埋蔵文化財センター編　2003『市ノ原遺跡（第１地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）
11　鹿児島県立埋蔵文化財センター編　2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106）
12　鹿児島県立埋蔵文化財センター編　2007『市堀遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（117）
13　鹿児島県立埋蔵文化財センター編　2007『安茶ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（118）
14　串木野市教育委員会編　1991『寺堀遺跡』串木野市埋蔵文化財発掘調査報告書（１）
15　串木野市教育委員会編　2000『串木野城跡』串木野市埋蔵文化財発掘調査報告書（２）
16　串木野郷土史編纂委員会編　1984『串木野郷土史　補遺改訂版』串木野市
17　田淵　修　1995「市来町」『鹿児島県風土記』旺文社
18　米谷静二　1974「地形分類」『鹿児島地域開発地域土地分類基本調査　川内』鹿児島県
19　露木利貞ほか　1974「表層地質」『鹿児島地域開発地域土地分類基本調査　川内』鹿児島県
20　中原尚文　1982「市来町」「串木野市」『鹿児島県風土記』鹿児島県書店組合


串木野市
火立ケ岡
△348.4
薩摩山
河内
馬込
上名
福薗
上石野
下石野
大六野
浅山
麓
桝城跡
太薗
五反田
坂下
九州自
鳥井ケ原
前原
袴田
尾ノ上
中井原
鏑流馬原
六反田池
八房川
海瀬
中組
下名
養護学校
八房
別府
八房橋
老人ホーム
神
平向
土橋
祇園
国民宿舎
湊町
外戸
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

周辺遺跡位置図

表２　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物・遺構	備考
1	串木野城跡	いちき串木野市上名字麓	山麓	中世・近世	中世山城・御仮屋跡	別称「亀ヶ城」
2	並松	いちき串木野市上名字並松	台地	縄文・古墳・中世・近世	黒曜石・縄文土器・成川式土器・陶磁器	平成4年北薩広域分布調査
3	榕城跡	いちき串木野市上名字門前ほか	台地低地	旧石器～近世	石切場跡・鍛冶遺構・墨書刻書土器・土師器等	平成12～15年度調査本報告
4	向井原	いちき串木野市上名字向井原	台地	縄文	縄文土器	平成4年北薩伊佐分布調査
5	平石原	いちき串木野市上名字平石原	台地	縄文	黒曜石剥片・陶器	平成4年北薩伊佐分布調査
6	坂ノ下城跡	いちき串木野市上名字坂下	丘陵	中世	中世山城	別称「坂下榕城」
7	六目木	いちき串木野市上名字六目木	台地	縄文	石核・黒曜石剥片	平成4年北薩伊佐分布調査
8	大六野	いちき串木野市上名字大六野	台地	縄文・歴史	石核・黒曜石剥片・土師器	平成4年北薩伊佐分布調査
9	芋野原	いちき串木野市上名字芋野原	台地	中世・近世	土師器・陶器	平成4年北薩伊佐分布調査
10	八郎堀	いちき串木野市上名字八郎堀	台地	縄文	黒曜石剥片	平成4年北薩伊佐分布調査
11	休左右衛門堀	いちき串木野市上名字休左右衛門堀	台地	縄文	黒曜石剥片・轟式土器	平成4年北薩伊佐分布調査
12	丘左右衛門堀	いちき串木野市上名字丘左右衛門堀	台地	縄文・歴史	黒曜石剥片・土師器	平成4年北薩伊佐分布調査
13	東中之薗堀	いちき串木野市上名字東中之薗堀	台地	近世	陶器	平成4年北薩伊佐分布調査
14	金吹ヶ段	いちき串木野市上名字金吹ヶ段	丘陵	近世	陶器・磁器	平成4年北薩伊佐分布調査
15	寺堀Ｂ	いちき串木野市上名字寺堀	丘陵	縄文・近世	黒曜石・土師器・陶器	平成4年北薩伊佐分布調査
16	段ノ山	いちき串木野市下名字段ノ山	丘陵	縄文	黒曜石残核・剥片	平成4年北薩伊佐分布調査
17	牛ノ江原	いちき串木野市川上牛ノ江原	丘陵	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器・青磁	平成4年北薩伊佐分布調査
18	川上（市来）貝塚	いちき串木野市川上中組	丘陵	縄文	市来式土器・指宿式土器・骨角器	平成2・4年度確認調査
19	川上中組墓塔群	いちき串木野市川上中組	山麓	中世	墓塔	
20	川上城跡	いちき串木野市川上中組	丘陵	中世	堀切・土塁	別称「榕城」
21	岩屋観音	いちき串木野市湊町外戸	山麓	不明	石像	
22	外戸	いちき串木野市湊外戸ほか	迫頭	弥生・中世・近世	弥生土器・土師器・青磁・陶器	平成8年度確認調査
23	北ン原	いちき串木野市湊町北ン原	丘陵	古墳・中世	成川式土器・土師器・青磁・磁器	
24	市堀	いちき串木野市湊市堀	丘陵	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器・土錘陶器	平成14年度本調査
25	上平山	いちき串木野市大里上平山	段丘	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器	
26	安茶ヶ原	いちき串木野市川上安茶中ほか	段丘	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	旧石器・縄文土器・成川式土器・墨書土器・青白磁・陶磁器・鍛冶関連遺物	
27	中海瀬	いちき串木野市下名中海瀬	丘陵	縄文	黒曜石残核・剥片	
28	川口番所跡	いちき串木野市湊町天神	平地	近世	－	
29	町門の跡	いちき串木野市湊町天神	平地	近世	－	
30	御仮屋跡	いちき串木野市湊町祇園	平地	近世	石垣	現市来支所
31	小原	いちき串木野市湊町小原	段丘	弥生	弥生土器	
32	草り田平	いちき串木野市湊町草り田平	段丘	中世・近世	土師器・陶器	
33	外戸山口	いちき串木野市湊町外戸山口	段丘	弥生・古墳・中世	弥生土器・成川式土器・土師器	

第Ⅲ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の方法

（１）調査期間　平成12年11月６日～平成13年１月26日（実働48日）
平成13年５月７日～平成14年３月15日（実働182日）
平成14年５月７日～平成15年３月25日（実働171日）
平成15年７月28日～平成16年３月12日（実働118日）

平成11年10月18日から22日にかけて行われた確認調査を受けて，平成12年度から15年度に本調査を行った。

調査区は対象区域に10mグリッドを設定して実施した。東西方向にB’，A’，A，B，C，・・・としてWまでを付け，南北方向に１，２，３，・・・33までを付け，Ａ－１区などと呼称することとした。また遺跡が広範囲に及ぶとともに高低差に富むため，現在の地割り（土地）境を利用して便宜的にＡ～Ｔの調査区の区分を行い，Ａ調査区などと呼称した。Ｎ調査区に関しては，石垣とともに曲輪的な地形が存在していたため，城郭の可能性を想定してさらに10に細分を行い，Ｎ（ｎ１）調査区などと呼称することとした。調査は基本的にこの地区割りを単位として行った。レベルは，串木野市上名字瀬城作5050－1番地に所在する水準点を基準として利用した。調査の方法としては，伐採等の環境整備を行いながら，表土を重機（バックホー）によって除去し，各調査区とも基本的に遺構が検出されるまで人力（山鍬・ジョレン）による掘り下げを行った。検出した遺構については，移植ゴテ等を利用して丁寧に掘り下げた後，写真撮影や遺構実測作業等を実施した。その後，下層確認のためのトレンチを設定して山鍬により掘り下げを行い，遺物包含層の有無を確認した。

第２節　調査の概要

平成12年度は前年度確認調査を実施した標高約50mの台地部から行った。買収と並行して行われたため，調査はＡ調査区を南から北側へ向けて行い，基本的に南側から終了させる方針で臨んだ。調査の進行に伴って，調査地の南側中央部に中世と考えられる主要な遺構がまとまって検出されたため，後年度の調査のために埋め戻しを行い遺構の保存を行った。したがって，それ以外の部分，すなわち南端の進入路の取りつく部分，集落から墓地へのコンクリート道路の付け替え部分及び中央通路の付け替え部分，それに東側のＡ・Ｂ－２・３区の調査を終了させた。また，最北部のＥ調査区については，次年度以降の調査時に通路として使用する必要から調査を終了した。

平成13年度は，台地上のＡ～Ｅ調査区の全面調査を先行することとし，並行して低地部のＧ～Ｌ，Ｏ・Ｒ～Ｔ調査区の確認調査を行った。確認調査の結果，遺跡の時期や性格の把握された調査区（Ｇ・Ｓ・Ｋ調査区）については，その一部を全面調査へ移行し，継続して調査を実施した。

平成14年度は，遺跡の北側Ｌ・Ｏ～Ｒ調査区を並行して行い，それぞれの調査区が終了するごとに南側のＧ・Ｈ・Ｍ・Ｐ・Ｓ・Ｔ調査区の調査に取りかかるという順序で調査を実施した。

平成15年度は，Ｅ・Ｋ調査区の追加調査とＢ・Ｈ調査区の確認調査から実施した。その結果，Ｂ・Ｈ調査区には遺跡が存在しないことが判明した。Ｅ調査区の調査は溝状遺構の調査が済み終了した

が，Ｋ調査区の調査は遺構の量が多く慎重な調査が要求された。先述したように，本年度の調査の中心部分であるＮ調査区に関しては地形で区分した調査が必要であると判断し，ｎ1～ｎ10地点に細分し，ｎ1地点から調査をスタートした。ｎ1～ｎ5地点までは近世寺院または近世郷士年寄の屋敷跡との関連を考慮しながら調査を進めた。石垣が廻る部分が多かったため，この部分については実測を業者に委託した。ｎ6地点以降については石垣の検出を進めるとともに表土剥ぎを行ったが，ｎ6地点の東側崖より凝灰岩の露頭を検出した。この凝灰岩にツルハシの痕跡を見つけたため，広げて調査を行った結果，石切場跡であることが判明した。

石切場跡は，凝灰岩の石屑や石塔の未製品・矢やノミなどの痕跡のついた破片等が全体を覆っている状態であったため，全体の広がりや石塔の未製品の位置等を図面で押さえた後，下層確認トレンチを設定して石切場底面までの深さを確認し，その後重機で除去した。凝灰岩は脆く移植ゴテ等でも傷がつく状態であったため，竹ベラ・刷毛等での慎重な調査となった。

第３節　遺跡の層序

栫城跡は標高約50ｍの台地縁辺部から，標高約25ｍの山腹部，標高約10ｍほどの低湿地部から構成されている。50,000㎡以上と調査範囲が広大なことに加え，高低差が大きいため，調査区ごとに地層のあり方が異なり一様ではない。そのため，栫城跡としての統一した基本的層序を提示することは難しい。よって，層序に関しては，調査区ごとに言及する。

第４節　報告書における調査区の取扱い

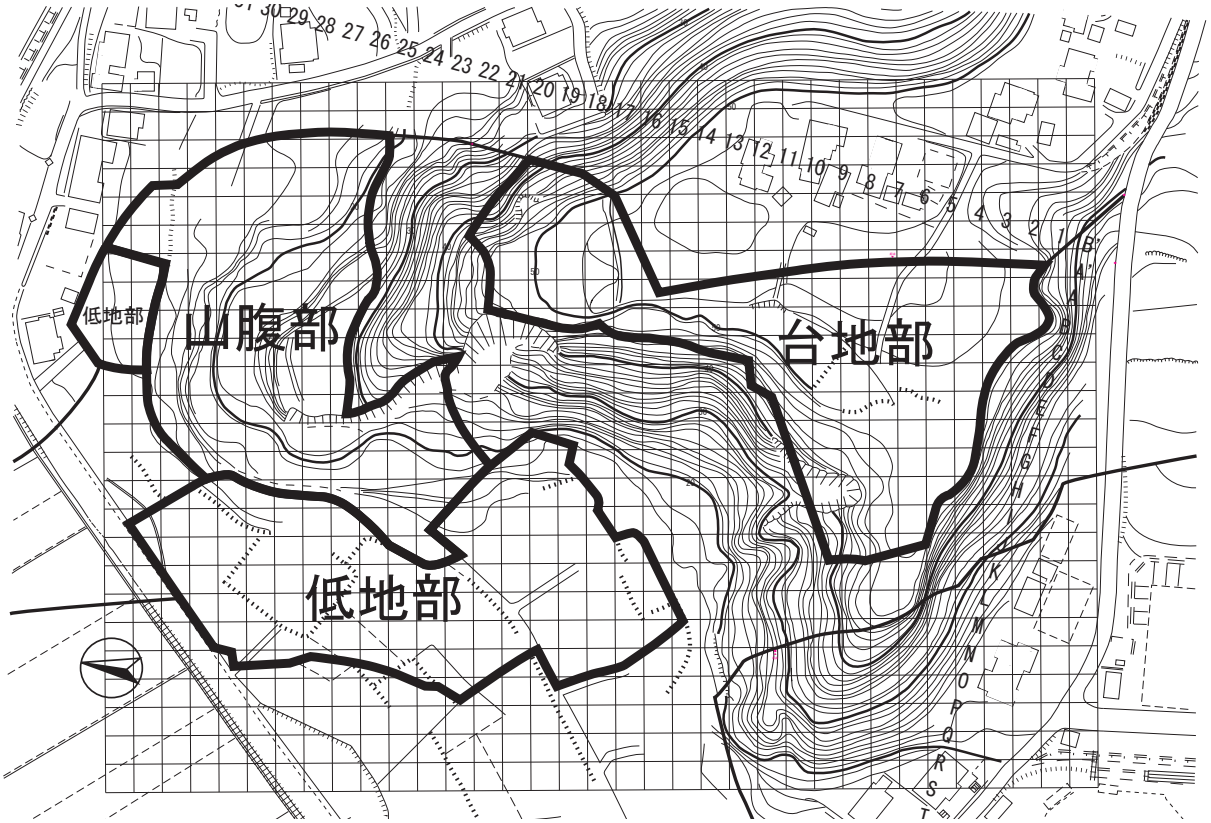
先述したように，栫城跡の調査では，遺跡の広さと高低差に富む地形を考慮して，現在の地割り（土地）境を利用して便宜的にＡ～Ｔの調査区を設定し，Ａ調査区などと呼称して調査を行った。

しかし，調査区が20か所に及ぶことと，調査区ごとに主体となる時代や遺跡の性格が異なるため，このままの区割りで報告を行えば，散発的な印象を与え，遺跡の内容や性格が正しく理解されないおそれがあると判断した。よって報告書の作成にあたっては，調査区の地形的立地や性格を考慮して，台地部・山腹部・低地部の大きく３つに大別し，その中で必要に応じて調査区ごとの報告を行うことにした。その際，確認調査で遺物包含層・遺構が確認されず，調査対象外となった調査区に関しては除外した。大別ごとの内訳は以下の通りである（次頁図参照）。

台地部（標高約50m）　：Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ調査区
山腹部（標高約15～30m）：Ｋ・Ｌ・Ｎ・Ｏ・Ｐ（一部）・Ｑ（一部）調査区
低地部（標高約７～14m）：Ｇ・Ｐ（一部）・Ｑ（一部）・Ｒ・Ｓ調査区



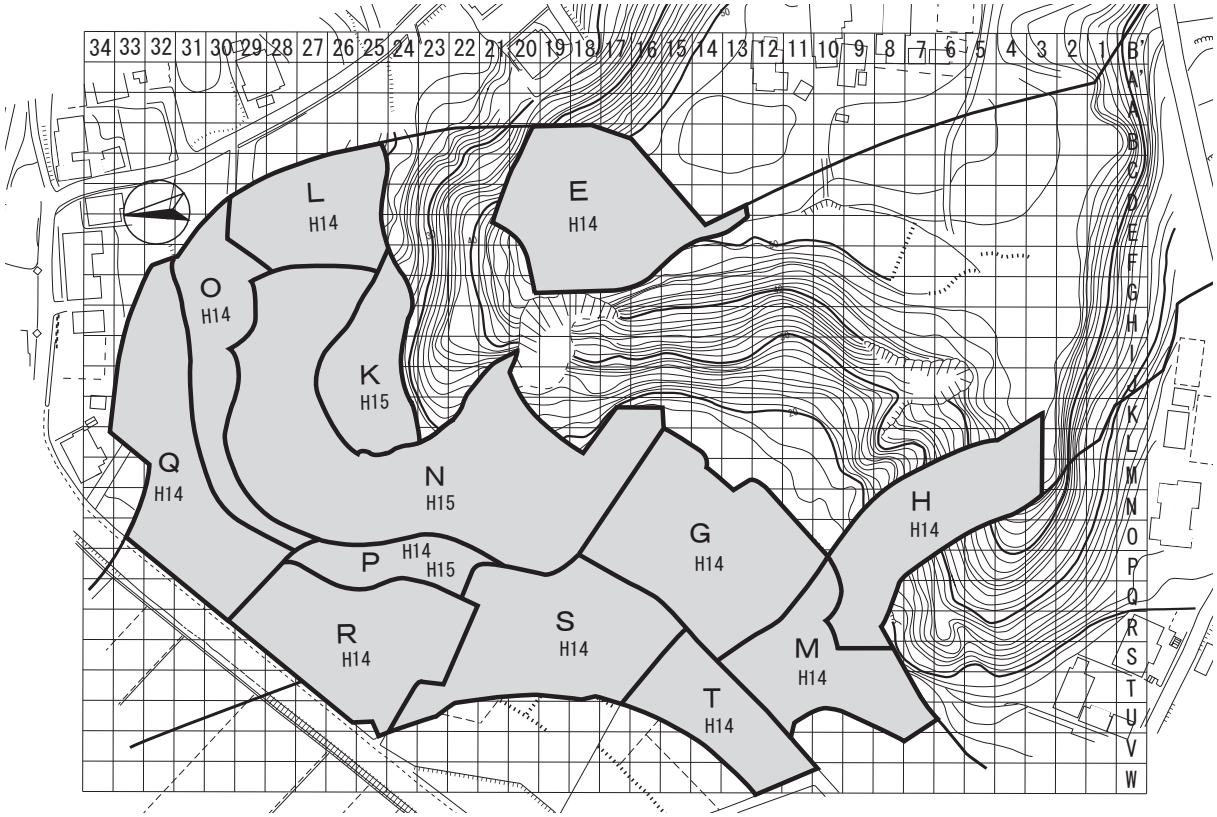
調査区割り図



台地部・山腹部・低地部の範囲



年度別調査位置図（H12・13）



年度別調査位置図（H14・15）

台　地　部

第Ⅳ章　台地部の調査

第１節　調査の概要

１　台地部の範囲と概要

桁城跡のＡ～Ｅ調査区は標高約50ｍの台地上，本遺跡の南東側に位置する。調査区は急な傾斜または崖になっており，周囲からはある程度隔絶された部分であるということができる。そのため，桁城跡の中でこの範囲はその他の調査区とは性格を異にすると考えられる。そこで，これらのＡ～Ｅ調査区を台地部として設定し，報告を行う。以下にその該当範囲を示す（第１図）。

Ａ～Ｅ調査区は，近現代においても人々の生活の一部として利用されており，調査前は田圃，畑・畑境の石積み，近現代の墓地などが築かれていた。そのため遺跡の上部は多少の削平を受けていると思われるが，縄文時代に相当すると思われる集石や落し穴，中近世に相当すると思われる土坑，炉状遺構，方形竪穴建物跡や掘立柱建物跡，溝などが検出された。出土した遺物としては，縄文土器，石斧などの縄文時代の石器，土師器や輸入陶磁器，国産陶器，鉄滓などが挙げられる。縄文時代の遺構が検出されたのはＡ・Ｂ調査区においてである。また，Ａ～Ｅ調査区すべてにかけて中近世の遺構が検出され遺物も出土しているが，特に多く遺構が検出されたのはＣ調査区である。Ｃ調査区の大型土坑からは，中世の輸入陶磁器が多数出土した。



第１図　台地部の範囲

２　台地部の層序

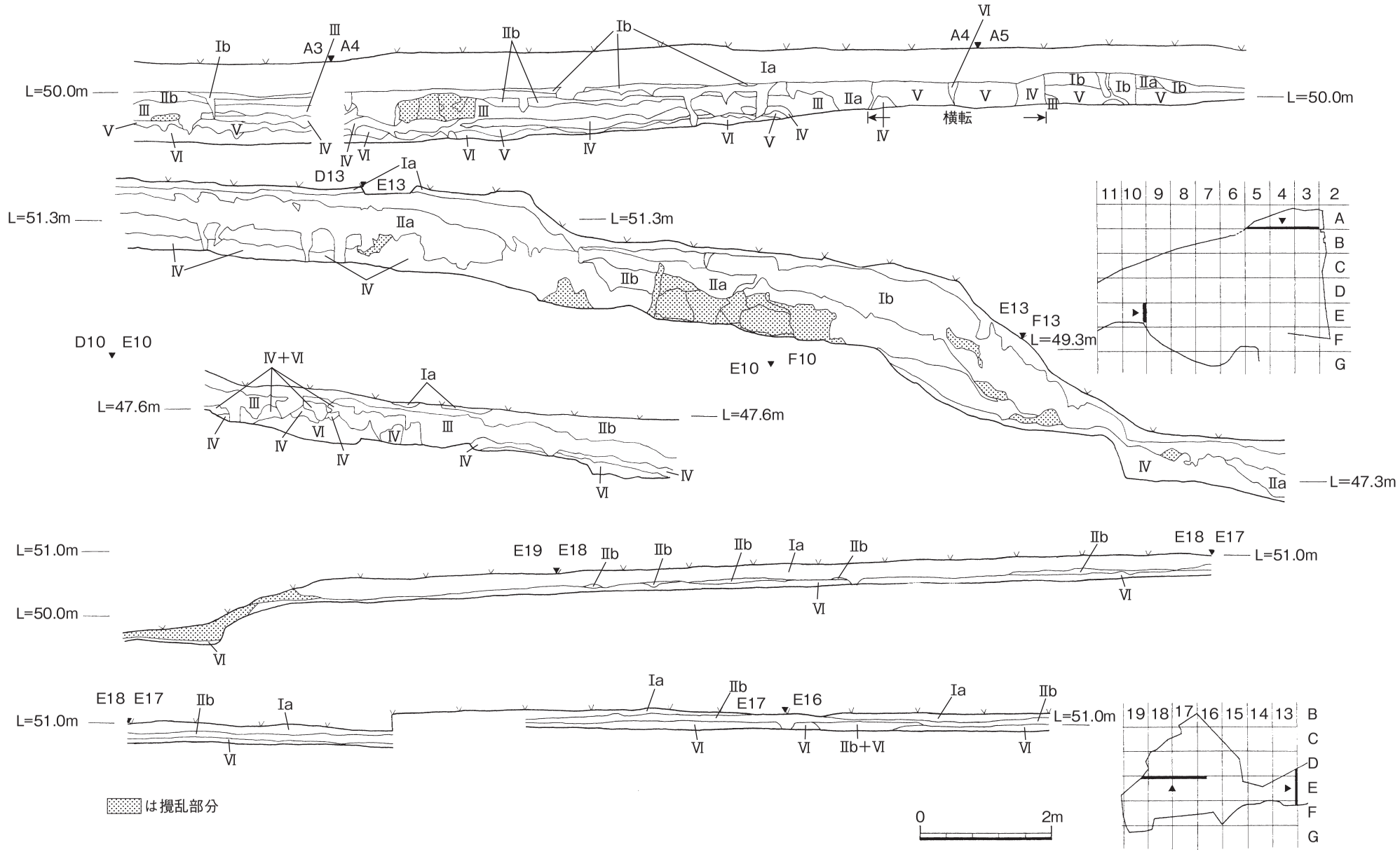
台地部（Ａ～Ｅ調査区）は，近現代においては畑や墓地として利用されており，地層の削平を受けている場所である。特にＥ調査区では造成が行われており，地層の残りは悪かった。台地部の範囲は東西南北に広がっており，調査区によって若干の差はあるが，以下に台地部における基本的な層序を示す。各調査区ごとの土層断面図は第３図を参照されたい。

Ⅴ　Ⅴ　Ⅴ　Ⅴ

Ⅰａ層	Ⅰａ層：表土。現耕作土である。
Ⅰｂ層	Ⅰｂ層：灰黄褐色土。旧表土である。
Ⅱａ層	Ⅱａ層：褐色土。中近世の遺物包含層である。
Ⅱｂ層	Ⅱｂ層：暗褐色土。中近世の遺物包含層である。
Ⅲ層	Ⅲ層：黄褐色火山灰。鬼界カルデラ噴出起源一次堆積火山灰。通称アカホヤ。
Ⅳ層	Ⅳ層：明黒褐色土。粘性が強い。縄文早期の遺物包含層であるが，台地部においては部分的にしか残存していない。
Ⅴ層	Ⅴ層：暗茶褐色土。いわゆるチョコ層。
Ⅵ層	Ⅵ層：黄灰白色火山灰。姶良カルデラ起源の火山灰。通称シラス。

第２図　台地部の層序

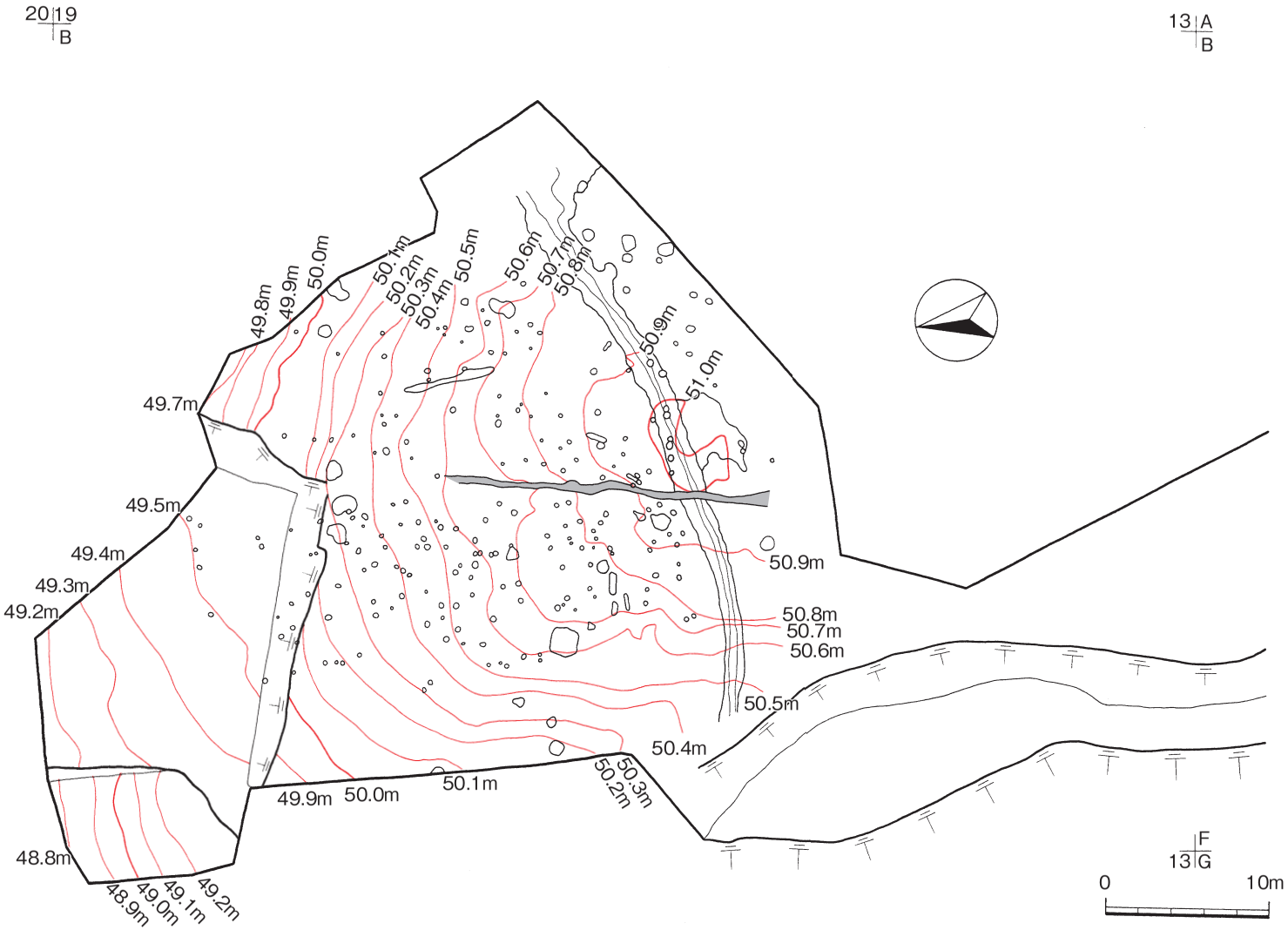
台地部においては，Ⅱ層が中近世の遺物包含層であり，Ⅳ層が縄文時代早期の遺物包含層である。Ⅱ層からは，土師器や国産陶器，輸入陶磁器などが出土しており，Ⅳ層からは石坂式などの縄文時代早期の土器や磨製石斧，磨石などの石器が出土している。



第３図　台地部土層断面図



第４図　Ａ～Ｄ調査区遺構配置図



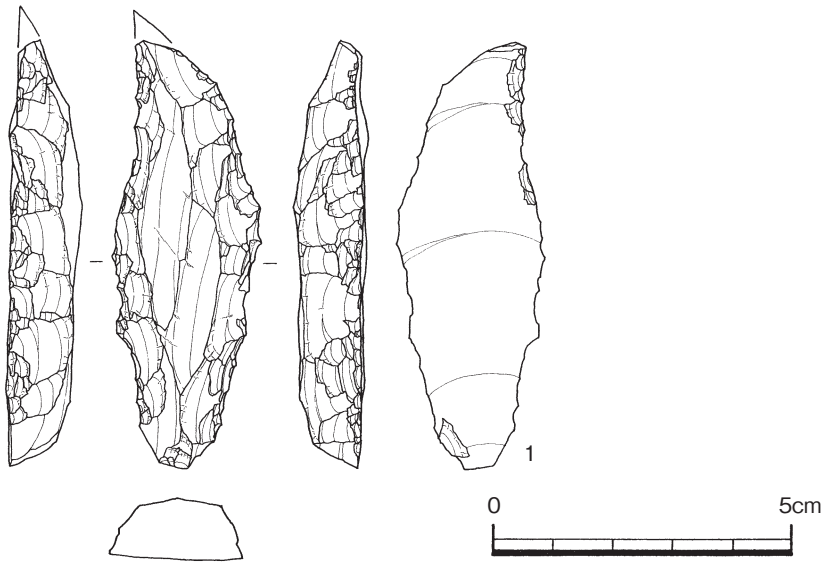
第５図　Ｅ調査区遺構配置図

第２節　Ａ～Ｅ調査区

１　旧石器時代の調査

第６図１の三稜尖頭器が単独で出土している。周囲からの旧石器の出土は全くない。このような出土状況はまま見受けられるものであり，特異な状況ではない。このような出土状況からは，次のような場面が想像できる。一つは狩人が移動の際に着柄していない尖頭器を落とした場面。二つめは，獲物に投げた槍が命中せず，狩人がそのまま見つけ出せなかった場面。三つ目は，命中したものの致命傷とはならず，獲物が狩人のトラッキングを見事にまいて逃げ切った場面。これら以外の状況も想定できるであろうが，いずれにしても想像をたくましゅうさせる出土状況ではある。

さて，この三稜尖頭器はチャートの分厚い縦長剥片を素材とするものであり，腹面からの急斜度剥離による整形と基部両側縁と先端部左側縁の丁寧な調整が特徴となる。基部は着柄のために，ほぼ三分の一の箇所で整形剥離の稜をつぶすように丁寧に調整剥離を施しているのが分かる。先端部左側縁の丁寧な調整はより鋭利な先端部を作り出すためであろう。このようなシンメトリカルではない，左右いずれかに偏った尖端もよく見られるものである。



第６図　旧石器時代の石器

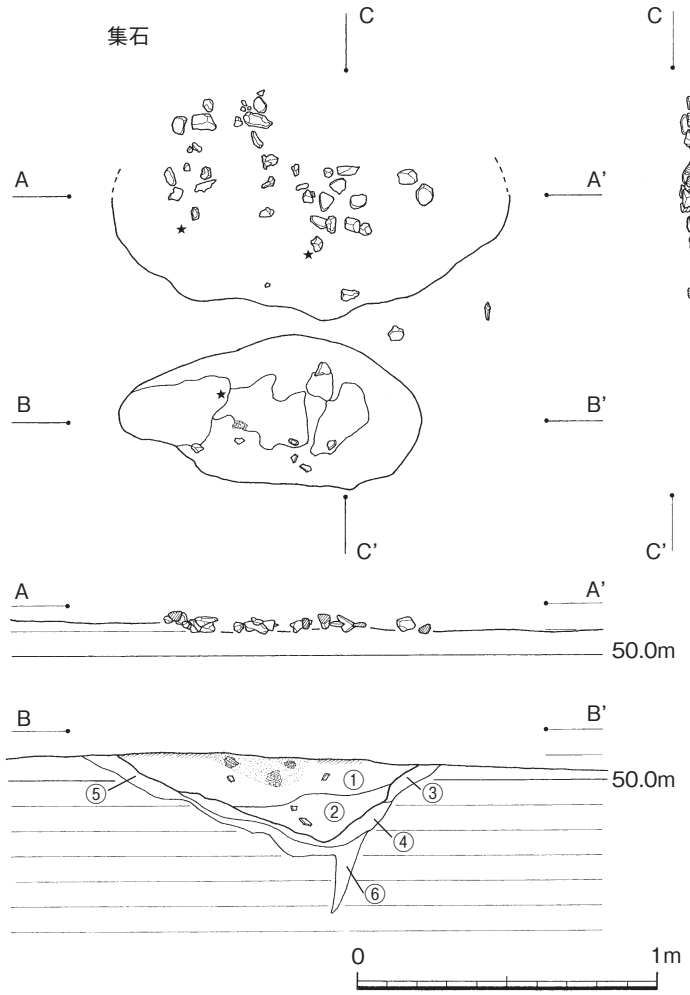
２　縄文時代の調査

（１）遺構（第７図，第８図－１・２，第９図－１～３）

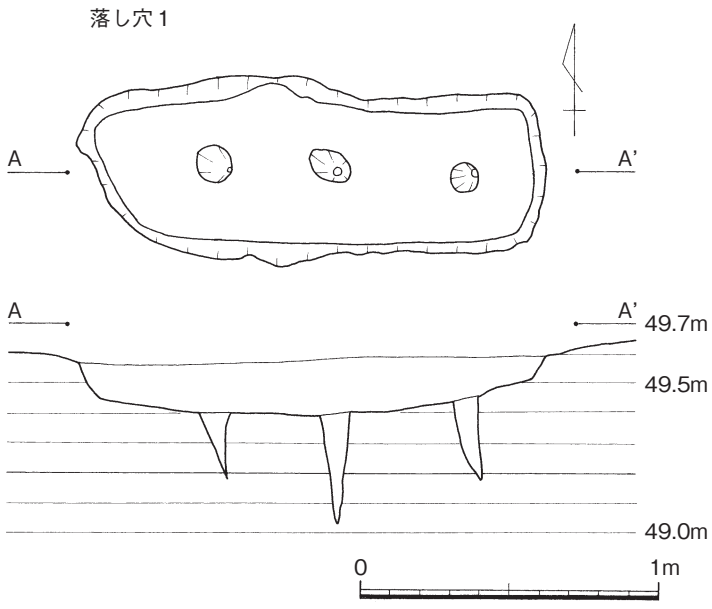
Ａ－４区で集石が１基，Ａ－２区およびＥ－３区で落し穴が３基検出されている。いずれも検出面はⅣ層であり，縄文時代のものであろう。

第７図の集石は，散在する礫とそれに隣接する小土坑からなる。土坑は長径１ｍ，短径0.5m，深さ0.45mであり，埋土①には多量の木炭と灰とを含み，断面図③④⑤に示す土坑底部は赤変して強い火熱を受けた痕跡が顕著である。礫もまた赤変したり，割れていたりと強い火熱を受けた痕跡が顕著である。これらの礫はほぼ拳大であり，上下のレベル差はなく，一面に散らばっている状況である。

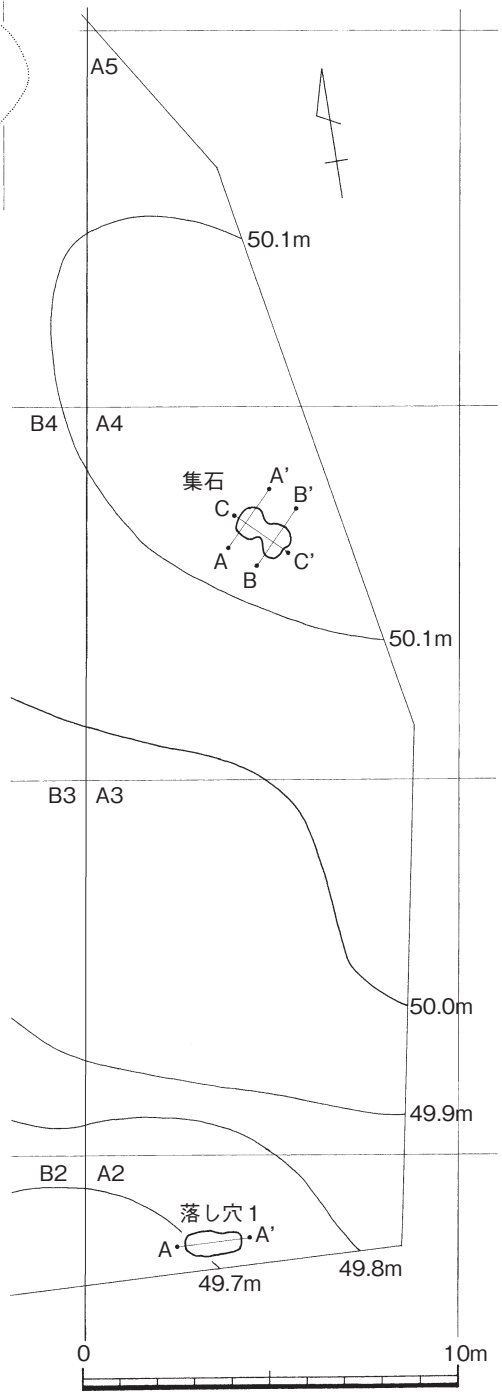
第８図－１，第９図－１・２は落し穴である。幅の広狭はあるものの，いずれも長方形プランを示す。また，からみの小ピットが複数あるのも共通である。第８図－１は，幅0.5m，長さ1.5m，残存深さ0.2m。第９図－１は，幅0.4m，長さ1.5m，残存深さ0.1m。第９図－２は幅0.4m，長さ2.4



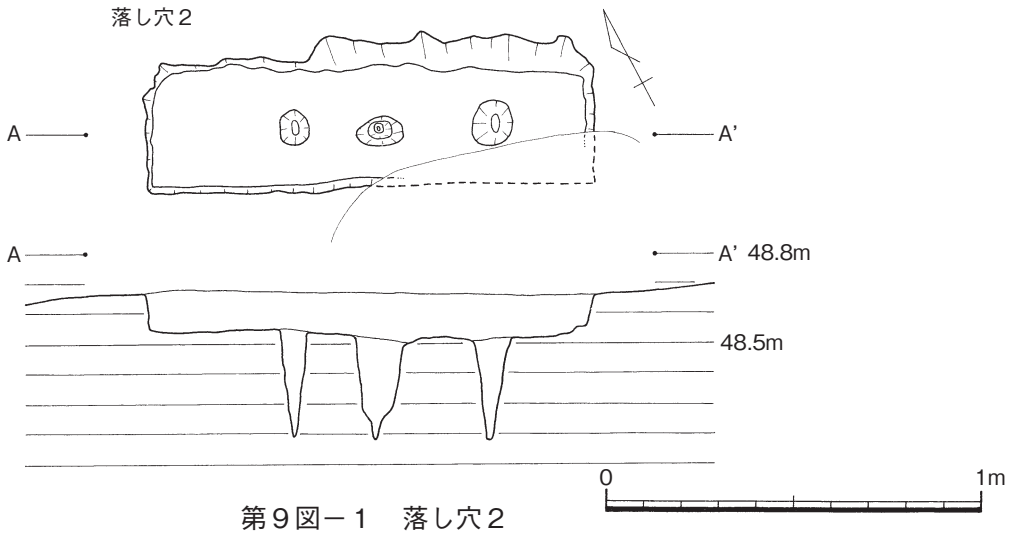
第７図　集石



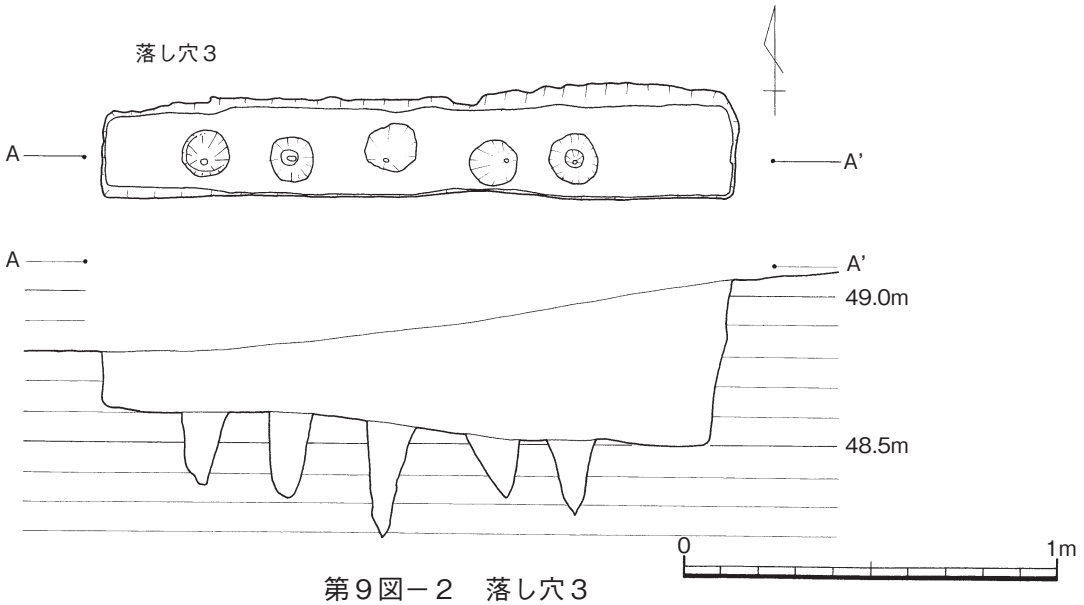
第８図－１　落し穴１



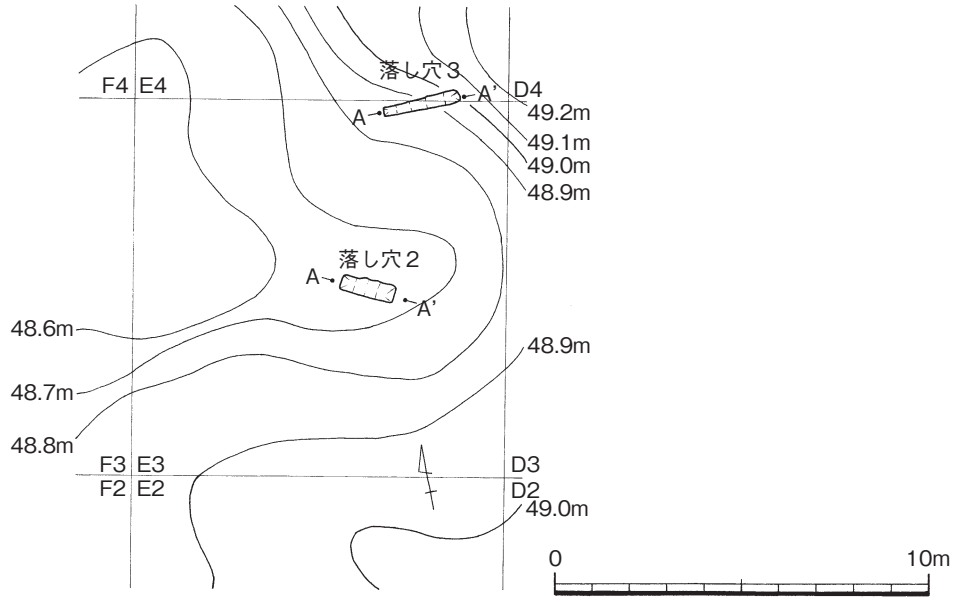
第８図－２　集石・落し穴１位置図



第９図－１　落し穴２



第９図－２　落し穴３



第９図－３　落し穴２・３位置図

m，残存深さ0.5mである。

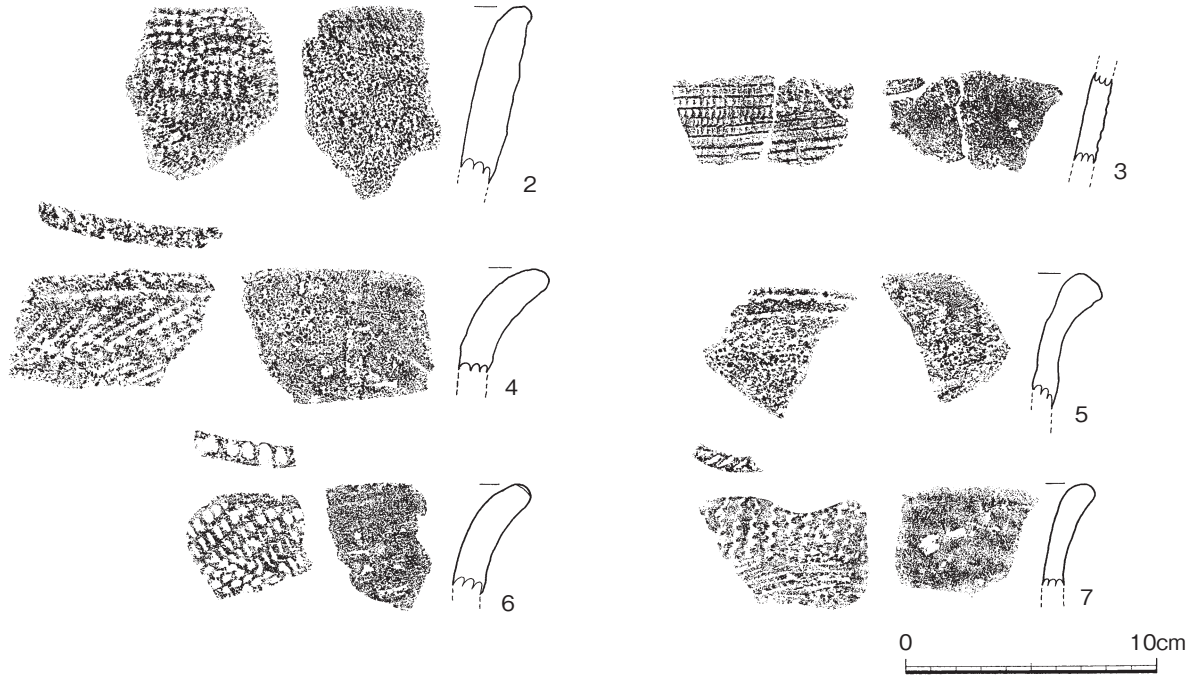
いずれもが縄文時代早期によく見られる特徴を示すものであり，吉田式や石坂式土器が出土していることから，この時期のものと見て差し支えないであろう。

（2）出土遺物

土器（第10図）

2は，口縁部に8条の貝殻腹縁刺突文を施す吉田式土器の口縁部である。口縁部直下の胴部の文様と内面の調整痕は磨耗のため判然としない。3も同じく吉田式であるが，貝殻腹縁押引文が施されている。

4～7は石坂式である。口縁部文様帯に縦もしくは斜位の貝殻腹縁刺突文が巡り，口唇部には横走する貝殻腹縁刺突文が施されている。また，口唇にはヘラ刻みが施されている。



第10図　A～E調査区の縄文土器

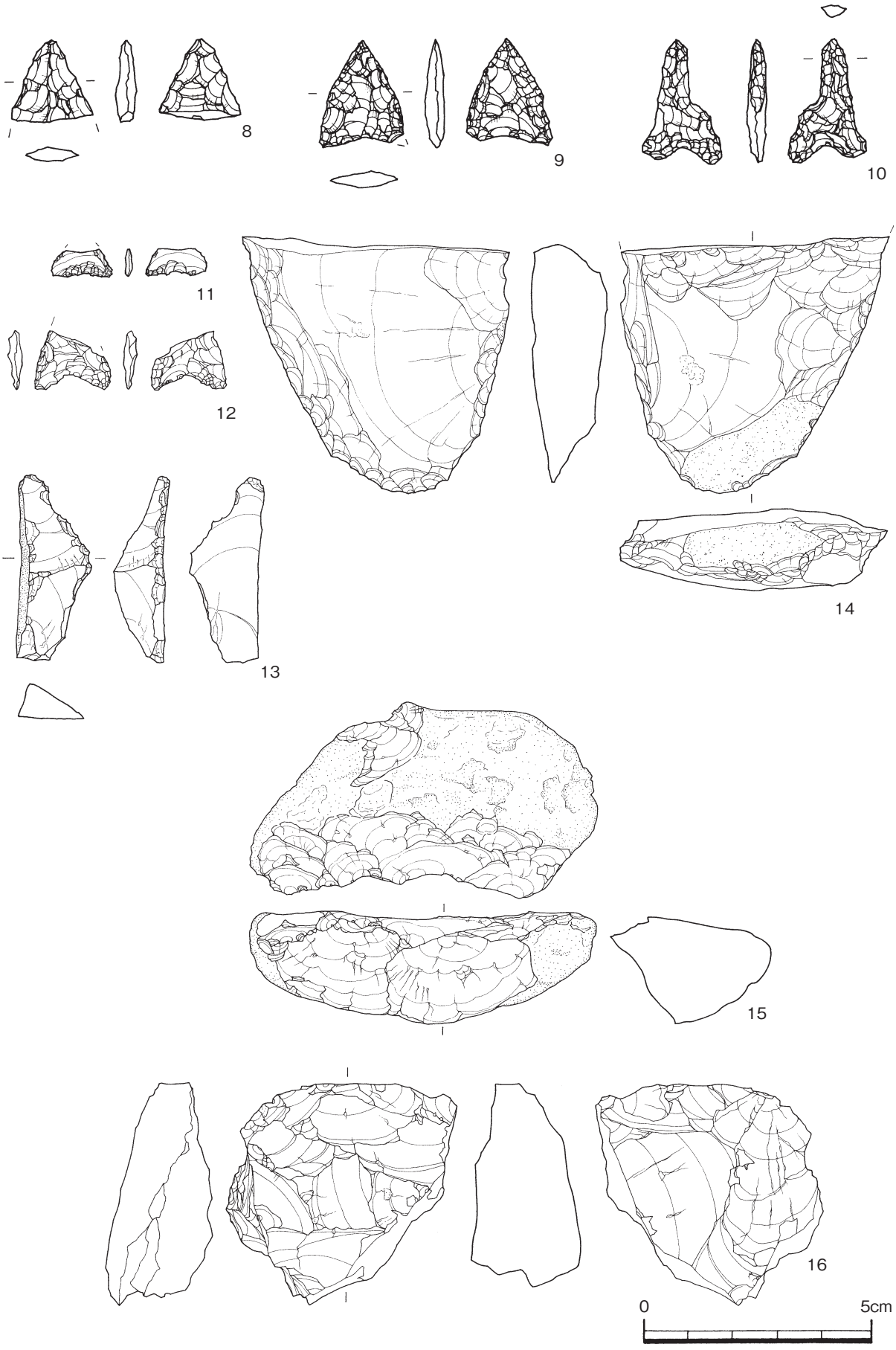
A～E調査区の縄文土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	層	器種	部位	法量（cm）			調整		色調		備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
第10図	2	D4	2780	Ⅵ	深鉢	口縁	—	—	—	不明	不明	赤褐色	赤褐色	貝殻腹縁刺突
	3	—	214	Ⅳ	深鉢	胴部	—	—	—	—	ナデ	淡褐色	淡褐色	貝殻腹縁押引文
	4	A3	699	Ⅱ	深鉢	口縁	—	—	—	不明	不明	淡褐色	淡褐色	貝殻腹縁刺突
	5	B4	2784	Ⅵ	深鉢	口縁	—	—	—	不明	不明	淡褐色	赤褐色	貝殻腹縁刺突
	6	A3	670	Ⅱ	深鉢	口縁	—	—	—	施文	ナデ	淡褐色	赤褐色	貝殻腹縁刺突，口唇刻み
	7	B4	172	Ⅱ	深鉢	口縁	—	—	—	施文	ナデ	褐色	淡褐色	貝殻腹縁刺突

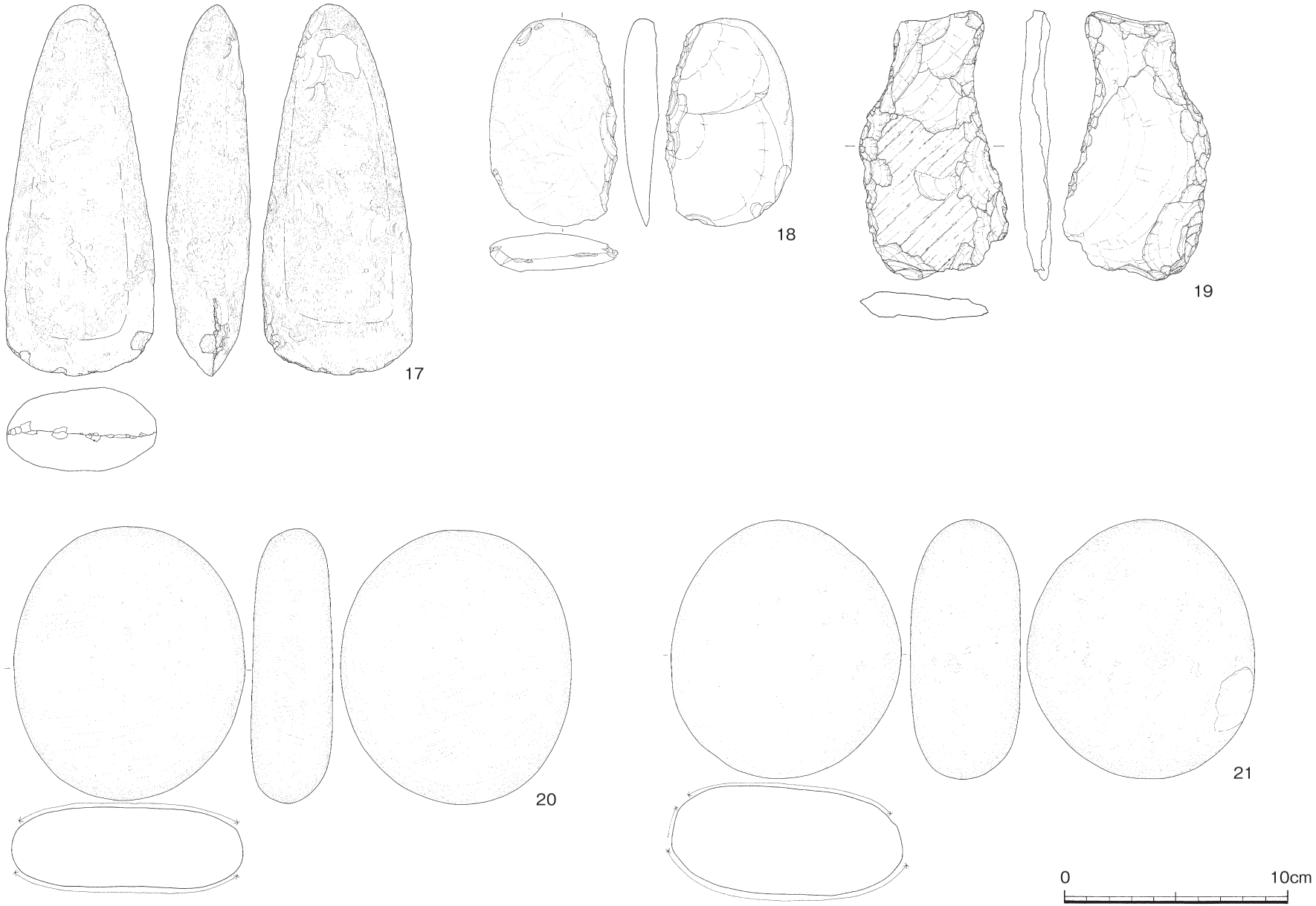
石器（第11図～第13図）

8は整形剥離や周縁調整の剥離の有りようから石槍の頭部であろう。9と比較すればよく分かるように，特に尖端の調整の仕方が石鏃とは明らかに異なる。

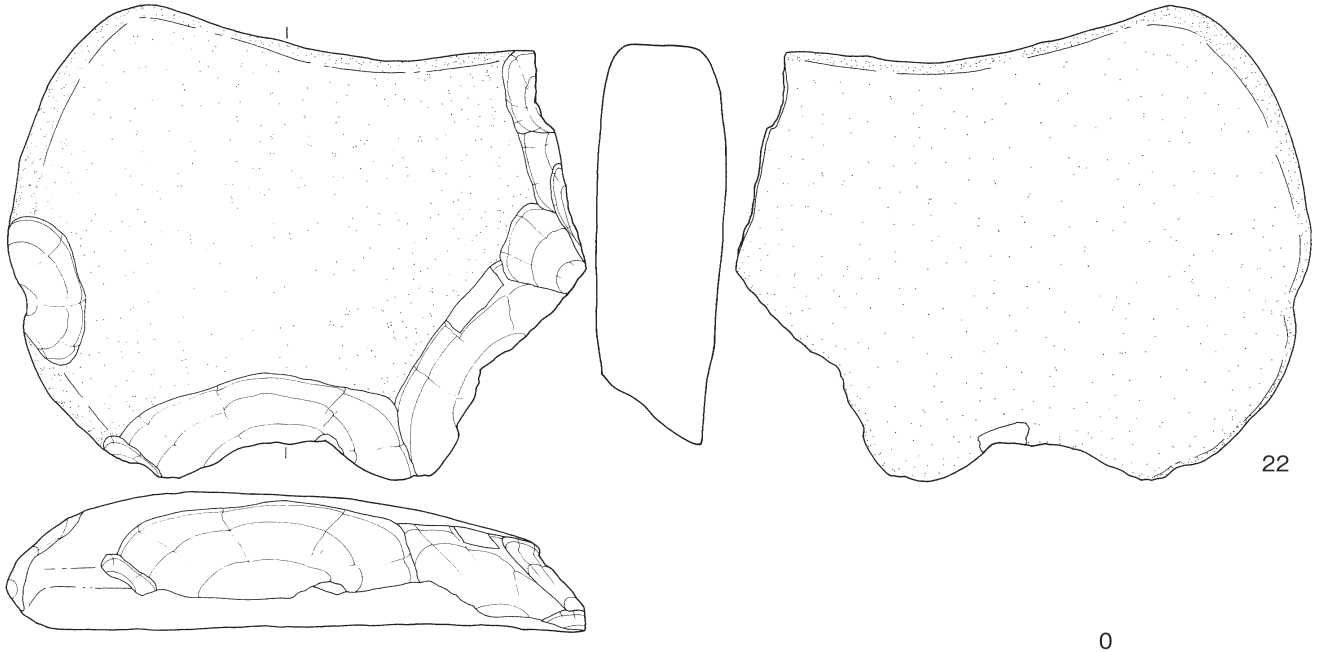
9～12は完全な形のものは1点もないが，石鏃である。11は小型剥片鏃の頭部が欠損したもので



第11図　A～E調査区の石器１



第12図　A～E調査区の石器２





第13図　A～E調査区の石器３

あろう，基部に浅い抉入が見える。いずれも縄文時代早期によく見る形態である。なお，10の右側縁は，パティナが新鮮で発掘時のガジリによるものと思われ，本来の形状ではない。

13は黒曜石のウティライズドフレイクである。右側縁に使用によるものか細かな刃こぼれが連続する。削器のような使われ方をしたのであろうか。

14は削器に分類した。周縁加工とともに，円弧状の下端に半両面調整の刃部が作られている。切断された上端にも周縁加工が施されている。

15・16は石核である。15は黒曜石の円礫の長軸方向の端を礫器の刃部のように剥いでいくものであり，ある程度剥片剥離が進行し，最初の作業面が打面となった段階である。16は，15のような石核の剥片剥離が進行した結果としての盤状石核である。打面と作業面の転移が全周に及び，結果として盤状を呈するようになる。13のような剥片は背面に異なる方向からの剥離があるが，それはこのような石核から剥離されたものであるからである。

17は石英脈岩の磨製石斧である。丁寧な敲打によって全面を整形し，刃部と頭部に丁寧な研磨を施して仕上げてある。

18・19は打製石斧であるが，18は頁岩の扁平な円礫に２回の整形剥離をした後，その打点側の側縁を調整しただけの状態である。刃部は弧状を呈する下縁であるが，それは最初の整形剥離で作り出されたものであり，旧石器のクリーバーと同じ作り方である。19は粘板岩製の着柄のための抉りを持つ縄文晩期特有の土掘り具である。

20・21は砂岩の円礫を用いた大きめの磨石である。表裏ともに平滑になっている。22は安山岩の円礫を用いた片刃の礫器である。23は，軽石で作った器面調整具であろう。湾曲した底面や側面が使用によって平滑になっている。

Ａ～Ｅ調査区の石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層	取り上げ番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
第６図	1	三稜尖頭器	チャート	－	－	－	7.1	2.4	1.2	20.86
第11図	8	尖頭器	黒色安山岩	C-18	Ⅱ	1502	1.8	1.8	0.5	1.0
	9	石鏃	黒曜石	D-18	Ⅱ	2411	2.4	1.9	0.5	1.19
	10	石鏃	黒曜石	E-8	溝	832	2.7	1.8	0.4	1.19
	11	石鏃	黒曜石	D-19	Ⅱ	1335	0.6	1.4	0.2	1.0
	12	石鏃	黒色安山岩	C-4	Ⅱ	2572	1.4	1.7	0.4	0.5
	13	UF	黒曜石	D-4	Ⅵ	2791	4.2	1.6	1.1	4.9
	14	削器	黒色安山岩	E-10	Ⅱ	461	5.5	5.8	1.7	73.0
	15	石核	黒曜石	E-13	Ⅱ	2251	4.2	7.4	2.4	83.0
	16	石核	黒曜石	D-17	溝	1368	5.0	4.9	2.5	55.0
第12図	17	磨製石斧	石英脈岩	G-19	－	一括	16.7	6.7	3.8	590.0
	18	打製石斧	頁岩	E-2	Ⅳ	18	8.4	5.7	1.6	120.0
	19	打製石斧	粘板岩	E-4	Ⅱ	848	11.7	6.3	1.3	107.0
	20	磨石	砂岩	A-4	－	－	12.3	10.4	3.7	740.0
	21	磨石	砂岩	A-4	－	－	11.7	10.3	5.0	890.0
第13図	22	礫器	安山岩	A-3	Ⅱ	781	12.7	15.4	3.4	978.0
	23	器面調整具	軽石	D	Ⅱ	6170	6.0	3.8	2.5	10.0
	24	剥片	チャート	E-7	溝	774	3.6	2.0	0.8	5.0

３　中近世の調査

中近世の遺物包含層はⅡ層に該当する。中近世の遺構は台地部全体に広がっており，後世の攪乱や造成により遺構は多少上面を削平されているものの，中世墓１基，炉状遺構１基，方形竪穴建物跡３基，掘立柱建物跡７棟，柵状遺構１条，溝10条，道跡２条，土坑５基が検出された。掘立柱建物跡の軸方向や溝内の遺物などから，いくつかの時期を想定することができると思われる。

＊遺物の年代については以下の編年を参考とした。

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　pp.55～70
小野正敏　1982「14～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2　pp.71～88
中村和美　2007「南九州の土器・陶器」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～補遺編』「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 pp.328～338
乗岡実　2000「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会資料』pp.61～69
森田勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　pp.47～54
盛峰雄　2000「陶器の編年　１，碗・皿」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 pp.10～33
山本信夫　2000『大宰府条坊跡 XV―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会

（１）遺構

中世墓（第14図）

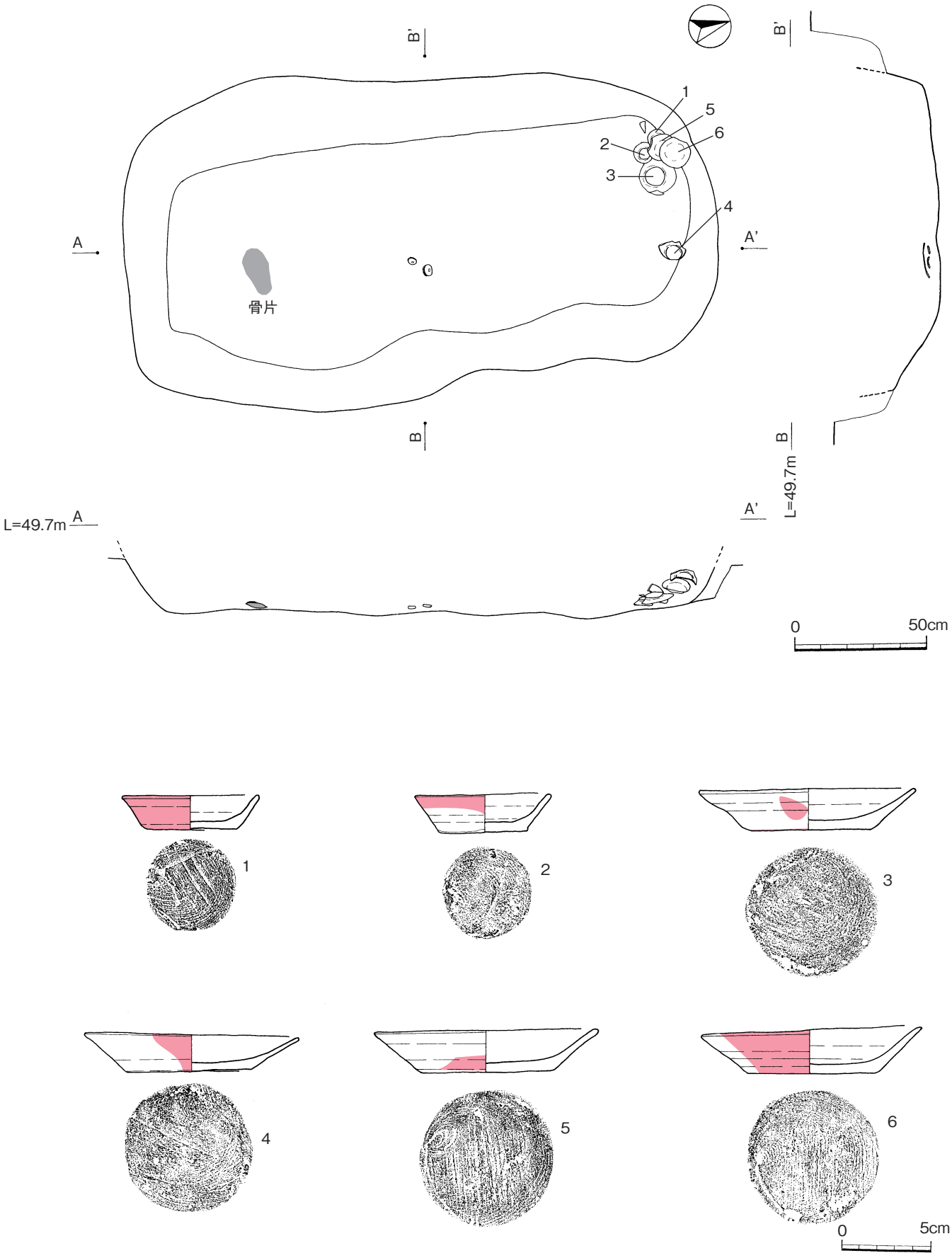
Ｄ－３区において検出された。長径×短径＝2.23×1.17ｍの長方形土壙墓で，長軸はほぼ南北方向である。検出した深さは0.38ｍであるが，溝５によって上部を削平されている。墓壙内からは，古銭や骨片の他に，底部糸切りの土師器が６点完形で出土した。墓壙北方向の隅に，１・２の小皿２枚と３の坏１枚が伏せた状態で出土し，その上に５・６の坏２枚が上向きの状態で出土している。４の坏は，墓壙北辺のほぼ中央に他の土師器よりも５㎝ほど高いレベルで，縦にささったような状態で出土している。

中世墓出土遺物（第14図）

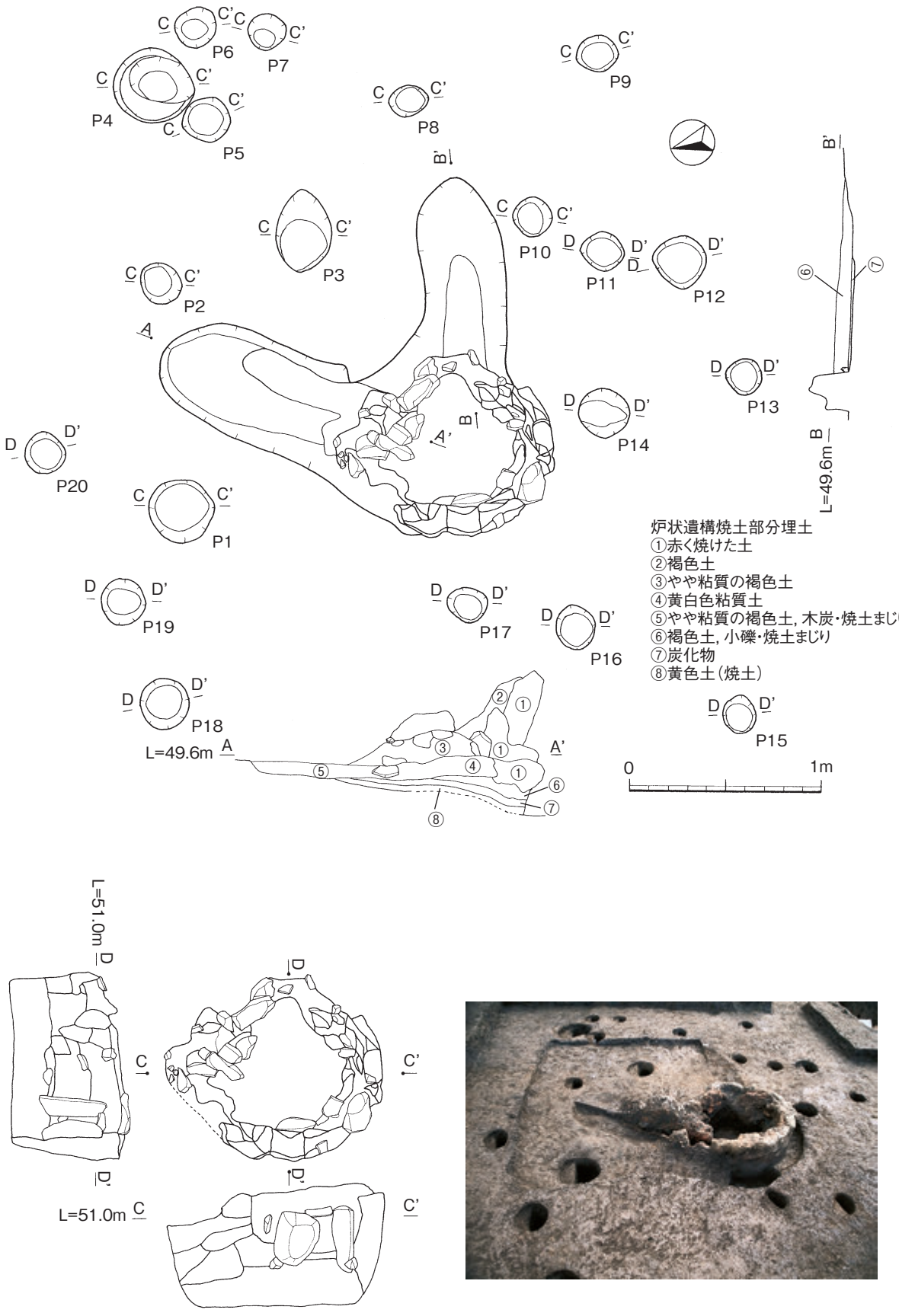
１・２は土師器の小皿である。１は，体部が直線的に立ち上がる形で，外面全面に朱が塗布されている。底部の糸切り痕の上にヘラ状工具による３条の痕跡が見られる。２は，１とほぼ同規格である。朱は部分的に施されている。３～６は土師器の坏である。体部から口縁部が外反する形状をしている。３は内外面の一部に，４～６は外面の一部に朱が塗布されている。１～６はすべて底部糸切りであり，糸切りの返しをナデて調整している。これらの出土遺物は中世後半に相当するものであると思われる。

また洪武通寶を含む数枚の古銭が墓壙のほぼ中央で出土しているが，洪武通寶以外は破片になっており，風化が激しく文字の判読はできない。クリーニング後，Ｘ線写真を撮影してみると，一部，「祥」や「天」といった文字が確認できる。これらの古銭は，分析の結果，鉛が多く含まれているということがわかっている。

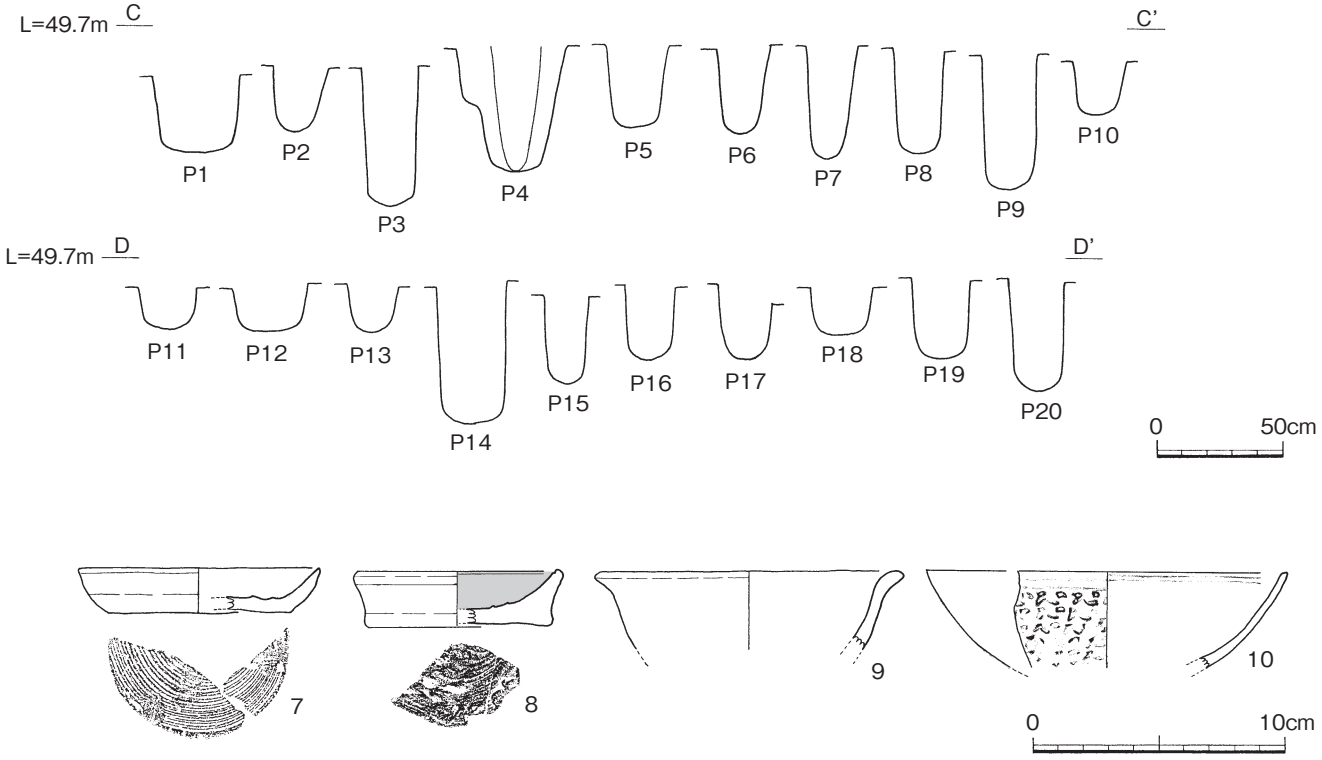
同じく，墓壙南側では骨片（骨粉）が出土しているが，風化が著しく取り上げは不可能であった。



第14図　中世墓遺構図・出土遺物


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
L=49.6m
L=51.0m
炉状遺構焼土部分埋土
①赤く焼けた土
②褐色土
③やや粘質の褐色土
④黄白色粘質土
⑤やや粘質の褐色土, 木炭・焼土まじり
⑥褐色土, 小礫・焼土まじり
⑦炭化物
⑧黄色土（焼土）
0
1m

第15図　炉状遺構



第16図　炉状遺構周辺ピット図・出土遺物

炉状遺構（第15図）

Ｂ－４区で検出された。長径×短径×深さ＝113×93×55㎝の円形の炉状遺構で，長軸は南北方向にある。拳大～30㎝を超える大きさの礫・軽石と粘土で壁が構築されており，壁は全体的に赤く焼けているが，熔解はしていない。壁の石材は，軽石を多く使用している。

２か所確認された焼土域は，それぞれ北方向と東方向に楕円形に広がっており，炉から外側に向けて徐々に堆積が薄くなる。炉壁には欠失した部分があり，そこが焚き口または掻き出し口であったために，このような焼土域が形成されたのではないかと推測される。また，炉を取り囲むようにして周辺に柱穴が多数検出されており，炉状遺構を囲う構造物があった可能性も考えられる。

炉状遺構周辺出土遺物（第16図）

７～10は炉状遺構周辺から出土した遺物である。７は底部糸切りの土師器の坏である。体部はやや内湾するように立ち上がり，見込み部分は中心がやや盛り上がっている。８は，底部糸切りの土師器の小皿である。口径と底径の差が小さく，体部がくびれる。９は，端反り口縁の青磁椀である。14世紀後半～15世紀初頭に相当するものと思われる。10は青花の蓮子碗である。

方形竪穴建物跡

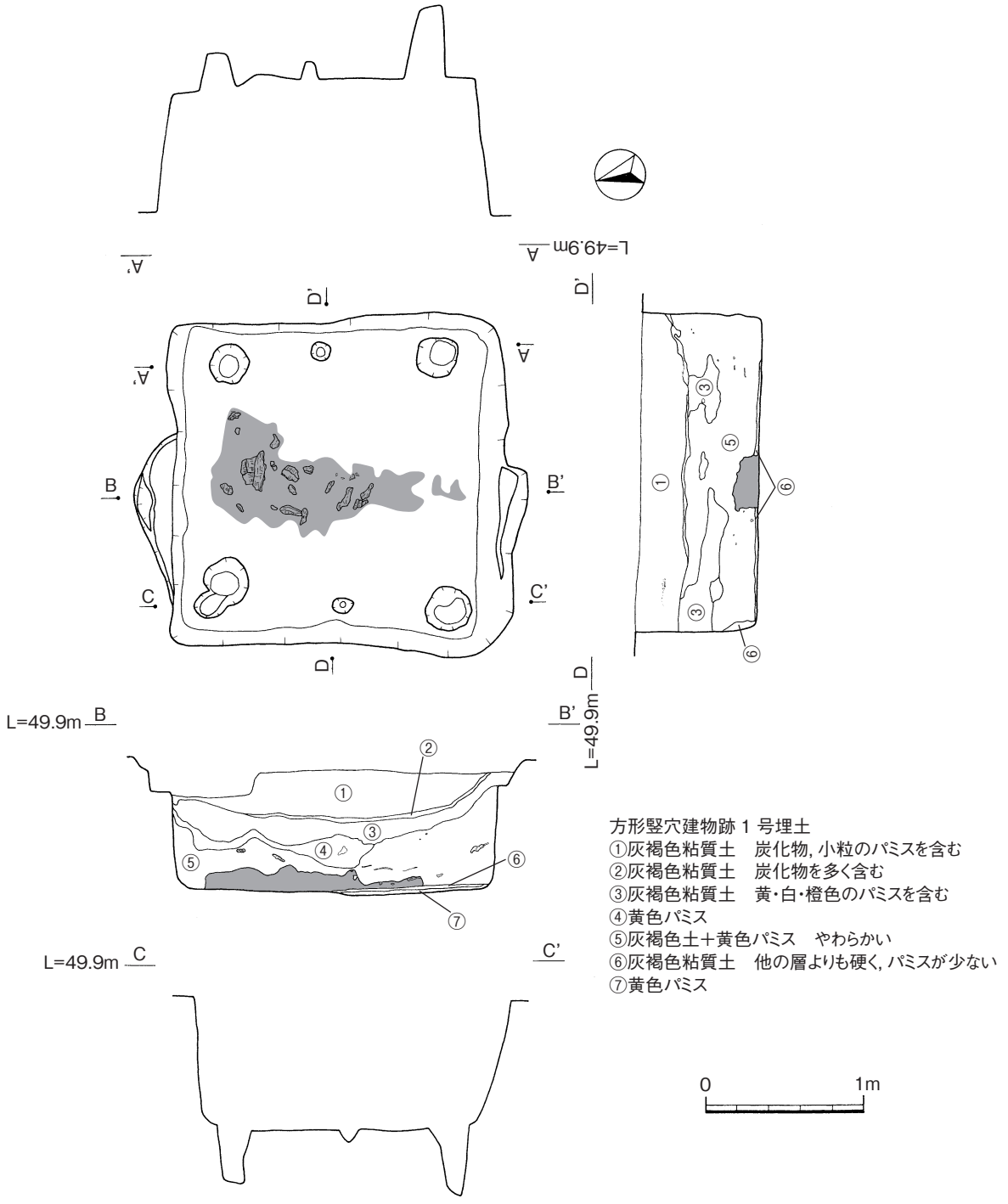
台地部では方形竪穴建物跡が３基検出された。いずれも台地部の東側に位置しており，周辺には柱穴や溝が検出されたが，この遺構との関係は不明である。

（１）方形竪穴建物跡１号（第17図）

Ｂ－３区のⅡ層上面で検出された。長径×短径×深さ＝2.5×2.0×0.75ｍの方形である。南北

の辺にそれぞれ幅20㎝，長さ60～90㎝，深さ15～20㎝程のステップのような張り出しがあり，そこから床面までほぼ垂直に60㎝ほど竪穴が掘り込まれている。竪穴内においては，６基の柱穴が検出された。径20～30㎝，深さ20～40㎝の柱穴が四隅に一つずつ，東西それぞれの辺の中央に径10㎝，深さ10㎝程度の小さな柱穴がある。また，竪穴の中央には，厚さ15㎝，長さ135㎝，幅40㎝ほどの範囲にわたって炭化物が堆積している。

この方形竪穴建物跡内から出土したスダジイの炭化材による放射性炭素年代測定の暦年較正年代では，ＢＰ425±37という結果が出ており，15世紀後半～16世紀後半に相当する。

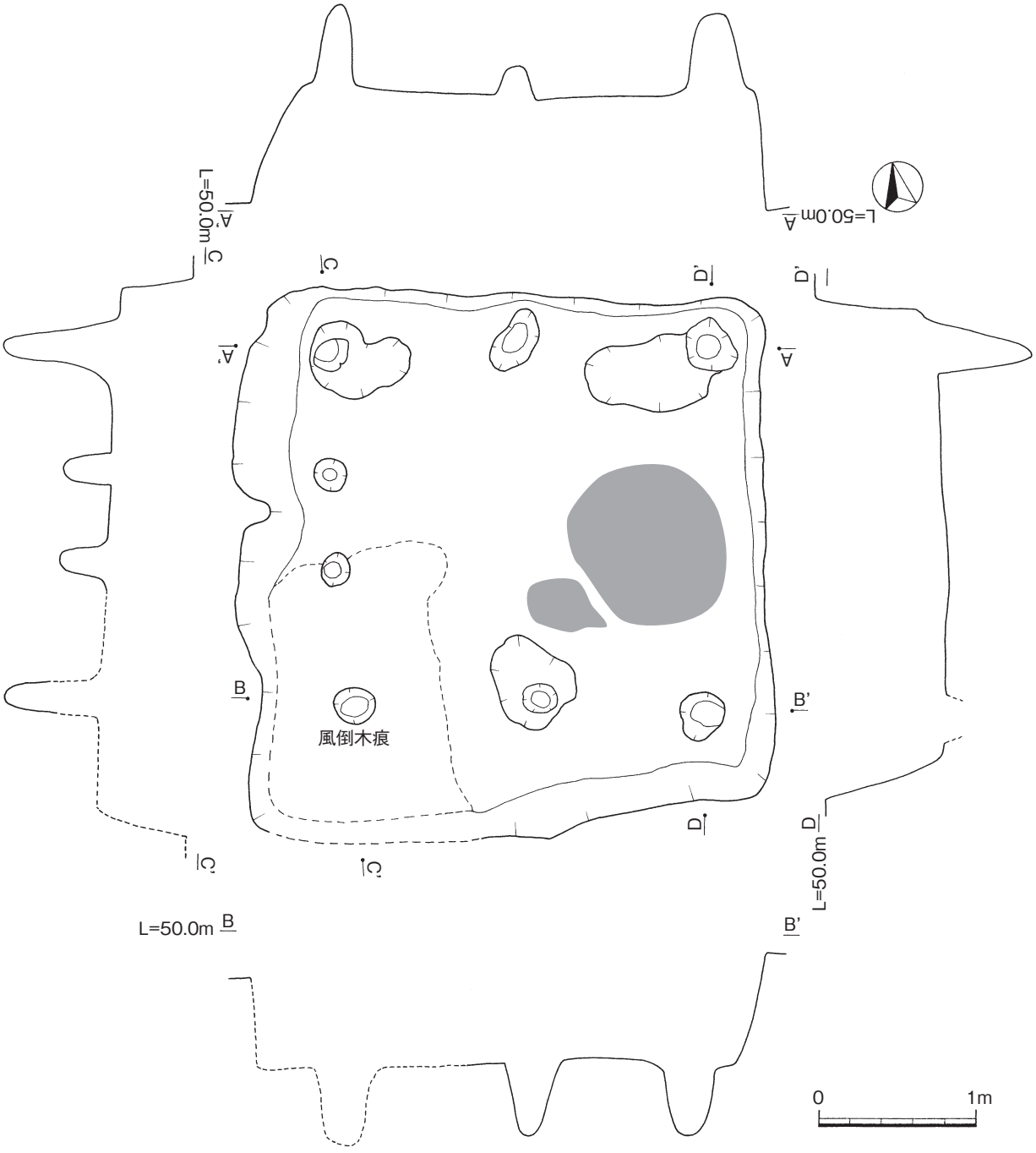


第17図　方形竪穴建物跡１号

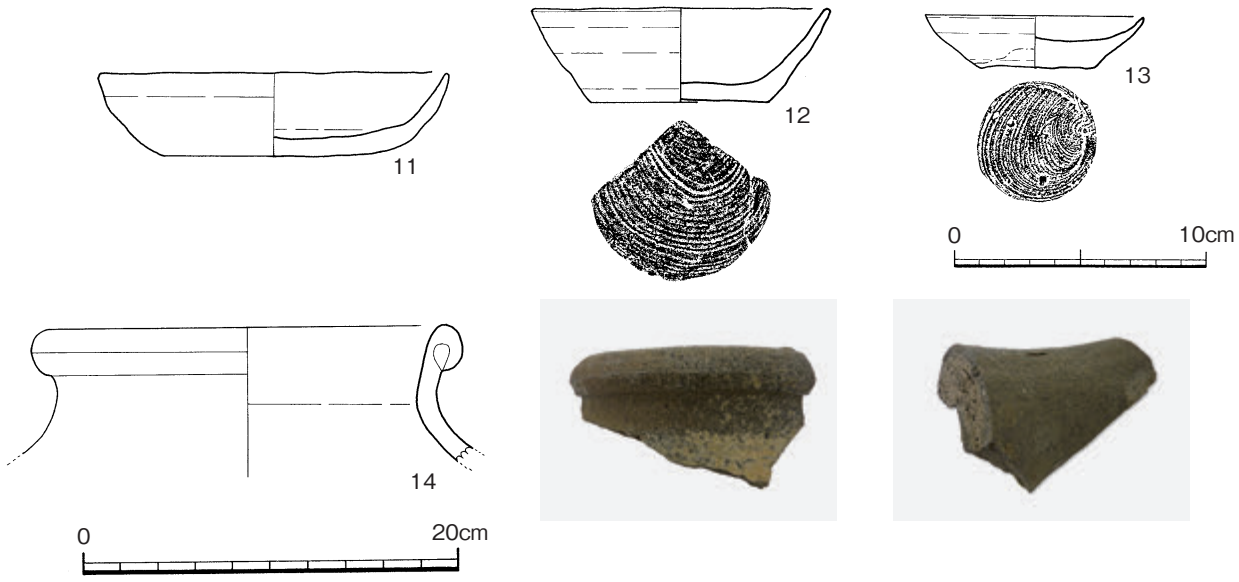
（2）方形竪穴建物跡２号（第18図）

Ｂ－６区で検出された。長径×短径×深さ＝3.3×3.4×0.7ｍの方形である。柱穴は８基検出されており，それぞれ40～70㎝の深さである。南西方向４分の１程の範囲に風倒木痕があり，上部は攪乱されている。東側の床面には１×１ｍ程度の炭化物の広がりが確認された。

この方形竪穴建物跡から出土したサカキの炭化材による放射性炭素年代測定の暦年較正年代では，ＢＰ636±40という結果が出ており，13世紀後半～14世紀半ばに相当する。



第18図　方形竪穴建物跡２号



第19図　方形竪穴建物跡２号出土遺物

方形竪穴建物跡２号出土遺物（第19図）

11は底部糸切りの土師器の坏である。底径のわりに器高が高く，体部から口縁部にかけて直線的にのびる。12は，体部が丸みを帯びる土師器の坏である。表面は摩耗しており，底部切り離し技法は不明である。13は陶器の灯明皿である。外面腰部付近は露胎で，見込み中心はやや盛り上がっている。14は口縁部を外側へ折り返して丸くつくる壺で，頸部から口縁部にかけて自然釉がかかっている。胎土は層をなしており，１～３㎜程の粒が混じる。非常に硬く焼き締まっている。

（３）方形竪穴建物跡３号（第20図）

Ｃ－６・７区で検出された。長径×短径×深さ＝3.3×3.2×0.9ｍである。柱穴は11基検出されており，それぞれ10～40㎝の深さである。炭化物と焼土が床面から40㎝の高さで検出されている。また床面にも炭化物が広がっていた。

この竪穴内から出土したクスノキ科の炭化材による放射性炭素年代測定の暦年較正年代では，BP662±38という結果が出ており，13世紀半ば～14世紀前半に相当する。

方形竪穴建物跡３号出土遺物（第20図）

方形竪穴建物跡３号からは，鉄塊系遺物が出土している。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は，計６棟検出された。柱穴の大きさ及び柱穴間の距離については別表にまとめた。

（１）掘立柱建物跡１号（第21図）

Ｃ・Ｄ－５区で検出。溝状遺構７を切っている。柱穴は19基。庇付きの建物である。長軸は東西方向である。

（２）掘立柱建物跡２号（第22図）

Ｃ・Ｄ－５・６区で検出。掘立柱建物跡１号に２ｍの間隔をおいて隣接している。長軸方向は掘

立柱建物跡１号とほぼ同じで東西を向いている。柱穴数４基の１× １間の建物である。

（３）掘立柱建物跡３号（第23図）

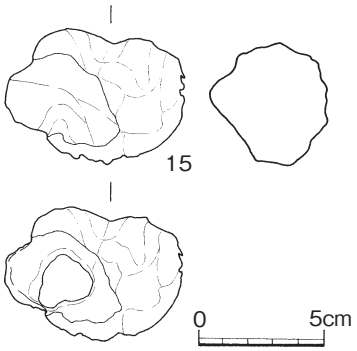
C・D－７・８区で検出。柱穴は６基。１×３間の建物で，長軸は南北方向である。

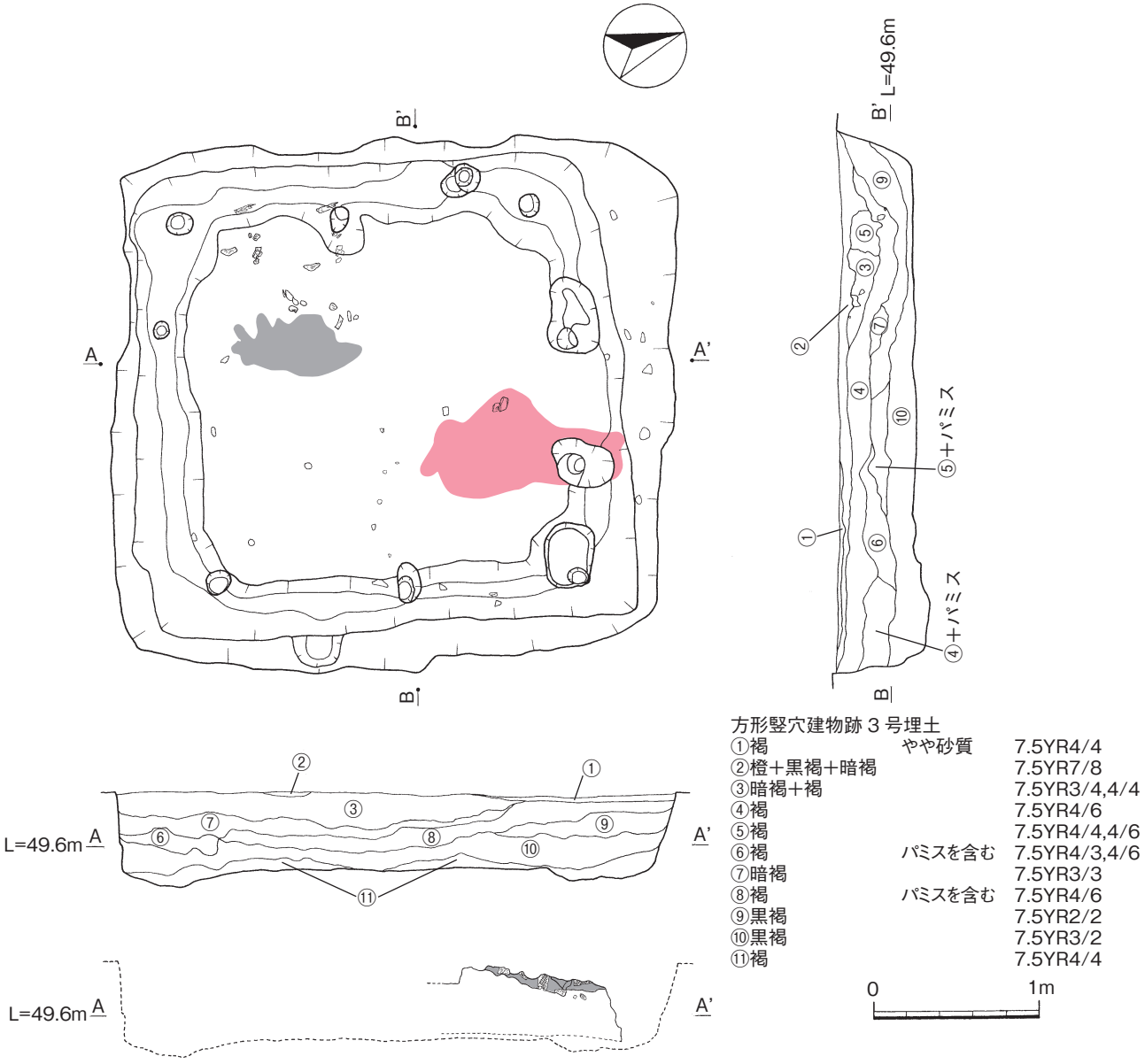
（４）掘立柱建物跡４号（第24図）

D－７・８区で検出。柱穴は28基。２×５間の建物で，東西に庇をもつ。

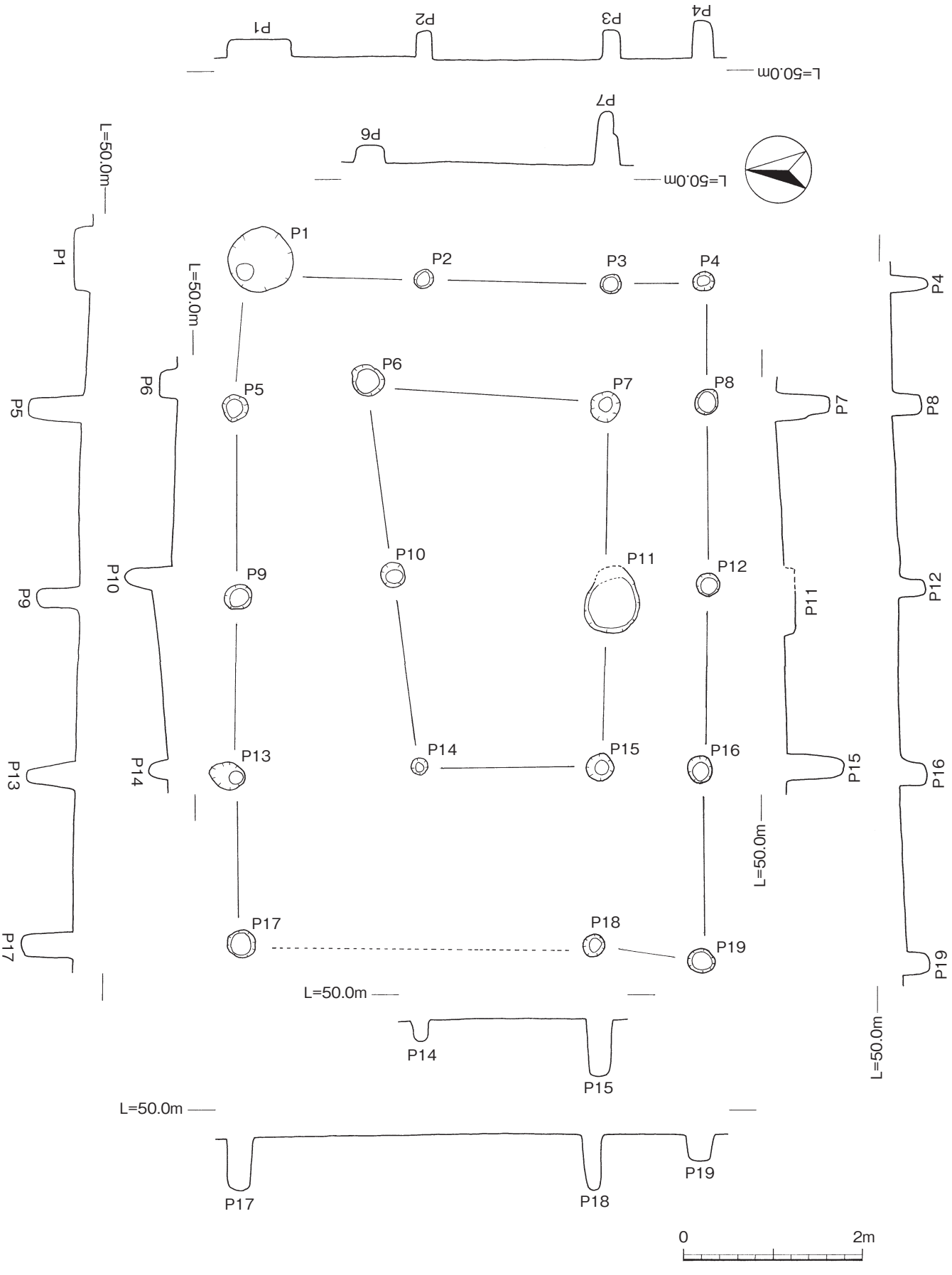
（５）掘立柱建物跡５号（第25図）

D・E－７区で検出された。柱穴は12基。１×３間で，南側に庇をもつ。

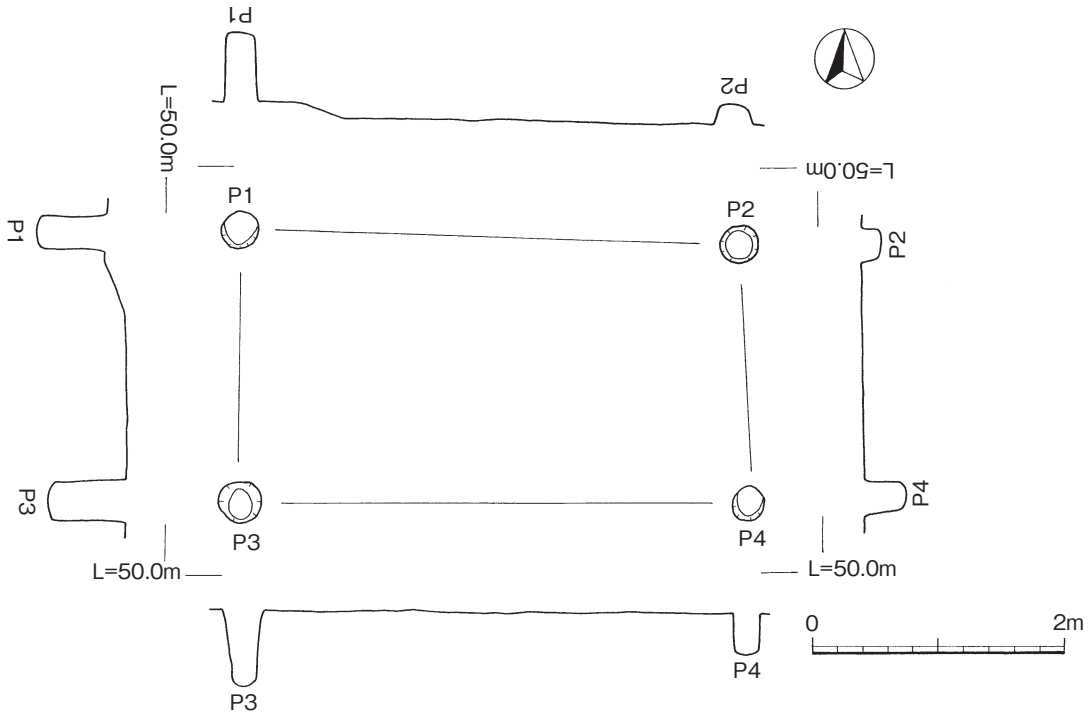




第20図　方形竪穴建物跡３号・出土遺物



第21図　掘立柱建物跡１号



第22図　掘立柱建物跡２号

（６）掘立柱建物跡６号（第26図）

Ｄ－12区で検出された。柱穴は６基。１×２間の建物で，長軸はほぼ南北方向である。

（７）掘立柱建物跡７号（第27図）

Ｄ・Ｅ－16区で検出された。東西に長軸をもつ２× ６間の建物跡である。溝状遺構11を切っている。検出された柱穴は18基だが，北西端にあったと考えられる柱穴は現代の芋穴により削平されている。

柵状遺構（第26図）

掘立柱建物跡３～５号近くで柵状遺構が検出された。柱穴が５基，南北方向にほぼ等間隔で並んで検出されており，掘立柱建物跡３～５号に付随する遺構ではないかと考えられる。

溝状遺構

溝状遺構は10条検出された。上部は削平されていると思われ，全体的に浅い溝である。

（１）溝状遺構１（第28図）

溝状遺構１は，Ｂ－３～５区のⅡ層上面で検出された。南北に向かって延びる。幅は，最も狭い部分で１ｍ，最も広い部分で２ｍ，検出した長さは16.5ｍである。深さは10～20㎝と非常に浅く，底面の高低差はほとんどない。

溝状遺構１出土遺物（第28図）

16は土師器の坏である。体部は外側へ直線的に立ち上がる。底部には糸切りの返しが見られる。17は，景徳鎮窯系の青花で，体部外面に芭蕉葉文が描かれる蓮子碗である。見込み部分にも文様が描かれているが，欠損しており詳細は不明である。畳付は釉剥ぎされる。18は瓦質の火鉢で，口縁部は内湾し，平坦面をつくる。肩部にはスタンプで雷文が施されている。

（２）溝状遺構２（第29図）

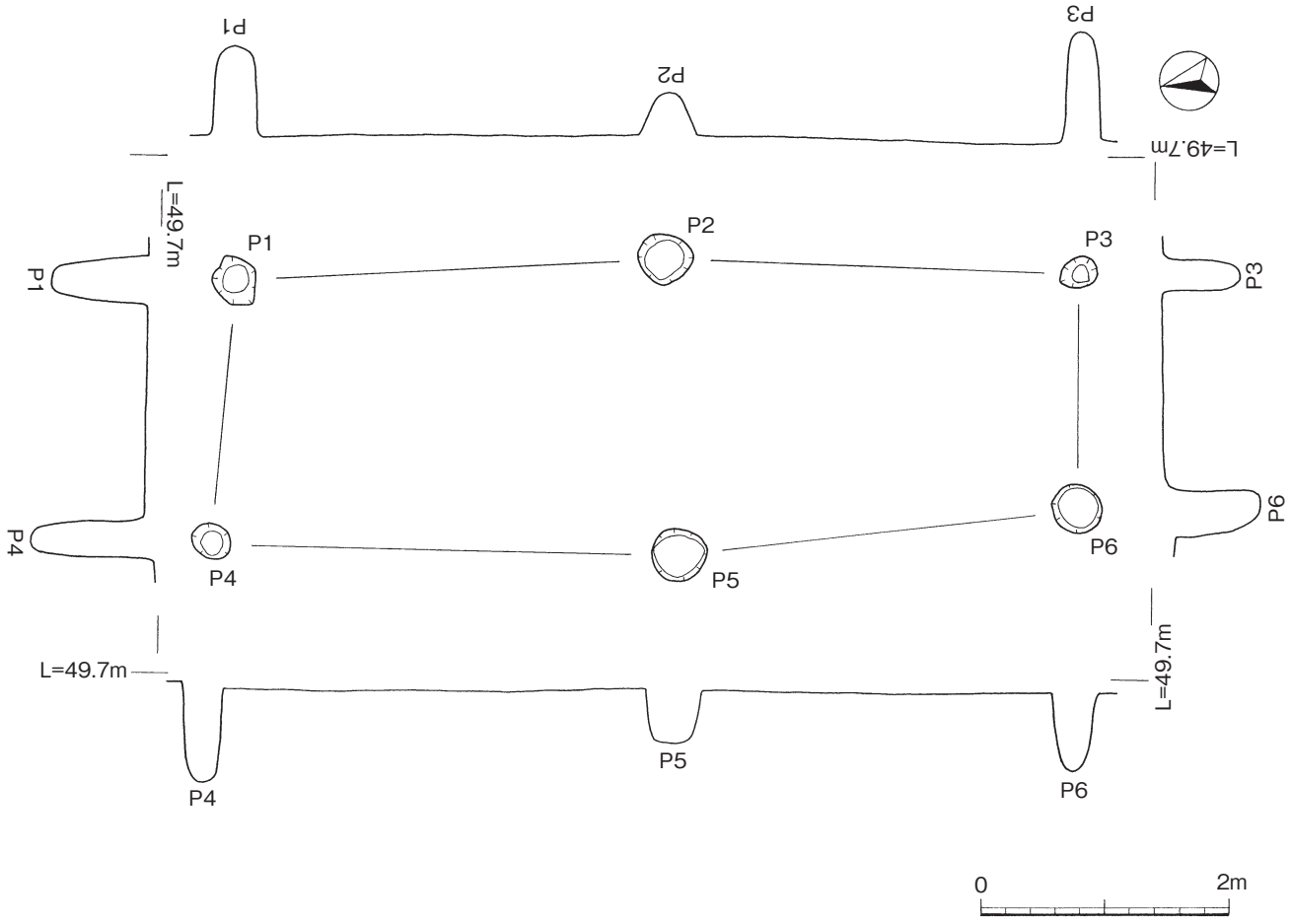
溝状遺構２は，Ｂ・Ｃ－４・５区のⅡ層上面で検出された。南北に走り，途中から東側にほぼ90度曲がる溝である。溝の端は，土坑２に切られている。規模は，最も狭い部分が１ｍ，最も広い部分が1.5ｍで，検出した長さは15ｍである。深さは10～30㎝であるが，底面の高低差はほとんどない。

溝状遺構２出土遺物（第29図）

19は，底部糸切りの土師器の坏である。内外面の一部に煤の付着が見られる。20は，龍泉窯系の青磁椀である。口縁部がやや外反しており，釉は厚い。21は，青磁の稜花皿で，腰折れタイプである。全体に貫入が入り，高台内面は蛇ノ目釉剥ぎしている。22は，漳州窯系の青花である。見込みに法螺貝の文様が描かれており，蓮子碗を模して作られた可能性がある。畳付は釉が剥いであり，高台内面は無釉で中央部が盛り上がる渦兜巾状を呈している。高台内面には，墨書が看取できる。23は，瓦質の壺で，花文が型押しされている。24の鉢は，断面三角形の低い高台をもつ。外面には鉄釉が施釉されているが，底部周辺は露胎である。25は碗形滓である。

（３）溝状遺構３（第30図）

溝状遺構３は，Ｃ－３・４区で検出された。南北に走る短く浅い溝である。規模は，最も狭い部分で0.4ｍ，最も広い部分で0.8ｍであり，長さは12.5ｍである。深さは30～50㎝で，南側に向かってやや低く傾斜している。



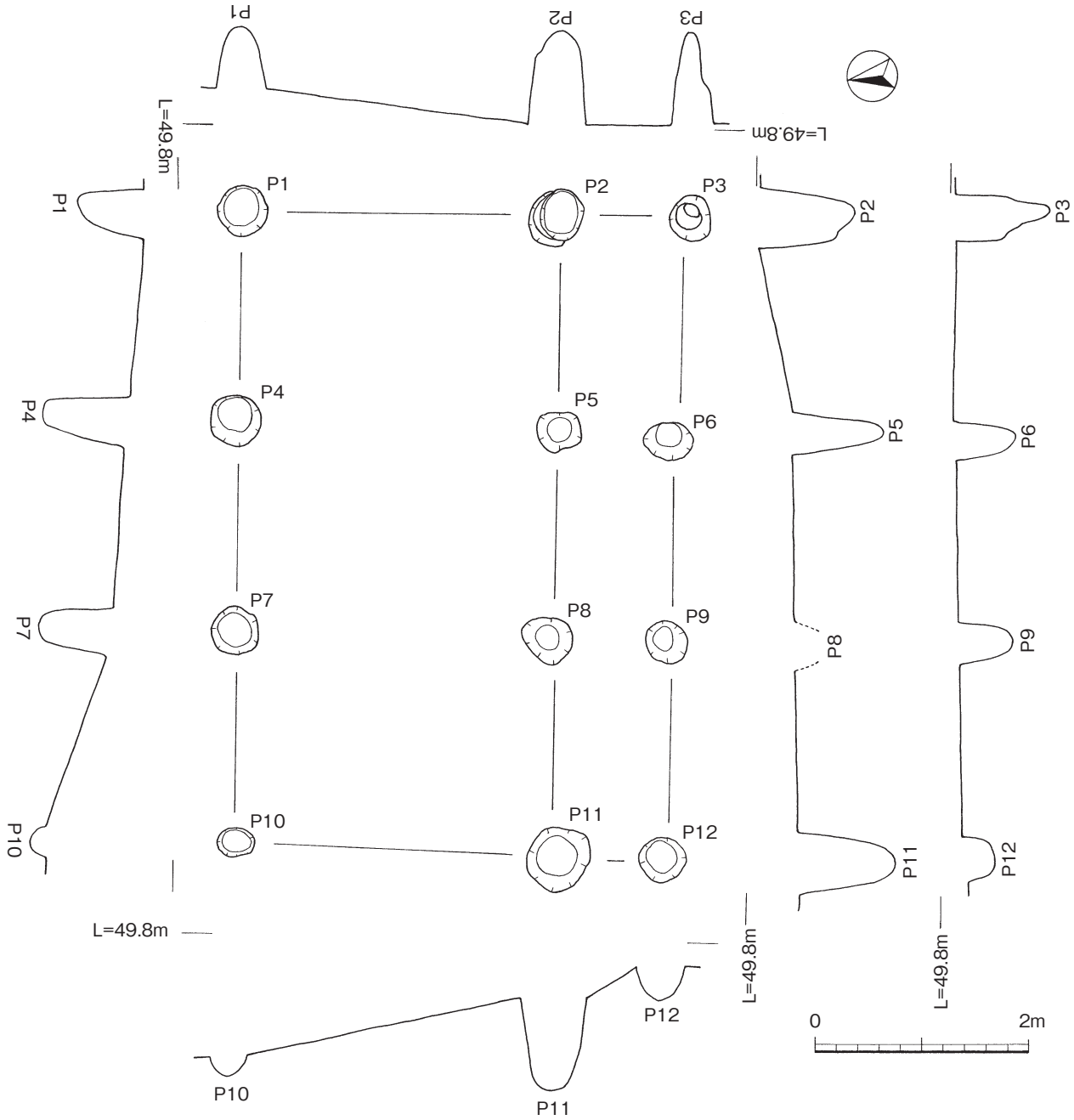
第23図　掘立柱建物跡３号

（4）溝状遺構４（第30図）

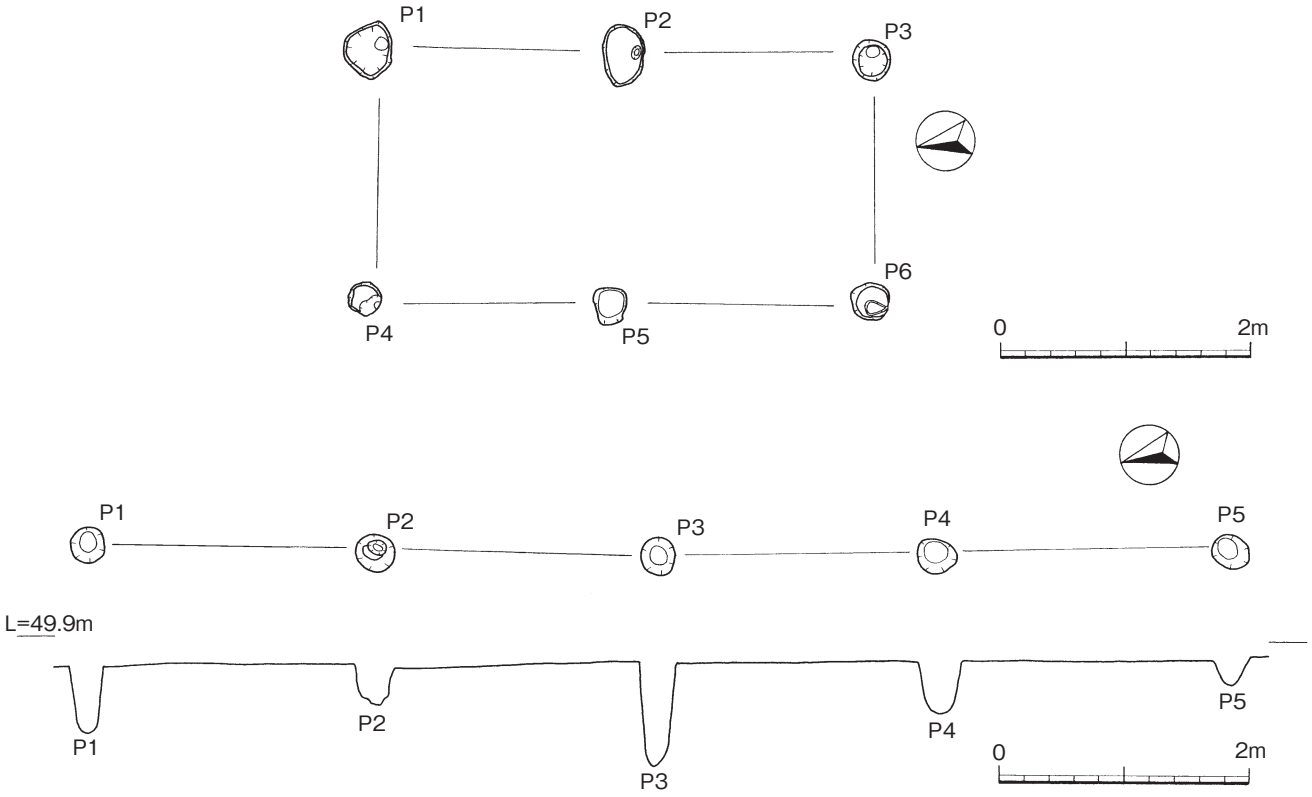
溝状遺構４は，Ｄ－２～４区で検出された。溝状遺構５の南側に位置し，溝状遺構５と平行するように南北方向に延びている。規模は，最も狭い幅で１ｍ，最も広い幅で2.5ｍであり，長さは14.5ｍである。深さは10～20㎝と非常に浅い。北端から南端にかけて傾斜しているが，最も深いのは中心付近である。

（5）溝状遺構５（第30図）

溝状遺構５は，Ｄ－３・４区で検出された。中ほどで中世墓を切っており，中世墓よりも時期は新しいものと考えられる。規模は，最も狭い幅で0.3ｍ，最も広い幅で1.5ｍ，長さは10.5ｍの南北に延びる溝である。深さは20～40㎝で，南側に向かってゆるやかに低く傾斜している。



第25図　掘立柱建物跡５号



第26図　掘立柱建物跡６号・柵状遺構

（６）溝状遺構６（第31図）

溝状遺構６は，溝状遺構２の西側に位置する短い溝である。規模は，最も狭い部分で0.6m，最も広い部分で0.9m，長さは2.5mである。

溝状遺構６出土遺物（第31図）

26は，見込みに印花文がある龍泉窯系の青磁椀である。貫入は内外面共に多く，全面に施釉後高台内面を釉剥ぎされる。高台は断面四角形で高い。体部には幅広の蓮弁があり，回転ヘラ削り痕が見える。14世紀後半～15世紀に相当すると思われる。

（７）溝状遺構７（第32図）

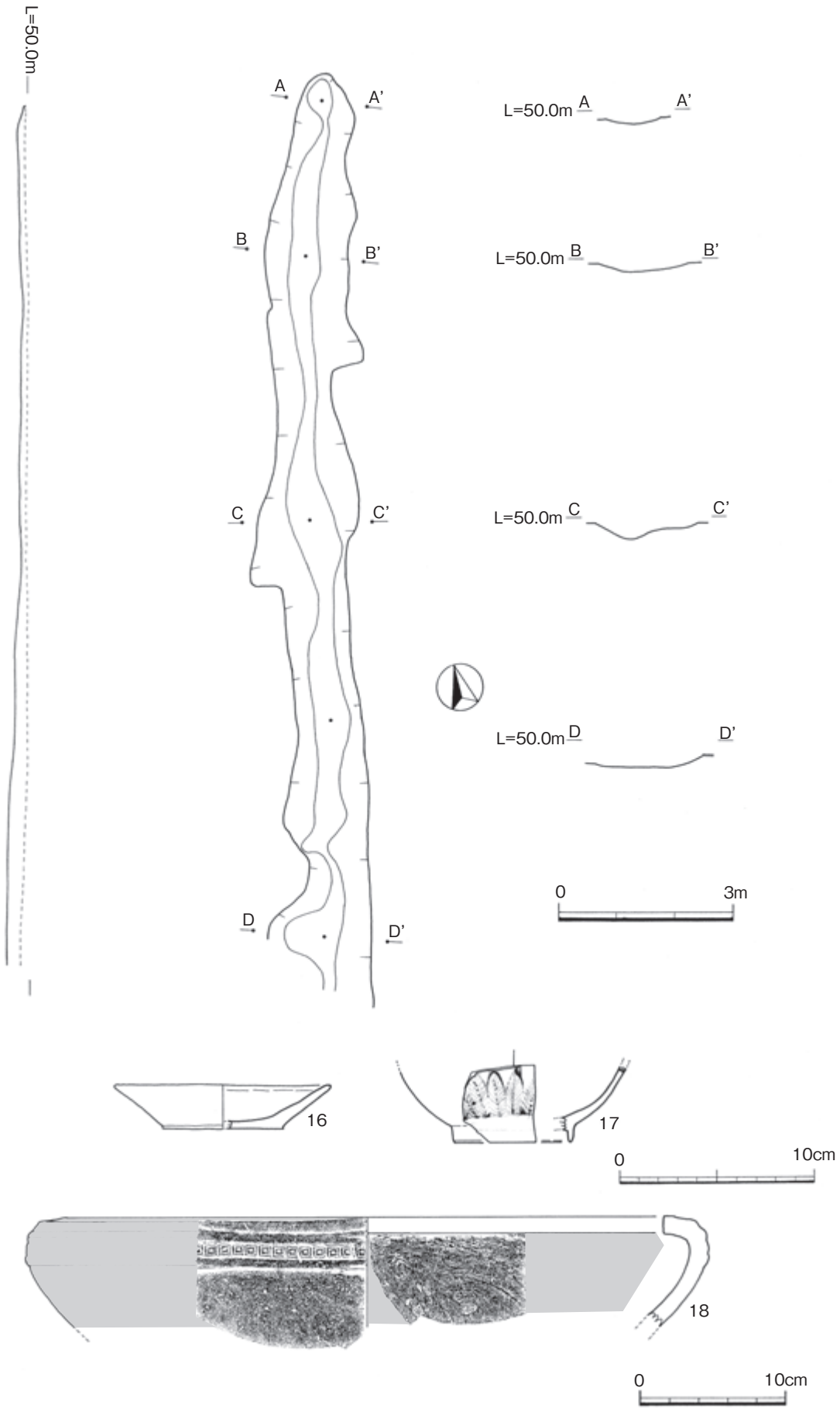
溝状遺構７は，Ｃ・Ｄ－５・６区で検出された。東西に走り，途中で北の方向に向きを変える。西側にさらに延びていたと思われるが，近現代の墓地で削平されている。掘立柱建物跡１号に切られている。規模は，最も狭い部分で１ｍ，最も広い部分で４ｍであり，検出した長さは13mである。

溝状遺構７出土遺物（第32図）

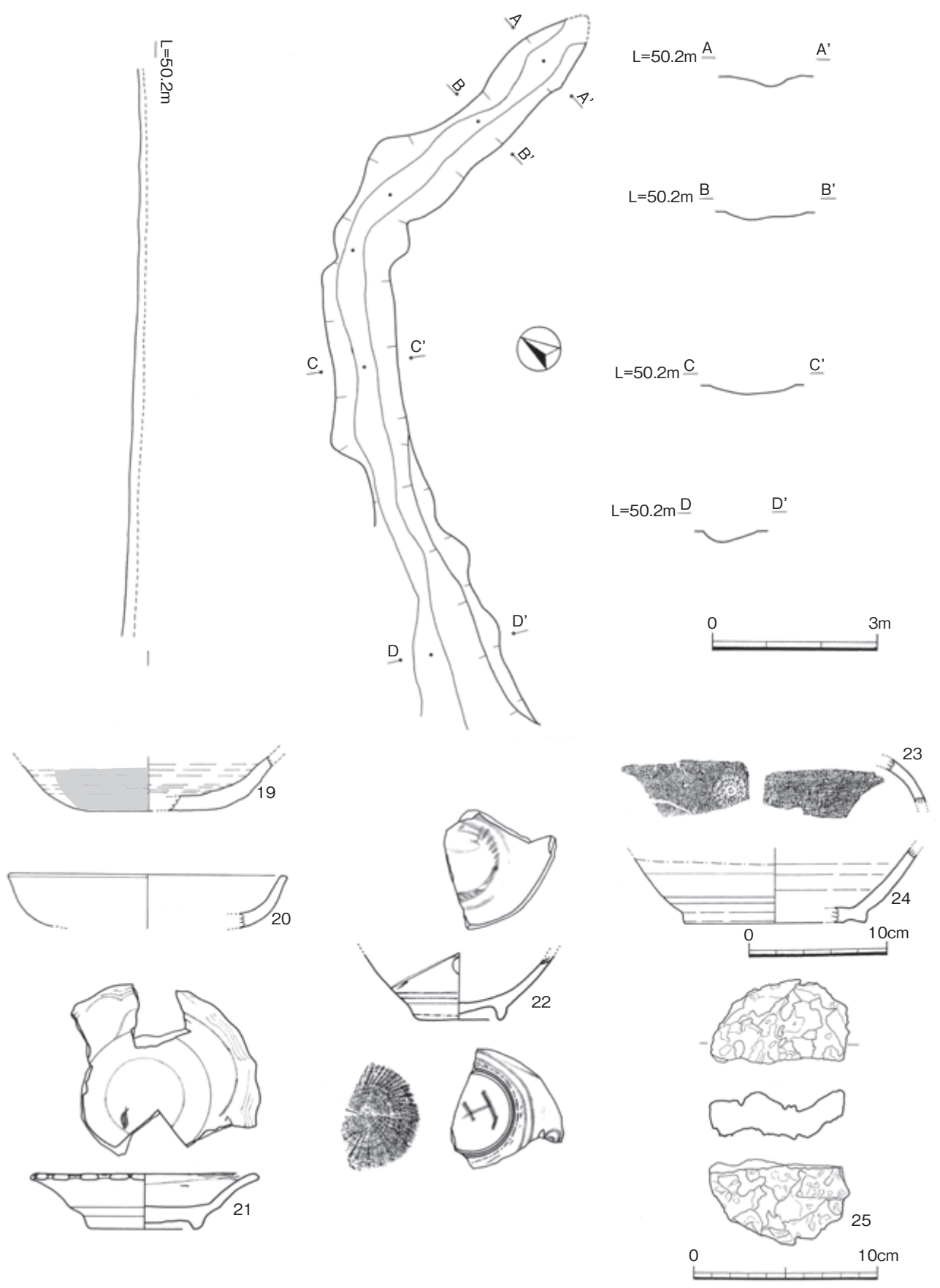
27は小壺である。口縁部は「く」の字に屈曲する形状で，口縁内部は釉を剥いで蓋受け部をつくる。28は，擂り目の条数６条の擂鉢である。見込みの擂り目は中心より放射状に施される。底部，体部ともに器壁は薄い。27・28とも17世紀代の薩摩焼で，苗代川系のものであると思われる。

（８）溝状遺構８（第33図）

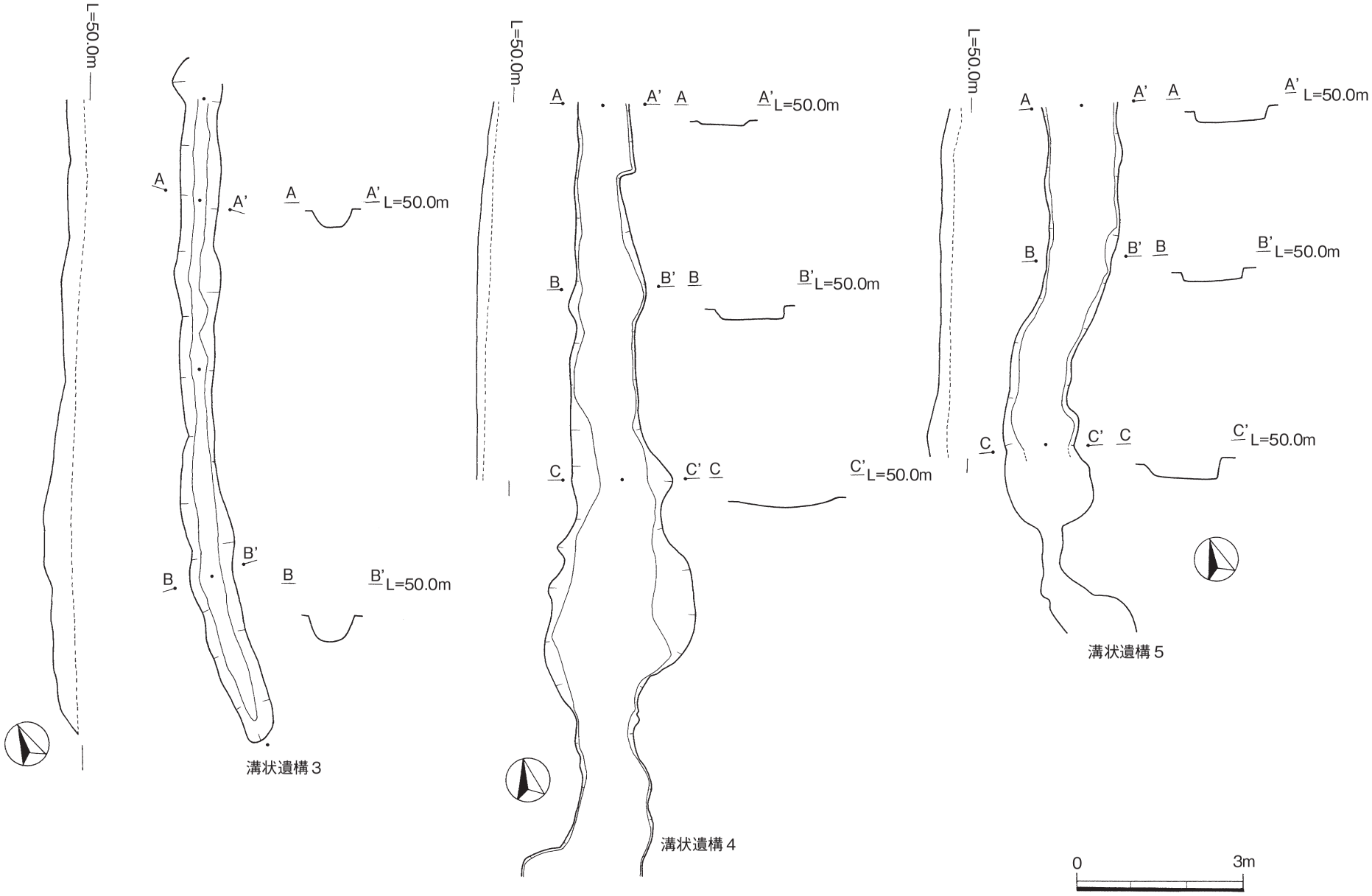
溝状遺構８は，Ｂ－６～９区で検出された。南北に延びる溝である。検出した規模は，幅１～1.5m，



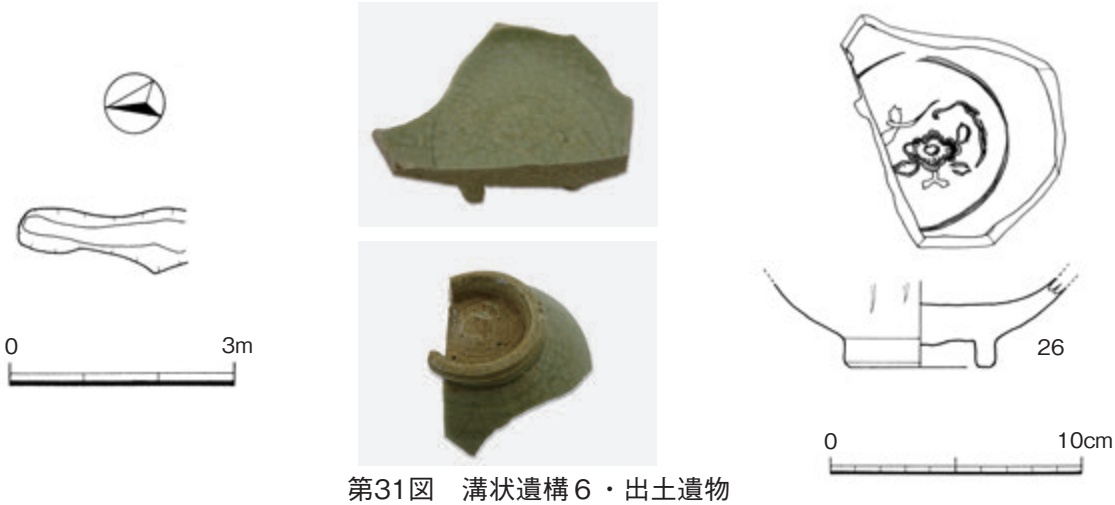
第28図　溝状遺構１・出土遺物



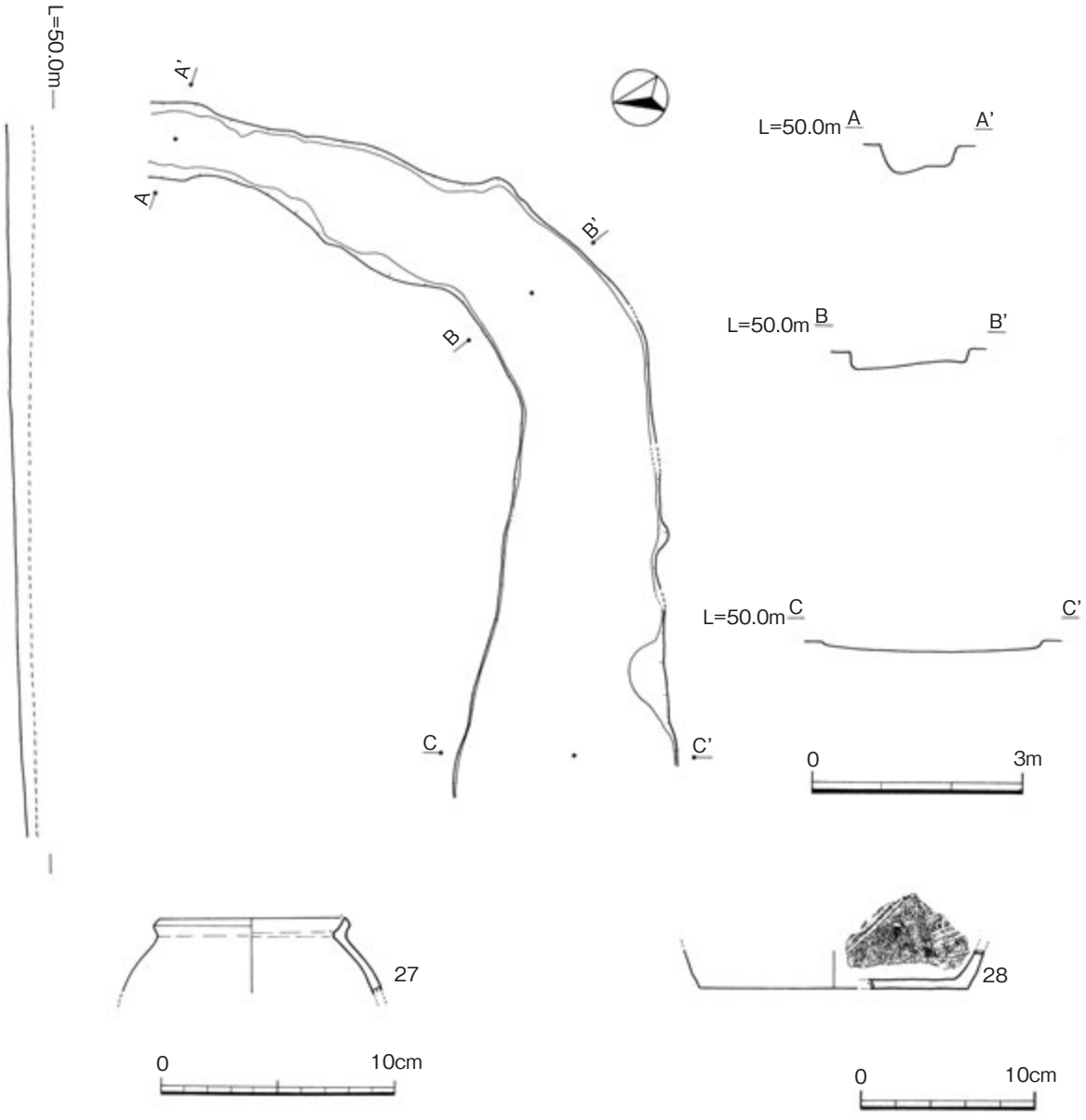
第29図　溝状遺構２・出土遺物



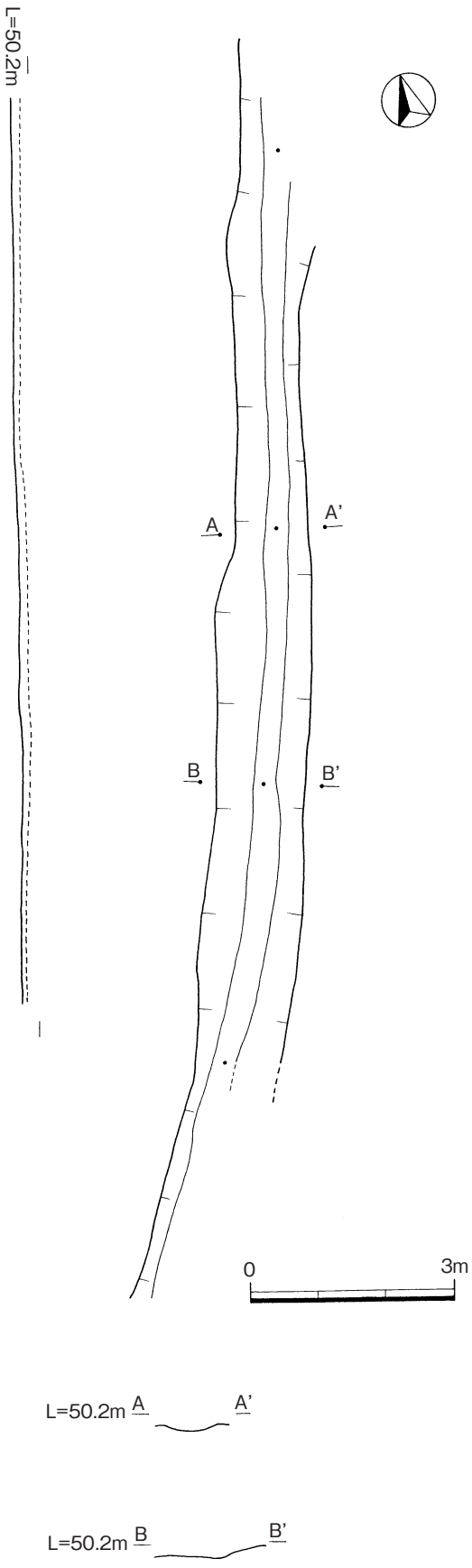
第30図　溝状遺構３・４・５



第31図　溝状遺構６・出土遺物



第32図　溝状遺構７・出土遺物



第33図　溝状遺構８

長さ19m，深さは10～20㎝であり，北側に向かってやや傾斜している。方形竪穴建物跡２号に切られている。溝内，溝周辺にピットが多数検出されている。

（９）溝状遺構９（第34図）

溝状遺構９は，Ｅ－７～９区にかけて検出された溝である。規模は，最も狭い部分で0.5m，最も広い部分で３ｍであり，長さは16ｍである。最深部は1.5mで，北東から南西に向かって深くなっている。埋土状況から，水が流れたような痕跡が確認でき，排水路あるいは畑のため池として利用されていた可能性も考えられる。

溝状遺構９出土遺物（第34図）

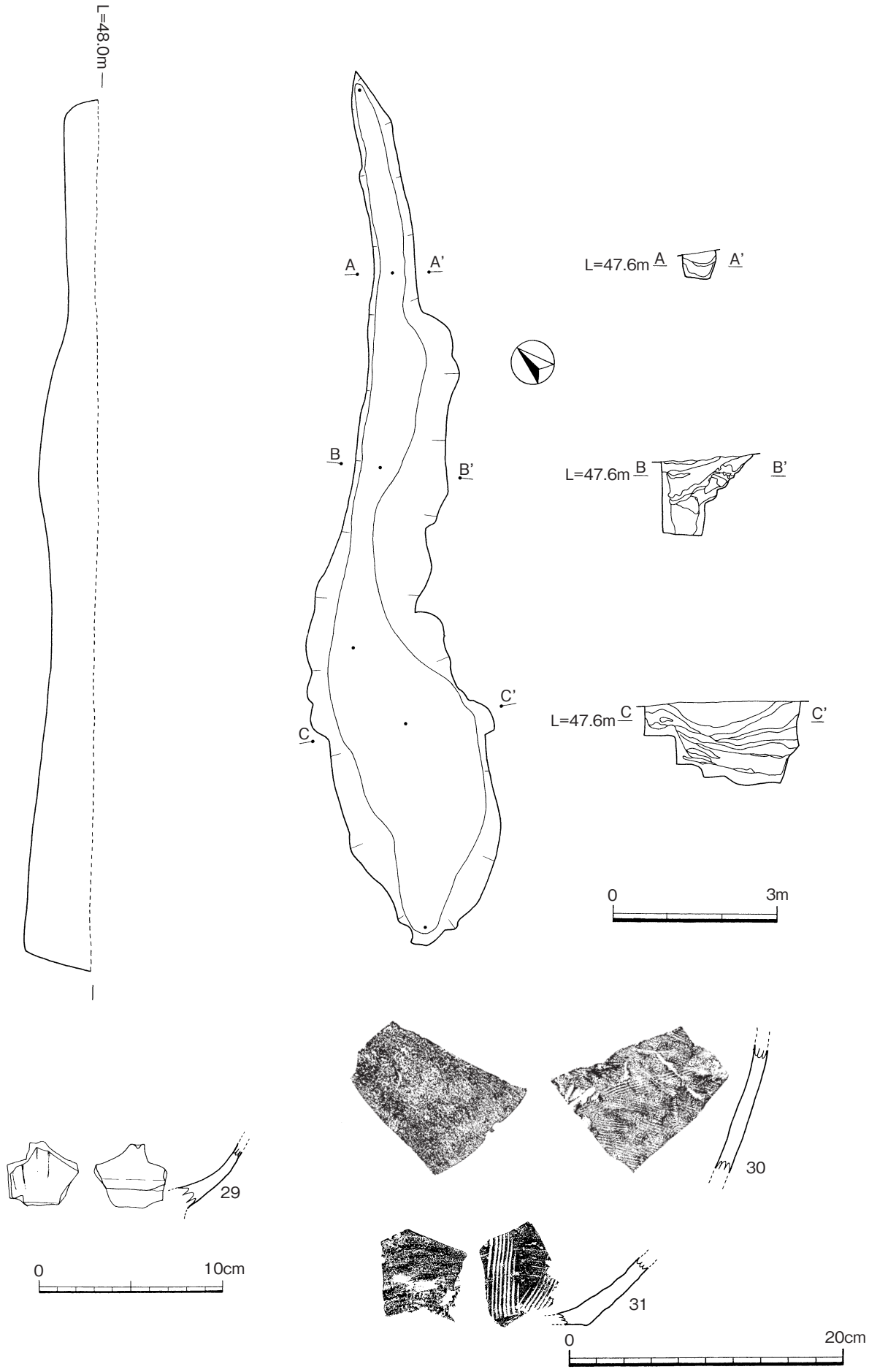
29は，蓮弁文が施された青磁椀である。底部の厚みに比べて体部の厚みが薄く，表面の文様はヘラ書きによる幅の狭い細線蓮弁文である。15世紀後半～16世紀代の製品であると思われる。30は瓦質土器である。内外面とも黒色で，内面にはハケ目調整が見られる。31は，擂り目の条数７条の備前焼の擂鉢である。

（10）溝状遺構10（第35図）

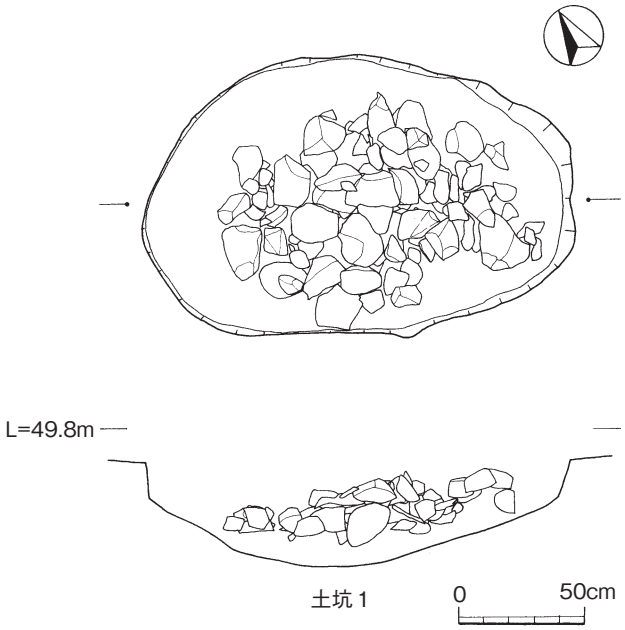
溝状遺構10は，Ｂ～Ｆ－15～17区のシラス上面で検出された，東西に延びる溝である。さらに東西に広がると思われるが，調査区外のため未確認である。掘立柱建物跡６号に切られている。最も狭い部分で１ｍ，最も広い部分で5.5ｍの幅である。また，深さは0.6→1.1ｍと東に向かって深くなっているが，溝底部の標高差は49.55ｍ→49.54ｍでほぼ平坦なので，埋土状況と併せて考えると，これは西側上面の大幅な削平によるものと思われる。また東側の調査区境は落ち込むように深くなっているが，地形による落ち込みと思われる。断面形は箱薬研（はこやげん）で，埋土の下面にはシラスを含む土が多いが，半ばには黒褐色の硬化面が見られ，何時期かにわたって使用されていたものと思われる。

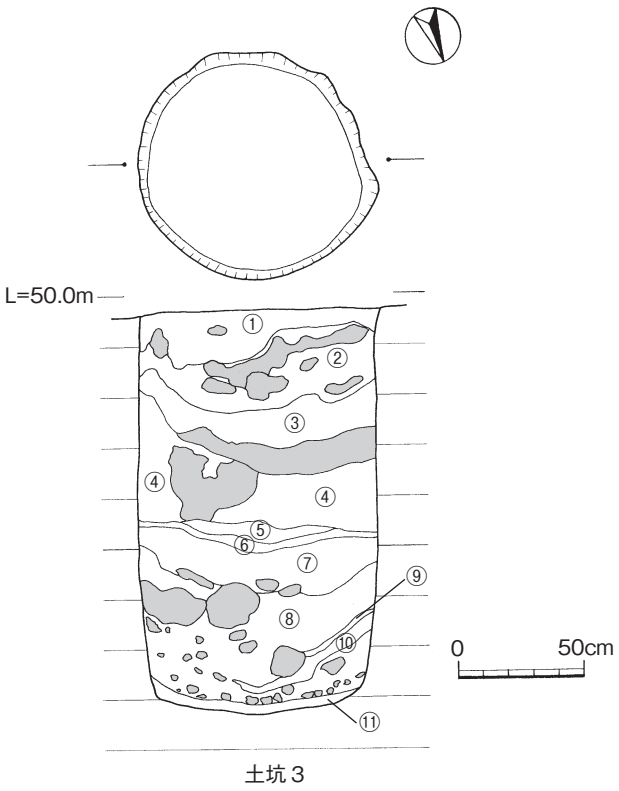
溝状遺構10出土遺物（第35図）

32は底部糸切りの土師器の坏である。33の陶器は，外面には薄く自然釉がかかり，平行叩きと一部同心円叩きが見られ，内面はシャープな同心円叩きである。胎土には石英が多く含まれる。中国の製品であると思われる。



第34図　溝状遺構９・出土遺物

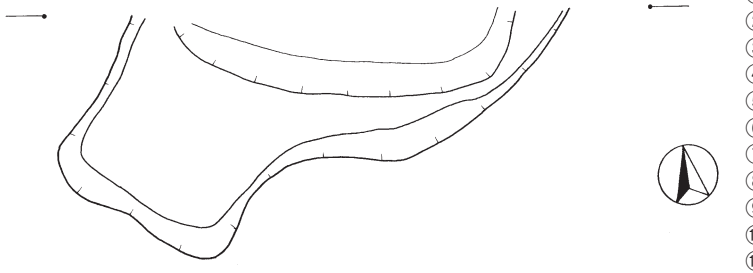


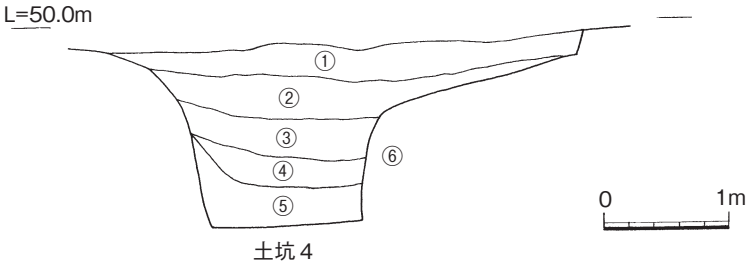


土坑３埋土

①黒色粘質土	中世包含層（Ⅱ層）+シラス
②黒色砂質土	しまりがない。
③茶褐色粘質土	チョコ層に AT が混入
④灰黒褐色粘質土	黒みが薄い。AT 混入
⑤茶褐色粘質土	チョコ層を多く含む
⑥白色砂質土	白色シラス
⑦黒色砂質土	Ⅱ層に類似。粒が粗くしまりがない。
⑧茶白色砂質土	
⑨白黄色砂質土	白・黄・ピンクシラス
⑩灰黒褐色粘質土	Ⅳ層に類似。粘質がさらに強い。
⑪淡灰黒褐色粘質土	

※網掛け部分は AT ブロック

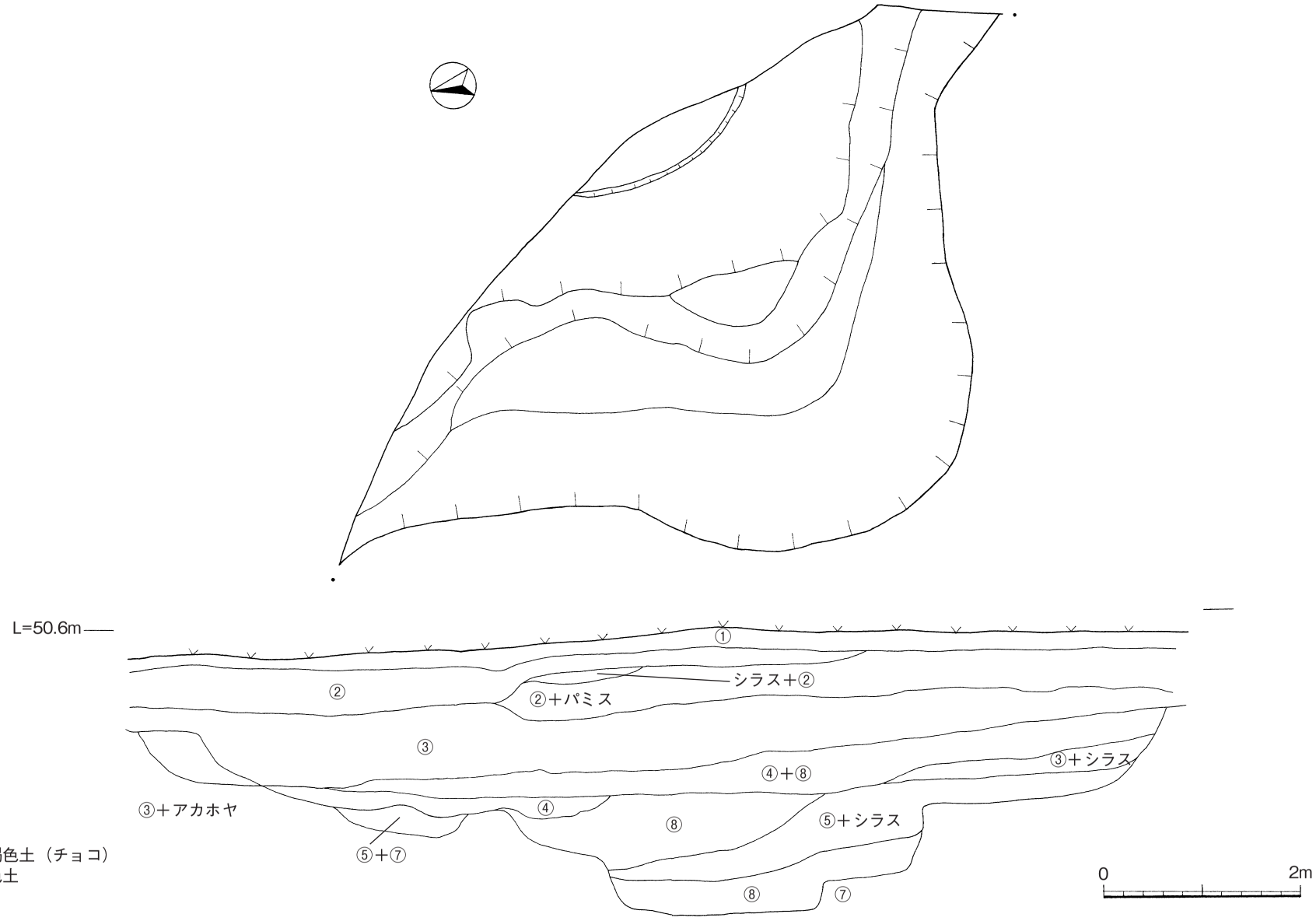




土坑４埋土

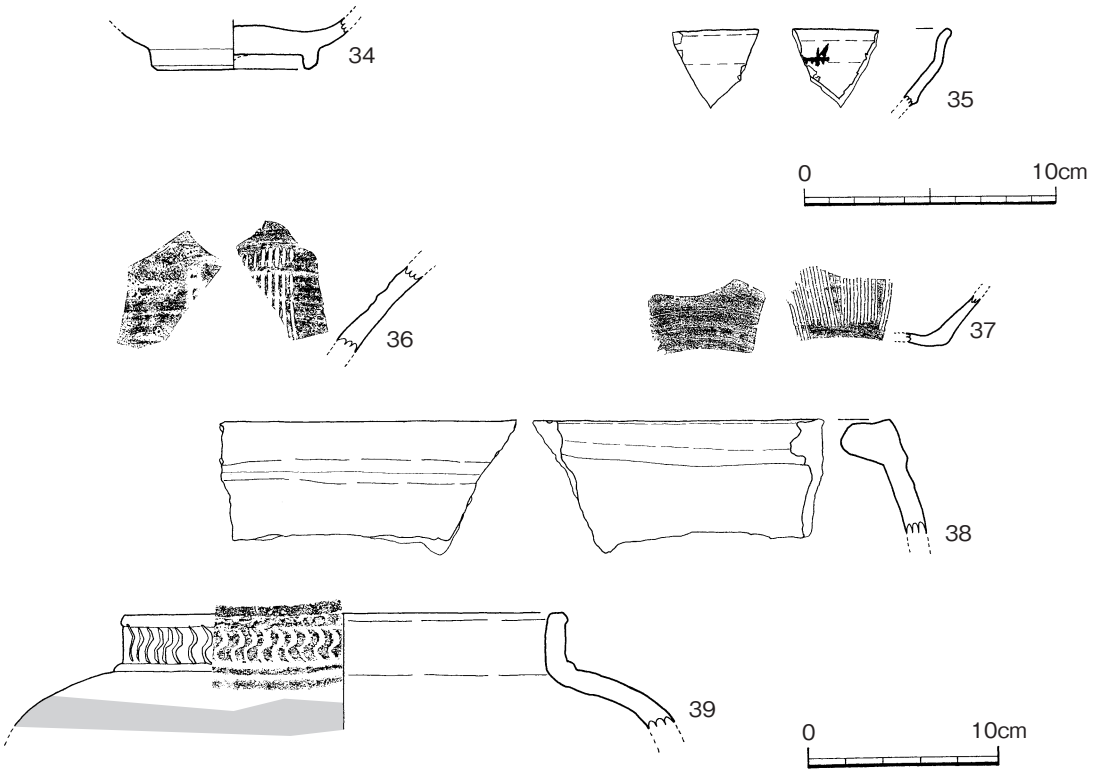
①明褐色土	シラスを含む表土
②ピンクシラス+褐色土	炭化物を含む
③ピンクシラス+褐色土	ピンクシラスを多く含む
④褐色粘質土	炭化物を含む。やや粘質弱い
⑤暗褐色粘質土	シラス粒を含む
⑥暗褐色粘質土	縄文早期の層。粘性が強い

第36図　土坑１・３・４



土坑２埋土
①暗褐色土
②明褐色土
③褐色土
④粘性の強い黒褐色土（チョコ）
⑤粘性の強い褐色土
⑥アカホヤ
⑦ピンクシラス
⑧黄色シラス

第37図　土坑２



第38図　土坑２出土遺物

道跡

台地部では道跡が２条検出されたが，時期はいずれも明確ではない。

（１）道跡１

道跡１は，Ｄ－７・８区Ⅱ層上面で検出された。南北に延びる，長さ18.5mの道跡である。規模は，最も狭い部分で0.5m，最も広い部分で1.4mである。等高線とほぼ平行に走っており，高低差はほとんどない。掘立柱建物跡４号に切られている。

（２）道跡２

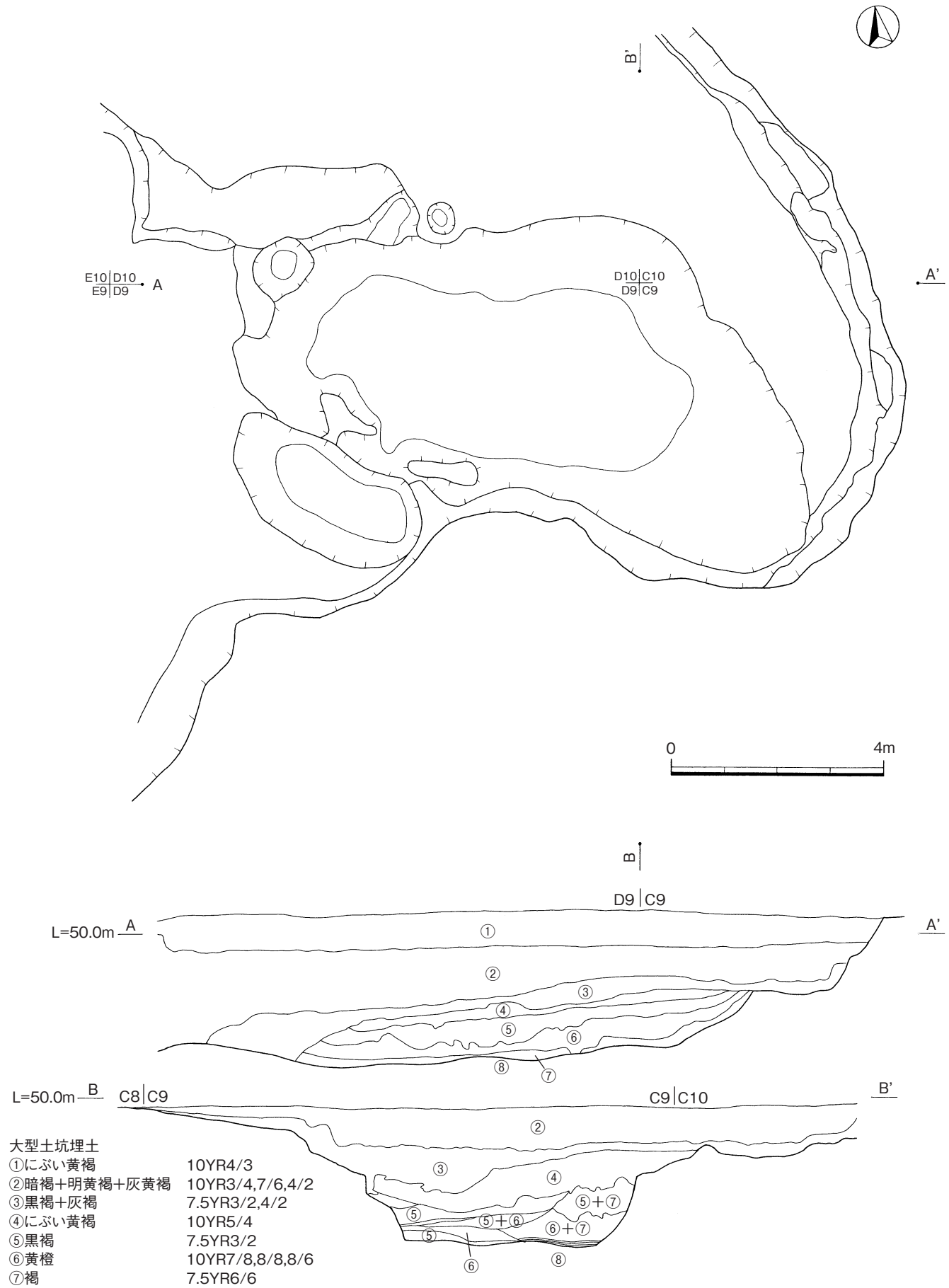
道跡２は，Ｄ－15～17区のⅡ層上面で検出された。規模は，最も狭い部分で0.2m，最も広い部分で１mである。長さは20mで，南から北方向に向かって高くなっている。溝状遺構11を切っている。また，掘立柱建物跡６号とも切り合っているが，柱穴と重なる部分がないため新旧関係は不明である。

土坑

台地部では，大型土坑を含め土坑が５基検出された。

土坑１（第36図）

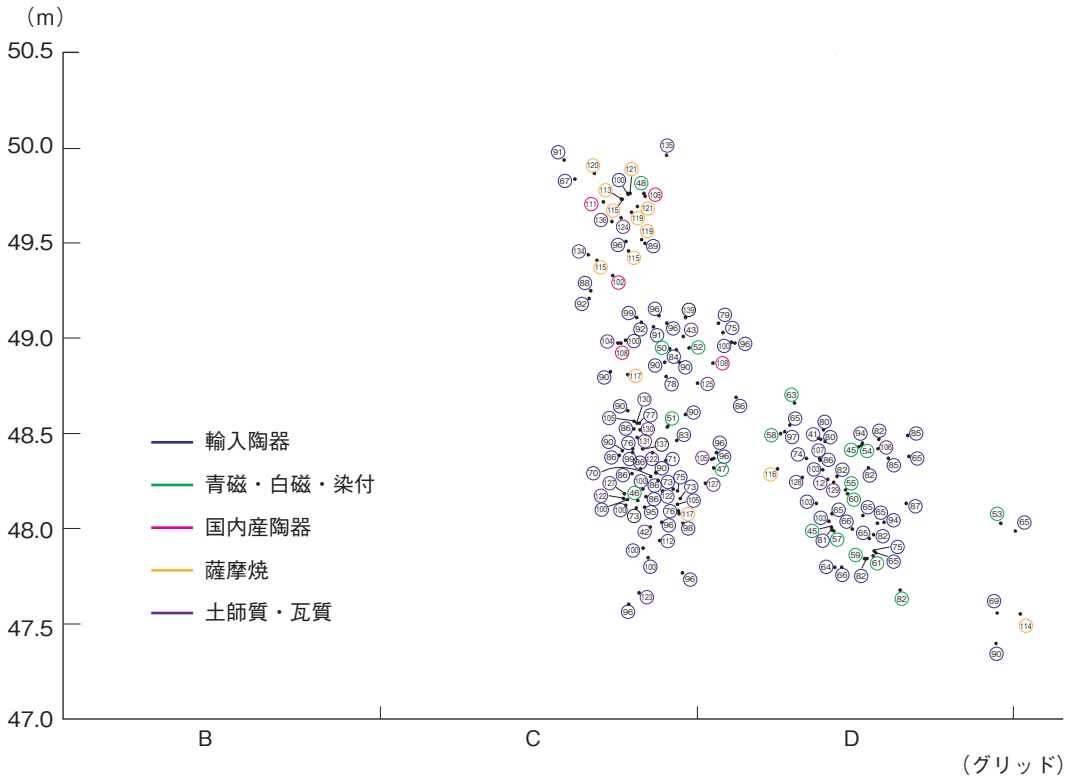
Ｃ－４区で検出された。長径×短径×深さ＝1.7×1.1×0.4mの楕円形の土坑の中から，礫が88点出土している。これらの礫の中には，陶器片も混入していた。



大型土坑埋土

①にぶい黄褐	10YR4/3
②暗褐＋明黄褐＋灰黄褐	10YR3/4,7/6,4/2
③黒褐＋灰褐	7.5YR3/2,4/2
④にぶい黄褐	10YR5/4
⑤黒褐	7.5YR3/2
⑥黄橙	10YR7/8,8/8,8/6
⑦褐	7.5YR6/6
⑧灰褐＋明灰褐	7.5YR6/2,7/2

第39図　大型土坑　平・断面図



第40図　大型土坑出土遺物ドット図

土坑２（第37図）

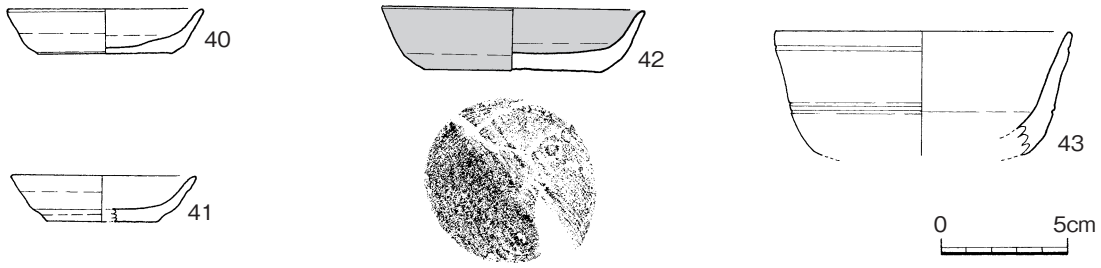
A・B－５・６区で検出された。溝状遺構２を切っている。検出した規模は，長径×短径×深さ＝8.9×4.7×3.0mである。遺構の範囲はさらに東方向に広がると考えられるが，調査範囲外のため未確認である。埋土には，全体的にシラスが混じり，一部チョコ層も見られる。

土坑２出土遺物（第38図）

34は龍泉窯系の青磁椀である。高台内面には一部釉が掛かっておらず，胎土目の一部が溶着している。35は天目碗である。口縁部は，一度内側にややすぼまったのちに外反する形状で，黒褐色の釉薬が施されている。口唇部は透明釉が施釉されており，胎土は灰白である。また，内面に刻みが見られるが，小片のため文様かどうかははっきりしない。36は備前焼の擂鉢である。擂り目の条数は６条，内面に横筋があるため擂り目は途切れている。37は，擂り目６条の焼締め擂鉢である。器壁は薄く，体部と底部の厚みはほとんど変わらない。38は，口縁部が内側に入り，口唇部に平坦面をつくる瓦質の火鉢であるが，内面に煤などの跡は見られないため，他の用途で使用されていた可能性もある。39は頸部から口縁部がまっすぐ立ち上がり，肩が張る形状の火舎で，頸部外面にはスタンプ文様が施される。

土坑３（第36図）

B－５区，ＡＴ上面で検出された。長径×短径×深さ＝0.9×0.9×1.6mの円形の土坑である。



第41図　大型土坑出土遺物１

埋土は単独ではなく，様々な土が混在しており，全体的にしまりがない。雪隠（せっちん）の可能性も考えられる。

土坑４（第36図）

Ｃ・Ｄ－６区，Ⅳ層上面で検出された。検出した規模は長径 × 短径 × 深さ＝3.5×1.2×1.5ｍの不定形の土坑である。埋土上部は，シラス混じりの褐色土で，下層は木炭やシラスの粒が混じる粘性のある土である。

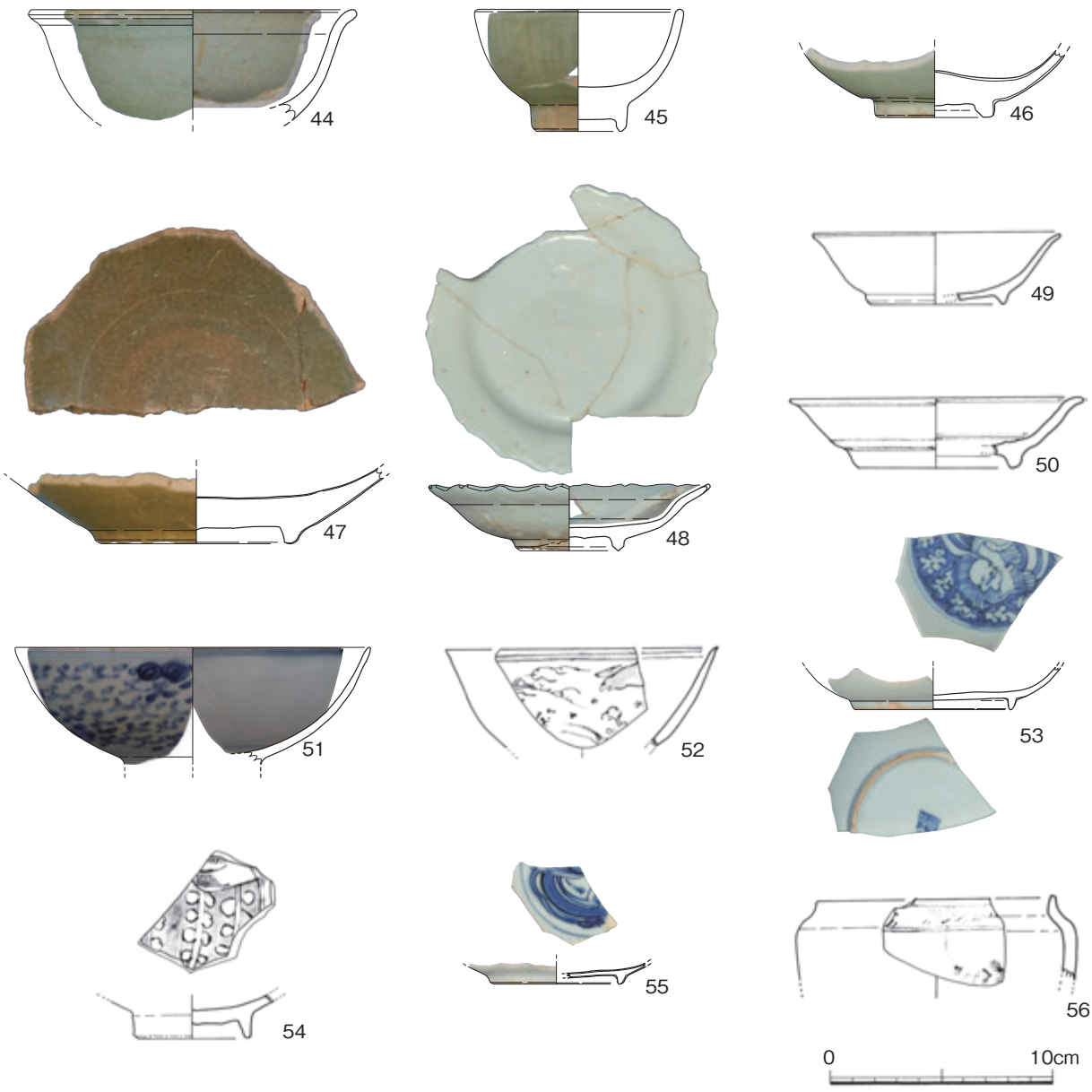
大型土坑（第39・40図）

大型土坑は，Ｃ－９・10区で検出されたが，遺構の範囲は調査区外まで広がっていたため，遺構の全容は確認できなかった。検出した範囲は，10.5ｍ ×7.5ｍの半円形であり，最深部で2.6ｍある。上面には，現代の生活用道路が２条，東西方向に走っていた。

大型土坑出土遺物（第41図～55図）

40・41は，底部糸切りの土師器の小皿である。42も底部糸切りの土師器であるが，内面と体部外面に煤が付着しているので，おそらく灯明皿として使用されたと思われる。14世紀初頭～15世紀前半に相当するものと思われる。43は，土師器の坏である。

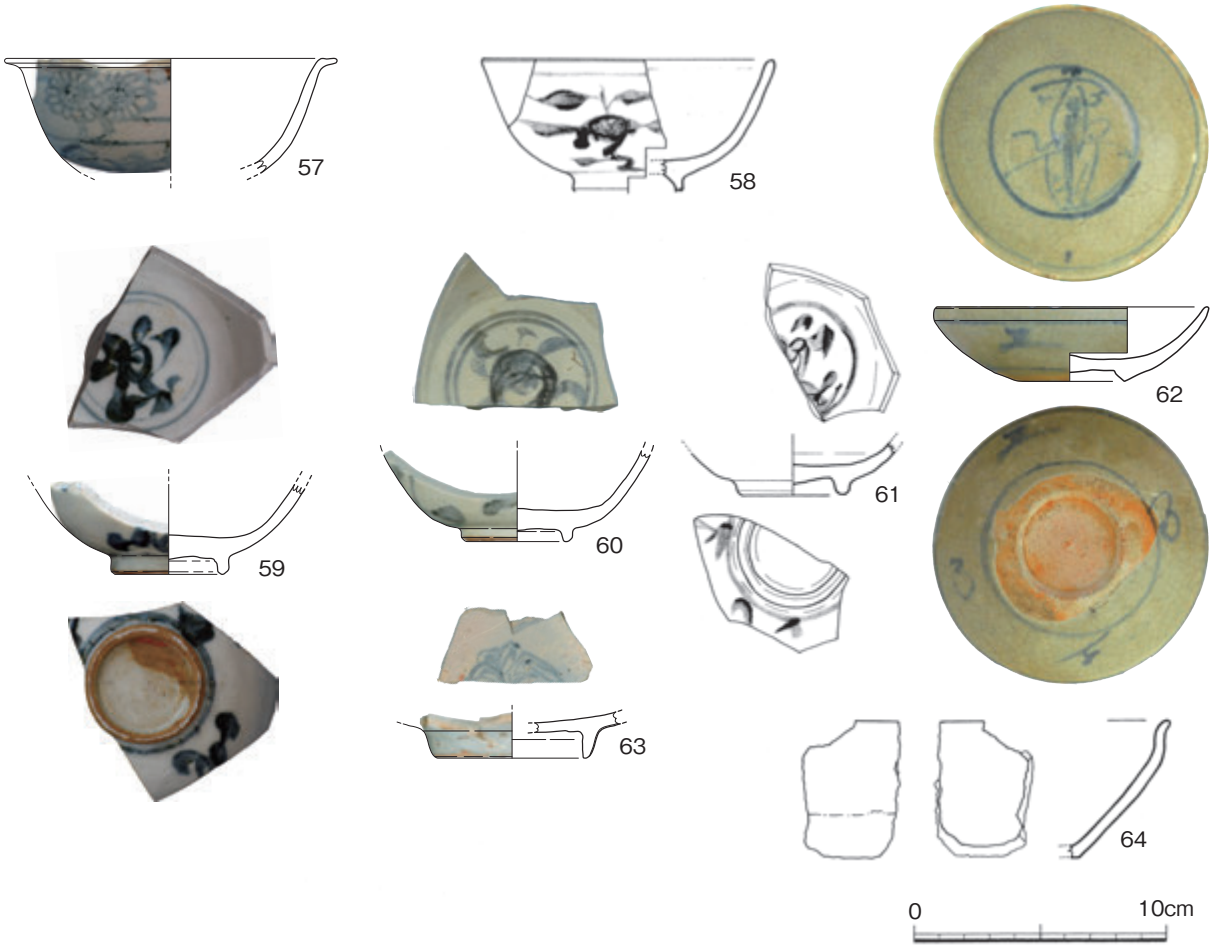
44～46は龍泉窯系の青磁の椀である。44は，無文で口縁部は外反し，口唇端部は丸みをもつ。14世紀半ば～後半に相当すると思われる。45はヘラ先による線描蓮弁文が施され，全面に施釉後，高台内面の釉を剥ぎ取っている。胎土は橙色と灰白色の部分があり，橙色の部分は底部付近に多く見られる。46は，全面施釉後畳付と高台内面の釉を剥ぎ取っているが，畳付と高台内面の一部に赤褐色の顔料のようなものを塗布している。47は龍泉窯系の青磁の皿である。見込み部分に印花文があり，体部内面には縦に３条ずつ放射線状に文様を描いている。高台内面は薄く釉剥ぎしている。48は白磁の稜花皿である。畳付と高台内面は釉を剥いでおり，高台はシャープに削り出されている。16世紀に相当すると思われる。49は白磁の端反り椀で，畳付部分は釉剥ぎされる。16世紀に相当すると思われる。50～56は青花である。50は全面施釉，端反り口縁の皿である。15世紀中頃～16世紀中頃に相当すると思われる。51は蓮子碗で，外面には界線と渦巻き，３つの円を結合したような文様が描かれている。15世紀後半～16世紀中頃に相当すると思われる。52は，体部外面に風景画を描いた碗である。53は，見込みに獅子が描かれ，高台内面には角福が記された皿である。畳付は釉を剥いであり，高台断面は丸い。16世紀後半に相当する。54の碗は，底部に砂粒が付着しており，畳



第42図　大型土坑出土遺物２

付は釉を剥いでいる。55は，見込み内部が窪む薄い皿である。畳付は釉剥ぎされ，砂粒が付着している。56は，口唇部と口縁内部を釉剥ぎしており，蓋がつくものと思われる。

57～61は漳州窯系の青花碗である。57の口縁部は強く外反し，やや平坦な面をつくる。体部には花の文様が描かれている。58は体部外面に，59～61は見込みに水草を描いた碗である。畳付の釉を剥ぎ取っているが，高台内面には釉が残る。59と60の高台内面には，一部に水銀朱が付着しており，何らかの印としてつけられたものではないかと思われる。62・63は，青花皿である。62は，外面に略化した字のような文様を，見込みには人形化した「喜」字を描く皿である。底部は碁笥底（ごけぞこ）で，底部周辺は露胎である。15世紀後半～16世紀中頃に相当すると思われる。63は畳付の釉を剥いでいる。

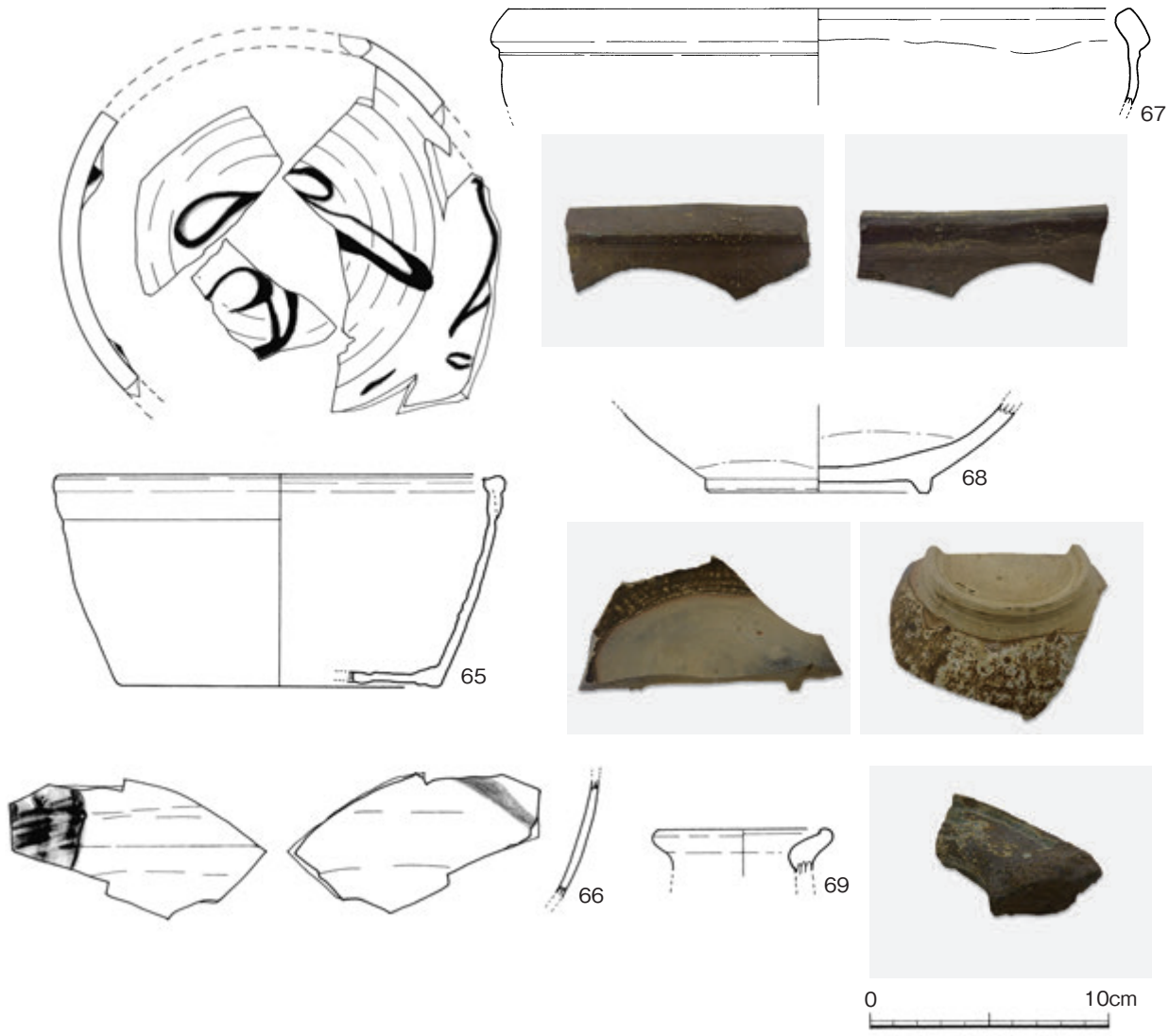


第43図　大型土坑出土遺物３

64は黒釉の天目碗である。

65～69は中国南部で生産されたと思われる陶器である。65は口縁部を折り返して肥厚させる形状の盤で，内外面共に釉薬で不規則な文様が描かれている。内面には一部，叩きの痕跡も認められる。66は65の胴部である。67は鉢である。口縁部は外側から内側に折り返してナデつけており，胎土は緻密で非常に硬く焼き締まっている。口唇部は薄く釉を剥いである。68は底部周辺と見込み無釉の高台付鉢である。高台は低く，断面は台形をしている。16世紀末～17世紀初頭に相当すると思われる。69の小壺の口縁部は，外反させた口縁部を内側に折り返している。

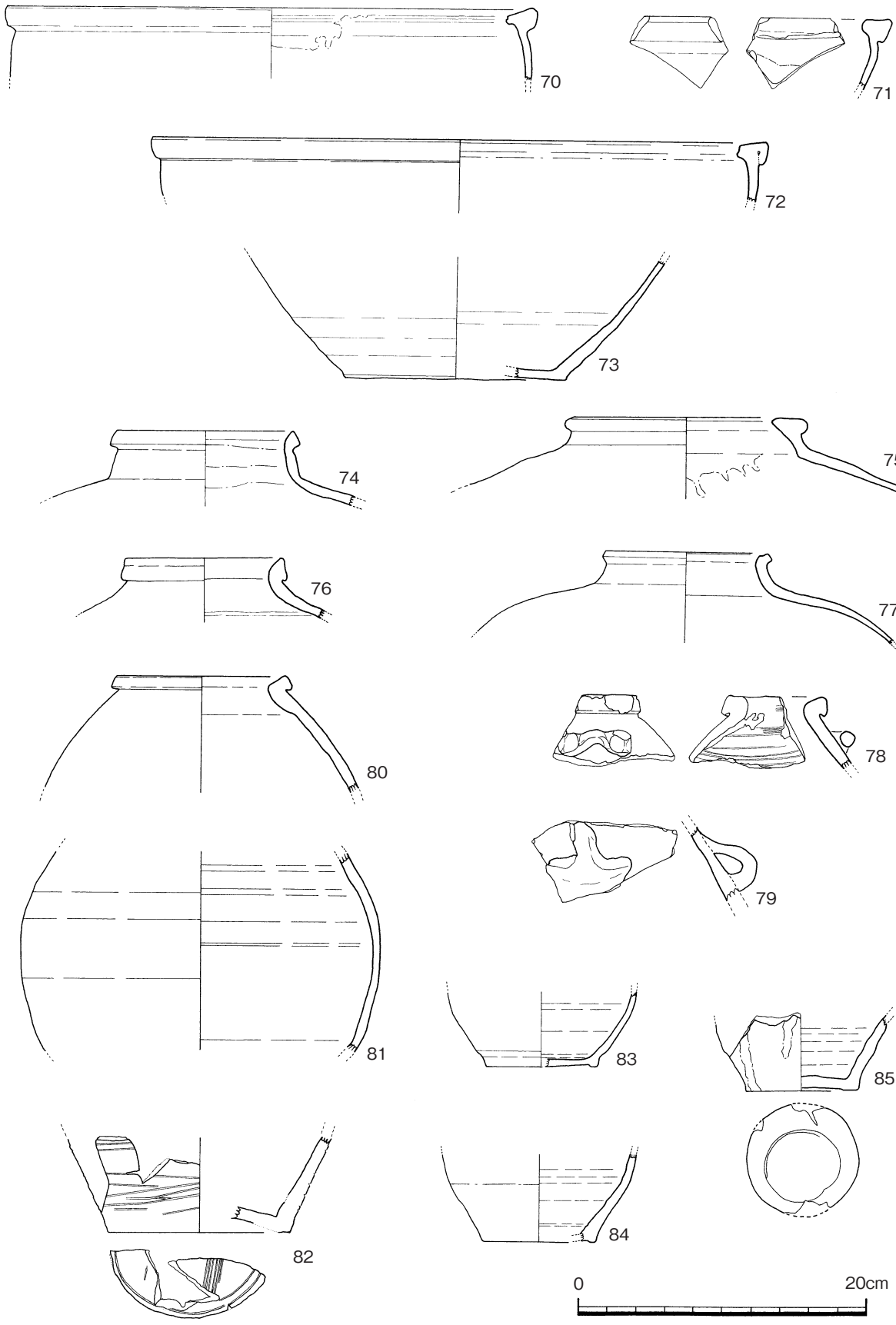
70の甕は，内面の口縁部よりも下に施釉されている。口唇部には一部釉が掛かり，重ね焼きした際の他の製品の粘土が付着している。71～73は鉢または盤である。71・72も，内面の口縁部よりも下に施釉されている。72は，口縁部を外側に折り曲げ，口唇部を平坦に仕上げるものである。口唇部は磨いているように滑らかである。74～85は壺である。75は，内面は肩の辺りまで釉が垂れているが，施釉後，口唇部の釉を剥ぎ取っており，口縁部は平坦に仕上げている。74は16世紀末～17世紀初頭の中国南部の壺である。頸部内面は釉を剥いでいる。77は，16世紀末～17世紀初頭のタイの壺である。内外面ともに施釉されているが，頚部内面は釉が薄い。80～82は同一個体である。80は



第44図　大型土坑出土遺物４

外面のみ施釉されている。内部は回転ヘラ削りの跡がはっきりと段になって残っており，体部・底部には釉薬が筋になって垂れている。底部外面には，ハケ目が残っている。82は，底部中心が盛り上がる形で，底部と体部にハケ目が残る。78の耳の部分は，紐などが通るほどの隙間が空いていないことから，この部分は実用的なものではなく，装飾としてつけられたものであると考えられる。79は75と同一個体である。83～85は壺の底部である。84は，底部周辺は露胎で胴部に施釉されている。85は，内面に一部薄く釉薬が掛かっている。底部には他製品との重ね焼きの痕跡が看取できる。

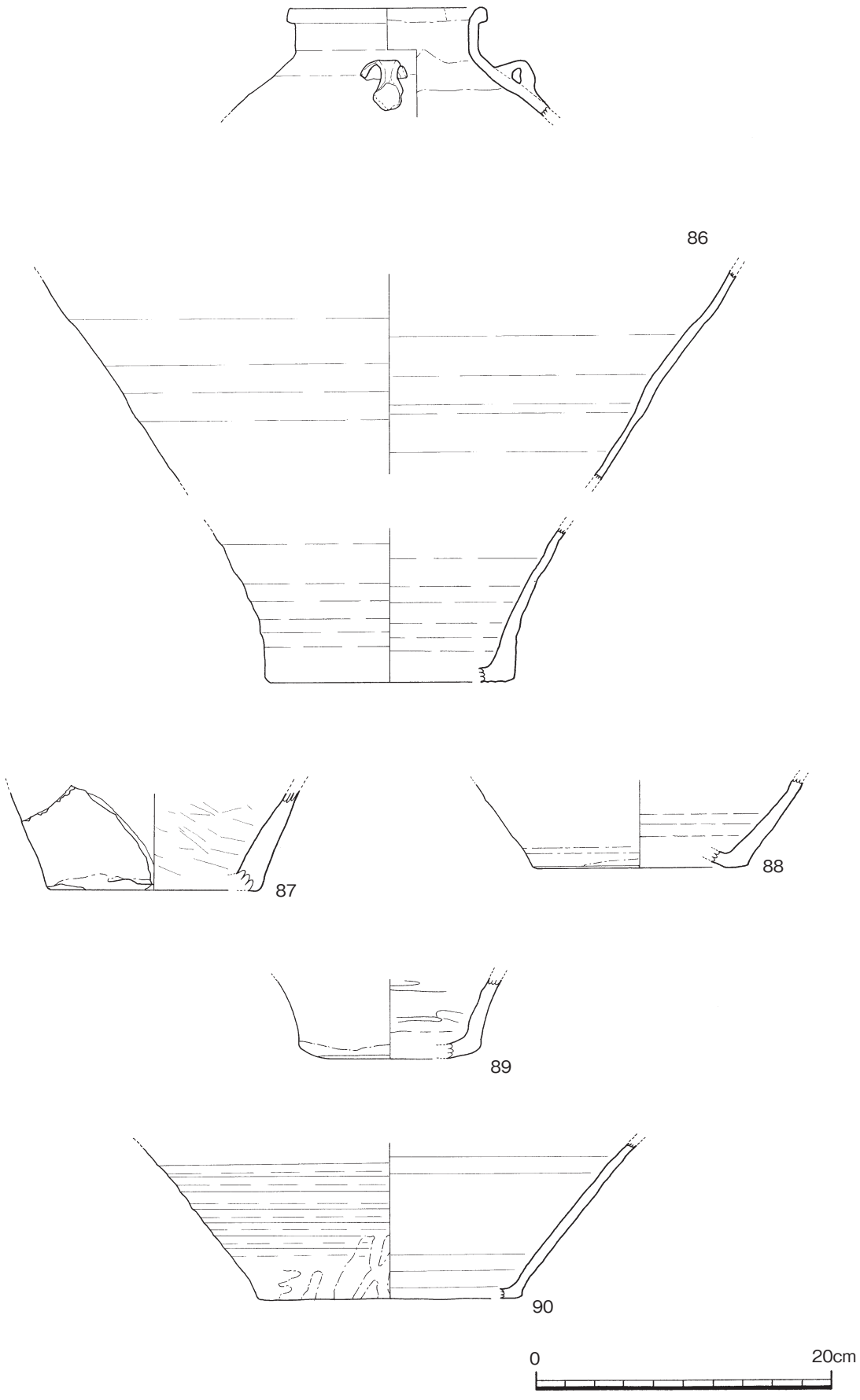
86は縦耳の付いた壺である。頸部がまっすぐ立ち上がり，口縁部は外反する。肩部内面のあたりまで釉が掛かっているが，頸部内面は釉を剥いでいる。外面の釉の上には細かい砂のようなものが付着しており，底部には粗い砂粒が付着している。87は，壺の底部である。外面は釉を２回にわけて掛けている。内面はヘラによる斜め方向の調整の跡が見られる。89の壺は，底部付近に径２～



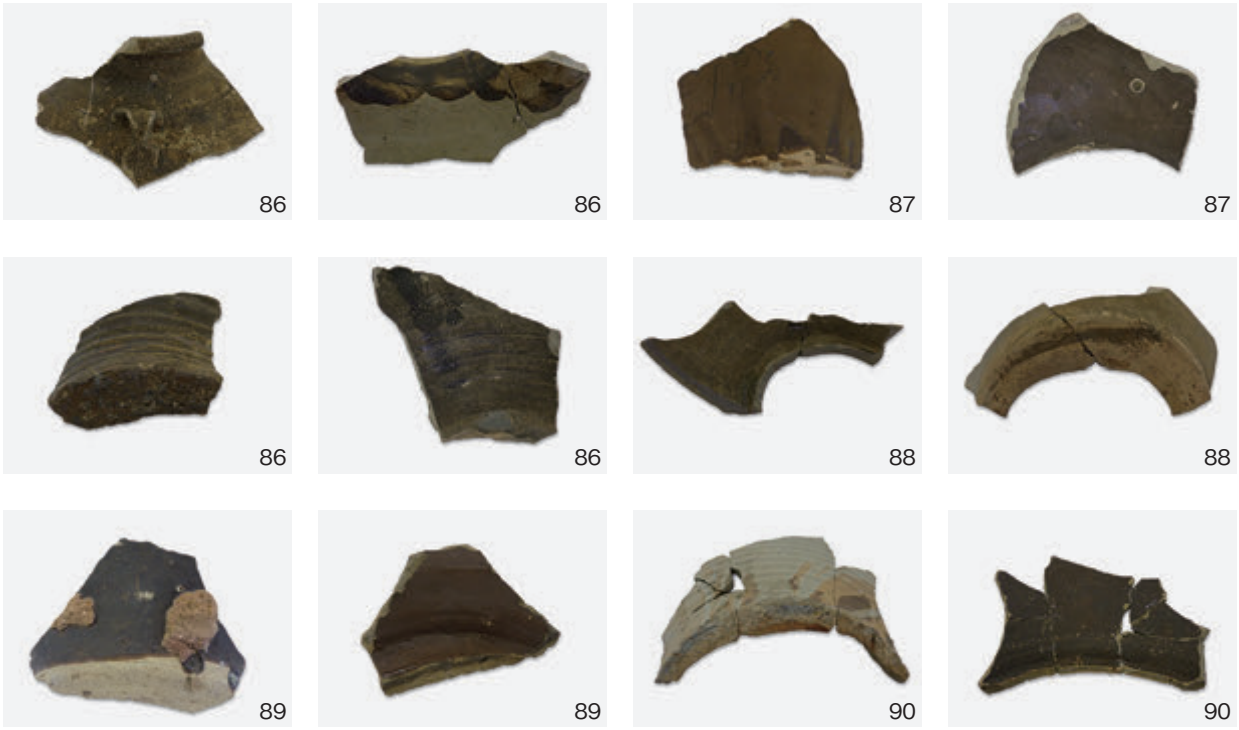
第45図　大型土坑出土遺物５



第46図　大型土坑出土遺物５－写真



第47図　大型土坑出土遺物６



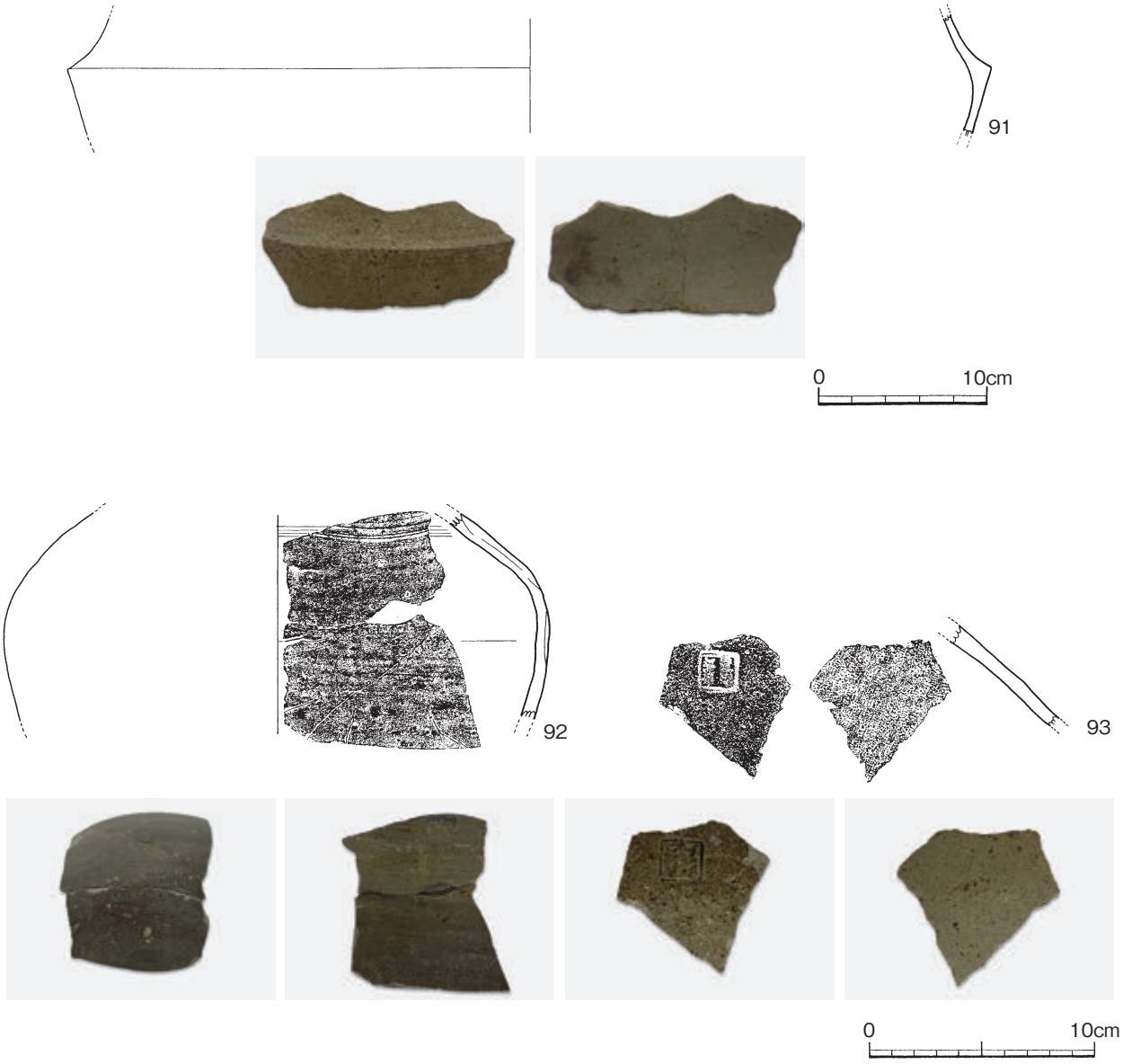
第48図　大型土坑出土遺物６－写真

３㎝の粘土塊が付着している。内外面共に施釉しているが，底部は無釉である。84～86は壺の底部である。88の底部はやや上げ底気味である。内面にはヘラ削りによる調整の跡が見られる。85も上げ底の底部で，内面のみ施釉している。底部には，台から切り離したときの返しがある。86は，壺または鉢の底部で，内外面とも施釉している。

91は，胴部が逆「く」の字状に張る壺である。上部には自然釉が掛かっており，胎土は粒が粗いが，非常に硬く焼き締まっている。92の壺の内面の一部には，ヘラ状工具による調整痕が残っている。また，破裂痕や中に空気が入って胎土が二層に分かれている部分もある。93は，壺の肩部であると思われる。押印があるが不明瞭である。黄褐釉で，胎土は白色粒が多い。

94・95の片口甕は，全面施釉されているが，口唇部だけは釉を剥いでいる。96は蓋である。器壁が非常に薄く，口唇部に貝目跡がある。内外面ともにヘラ整形の跡が見られる。97の口縁部は，外反させた口縁部を内側に折り込んでやや丸く仕上げている。98・99は胎土がマーブル状で，甕もしくは壺であると思われる。99の甕は口縁部に貝目跡があり，非常に薄い。97～99は胎土・器形から，朝鮮または薩摩焼の初期のものと考えられる。96・99は口縁部を外側に折り曲げて胴部に貼り付け，口唇部が平坦になるように仕上げている。100は，底部に貝目跡のある甕である。

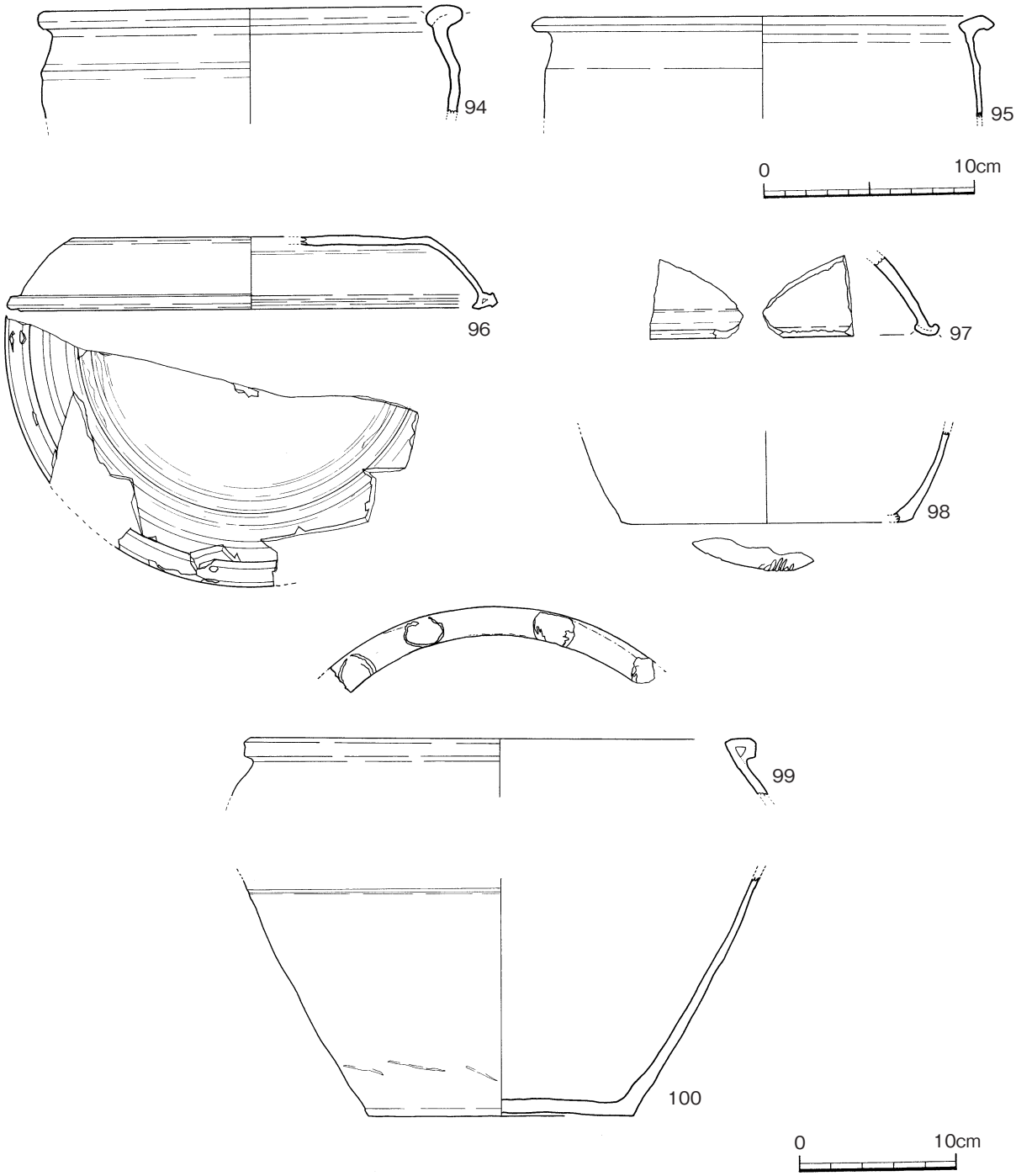
101は，唐津焼の皿である。高台は低く高台脇との区分も明瞭ではない。断面は台形で，高台中央が盛り上がる兜巾状を呈している。また，胎土は粗く，藁灰釉は高台には掛かっていない。1580年代～1594年頃に相当する。102は肥前系陶器の擂鉢であるが擂り目の部分は欠損している。内外面とも口縁周辺に釉が掛かっている。103は，短い肩部から直立する口縁部をもつ陶器の甕である。



第49図　大型土坑出土遺物７

内外面とも釉が掛かっているが，口唇部は釉を剥いでいる。肩部には，横耳が付いていたと思われる。胎土は，灰色の粘性の強い細かい胎土で，白色粒・黒色粒がまばらに入る。

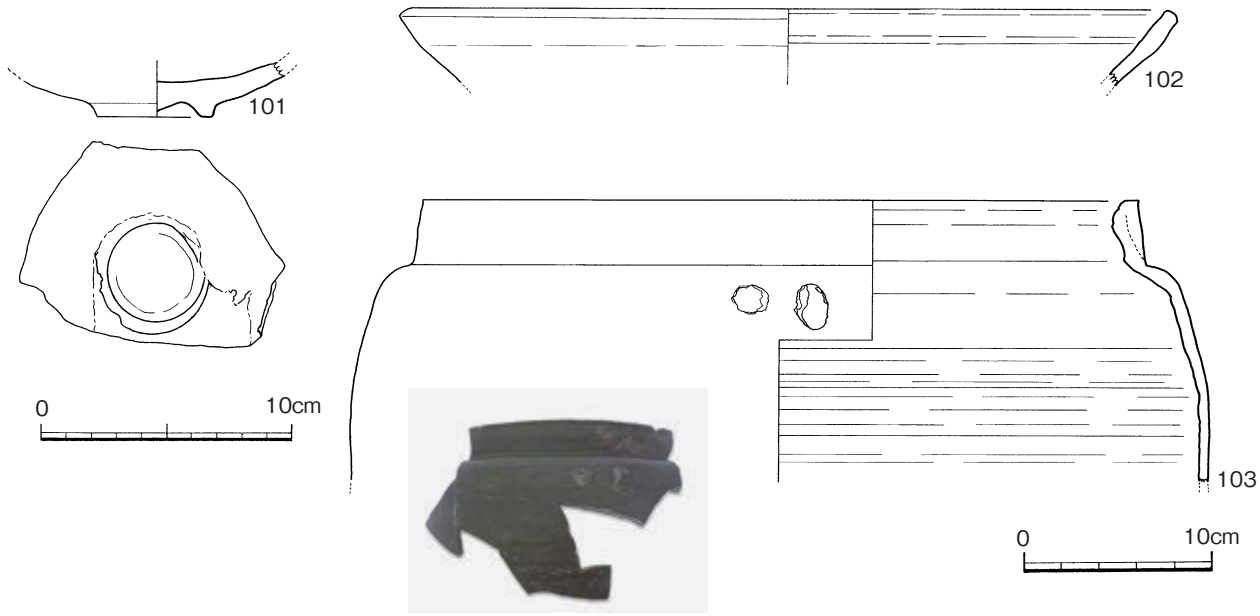
104～112は備前焼の擂鉢である。104は須恵質で，ハケ目で横方向に調整した後，８条の擂り目を下から上に施している。105は６条の擂り目を下から上に施す瓦質の擂鉢である。106も瓦質であるが，摩耗が激しく内面の擂り目はほとんど確認できない。外面には鋸歯状にヘラで描いた文様がある。107は瓦質で，口縁部に対して斜めに５条の擂り目が入っている。108は，片口の擂鉢である。よく焼き締まっており，口端のナデが摘むように先細りとなり，口端から大きく下がった口縁内にシャープな稜，もしくは段をもつ。108・109は，放射線状の擂り目に加えて，斜め方向の擂り目も施されている。16世紀後半に相当すると思われる。110は，口縁部を外側に折り，断面が逆「く」の字状になるものである。111は，瓦質で摩耗が激しく擂り目はほとんど残っていないが，放射線状の擂り目に加えて斜め方向の擂り目が確認できる。112も瓦質の擂鉢で，擂り目が密に施されて



第50図　大型土坑出土遺物８

いる。17世紀中頃以降に相当すると思われる。

113～121は薩摩焼である。113は底部糸切りの灯明皿である。体部は大きく外反する器形で，内面にのみ施釉されており，見込み部分にはゴマ目跡がある。114も底部糸切りの灯明皿であるが，見込みと底部に目跡がある。底部周辺は露胎である。113・114は，龍門司系の製品であると思われ

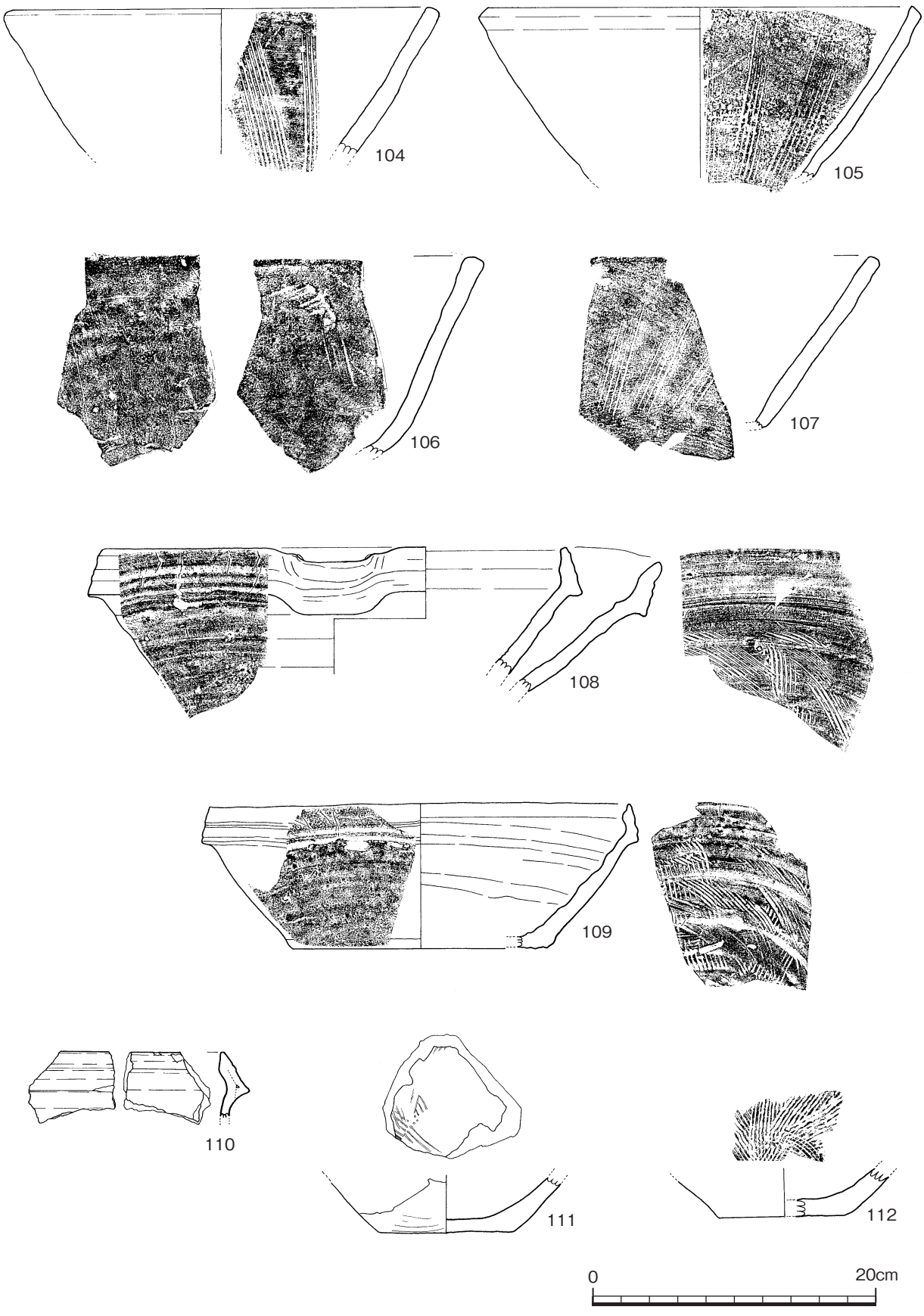


第51図　大型土坑出土遺物９

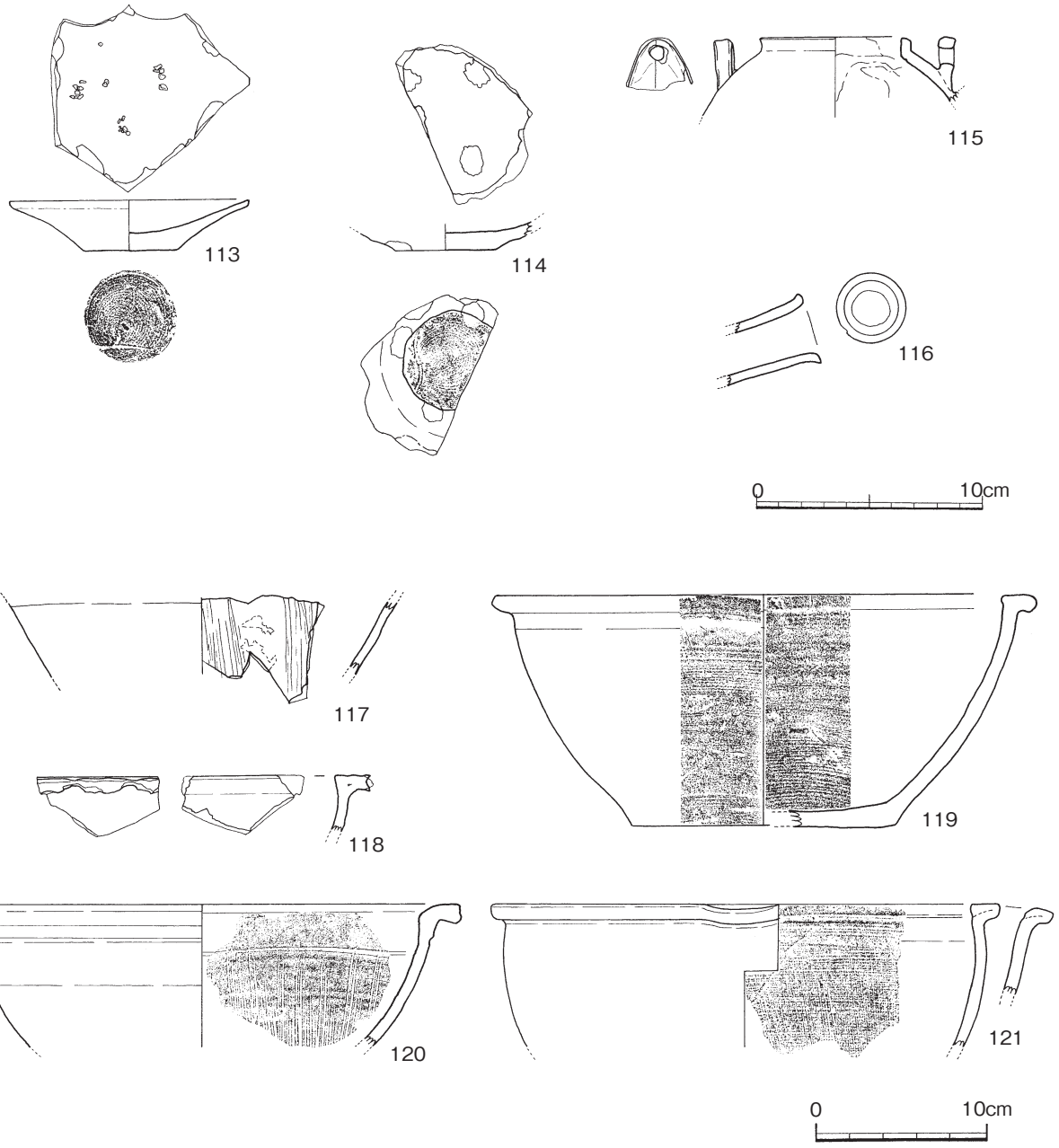
る。115～121は，苗代川系の陶器である。115は土瓶である。内面まで釉が掛かっている。蓋受け部をつくらず，口唇部は平坦である。116は，17世紀代の苗代川系と思われる水注の取手である。非常に硬く焼きしまっている。117は，17世紀の擂鉢で放射線状に擂り目があり，全体的に灰釉が掛かる。胎土は非常に緻密で，バームクーヘン状に層をなす。串木野窯の製品の可能性も考えられる。118は植木鉢と思われるもので，口唇部に貝目跡があり，口縁部はつまんでリボン状にしている。119の捏ね鉢は，底部は無釉で口唇部は釉剥ぎしている。内外面には，横方向の筋状の調整痕が残る。また口唇部にはコマ目跡がある。120の擂鉢は，５条の放射線状の擂り目をもつ。121は注口のある擂鉢である。擂り目は密に施されており，擂り目の条数の単位は不明である。口唇部は釉を剥いでいる。

122～127は火舎である。122はＸ，123と125は＞＜，124は三つ巴，126は五弁花のスタンプ文様が口縁部上部に施されている。123は内外面ともに被熱しており，煤が付着している。127の一部は欠損しているが，おそらく底部に脚が三脚ついていたと思われる。内面に煤などの付着は見られない。土風呂の可能性も考えられる。

128～131は焙烙である。128は内面に指押さえの跡がはっきりと残っており，外面は煤で覆われている。132は1.5㎝程度の厚みを持ったメンコで，瓦を転用したものである。133は苗代川系の陶器片を再加工したメンコである。134・135は素焼きの土錘である。136は鞴の羽口である。通風孔部は，径３㎝ほどの直線状の穿孔である。先端部の表面は滓化し，黒色の流動状となっている。表面は長軸方向のハケ目調整により仕上げられている。137は中央が大きく窪む碗形鍛冶滓で，表面に固着する土には溶けた鉄や鉄粒，軽石，砂粒などが含まれている。138は，平面四角形をした塊状の鉄塊系遺物である。139も鉄塊系遺物で，表面の固着物には滓や木炭も含まれる。



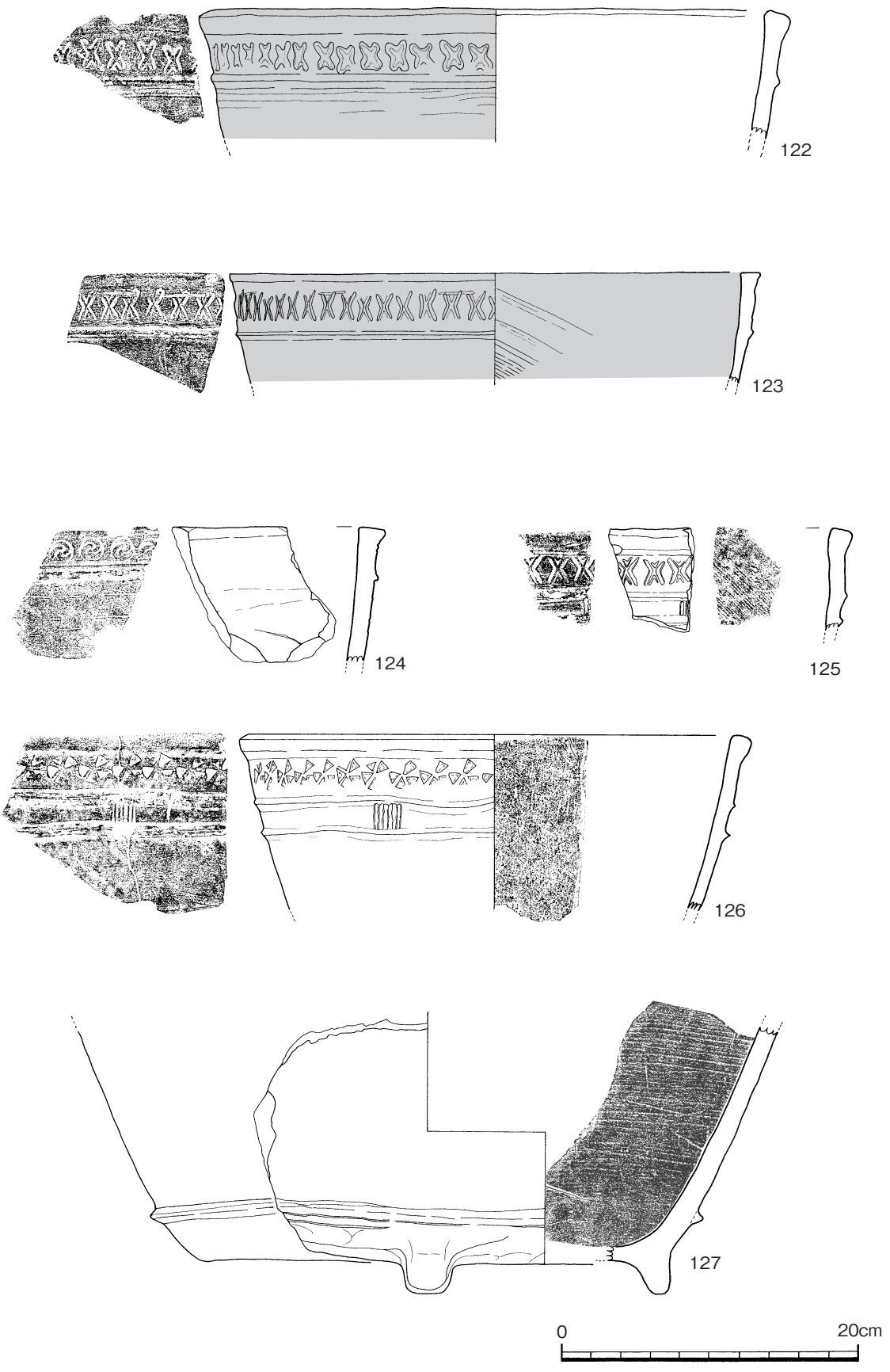
第52図　大型土坑出土遺物10



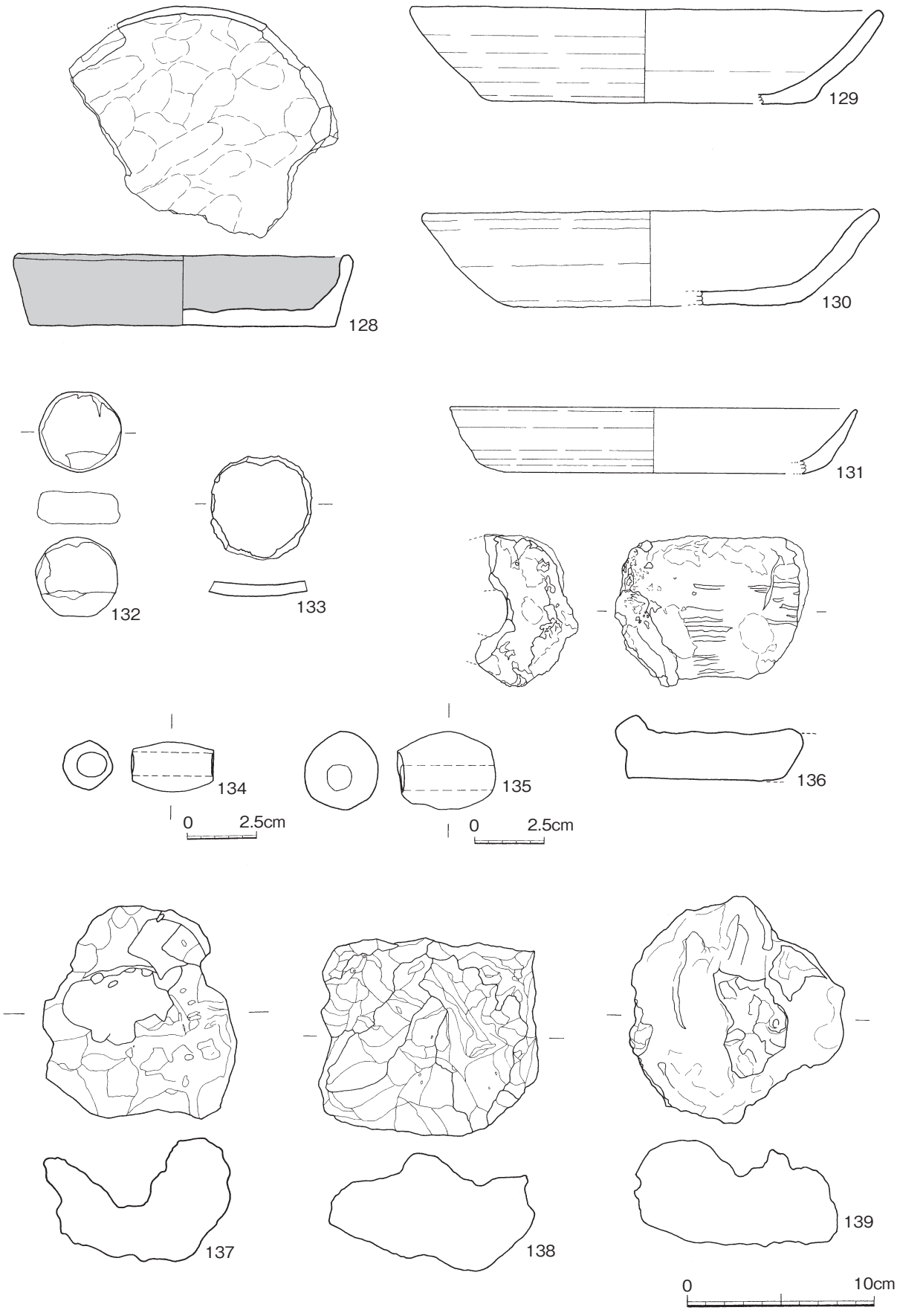
第53図　大型土坑出土遺物11

（2）遺物（第56～58図）

140～152は土師器の坏である。140底部中央がやや盛り上がる。141は摩耗しており，底部の切り取り技法は不明である。14世紀初頭～15世紀前半に相当すると思われる。142は，16世紀に相当す



第54図　大型土坑出土遺物12

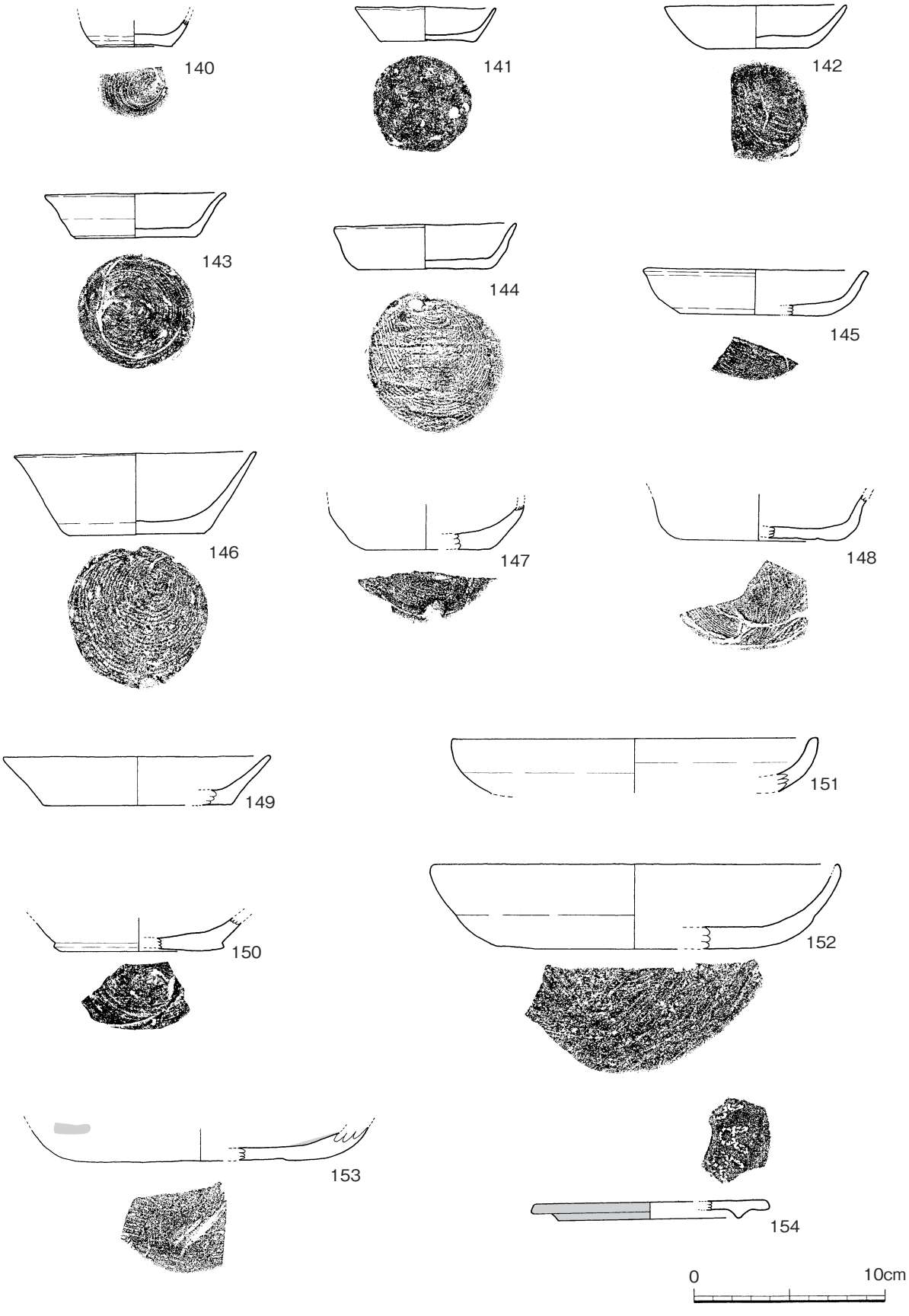


第55図　大型土坑出土遺物13

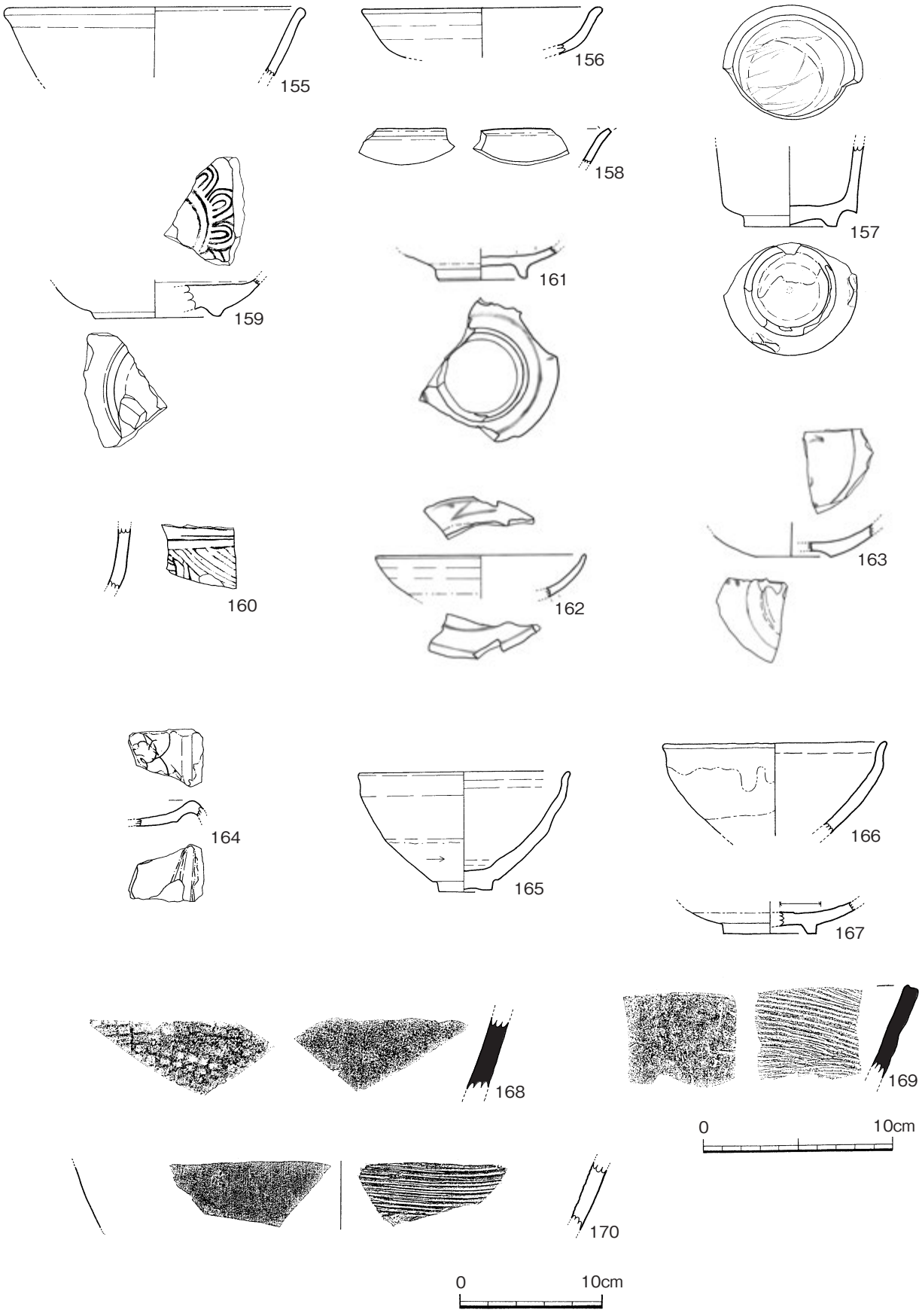
ると思われる。底部は糸切りで体部はやや丸みを帯びて外反する。143・144は，13世紀中頃～14世紀初頭に相当するものと思われる。145は，底部糸切りで11世紀後半～12世紀前半に相当する。146は14世紀初頭～15世紀前半に相当すると思われる。148は，13世紀中頃～14世紀初頭に相当すると思われる。149は，底部糸切りで13世紀中頃～14世紀初頭に相当すると思われる。151は，二次焼成を受けて胎土がピンク色に変色している。底部の糸切りの返しが見られる。152は，内側に炭のようなしみがある。153は，焙烙であると思われる。内外面に煤が付着している。154は土製の茶釜の蓋である。全面が煤で被われており，上面には花と葉のスタンプ文様が押されている。

155・156は，口縁部が外反する青磁の椀である。14世紀中頃～15世紀に相当すると思われる。156は釉の掛かり具合で全体的に水玉模様のように見える。157は青磁の香炉である。畳付は釉剥ぎで，体部内面にも施釉されており，見込み内面，高台内面にも釉が一部残る。また，見込みには他の製品の高台痕が看取できる。強く屈曲した腰部には三角形の脚がついており，三具足の香炉を意識して製作したものと思われるが，退化している。158は，いわゆる口禿げの白磁椀で，口唇部から口縁部内面は釉を剥いでいる。口縁部はやや外反する形状である。口唇部は断面四角形に鋭く整えられており，貫入は大きめである。13～14世紀に相当すると思われる。159は粉青沙器の皿で，三島手と呼ばれるものである。高台内面には，1.5㎝程度の胎土目が付着している。160も粉青沙器の碗で，外面には象嵌が施されている。161は漳州窯の青花碗で，見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。生地の上に白土を掛け，文様を描いた後に透明釉を施している。162・163は漳州窯の青花皿で，白濁した釉薬が掛かり，底部は露胎，15世紀後半～16世紀中頃に相当すると思われる。164は，緑釉陶器の盤である。内面には線で文様を描いた上から緑釉を施釉しており，外面にも一部薄く緑釉が掛かっている。13～14世紀に相当すると思われる。165は，黒釉の天目碗で，露胎部分に横方向にケズリがある。166は天目碗であるが，焼成不足のためか全体的に褐色を帯びており，釉はガラス化していない。露胎には横方向のケズリがある。167は，肥前系陶器の皿で，内野山系のものと思われる。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ，高台断面は台形で底部周辺は露胎である。内面は銅緑釉が掛かる。168は外面に格子叩き目のある須恵器である。一部に自然釉が掛かっている。169は樺万丈の鉢である。内面をハケ目で調整した後に口唇部を撫でて仕上げている。外面の叩き調整は確認できない。170は陶器であるが，よく焼き締まっており，須恵質のようにも見えるが色調は淡い黄色である。外面は縦のハケ目調整の後ナデており，内面は横のハケ目調整を行っている。

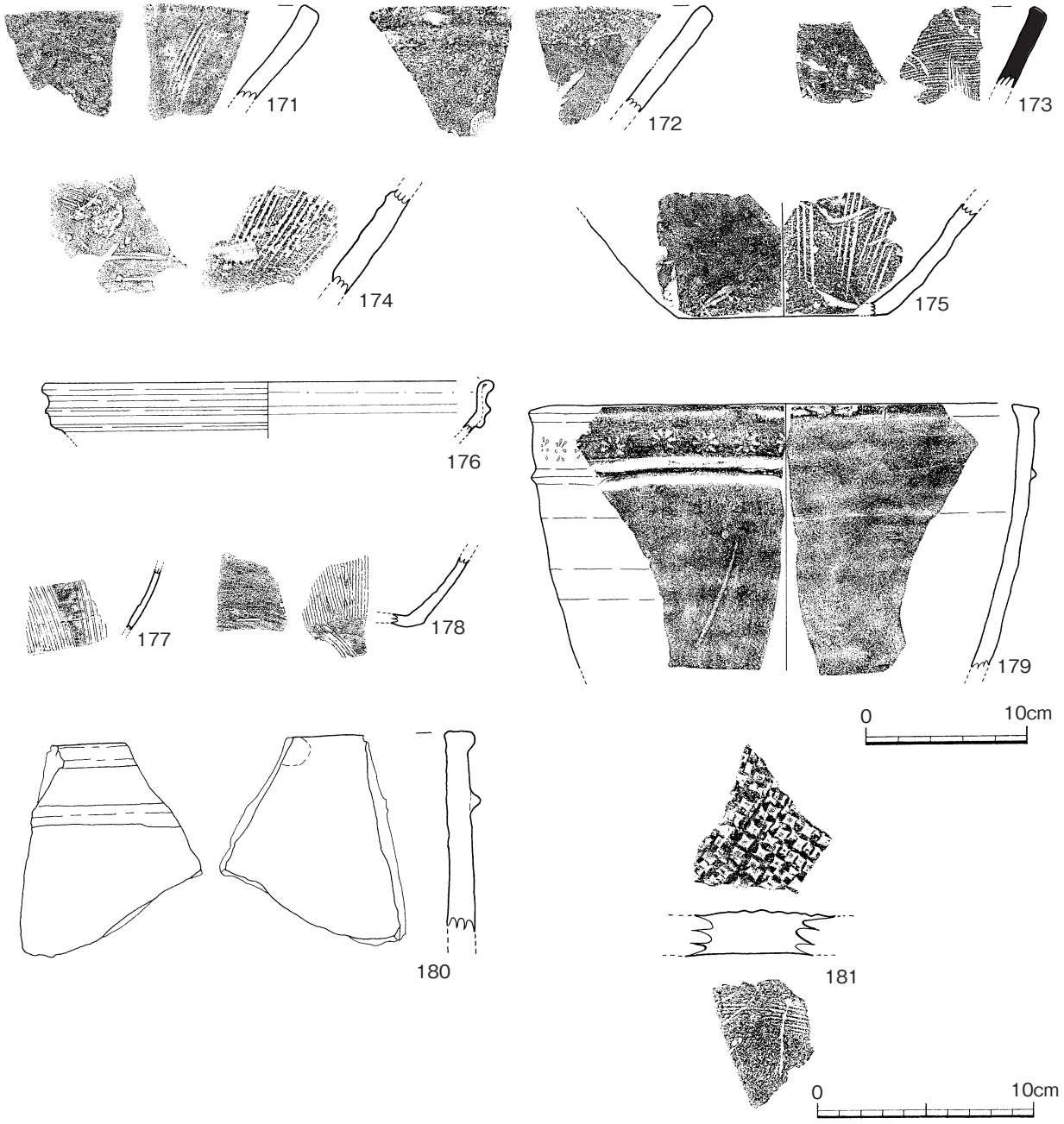
171～178は擂鉢である。171・172は瓦質で斜め方向に擂り目が入っている。173は樺万丈で，内面をハケ目調整した後に擂り目を縦に入れている。胎土には層が看取できる。174は瓦質で６条の擂り目が斜めに入っている。175は，瓦質で３条の擂り目が入っている。外面は指押さえ跡がある。176～178は薩摩焼で，17世紀代の苗代川系のものと思われる。176は陶器で，全面施釉後に口唇部だけ釉を剥いでいる。口縁部は折り返してつくっており，口唇部はやや丸みを帯びている。堂平窯Ⅰａ期のものに類似しているが，釉調や胎土から串木野窯の製品である可能性も考えられる。177・178は同一個体である。瓦質で擂り目６条である。181は，瓦質の瓦である。外面は格子叩き目で，内面はハケ目による調整が見られる。180は瓦質の甕である。口縁部下に三角突帯が施される。179は，瓦質の火舎である。胴部上面に八弁花が押文されている。



第56図　台地部一般遺物１



第57図　台地部一般遺物２



第58図　台地部一般遺物３

掘立柱建物跡１号（第21図）

柱穴番号	柱穴（単位：cm）			柱穴番号	梁行柱間（m）	柱穴番号	桁行柱間（m）
	長径	短径	深さ				
1	76	74	21	P1～P2	1.80	P1～P5	1.54
2	24	24	34	P2～P3	2.12	P5～P9	2.14
3	26	24	33	P3～P4	1.06	P9～P13	2.02
4	26	24	42	P6～P7	2.68	P13～P17	1.88
5	32	30	64	P14～P15	2.04	P6～P10	2.22
6	38	36	25	P18～P19	1.20	P10～P14	2.17
7	36	34	62	平均	1.82	P7～P11	2.28
8	30	28	35			P11～P15	1.88
9	34	28	54			P4～P8	1.38
10	30	28	52			P8～P12	2.08
11	76	64	16			P12～P16	2.12
12	29	28	32			P16～P19	2.12
13	44	33	60			平均	1.99
14	22	21	24				
15	35	34	68				
16	33	30	32				
17	34	33	62				
18	28	26	66				
19	34	31	34				
平均	36.2	33.2	42.9				

掘立柱建物跡２号（第22図）

柱穴番号	柱穴（単位：cm）			柱穴番号	梁行柱間（m）	柱穴番号	桁行柱間（m）
	長径	短径	深さ				
1	33	32	60	P1～P3	2.22	P1～P2	4.02
2	33	32	20	P2～P4	2.04	P3～P4	4.06
3	36	34	64	平均	2.13	平均	4.04
4	30	28	35				
平均	33.0	31.5	44.8				

掘立柱建物跡３号（第23図）

柱穴番号	柱穴（単位：cm）			柱穴番号	梁行柱間（m）	柱穴番号	桁行柱間（m）
	長径	短径	深さ				
1	39	35	78	P1～P4	2.13	P1～P2	3.50
2	44	42	43	P3～P6	1.94	P2～P3	3.38
3	32	25	77	平均	2.04	P4～P5	3.78
4	30	28	100			P5～P6	3.26
5	44	42	35			平均	3.48
6	40	38	72				
平均	38.2	35.0	67.5				

掘立柱建物跡５号（第25図）

柱穴番号	柱穴（単位：cm）			柱穴番号	梁行柱間（m）	柱穴番号	桁行柱間（m）
	長径	短径	深さ				
1	50	50	67	P1～P2	3.02	P1～P4	1.98
2	56	54	94	P2～P3	1.22	P2～P5	2.06
3	46	42	91	P10～P11	3.04	P3～P6	2.10
4	51	50	82	P11～P12	1.00	P4～P7	2.06
5	43	39	90	平均	2.07	P5～P8	1.98
6	50	38	61			P6～P9	1.94
7	48	46	71			P7～P10	2.00
8	50	46	－			P8～P11	2.08
9	42	42	54			P9～P12	2.06
10	38	29	22			平均	2.03
11	62	61	95				
12	46	45	35				
平均	48.5	45.2	55.4				

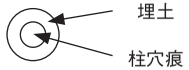
掘立柱建物跡６号（第26図）

柱穴番号	柱穴（単位：cm）			柱穴番号	梁行柱間（m）	柱穴番号	桁行柱間（m）
	長径	短径	深さ				
1	48	36	－	P1～P4	2.02	P1～P2	2.06
2	50	34	－	P3～P6	1.98	P2～P3	2.02
3	33	31	－	平均	2.00	P4～P5	1.98
4	28	26	－			P5～P6	2.12
5	30	24	－			平均	2.05
6	31	28	－				
平均	36.7	29.8	－				

掘立柱建物跡４号（第24図）

柱穴番号	柱穴（単位：cm）			埋土の色調	柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
	長径	短径	深さ					
1	28	26	52	—	P1～P7	1.20	P1～P2	2.00
2	42	40	52	黄橙＋褐＋炭	P7～P13	2.00	P2～P3	2.04
3	42	40	51	黄灰，黄橙＋褐，灰黄褐＋炭	P13～P19	3.26	P3～P4	1.98
4	40	40	56	黄橙＋褐，灰黄褐＋炭	P6～P12	1.00	P4～P5	2.00
5	46	44	67	—	P12～P18	2.20	P5～P6	1.92
6	43	41	—	—	P18～P24	3.40	P7～P8	2.00
7	53	53	109	—	P21～P25	1.16	P8～P9	1.94
8	50	48	—	灰黄褐＋炭，黄橙＋褐	P24～P28	1.20	P9～P10	2.06
9	58	48	115	褐＋黄灰＋赤褐＋炭，黄灰＋褐	平均	1.93	P10～P11	1.94
10	60	50	66	黄橙＋褐＋炭			P11～P12	2.02
11	31	26	29	—			P13～P14	2.06
12	50	48	58	—			P14～P15	1.88
13	59	52	111	—			P15～P16	2.00
14	51	47	50	灰黄褐＋炭，黄橙＋褐			P16～P17	1.92
15	42	38	102	灰黄褐，黄橙＋褐			P17～P18	2.00
16	53	48	112	灰黄褐，黄橙＋褐			P19～P20	2.08
17	56	54	104	灰黄褐＋炭，黄橙＋褐＋黄灰			P20～P21	1.98
18	54	53	114	灰黄褐，黄橙＋褐			P21～P22	1.90
19	50	48	—	—			P22～P23	1.96
20	50	44	101	黄橙＋褐＋黄灰			P23～P24	1.98
21	49	46	99	灰黄褐，黄橙＋褐			P25～P26	2.16
22	42	36	103	—			P26～P27	2.00
23	45	40	109	灰黄褐＋炭，黄橙＋褐			P27～P28	1.88
24	46	42	92	灰黄褐，黄橙＋褐			平均	1.99
25	50	46	83	灰黄褐，褐＋黄橙				
26	43	36	77	黄灰，黄橙＋褐				
27	50	46	96	灰黄褐＋赤褐，黄橙＋褐				
28	69	48	85	灰黄褐＋黄橙				
平均	48.3	43.9	83.72					

＊埋土の色調は柱穴痕の色調→埋土の色調の順で記載。柱穴痕がないものは埋土の色調のみ。



掘立柱建物跡７号（第27図）

柱穴番号	柱穴（単位：cm）			柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
	長径	短径	深さ				
1	38	37	33	P1～P2	2.20	P1～P4	2.48
2	32	32	12	P2～P3	1.90	P4～P6	1.98
3	40	38	56	P8～P9	2.92	P6～P8	2.00
4	35	30	26	P9～P10	1.22	P8～P11	2.24
5	38	36	62	P17～P18	1.42	P11～P14	2.23
6	44	44	22	平均	1.93	P9～P12	2.36
7	42	40	35			P12～P15	2.10
8	40	36	18			P15～P17	2.04
9	38	32	24			P3～P5	2.54
10	44	42	31			P5～P7	1.88
11	35	32	24			P7～P10	2.02
12	38	35	21			P10～P13	2.34
13	34	33	56			P13～P16	2.08
14	33	29	31			P16～P18	2.00
15	38	38	39			平均	2.16
16	34	32	40				
17	43	40	19				
18	34	31	36				
平均	37.8	35.4	32.5				

柵状遺構（第26図）

柱穴番号	柱穴（単位：cm）			柱穴番号	梁行柱間(m)
	長径	短径	深さ		
1	30	28	56	P1～P2	2.35
2	34	32	32	P2～P3	2.26
3	32	30	84	P3～P4	2.25
4	35	30	42	P4～P5	2.35
5	33	31	24	平均	2.30
平均	32.8	30.2	47.6		

台地部中近世遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	産地	出土区	取り上げ番号	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色　調	備　　考
							口径	底径	器高			
14	1	土師	小皿	－	D-3	－	7.7	5.1	2.0	内外・浅黄橙	－	底部糸切り，外面朱塗り
	2	土師	小皿	－	D-3	－	7.8	5.0	2.2	内外・浅黄橙	－	底部糸切り，外面朱塗り
	3	土師	坏	－	D-3	－	12.4	7.6	2.3	内外・にぶい黄橙	－	底部糸切り，外面一部朱塗り
	4	土師	坏	－	D-3	－	12.3	7.1	2.1	内外・にぶい黄橙	－	底部糸切り，外面一部朱塗り
	5	土師	坏	－	D-3	－	12.7	7.5	2.5	内外・にぶい黄橙	－	底部糸切り，外面一部朱塗り
	6	土師	坏	－	D-3	－	12.6	7.4	2.5	内外・にぶい黄橙	－	底部糸切り，外面一部朱塗り
16	7	土師	坏	－	－	5	9.6	7.2	1.8	内外・浅黄橙	－	底部糸切り
	8	土師	小皿	－	－	37	8.4	7.0	2.2	黄橙	－	底部糸切り
	9	青磁	椀	龍泉窯	－	41	13.3	－	－	灰白	オリーブ灰	
	10	青花	碗	中国	－	14, 38	14.4	－	－	灰白	明オリーブ灰	蓮子碗
19	11	土師	坏	－	B-6	127, 128	6.0	7.2	3.7	浅黄橙	－	底部糸切り
	12	土師	坏	－	B-6	134, 153	14.0	9.0	3.4	明黄褐	－	
	13	陶器	灯明皿	在地？	B-6	891	8.7	4.4	2.1	褐灰	褐	底部糸切り
	14	陶器	壺	備前	B-6	138, 898	22.0	－	－	にぶい黄橙	－	
20	15	鉄	鉄塊系遺物	－	C-6・7	－	－	－	－	－	－	中心に鉄
28	16	土師	坏	－	B-4	16	11.4	6.0	2.3	浅黄橙	－	
	17	青花	碗	景徳鎮	B-4	23	－	6.0	－	灰白	灰白	見込みにも文様
	18	瓦質	火鉢	－	B-4	302	45.4	－	－	浅黄橙，灰	－	
29	19	土師	坏	－	C-4	36	－	6.6	－	灰白	－	底部糸切り，内外面に一部煤
	20	青磁	椀	龍泉窯	C-5	230	－	－	－	灰白	オリーブ灰	釉の厚みは 1 mm
	21	青磁	稜花皿	－	C-3, B-5	2403, 2404, 2619, 16, 17	12.0	5.8	3.0	浅黄橙	明緑灰	
	22	青花	碗	中国	B-5	－	－	4.9	－	灰白	明青灰	
	23	瓦質	壺	－	B-5	－	－	－	－	淡黄	－	スタンプ花文様
	24	陶器	鉢	－	C-4	58	－	13.2	－	にぶい黄橙	暗褐	
	25	鉄滓	碗形滓	－	B-5	21.0	－	－	－	－	－	
31	26	青磁	椀	龍泉窯	－	11	－	5.6	－	灰白	オリーブ灰	高台内面釉剥ぎ，見込みに印花文
32	27	陶器	壺	－	－	61	7.9	－	－	にぶい赤褐	暗灰黄，黄褐	灰釉，口唇部釉剥ぎ
	28	陶器	擂鉢	－	－	25	－	15.4	－	灰黄	暗褐	底部に破裂痕多数，目跡
34	29	青磁	椀	龍泉窯	E-8	798	－	－	－	灰黄	灰オリーブ	外面胴部に蓮弁文様
	30	瓦質	－	－	E-8	834	－	－	－	にぶい黄	－	内面はハケ目調整
	31	陶器	擂鉢	備前	E-9	837	－	－	－	にぶい橙	－	
35	32	土師	坏	－	C-16	1676	－	6.3	－	灰白	－	底部糸切り
	33	陶器	－	中国	C-16	1692	－	－	－	浅黄橙	オリーブ	平行叩き一部同心円叩き，内面は同心円叩き
38	34	青磁	椀	龍泉窯	A-5	35	－	6.6	－	灰白	オリーブ灰	高台内に目跡
	35	陶器	天目碗	中国	A-5	26	－	－	－	灰白	黒	口唇部は白い
	36	陶器	擂鉢	備前	A-5	23	－	－	－	にぶい赤褐	－	
	37	陶器	擂鉢	－	A-5	32	－	－	－	浅黄	－	
	38	瓦質	火鉢	－	A-5	40	－	－	－	浅黄橙	－	
	39	瓦質	火舎	－	A-5	15,17	23.8	－	－	灰白	－	
41	40	土師	小皿	－	C-10	113	7.8	5.4	1.8	灰白	－	底部糸切り
	41	土師	小皿	－	C-9	2536, 2537	7.4	4.4	2.8	橙	－	底部糸切り
	42	土師	灯明皿	－	C-9	2186	10.4	7.0	2.5	灰白	－	底部糸切り
	43	土師	坏	－	C-9	2141	11.8	－	－	にぶい黄橙	－	
42	44	青磁	椀	龍泉窯	D-9	－	14.0	－	－	黄灰	オリーブ灰	
	45	青磁	椀	龍泉窯	C-9	2527, 2738, 2836	9.2	4.4	5.4	灰白，橙	灰オリーブ	高台内面釉剥ぎ
	46	青磁	椀	龍泉窯	C-9	2082	－	5.2	－	灰白	オリーブ灰	畳付～高台内面釉剥ぎ
	47	青磁	皿	龍泉窯	C-9	1962	－	8.5	－	にぶい橙	暗灰黄	
	48	白磁	皿	－	B-7,C-9	16, 1464, 231	12.7	4.5	2.9	灰白	灰白	稜花皿
	49	白磁	椀	－	C-9	248	10.8	6.0	3.2	灰白	灰白	畳付釉剥ぎ
	50	青花	皿	中国	C-9	1295	13.4	7.0	3.2	灰白	灰白	
	51	青花	碗	中国	C-9	2039, 2030	16.6	－	－	白	明青灰	蓮子碗
	52	青花	碗	中国	C-9	2185	12.2	－	－	灰白	灰白	
	53	青花	皿	中国	C-9	2507	－	7.4	－	白	明青灰	畳付釉剥ぎ
	54	青花	碗	中国	C-9	2459	－	5.2	－	白	白	畳付釉剥ぎ
	55	青花	皿	中国	C-9	2654	－	6.2	－	灰白	明青灰	畳付釉剥ぎ，砂粒
	56	青花	壺？	中国	C-9	－	10.8	－	－	灰白	灰白	口唇部・口縁部内面釉剥ぎ
43	57	青花	碗	漳州窯	C-9	2762	15.6	－	－	にぶい黄橙，灰白	灰白	
	58	青花	碗	漳州窯	C-9	2811	11.8	－	－	灰白	灰白	
	59	青花	碗	漳州窯	C-9	2723	－	4.4	－	灰白	灰白	畳付～高台内面一部釉剥ぎ
	60	青花	碗	漳州窯	C-9	2655	－	4.8	－	灰白	灰白	畳付～高台内面一部釉剥ぎ
	61	青花	碗	漳州窯	C-9	2726	－	4.0	－	灰白	灰白	畳付～高台内面一部釉剥ぎ
	62	青花	皿	漳州窯	C-9	－	10.8	6.1	2.8	灰白	浅黄	
	63	青花	皿	漳州窯	C-9	2447	－	6.2	－	灰黄	明青灰，灰白	畳付釉剥ぎ
	64	陶器	天目碗	中国	C-9	2778	－	－	－	灰白	オリーブ黒	天目，高台周辺は露胎

台地部中近世遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	産地	出土区	取り上げ番号	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色　調	備　　考
							口径	底径	器高			
44	65	陶器	盤	中国南部	C-9	2453, 2493, 2694, 2707, 2711, 2714, 2720, 2799	19.0	13.8	8.8	明黄褐	黒褐	65と66は同一個体
	66	陶器	盤	中国南部	C-9	2782, 2729	－	－	－	明黄褐	黒褐	65と66は同一個体
	67	陶器	鉢	中国南部	C-9	454	25.2	－	－	灰褐	－	胎土は粘性強・茶色粒含む。
	68	陶器	高台付鉢	中国南部	C-9	57	－	9.2	－	灰白	褐	胎土は砂質で均一。 16ｃ末～17ｃ初
	69	陶器	小壺？	東南アジア？	C-9	2607	7.0	－	－	赤褐	自然釉	胎土は白・黒色粒混じり多
45	70	陶器	甕	中国南部	C-9	2054	37.2	－	－	黄灰	黒褐	胎土は白色粒多く黒・茶色粒含む。 内面以下に施釉
	71	陶器	鉢？盤？	中国南部	C-9	1524	－	－	－	黄灰	にぶい褐	白色粒多く黒色粒含む
	72	陶器	鉢？盤？	中国南部	C-9	1594	43.0	－	－	にぶい橙	褐	内面にのみ施釉
	73	陶器	鉢？盤？	中国南部	C-9	1508, 1882, 2062	－	15.4	－	橙	にぶい黄褐, 橙	胎土は砂質で均一。内面褐釉
	74	陶器	壺	中国南部	C-9	2549	12.4	－	－	にぶい黄	暗オリーブ褐	胎土は黒色粒多く白・茶色粒含む。 鉄釉，頚部内面釉剥ぎ
	75	陶器	壺	中国南部	C-9	60, 1172, 1620, 2719	16.8	－	－	灰白橙	灰白	胎土は白色粒含む。 16ｃ末～17ｃ初，口縁部上面は釉剥ぎ，頚部内面から肩にかけて釉。
	76	陶器	壺	中国南部	C-9	1671, 2200	10.8	－	－	にぶい黄橙	暗赤褐	胎土はまばらに白色粒
	77	陶器	壺	タイ	C-9	1579	11.4	－	－	にぶい赤褐	灰オリーブ	胎土は白色粒多い。 16ｃ末～17ｃ初
	78	陶器	壺	中国南部	C-9	1069	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	胎土は砂質で均一。
	79	陶器	壺	中国南部	D-10	1171	－	－	－	にぶい橙	にぶい黄橙, 黒褐	胎土は白色粒含む。内面鉄釉
	80	陶器	壺	中国南部	C-9	2824, 2441	11.8	－	－	にぶい黄橙	褐	胎土は砂質で褐色粒少し含む。
	81	陶器	壺	中国南部	C-9	2769	－	－	－	にぶい黄橙	褐	胎土は砂質で褐色粒少し含む。 内面に釉
	82	陶器	壺	中国南部	C-9	2724, 2713, 2448, 2583, 2595	－	12.6	－	にぶい黄橙	褐	内面に釉
	83	陶器	壺	中国南部	C-9	1406, 1783	－	7.6	－	黄灰	黄褐	黒色粒少し含む。
	84	陶器	壺	中国南部	C-9	1631	－	7.8	－	浅黄	オリーブ褐	茶色粒多く白色粒やや含む。 底部周辺露胎
	85	陶器	壺	中国南部	C-9	2602, 2464	－	7.8	－	灰黄	暗赤褐	白色粒多く褐色粒やや含む。 底部にトチン跡有り。 内面は部分的にうすい釉
47	86	陶器	壺	中国南部	C-9	11, 23, 24, 27, 36, 88, 111,254, 259, 260, 1165, 1575, 1638, 1644, 1647, 1707, 1769, 2566, 2723	13.4	16.0	－	にぶい黄橙	黄褐	胎土は粘性強くまばらに白色粒含む。頚部内側まで釉がかかっている，底部に砂目跡あり
	87	陶器	壺	中国南部	C-9	2830	－	14.2	－	浅黄橙	にぶい褐，褐	胎土は均一。外面２回施釉
	88	陶器	壺	中国南部	C-9	1039，48	－	14.8	－	灰，灰黄	にぶい黄褐	胎土は粘性強く均一。底部釉剥ぎ
	89	陶器	壺	中国南部	C-9	672	－	7.5	－	灰黄褐	暗赤褐，黒褐	
	90	陶器	壺	中国南部	C-9	2755, 2, 1398, 1235, 1500, 1563, 986, 1553, 1381	－	18.0	－	明黄褐	灰白，暗赤褐	胎土は白色粒含む。外面は３回施釉
49	91	陶器	壺	中国南部	C-9	169, 1080	－	－	－	オリーブ黄	灰	胎土は黒・白・茶色粒多く含む
	92	陶器	壺	中国南部	C-9	714	－	－	－	褐灰	暗灰黄，暗オリーブ褐	胎土は均一
	93	陶器	壺	中国	C-10	2184	－	－	－	浅黄	黄褐	押印あり。四耳壺？

台地部中近世遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	産地	出土区	取り上げ番号	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色　調	備　　考
							口径	底径	器高			
50	94	陶器	甕	朝鮮？	C-9	2462, 2435, 2708	20.0	－	－	灰褐	黒褐	胎土は粘性強く均一。 鉄釉，口唇部釉剥ぎ
	95	陶器	甕	朝鮮？	C-9	1819	23.8	－	－	褐灰	明黄褐	胎土は均一。口唇部釉剥ぎ
	96	陶器	蓋	朝鮮？	C-9	2229, 744, 686, 674,1106, 1301, 1304, 2225, 1871, 1894	31.4	22.8	4.6	にぶい橙	褐，暗灰黄	口唇部に目跡有り
	97	陶器	蓋	朝鮮？	C-9	2817	－	－	－	にぶい赤褐，褐灰	オリーブ黒	口唇部上面釉剥ぎ
	98	陶器	甕？壺？	朝鮮？	C-9	1861	－	18.6	－	灰黄褐	褐	胎土はマーブル状。 底部に貝目跡有り
	99	陶器	甕	朝鮮？	C-9	891,1275, 1747	32.8	－	－	灰赤	にぶい赤褐	胎土はマーブル状。 口唇部に貝目跡有り
	100	陶器	甕	朝鮮？	C-9	489, 493, 2018, 1169, 2172, 1846, 2122, 2096, 1158	－	17.0	－	灰白	暗赤褐， にぶい褐	底部貝目跡有り
51	101	陶器	皿	－	C-9	－	－	4.7	－	にぶい橙	灰褐	
	102	陶器	擂鉢	－	C-9	732	31.0	－	－	灰白	オリーブ褐	口縁部内外に施釉
	103	陶器	甕	中国か？	C-9	2720, 2740, 2688, 2618	38.4	－	－	褐灰	暗褐	口唇部釉剥ぎ
52	104	瓦質	擂鉢	－	C-9	721	25.8	－	－	灰白	－	
	105	瓦質	擂鉢	－	C-9	1625, 1558,2194	31.4	－	－	灰白，灰	－	
	106	瓦質	鉢	－	C-9	2528	36.4	－	－	灰，灰白	－	
	107	瓦質	擂鉢	－	C-9	2567	26.4	－	－	にぶい橙	－	
	108	陶器	擂鉢	備前	C-9	720, 1297, 89, 230	32.8	－	－	赤褐	－	
	109	陶器	擂鉢	備前	C-9	－	30.0	18.0	－	黄灰	褐，灰褐	自然釉
	110	陶器	擂鉢	備前	C-9	－	－	－	－	にぶい赤褐	灰褐， にぶい赤褐	自然釉
	111	瓦質	擂鉢	－	C-9	754	－	－	－	にぶい黄橙	－	
	112	瓦質	擂鉢	－	C-9	2130	－	－	－	にぶい黄橙	－	
53	113	陶器	灯明皿	龍門司	C-9	644	10.6	4.2	2.3	にぶい黄褐	褐	底部糸切り，内面にのみ施釉，見込みに砂目跡
	114	陶器	灯明皿	龍門司	C-9	2558	－	4.4	－	灰	暗灰黄	見込み・底部に目跡，底部糸切り
	115	陶器	土瓶	苗代川	C-9	641, 742, 1021	6.8	－	－	明赤褐	黒褐， オリーブ灰	口唇部・口縁部内面釉剥ぎ
	116	陶器	水注の取手	苗代川	C-9	2610	3.2	－	－	灰	暗赤褐	
	117	陶器	擂鉢	苗代川	C-9	1029	－	－	－	灰	にぶい黄褐	灰釉，17世紀
	118	陶器	植木鉢	苗代川	C-9	－	－	－	－	灰黄褐	黒褐	口唇部に目跡有り
	119	陶器	捏ね鉢	苗代川	C-9	681, 593	32.4	15.4	13.7	明黄褐	灰オリーブ， 淡黄， にぶい黄	口唇部と底部は釉剥ぎ，口唇部に駒目跡
	120	陶器	擂鉢	苗代川	C-9	199	31.0	－	－	赤褐	灰オリーブ	灰釉，口唇部釉剥ぎ
	121	陶器	擂鉢	苗代川	C-9	639, 478, 497	27.0	－	－	にぶい褐	暗オリーブ， 淡黄	注口あり
54	122	瓦質	火舎	－	C-9	1497, 1721, 2021	47.0	－	－	にぶい黄橙	－	スタンプによるＸ施文
	123	瓦質	火舎	－	C-9	2222	36.0	－	－	灰黄	－	スタンプによる >< 文
	124	瓦質	火舎	－	C-9	747	－	－	－	浅黄	－	スタンプによる三つ巴文
	125	瓦質	火舎	－	C-9	2279	－	－	－	にぶい黄橙	－	スタンプによる >< 文
	126	瓦質	火舎	－	C-9	52	34.8	－	－	にぶい褐	－	スタンプによる五弁花文
	127	瓦質	火舎・土風呂？	－	C-9	2086, 2323	－	32.4	－	灰白	－	
55	128	土師質	焙烙	－	C-9	2613	17.8	16.9	3.7	にぶい黄褐	－	内面指押さえ
	129	土師質	焙烙	－	C-9	2636	25.2	17.6	5.0	灰，灰白	－	
	130	土師質	焙烙	－	C-9	1492, 1493	24.6	14.8	5.1	灰白	－	
	131	土師質	焙烙	－	C-9	1567	22.0	16.0	3.4	浅黄橙，褐灰	－	
	132	瓦質	メンコ	－	C-9	－	－	－	－	淡黄	－	直径4.5cm，厚さ1.7cm
	133	陶器	メンコ	－	C-9	765	－	－	－	赤褐	オリーブ黒	直径5.3cm，厚さ0.6cm
	134	土製品	土錘	－	C-9	1024	1.8	－	－	赤褐	－	長さ３cm
	135	土製品	土錘	－	C-9	429	2.7	－	－	にぶい褐	－	長さ3.5cm
	136	土製品	鞴の羽口	－	C-9	845	－	－	－	褐	－	溶鉄付着
	137	鉄	鉄滓	－	C-9	1642	－	－	－	－	－	
	138	鉄	鉄塊系遺物	－	C-9	2575	－	－	－	－	－	
	139	鉄	鉄塊系遺物	－	C-9	1669	－	－	－	－	－	

台地部中近世遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	産地	出土区	取り上げ番号	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色　調	備　　考
							口径	底径	器高			
56	140	土師	坏	―	B-4	433	―	4.0	―	浅黄橙	―	底部糸切り
	141	土師	坏	―	E-17	1890	7.4	5.0	1.8	橙	―	胎土に赤い粒
	142	土師	坏	―	E-11	402	9.5	5.4	2.2	橙	―	底部糸切り
	143	土師	坏	―	E-11	407	15.6	6.2	2.3	にぶい橙	―	胎土に赤い粒，底部糸切り
	144	土師	坏	―	E-11	401	9.5	7.0	2.3	浅黄橙	―	底部糸切り
	145	土師	坏	―	D-11	115	11.8	7.6	2.4	浅黄橙	―	底部糸切り
	146	土師	坏	―	F-17	1887	12.8	13.2	4.3	浅黄橙	―	底部糸切り，胎土に赤い粒
	147	土師	坏	―	E-11	629	―	6.6	―	にぶい黄橙	―	底部糸切り
	148	土師	坏	―	B-4	287	―	8.2	―	にぶい黄橙	―	底部糸切り
	149	土師	坏	―	B-7	1007	14.0	9.6	2.6	にぶい黄橙	―	底部糸切り
	150	土師	坏	―	E-10	490	―	7.6	―	淡赤橙	―	底部糸切り，糸切りの返し
	151	土師	坏	―	―	27, 28	19.3	―	―	浅黄橙	―	
	152	土師	坏	―	B-3	―	―	12.0	―	灰白	―	
	153	土師	焙烙	―	D-11	116	21.4	11.0	4.4	浅黄	―	
	154	茶釜	蓋	―	E-11	625	12.2	9.5	0.9	黄灰	―	中世，全面に煤付着，外面スタンプ文様
57	155	青磁	椀	龍泉窯	F-18	1394	15.5	―	―	灰オリーブ	オリーブ黄	
	156	青磁	椀	龍泉窯	F-18	1879	12.8	―	2.5	灰白	オリーブ黄	
	157	青磁	香炉	―	B-7	―	―	4.8	―	灰白	オリーブ灰・褐灰	畳付釉剥ぎ，見込み釉剥ぎ
	158	白磁	椀	―	―	―	―	―	―	灰白	明緑灰	口唇部釉剥ぎ
	159	粉青沙器	皿	朝鮮	―	―	―	6.6	―	灰オリーブ	灰オリーブ	三島手
	160	粉青沙器	碗	朝鮮	E-11	418	―	―	―	灰	灰オリーブ	象嵌
	161	青花	碗	漳州窯	B-7	―	―	4.6	―	にぶい黄橙	明褐灰	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
	162	青花	皿	漳州窯	B-7, D-6	958	11.0	―	―	浅黄	浅黄	高台周辺は露胎
	163	青花	皿	漳州窯	E-13	2242	―	4.0	―	浅黄橙	灰白	畳付は釉剥ぎ
	164	緑釉陶器	盤	中国	―	1046	―	―	―	にぶい黄橙	緑	
	165	天目	碗	中国	D-17	1889	11.6	3.0	6.2	灰白	黒褐	露胎部分に右方向にけずりが入っている
	166	天目	碗	中国	A-4	887	11.8	―	―	浅黄橙	にぶい褐	
	167	陶器	皿	―	C-4	1673	―	5.0	―	にぶい黄橙	緑	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
	168	須恵器	―	―	C-4	2394	―	―	―	黄灰	―	外面叩き，一部に自然釉
	169	須恵質	鉢	樺万丈	A-3	793	―	―	―	褐灰	―	
	170	須恵質	―	―	B-16	1821	―	―	―	淡黄	―	
58	171	瓦質	擂鉢	―	A-3	462	―	―	―	にぶい黄橙	―	
	172	瓦質	擂鉢	―	E-10	450	―	―	―	にぶい黄橙	―	
	173	須恵質	擂鉢	樺万丈	E-10	474	―	―	―	黄褐	―	内面調整は平行叩き
	174	瓦質	擂鉢	―	C-3	2620	―	―	―	灰白	―	
	175	瓦質	擂鉢	―	E-10	469	―	―	―	浅黄	―	
	176	陶器	擂鉢	―	D-7	―	―	―	―	灰黄	褐	口唇部と口縁内面釉剥ぎ，苗代川系
	177	瓦質	擂鉢	中国	C-4	2254, 2256	―	―	―	灰オリーブ	―	177と178は同一個体
	178	瓦質	擂鉢	中国	C-4	2695	―	―	―	灰オリーブ	―	〃
	179	瓦質	火舎	―	F-16	566	32.0	―	―	にぶい黄橙	―	スタンプによる八弁花文
	180	瓦質	甕	―	B-4	315	―	―	―	橙	―	胎土に赤い粒
	181	瓦質	瓦	―	F-16	1881	―	―	―	灰オリーブ	―	外面格子叩き目

山　腹　部

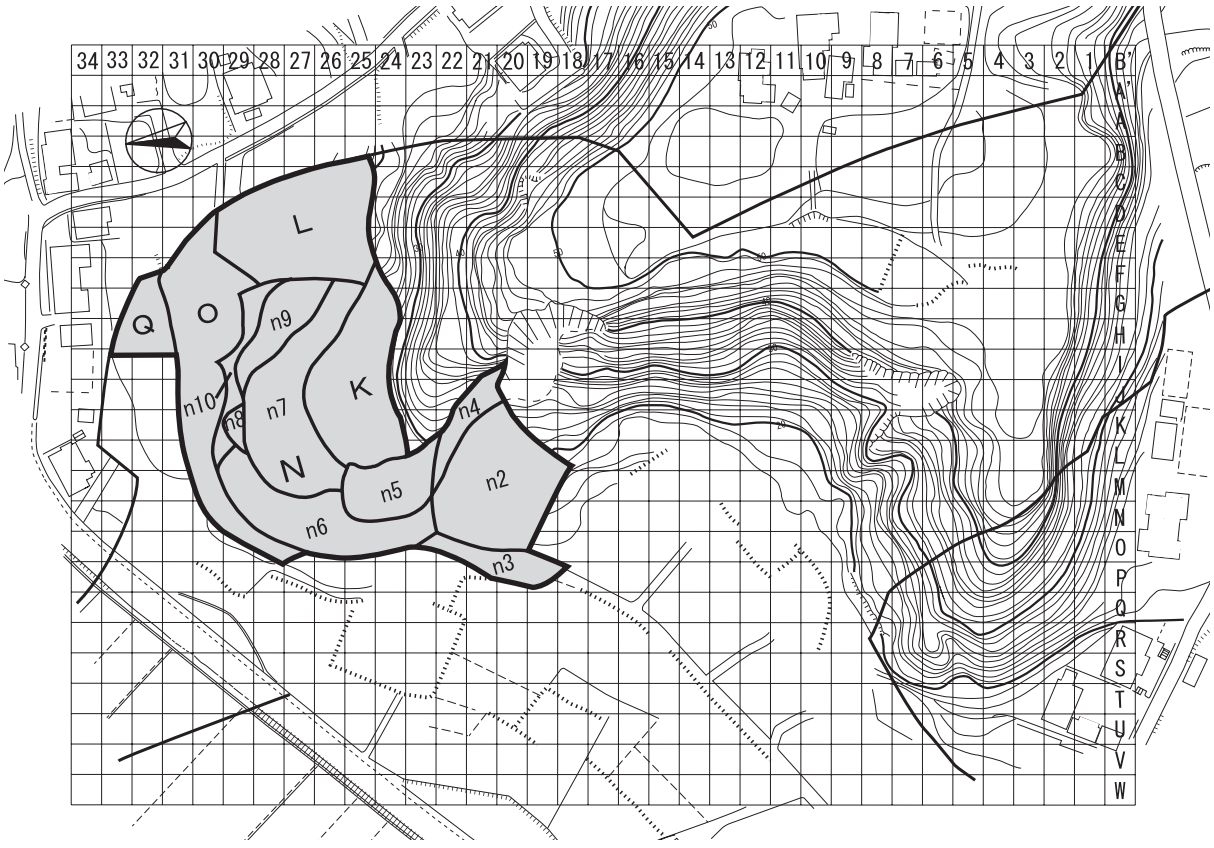
第Ⅴ章　山腹部の調査

第１節　調査の概要

１　山腹部の範囲と概要

本報告書で山腹部とする範囲は，発掘時におけるＫ・Ｌ・Ｎ・Ｏ調査区とＰ・Ｑ調査区の一部に該当し，遺跡の東側，標高約13～30メートル部分に位置する。

山腹部の調査の概要としては，Ｋ調査区から中世墓や近世のものと思われる一字一石経塚が検出されたほか，五輪塔が溝内に多量に廃棄された状態で検出された。Ｌ調査区では古代のものと思われる炉状遺構のほか，掘立柱建物跡，大型土坑が検出された。また耳皿も出土している。Ｎ調査区は主として石切場とそれに関連すると思われる，鍛冶炉や焼土域等が検出された。また凝灰岩を刳り貫いて柱穴をつくった掘立柱建物跡１棟も検出されている。またＮ（ｎ１）調査区からは近世の陶磁器類が多く出土したが，Ｇ調査区に隣接するため，内容や性格を考慮して低地部で扱っている。Ｏ調査区からは，大型土坑や溝状遺構が多数検出された。遺構内からは古代～近世にかけての遺物が多量に出土した。特に古代では黒色土器に記された刻書土器や耳皿が注目される。Ｐ調査区はＲ調査区に隣接し，レベルを同じくする部分を低地部で扱い，２ｍほどレベルの上がる近世墓群と拝み墓と思われる良福寺和尚墓石を山腹部で扱った。Ｑ調査区では掘立柱建物跡１棟，鍛冶遺構，カマド跡等が検出されたが，Ｏ調査区に隣接し，内容的にもＮ調査区と関連すると思われる部分を山腹部として扱い，カマド跡は低地部で扱った。



第１図　山腹部の範囲

報告に際しては，各調査区の立地や，遺構・遺物の内容や性格等を考慮して，Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区，Ｎ調査区，Ｋ調査区，Ｐ調査区の４つに分け，この順番で行う。そのためアルファベット順にはなっていない。また縄文時代の遺物に関してはＬ・Ｏ・Ｋ調査区で出土しているが，各調査区数点ずつの少数であるため，煩雑さを避けてＬ・Ｏ・Ｑ調査区内でＫ調査区の分も一括して扱っている。

２．山腹部の層序

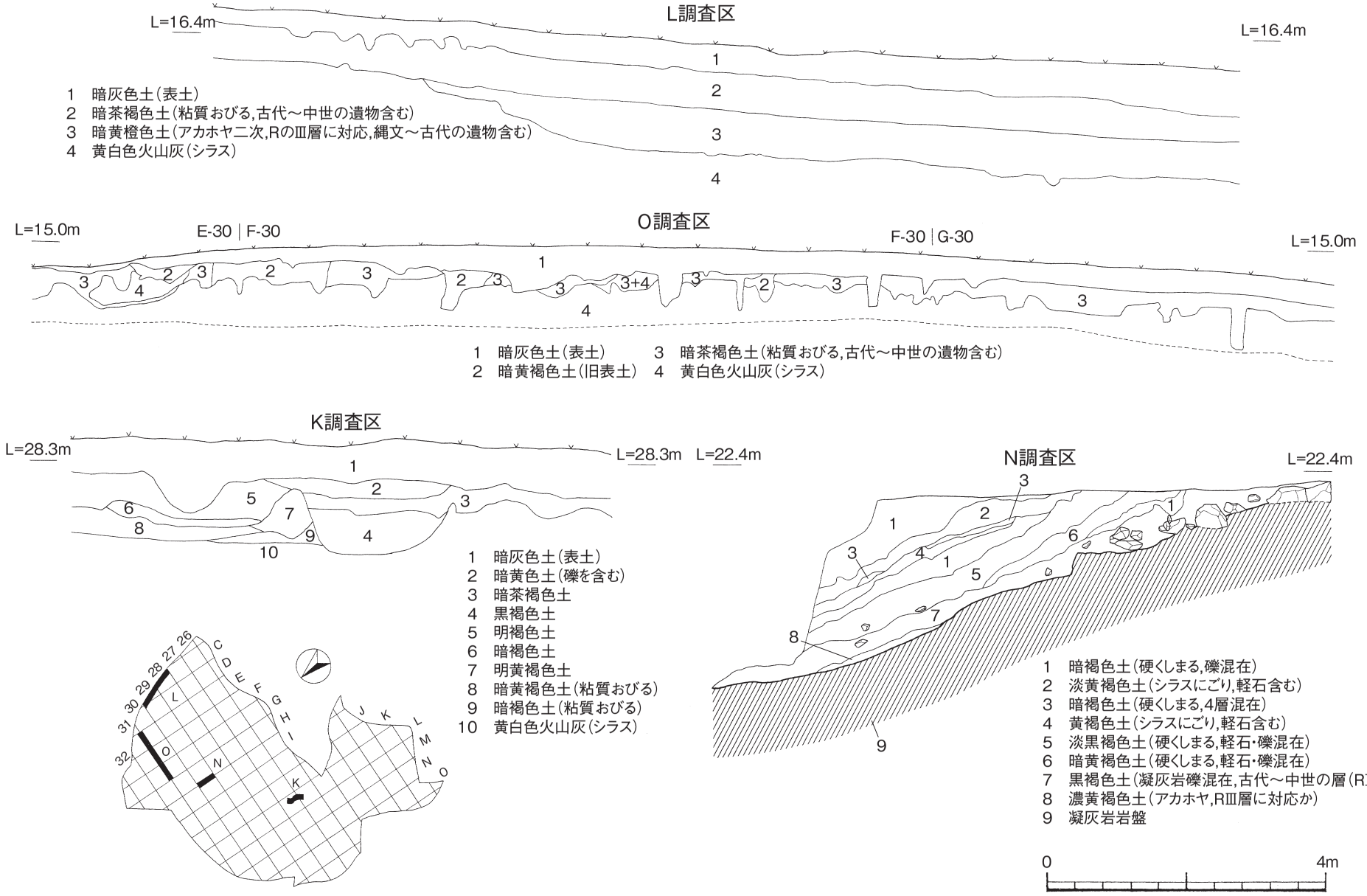
山腹部では，Ｌ調査区の一部でやや安定した層の堆積が確認されたものの，Ｑ調査区では近現代のころに削平を受けており，層序の確認は不可能であった。Ｏ調査区も大部分が削平を受けている状況であった。またＫ調査区では，中世の頃と思われるが，大規模な造成が，Ｎ調査区では石切場の採石やそれに関連すると思われる平坦面の造成のために，表土下が採石屑やシラス造成土という状況であった。よって，山腹部としての基本的層序を提示することが難しいため，ここではＬ調査区とＯ調査区の層序を提示する。

Ｌ調査区

Ⅰ層 暗灰色土	やや砂質の表土である。層厚約25cm。
Ⅱ層 暗茶褐色土	やや粘質をおびる。古代～中世にかけての遺物包含層である。層厚約30cm。
Ⅲ層 暗黄橙色土	鬼界カルデラを噴出起源とする火山灰（通称アカホヤ。約6,400年前）の二次堆積層。縄文～古代の遺物包含層である。層厚約30cm。
Ⅳ層 黄白色火山灰	姶良カルデラを起源とする姶良Ｔｎ火山灰（通称シラス。約24,000年前）。

Ｏ調査区

Ⅰ層 暗灰色土	やや砂質の表土である。層厚約25cm。
Ⅱ層 暗黄褐色土	旧表土である。部分的に残存する。
Ⅲ層 暗茶褐色土	やや粘質をおびる。古代～中世にかけての遺物包含層である。層厚約30cm。
Ⅳ層 黄白色火山灰	姶良カルデラを起源とする姶良Ｔｎ火山灰（通称シラス。約24,000年前）。



第２図　山腹部土層断面図

第２節　Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区

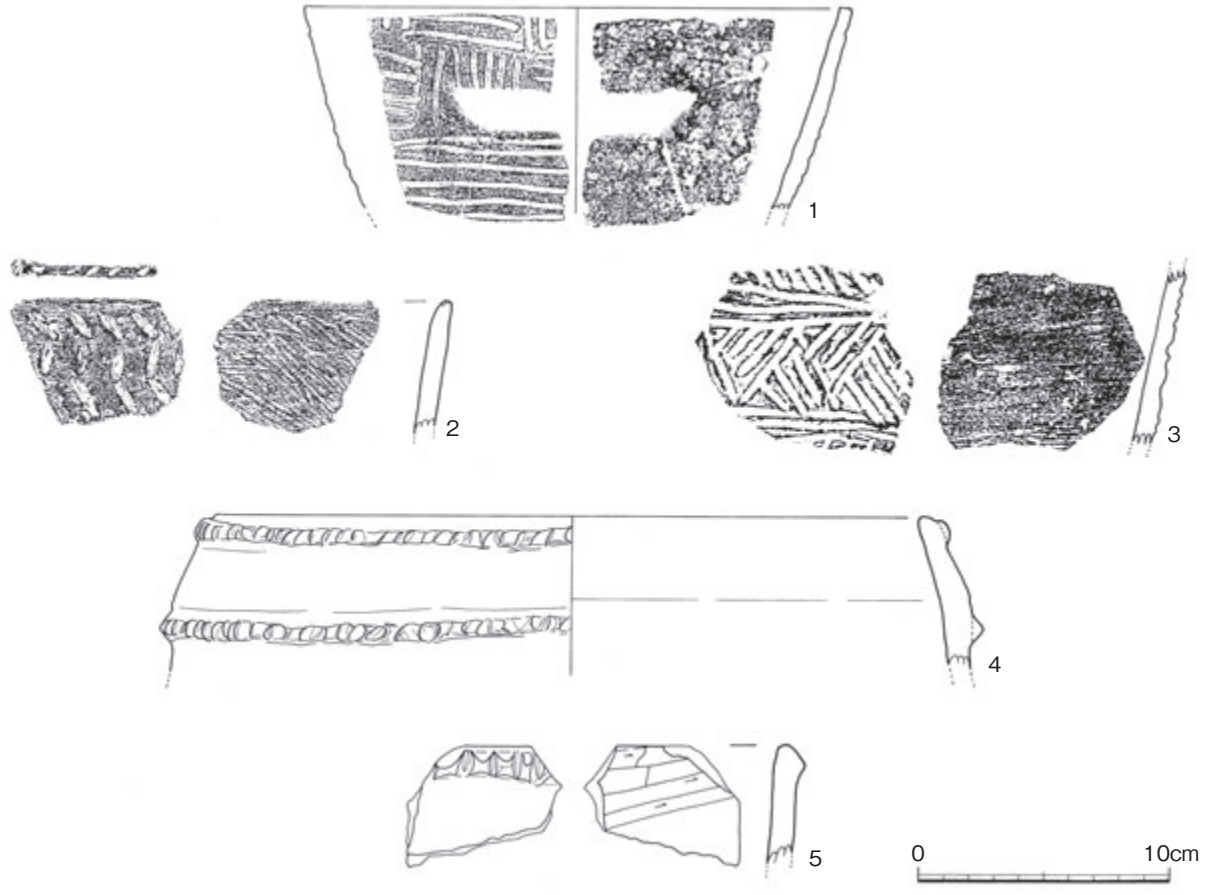
１　縄文時代の遺物

山腹部では縄文時代の遺構は検出されていない。わずかな土器，石器がＣ・Ｌ・Ｐ区などからまばらに出土したのみである。

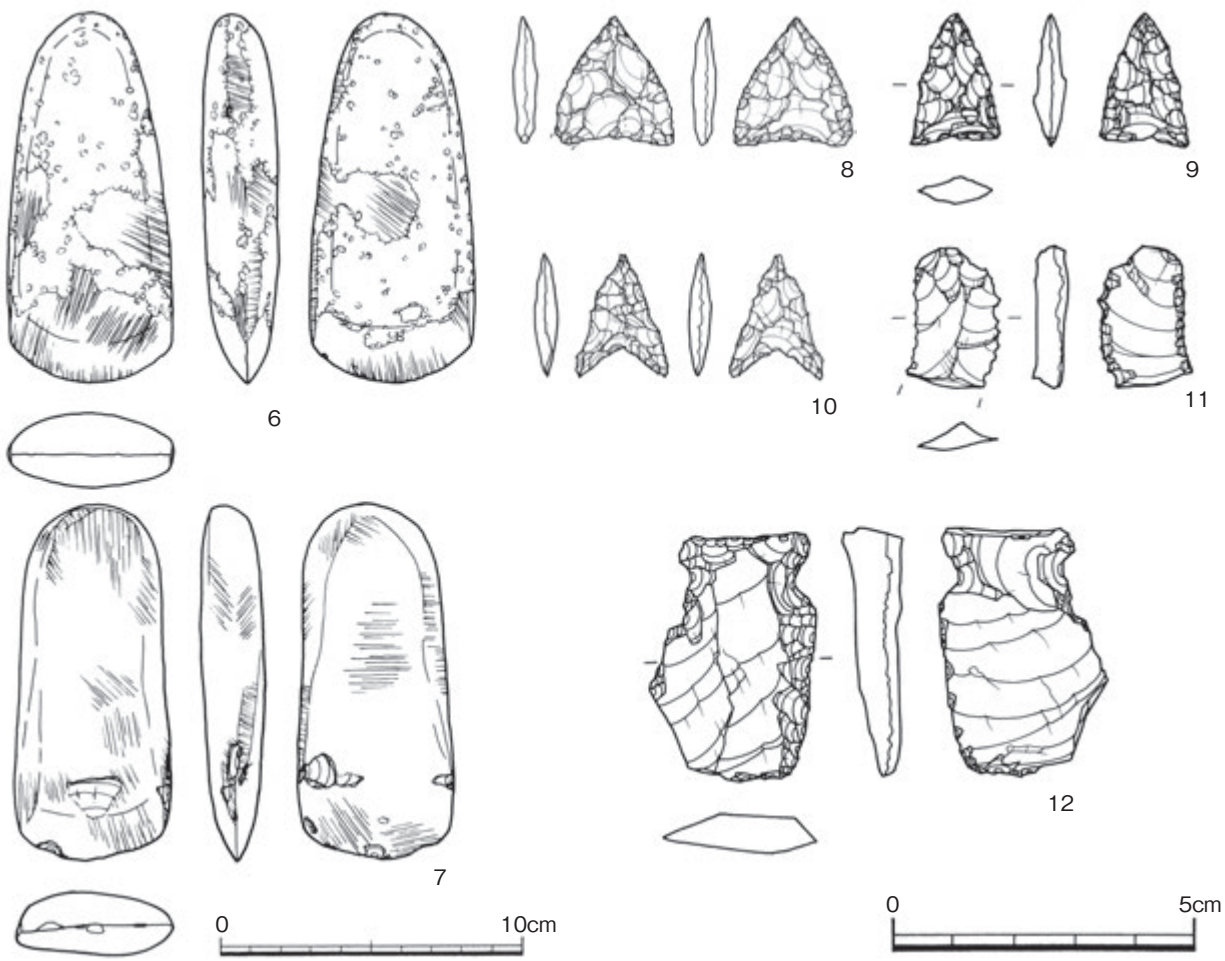
１～３は縄文時代前期の曽畑式土器である。１には短沈線の格子文様が描かれ，２には綾杉文が，３には鋸歯文が描かれている。４，５は縄文時代晩期の刻目突帯文土器であり，４には２条の，５には１条の突帯が施されている。

６，７は磨製石斧であり，６には丁寧な敲打が全面に，刃部と側面に研磨が施されており，刃部には研ぎ直しはない。７は礫素材であり，刃部周辺にラフな整形剥離を施した後，刃部を含めた両面を研磨して仕上げている。８～10は打製石鏃であり，８は黒色安山岩の，９と10は鉄石英の剥片が素材に用いられている。11は黒曜石の縦長剥片を素材とする鋸歯状刃部を持つ削器である。背面からの剥離のみで作られており，その剥離具は非常に鋭利な先端を持つことが分かる。形状，剥離の有りようからはシクルブレイドの可能性を指摘したいが，コーングロスは観察できない。

12は縦長の切断剥片を素材とする石匙であるが，右側縁は片刃であり，左側縁のノッチ下部から始まる刃部整形が失敗したため，製作途中で放棄されたものか。13～19，21は凹石であり，いずれも安山岩の円礫を素材とし，表裏両面に顕著な凹みがある。20は安山岩の縁礫を素材とする石皿であり，なめらかな凹み面を持つが，その中央に敲打が残り台石として転用されたようである。



第３図　Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区の縄文土器



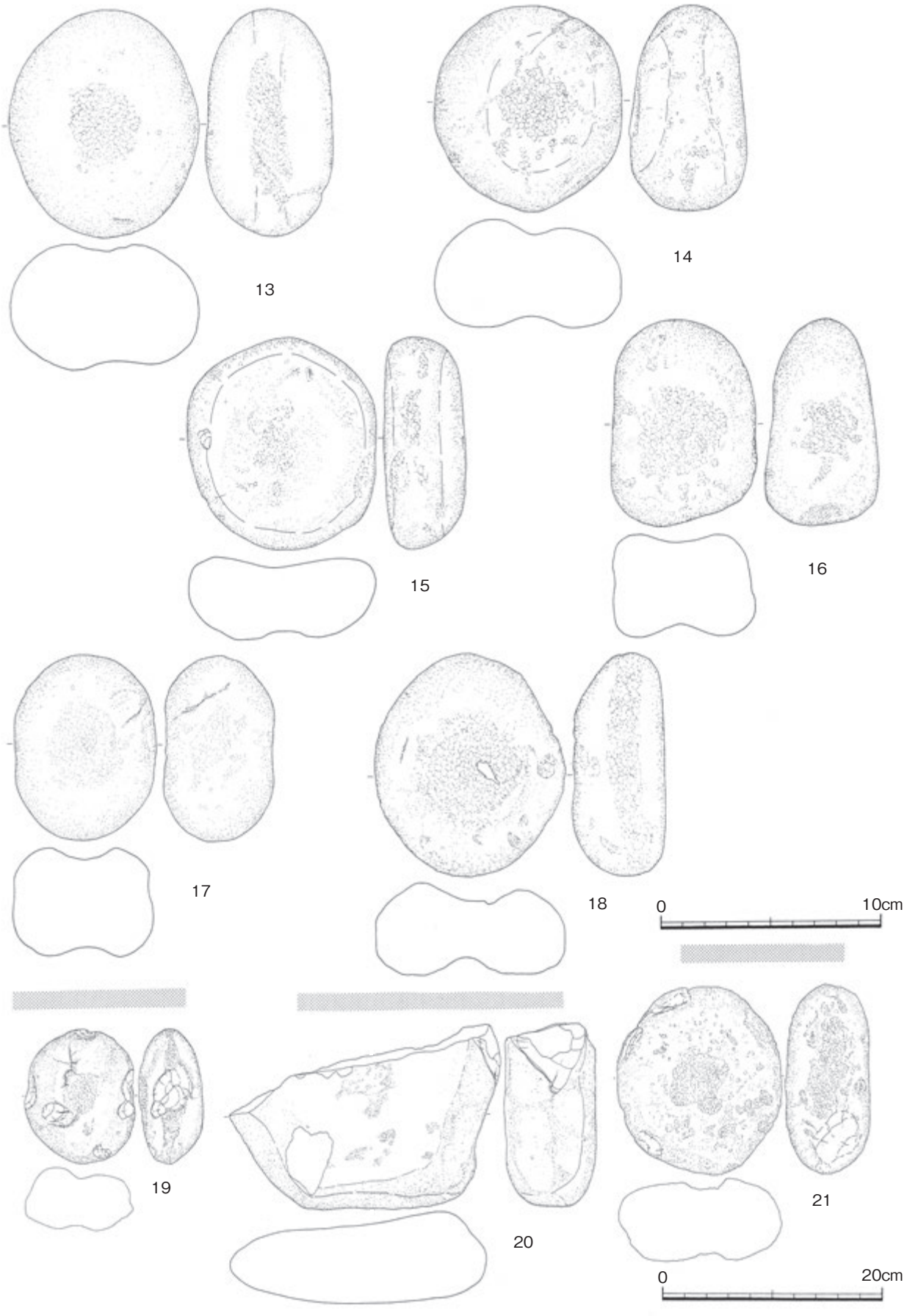
第４図　L・O・Q 調査区の石器１

L・O・Q 調査区の縄文土器観察表

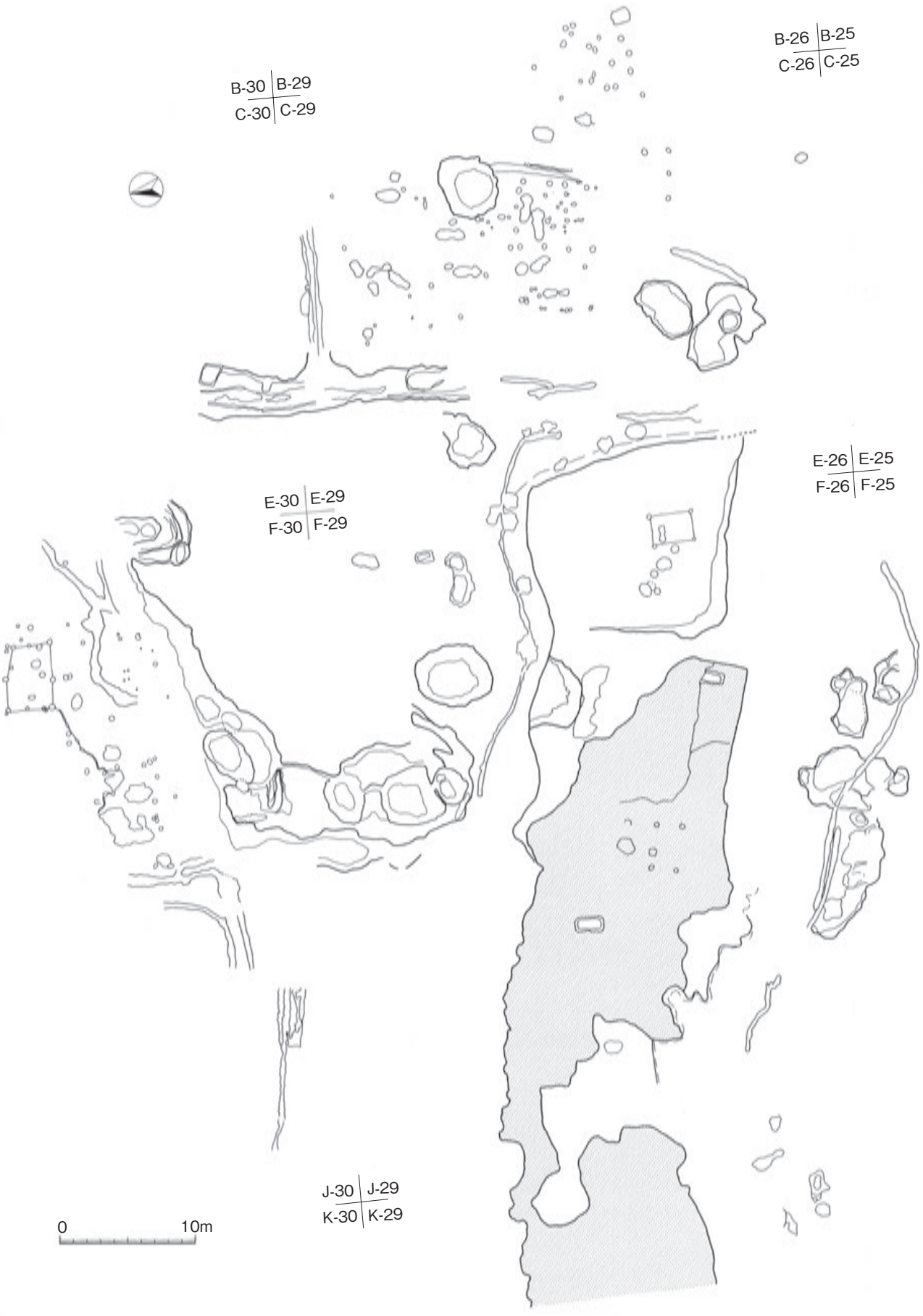
挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	層	器種	部位	法量（cm）			調整		色調		備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
第3図	1	C27	1315，1410	Ⅱ	深鉢	口縁部	21.6	―	―	施文	ナデ	黒褐色	淡黒褐色	短沈線格子
	2	L	一括	―	深鉢	口縁部	―	―	―	ナデ	ナデ	淡褐色	淡褐色	短沈線綾杉
	3	C27	1422	Ⅱ	深鉢	胴　部	―	―	―	ナデ	ナデ	赤褐色	黒褐色	短沈線鋸歯文
	4	K，L24	一括，1054	Ⅲ	深鉢	口縁部	29.6	―	―	ナデ	ナデ	黒褐色	褐　色	2条の刻目突帯文
	5	K	一括	―	深鉢	口縁部	―	―	―	ナデ	ナデ	黒褐色	淡赤褐色	1条の刻目突帯文

L・O・Q 調査区の石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層	取り上げ番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）
第４図	6	磨製石斧	頁岩	P －44	墓・埋土	一括	12.1	5.4	2.5	256.0
	7	磨製石斧	石英脈岩	L	―	一括	11.7	5.1	2.1	208.0
	8	石鏃	黒色安山岩	―	―	―	2.2	2.0	0.4	1.5
	9	石鏃	鉄石英	H・I －32	―	一括	2.2	1.4	0.5	1.1
	10	石鏃	鉄石英	L －21	表土	一括	1.1	1.6	0.4	0.75
	11	削器	黒曜石	C －27	Ⅱ	1417	2.4	1.5	0.6	1.5
	12	石匙	黒曜石	B －27	Ⅱ	1387	4.1	2.7	1.0	9.4
第５図	13	凹石	安山岩	K	―	一括	10.3	8.7	5.8	766.0
	14	凹石	安山岩	O	表採	一括	9.3	8.6	5.3	608.0
	15	凹石	安山岩	O	表土	一括	8.6	8.7	3.8	474.0
	16	凹石	安山岩	G －28	Ⅲ	764	9.3	6.7	5.2	480.0
	17	凹石	安山岩	O	表土	一括	8.4	6.4	5.1	414.0
	18	凹石	安山岩	P・Q －24・25	Ⅰ	一括	10.1	8.7	4.3	482.0
	19	凹石	安山岩	G －30	土坑３	37	12.3	9.9	5.7	944.0
	20	石皿	安山岩	D －27	Ⅳ	270	16.7	23.4	8.2	4400.0
	21	凹石	安山岩	O	表採	一括	17.2	14.9	7.6	2600.0



第５図　Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区の石器２



第６図　Ｌ・Ｏ・Ｑ・Ｎ調査区遺構配置図

Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区は遺跡の北東部分に位置する。地形は北～北西の方角へ傾斜しており，各調査区それぞれ一部削平を受けている。遺構は，それぞれ古代～中世の遺物が出土するⅡ層から検出され，Ｌ調査区から炉状遺構，Ｌ・Ｑ調査区から掘立柱建物跡，Ｏ調査区から溝状遺構，Ｏ・Ｑ調査区から大型土坑，Ｑ調査区から鉄生産関連遺構がそれぞれ検出されている。遺構内からは古代～近世にかけての遺物が出土した。遺物は古代～近世のものが出土している。

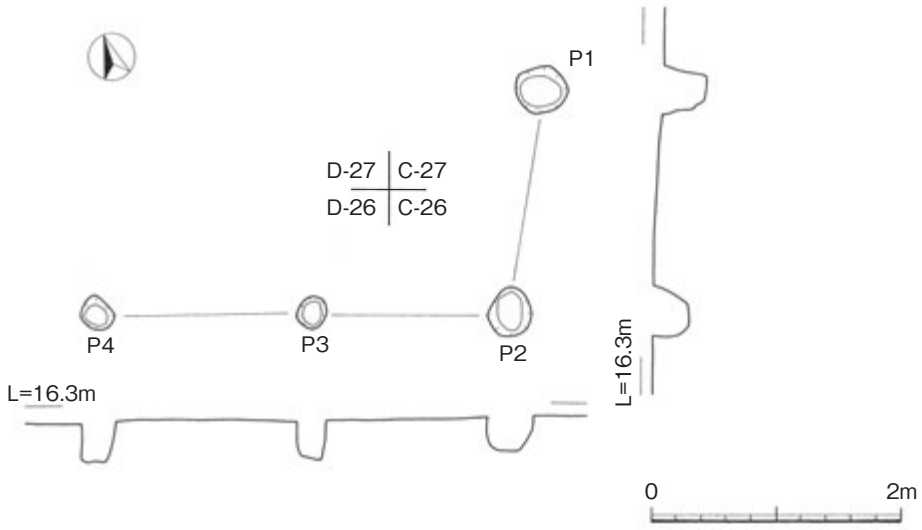
１．古代～中世の調査

（１）遺構の概要

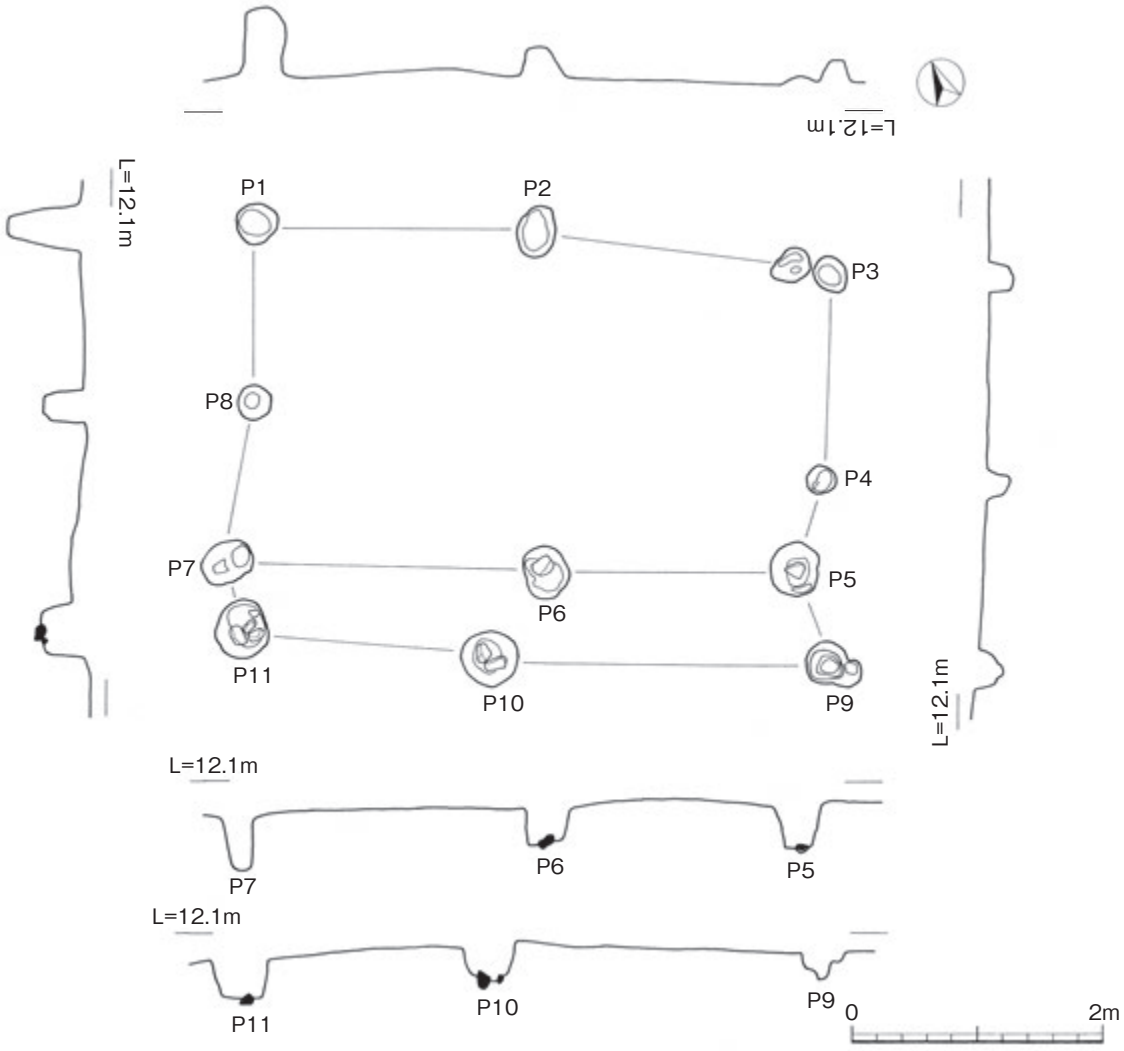
Ｌ調査区からは掘立柱建物１棟と大型土坑３基が検出されている。いずれも遺構内からの遺物の出土がみられず時期比定が難しいが，周辺の遺物の出土状況や，Ｏ調査区と類似する遺構の特徴などから判断して，この時期に比定した。Ｏ調査区からは大型土坑６基・溝状遺構２条が検出されている。遺構内からは古代～中世の遺物の出土が見られたが，古代では刻書土器や耳皿などが，中世では鞴羽口や鉄滓などの鉄生産関連遺物が目立つのが特徴である。鉄生産関連遺物に関しては，隣接するＱ調査区あるいはＮ調査区との関連性が考えられる。Ｑ調査区からは掘立柱建物１棟・鍛冶関連遺構１基・溝状遺構２条が検出されている。

①掘立柱建物跡（第７・８図）

Ｌ・Ｏ調査区からそれぞれ１棟ずつの掘立柱建物跡が検出されている。Ｌ調査区のものは，削平のため全体的な形状は不明だが，Ｏ調査区のものは柱穴に根石をもつ片庇付きの建物である。建物の周辺には炉状遺構や大型土坑，鉄生産関連遺構等がみられることから，家屋というよりは作業小屋等の施設として利用されていたものと思われる。



第７図　掘立柱建物跡１



第８図　掘立柱建物跡２

掘立柱建物跡１（第７図　Ｌ調査区）

Ｃ・Ｄ－26・27グリッドから検出された。遺構の北西部分にかけて削平を受けているため，全体の形状は明らかではないが，少なくとも１間×２間以上の建物になると思われる。１間の長さが1.5～1.8m程の小型のものである。

掘立柱建物跡２（第８図　Ｑ調査区）

Ｆ・Ｇ－31・32グリッドから検出された。２間×２間の建物で，南西側に片庇をもつ。１間の長さは1.5～2.5m程であるが，梁行の方が間が短い。一部の柱穴の底部には根石がみられる。建物に近接して鉄生産関連遺構があり，それとの関連性が想定される。

掘立柱建物跡１

主軸方向	柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	掘り方	柱穴番号	柱間（cm）	梁行（cm）	
N70°W	P1	42.0	38.0	35.0	円	P1-P2	174.0	P1-P2	174.0
	P2	40.0	36.0	30.0	円	P2-P3	156.0	桁行（cm）	
	P3	27.0	25.0	30.0	円	P3-P4	174.0	P2-P3	156.0
	P4	28.0	28.0	30.0	円			P3-P4	174.0

掘立柱建物跡２

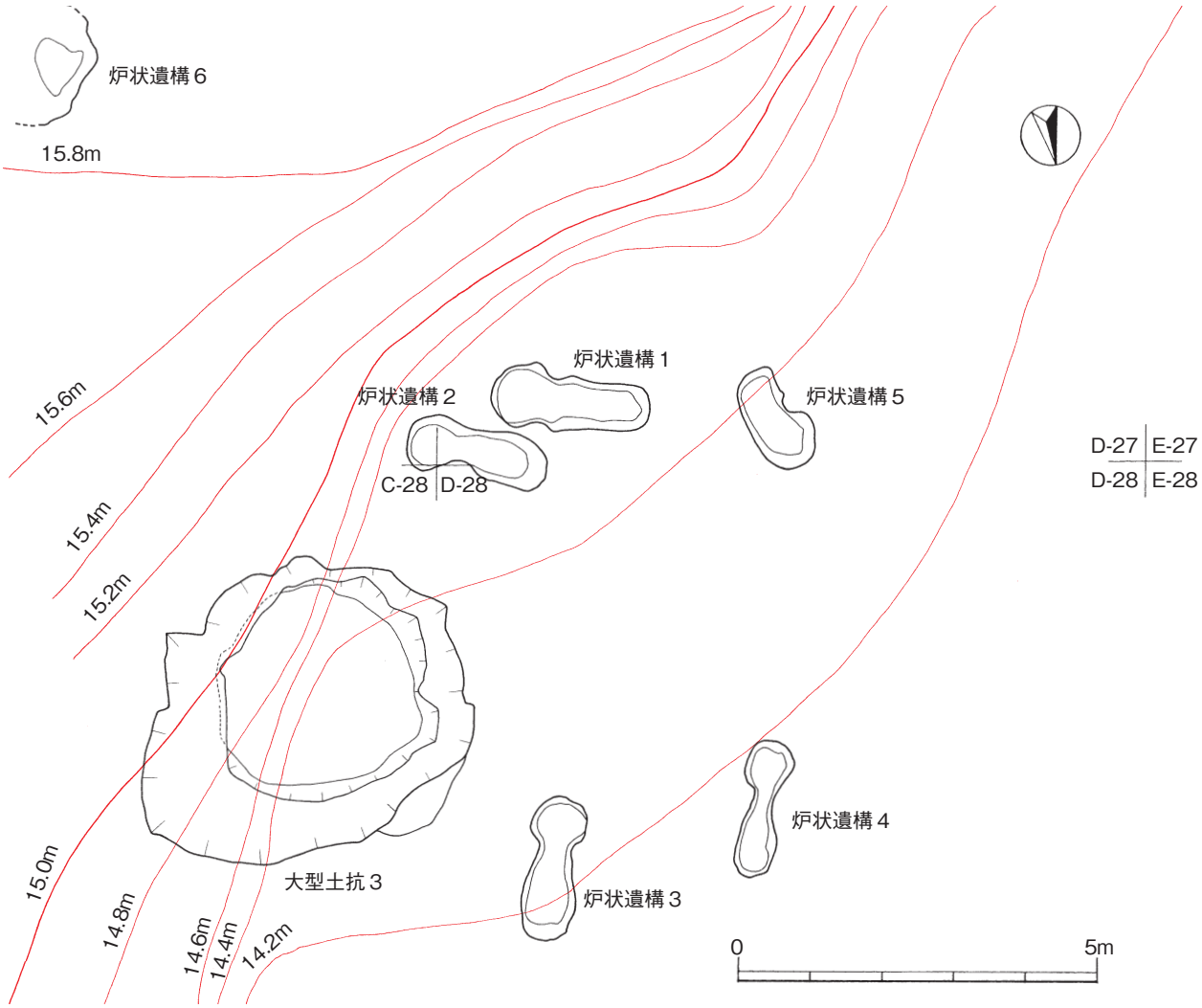
主軸方向	柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	掘り方	柱穴番号	柱間（cm）	梁行（cm）	
N70°W	P1	32.0	32.0	55.0	円	P1-P2	225.0	P1-P8-P7	270.0
	P2	42.0	30.0	24.0	楕円	P2-P3	238.0	P1-P8-P7-P11	320.0
	P3	30.0	28.0	18.0	円	P3-P4	164.0	P3-P4-P5	240.0
	P4	24.0	22.0	18.0	円	P4-P5	76.0	P3-P4-P5-P9	320.0
	P5	42.0	38.0	34.0	円	P5-P6	284.0	桁行（cm）	
	P6	43.0	36.0	30.0	円	P6-P7	254.0	P1-P2-P3	463.0
	P7	42.0	32.0	44.0	楕円	P7-P8	130.0	P5-P6-P7	458.0
	P8	28.0	28.0	34.0	円	P8-P1	140.0	P9-P10-P11	475.0
	P9	48.0	34.0	22.0	楕円	P5-P9	80.0		
	P10	46.0	44.0	30.0	円	P9-P10	275.0		
	P11	46.0	44.0	30.0	円	P10-P11	200.0		
						P11-P7	50.0		



掘立柱建物跡１



掘立柱建物跡２



第９図　炉状遺構配置図（Ｌ調査区）

②炉状遺構（第９～11図）

炉状遺構はＬ調査区から全部で６基確認された。分布状況はＣ・Ｄ－27～29区と，Ｈ～Ｊ－31・32区に集中している。検出時には上半分が削平もしくは崩落・消失しているものが殆どであるが，Ｈ～Ｊ－31・32区にある炉状遺構は比較的残り具合が良好なものがある。また，建物内に築かれた痕跡はない。形状でみると，Ｃ字状あるいは円形の燃焼部（炉壁）と灰の掻き出し部を有し上面観で鍵穴状を呈するものと，長方形・楕円形状のものとに二分できるようである。遺構内からの出土遺物が殆どなく時期比定が難しいが，周辺の遺物の出土状況や，Ｏ調査区と類似する遺構の特徴などから判断して，この時期に比定した。

炉状遺構１（第10図　Ｌ調査区）

Ｄ－27区において検出された。長軸は約2.2m を測る。Ｃ字状の燃焼部は熱によりレンガ状を呈している。掻き出し部には炭化物を多く含む暗茶褐色土が堆積する。

炉状遺構２（第10図　Ｌ調査区）

Ｃ・Ｄ－27・28区において検出された。１号炉状遺構とほぼ隣接する位置である。長軸は約1.95

mを測る。C字状の燃焼部は熱によりレンガ状を呈している。また炉を構成していたと考えられる約15cm 程の礫が一つ見られる。床には炭化物が見られ，これは燃焼部の奥にいくほど厚く堆積しており，最大で約14cm 程を測る。掻き出し部には炭化物を多く含む暗茶褐色土が堆積する。

炉状遺構３（第10図　L 調査区）

D －28区において検出された。検出時に上部の殆どが削平され基礎部が僅かに残る程度である。長軸は約1.96m を測る。内部には炭化物を少量含む暗茶褐色土が堆積し，一部にシラスや炭化物層が見られる。

炉状遺構４（第10図　L 調査区）

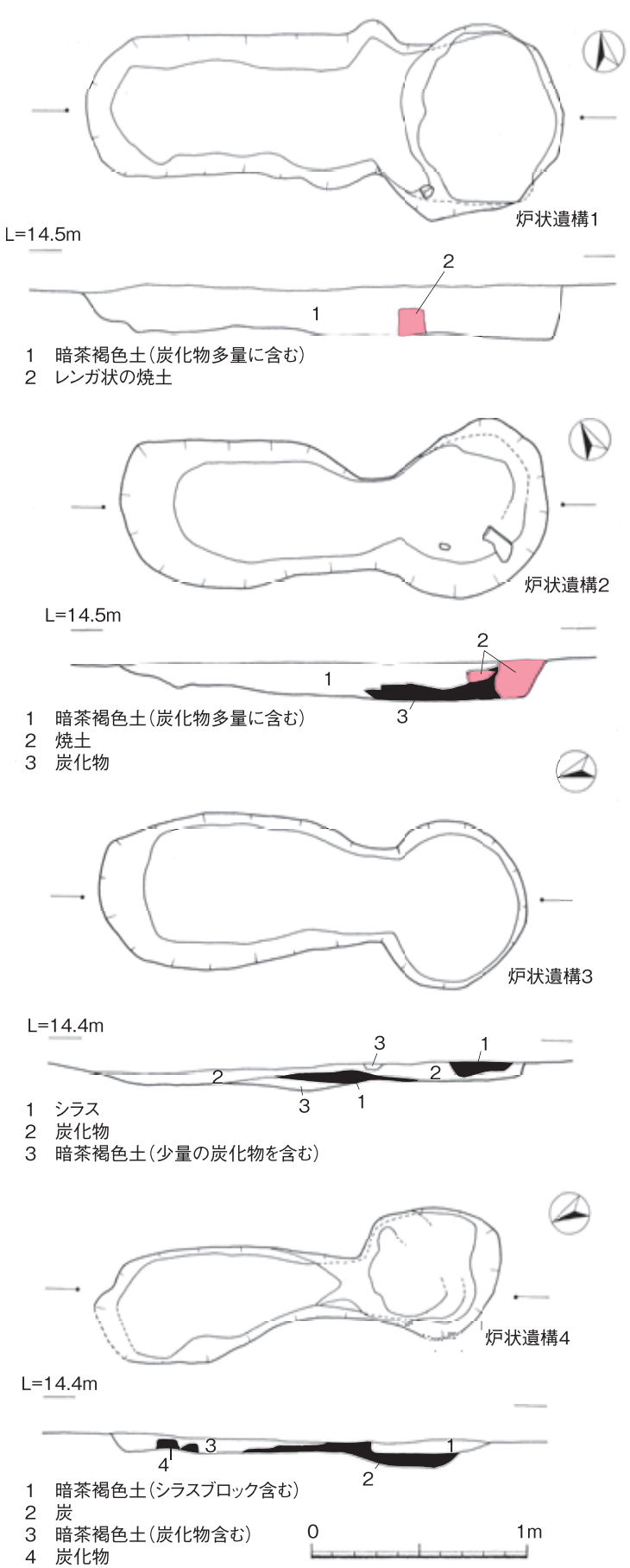
D －28区において検出された。３号炉状遺構の約２m西へ位置する。検出時に上部の殆どが削平され基礎部が僅かに残る程度である。燃焼部の床面と掻き出し部の床面に広く炭化物が見られ，その上をシラスのブロックを含む暗茶褐色土が覆っている。

炉状遺構５（第11図　L 調査区）

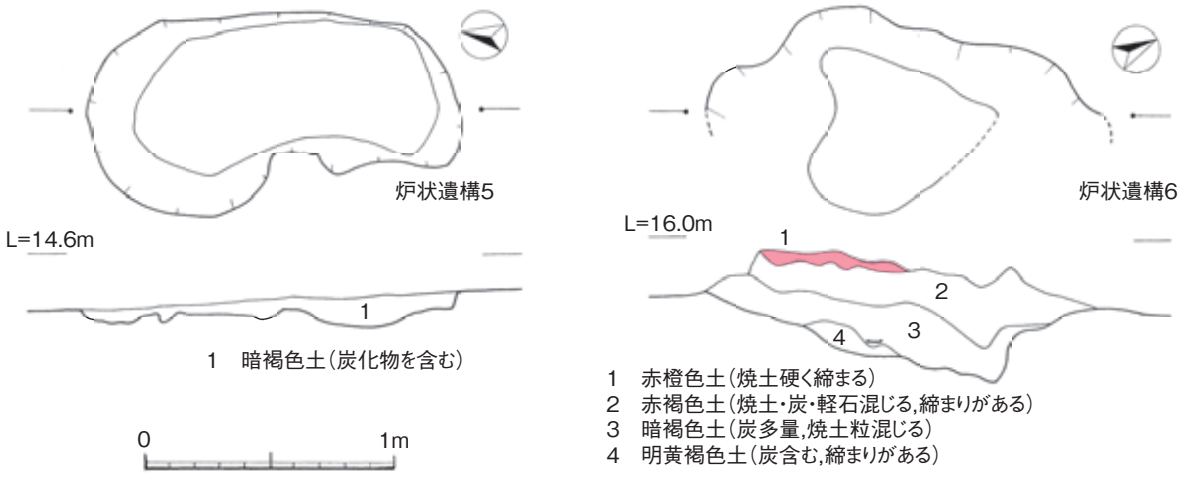
D －27・28区において検出された。検出時に上部の殆どが削平され基礎部が僅かに残る程度である。長軸は約1.5m を測る。内部には炭化物を含む暗茶褐色土が堆積する。

炉状遺構６（第11図　L 調査区）

C －27区において検出された。アカホヤ火山灰層の上面で検出された。約半分が切られて全体形状は不明である。埋土は熱を受けている。埋土から遺物が出土し，その殆どが古代に属するものである。



第10図　炉状遺構１～４



第11図　炉状遺構５・６

③大型土坑（第12～26図）

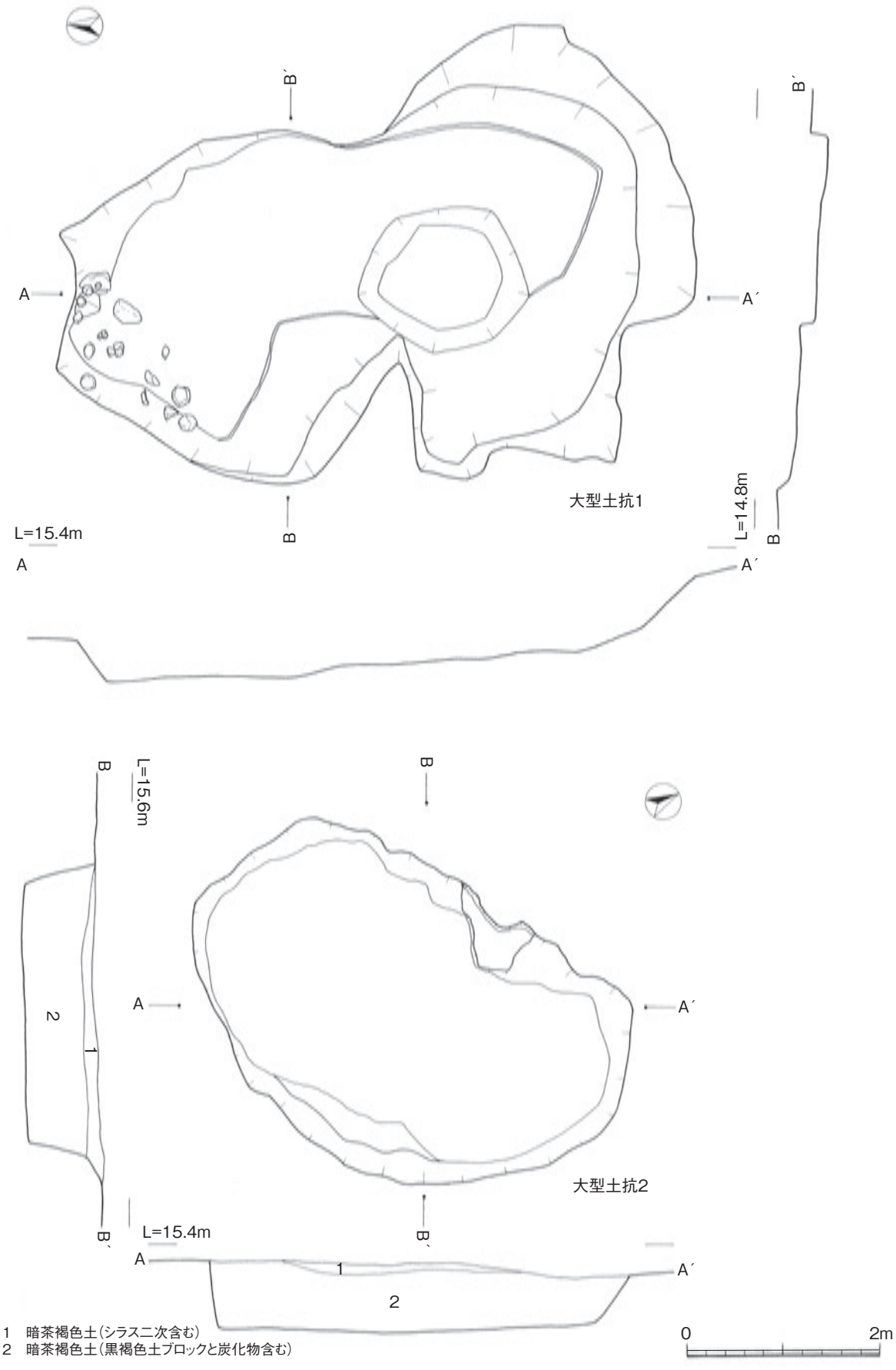
大型土坑はＬ・Ｏ調査区で検出されている。いずれも２ｍ以上のもので，なかには10ｍを超すものもみられた。その大部分は底部から水が浸み出てくる状態であった。大型土坑はその特徴から大きく２つの性格に分けられる。一つはそれぞれ単基で存在するもので，大型土坑１～５がそれにあたる。床面から水が浸み出るものが多いこと，床面に粘土状のものが貼り付けられたようなものがあることなどから，水を溜めることに主眼がおかれた遺構と思われる。もう一つはそれぞれの土坑が溝状遺構で連結しているもので，大型土坑６～９が対象となる。それぞれが連結していることから，全体を通じて一つの作業を行うための施設と考えられる。床面から水が浸み出るものが多いことや溝で連結していることなどから，溜まった水を次の土坑に流すことを目的とした作業が想定される。

大型土坑１（第12図　Ｌ調査区）

Ｄ・Ｅ－26・27グリッドから検出された。中央部がくびれた不整形を呈し，長軸約6.7ｍ×短軸約3.6～4.5ｍ，くびれ部約2.3ｍ，深さ約50cm の大型の土坑である。埋土はシラスとシラス上の黒色土が混ざった暗褐色土で，若干砂質をおび，締まりがなくサラサラしている。斜面上に立地するため，底の方は水が浸み出てくる状況であった。土坑の北西側に大型の礫が散乱していたが，上からの転落と思われる。遺物の出土は見られなかった。

大型土坑２（第12図　Ｌ調査区）

Ｄ－25グリッドから検出された。楕円形に近い形状を呈し，長軸約4.9ｍ×短軸約3.0ｍ，深さ約70cm の大型の土坑である。埋土は２つに分層でき，上層が二次シラスを含む暗茶褐色土，下層が


B´
A
A´
大型土抗1
L=14.8m
B
L=15.4m
A
A´
B
L=15.6m
B
A
A´
2
1
大型土抗2
B´
L=15.4m
A
1
A´
2
1　暗茶褐色土（シラス二次含む）
2　暗茶褐色土（黒褐色土ブロックと炭化物含む）
0
2m

第12図　大型土抗１・２



第13図　大型土坑３

暗茶褐色土にシラス上の黒褐色土ブロックと炭化物を含んでいる。遺物の出土は見られなかった。

大型土坑３（第13図　L 調査区）

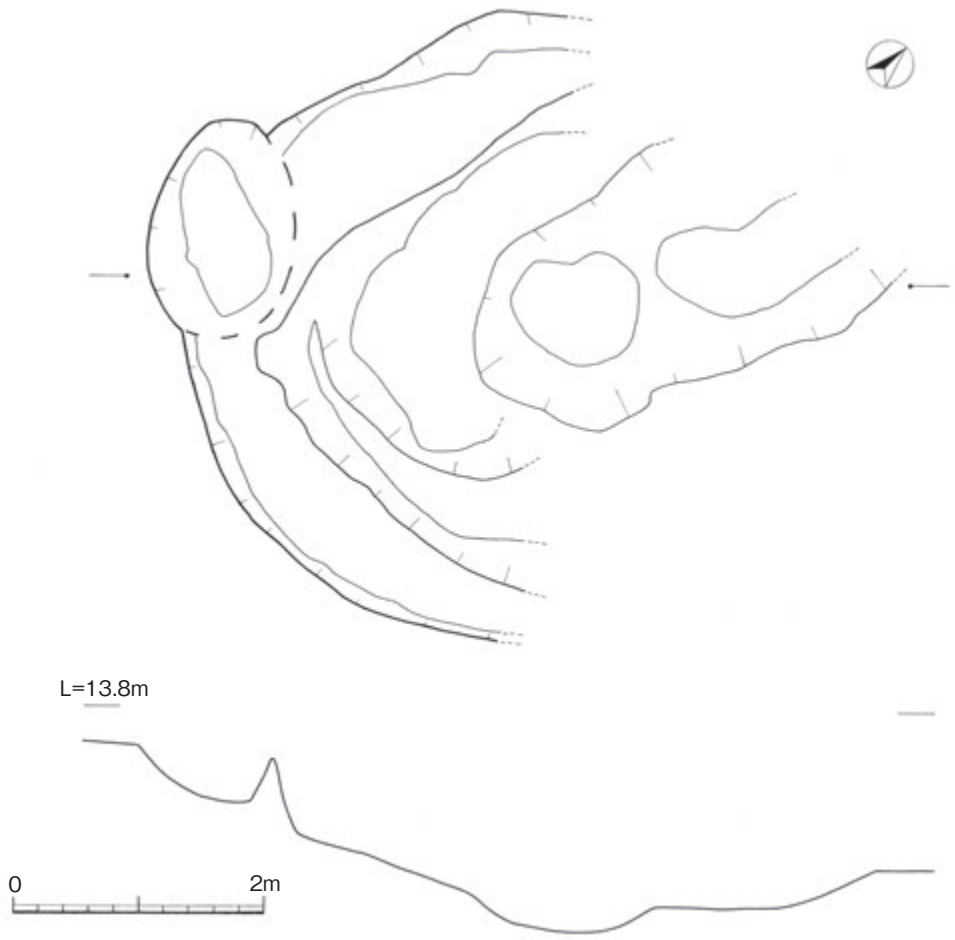
C・D －28グリッドから検出された。円形に近い形状を呈し，長軸約5.2m×短軸約4.2m，深さ約65cm の大型の土坑である。埋土は暗茶褐色土，シラスのブロックを含む暗茶褐色土，乳白色粘質土と層をなしている。乳白色粘質土は床面に貼り付けてあったものなのか，剥がれるようにとれる。

地下水などによりある程度水が溜まっていた可能性が想定される。遺構内からは大型の礫に加え，炭化した木材が出土した。遺物の出土は見られなかった。

大型土坑４（第14～21図　O調査区）

F －30・31グリッドから検出された。残存径で長軸約６m×短軸約５m，深さ約90cm の大型のものである。土坑の北側は，近現代の石垣を構築する際に削平を受けており，ラインは不明である。東側は用地外のため調査が不可能であった。また床面からは水が浸み出てくる状況であった。遺構内からは，上層の暗褐色土より古代～中世の遺物が多量に出土した。また床面には黒色土が広がり，その中より木製品が出土した。

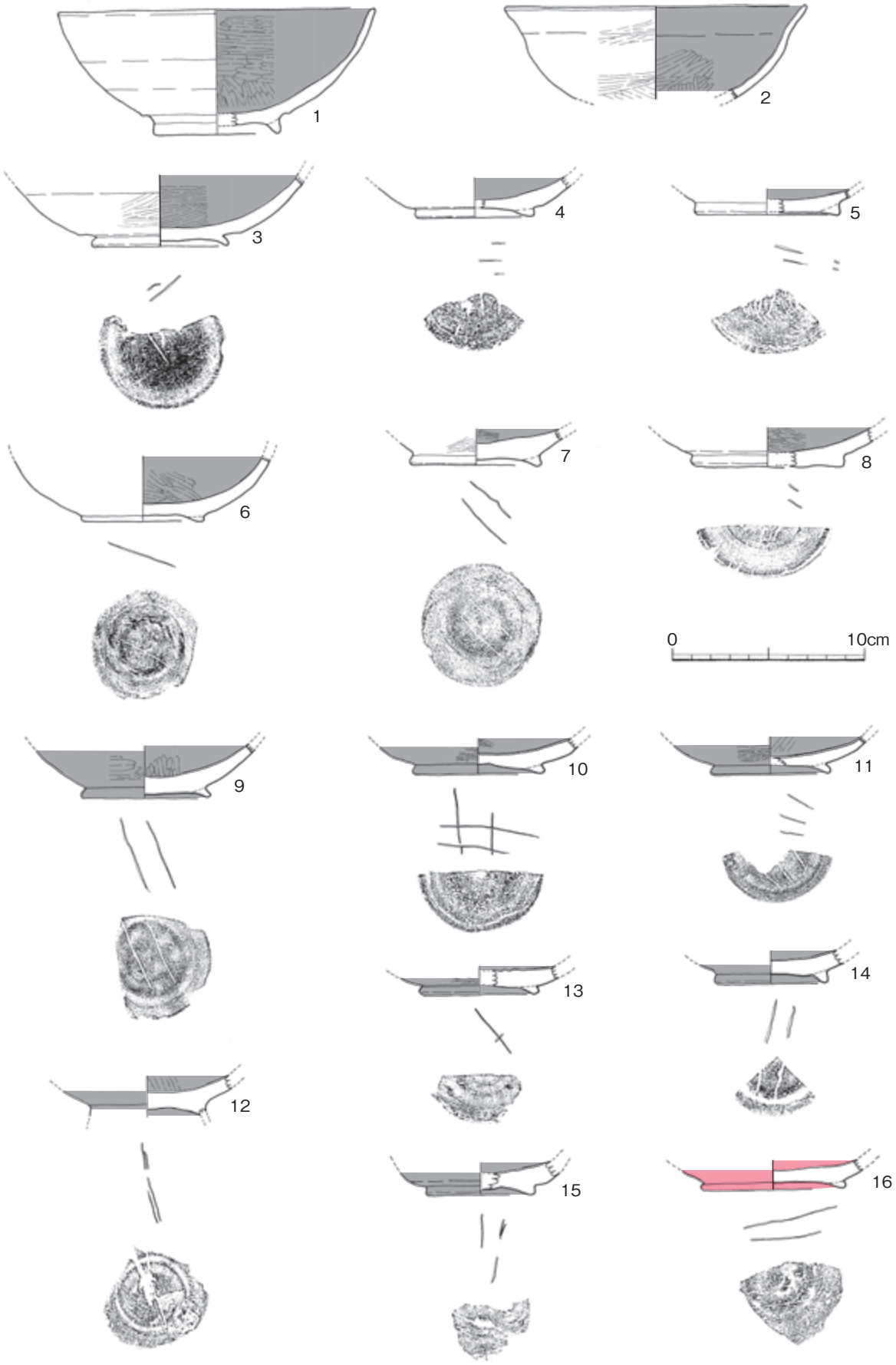
１～24は古代の遺物である。うち，１・２は黒色土器Ａ類の椀である。１は体部から口縁部へ向かって丸みをもって立ち上がり，「ハ」字状の短い高台が付くものである。11～12世紀代頃のものと思われる。２は底部が残存していないが，同じく椀と思われる。体部から丸みをもって立ち上が



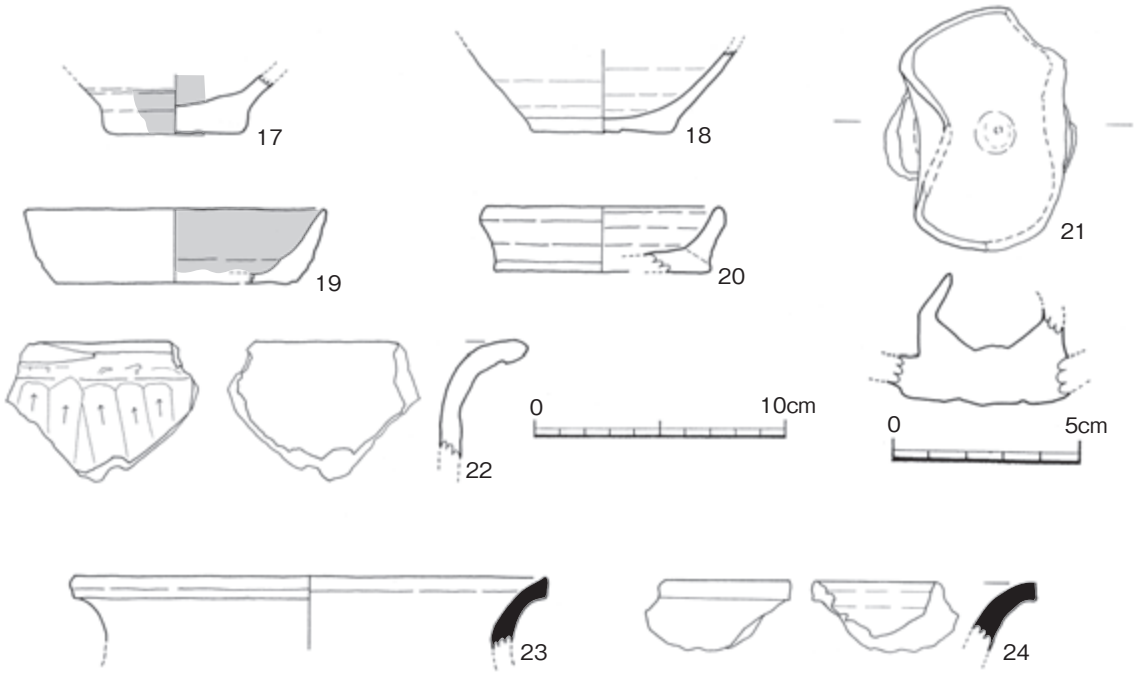
第14図　大型土抗４

り，頸部付近でいったん屈折するように外へ開いている。内外面ともにミガキが施される。３～16は刻書土器である。うち３～８が黒色土器Ａ類，９～15が黒色土器Ｂ類，16は赤色土器Ｂ類である。いずれも椀であり，底部に短い「ハ」字状の高台が付く。高台内底には刻書が認められる。刻書は縦線や横線を組み合わせて記号状にしたもので，「/」・「//」・「－」・「＝」・「＃」などが見られる。１～16は形態的特徴から11～12世紀頃のものと思われる。17は土師器の椀である。充実高台で底部～体部の一部が残存しており，内外面にススが見られる。10世紀前後のものと思われる。19・20は土師器の皿である。篦切り底で19は内面にススが見られる。21は耳皿である。突高台の上に浅い皿状のものが付き，両側縁が内向きに折り返してある。折り返しは片縁の方が強い。10世紀頃と思われる。22は土師器の甕である。口縁が如意状に外反し，内面は胴部～頸部にかけて縦方向のケズリが見られる。23・24は須恵器の甕である。口縁端部がやや肥厚し，四角く収めている。

25～34は中世の遺物である。25は坏で口径16cm である。体部が丸みをもって立ち上がるもので，11～12世紀頃のものと思われる。26～29は土師器の皿で，口径７～９cm である。11～12世紀のものと思われる。29は内外面に一部朱が見られる。30は中世の須恵器である。甕の胴部で外面にタタキが，内面はナデ調整が施されている。31は中世須恵器の樺万丈である。外面に格子目のタタキが入り，内面はハケ目が明瞭に入る。断面はマーブル状の層をなしている。32は擂鉢である。瓦質系で，７本一単位の櫛目が入る。33・34は白磁の椀である。34は高台外面を直立に，内面を斜めに削



第15図　大型土抗４出土遺物１



第16図　大型土抗４出土遺物２（17～20・22～24：S＝1/3，21：S＝1/2）

るもので，内面の見込みに段をもつものである。11世紀後半～12世紀前半のものと思われる。

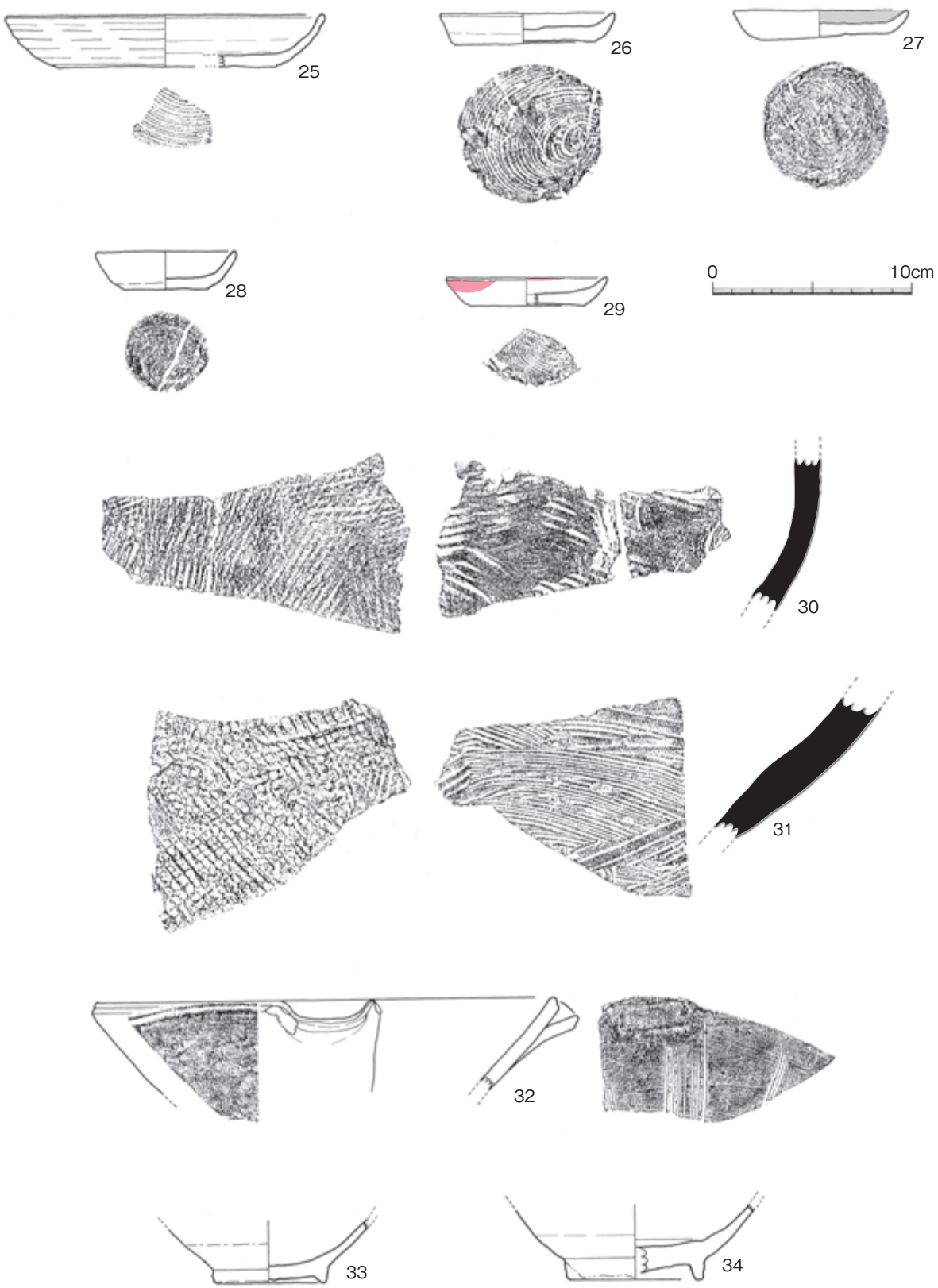
35～44は滑石製の石鍋である。古代～中世の時期のものを含むが，レイアウトの関係上一緒に扱った。35・36は口縁部に縦長の瘤状把手がつくもので，断面が四角形を呈する。11世紀代のものと思われる。37・38は口縁部から１cm ほど下がったところに断面四角形の鍔が廻り，38は鍔に縦方向の穴が穿たれている。39～41は口縁部から２cm ほど下がったところに断面台形状の鍔が廻る。鍔の長さは２cm 程である。37～41は12世紀代のものと思われる。42・43は桶状を呈し，把手や鍔の付かないものである。42は復元口径50cm の大型のものである。10世紀代と思われる。44は石鍋の底部である。復元底径18cm で，厚さは１cm である。

45・46・47は砥石である。45は３面中２面に砥面が認められ，断面が三角形を呈する。46は砂岩で表面が擦面となっており，背面は剥落している。47は幅14cm，厚さ5.5cm の砥石で，中央部分に敲打痕が広く認められる。48は陶器の蓋である。口縁部は内外ともに短い張り出しが認められる。

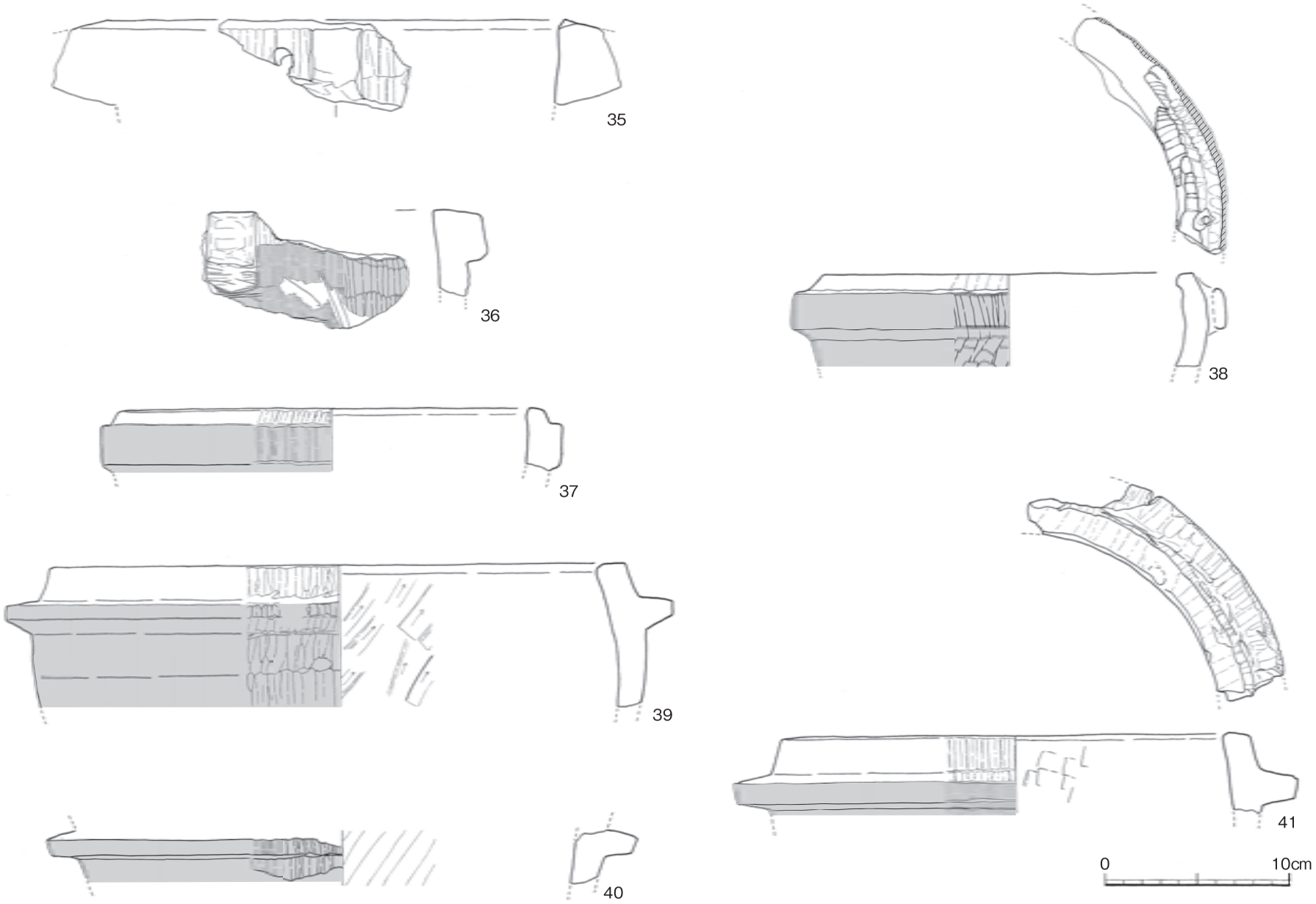
49～51は木製品である。時期比定が難しいが，周辺の遺構と出土遺物から判断して，この時期のものとして扱った。49は建築部材と思われる。両側面に軸を受けるようなホゾ穴が認められ，裏面には支え棒を受けるような斜めのホゾ穴が認められる。用途は不明である。50は薄い板状のものである。曲物の側板の可能性が考えられるが，確証はない。51は道具の柄の部分と思われるが明確ではない。上の方が細くなっており，上下端に穴があけてある。側面にも２つの穴が貫通している。

大型土坑５（第22・23図　O調査区）

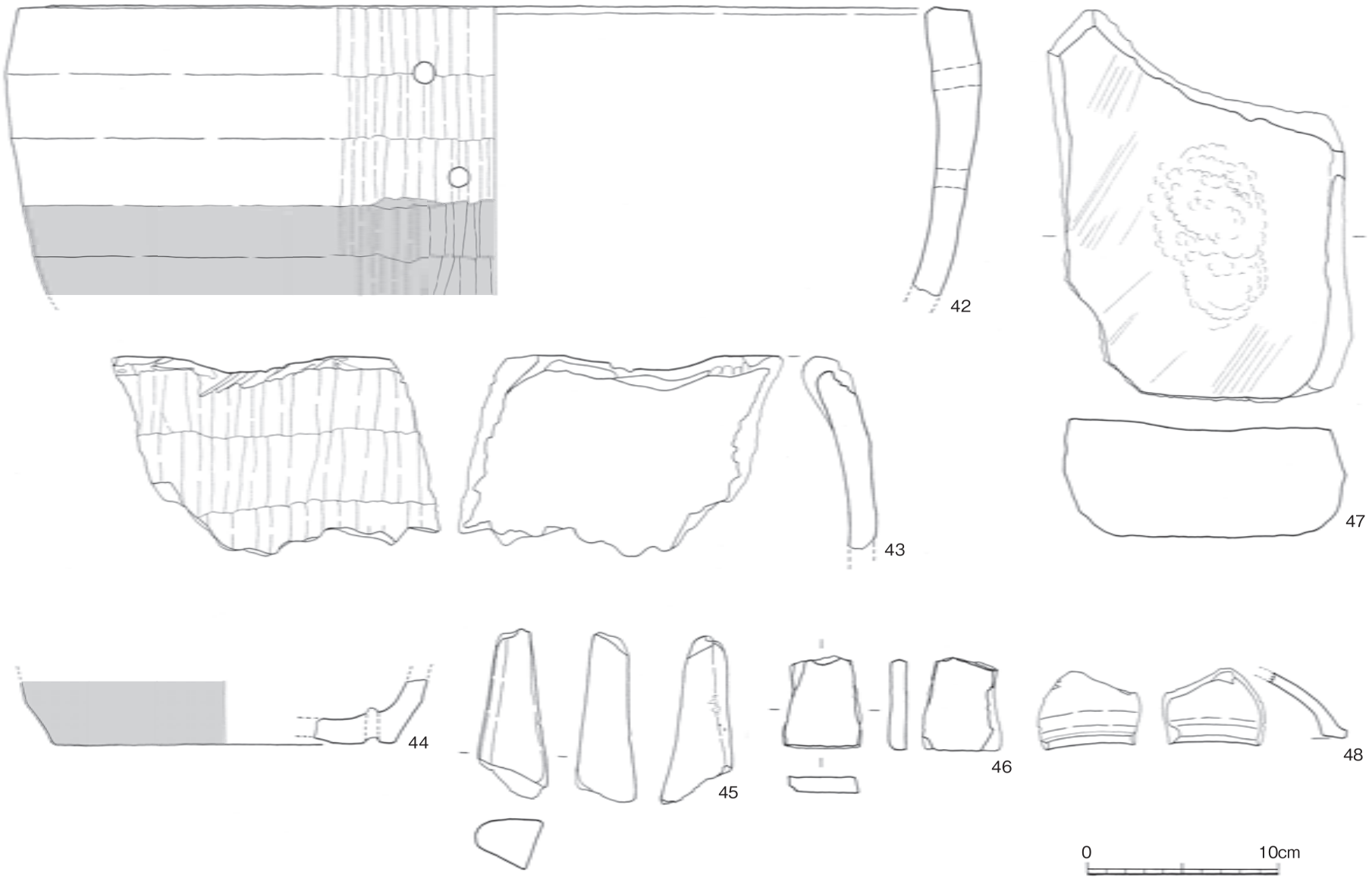
G－30グリッドから検出された。長軸６m×短軸5.5m，深さ約90cm の大型のものである。北側部分は近現代の石垣を構築する際に削平を受けており，ラインは不明である。埋土は大きく２つに分層でき，下層は灰褐色粘質土を基盤とし，黄色砂質土・黒色土・茶褐色土・黄橙色土・白色砂質土のブロックが混入した状態であった。その上をⅡ層に相当すると思われる茶褐色砂質土が覆って



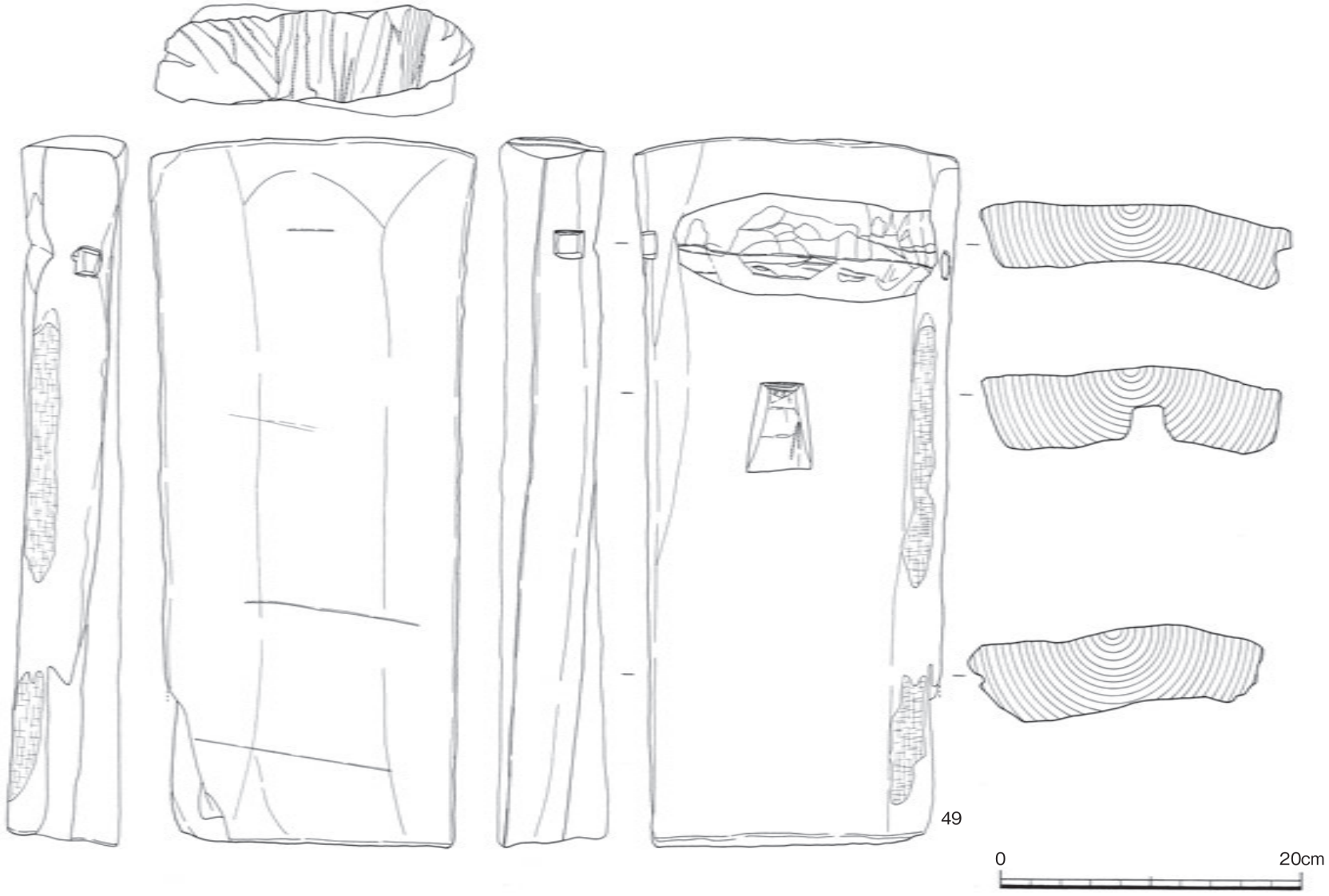
第17図　大型土抗４出土遺物３



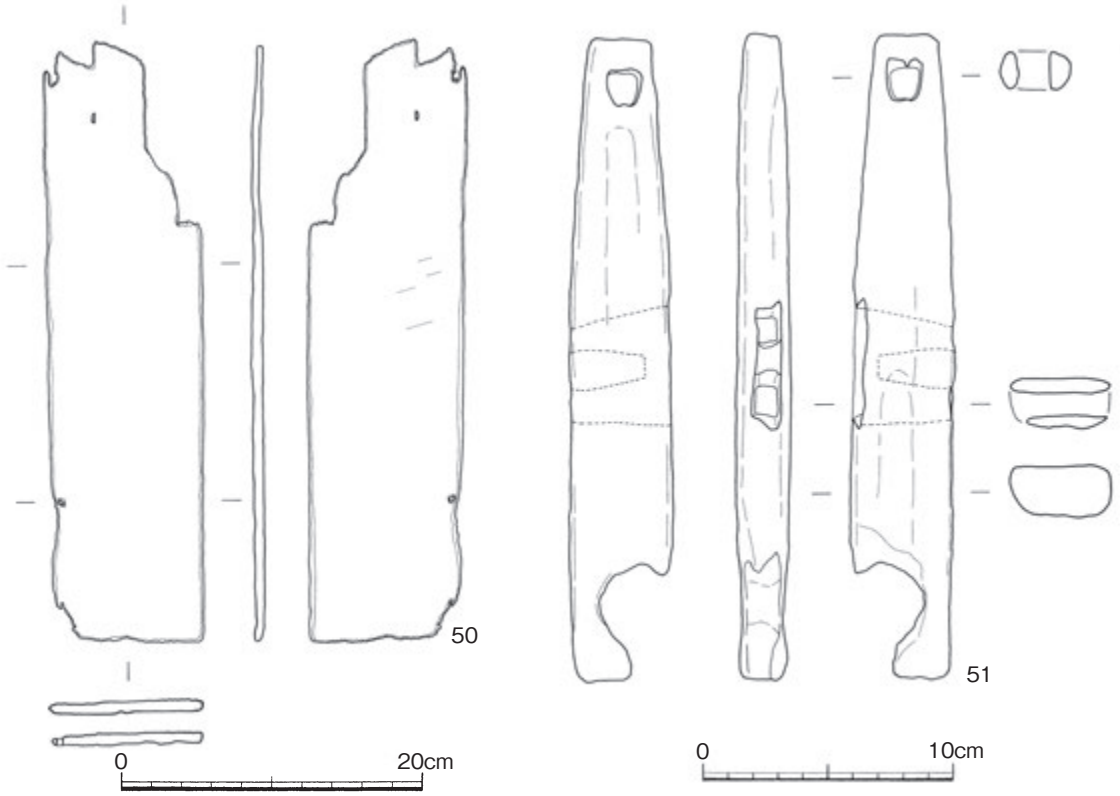
第18図　大型土抗４出土遺物４



第19図　大型土抗４出土遺物５



第20図　大型土抗４出土遺物６



第21図　大型土抗４出土遺物７（50：Ｓ＝1/5，51：Ｓ＝1/3）

いた。幅20cm 程度の細い溝状遺構１によって大型土坑６と繋がっている。床面からは水が浸み出てくる状態であった。遺構内からは古代～中世の遺物の出土がみられた。

52は黒色土器Ｂ類である。土師器の椀であり，底部に短い「ハ」字状の高台が付く。高台内底には「//」の記号が施されている。11～12世紀頃のものと思われる。53・54は土師器の坏である。53は復元口径10cm で，糸切り底と思われる。54も糸切り底であり，体部を打ち欠いて皿状にしている。55は青磁の椀である。龍泉窯系で無文のものである。56は備前焼の擂鉢である。16世紀前半頃のものと思われる。57・58は椀形滓である。上面中央が凹んでおり，磁力反応が認められる。59・60は鞴羽口である。吹き口部分に黒色ガラス質の滓が熔着している。同じく磁力反応が認められる。

大型土坑６（第24図　Ｏ調査区）

Ｇ－29・30グリッドから検出された。楕円形に近い形状を呈し，長軸3.5m×短軸2.5m，深さ約１mの大型のものである。大型土坑５と溝１を介して繋がっている。床面からは水が浸み出てくる状況であった。遺構内からは椀形滓などの鉄滓が出土した。2.5mほどの短い溝を介して大型土坑８とつながっている。

61～63は鉄滓であり，いずれも磁力反応が認められたものである。61は鉄塊系遺物と思われる。表面を酸化土砂が膜のように覆っている。上面中央が凹んでいる。62・63は椀形滓である。送風によって中央部が凹んでいる。63は木炭の痕跡が認められる。

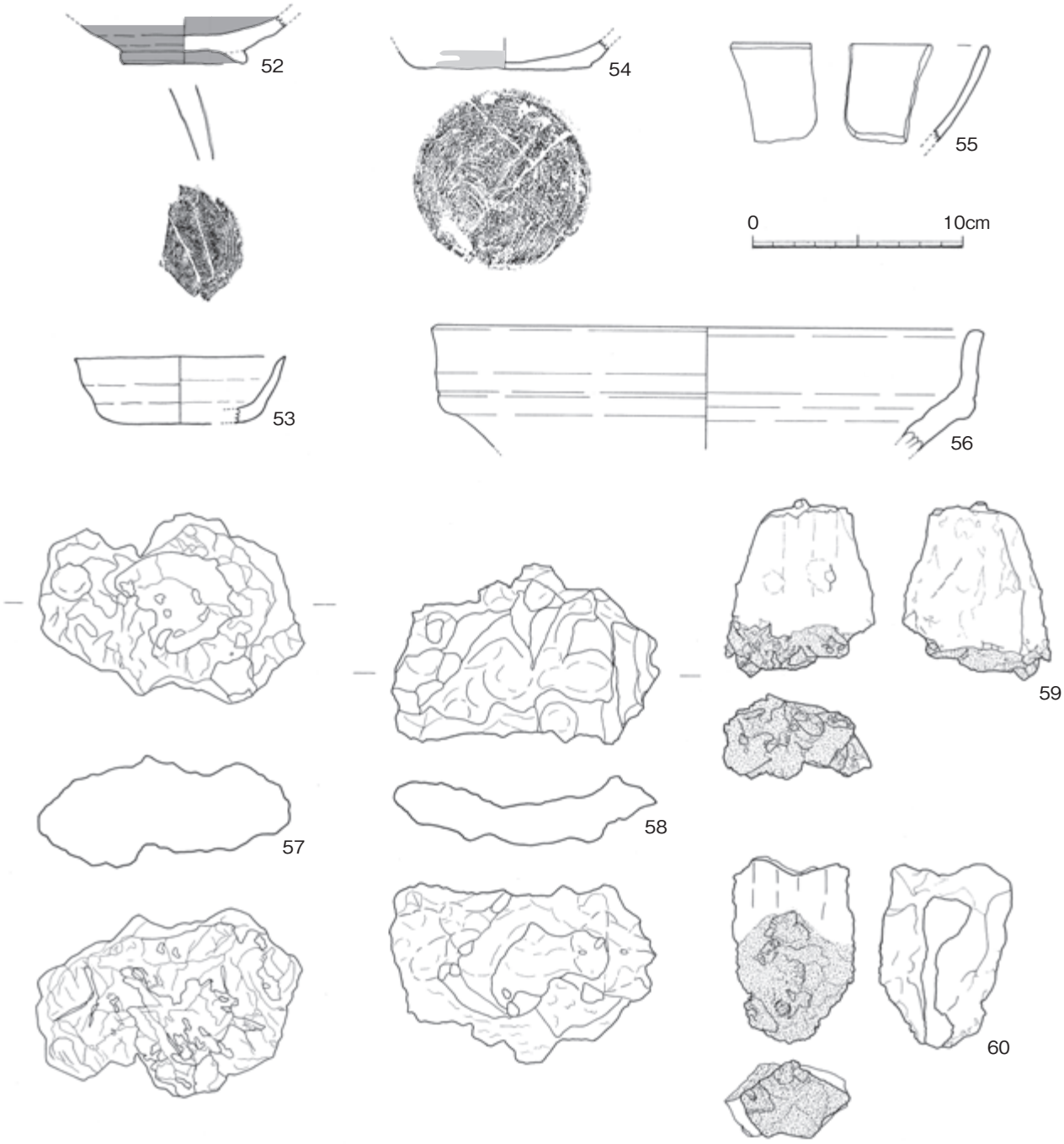
大型土坑７（第25図　Ｏ調査区）

Ｇ・Ｈ－29グリッドから検出された。方形に近い形状を呈し，長軸4.1m×短軸3.8m，深さ35cmの大型のものである。北側は溝を介して大型土坑７と，同じく南側も幅30cm ×長さ20cm ほどの



1　茶褐色土(砂質)
2　明茶褐色土(砂質)
3　茶褐色土(下部は灰褐色土が混入,Ⅱ層か?)
4　灰褐色土(粘質,黄色土・黒色土・茶褐色土・白色土のブロックが混在)
5　シラス

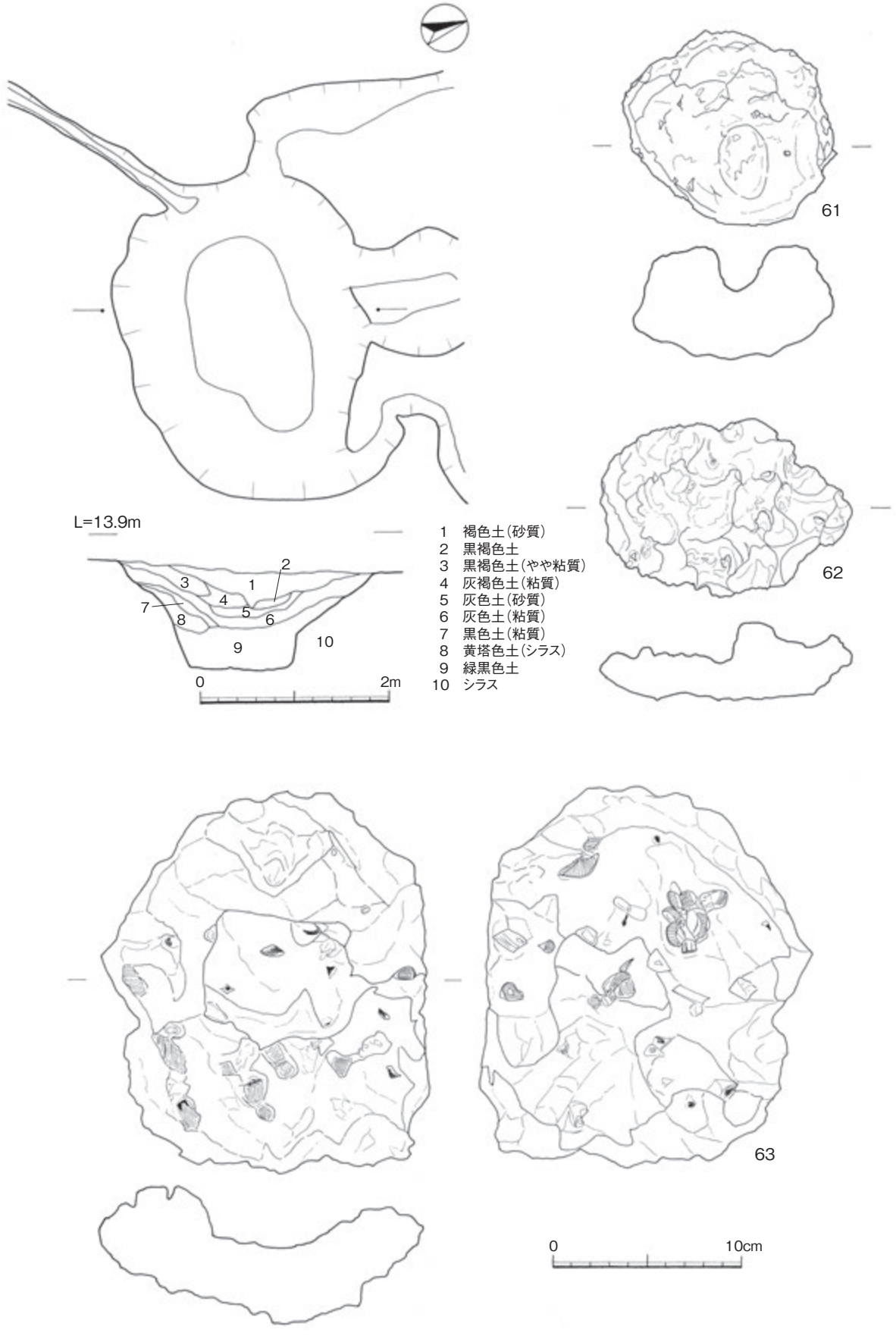
第22図　大型土抗５



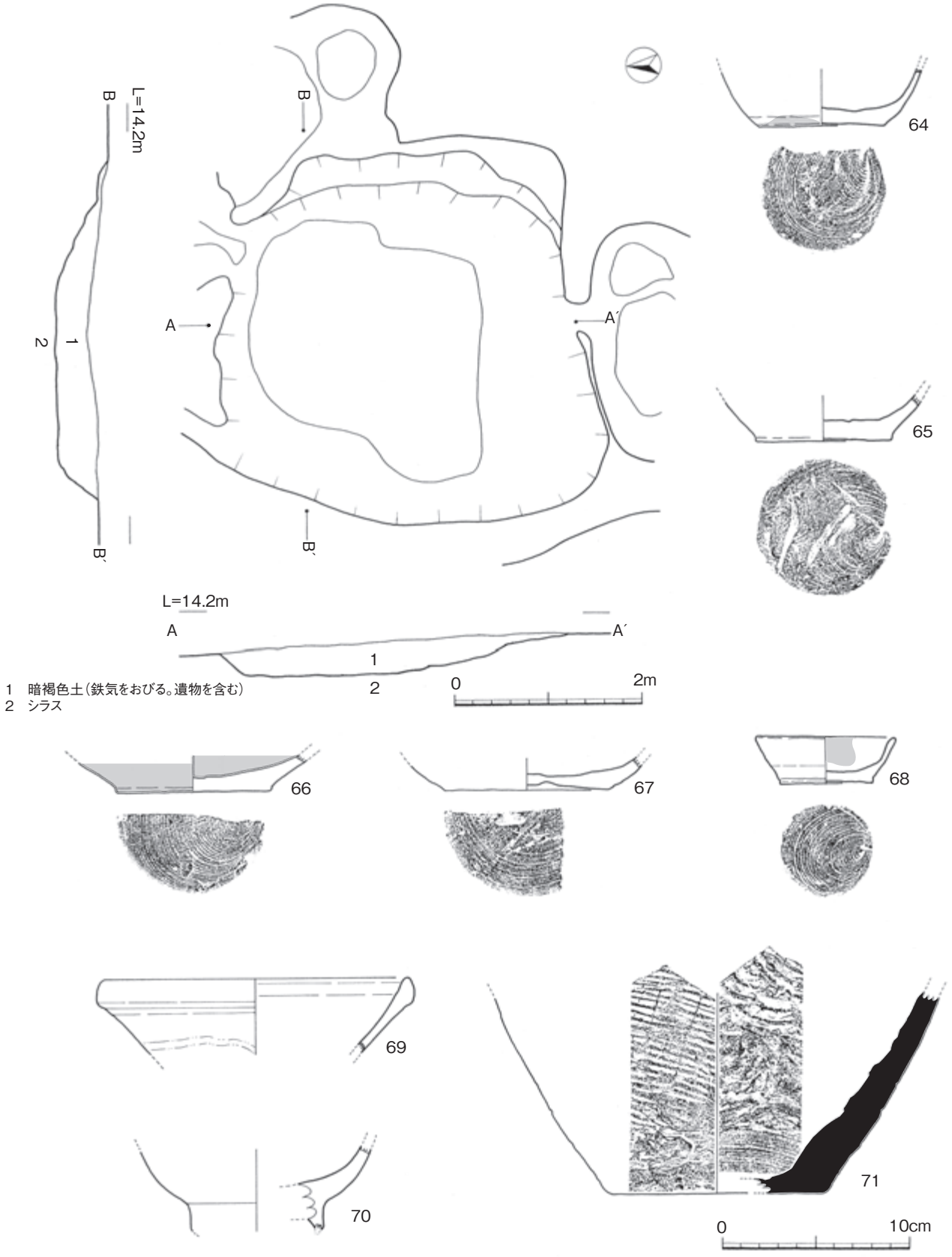
第23図　大型土抗５出土遺物

短い溝を介して大型土坑８と繋がっている。大型土坑２・３・４・６と比べて深さが浅く，床面から水が浸み出てくるようなことはなかった。埋土は細かく分層できるが，基本的には大型土坑２・３と状況は同じである。上層の暗褐色土より中世の遺物が出土した。

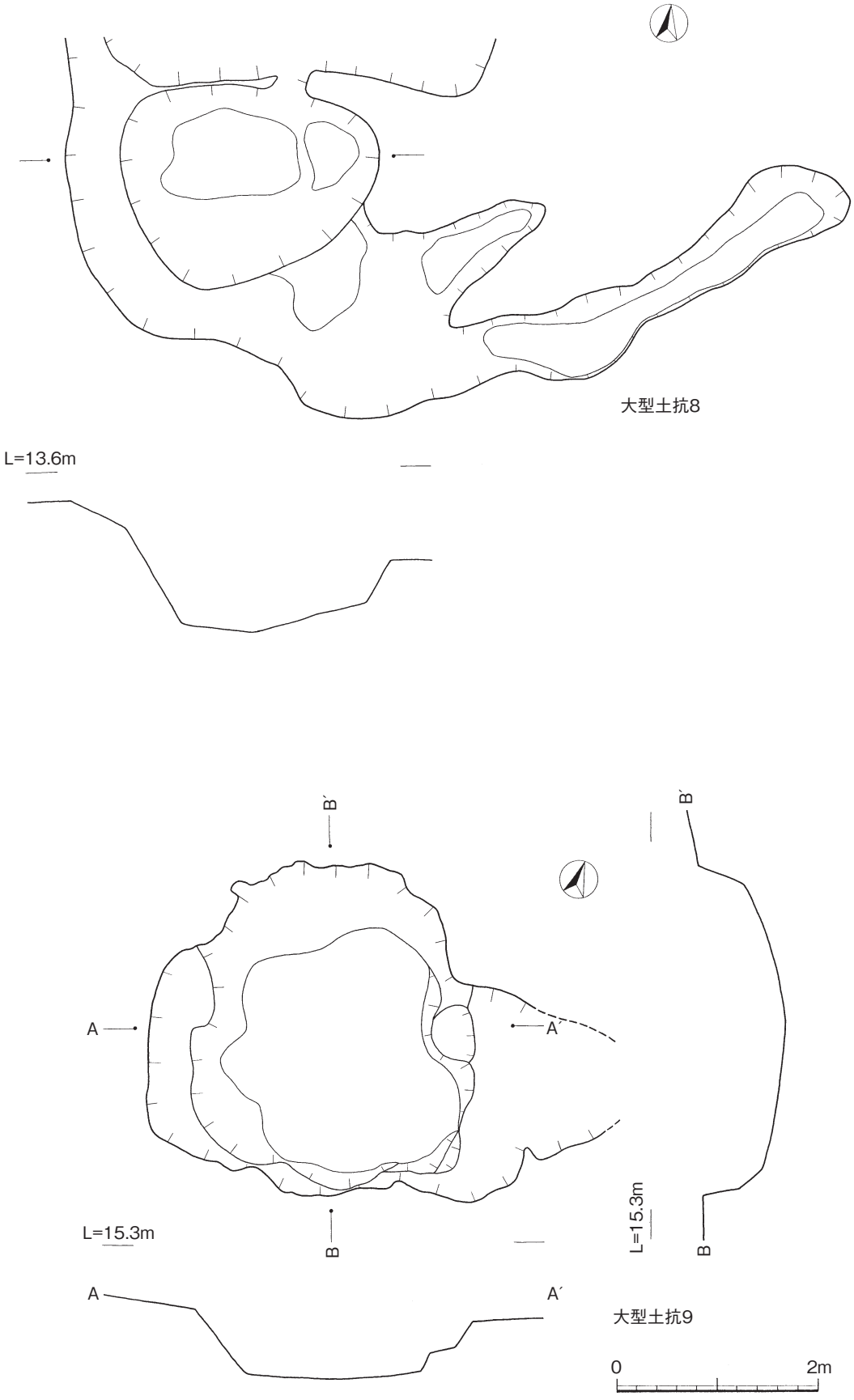
64～67は土師器の坏である。いずれも糸切り底で，体部が欠損している。特に66・67はほぼ底部に近いところしか残存しておらず，意図的な打ち欠きを思わせるものである。68は小皿である。口径7.3cm で一部内面にススの付着が認められ，灯明皿と思われる。15世紀後葉～16世紀末にかけてのものと思われる。69は白磁である。玉縁の口縁で，復元口径16cm である。11世紀後半～12世紀



第24図　大型土抗６と出土遺物



第25図　大型土抗７と出土遺物



第26図　大型土抗８・９

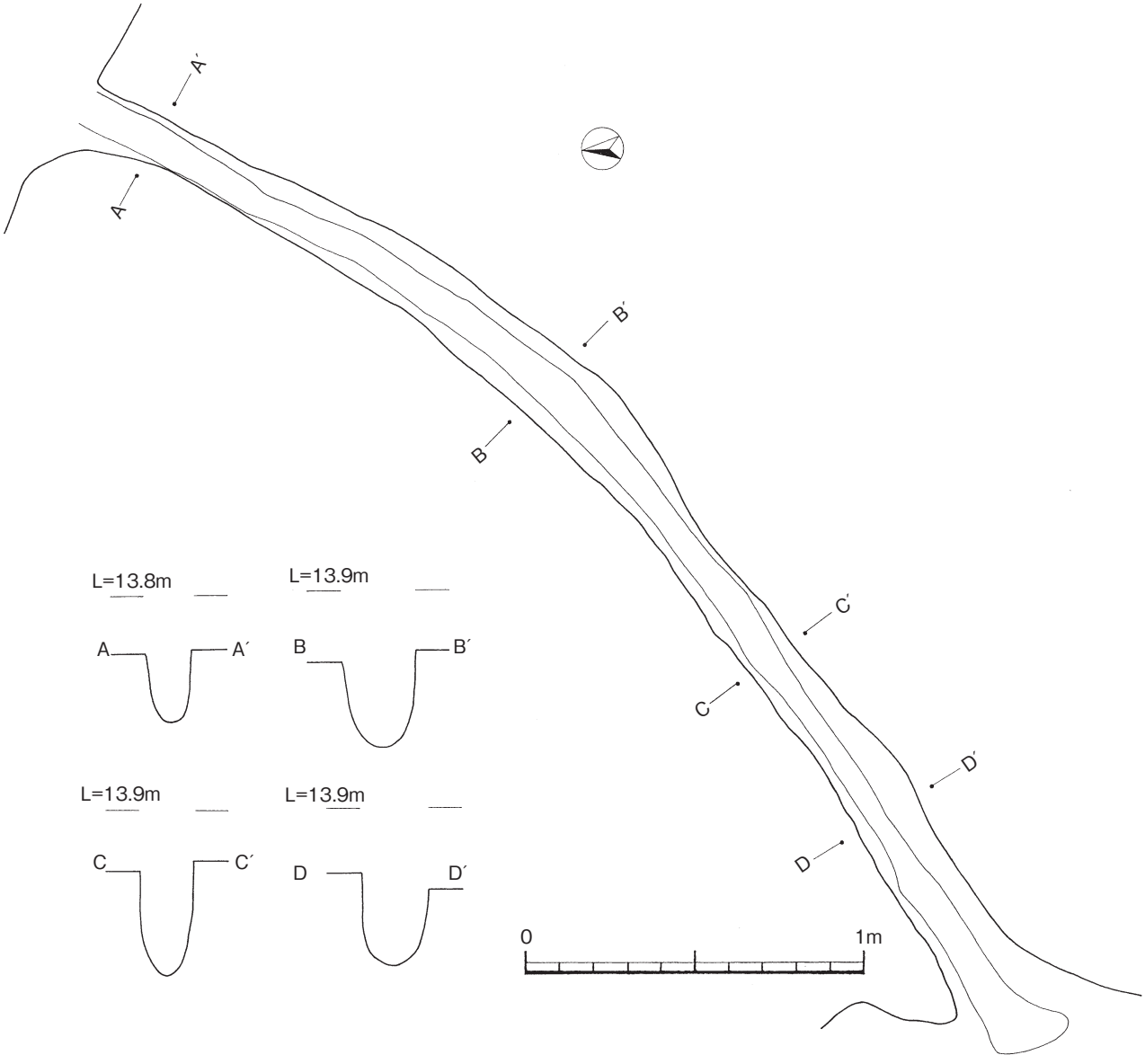
後半頃のものと思われる。70は青磁の椀である。71は中世須恵器の底部である。外面に平行タタキが施される。内面には上位に受け具の同心円文が，底部付近にはナデが見られるほか，輪積みによる接合の際のユビオサエが明瞭に認められる。

大型土坑８（第26図　O調査区）

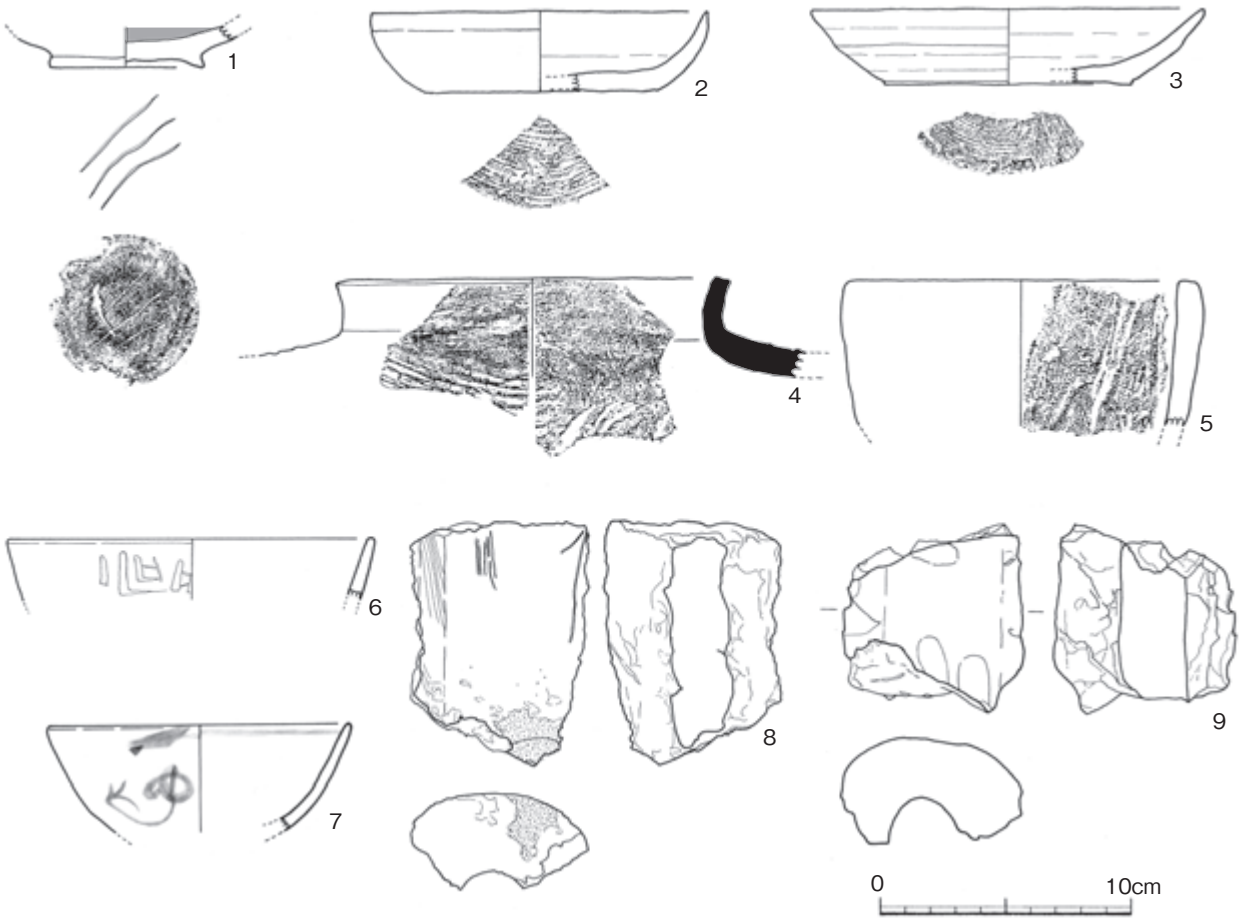
G・H－29グリッドから検出された。不整形な楕円状を呈し，長軸2.5m×短軸2.0m，深さ１mの大型のものである。短い溝を介して土坑５と繋がっている。床面からは水が浸み出てくる状況であった。遺物の出土はみられなかった。

大型土坑９（第26図　O調査区）

E－28グリッドから検出された。不整形な形状を呈し，長軸3.2m×短軸3.2m，深さ60cmの大型のものである。埋土はシラスのブロックを含む暗茶褐色土である。床面からは水が浸み出てくる状況であった。遺物の出土はみられなかった。



第27図　溝状遺構１



第28図　溝状遺構１出土遺物

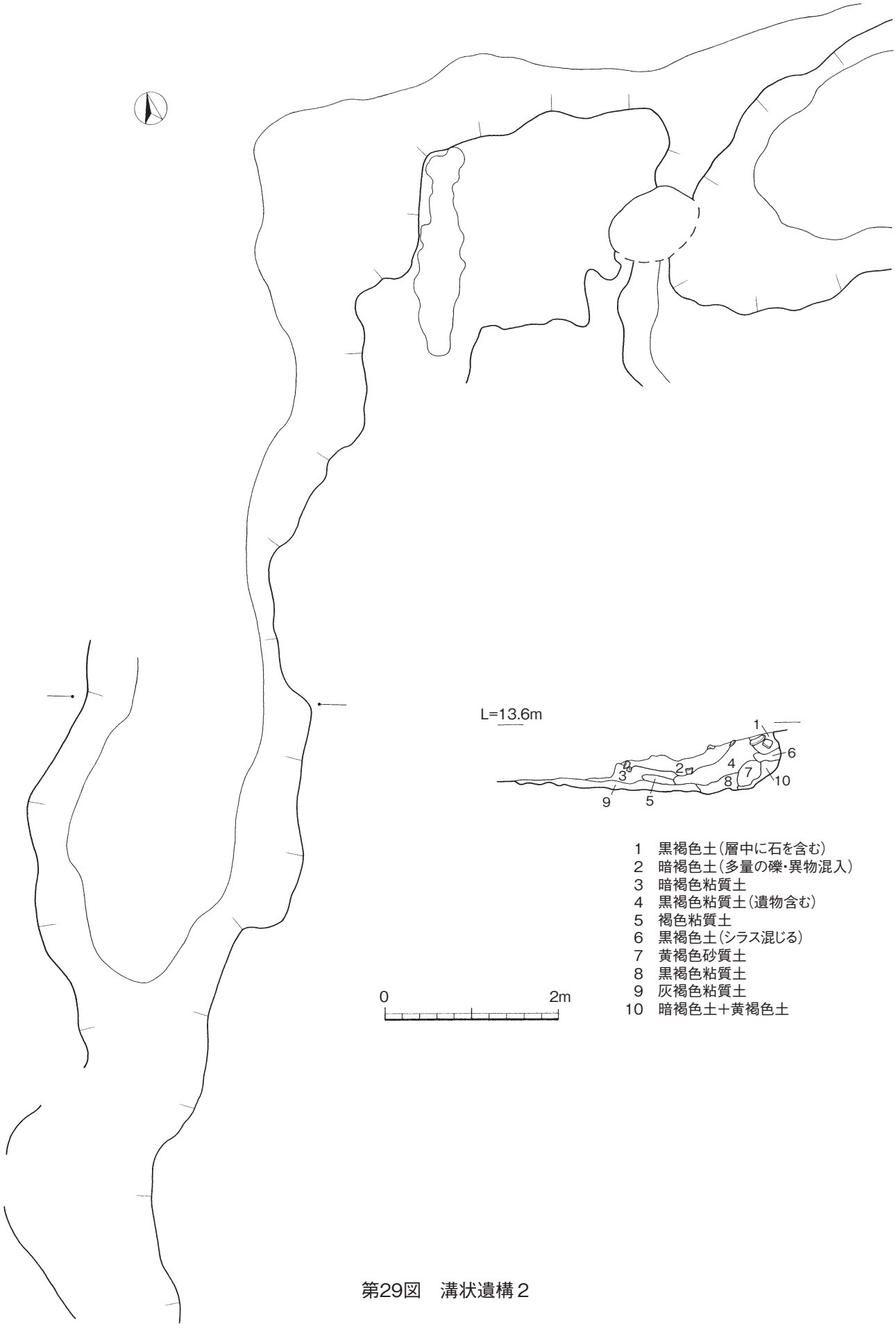
④溝状遺構（第27～31図）

O調査区から２条検出された。一つは大型土坑３と４を繋ぐ幅の細い溝で，もう一つは残存部分で３m程の幅のある大型のものである。いずれも古代～中世の遺物が出土している。

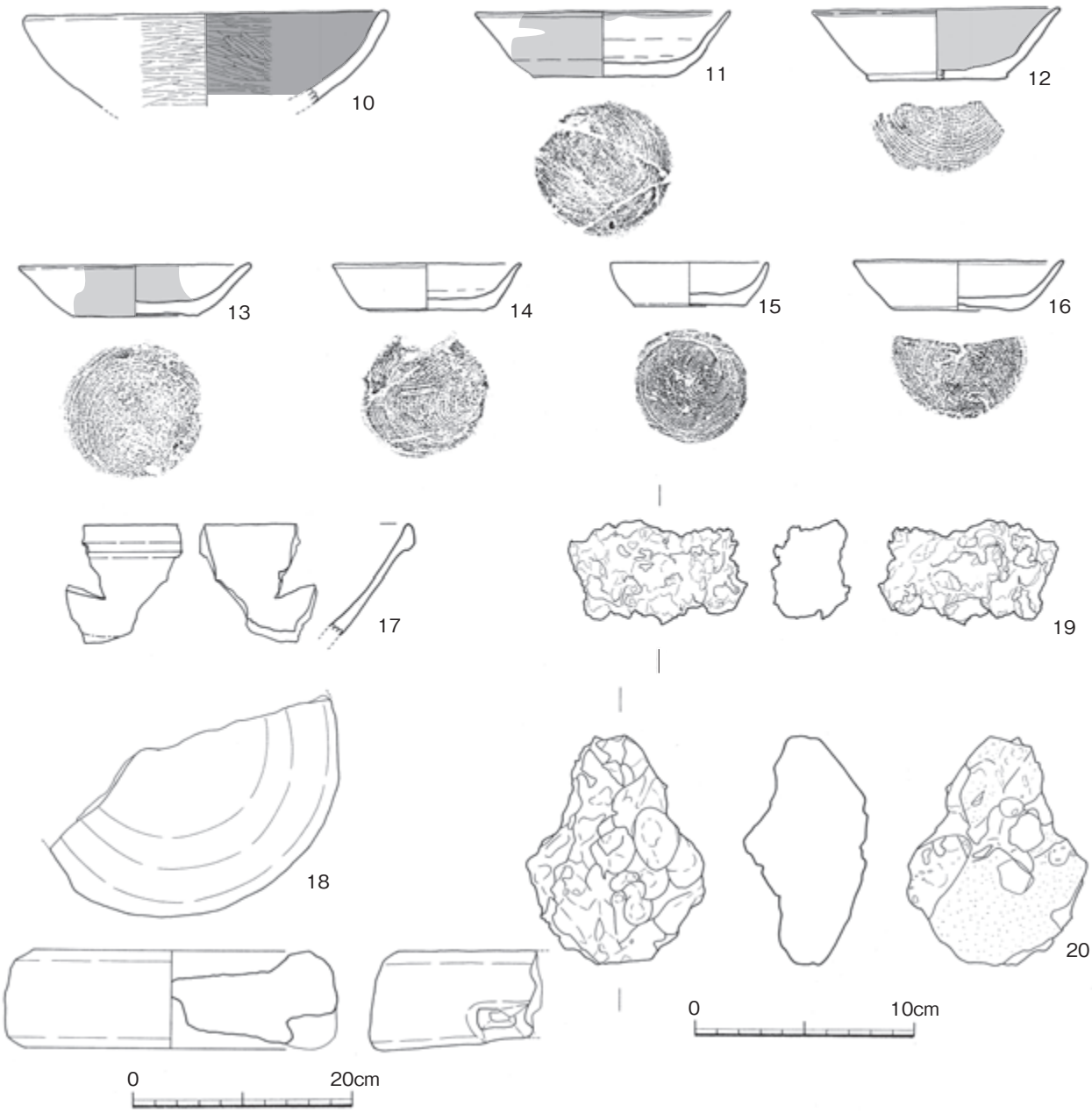
溝状遺構１（第27・28図　O調査区）

G－30グリッドから検出された。幅15～20cm・深さ20～35cm 程で，大型土坑３と４を繋いでいる。地形的に大型土坑４の方が低い位置にあることから，大型土坑３から４の方へ水を流していたものと思われる。遺構内からは古代末から中世にかけての遺物が出土した。

１は刻書土器で黒色土器A類の椀である。底部に短い「ハ」字状の高台が付くタイプで，高台内底には「///」と記号のような刻書が施されている。11～12世紀頃のものと思われる。２・３は土師器の坏である。２は復元口径13cm，３は16cm である。16世紀頃のものと思われる。４は須恵器の甕である。口縁部がほぼ直立する。５は焼塩壺である。外面にはユビオサエが，内面には布目の圧痕が認められる。６は龍泉窯系の青磁椀である。口縁下に雷文が施されている。15世紀前後のものと思われる。７は青花の碗である。丸みをもった胴部から口縁部へやや外開き気味に立ち上がるもので，15世紀後半～16世紀前半頃のものと思われる。８・９は鞴羽口である。８は先端部の表面に滓が熔結して付着し，磁力反応が認められる。


L=13.6m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
0
2m
1 黒褐色土(層中に石を含む)
2 暗褐色土(多量の礫・異物混入)
3 暗褐色粘質土
4 黒褐色粘質土(遺物含む)
5 褐色粘質土
6 黒褐色土(シラス混じる)
7 黄褐色砂質土
8 黒褐色粘質土
9 灰褐色粘質土
10 暗褐色土+黄褐色土

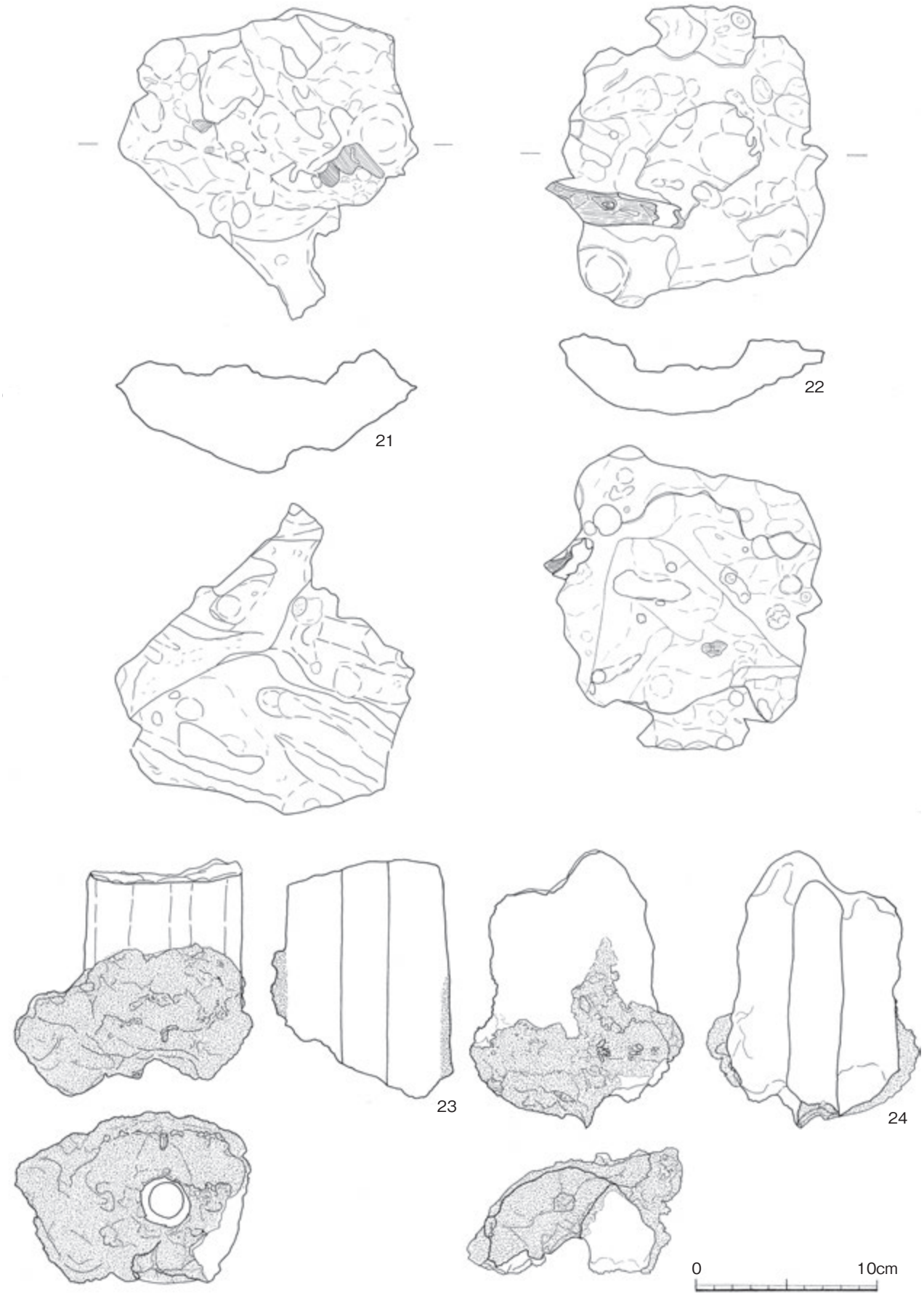
第29図　溝状遺構２



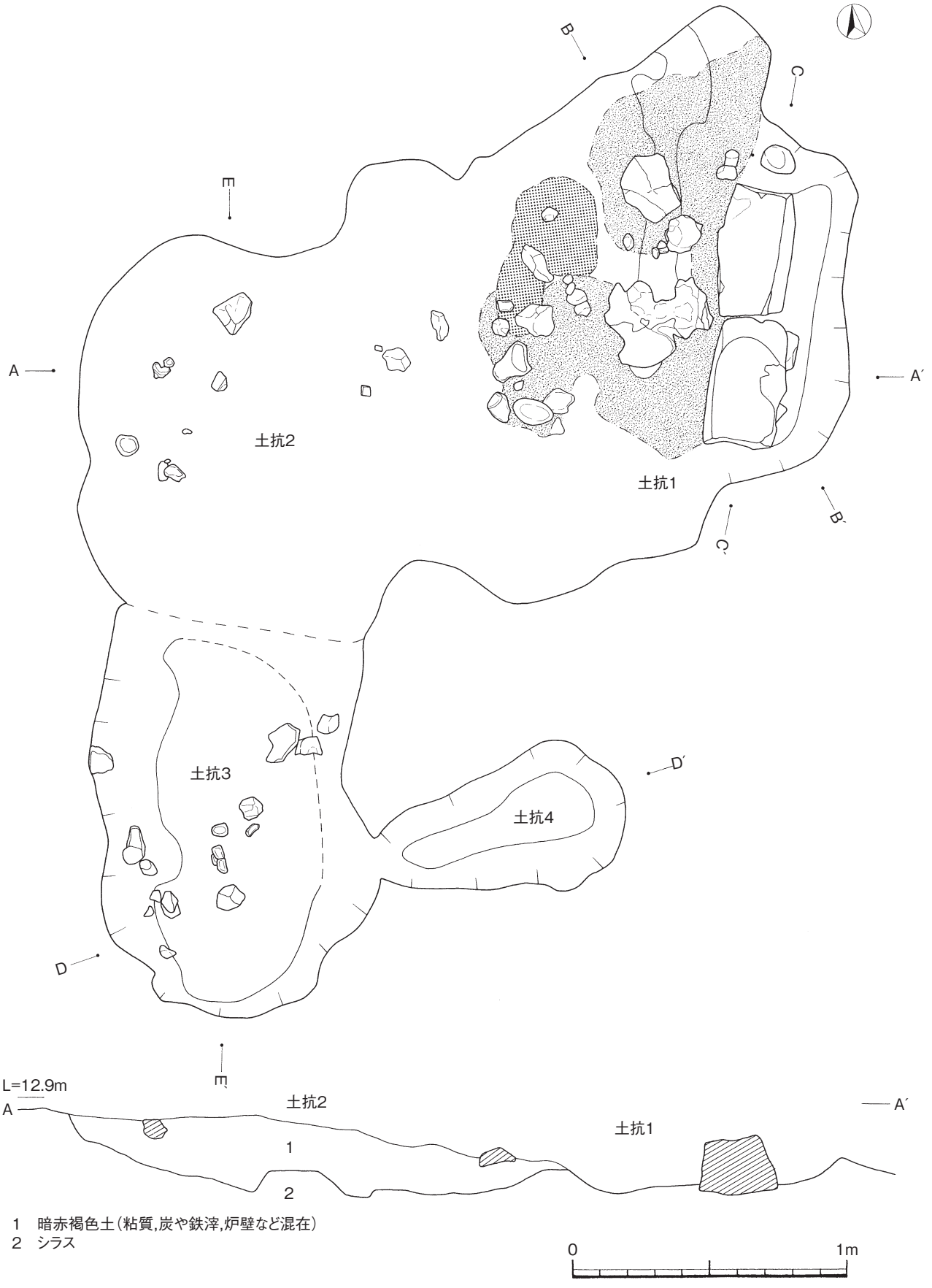
第30図　溝状遺構２出土遺物１（10～17，19，20：S＝1/3，18：S＝1/6）

溝状遺構２（第29～31図　O調査区）

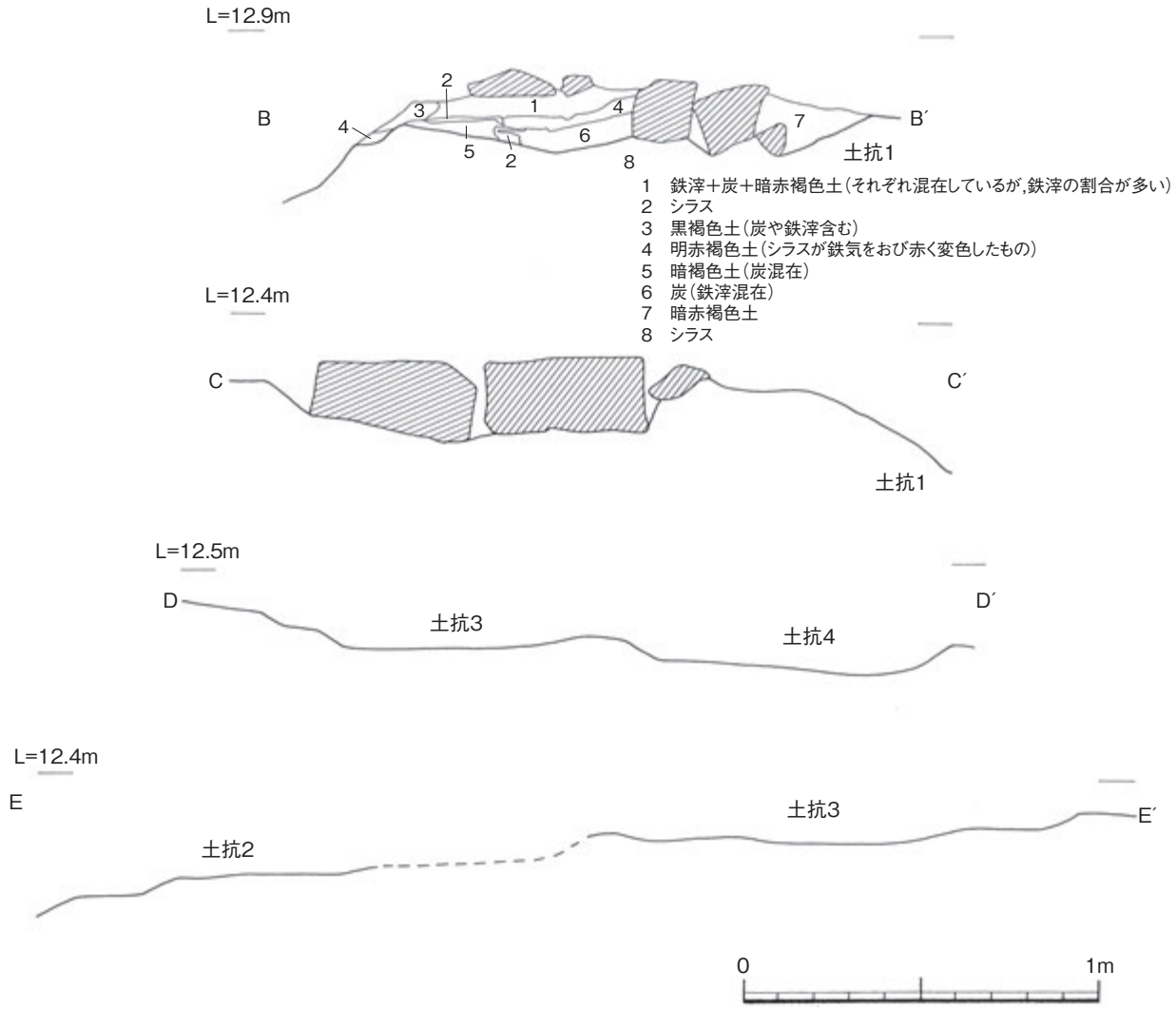
H－29・30グリッドから検出された。大型土坑６～９に沿うように延びているが，北側部分が近現代の石垣を構築する際に削平を受けており，ラインは不明である。残存部分では３mほどの幅があり，深さは50cm である。削平部分は水が浸み出てくる状況であった。埋土は基本的に大型土坑と同じような状況である。遺構内からは中世の遺物を主体として古代の遺物が少量出土した。10は黒色土器A類の椀である。胴部から口縁部へ丸みをもって立ち上がり，内外面ともにミガキが施される。おそらく短い「ハ」字状の高台が付くものと思われる。11～16は中世の土師器で，14～15世紀頃のものと思われる。11・12は坏である。11は底部からの立ち上がり部分に回転ヘラケズリが施されている。13～16は皿で，口径は７～11cm である。13は内外面にススが認められる。17は白磁



第31図　溝状遺構２出土遺物２



第32図　鉄生産関連遺構（土抗１～４）



第33図　鉄生産関連遺構断面図（土抗１～４）

の椀で，玉縁口縁である。11世紀後半～12世紀後半頃と思われる。18は石臼である。安山岩製の上臼で擦面は摩耗している。19～22は鉄滓である。19は鉄塊系遺物である。鉄分を含んでおり，磁力反応がある。20は流動滓で，メタル状の光沢をもつ。鉄分を含んでおり，磁力反応がある。21・22は椀形滓である。送風によって中央部分が凹んでおり，その部分により強い磁力反応が認められる。22にはホド突きのために用いたと思われる鉄棒が付着していた。23・24は鞴羽口である。23は口径8.5cm で，通風孔部は径2.5cm である。先端部の表面は滓が熔結して付着している。鉄分を含んでおり，磁力反応がある。24は口径９cm で，通風孔部は径３cm である。先端部の表面は滓が熔結して付着しており，通風孔部周辺は黒色ガラス質となっている。

⑤鉄生産関連遺構（第32～35図　Q調査区）

Q調査区のH－31グリッドから検出された。４つの土坑から構成されており，全体として長軸4.1m×短軸50cm ～1.5m程の不整形を呈している。鉄滓や炉壁，鉄分が多量に含まれているものなどがあり，製鉄炉や鍛冶炉の可能性が想定されるが，遺構の特定に至らなかった。しかし鉄生産に関連する遺構であることは確実なため，鉄生産関連遺構として扱った。

土坑１（第32～34図　Q調査区）

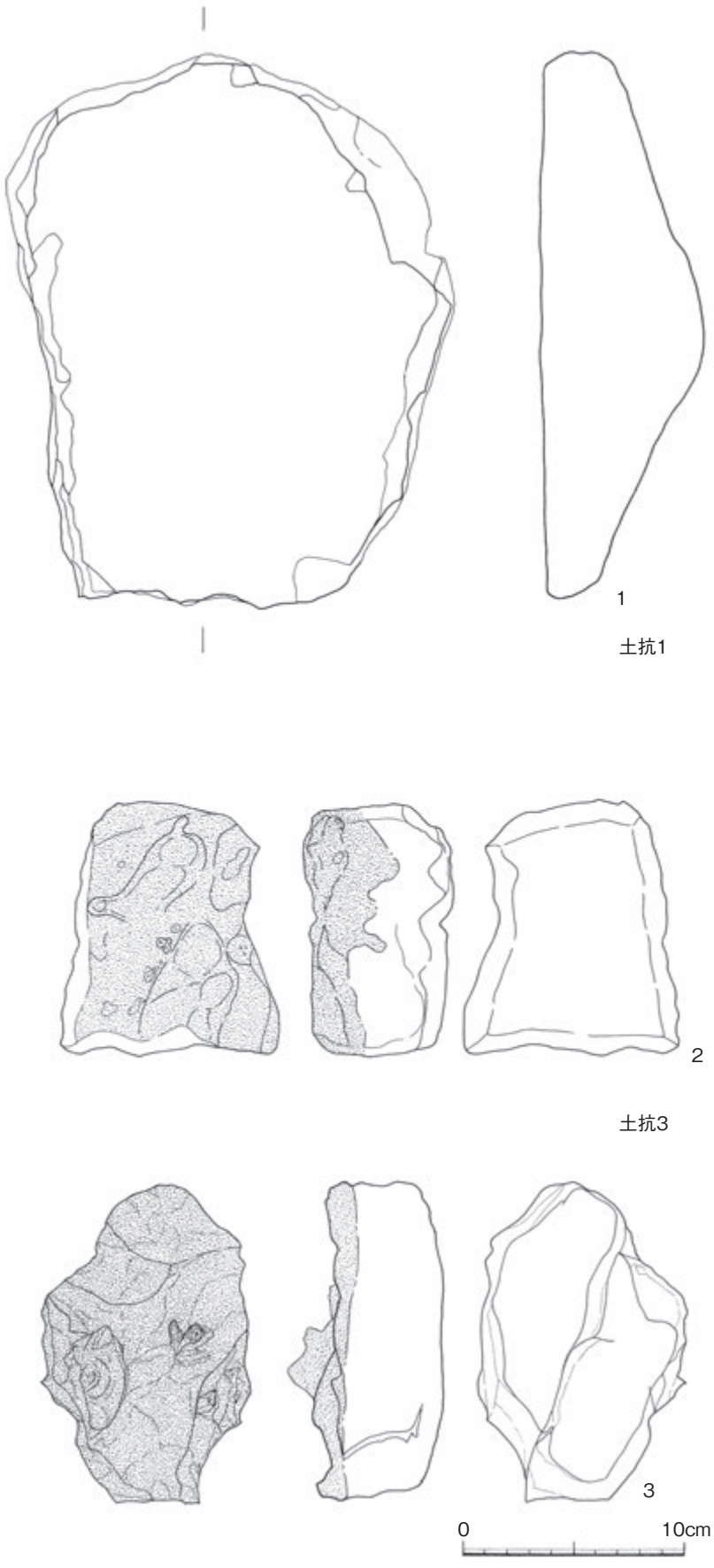
鉄生産関連遺構の北側に存在する。長軸1.7m×短軸1.5m，深さ10cmほどの範囲に切石が配置され，周囲には鉄滓や焼土が広がっていた。切石は，掘り込みの上に２つ並んで配置されており，それぞれ長さ45cm×幅25cm程の大きさで，凝灰岩と花崗岩と思われる。切石の内側には再結合滓と椀形滓，炉壁等の広がりが見られた。土坑は下場が北側に傾斜しており，北側に鉄滓等を掻き出していたものと思われる。埋土は砂鉄や鉄滓などの鉄分層・赤化層・炭が重層していた。炭は床面に敷き詰めてあったことから，湿気防止のためと思われる。１は鉄床石と思われる。安山岩製で断面三角形を呈する。被熱しており，作業面には敲打痕が認められる。

土坑２（第32・33図　Q調査区）

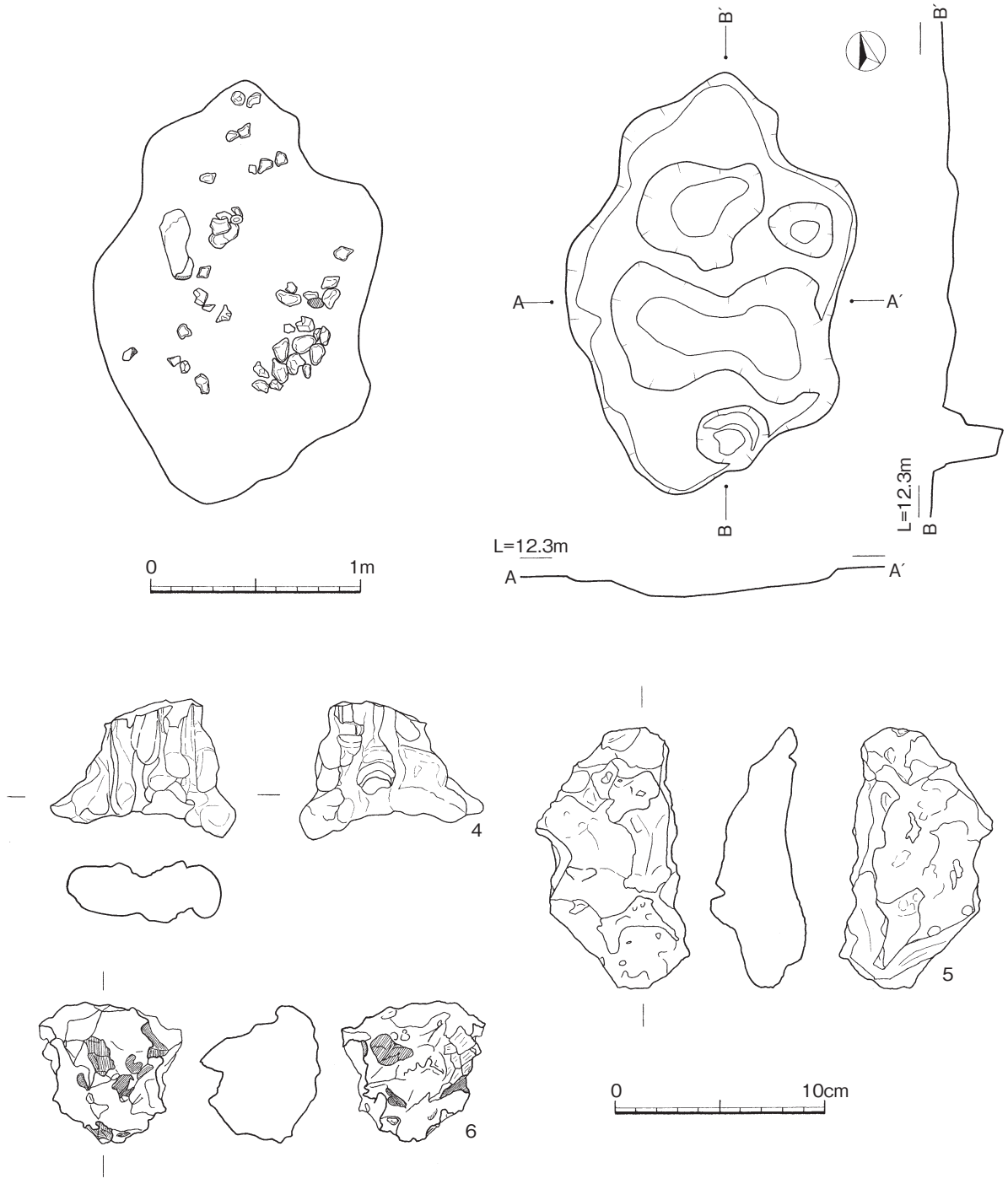
土坑１に隣接する。長軸1.9m×短軸1.2～1.5m，深さ10cmほどの不整形で，底部にはうねが２つある。土坑１の切石と向き合う部分には，炉壁と思われる部分が広がっている。埋土は単一層であった。滓と鉄，その他の不純物とが結合し凝固した層（再結合滓）が出土した。

土坑３（第32～34図　Q調査区）

土坑２・土坑４に挟まれた



第34図　鉄生産関連遺構出土遺物（土抗１・３）

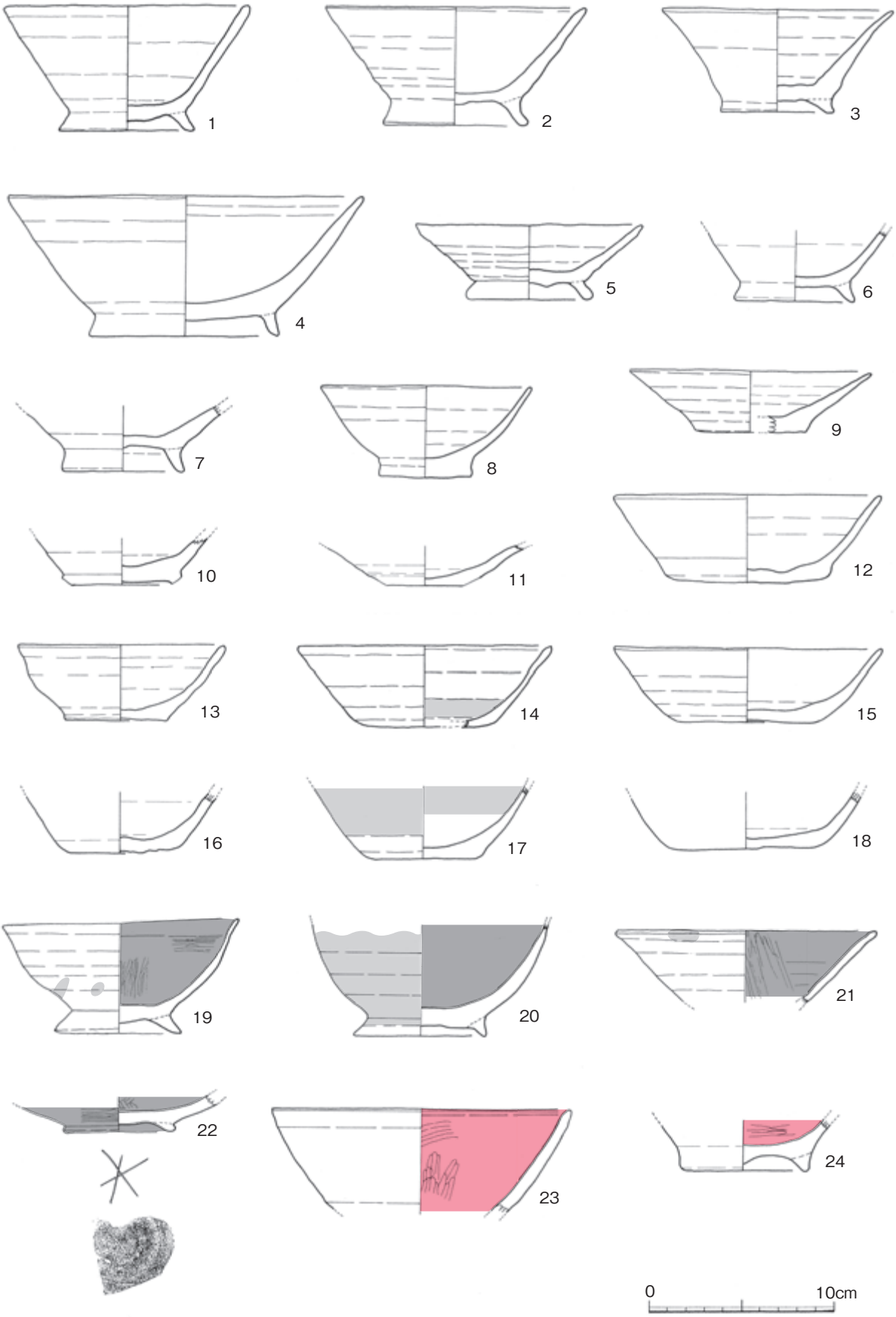


第35図　鉄生産関連遺構出土遺物（土抗５）

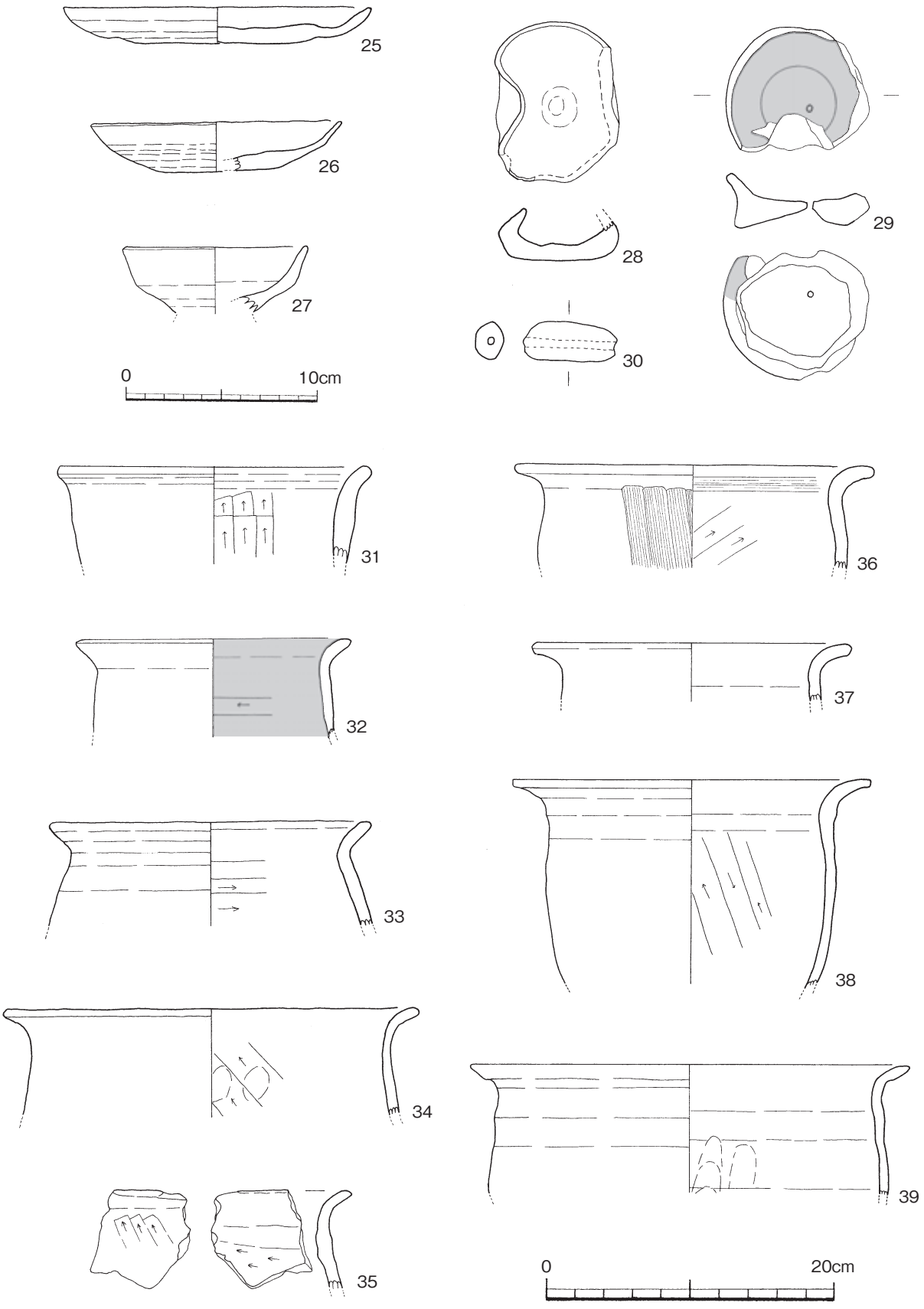
部分である。長軸1.5m×短軸90cm ～ 1 m，深さ10cm ほどの不整形である。床面は赤く変色した部分や硬く締まった部分が見られる。遺構内からは鉄滓や炉壁・再結合滓などが出土したほか，埋土中には砂鉄も見られた。２・３は炉壁である。いずれも隙間が出来ており，ブロック状の塊を積み上げていることがわかる。炉壁内面には滓が熔結しているが，磁力反応はほとんど認められない。

土坑４（第32・33図　Q調査区）

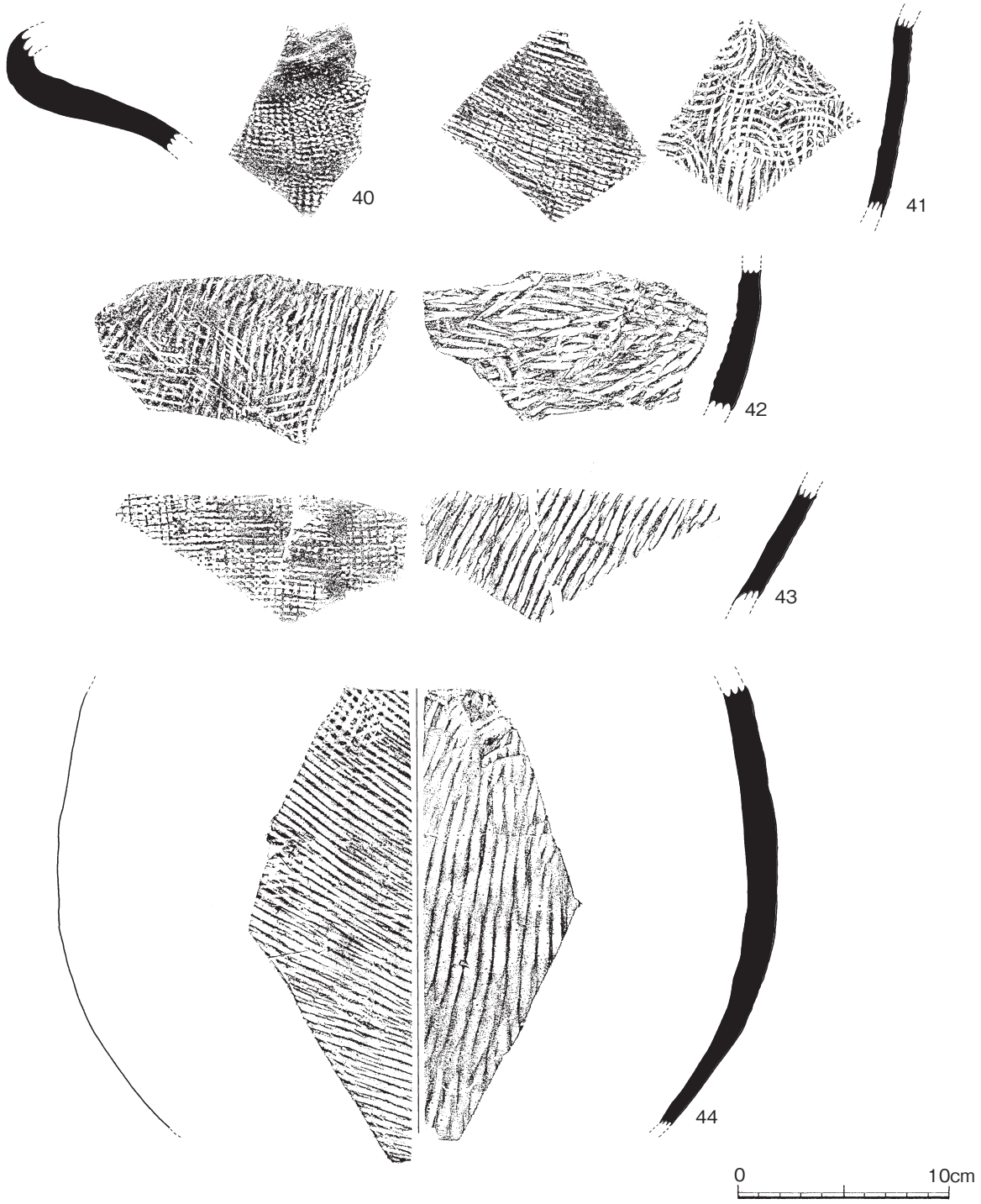
土坑３に隣接する。長軸90cm ×短軸40～50cm，深さ10cm ほどの不整形である。埋土は灰褐色粘質土で鉄気をおびている。再結合滓が出土したほか，床面には少量の砂鉄も見られた。



第36図　古代の遺物１（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）



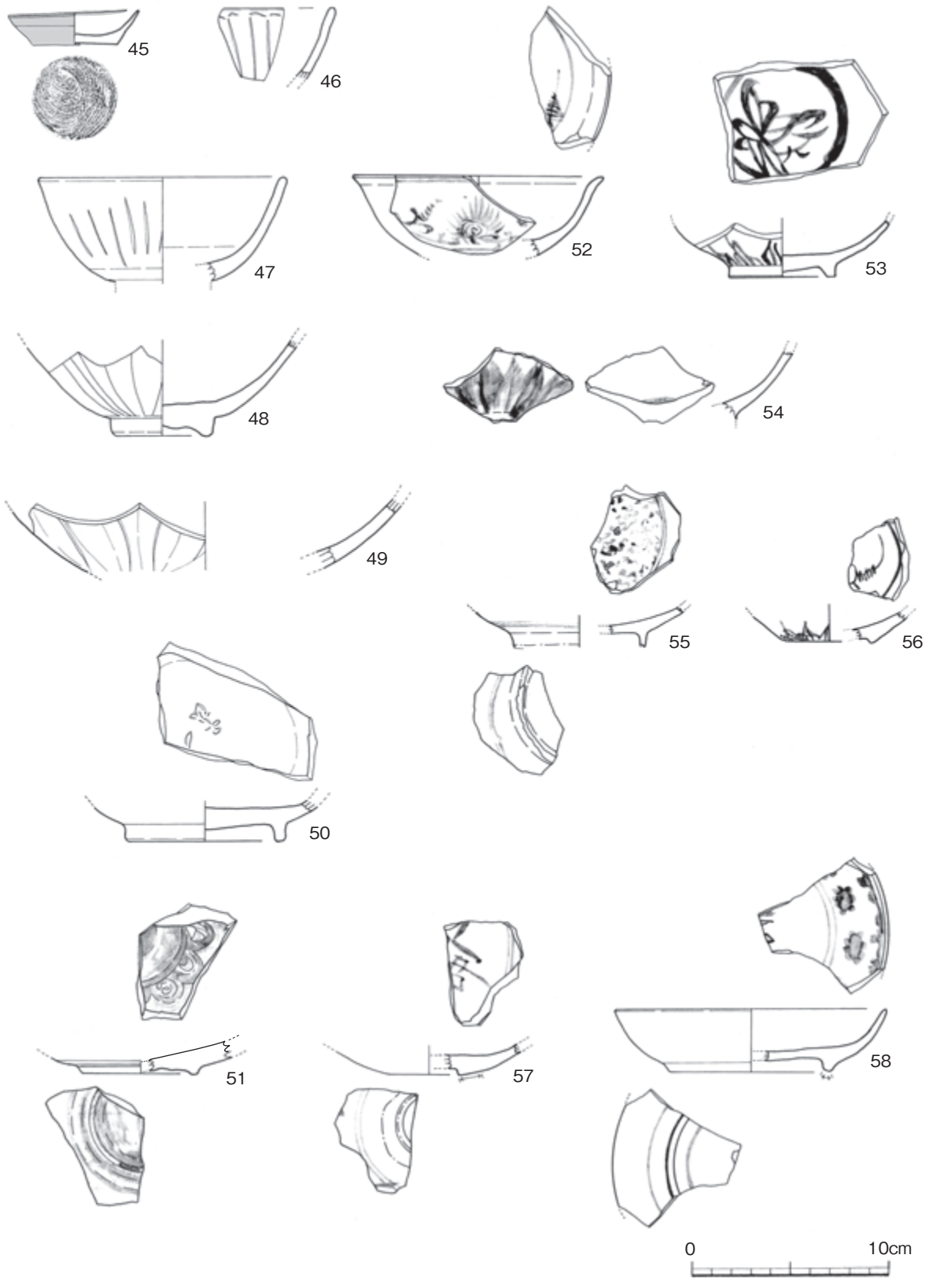
第37図　古代の遺物２（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）（25～30：Ｓ＝1/3，31～39：Ｓ＝1/4）



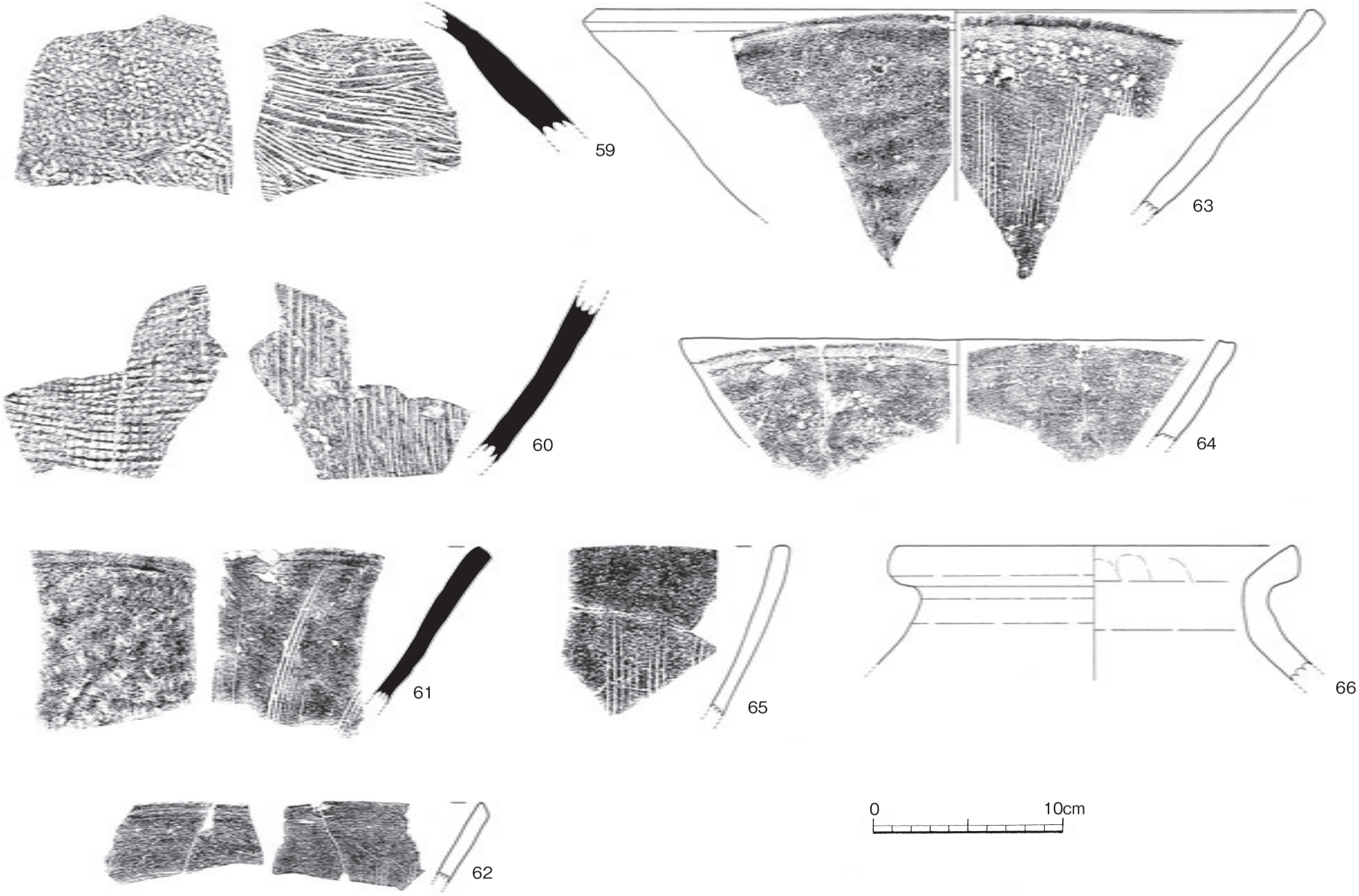
第38図　古代の遺物３（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）

土坑５（第35図　Ｑ調査区）

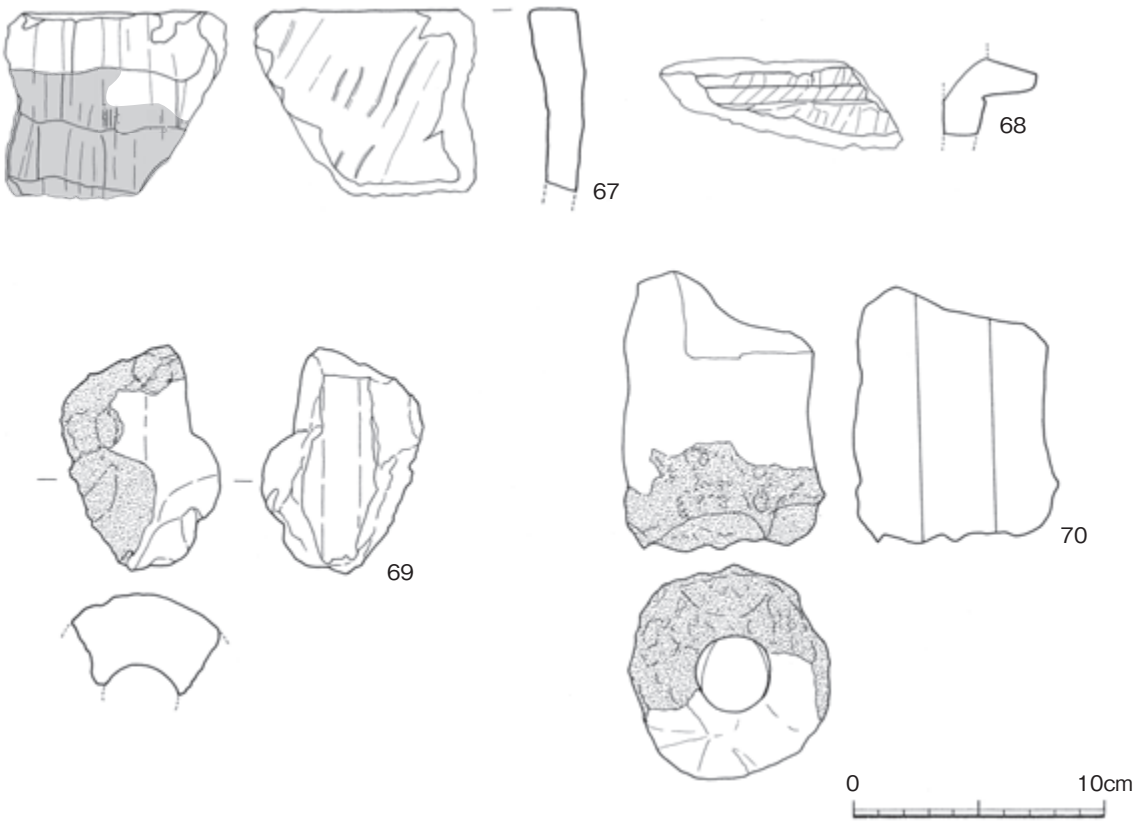
Ｇ－31グリッドで検出された。土坑１～４が連結しているのに対し単基で存在する。長軸２ｍ×短軸1.3m，深さ10cm ほどの不整形である。流動滓・炉壁が出土した。４は流動滓である。磁力反応は見られない。５は鉄塊系遺物である。表側は鉄分を含んでおり，やや強い磁力反応があるが，裏側は磁力反応が見られない。６は炉内滓と思われる。木炭の痕跡が多く認められる。磁力反応はない。



第39図　中世の遺物１（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）



第40図　中世の遺物２（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）



第41図　中世の遺物３（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）

（２）遺物（第36～41図）

１～44は古代の遺物である。１～11は土師器の椀である。１～７は底部から口縁部へ向けて直線的に立ち上がり，外開きの高台が付く。８は丸みをもった体部に充実高台が付くもので，いわゆる「薩摩タイプ」と呼ばれるものである。９はやや厚めの高台をもつが，器高が低く皿のような印象も受ける。10・11は椀の高台部分を取り除いて整えたのち，坏として利用したものと思われる。12～18は土師器の坏である。口径は14cm 程のものが主体を占める。19～21は黒色土器Ａ類の椀である。19・20は底部から口縁部へ向けて丸みをもって立ち上がるもので，21は直線的に立ち上がる。22は刻書土器で，黒色土器Ｂ類である。高台は短く「ハ」の字状に開くもので，高台内底には「＊」状の記号のような刻書が施されている。23・24は赤色土器Ａ類の椀である。24は底部内面が凸気味になっている。22は11～12世紀頃のものと思われ，他は10世紀代の遺物である。

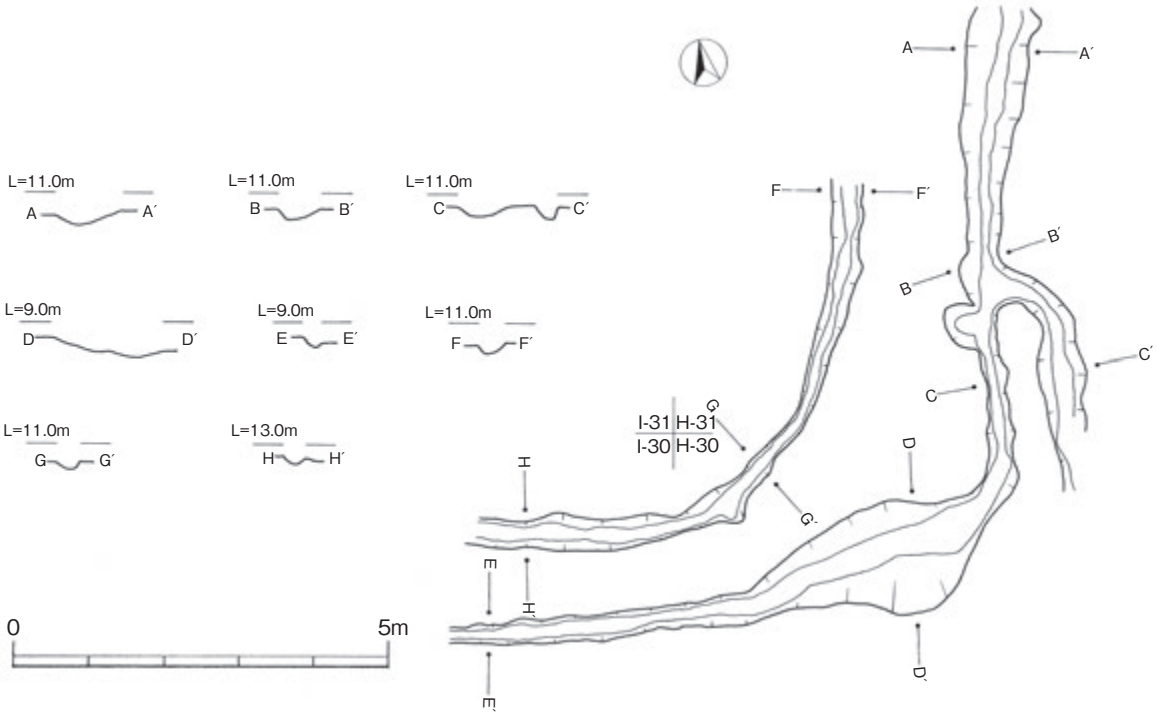
25・26は土師器の皿である。25は口径16cm のやや大型のものである。25は９世紀代のもの，26は10世紀初頭のものと思われる。27は器種不明である。口径10cm 弱で，体部が屈曲をもって立ち上がるものである。底部の方はさらに延びる傾向があるため，椀もしくは高坏などの可能性が考えられる。28は耳皿である。突高台をもち，片側縁を内側へ折り曲げている。本来は両側縁とも折り曲げていた可能性が高いと思われるが，欠損のため不明である。29は土師器椀の底部～高台部分を転用しており，中央からややずれたところに孔が穿たれている。紡錘車と思われるが，高台が残っていることと，高台内面にススの痕跡が認められることから，別の用途の可能性も考えられる。31～35は土師甕である。31は口縁部が短く，端部が面に近い形状をしており，めずらしいものである。

９世紀中頃のものと思われる。32は内面にススが多く確認され，煮炊きに利用されたことを裏付けるものである。33・34・38・39は胴部までナデが施されている。40～44は須恵器である。40は甕の頸部～胴部である。41～44は甕の胴部である。41・43は外面格子目タタキ，42・44は外面平行タタキである。45～70は中世の遺物である。45は土師器の小皿である。口径７cm 弱の糸切り底で，内外面にススが認められる。灯明皿と思われる。46～51は青磁である。46～50は龍泉窯系の青磁で，46～49には蓮弁文が見られる。うち46は細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識して施されたもので，47は剣頭を省略したものである。15・16世紀頃のものと思われる。48・49は蓮弁に鎬の見られるものである。50は内面見込みに細い草花文様が施される。14・15世紀頃のものと思われる。51は粉青沙器の碗と思われる。見込み部分に象嵌が施されているが，全体が白い釉で覆われている。52～58は青花である。52～55は碗である。53・54は小野分類の碗Ｃ群Ⅰ類に，55は碗Ｃ群Ⅲ類に属すると思われる。56～58は皿である。15・16世紀頃のものと思われる。56は小野分類の皿Ｃ群Ⅰ類に，58は皿Ｅ群に属すると思われる。59・60は中世須恵器の樺万丈である。外面に格子目タタキ，内面にハケ目が施される。胎土はマーブル状で，瓦質土器のような印象を受ける。13世紀前半頃と思われる。61～65は擂鉢である。61は須恵器製で，胎土に白色粒を多く含む。62～65は瓦質系と思われる。66は瓦質系の壺である。頸部が直線的に立ち上がり，口縁部が屈曲して外へ開いている。口縁端部は肥厚する。67・68は滑石製石鍋である。67は桶状を呈し，把手や鍔の付かないものである。68は口縁下に断面台形状の鍔が廻る。鍔の長さは２cm 程である。69・70は鞴羽口である。いずれも2.8cm 程の通風孔で，吹き口部分に磁力反応のある滓が熔着している。

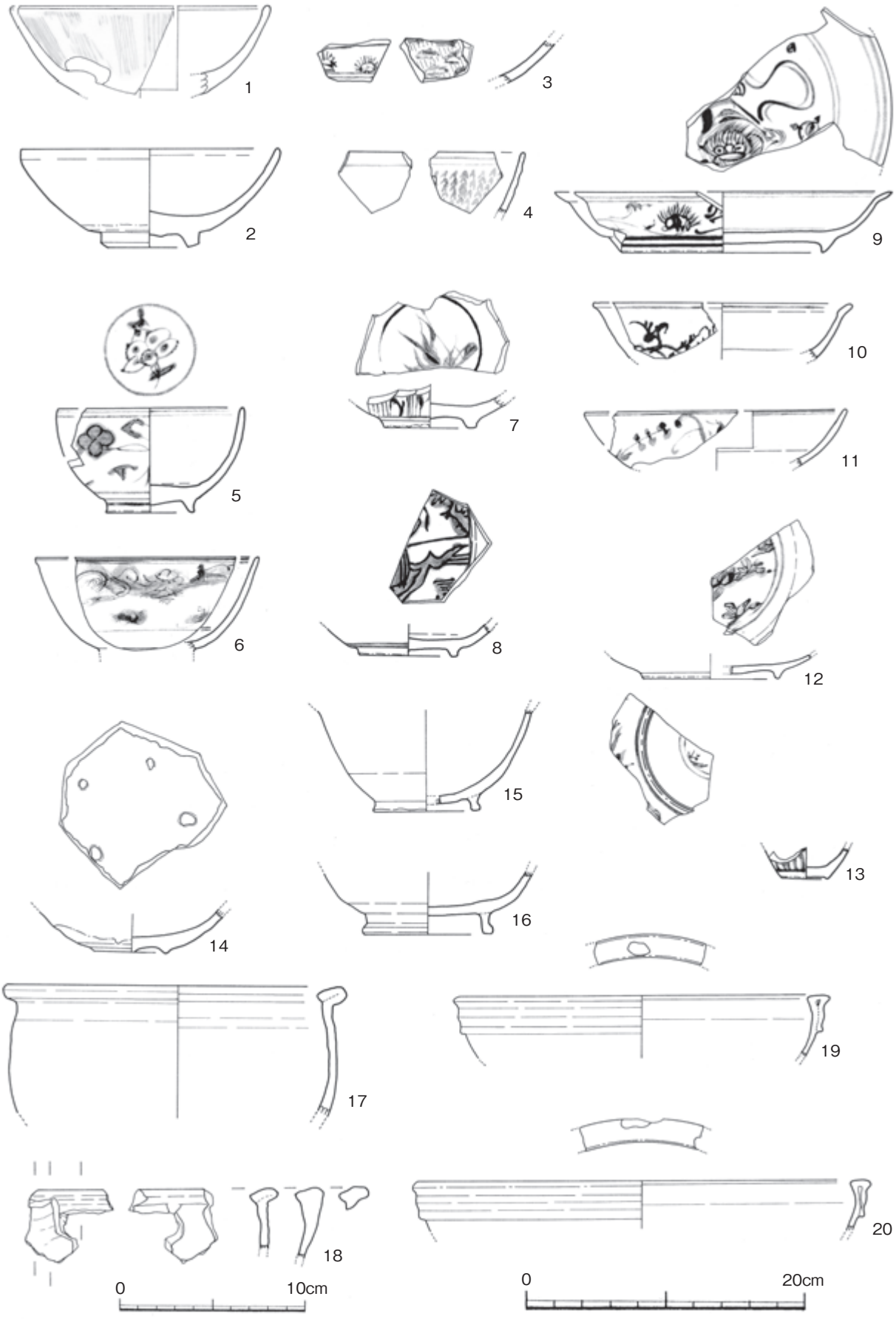
２．近世の調査

（１）遺構の概要

近世の遺構は殆どなく，Ｏ調査区から溝状遺構が２条検出されたのみである。溝状遺構内からも中世から近世の遺物が出土しているが，近世の遺物が主体を占めており，他の遺構とは様相が異な



第42図　溝状遺構１



第43図　溝状遺構１出土遺物（１～18：Ｓ＝1/3，19・20：Ｓ＝1/4）

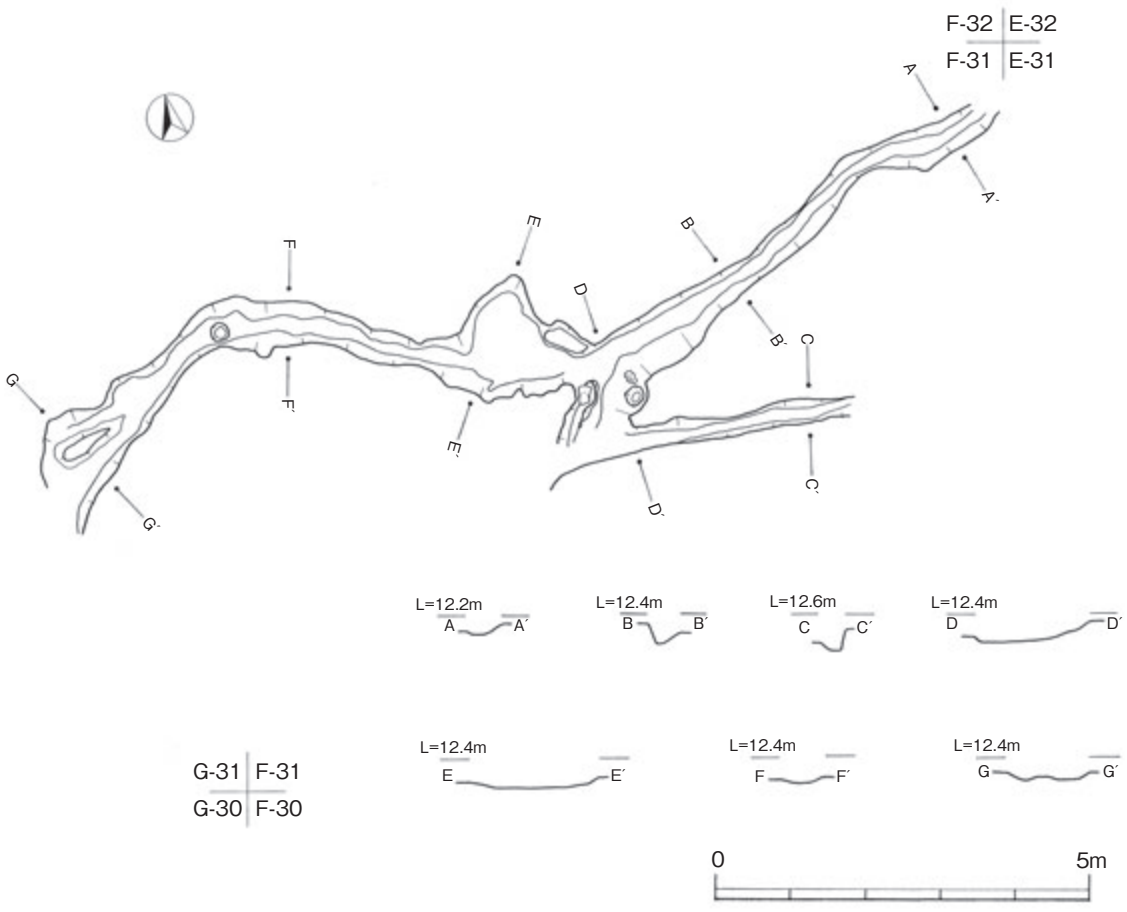
るため，この時期のものと判断した。

①溝状遺構（第42～46図）

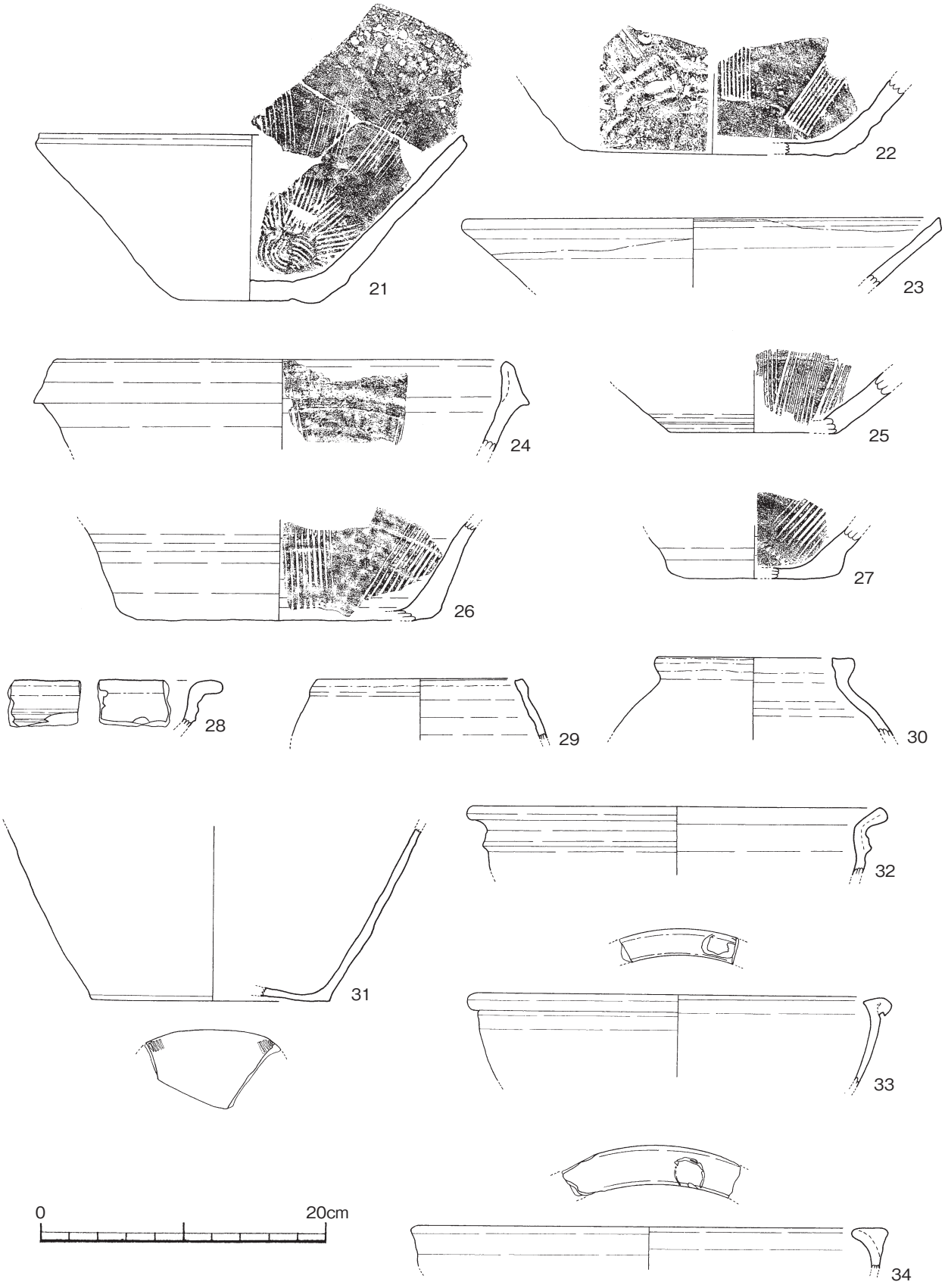
Ｈ・Ｉ－30・31グリッドとＦ・Ｇ－31グリッドから溝状遺構が２条検出されている。それぞれ延長方向が異なっており，別々の遺構と判断した。

溝状遺構１（第42・43図　Ｏ調査区）

Ｈ・Ｉ－30・31グリッドから検出された。北から西方向へ逆Ｌ字状に折れ曲がっている。残存部径で全長約13m，幅1.6m ～2.2m，深さ20cm ほどである。遺構内からは中世から近世の遺物が出土したが，それぞれの溝に時期差はみられない。１・２は青磁である。１は同安窯系の椀で，外面に細かい縦の櫛目文が施される。12世紀後半のものと思われる。２は無文の椀で，中国産か国内産か不明である。３は粉青沙器である。内外面に白土による象嵌が施されている。４～13は青花である。４～８は碗で，４は蓮子碗の系統に属し，小野分類の碗Ｃ群に該当する。15世紀前後のものと思われる。５は「饅頭心」系統にあたり，小野分類のＥ群に属するものである。同じく６はＥ群Ⅷ類と思われる。15世紀後半のものと思われる。９～12は皿である。９は高台をもち，端反り口縁をもつ。見込みには玉取獅子が描かれている。小野分類の皿Ｂ群に属し，15世紀頃のものと思われる。12は見込み部分に花文が描かれ，高台内には字款が描かれる。13は小坏である。14～20は陶器である。



第44図　溝状遺構２

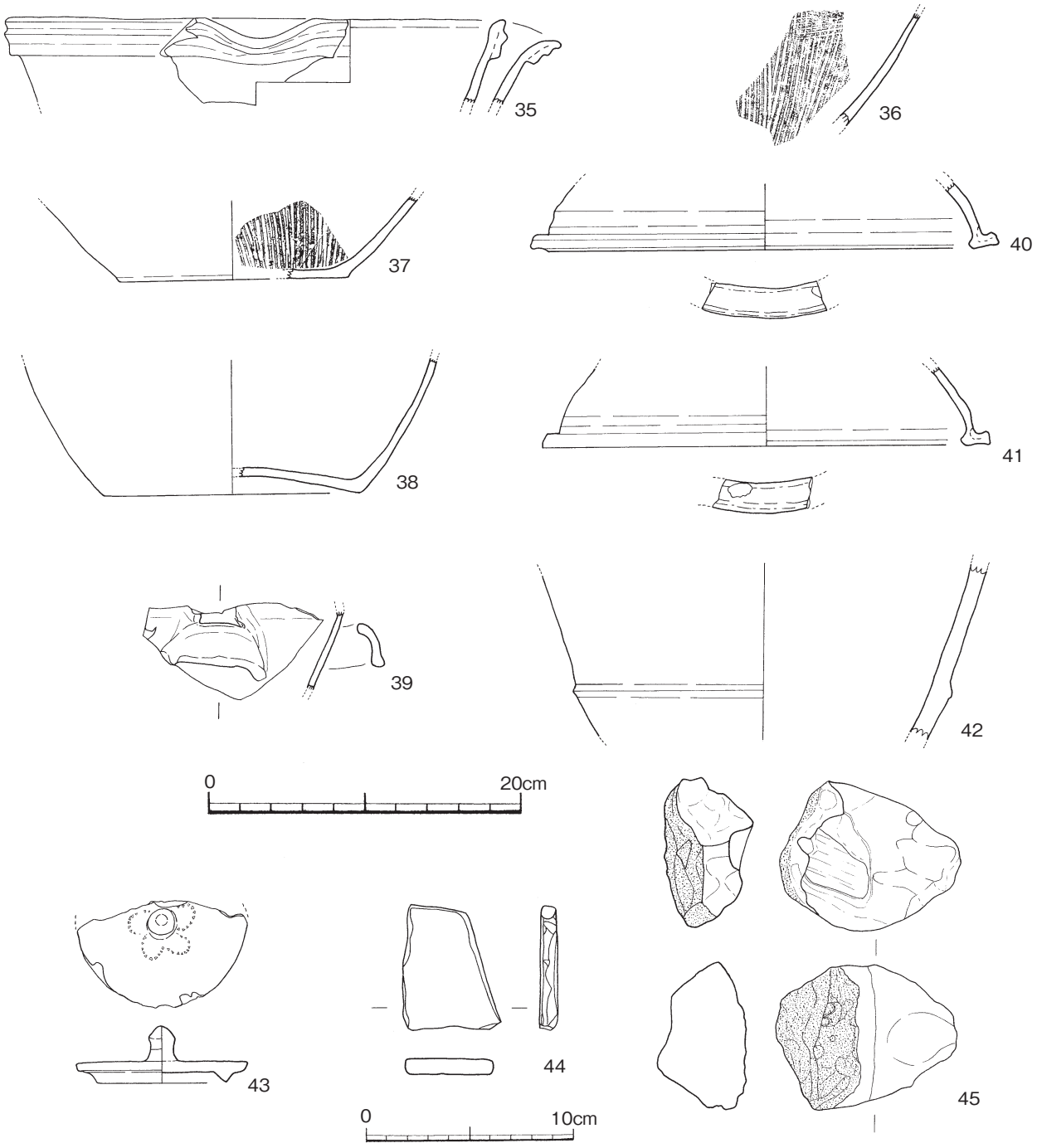


第45図　溝状遺構２出土遺物１

14～16は碗で，14は見込み部分に貝目の痕が認められる。15は付け高台の碗で，堂平窯製のものである。Ⅱ期に相当すると思われる。17は薩摩焼の甕である。口径18.2cmで，口縁を内側へ折り曲げ，端部に丸みをもたせている。18は薩摩焼の片口である。19・20は擂鉢である。堂平窯のⅡ期にあたる。粘土紐を外側へ折り曲げて口縁と突帯を形成している。突帯は２条である。17世紀後半のものである。

溝状遺構２（第44～46図　O調査区）

F・G－31グリッドから検出された。北東から南西方向へ蛇行しながら延びている。残存部径で

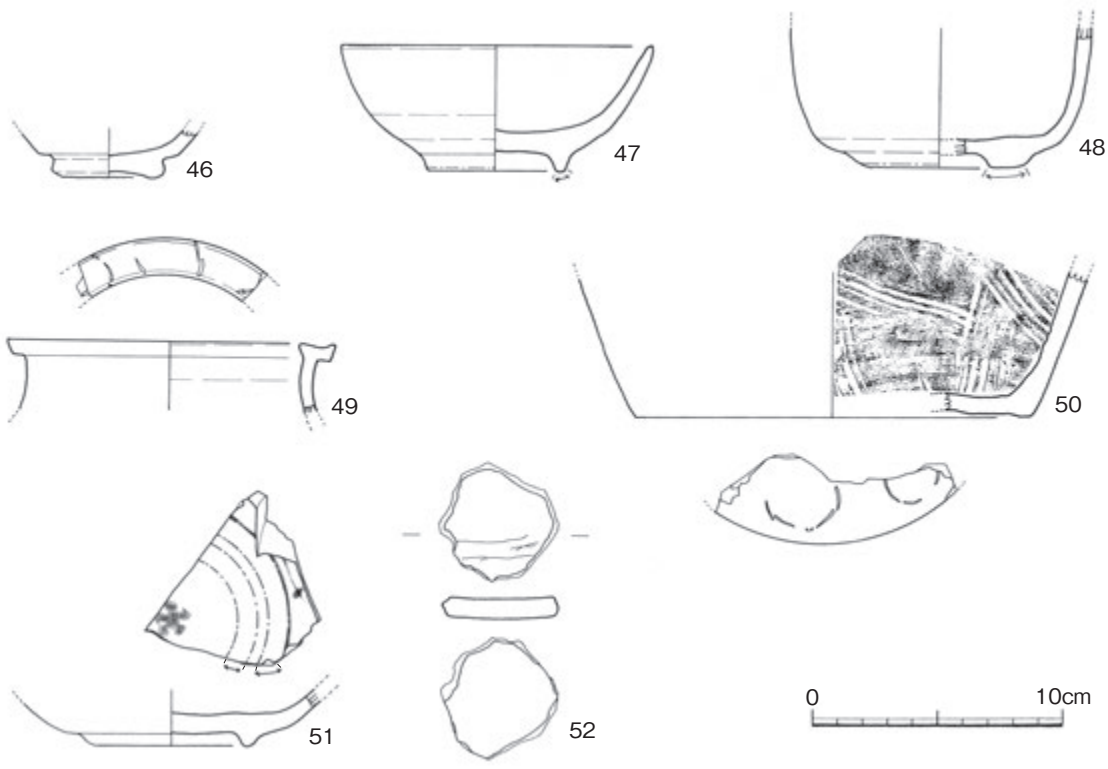


第46図　溝状遺構２出土遺物２（35～42：S＝1/4，43～45，S＝1/3）

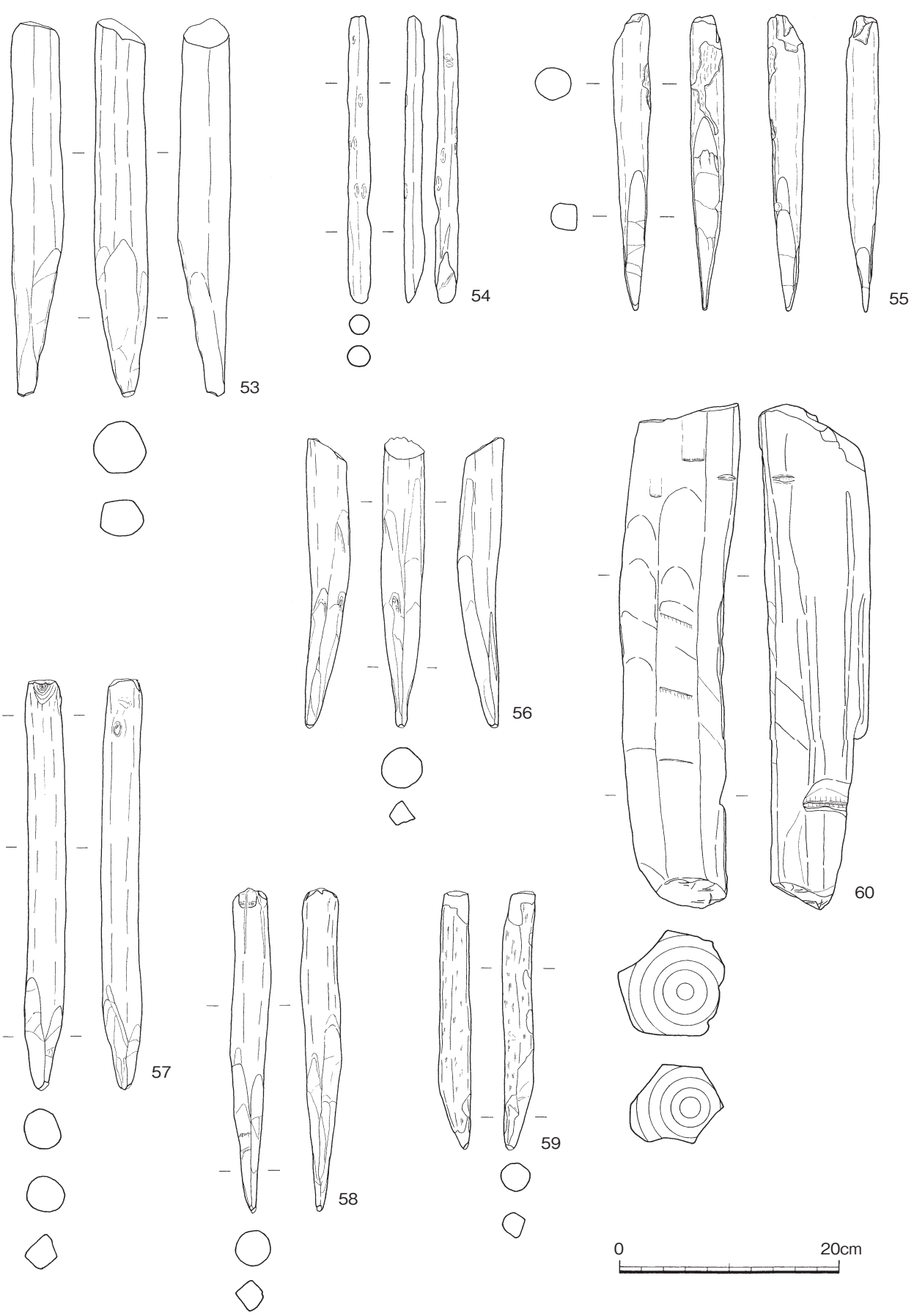
全長約14m，幅40～80cm，深さ20cmほどである。途中から枝分かれしている。中世から近世の遺物が出土した。21・22は瓦質の擂鉢で，縦方向に８条１単位の櫛目が入るものである。21は口径30cmである。23は肥前の擂鉢で復元口径34cm，口唇部周辺に釉が入る。24～27は備前の擂鉢である。24は復元口径32cmで，口縁上方への拡張が見られ，口縁外面の半ばに稜が入っている。15世紀前後のものと思われる。25～27はそれぞれ９～10条の櫛目が入る。28は薩摩焼の擂鉢である。口縁部が外反しており，口縁下には１条の突帯が廻っている。18世紀代のものと思われる。29～31は薩摩焼の壺である。29は無頸壺で，30は口縁部内面に稜をもつ。31は底部裏面に貝目の痕跡が認められる。32～34は薩摩焼の甕である。32は「く」字状の口縁を呈し，口縁下に突帯が廻るものである。33は口縁部の断面形態が逆Ｌ字状を呈し，口縁下部が丸く垂れる。34は口縁部が内側へ突出し，口縁上面には貝目の痕が認められる。35～37は擂鉢である。35は薩摩焼の片口擂鉢である。口縁下に２条の突帯が廻る。17世紀第３四半期前後のものと思われる。36・37は擂鉢の底部～胴部片で，内面に櫛目が隙間なく入っている。38・39は薩摩焼の甕である。38は上げ底で，39は胴部に把手がつくものである。40・41は薩摩焼の甕の蓋である。逆Ｌ字状の口縁をもち，端部が上の方へ拡張している。口縁内側への突出もある。42は火舎である。瓦質で胴部に１条の突帯が廻っている。43は蓋である。摘みの周囲に花弁状に列点文が描かれている。44は砥石である。表面に擦痕が認められ，裏面は剥落している。45は鞴羽口である。吹き口部分に滓が熔着しているが，磁力反応は認められない。

（２）遺物（第47・48図）

46～52は近世の遺物である。46は天目碗である。黒褐色の鉄釉が施される。47は陶胎染付の碗で



第47図　近世の遺物（Ｌ・Ｏ・Ｑ調査区）



第48図　その他　杭（L・O・Q調査区）

ある。肥前産で18世紀前半～中頃のものと思われる。48は火入れである。肥前産で18世紀のものである。49は薩摩焼の壺である。逆Ｌ字状の口縁部で，口縁部上面には貝目の痕跡が認められる。50は薩摩焼の擂鉢である。底部からの立ち上がりが急で，内面には縦や斜め方向に不規則な櫛目が入っている。器壁がやや厚い印象も受けるが，胎土がマーブル状になっており，串木野窯の可能性がある。51は染付である。18世紀のものと思われる。52はメンコである。薩摩焼を打ち欠いて作られている。53～60は杭である。時期比定が難しいが，周辺の遺物・遺構等の状況から中世～近世頃のものと推定した。先端部分は２面あるいは３面を尖らせたものが多い。先端部分以外に加工は行われていない。60は幅が10cm 程あり，刃物で面取りをした痕跡が認められる。先端部は尖っておらず，柱等の可能性もある。

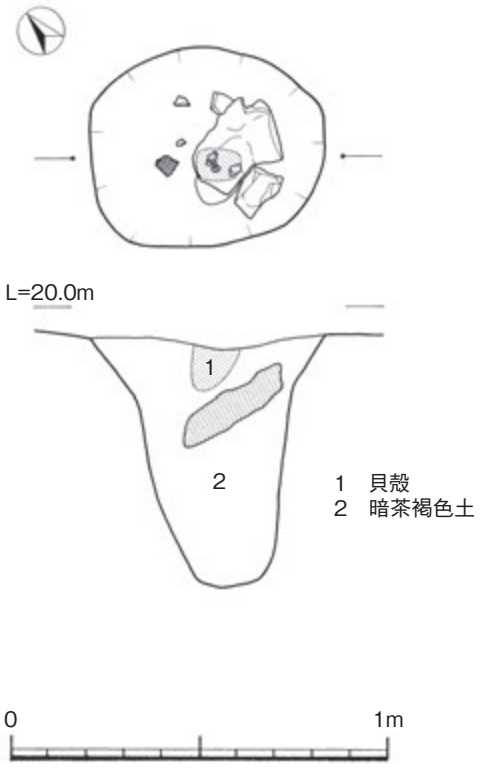
第３節　Ｎ調査区の概要

Ｎ調査区は遺跡の中央部分にあたり，山腹部の西側に位置する。地形は北～北西の方角へ傾斜している。遺構は石切場を中心に，鍛冶遺構，大型土坑，墓壙などが検出された。時期的には中世～近世にかけてのものが中心である。遺物も中世～近世の時期のものが中心で，古代の遺物も若干出土している。

１．古代の調査

（１）遺構の概要

Ｎ調査区では古代に該当する遺構は１基のみで，貝殻廃棄土坑が検出されている。小型の土坑内に貝殻が廃棄されたもので，ゴミ捨て穴のようなものと思われる。類似の遺構は，近隣では安茶ヶ原遺跡や市ノ原遺跡（いちき串木野市）などで検出されており，この周辺で同様な行為が行われていたことが推測される。



第49図　貝殻廃棄土抗

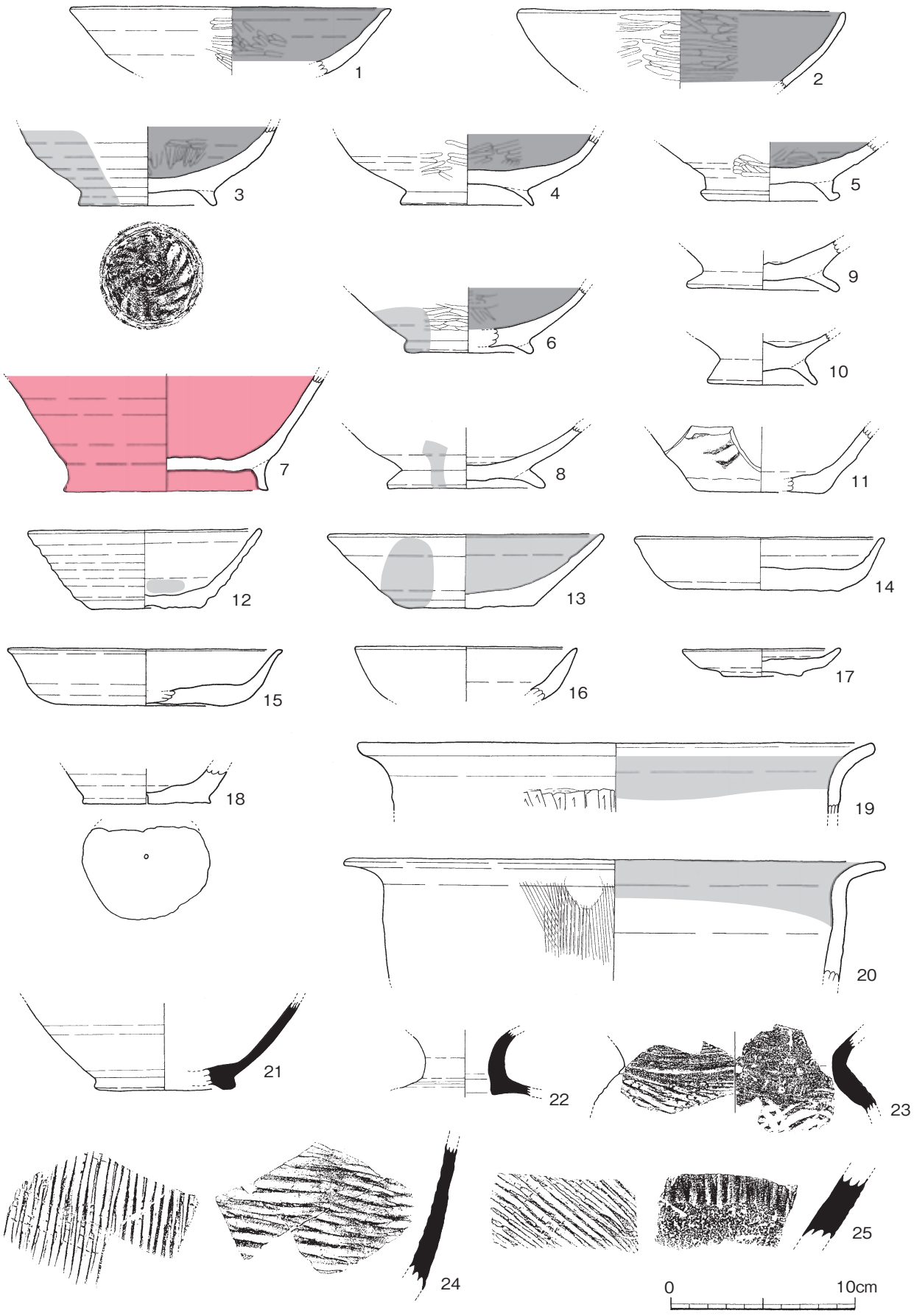
①貝殻廃棄土坑（第49図　Ｎ(n9）調査区）

長軸60cm ×短軸50cm，深さ65cm のほぼ楕円形に近い形状である。埋土は暗茶褐色土で，炭や焼土が混在している。上部より貝殻がまとまって出土した。そのほとんどは形状をとどめていないが，巻貝が多いようである。貝殻の周辺より須恵器や土師器が出土した。また内部より大型の石が２つ出土しており，根石の可能性も考えられる。

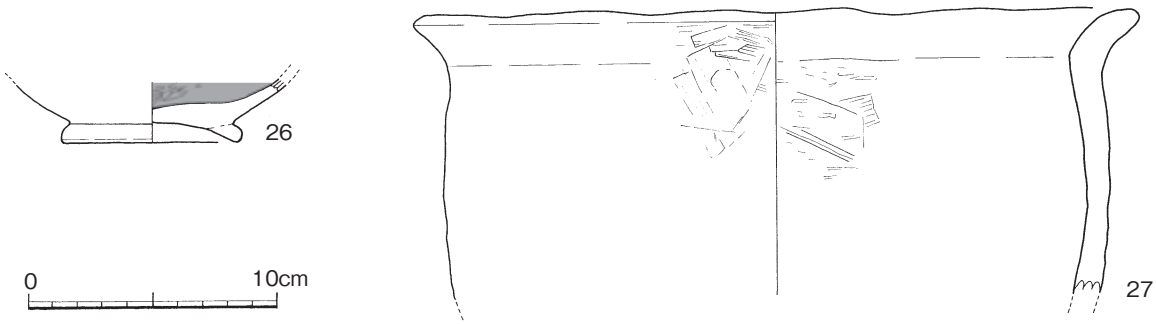
（２）遺物（第50～52図）

遺物１（第50図　Ｎ(n9）調査区）

１～６は黒色土器Ａ類の椀である。外開きの低い高台が付き，内外面ミガキが施される。３の高台内底には回転篦



第50図　古代の遺物１（N−n9調査区）



第51図　古代の遺物２（N-n7調査区）

切りの痕跡が認められる。５はしっかりとした高台を「ハ」字状につけたもので，９世紀後半頃のものと思われる。６は短い高台を「ハ」字状に貼り付けるようにつけたもので，11～12世紀頃のものと思われる。７は赤色土器Ｂ類である。直立気味の高台に体部が真っ直ぐに伸びるもので，箱形である。８～10は土師器の椀である。８・９は外開きの低い高台がつき，10は底面内外面が膨らむものである。11～16は土師器の坏である。11は体部外面に墨書が施されている。「方」かとも思えるが，欠損のため全形は不明である。12は内面に，13は内外面にススが見られる。14・15は口径14cm と15cm で大きめのものである。11～12世紀頃のものと思われる。17は皿で，8.5cm 程の小さいサイズである。18は紡錘車の製作途中と思われる。坏の体部を打ち欠いて，底部外面から孔を穿とうとしているが，未貫通である。19・20は土師甕である。口縁部が長く如意状に外反する。口縁内面にススが認められる。21～25は須恵器である。21は椀で，逆台形状の低い高台が付く。22は壺の頸部，23は甕の頸部である。24・25は甕の胴部である。

遺物２（第51図　N（n7）調査区）

26は黒色土器Ａ類の椀である。短い「ハ」字状の高台がつき，内面にはミガキが施されている。10世紀中頃のものと思われる。27は土師甕である。口縁部は肥厚しながら如意状に外反しており，胴部には横方向のケズリののち軽いナデが施されている。

遺物３（第52図　N（n10）調査区）

28は黒色土器Ａ類の椀である。ほぼ完形で，短い「ハ」字状の高台が貼り付けるようにつけられ，内外面にはミガキが施されている。11～12世紀頃のものと思われる。29は須恵器甕の胴部である。外面は格子目タタキ，内面は板ナデである。



第52図　古代の遺物３（N-n10調査区）

２．中世の調査

（１）遺構の概要

Ｎ調査区で確実に中世と判断できたのは，中世墓のみである。他にも中世と思われる遺構が幾つかあるが，遺構の継続性や他との関連性から，次項で扱った。

①中世墓（第53～55図）

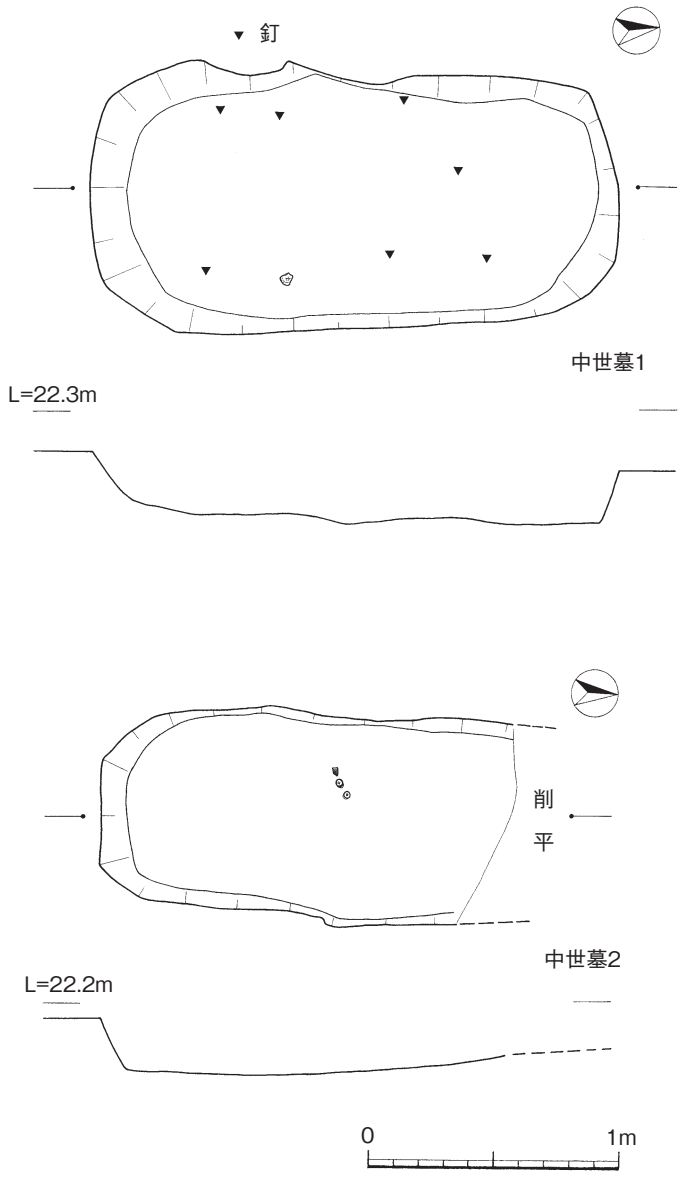
中世墓が４基検出された。いずれも単基で散在的に存在し，群を形成していないのが特徴である。形態的には方形のものが主体をなしている。

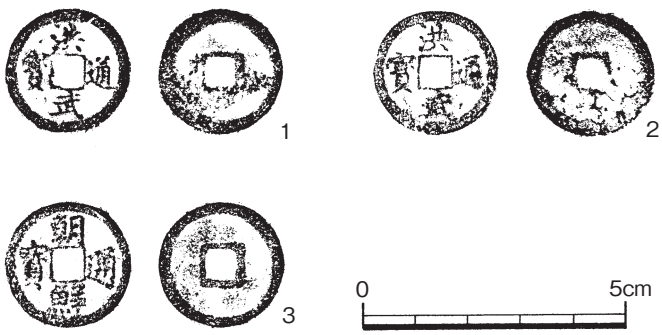
中世墓１（第53図）

Ｊ－28グリッドから検出された。軟質の凝灰岩岩盤上にシラス盛土による造成が行われており，その盛土を掘り込んで墓が作られている。長軸2.1ｍ×短軸１ｍ，深さ20cm の楕円形を呈する。床面は凝灰岩岩盤で凸凹しているが，凝灰岩自体には加工痕は見られない。埋土は黄茶色で粘質をおびている。副葬品の出土は見られなかったが，棺桶のものと思われる釘が出土した。折れてかなり劣化しており，ほとんど原形をとどめていない。

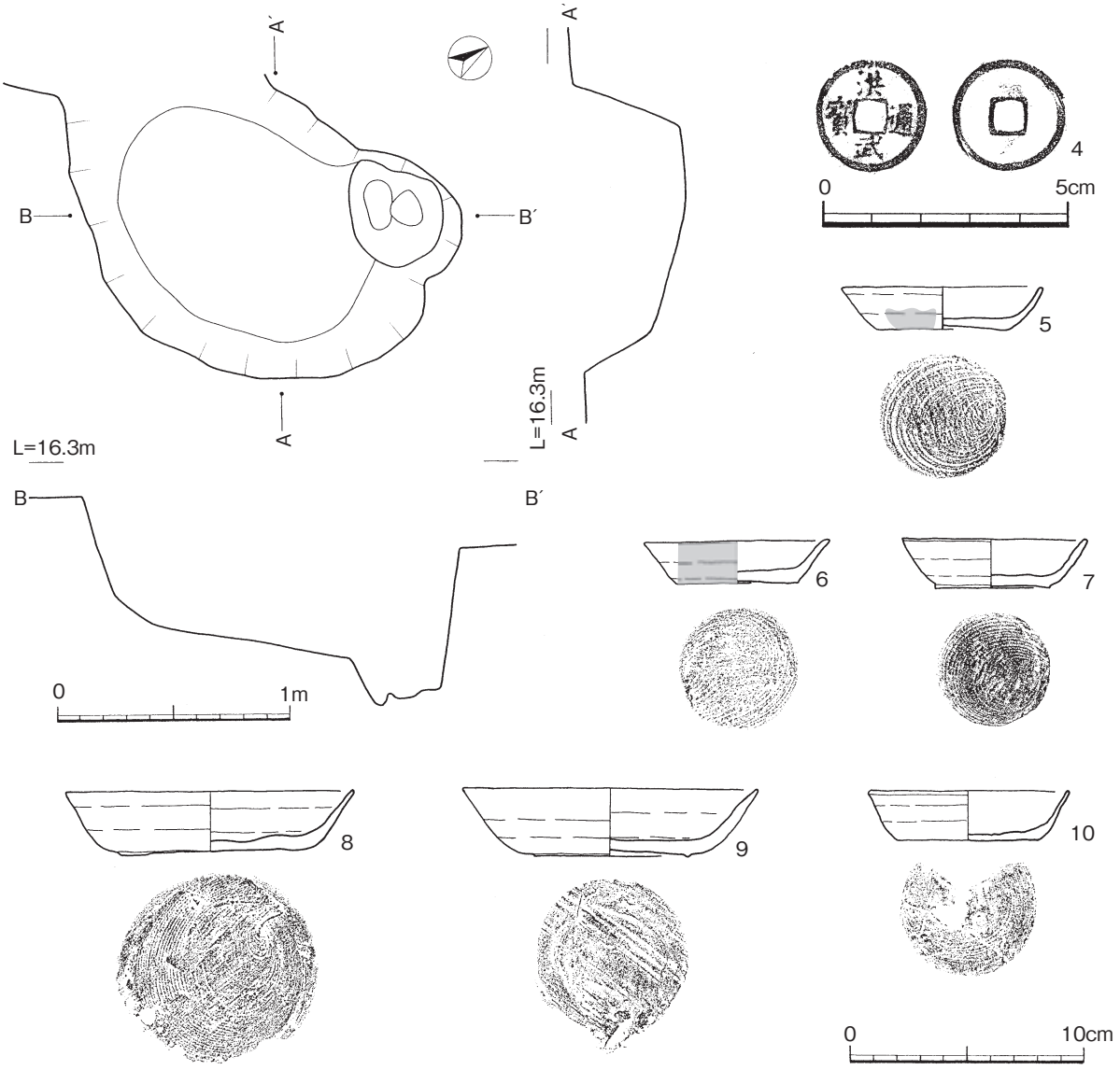
中世墓２（第53図）

Ｈ－26グリッドから検出された。中世墓１と同様に，軟質の凝灰岩岩盤上にシラス盛土による造成が行われており，その盛土を掘り込んで墓が作られている。墓壙の北側部分は，凝灰岩検出作業のために削平されてしまったが，残存径で長軸1.6ｍ×短軸80cm，深さ20cm あり，本来は楕円形を呈するものと思われる。埋土は灰褐色で粘質をおびる。人骨は遺存していなかったものの，六道銭４枚と櫛が出土した。櫛が副葬されていたことから，被葬者は女性である可能性が高い





第53図　中世墓１・２と出土遺物



第54図　中世墓３と出土遺物（４：Ｓ＝7/10，５～10：Ｓ＝1/3）

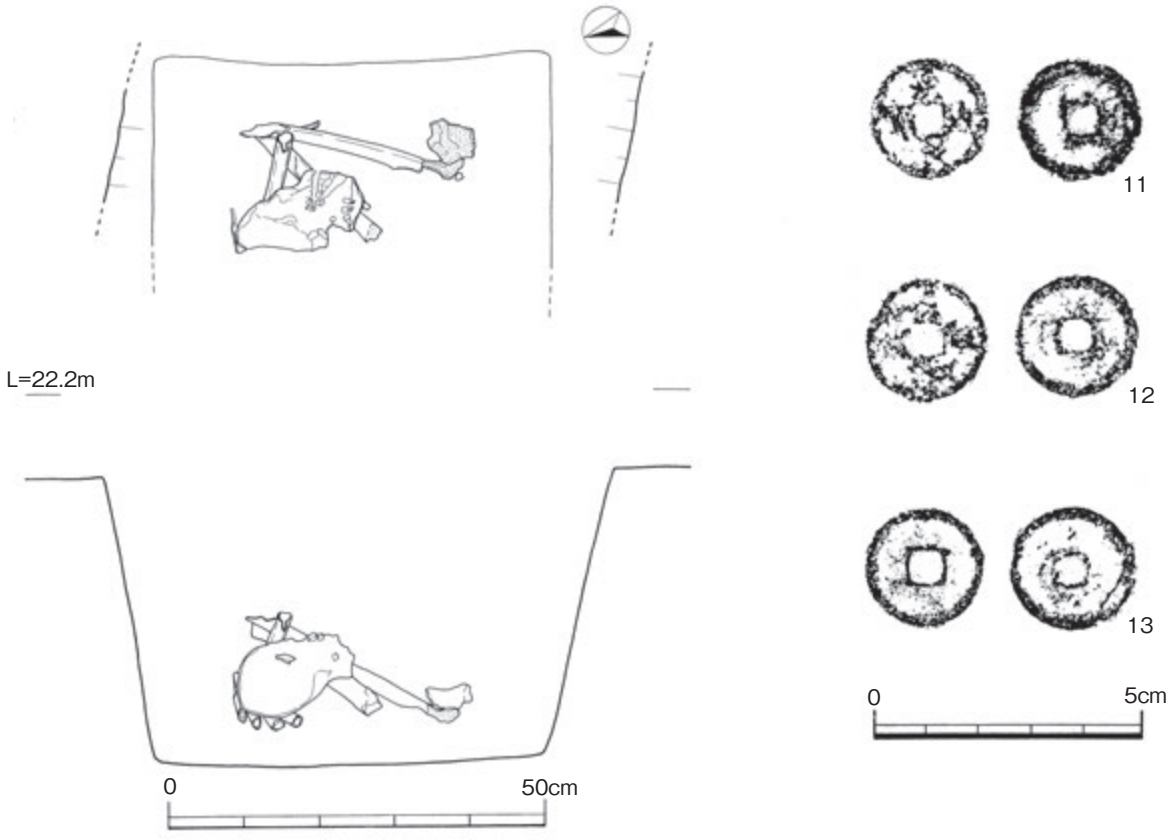
と思われる。

１～３は六道銭である。１・２は洪武通寶である。明代に鋳造されたもので，初鋳年は1368年である。３は朝鮮通寶である。朝鮮で鋳造されたもので，初鋳年は1423年である。残りの一枚は遺存状況が非常に悪く，拓本化は不可能であった。また櫛も土質化しており，実測は不可能であった。

中世墓３（第54図）

G－29グリッドから検出された。長軸1.7m×短軸1.1m，深さ50cm の不整楕円形を呈する。人骨は遺存していなかったが，土師皿６枚と六道銭１枚が副葬されていた。

４は洪武通寶である。５～10は糸切り底の土師皿である。５・10は口径8.5cm，６・７は口径８cm の小皿のもので，８・９は口径12cm のものである。６には外面にススの付着が認められ，灯明皿と思われる。13～14世紀頃のものと思われる。



第55図　中世墓４と出土遺物

中世墓４（第55図）

Ｍ－24グリッドから単基で検出された（第96図参照）。中世墓４に関しては，調査方法に課題を残した。凝灰岩露頭上面にシラスの盛土があり，その盛土を調査するために断面観察用ベルトを設定して掘り下げたところ，偶然ベルトに中世墓が掛かって発見されたものである。埋土はシラス盛土と区別がつかないため，平面ではプランがつかめなかった。今後このような事例もあることを念頭に，より慎重な調査に臨みたい。残存径では短軸53cm・深さ37cm で，長軸は不明だが，長方形を呈するものと思われる。頭蓋骨と大腿骨などの人骨が遺存しており，六道銭が５枚副葬されていた。古銭の遺存状態が悪いため判別は不可能であったが，中世墓は基本的に単基で存在し，近世墓はＰ調査区に集中している状況などを考慮し，本報告書では中世墓として扱った。しかし，近世墓になる可能性も残されていることを付記しておきたい。

３．中世～近世の調査

（１）遺構の概要

中世～近世に比定される遺構は，Ｎ調査区では最も多く検出されている。特に石切場とそれに関連すると思われる遺構に多い。

①石切場（第56～70図）

石切場の調査方法

石切場跡はＮ調査区の n3・n6・n10から検出された。調査前は木が生い茂り，木立の間に石垣で囲まれた平坦面が存在することが確認されていた。この平坦面が曲輪状に見えることから，当初は城跡の可能性の有無を想定した調査を考えていた。しかし伐採が終わって表土を除去したところ，下から凝灰岩の石屑(コッパ)が一面に広がった状態で検出された。また石垣も凝灰岩の石屑を積み上げたものであったほか，凝灰岩の露頭も見つかり，露頭にはツルハシの痕跡も確認された。このような状態から，周辺に石切場が存在することが予想されたため，当初の方針を変更し石切場の解明を目的とした調査に切り替えた。しかし県内で初めての石切場の調査のため，調査方法等の情報に乏しかったこと，石切場の存在が明らかになった時点で，調査期間が３ヶ月半しか残されていなかったなど，情報収集しながら効率的な調査を行わなければならない難しさが伴った調査となった。

調査はまず表土を除去して石屑を全面的に検出したあと，先行トレンチを設定して埋土状況を確認した。その結果，石屑が２ｍ以上堆積していることが明らかとなったため，全てを人力による石屑の除去は，時間的・体力的にも不可能と判断した。そこで，堆積状況の変化に応じて，重機と人力を併用して石屑の除去を行った。石屑の堆積は厚いところで５ｍにも達した。また石切場の操業



第56図　凝灰岩の分布と遺跡の位置（露木・大木1974をもとに作成）（S ＝1/50,000）



写真１　石切場全景

時期を特定するため，埋土中から遺物の出土がないか注意するとともに，採石の際の工具痕の確認や関連するその他の遺構の検出に努めた。調査の結果，採石に適さない部分も含めた石切場の全長は長さ約200m，幅約６mに達していることが明らかとなった（第57～64図）。

石切場の石材の概要

石切場の石材は弱性の溶結凝灰岩である。いちき串木野市域は四万十層群と考えられる露頭が少なく，第三紀中新世の両輝石安山岩類が基盤となっている。市域東部に位置する冠嶽の西岳付近には，同時代の石英閃緑斑岩やプロピライト化された安山岩が見られる。これらを第三紀鮮新世後期の火山砕屑岩類や両輝石安山岩が覆って冠嶽の山体を形造り，山体の低いところを埋めるように，第四紀更新世に噴出した火砕流の溶結凝灰岩が広く分布している（大徳1991）。1973年に調査された『鹿児島地域開発地域土地分類基本調査』によると，柊城跡で凝灰岩の存在は確認されていないが（露木・大木1974），おそらく五反田川沿いに分布する凝灰岩の脈の一部と理解してよいだろう（第56図）。石切場跡に見られる凝灰岩の厚さは最大で約５mほどである。細粒の火山灰を主体とし，なかに軽石・異質岩小片が散在する。湿った状態で暗青灰色～暗灰色，乾いた状態で淡青灰色～灰色を呈する。第四期中期以前のもので，約50～60万年前の樋脇火砕流か約30万年前の加久藤火砕流に対比されると見られる（鹿児島大学森脇広教授御教示）。



第58図　石切場拡大図１（①部分）



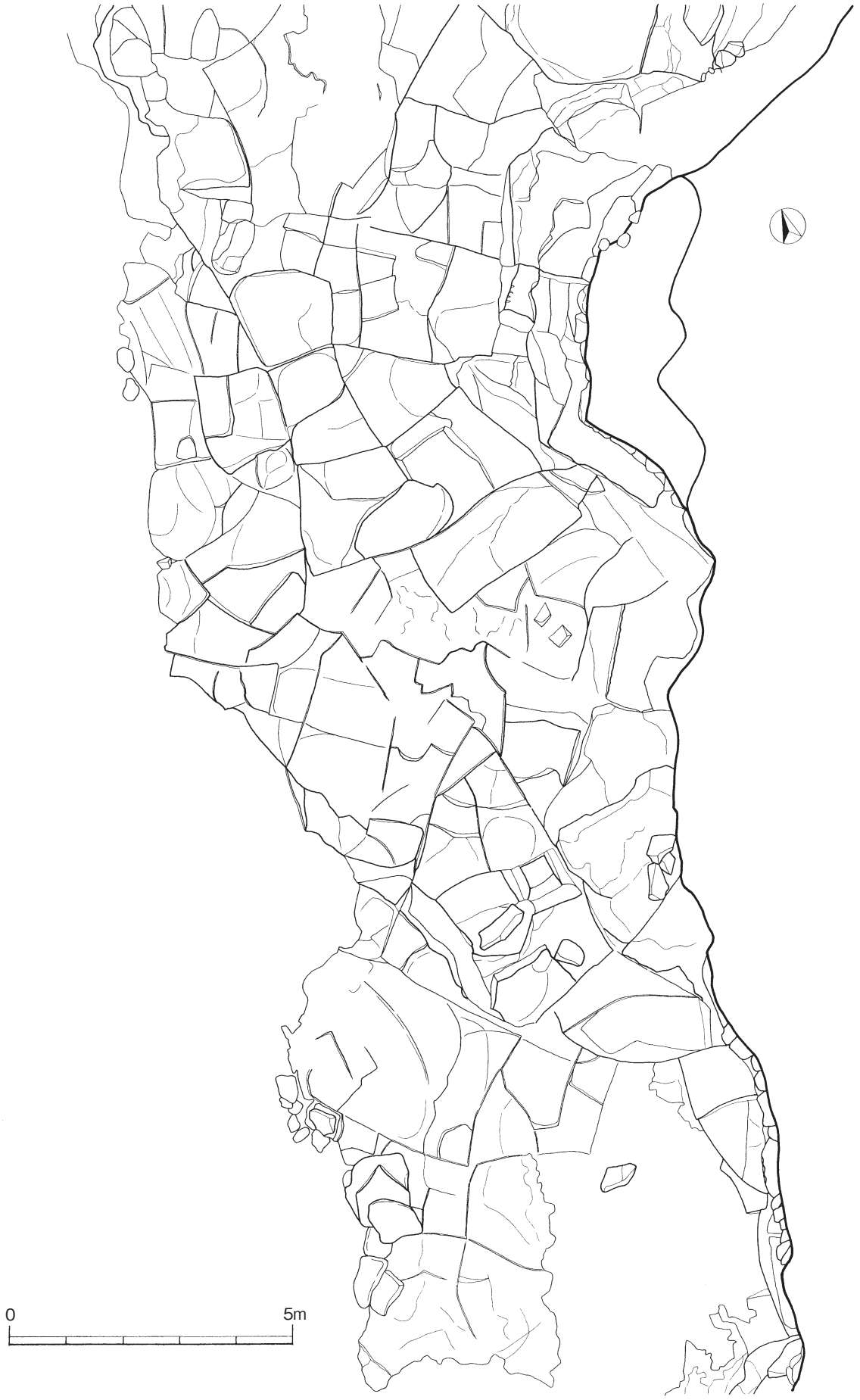
第59図　石切場拡大図２（②部分）



第60図　石切場拡大図３（③部分）



第61図　石切場拡大図４（④部分）



第62図　石切場拡大図５（⑤部分）



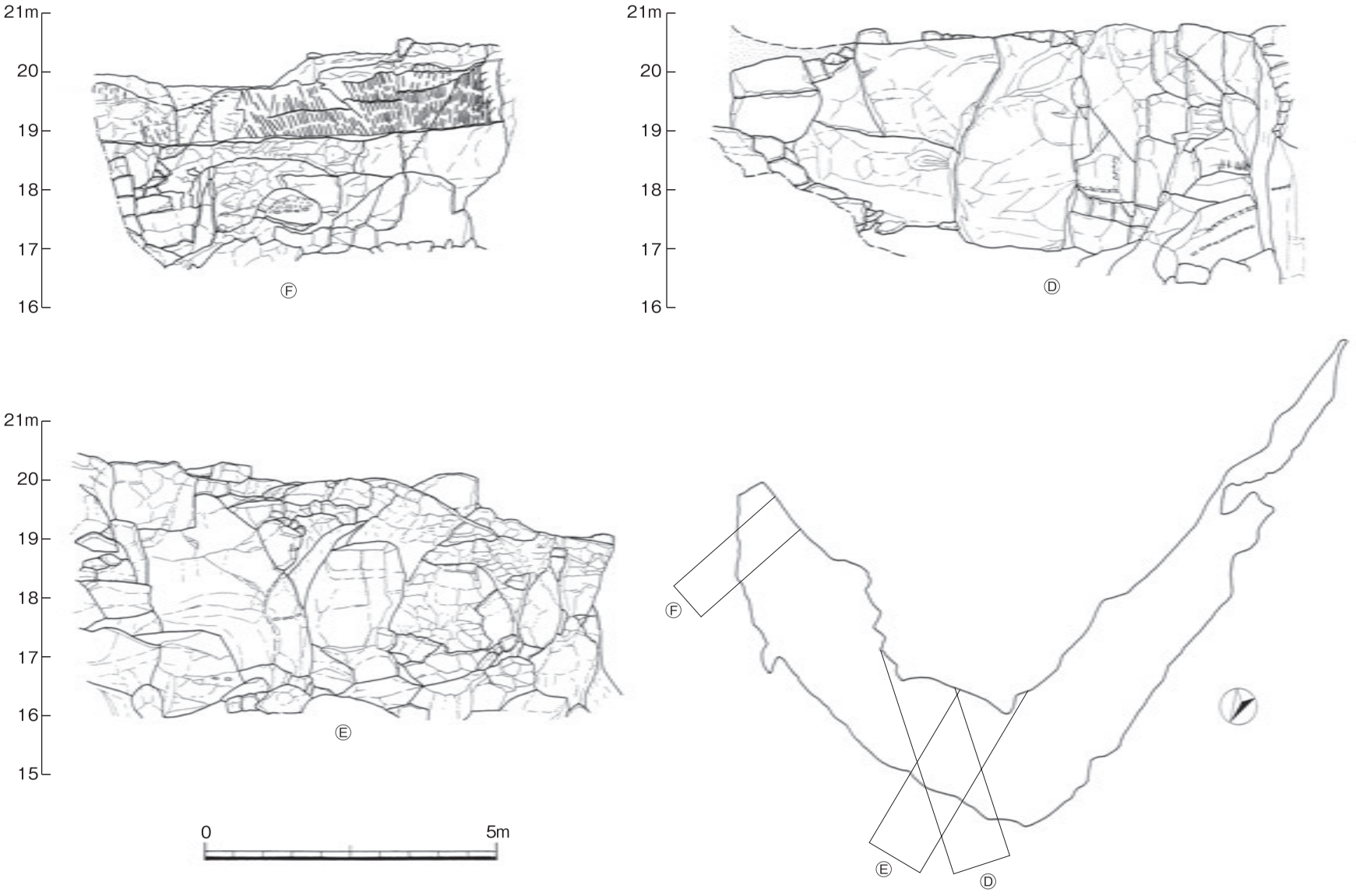
写真２　石切場拡大１（n6・n7地点）



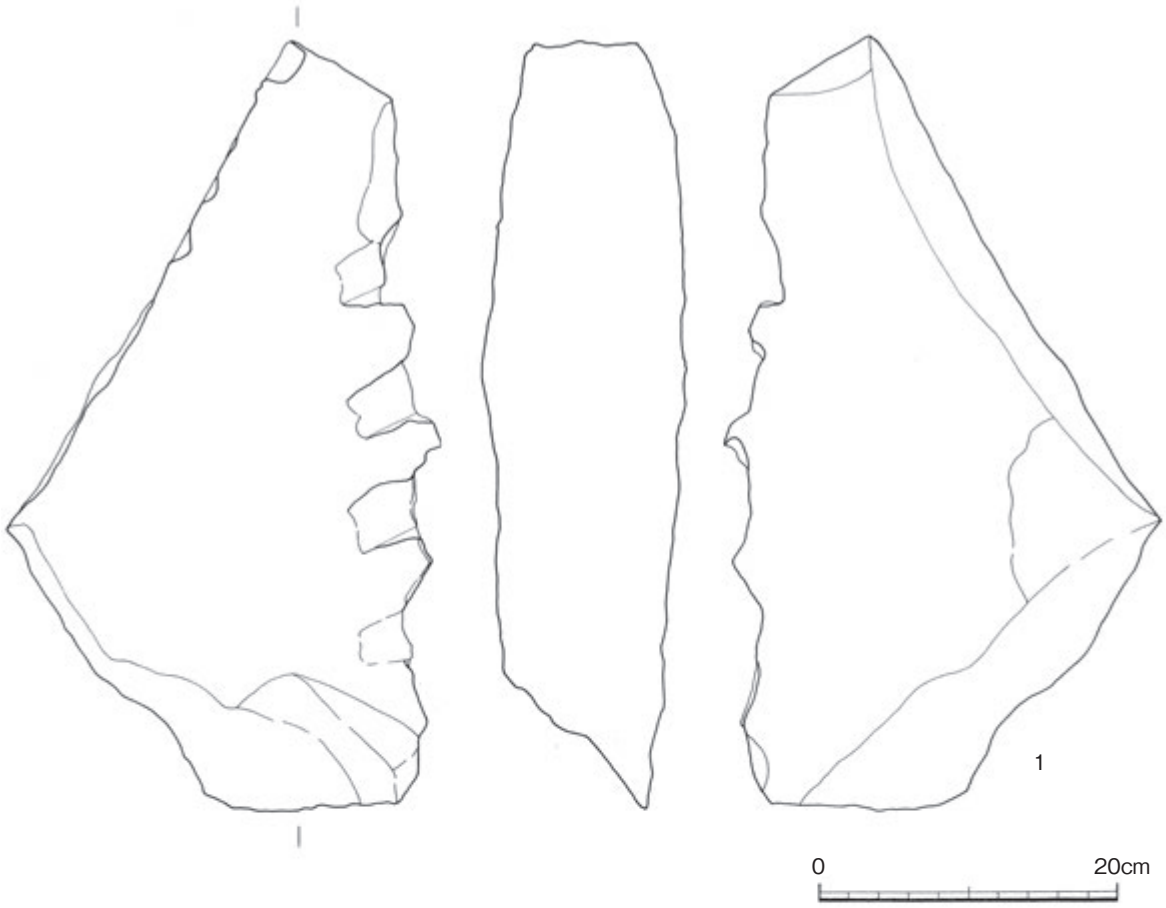
写真３　石切場拡大２（n6地点）



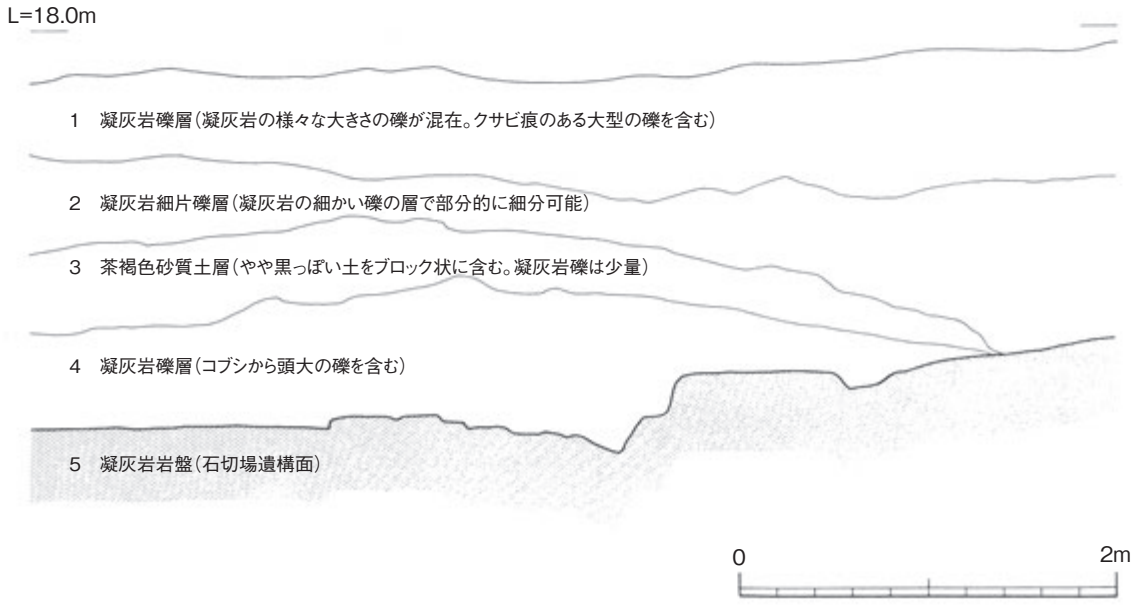
写真４　石切場拡大３（n3～n6地点）



第64図　石切場立面図２（Ｄ～Ｆ部分）



第65図　石屑（コッパ）実測図



第66図　石切場埋土状況図

採石の特徴

採石は，長さ約150m，深さ最大約５mにわたって行われている（写真１～４）。石切場の東南端周辺は凝灰岩が軟弱で，表面は風雨によって凸凹した状態である。石切場に適さない部分が多かったと思われ，H－27グリッドの周辺しか採石が行われていない。この部分は，上位にツルハシの痕跡が幅4.6m×高さ１mの大きさで見られる。このツルハシの痕跡部分から幅30～40cmほどの段部分を残して採石が深さ２mほど行われている。採石の仕方が粗いため，側面は垂直面をなさず，凸凹している。深さ１mほどの場所には矢穴の痕跡が見られる。矢穴は横方向に４か所穿たれており，上下に石を割ろうとしていたことが伺える（写真５・６）。しかし，上面の採石に失敗したために，方形の石材を得ることができず，採石を断念したものであろう。底面も凸凹しており，小さい単位で採石を繰り返していたことが伺える。北側の方へ開けているため，その方角へ石を引き出したものと思われる。H－28，Ⅰ－27・28，Ｊ－28グリッドの周囲も凝灰岩盤の表面が風雨によって凸凹した状態であり，石材には適していないと思われ，採石が行われていない。K－27・28，L・M－23～28グリッドにかけては全面的に採石が行われている。N（n3）・N（n6）地点に該当する。この地点には石屑を乱積みした石垣が廻っていた。この石垣は北側から南側へ向けて階段状に築かれており，それぞれが広いテラスを構成している。壁面にはツルハシ痕や矢穴痕などが認められる。特にツルハシ痕は石切場の上位に残されている。採石の時期差を示す可能性も考えられるが，石切場の上位は軟質で製品に適さない状態のものが多いことから，目的となる石材の芯の部分を露出させるために，表面の皮（柔らかくて脆い部分）を削りとった痕跡である可能性が高いと考えられる。同様な状況は，兵庫県高砂市の御連山地区５地点でも認められるようである。矢穴痕は石切場の下位で多く確認されるが，垂直方向と水平方向に打ち込まれている。岩質的か技術的な問題かは不明だが，亀裂がきれいに入らず採石を中断して放置されたものも多い。また矢を入れるためのヤアナホリの痕跡も認められた。

採石しようとした部分には，ツルハシ・敲打などの痕跡が認められる（写真７）。これらのことから，目的の大きさや形の石材を採るために，不適切な部分を取り除いたり面調整を行うなどして採石を行っていたことが伺われる。

採石パターンとしては，N（n7）調査区側を中心に，採石最終面が縦４m×横３m程度を一つのまとまりとして採石痕を残している場合が多いようである。石に矢を入れ，岩盤から剥ぎ取ったものが多く，剥取痕は断面Ｕ字形のものが多い。この一つのまとまりの中でさらに細かく採石が行われている。縦70cm×横70cmの板状に規格された石が取り残されており，このようなサイズの石を採石したのものと思われる。なおN（n9）地区側では，底面に縦25cm×横25cm程度の採石痕がハチの巣状に見られる箇所があり，これらも採石パターンの違いとして理解できるかもしれない。

（２）遺物（第67～70図）

石切場跡では，礫埋土中から採石工具の鉄器や磁器などが出土している。なお鉄器の分類・用途に関しては，『竜山石切場』（高砂市教育委員会2005），『牟礼・庵治の石工用具』（牟礼町教育委員会1998）を参照した。２～９はヤ（矢）である。大きさや断面形態によって大きく４種類が認められた。２・３・５・７は全長８～9.4cm・刃部幅2.5～3.2cmで断面形態がほぼ正方形のものである。



写真５　採石状況１



写真６　採石状況２

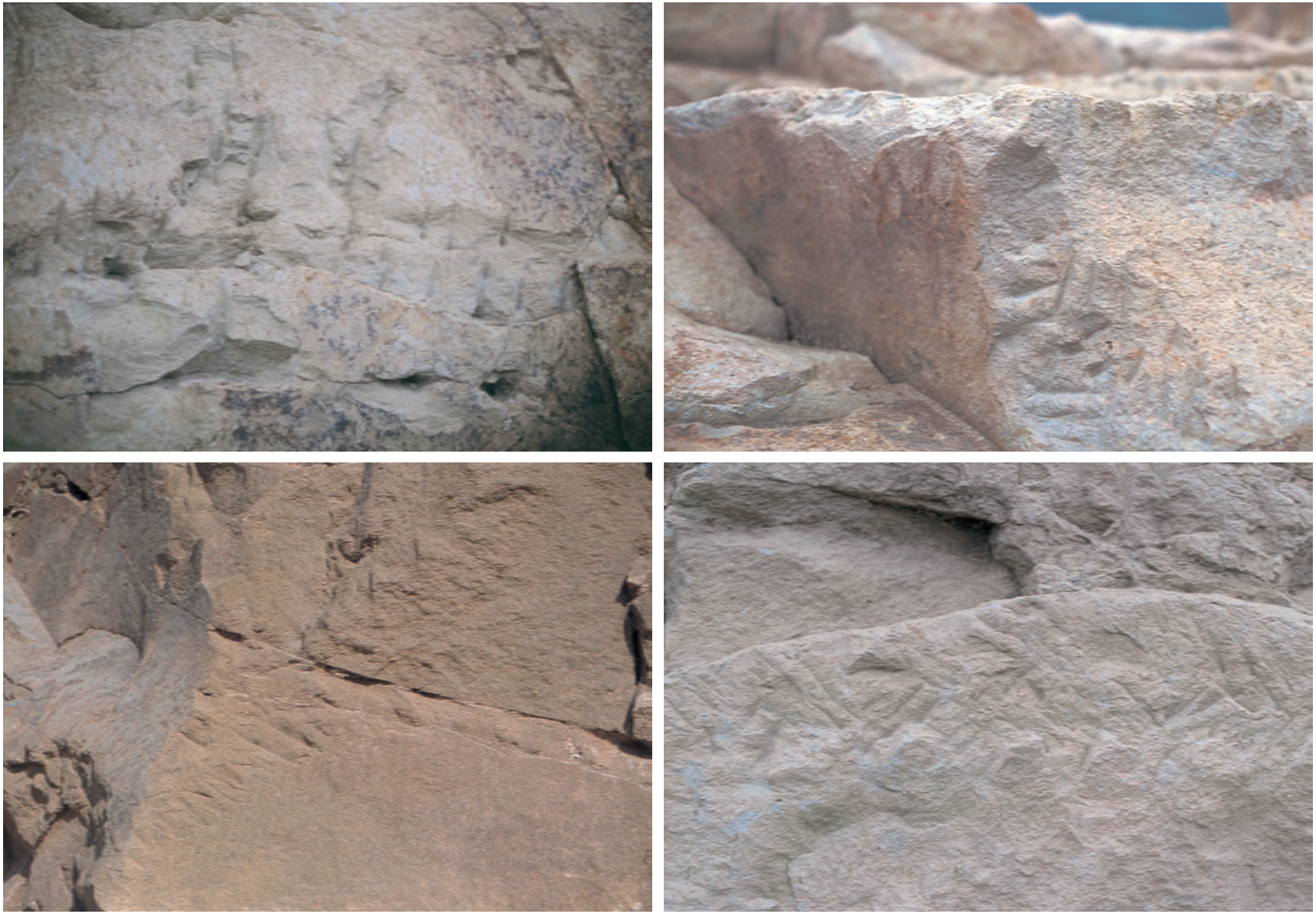
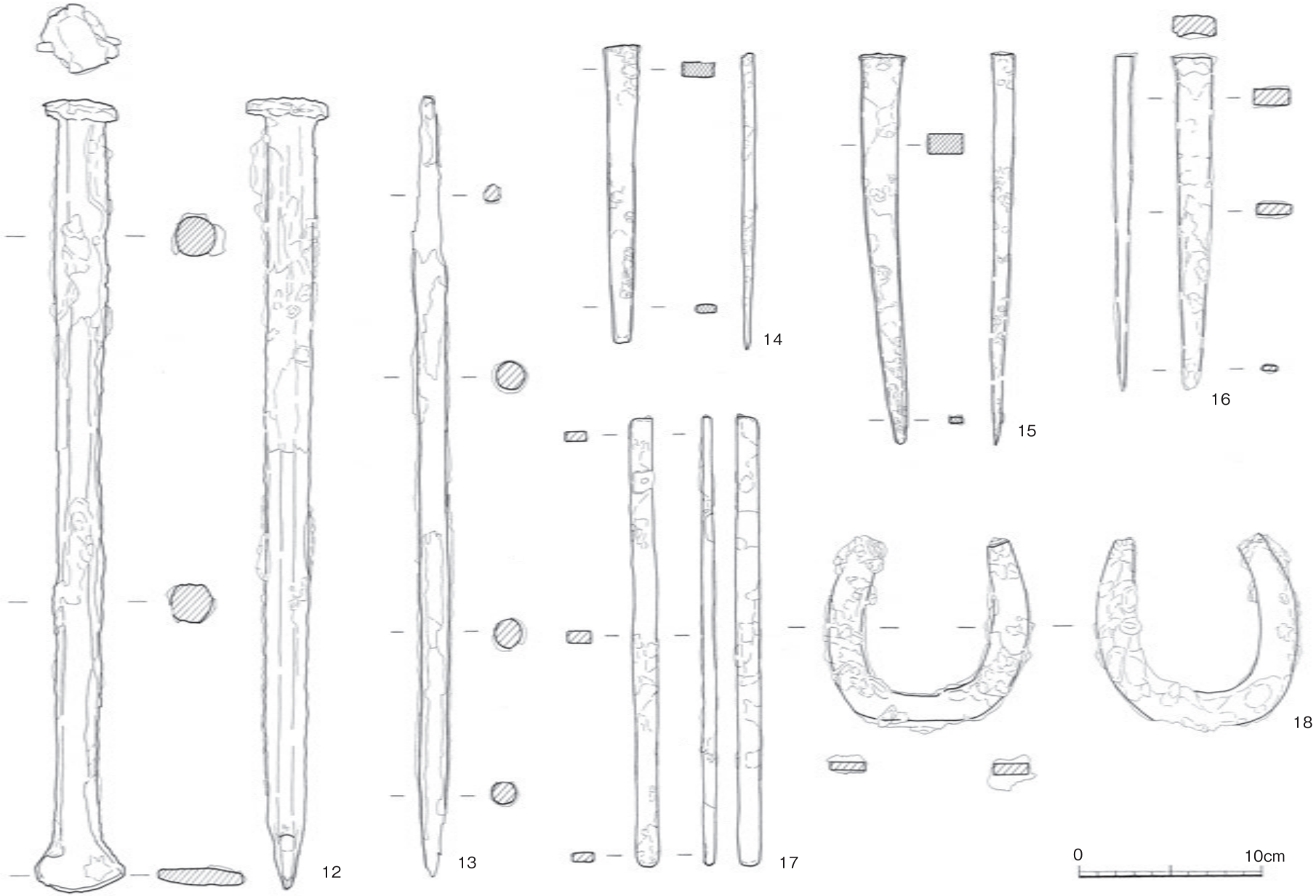


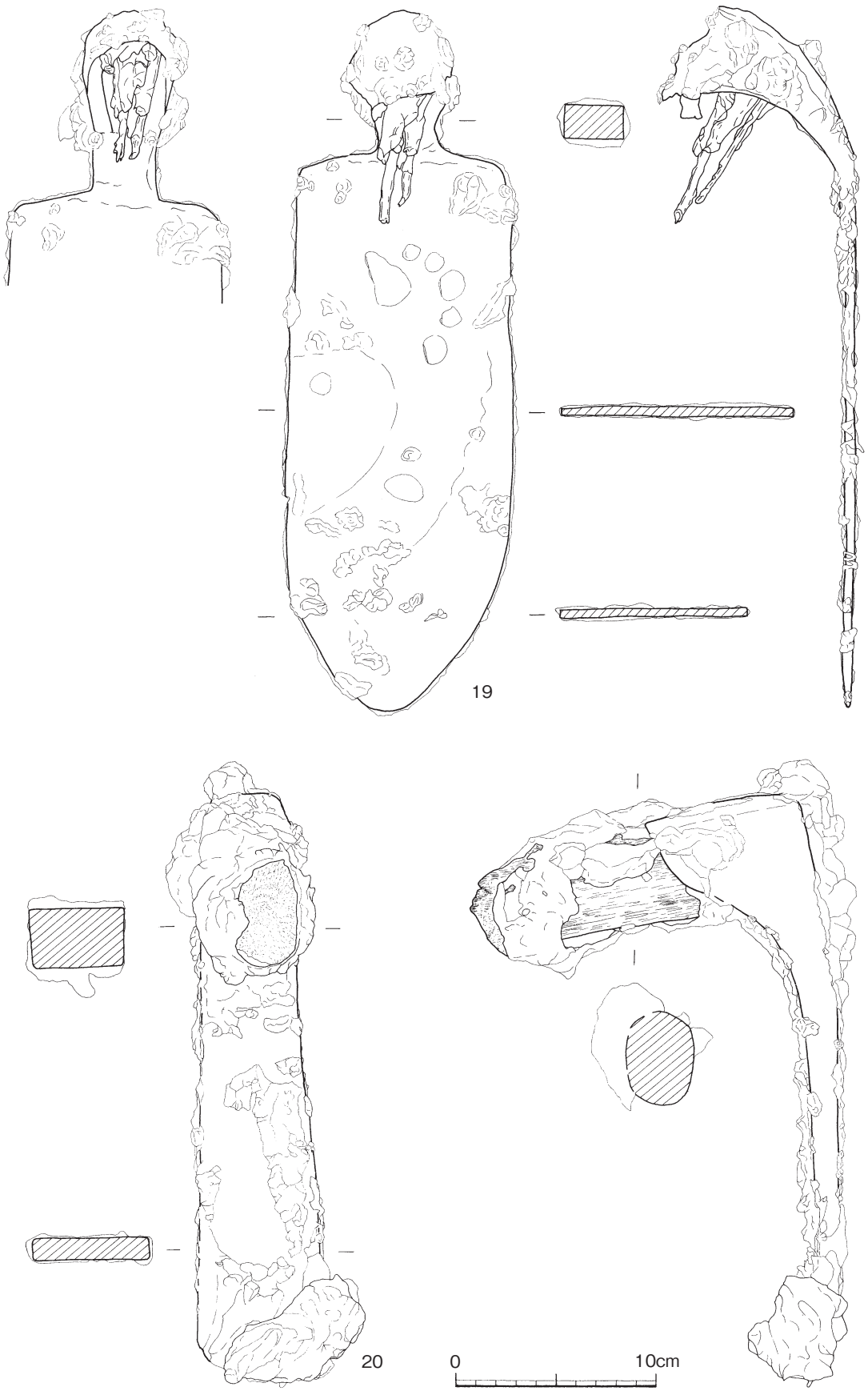
写真７　ツルハシ・敲打痕



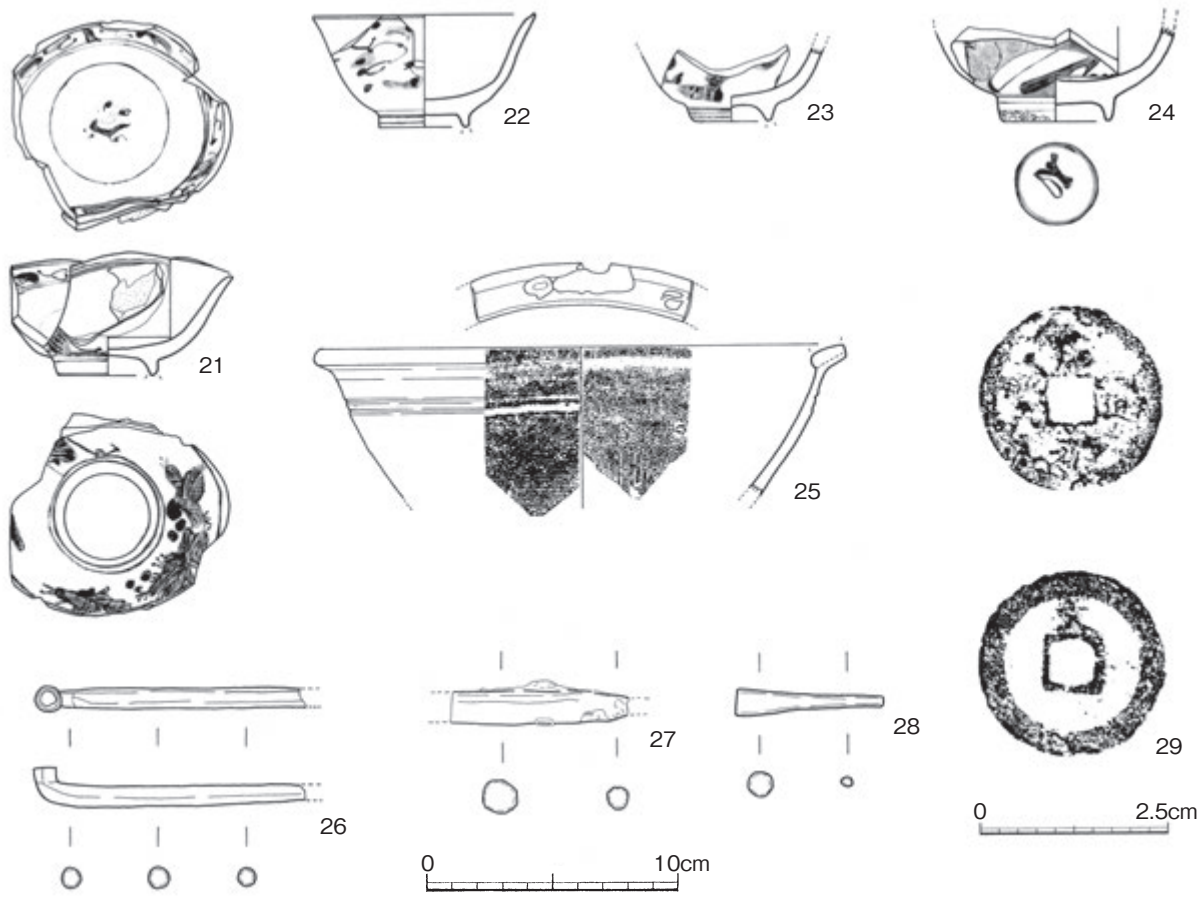
第67図　石工用具１



第68図　石工用具２



第69図　石工用具３



第70図　石切場埋土内出土遺物（21～28：S＝1/3，29：1/1）

４・６・９は全長７～８cm，刃部幅3.2～3.6cm で断面形態が長方形のものである。８は全長６cm・刃部幅２cm 弱で断面形態が長方形のものである。『竜山石切場』の分類に従えば，２・３・５・７はイッスン，４・６・９はチュウヤ，８はトビヤに対応すると考えられる。10はツルハシで，全長26cm である。岩上の風化土などを取り除くために用いられる。11はジホリノミかサキノミで全長25cm である。石に字を彫ったり，彫刻等の細工などに用いるものである。12はテコもしくはアナホリノミと思われる。全長44cm，刃部幅５cm で先端部へ向けて「ハ」字状へ開いている。13は全長43cm の棒状で，先端を尖らせている。断面形態は丸形である。14～16は断面形態が長方形で，先端部を尖らせたノミ状の道具である。17は全長25cm で断面形態が長方形の棒状である。上端近くに留め具のようなものが見られる。道具の一部分と思われる。18は蹄鉄である。19は鍬のようなもので，土や石屑をかき集める道具である。20は土掘り具である。上部の表土を掘り進める道具である。

21～25は陶磁器である。18世紀後半～19世紀前半頃のものと思われる。21～24は肥前系の染付碗である。22は羽反口縁をもつ。24は波佐見焼である。25は薩摩焼の擂鉢である。断面が斜めに倒れたＴ字状を呈し，口縁下に沈線が廻っている。26～28は煙管である。26が雁首，27は羅宇，28は吸口にあたる。26は首部の湾曲が弱く直線的であり，火皿の口径が小さいものである。18世紀後半～19世紀頃のものと思われる。29は文字寛永通寶，いわゆる文銭である。鋳造期間は1668～1683年である。

②掘立柱建物跡（第71・72図）

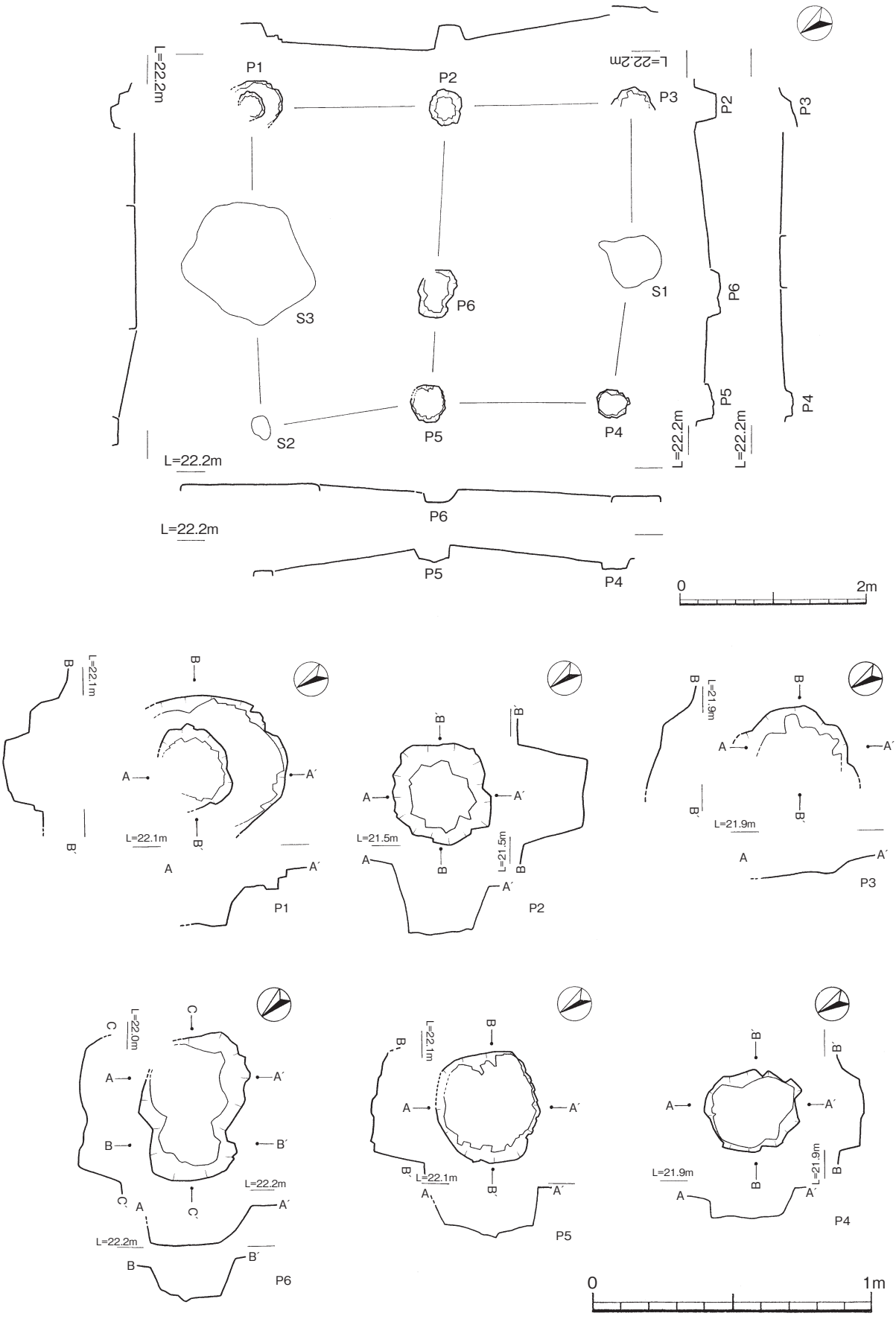
掘立柱建物跡は，N調査区全体で２棟検出された。それぞれの建物の間は20mほど離れているが，周囲にはそれぞれ作業に関連する遺構が多く見られることから，作業小屋などとして利用されたものと思われる。

掘立柱建物跡１（第71図　N（n7）調査区）

N（n7）調査区のH－26グリッドから検出された。凝灰岩の岩盤上に柱穴が刳り貫かれており，その配置状況から掘立柱建物跡の柱穴と思われる。柱穴は６か所確認されており，少なくとも２間×２間以上の建物で，梁行３m×桁行４mである。柱穴のない箇所については凝灰岩の平坦面が存在するため，その部分を利用したものと思われる。柱穴には段掘り状のものや，切り合っているものも見られ，内部にはノミの痕跡が明瞭に残されている（写真８・９）。建物の内部と想定される場所からは，機能を特定させるような遺構・遺物は確認されていない。しかし，近隣に採石箇所や鍛冶遺構などが存在することから，これらに関連する用途として利用された可能性が想定される。また検出面は採石に適さない状態の凝灰岩がむきだしになっていたことから，本来は造成面が形成されていたと思われる。



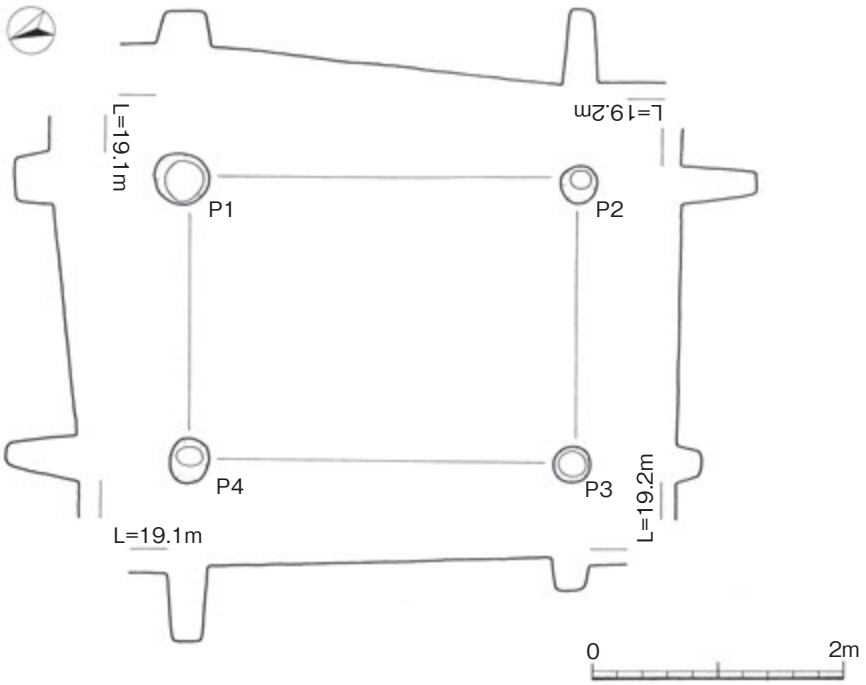
写真８　掘立柱建物跡１（N-n7調査区）



第71図　掘立柱建物跡１（N-n7調査区）



写真９　掘立柱建物跡１ピット（① Pit6　②・③ Pit5　④・⑤ Pit3）



第72図　掘立柱建物跡２（N−n9調査区）

掘立柱建物跡２（第72図　N（n9）調査区）

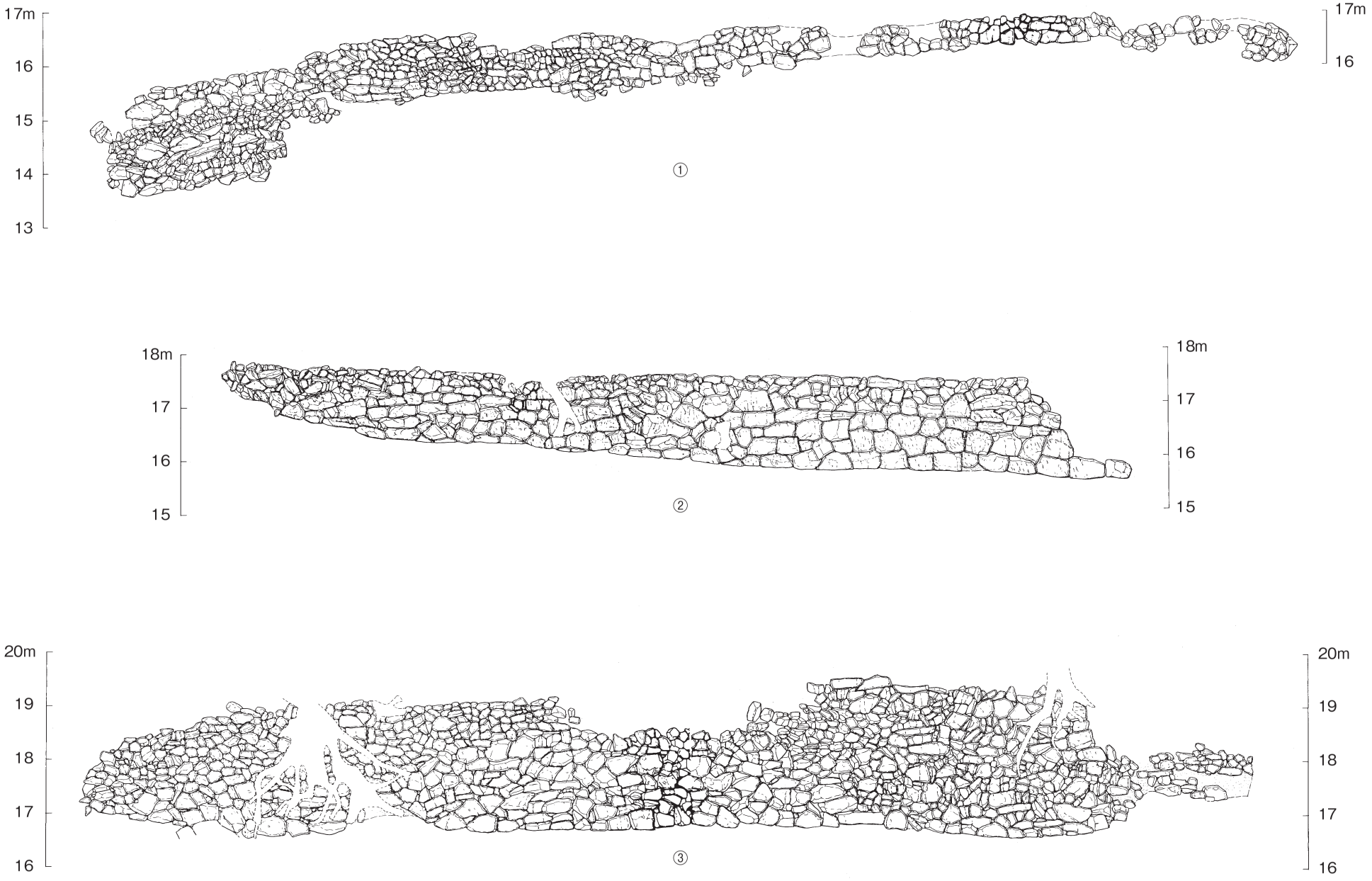
N（n9）調査区のＦ−27グリッドから検出された。１間×１間で，梁行2.1m×桁行３mの小型の建物である。建物が小型であることや，建物内に焼土の広がりが見られることなどから，作業小屋のようなものと思われる。

掘立柱建物跡１（N-n7調査区）観察表

主軸方向	柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	掘り方	柱穴番号	柱間（cm）	梁行（cm）	
N60° E	P1	（58.0）	（44.0）	20.0	−	P1-P2	210.0	P1-S3-S2	344.0
	P2	38.0	35.0	24.0	円	P2-P3	204.0	P2-P6-P5	316.0
	P3	（48.0）	（26.0）	7.0	−	P3-S1	162.0	P3-S1-P4	312.0
	P4	36.0	30.0	8.0	円	S1-P4	150.0	桁行（cm）	
	P5	40.0	38.0	16.0	円	P4-P5	200.0	P1-P2-P3	414.0
	P6	56.0	36.0	13.0	楕円	P5-S2	180.0	S3-P6-S1	400.0
	S1	60.0	55.0	−	岩塊	S2-S3	178.0	S2-P5-P4	380.0
	S2	25.0	20.0	−	岩塊	S3-P1	166.0		
	S3	130.0	130.0	−	岩塊	P5-P6	120.0		
						P6-P2	196.0		

掘立柱建物跡２（N-n9調査区）観察表

主軸方向	柱穴番号	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	堀り方	柱穴番号	柱間（cm）	梁行（cm）	
N63° E	P1	44.0	40.0	28.0	円	P1-P2	315.0	P1-P2	315.0
	P2	30.0	30.0	60.0	円	P2-P3	224.0	P3-P4	306.0
	P3	30.0	30.0	20.0	円	P3-P4	306.0	桁行（cm）	
	P4	36.0	32.0	58.0	円	P4-P1	220.0	P1-P4	220.0
								P2-P3	224.0


17m
16
15
14
13
①
17m
16
18m
17
16
15
②
18m
17
16
15
20m
19
18
17
16
③
20m
19
18
17
16

第73図　石切場内石垣

③石垣（第73図）

石垣は，採石によって生じた大小様様な石屑（コッパ）を乱積みして築いたものである。第73図②は一部上位と下位で明らかに積み方が異なっているが，この部分に関しては後世に積み替えたものと思われる。石垣の裏込めには石屑が用いられ，さらにシラスなどの土砂も一部入っている。このように石垣を築いて，採石の終了した壁面までを石屑やシラスなどによって埋めることによって平坦面を造成している。同様な遺構は鹿児島市清水城跡Ｂ地点でも確認されている。現代の石工の方の指摘によると，現地で加工まで行う場合，削り取った礫をならして平坦面を造り，そこを加工場にする場合があるということである。これは採石によって壁面が前方へ進んでいくために，平坦面を造成することによって，石割作業や鍛冶など関連する作業を行いやすくしたものと考えられる。本遺跡では，最も南側で最上位に築かれた石垣上のテラスで鍛冶遺構が検出されている。また，使用しなくなった場所に関しては，畑などとして利用することもあるという。

④鍛冶遺構（第74～87図）

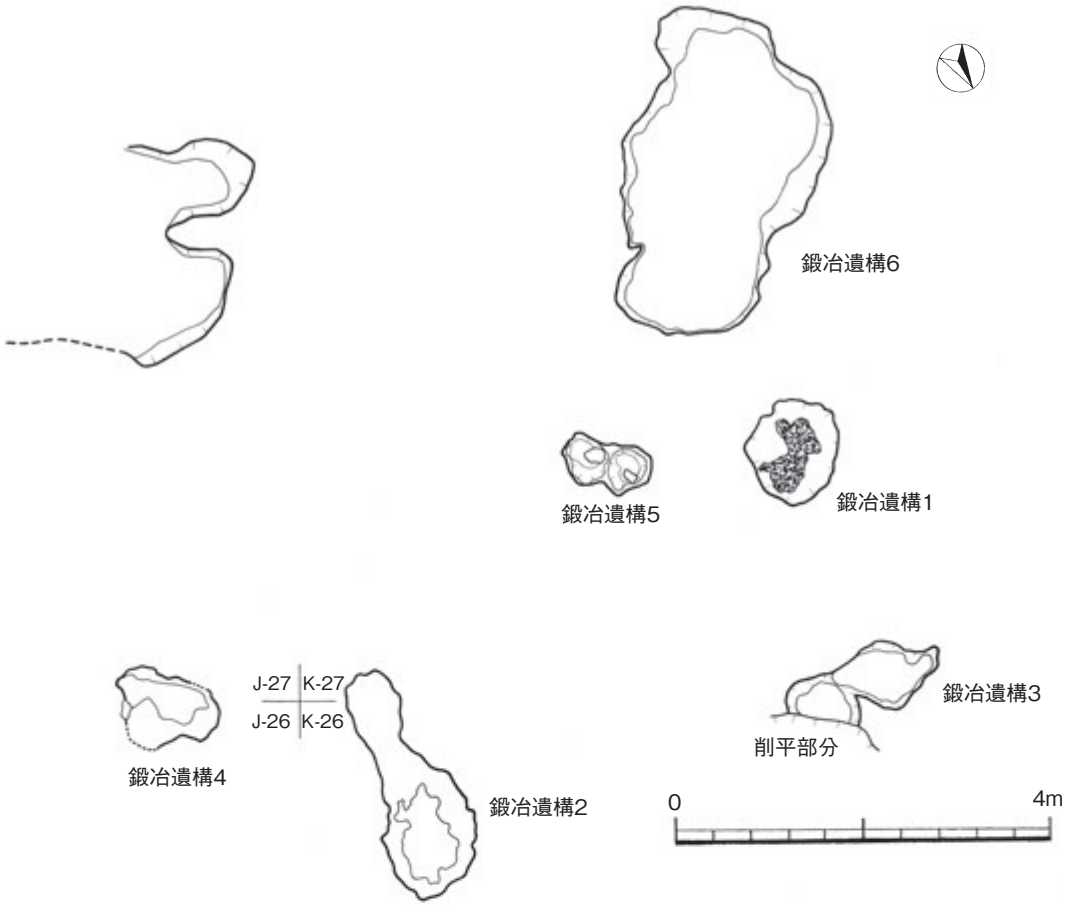
Ｎ(n7)区とＮ(n9)区で検出された。Ｎ(n7)区は両脇を石切場にはさまれた場所で，石切場の採石過程で生じた石屑（コッパ）を乱積みに積み上げて石垣を構築し，シラスの造成面が形成されている。その造成面に鍛冶遺構が作られている。鍛冶遺構は５基（１～５号）検出されている。Ｎ(n9)調査区では斜面を削ってテラス状に造成しており，真っ赤に焼けた焼土域の広がりが確認された(第83図)。周囲からは鞴羽口や鉄床石が出土したほか，第84図のように鍛造剥片の出土も確認されており，鍛冶遺構と考えられる。先述した掘立柱建物跡２は，内部に焼土域の広がりをもっており，鍛冶遺構に関連する作業小屋である可能性が想定される。またＮ(n9)区の下段にあたるＯ調査区土壙からは大量の鉄滓が廃棄されており，これらの作業の過程で生じたものである可能性が高いと考えられる。

鍛冶遺構１（第75・76図　Ｎ(n7）調査区）

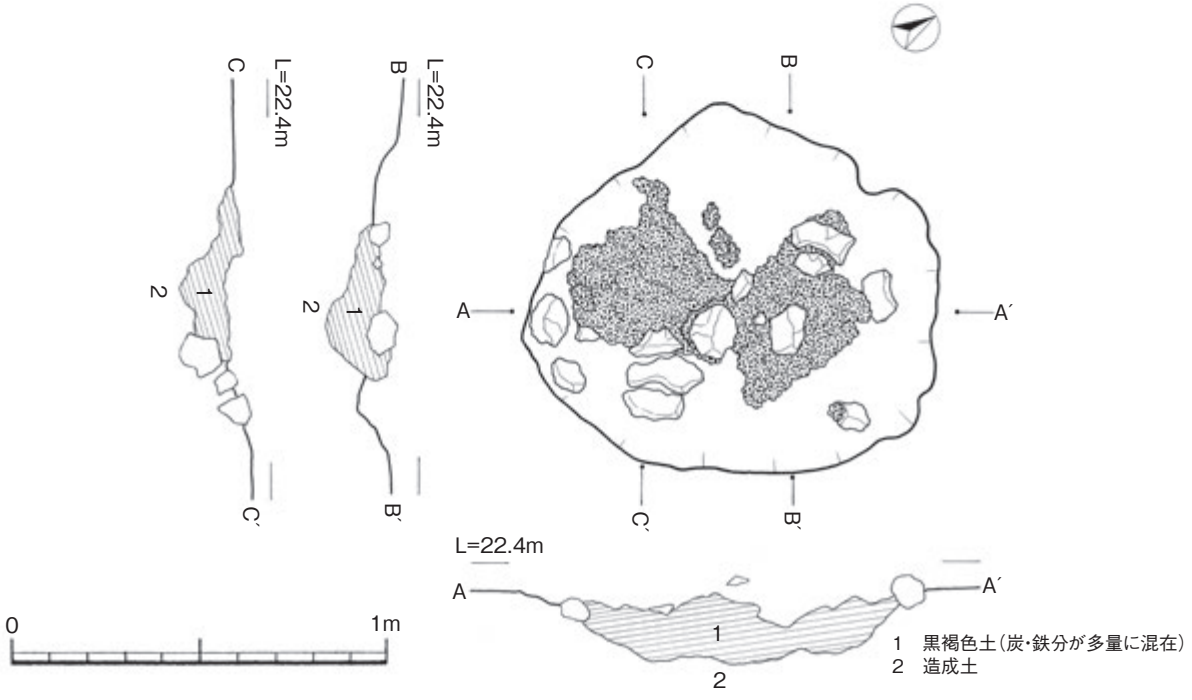
Ｋ－27グリッドから検出された。長軸1.1ｍ×短軸１ｍの不整円形を呈している。埋土は黒褐色砂質土で，炭と鉄分が多量に混入している。遺構中央部には長さ80cm ×幅20～50cm ほどの大きな鉄滓が見られる。炉底塊と思われる。周囲には15cm ～20cm ほどの大きさの礫などとともに，椀型滓や炉壁が見られた。炉底滓の周辺にある礫は被熱を受けており，鉄滓が付着したものも見られるため，鉄が固まらない前に石が存在していたことが伺える。鉄滓の下には木片が散在していた。１・２は炉底塊と思われる。２つに分けて掲載したが，本来は１個体だったものである。滓は厚いところで10cm 以上あり，内部に被熱した礫を含んでいる。磁力反応がある。

鍛冶遺構２（第77図　Ｎ(n7）調査区）

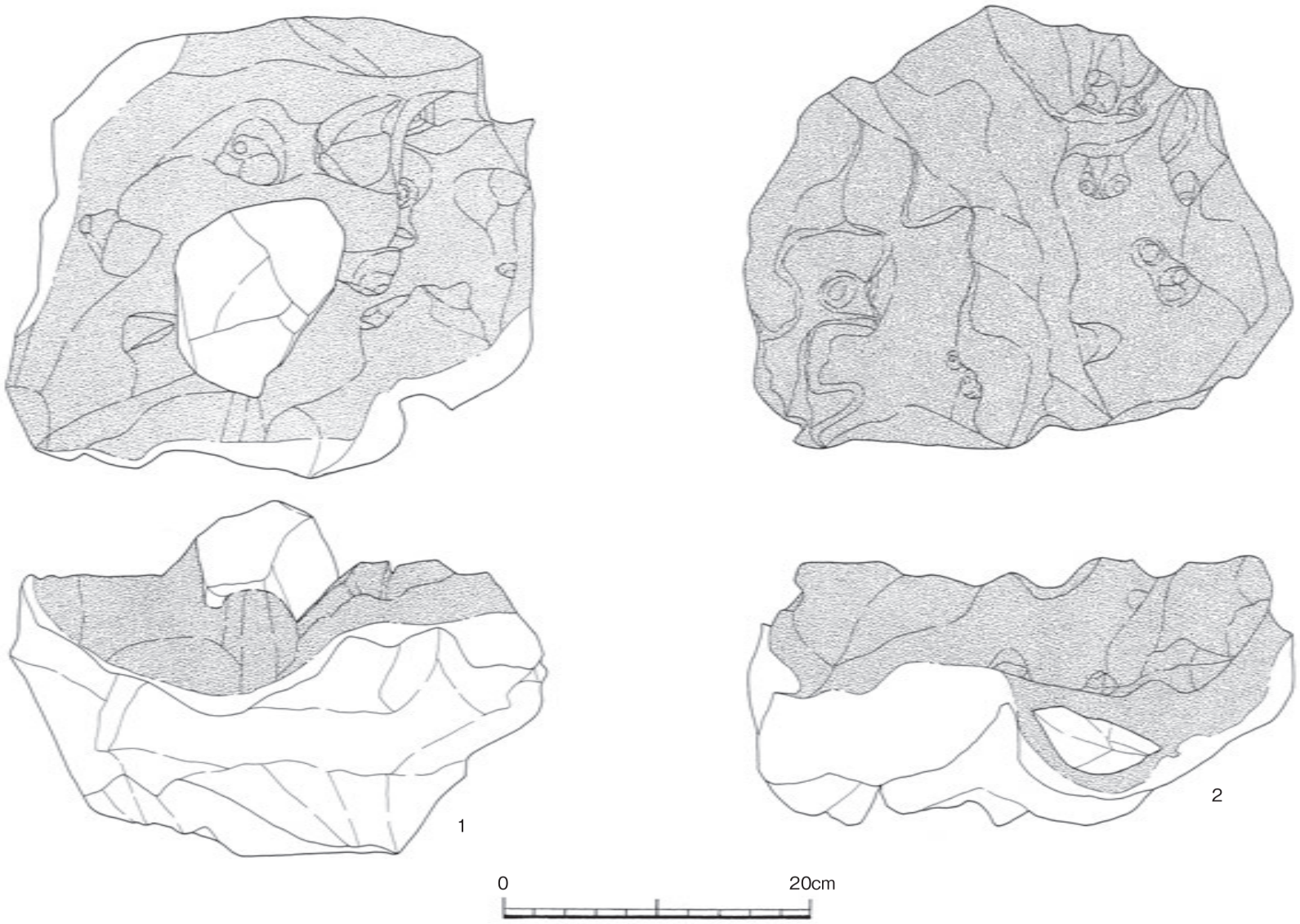
Ｋ－26グリッドから検出された。長軸2.4ｍ×短軸35cm ～１ｍの鍵穴状を呈している。遺構は大きく南北で形状が異なっており，南側が細長く北側が大きく広がっている。掘り込みも北側が一段低くなっている。埋土は南側が焼土・炭・鉄滓・焼土と層をなしており，北側は鉄滓の上に暗褐色砂質土が覆っている状態であった。このような状況から，遺構の本体は南側で，北側へ滓などを掻き出していたものと思われる。



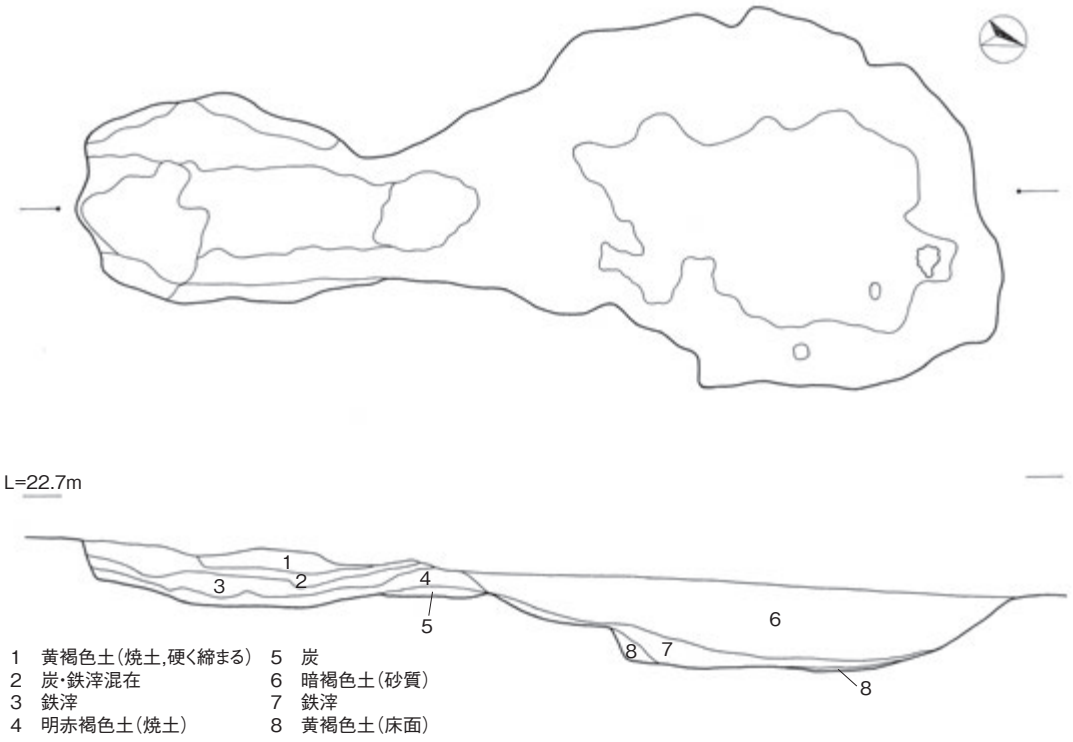
第74図　鍛冶遺構配置図



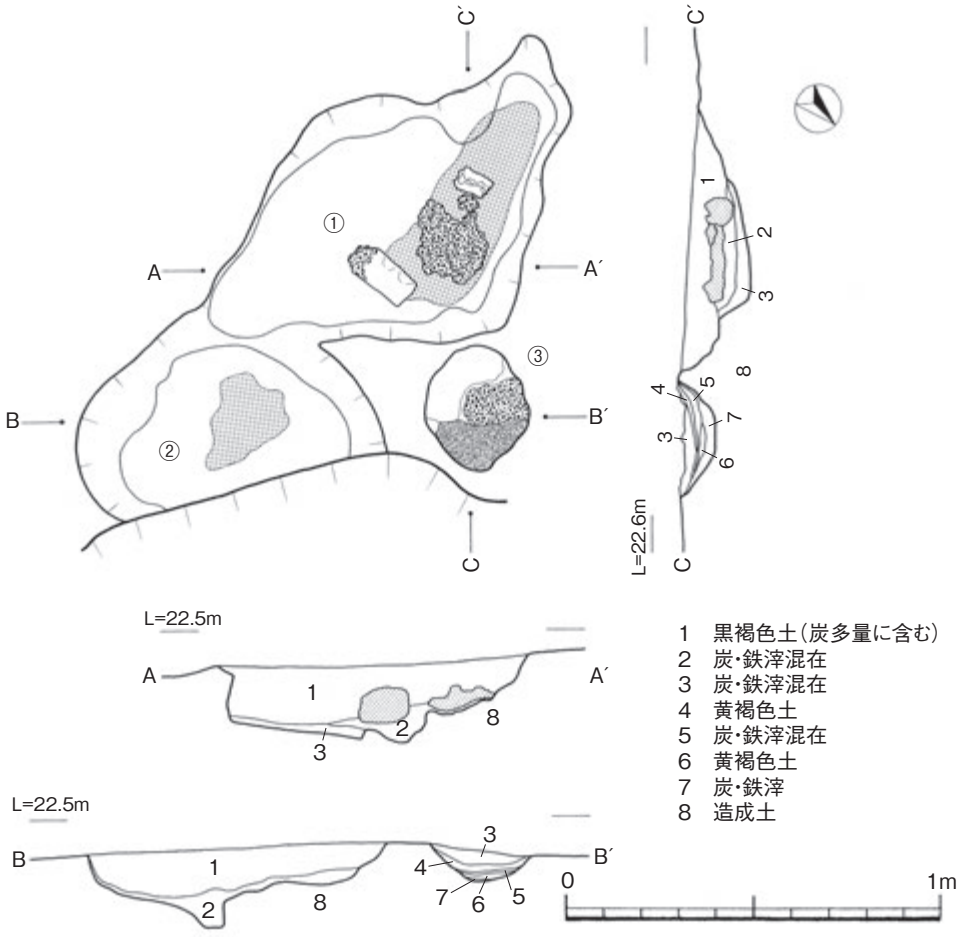
第75図　鍛冶遺構１



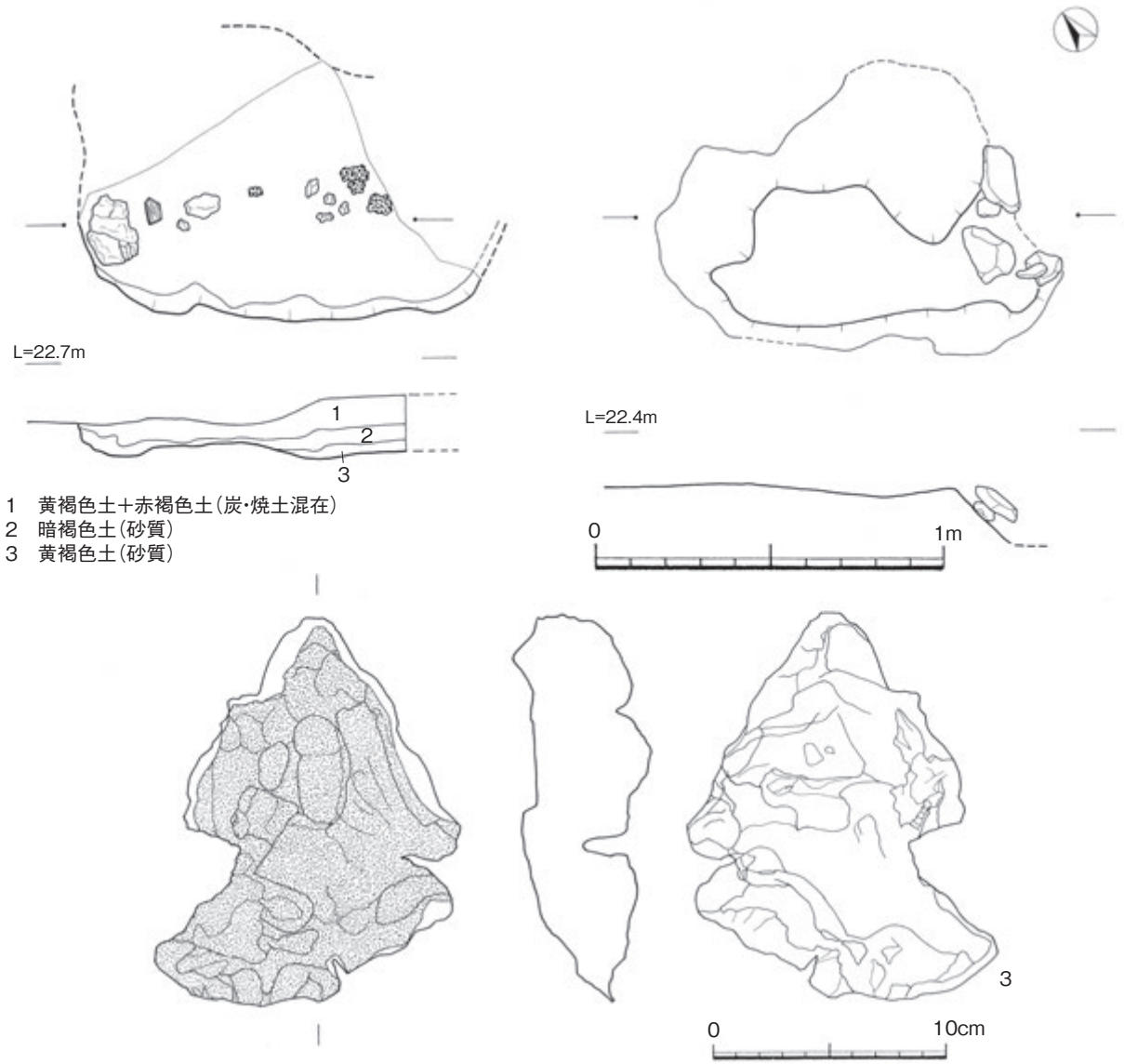
第76図　鍛冶遺構 1 出土遺物



第77図　鍛冶遺構２



第78図　鍛冶遺構３



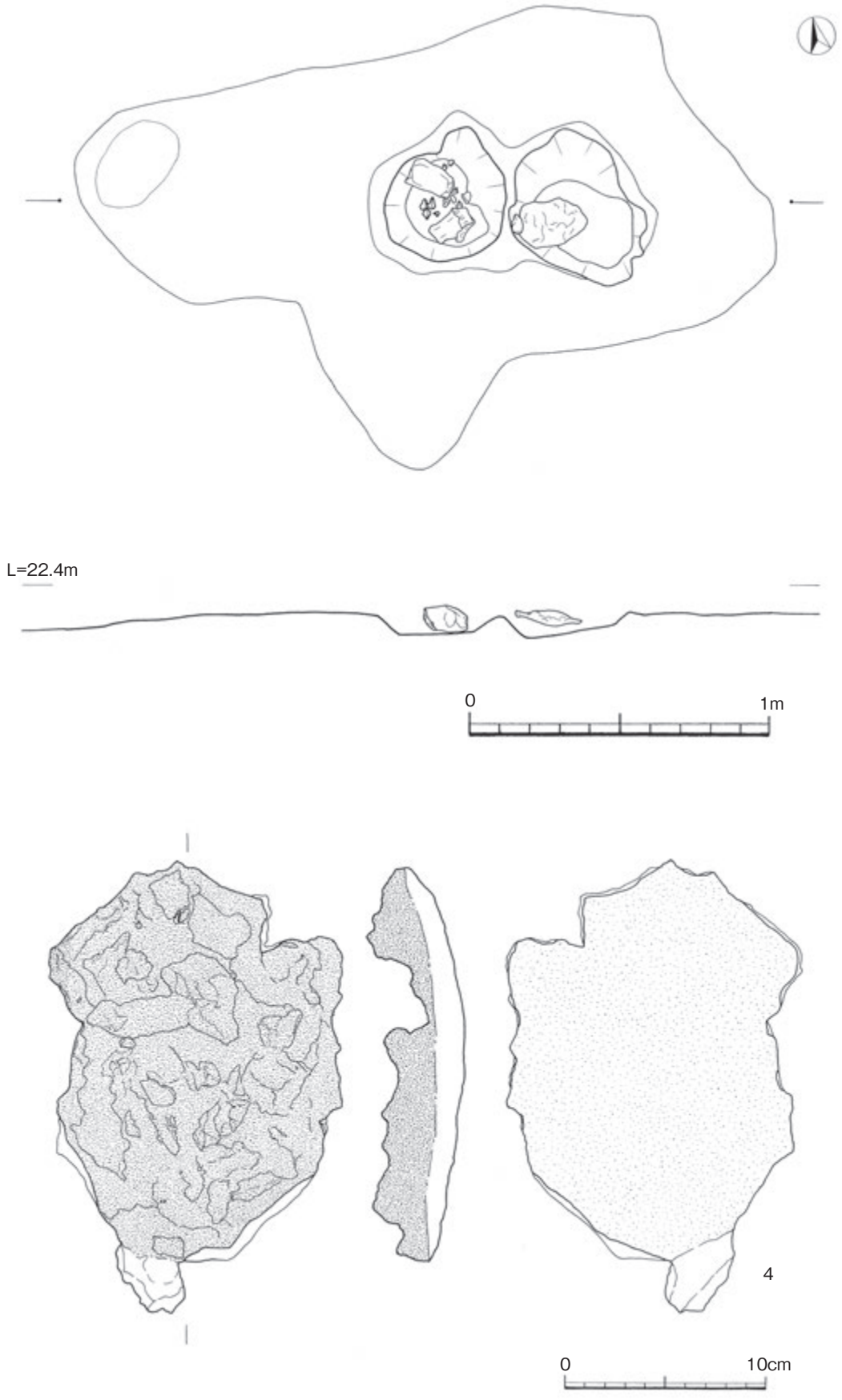
第79図　鍛冶遺構４と出土遺物

鍛冶遺構３（第78図　N（n7）調査区）

K－27グリッドから検出された。遺構は３つの土坑から構成されており，①は長軸1.1m×短軸75cm の不整形の土坑である。埋土は黒褐色砂質土・鉄滓・炭が層をなしている。椀形滓と吹き口部分に鉄滓が熔着した羽口が出土した。②は長軸80cm ×短軸50cm の不整楕円形で，先の土坑と連結している。埋土は２つに分層でき，上層は炭を多量に含む黒褐色砂質土で，下層は炭と鉄滓が混在した層である。床面は硬化している。③は長軸35cm ×短軸30cm の小さな土坑で，小礫・細かな鉄滓・炭が集中している。

鍛冶遺構４（第79図　N（n7）調査区）

J－26・27グリッドから検出された。一部削平を受けているが，残存径で長軸1.2m×短軸80cm の不整形を呈する。炉壁や鉄滓・炭などが出土した。３は炉壁である。炉自体はブロック状の塊を押しつけるようにして作られている。内面は黒色ガラス質の滓が熔結して付着している。磁力反応

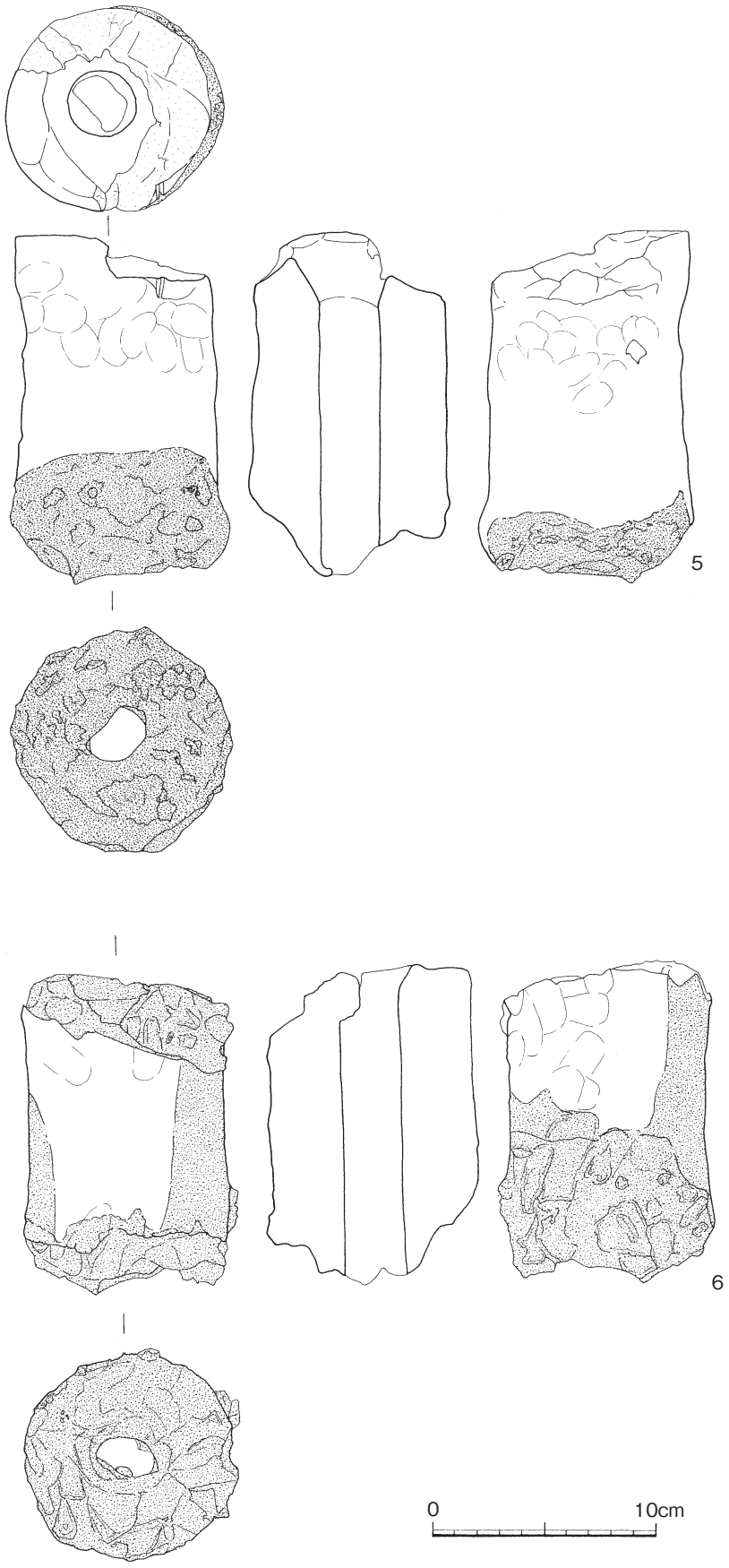


第80図　鍛冶遺構５と出土遺物１

は見られない。

鍛冶遺構５（第80・81図　N（n7）調査区）

K－27グリッドから検出された。２つの土坑から成り立っており，左側の土坑は長軸40cm×短軸40cmの不正円形である。埋土は木炭を多く含む黒色の軟質土である。埋土中から吹き口部分に鉄滓が熔着した鞴羽口が出土した。右側の土坑は55cm×40cmの不整形である。埋土は淡黒色の硬質土で，埋土中から鉄滓が出土した。４は椀形滓と思われる。長さ20cmほどあり，不規則に凹凸している。磁力反応は見られない。５・６は鞴羽口である。５は長さ15cm×直径９cm程の大きさで，通風孔部は3.2cmほどの直線状の穿孔である。基部の内面は２cmほど斜めに面取りされている。表面はユビオサエの痕が明瞭に見られる。先端部の表面は磁力反応のある滓が熔結して付着しており，通風孔部周辺は黒色ガラス質となっている。６は基部側が欠損しており，残存長14cm×直径９cm程の大きさで，通風孔部は3.2cmほどの直線状の穿孔である。基部内面に斜めに面



第81図　鍛冶遺構５出土遺物２

取りされた痕跡が1cmほど残っている。表面はユビオサエの痕が明瞭に見られるほか，両側面に被熱の痕跡が残っている。先端部の表面は細かい気孔の入った滓が熔結して付着している。磁力反応が見られる。

鍛冶遺構６（第82図　N（n7）調査区）

K－27グリッドから検出された。長軸3.4m×短軸2.1mの不整形を呈した大型土坑である。埋土は炭と鉄滓及び鉄成分を多く含む暗褐色砂質土で，南側半分が特に黒色化し鉄滓が集中する。鉄滓のほか先端部に滓の付着した鞴羽口が出土した。

鍛冶遺構７（第85図　N（n9）調査区）

G－26グリッドから検出された。深さ５cmほどの土坑状の凹みが２つあり，それぞれ長軸70cm×短軸30cm程焼土の広がりがある。掘り込みは確認できず，上面は削平されていると思われる。中央部には炭の入った黒褐色土が見られる。その２つの焼土を繋ぐように薄い焼土が覆っている。

鍛冶遺構８（第85図　N（n9）調査区）

G－27グリッドから検出された。掘り込みは確認できず，上面は削平されていると思われる。長軸40cm×短軸35cmほどの範囲で明赤褐色土があり，中央部に25cm×15cmほどの焼土の広がりが見られる。明赤褐色土は砂質であるが硬くしまっている。

鍛冶遺構９（第86図　N（n9）調査区）

G－27グリッドから検出された。掘り込みは確認できず，上面は削平されていると思われる。長軸50cm×短軸20cmの不整形に明赤褐色の焼土が広がる。

鍛冶遺構10（第86図　N（n9）調査区）

G－27グリッドから検出された。長軸55cmで短軸は北部側がピットと切り合っているが，推定で40cm程の不正楕円形になるものと思われる。埋土の中心は暗褐色土で炭や焼土が混じり合っており，土坑の北側部分に20cm×10cmほどの明赤褐色の焼土が見られる。

鍛冶遺構11（第86図　N（n9）調査区）

G－27グリッドから検出された。長軸1.2m×短軸40～50cmほどの不整形で，２つの土坑が繋がったような形状を呈している。埋土の中心は暗褐色土で炭や焼土が混じり合っており，土坑の東側部分に40cm×20cmほどの，西側部分に50cm×40cmほどの明赤褐色の焼土が見られる。

鍛冶遺構12（第86図　N（n9）調査区）

G－27グリッドから検出された。長軸45cm×短軸35cm程の不整楕円形の土坑である。土坑内に長軸35cm×短軸25cm程の範囲で明赤褐色の焼土が広がっている。焼土内には炭が混在している。焼土下には一部黒褐色土が見られ，そこにも炭が混在した状態で見られる。

鍛冶遺構13（第86図　N（n9）調査区）

G－27グリッドから検出された。長軸１m×短軸70cm程の不正楕円形の土坑である。その中心部に長軸75cm×短軸40cm程の範囲で明赤褐色の焼土が広がっている。非常に高熱を受けたらしくサラサラしている。鍛冶炉のような高熱を発する上部構造があったと思われるが，削平されたものと思われる。

鍛冶遺構14（第86図　N（n9）調査区）

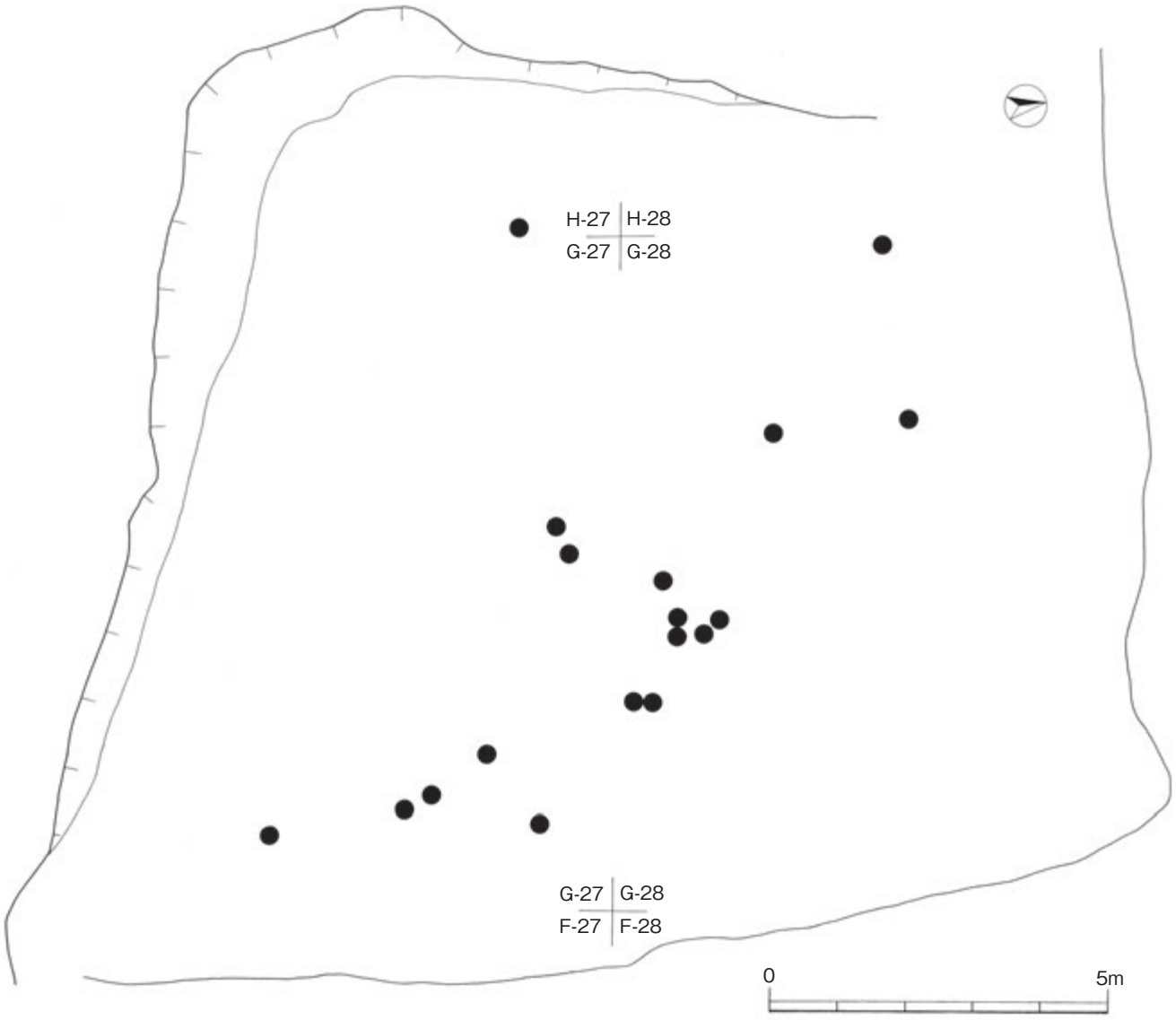
G－27グリッドから検出された。長軸1.2m×短軸60cm程の不整形の範囲に黒褐色土と焼土が広



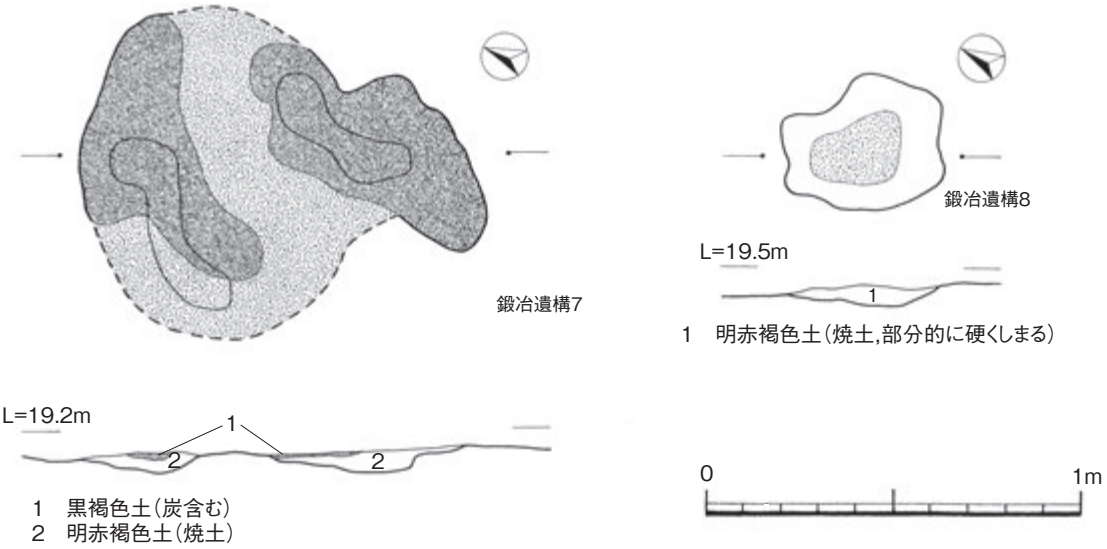
第82図　鍛冶遺構６



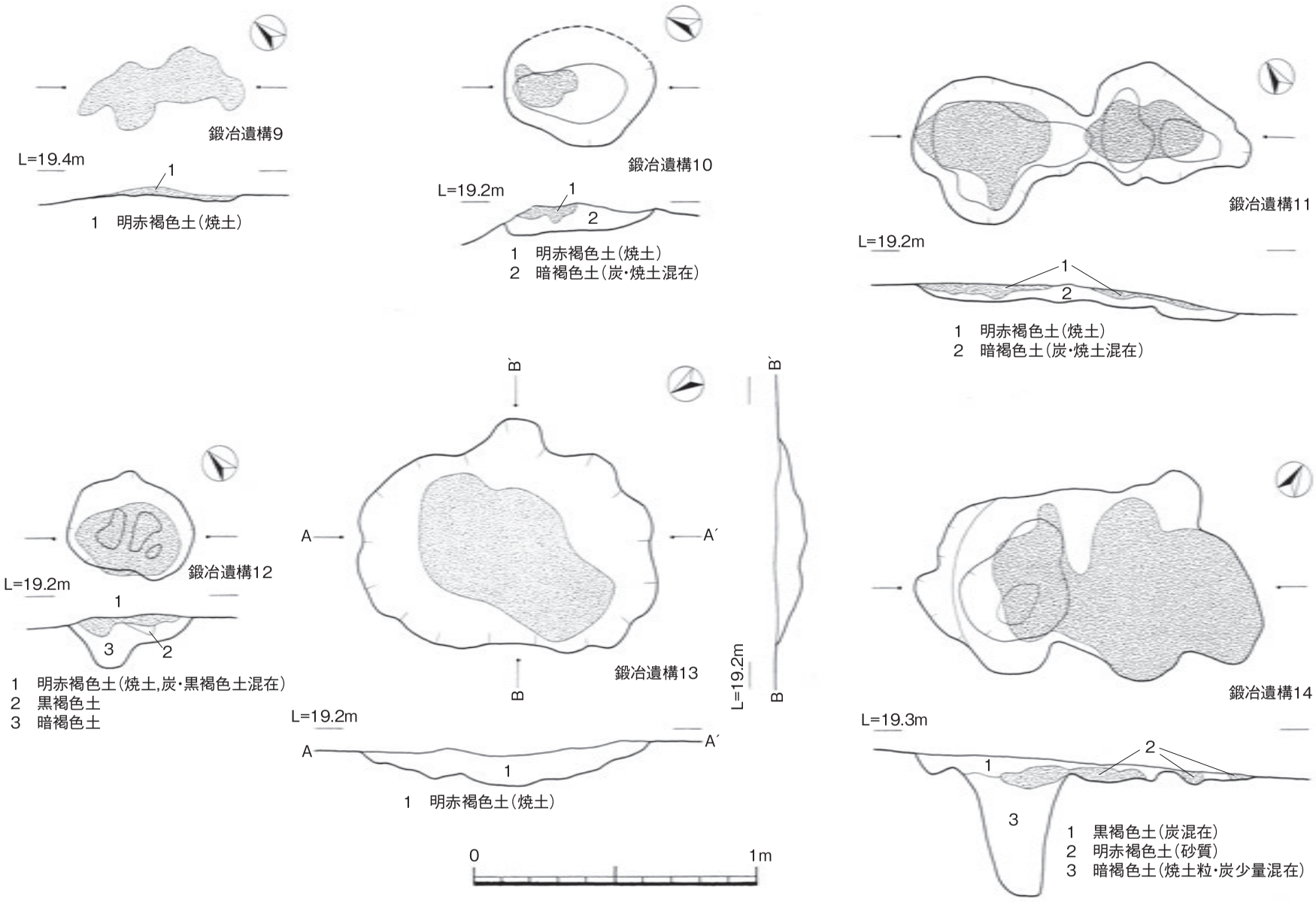
第83図　N(n9) 調査区遺構配置図



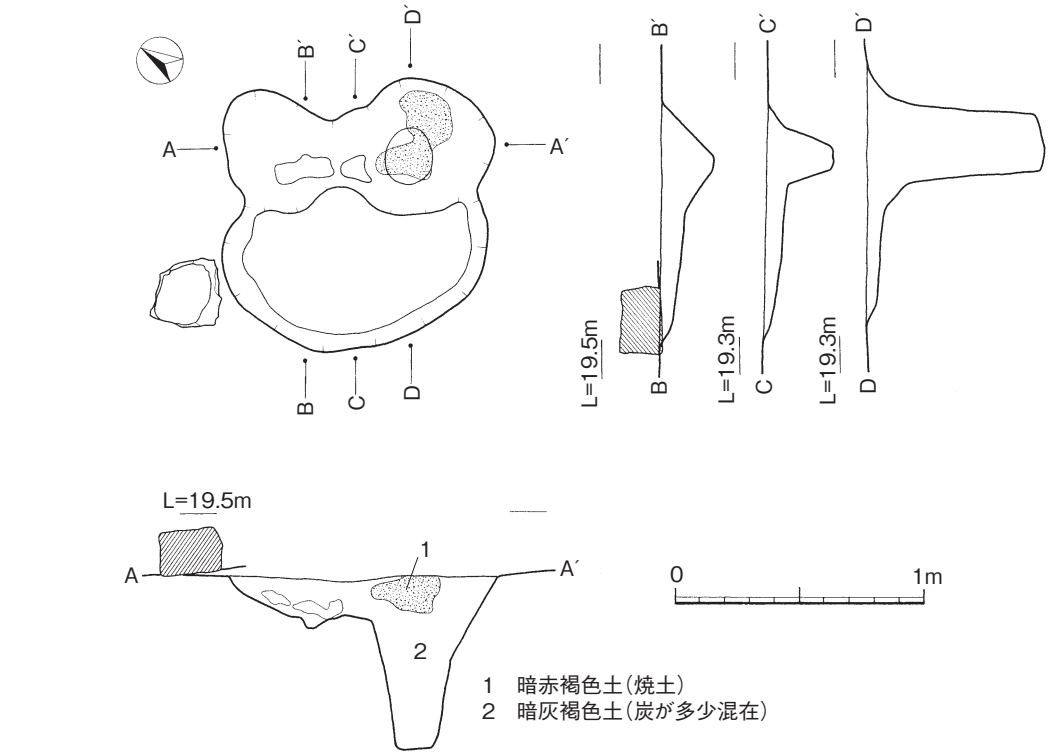
第84図　N（n9）調査区鍛造剥片出土分布図

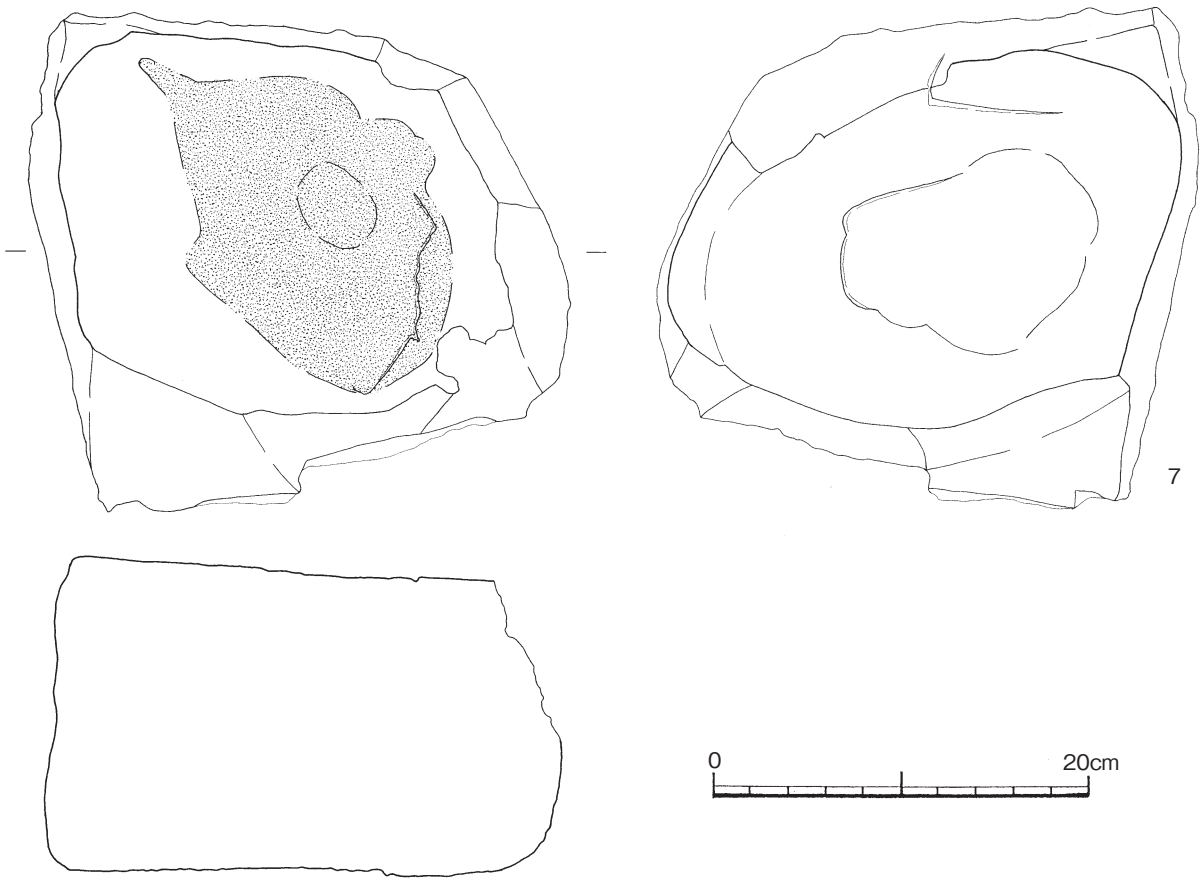


第85図　鍛冶遺構７・８



第86図　鍛冶遺構９～14





第87図　鍛冶遺構15と出土遺物

がっている。表面は黒褐色土が中心で長軸95cm ×短軸55cm ほどの広がりがあり，炭が混在している。他の遺構と比較して炭の量は多いが，敷き詰められている感じではない。黒褐色土の下には明赤褐色の焼土が見られる。90cm ×60cm 程の広がりがあり，高熱を受けたためかサラサラしている。

鍛冶遺構15（第87図　N（n9）調査区）

G－27グリッドから検出された。長軸１m×短軸１m程の不整形の土坑である。埋土は暗灰褐色土で，炭が多少入っている。検出面には35cm ×20cm 程の範囲で暗赤褐色の焼土が見られる。土坑に接して鉄床石が出土した。７は鉄床石である。花崗岩を用いており，28cm ×25cm，厚さ16cm ほどの大きさである。両面に被熱の痕跡が見られ，中心部は敲打のためか剥離している。

⑤大型土坑（第88～92図）

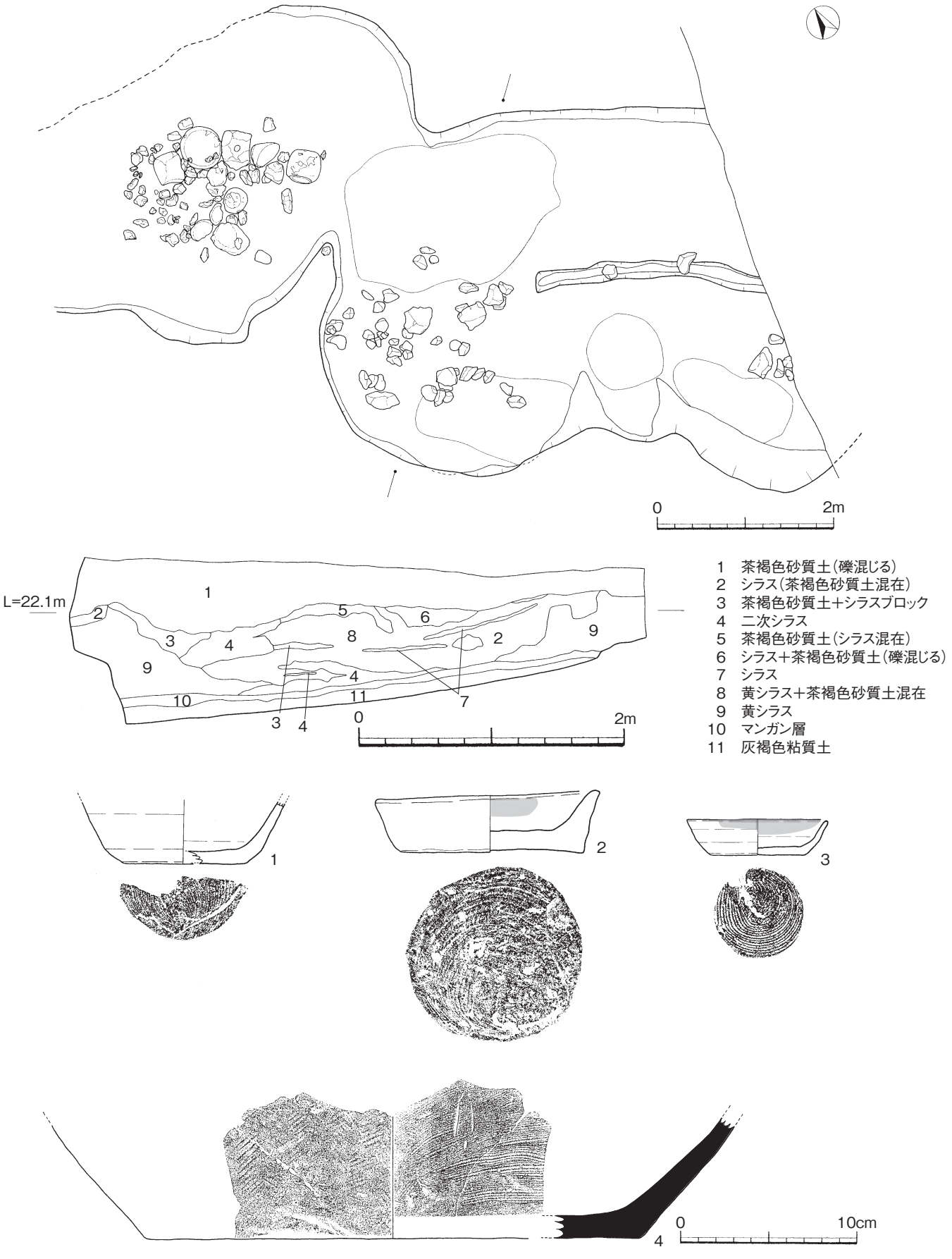
N（n7）グリッドから検出された。複数の土坑が切り合っており，結果として巨大な土坑となっている。土坑の底部には溝状遺構が走っており，埋土にはK調査区からの転落と思われる五輪塔が出土した。

大型土坑１（第88図　N（n7）調査区）

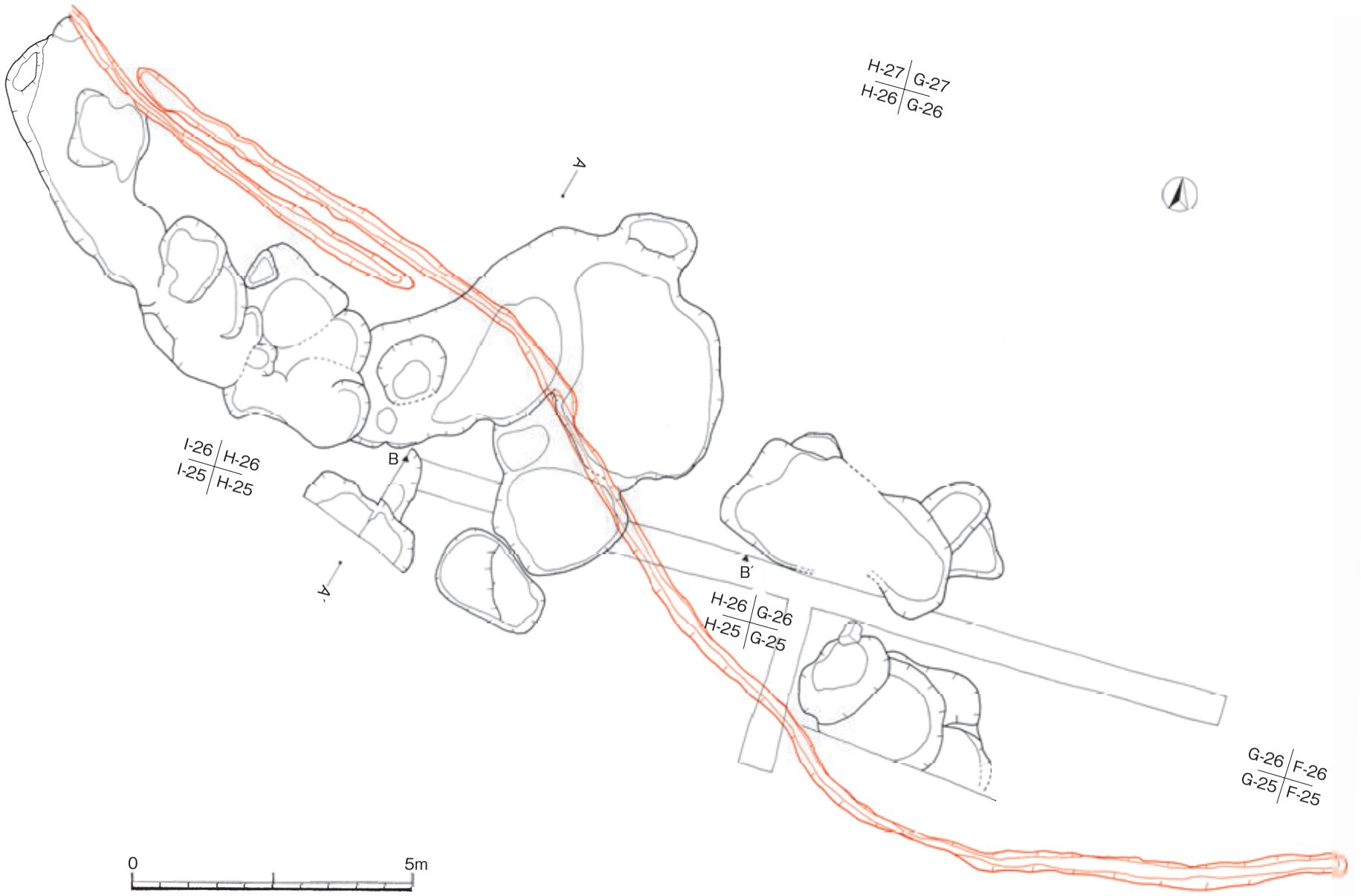
J－26・27グリッドから検出された。３つの土坑が切り合っており，遺構内からは五輪塔や凝灰岩が集中している箇所や自然礫などが出土した。五輪塔に関しては隣接してK調査区があり，そこから転落あるいは廃棄されたものと思われる。またJ－27グリッドの土坑南東側の底面からは幅20cm 程の細長い溝状遺構が検出された。埋土はシラスや茶褐色土が層をなしていた。埋土中から遺物が出土している。１・２は土師器の坏である。２は器壁が厚く，器高の低いものである。３は小皿である。口縁の一部にススが認められ，灯明皿として利用されている。１～３は16世紀前後に該当すると思われる。４は須恵器の甕である。外面はタタキのちナデ，内面はハケ目状のナデである。

大型土坑２（第89～91図　N（n7）調査区）

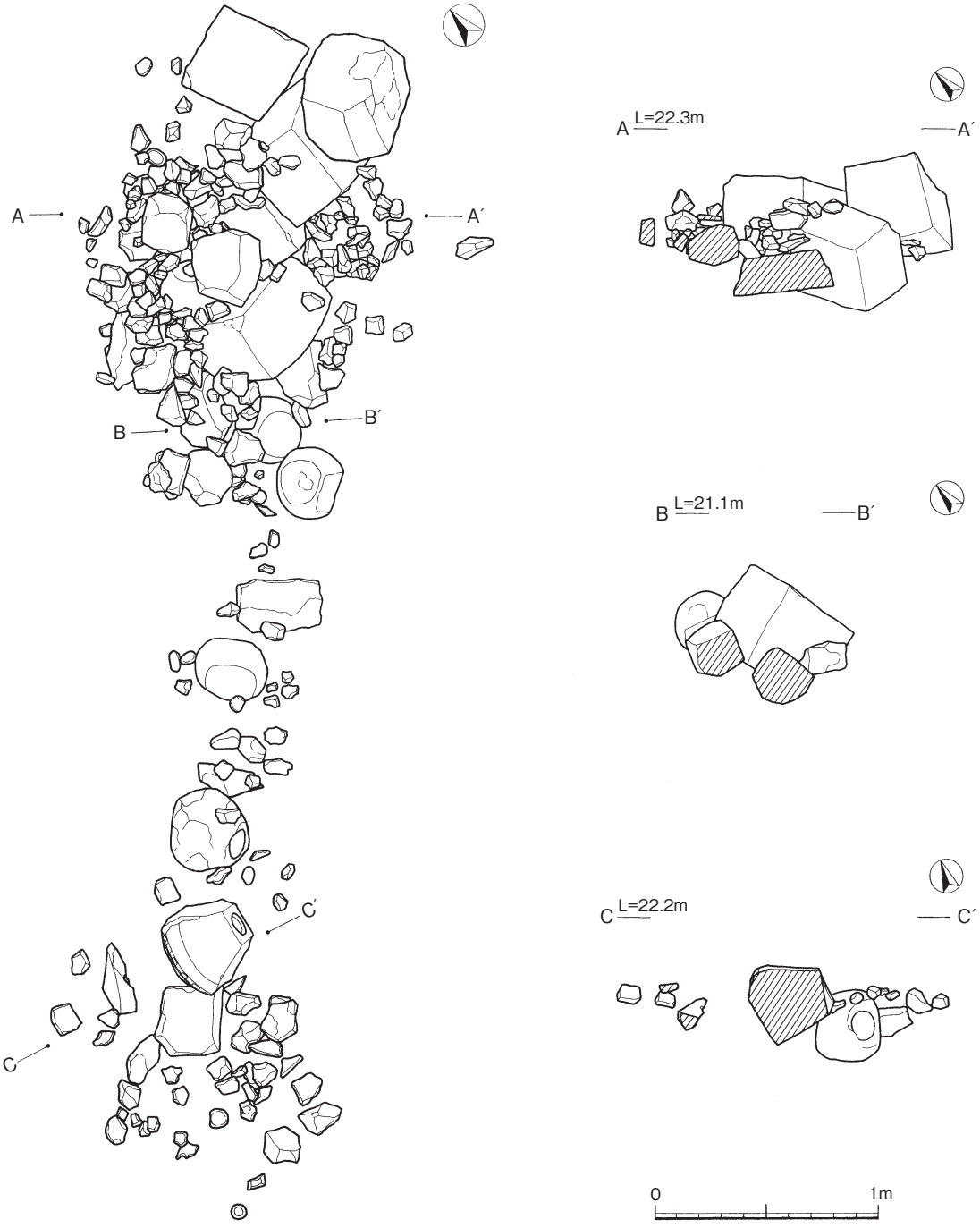
G・H－26グリッドから検出された。大小様様な土坑が切り合っており，結果として全長14m以上の大きさになっている。埋土はシラスをはじめとする混ざり土が層をなしており，意図的に埋め戻しているようである。溝状遺構底面直下には粘質化した凝灰岩の岩盤がみられる。土坑が複雑に切り合っており，底部に凝灰岩の岩盤が見られることなどから，採掘に適した石を探すための試掘抗跡の可能性も考えられる。土坑内には五輪塔が列状に廃棄されたような状態で出土した。隣接してK調査区があり，そこから転落あるいは廃棄されたものと思われる。五輪塔群は北東から南西方向へ列をなしており，形式別にまとまっている傾向が見られる。埋土中から遺物が出土したほか，土坑の底部からは溝状遺構が検出された。検出面からは30cm 程度の深さがある。ほぼ真っ直ぐに掘り込まれており，斜面の裾部付近を廻るような感じで延びている。埋土は上面は黒褐色砂質土だが，下部の方や場所によってはシルト質の乳白色土や粘質をもった赤褐色土等が見られ，砂が堆積しているところもある。これらのことから，溝などの水を流すようなものではないかと思われるが，詳細は不明である。５は赤色土器Ｂ類である。15世紀頃のものと思われる。６は土師器の椀である。底部から体部にかけて残存している。７～９は小皿である。15世紀頃に該当すると思われる。７は内外面にススが付着し，８は底部から体部外面にかけて一部朱が施されている。



第88図　大型土坑１と出土遺物


H-27 G-27
H-26 G-26
A
A´
B
B´
I-26 H-26
I-25 H-25
H-26 G-26
H-25 G-25
G-26 F-26
G-25 F-25
0
5m

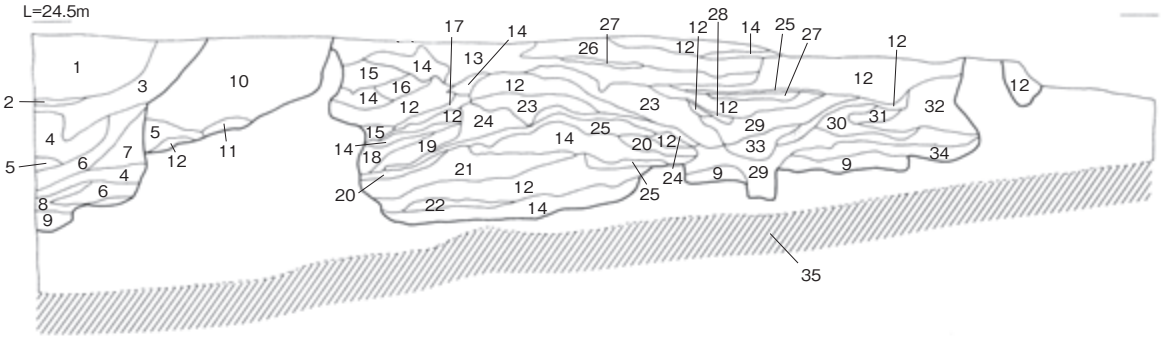
第89図　大型土坑２



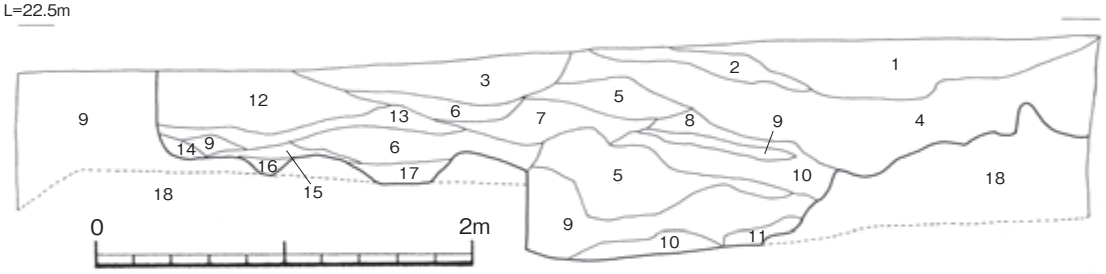
第90図　大型土坑２内五輪塔出土状況

大型土坑３（第92図　N（n 10）調査区）

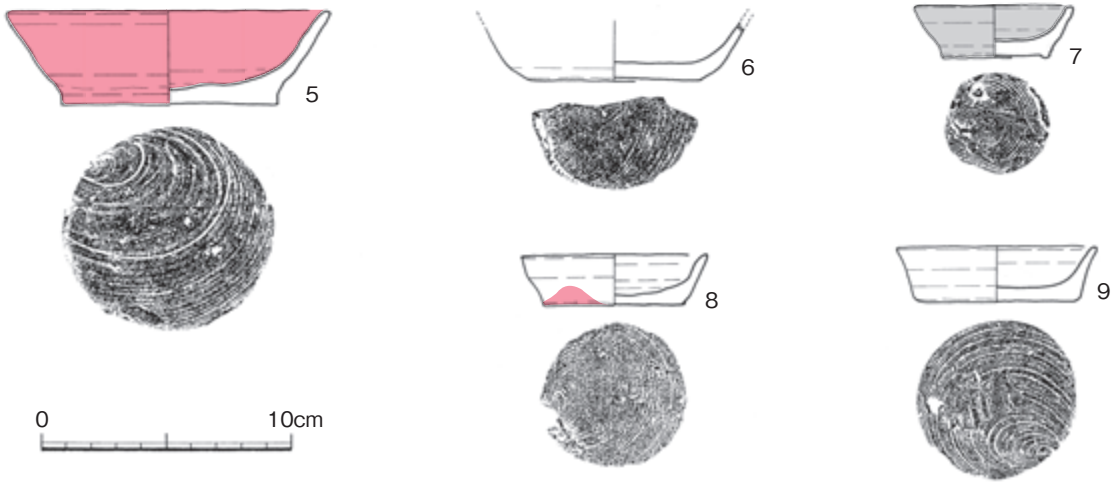
G－29グリッドから検出された。長軸5.6m×短軸4.5m，深さ１m程の大型の土坑である。床面からは水が浸み出てくる状態であった。遺構内からは中世の遺物の出土がみられた。10は土師皿である。底部から体部立ち上がりに強い回転ヨコナデが施されており，凹んでいる。時期は15世紀頃のものと思われる。11は青磁の椀で，羽反り口縁をもつものである。12は鉄床石である。安山岩の丸石を用いており，表面は被熱によって真っ赤になっている。



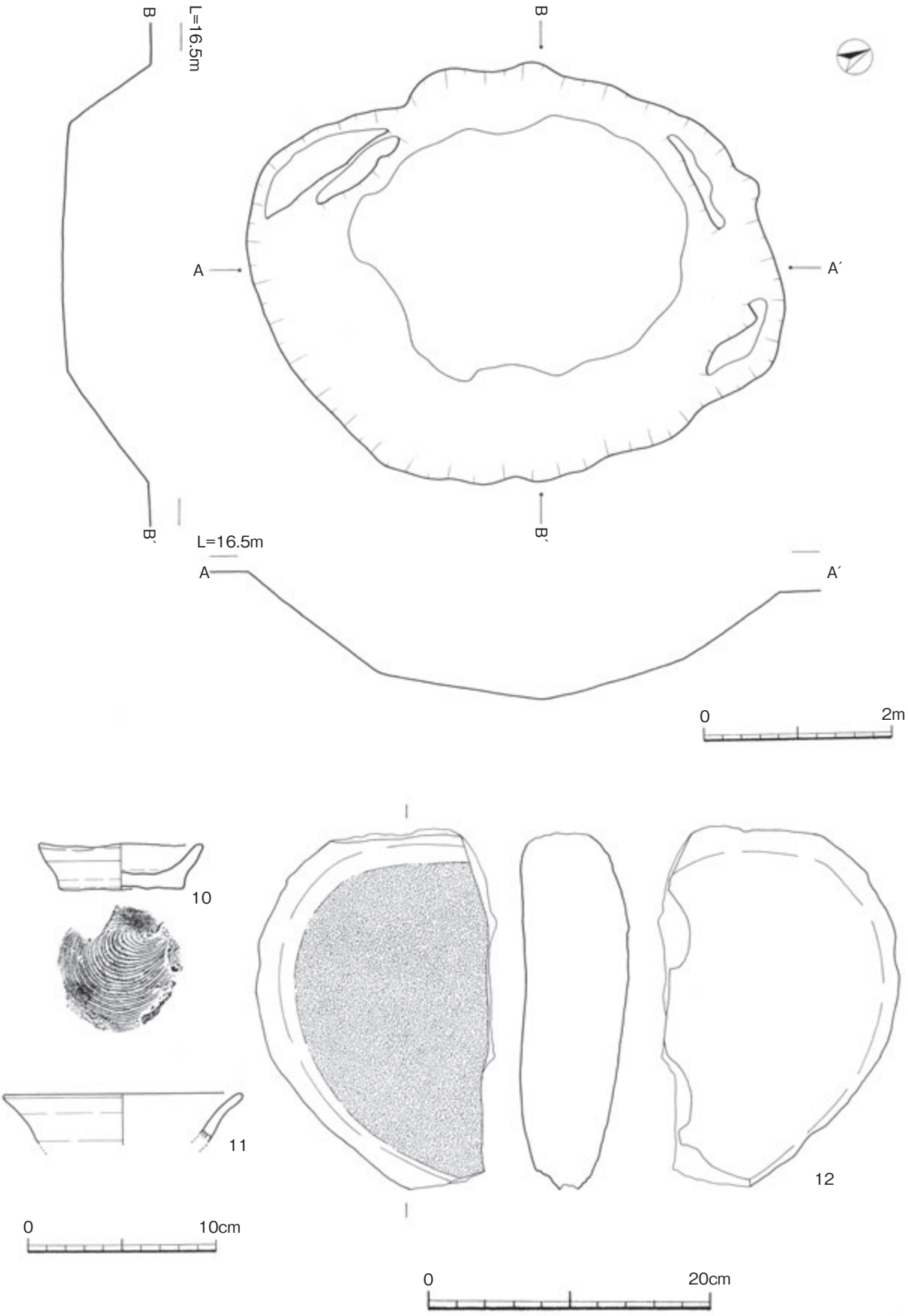
1 暗褐色砂質土(やや粘質おびる)
2 淡黄褐色砂質土
3 黒褐色砂質土(やや粘質おびる)
4 黄褐色砂質土(やや粘質おびる)
5 シラスにごり(茶褐色をしたシラス)
6 黒褐色砂質土(シラス・黄褐色砂質混じり)
7 黄褐色砂質土(黒褐色砂質土+シラス混じり)
8 シラス+黄褐色砂質混じり
9 茶褐色砂質土(黒褐色砂質土混じり)
10 暗褐色砂質土(黄褐色砂質土+軽石混じり)
11 黄褐色砂質土(軽石混じり)
12 暗褐色砂質土
13 暗褐色砂質土(淡茶褐色砂質土+軽石混じり)
14 茶褐色したシラス
15 淡茶褐色(シラスにごり)
16 淡黒褐色砂質土
17 シラスにごり
18 シラス(茶褐色砂質土混じり)
19 シラス(やや濁る・軽石混じり)
20 シラス(やや黄味をおびる)
21 シラス
22 暗褐色砂質土(シラス+パミス弱混じり)
23 淡暗褐色砂質土
24 黄褐色砂質土+パミス混じり
25 シラス+暗褐色砂質土
26 黒褐色砂質土(暗褐色砂質土混じり)
27 暗褐色砂質土(黒褐色砂質土混じり)
28 シラス+黒褐色砂質土混じり
29 暗褐色砂質土+パミス混じり
30 シラス+暗褐色砂質土+軽石混じり
31 暗褐色砂質土+シラス混じり
32 茶褐色したシラス+軽石混じり
33 暗褐色砂質土+茶褐色砂質土+パミス混じり
34 シラス+黒色弱粘質土ブロック
35 凝灰岩岩盤



1 黒褐色砂質土(黄シラス混在)
2 黄シラス(白シラス混在)
3 暗褐色砂質土(シラス混在)
4 黄シラス(軽石混在)
5 淡黄シラス
6 白シラス(黄シラス混在)
7 黒色砂質土(茶褐色砂質土混在)
8 黒色砂質土
9 白シラス
10 黄シラス
11 黒色砂質土(黄シラス混在)
12 黒褐色砂質土(シラス混在)
13 黒色砂質土(シラス混在)
14 黄褐色砂質土
15 黒色砂質土(シラス混在,シラスの方が多い)
16 乳白色シルト質
17 茶褐色砂質土
18 白シラス(軽石混在)



第91図　大型土坑２埋土状況と出土遺物



第92図　大型土坑３と出土遺物（10・11：S＝1/3，12：1/4）

⑥溝状遺構（第93～95図）

N調査区からは，溝状遺構が３条検出された（大型土坑内底部の溝は除く）。１条は離れて存在し，他の２条はN（n9）調査区を取り巻くように存在する。

溝状遺構１（第93図　N（n5）調査区）

M－22・23・24グリッドから検出された。K調査区下の裾部に沿うようにして存在する。全長20m，幅60cm～1.1m，深さ20cm程である。埋土は暗茶褐色粘質土である。

溝状遺構２（第94図　N（n10）調査区）

E－27グリッドから検出された。N（n9）調査区の裾部に並行して存在する。全長６m，幅30～50cm，深さ20～25cm程である。溝の南側は削平のため，プランが不明であるが，土坑状に膨らんでいる。

溝状遺構３（第94図　N（n10）調査区）

F－28・29，G・H－28，H・I－29グリッドから検出された。N（n9）調査区の裾部を取り巻くように存在する。全長30m，幅15～30cm，深さ20～40cm程である。埋土は暗褐色で，部分的に凝灰岩の礫が詰まっている箇所もあった。溝の途中から枝分かれするように土坑が４基ある。

⑦道跡（第96図）

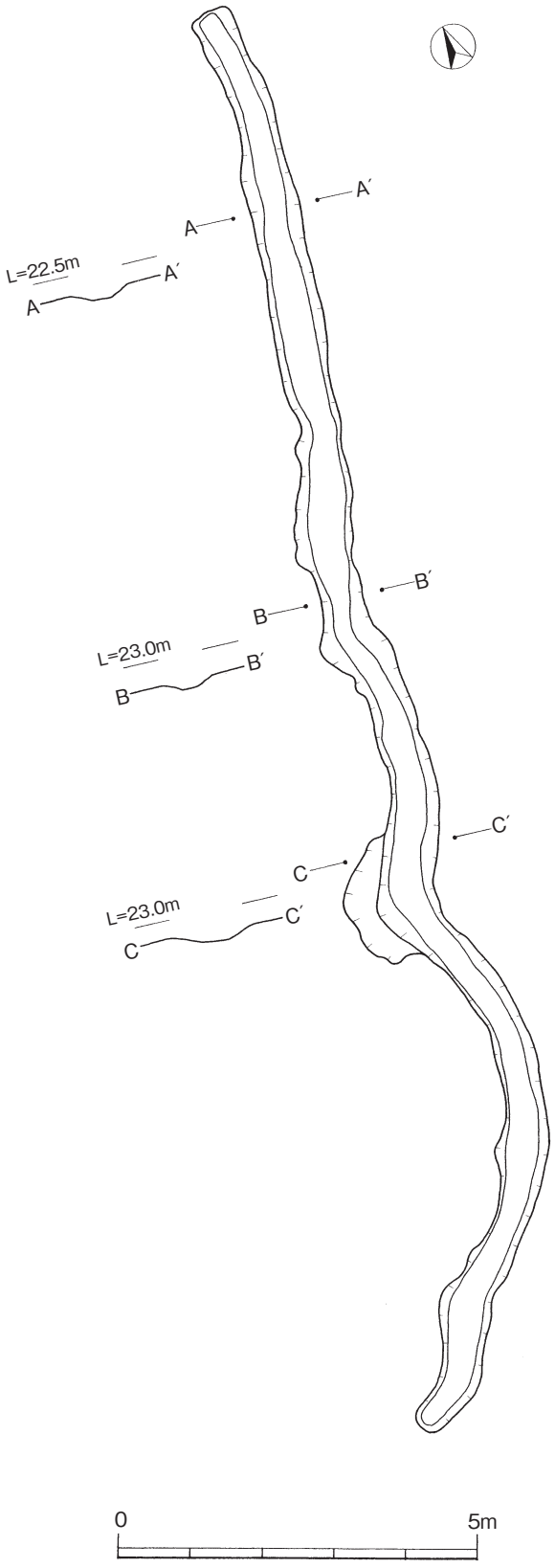
道跡は２地点から検出された。いずれも硬化面をもつ。

道跡１（第96図　N（n6）調査区）

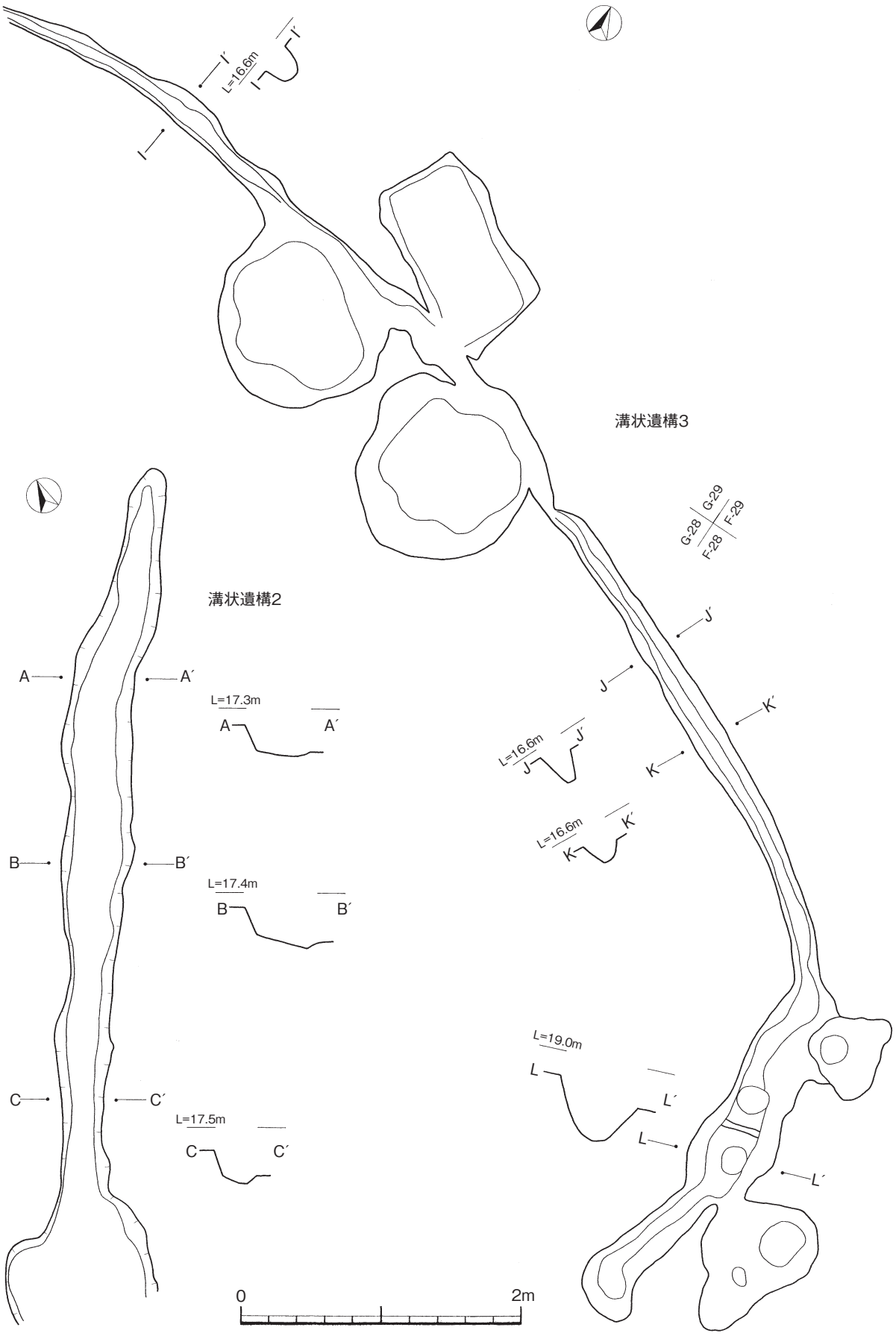
M－22・23・24グリッドと，L－22・23グリッドから検出された。凝灰岩露頭上面にシラスの盛土があり，その盛土に土坑状に近い溝のような掘り込みがなされ，その中に硬化面が見られる。硬化面は２か所あり，それぞれ２条ずつ道跡が走っている。長いもので全長22mである。

道跡２（第96図　N（n7）調査区）

G－25グリッドから検出された。全長8.6mである。硬化面が盛り上がっており，両側は幅



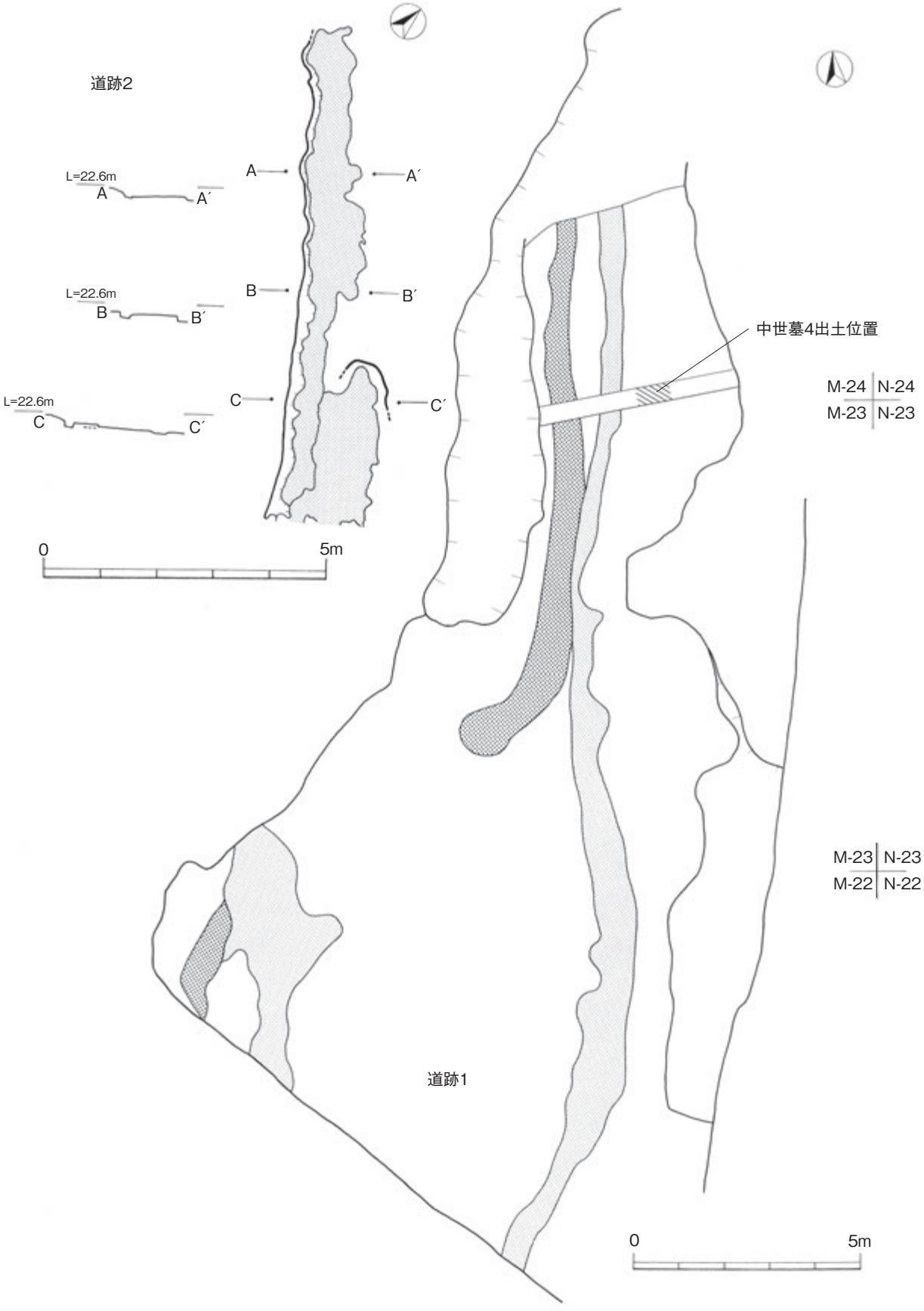
第93図　溝状遺構１



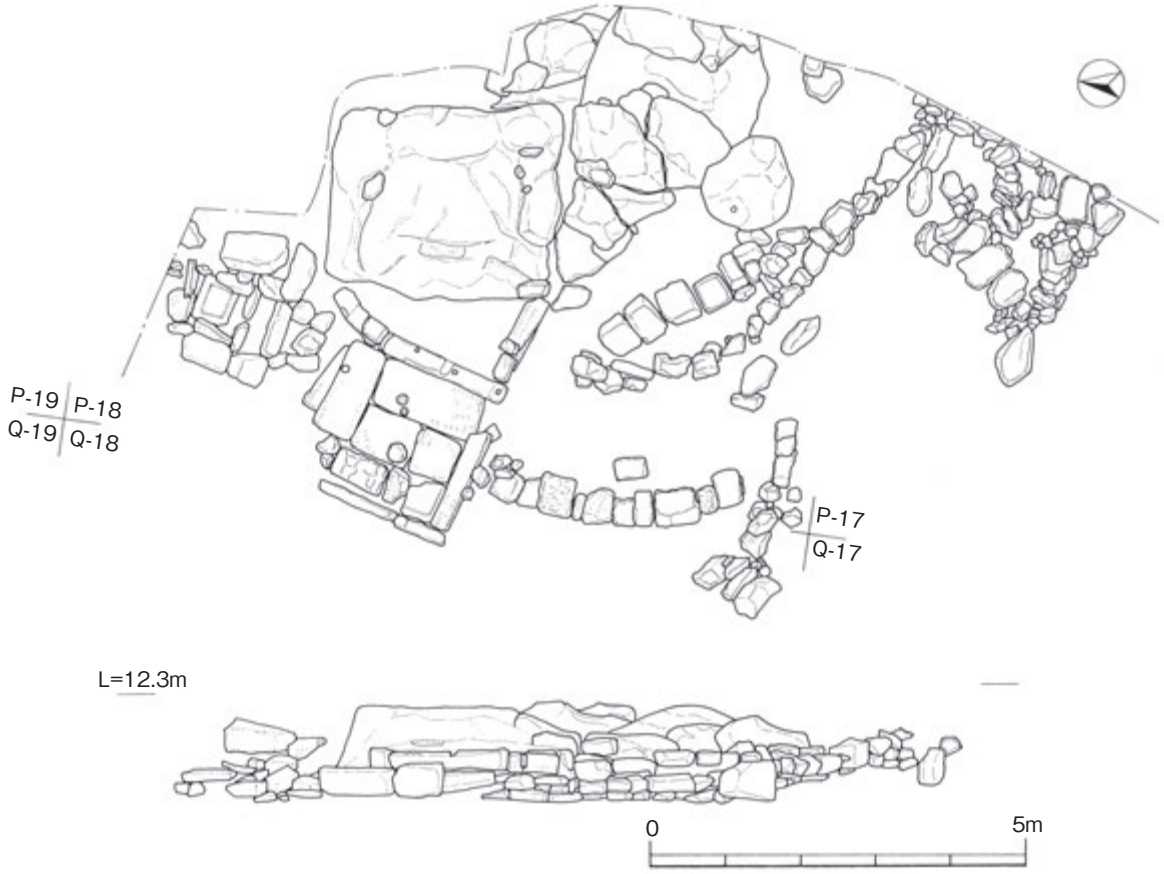
第94図　溝状遺構２・３－①



第95図　溝状遺構３-②・③


道跡2
L=22.6m
A
A´
L=22.6m
B
B´
L=22.6m
C
C´
0
5m
中世墓4出土位置
M-24 N-24
M-23 N-23
M-23 N-23
M-22 N-22
道跡1
0
5m

第96図　道跡１・２



第97図　良福寺井戸跡

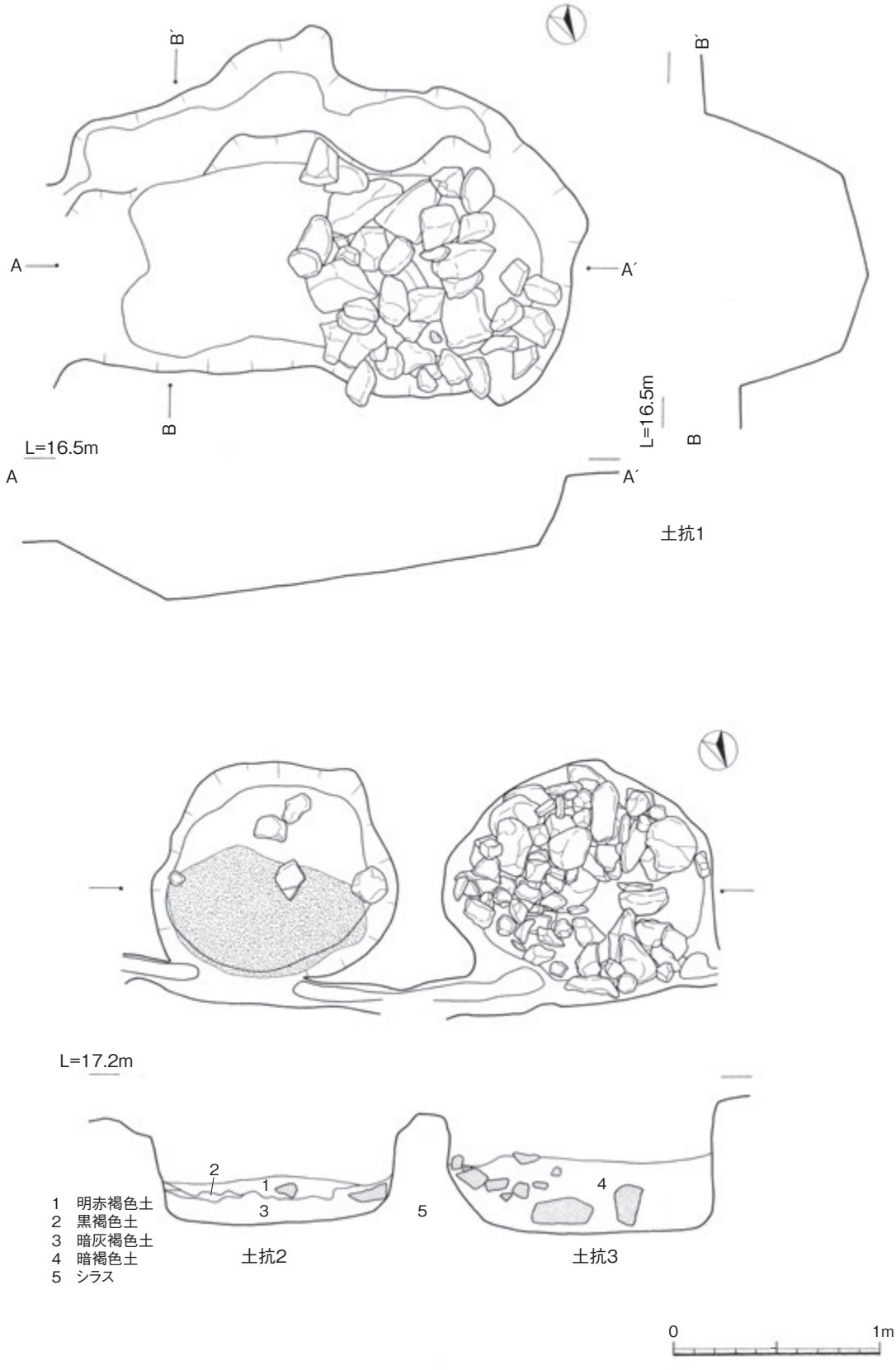
15cm ほどの溝となっている。

４．性格・時期不明の遺構

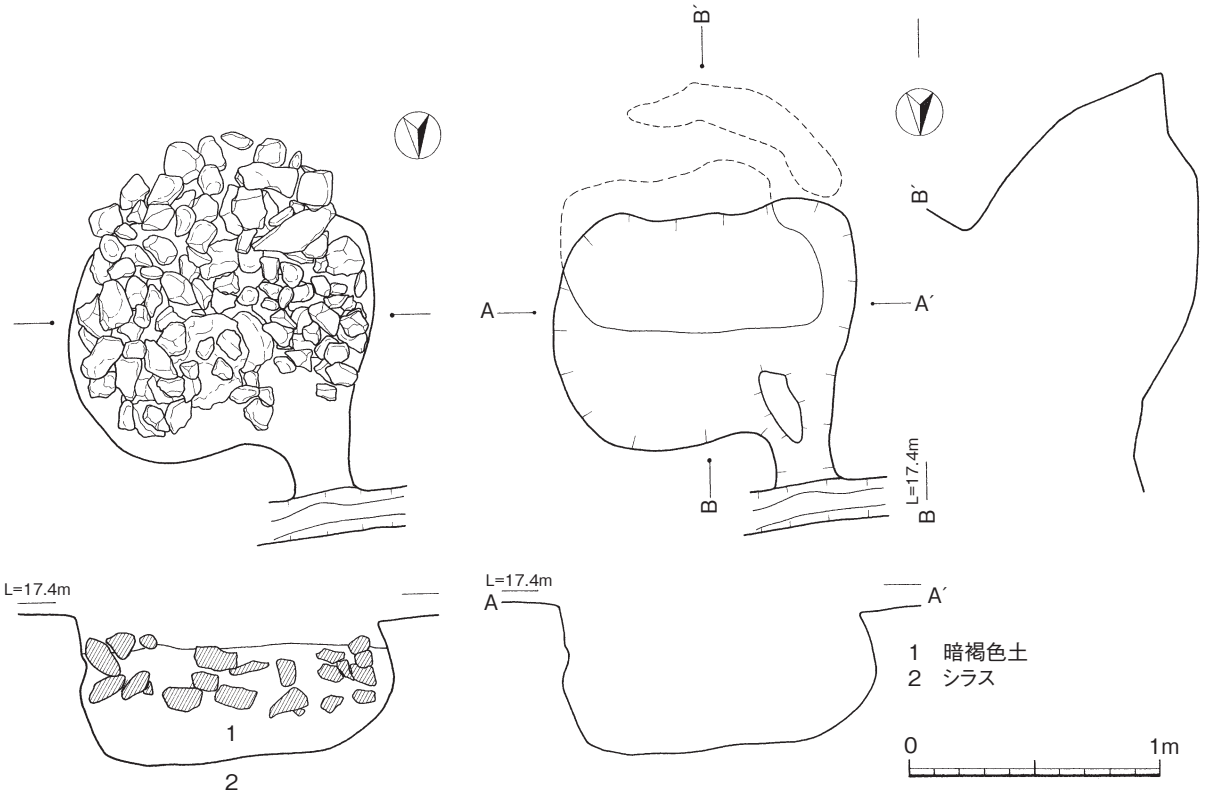
ここでは遺構内遺物の出土などがなく，性格や時期が不明な遺構を扱う。

①良福寺井戸跡（第97図）

N（n3）調査区では井戸が現存していた。この井戸は調査前まで水田の用水等として利用されてきた井戸であり，「島津の殿様が旅の途中で休まれ，水を飲まれた井戸」として周辺住民に親しまれてきたようである。ただし，いつ頃から利用されていたのかは不明である。井戸の脇には「岩水山良福寺　水天善神」の碑があったことから，本来は良福寺の用水として利用されてきたものであろう。この井戸は，長軸が６ｍある凝灰岩の岩塊の下から湧き出る水を溜めるようにしたものであり，石切場と同質の石材が施設の部材として利用されている。ただし部材自体は，ホゾ穴の付いたものや五輪塔の地輪などが見られることから，ある時期に他の遺構から転用したと思われる。また，岩塊自体にも，石材を採ったと思われるツルハシの痕跡が２か所認められる。



第98図　礫集積土坑１～３



第99図　礫集積土坑４

②礫集積土坑（第98・99図）

内部に礫が集積している土坑があり，礫集積土坑とした。N（n10）調査区から４基検出されている。うち３基は，N（n9）調査区の裾部を取り巻く溝を切るようにして存在している。溝と関連する遺構の可能性も考えられるが，性格は不明である。礫は底部まであることはなく，表面近くを覆うように見られるのが特徴である。

礫集積土坑１（第98図　N（n10）調査区）

G－29グリッドから検出された。長軸3.9m×短軸90cm～1.5m程の土坑内に東西２つの掘り込みがあり，東側は中世墓であった。残る西側部分は長軸2.5m×短軸1.5m，深さ70cmほどの大きさで，西側半分ほどに15～30cm程の礫が集積されていた。東側部分が中世墓であったことから，同じく墓の可能性もあり得るが，出土遺物等がなく特定はできない。

礫集積土坑２（第98図　N（n10）調査区）

F－28グリッドから検出された。長軸1.2m×短軸１m程のほぼ円形に近い形状をしており，深さは50cm程ある。土坑内の半分近い範囲に明赤褐色の焼土が広がっている。焼土の下には15cm程の礫が見られる。焼土の下は暗灰褐色土である。

礫集積土坑３（第98図　N（n10）調査区）

F－28グリッドから検出された。長軸1.3m×短軸1.1m程のほぼ円形に近い形状をしており，深さは60cm程ある。土坑を塞ぐように５～25cm程の礫が入っているが，うち３分の１ほどは凝灰岩であった。埋土は暗褐色土である。

礫集積土坑４（第99図　N（n10）調査区）

Ｆ－28グリッドから検出された。溝状遺構から瘤状に出ている状態で存在する。長軸1.2m×短軸１ｍ程の不整円形で，５～35cm 程の礫が土坑を塞ぐように30cm 程の厚さで入っている。礫は大部分が凝灰岩で，大型の礫の間に破片が詰まっているような状態である。埋土は暗褐色土である。完掘したところ南側の方の底部が抉られるような状態であった。

③土坑（第100図　N（n10）調査区）

土坑は６基検出された。N（n10）調査区に集中しているのが特徴である。形態は，楕円形のものと方形のものがみられる。

土坑１（第100図　N（n10）調査区）

Ｆ－28グリッドから検出された。長軸1.5m×短軸１ｍ，深さ30cm 程のほぼ楕円形の土坑である。埋土は暗褐色土である。

土坑２（第100図　N（n10）調査区）

Ｆ－28グリッドから検出された。長軸1.1m×短軸１ｍ，深さ10cm 程の不整楕円形の土坑である。南北方向はほぼフラットな底面を呈しているが，東西方向は西から東へ向けて傾斜している。埋土は暗褐色土である。

土坑３（第100図　N（n10）調査区）

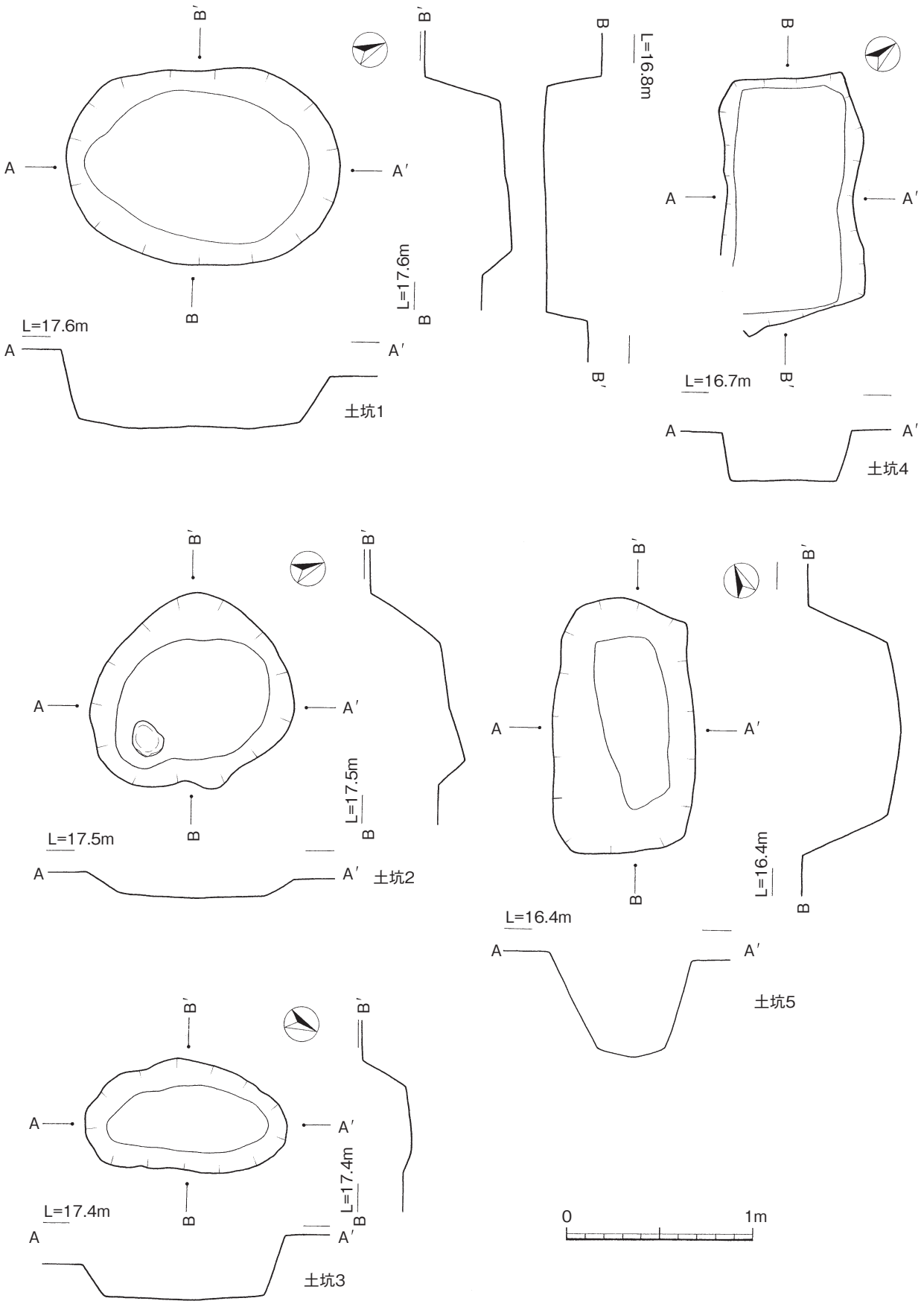
Ｆ－28グリッドから検出された。長軸1.1m×短軸60cm，深さ30cm 程の楕円形に近い形状である。埋土は暗褐色土である。

土坑４（第100図　N（n10）調査区）

Ｆ－28グリッドから検出された。長軸1.3m×短軸70cm，深さ30cm 程の長方形の土坑である。埋土は暗褐色土である。Ｇ－29グリッドに中世墓３があり，形状も方形であることなどから中世墓である可能性も考えられるが，人骨や副葬品等の出土は見られなかった。

土坑５（第100図　N（n10）調査区）

Ｆ－28グリッドから検出された。長軸1.4m×短軸80cm，深さ50cm 程の長方形の土坑である。埋土は暗褐色土である。性格としては，土坑４と同様，中世墓である可能性も考えられるが，人骨や副葬品等の出土は見られなかった。


A
A′
B
B′
L=17.6m
土坑1
L=16.8m
L=16.7m
土坑4
L=17.5m
土坑2
L=16.4m
土坑5
L=17.4m
土坑3
0
1m

第100図　土坑１～５

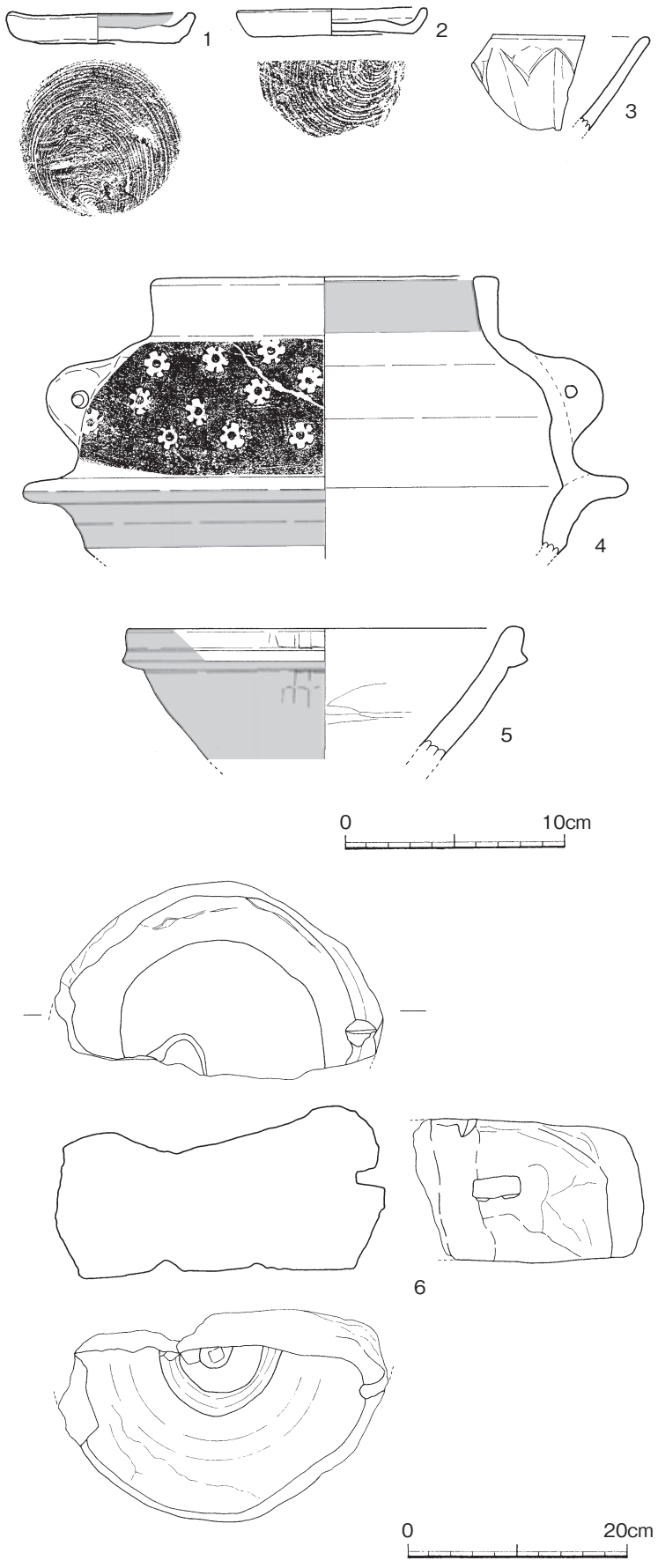
（2）遺物（第101～104図）

①N（n7）調査区（第101図）

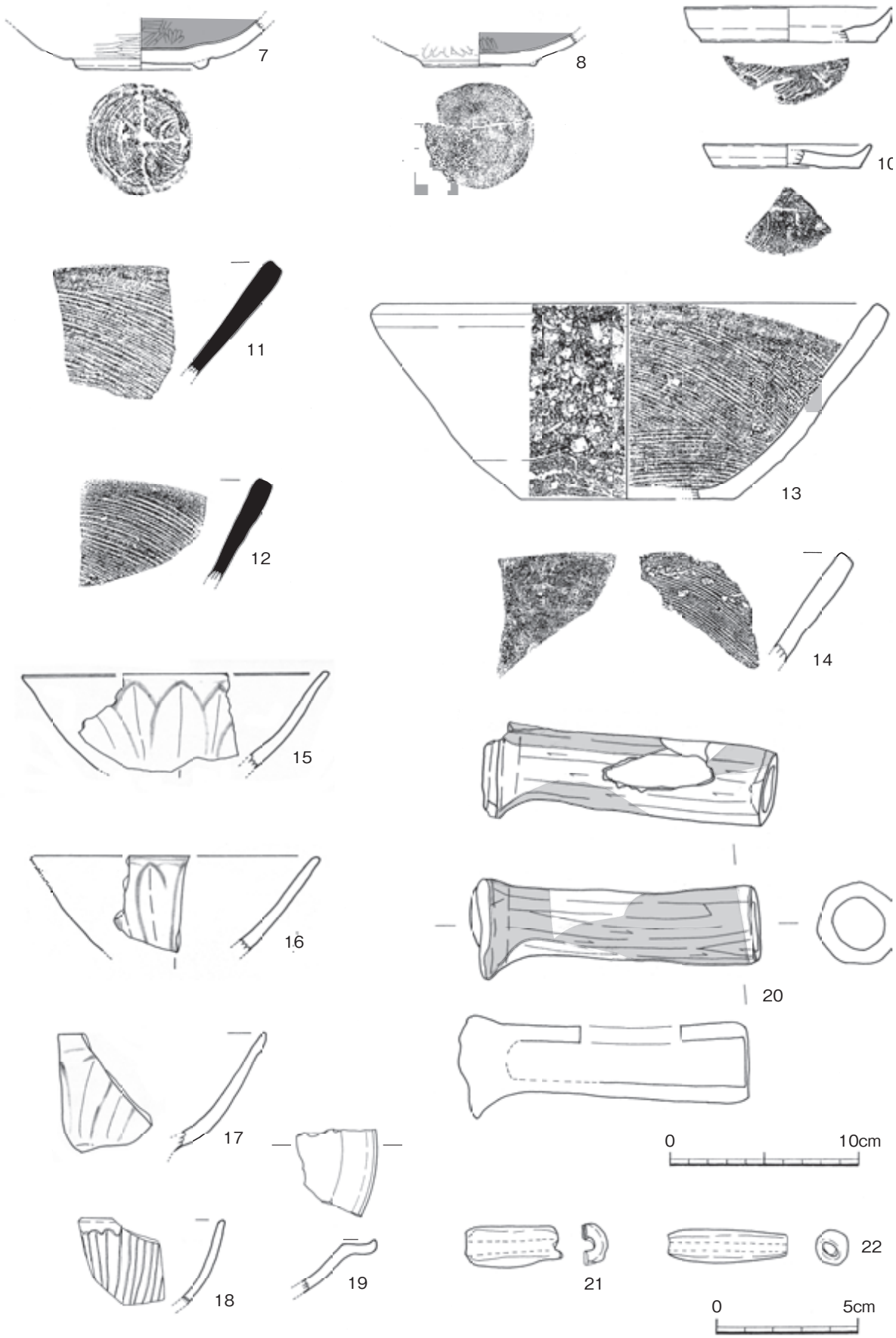
1・2は土師器の皿である。12世紀後半～13世紀前半頃のものと思われる。いずれも口径8.5cm程で，器高の低いものである。3は龍泉窯系の青磁椀で，鎬蓮弁が施されるものである。13世紀前後のものと思われる。4は茶釜である。肩部は張って左右に一対の把手がついている。胴部中央付近には鍔がつき，胴部上面には花文のスタンプで模様が描かれている。中世末頃のものと思われる。5は滑石製の石鍋である。口縁下に小さな鍔が廻るものである。鍔は断面が不等辺三角形を呈するもので，下辺が上辺より長いものである。14世紀頃のものと思われる。6は石臼である。安山岩製で，擦面の溝は摩耗し，光沢化している。

②N（n9）調査区（第102～104図）

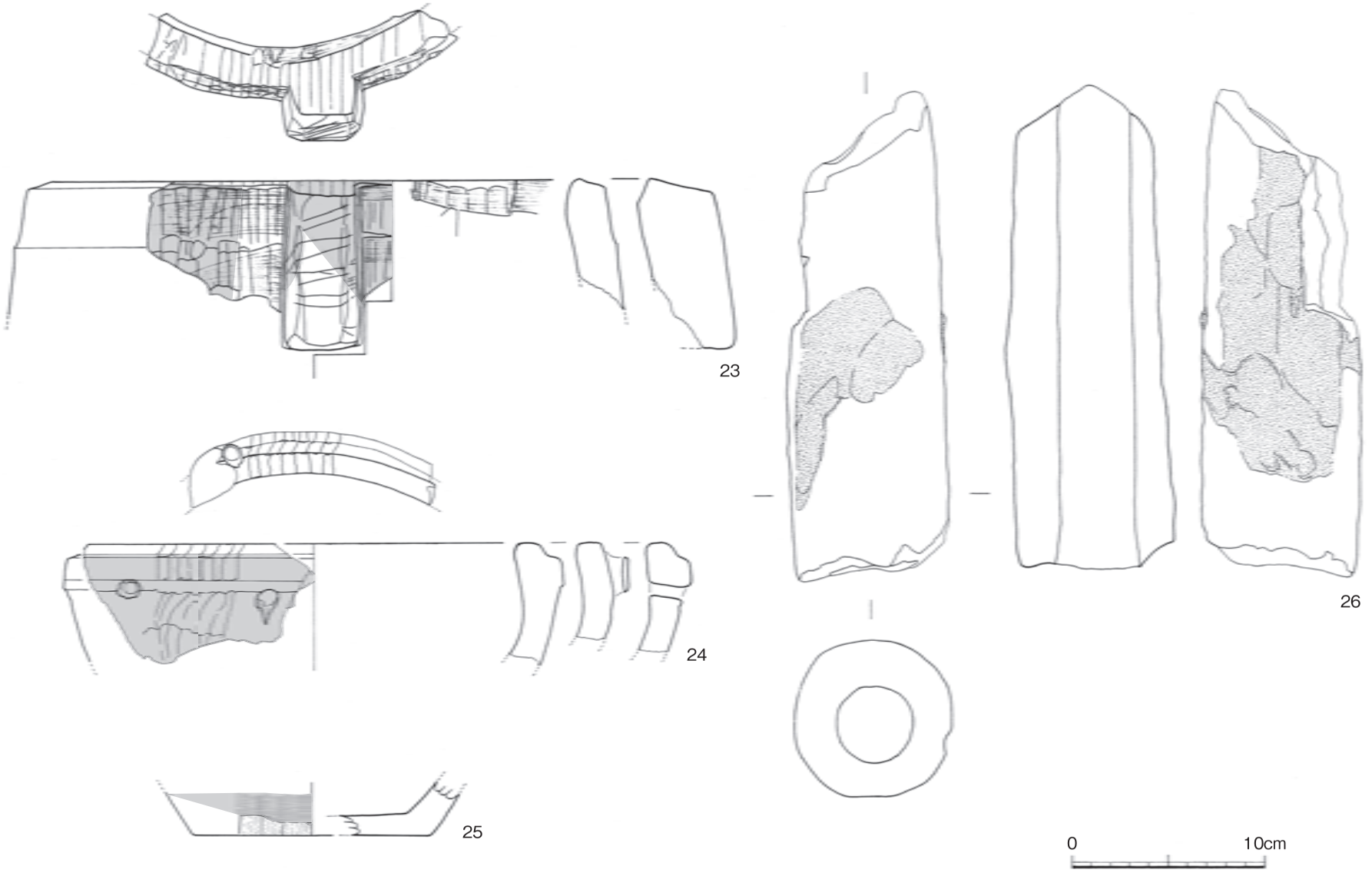
7・8は黒色土器A類の椀である。非常に短い高台が「ハ」字状に貼り付けるようについており，内外面ミガキが施される。7の底部は糸切り底である。11～12世紀頃のものと思われる。9・10は土師器の皿で，口径と底径の差があまりないものである。12世紀前後のものと思われる。11～14は擂鉢である。いずれも斜め方向にハケ目が入る。11・12は須恵器の擂鉢で，13・14は瓦質のものである。15～19は青磁である。その内，15～17は鎬蓮弁が描かれるものである。



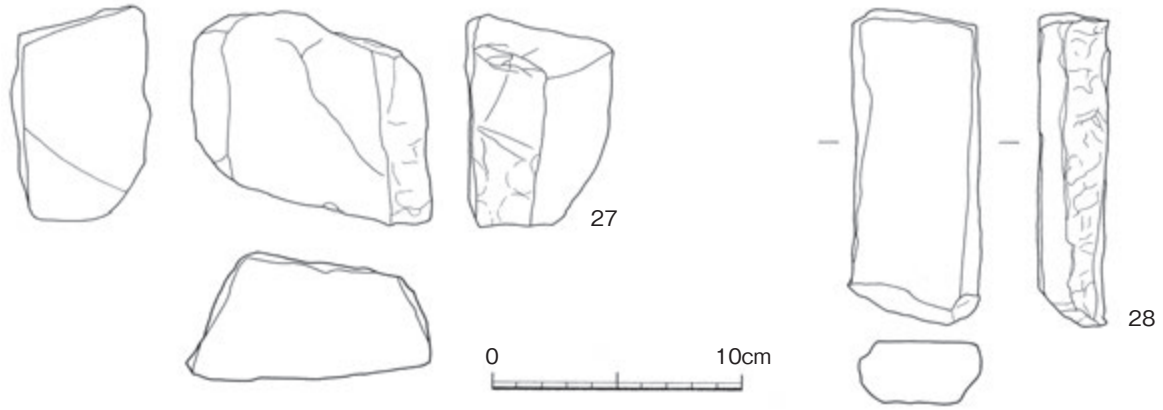
第101図　中世の遺物１（N-n7調査区）



第102図　中世の遺物２（N-n9調査区）（７～20：S=1/3，21・22　S=1/2）



第103図　中世の遺物３（N-n9調査区）



第104図　中世の遺物４（N−n9調査区）

15は羽反り口縁で蓮弁の明瞭なもので，16は口縁が真っ直ぐに伸びるものである。これらは13世紀前後のものと思われる。17は口縁が丸みをもって立ち上がるもので，蓮弁がやや退化気味なものである。時期は13世紀後半〜14世紀前後のものと思われる。18は口縁が丸みをもって立ち上がるもので，細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識して施されるものである。19は坏である。口縁部が短く屈折し，上面は凹面をなすものである。20は焙烙の把手と思われる。21は滑石製の錘で，22は土錘である。土錘は時期比定が難しいが，周辺の出土状況等から判断してこの時期に含めた。23〜25は滑石製石鍋である。23は桶形の器形で，口縁部に断面縦長長方形の瘤状把手がつくものである。11世紀頃と思われる。24は口縁下に鍔が廻るものである。鍔は断面台形状を呈するものであるが，突出が低く退化傾向が伺える。14世紀代のものと思われる。25は石鍋の底部である。26は鞴羽口である。直径８cm・送風孔径3.9cm で，基部内面は斜めに面取りがされている。被熱により側面が熔けており，一部ガラス質の滓が付着している。一部に磁力反応が認められる。27・28は砥石である。27は４面に砥面が見られる。28は砂岩製で正面と右側面に砥面が見られる。他は剥離のため不明である。

第４節　Ｋ調査区の概要

Ｋ調査区は山腹部のほぼ中央で，標高30m程の山腹部では最も高い場所に位置する。地形は平坦であるが，本来は傾斜していたと思われ，一段高いＪ調査区側を削ってその土で造成を行っているようである。中世墓が検出されていることから，造成は中世以前と思われる。

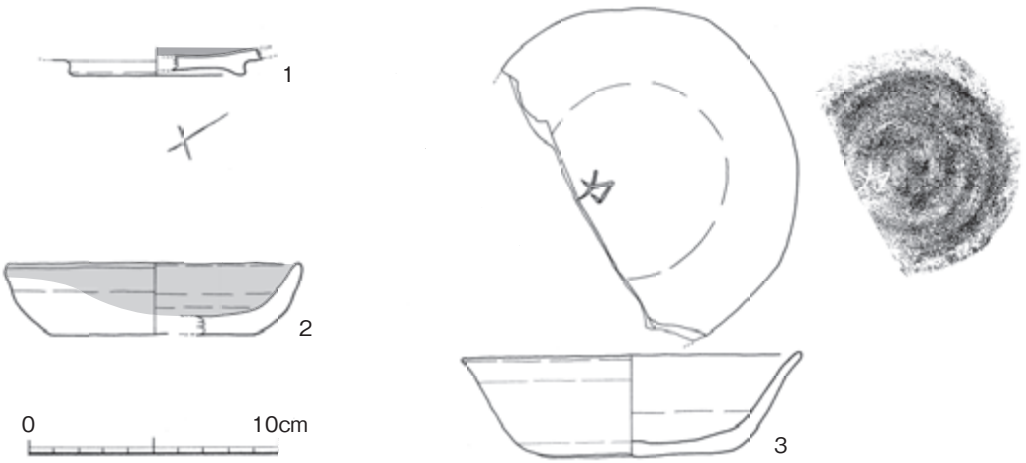
遺構は，炉状遺構１基，焼土域２基，中世墓３基，一字一石経塚15基，礫集積７基，五輪塔が廃棄された溝１条などが検出されており，遺構内からは中世の遺物が出土した。遺物は中世～近世のものが主で，古代のものが若干出土している。

１．古代の調査

（１）遺物（第105図）

Ｋ調査区では，古代の遺構は検出されなかった。遺物は古代末～中世初頭頃のものと思われるものが若干出土したのみである。中世以前と思われる造成と関係しているのかもしれない。

１は黒色土器Ａ類である。底部の一部のみが残存しており，非常に低い高台が付いている。高台内底には「×」の刻書が入れられている。11世紀～12世紀頃のものと思われる。２・３は土師器の坏である。２は口径12cm で底径との差があまりなく，器高の低いものである。11世紀後半～12世紀前半頃のものと思われる。３は口縁がやや羽反り気味になるもので，見込み部分に「カ」の篦書きがある。12世紀頃のものと思われる。

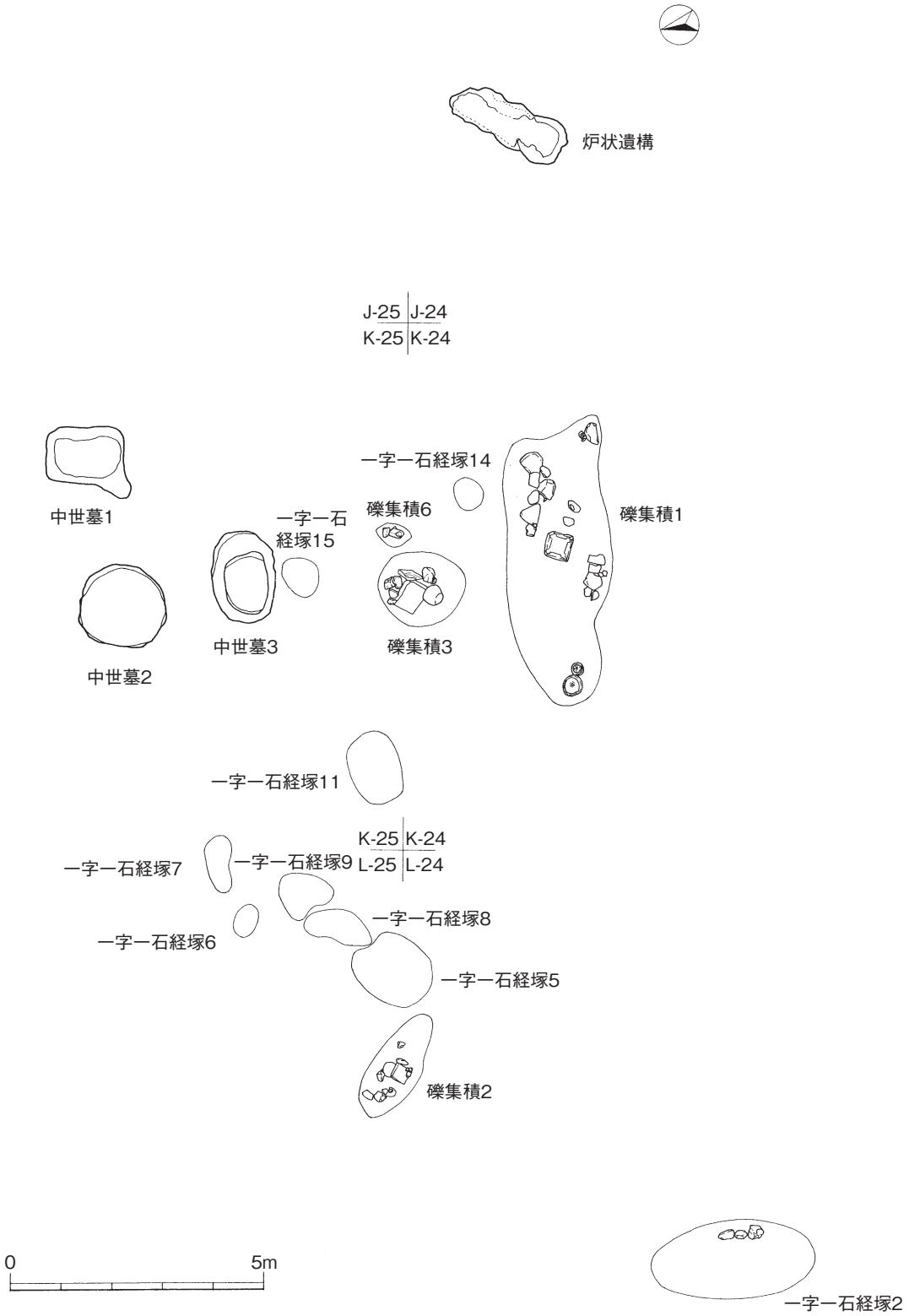


第105図　古代の遺物（K 調査区）

２．中世～近世の調査

（１）遺構の概要

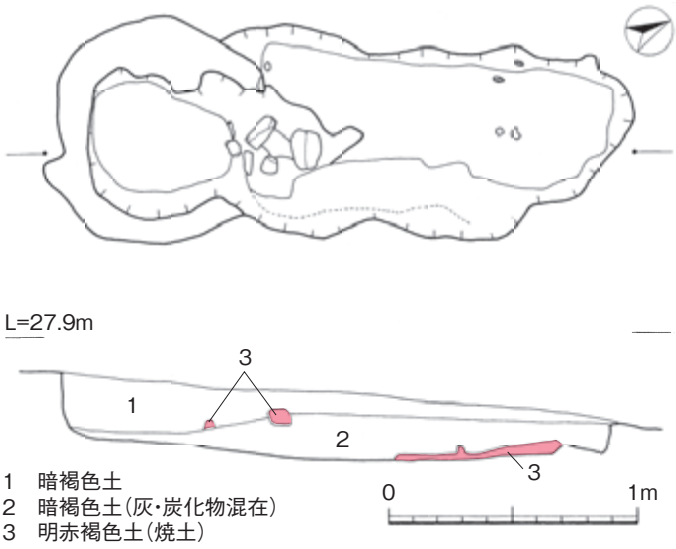
中世～近世の遺構としては，炉状遺構１基，中世墓３基，礫集積７基，五輪塔廃棄溝１条，一字一石経塚15基が検出されている。うち中世墓と礫集積は中世のものと思われるが，五輪塔廃棄溝と一字一石経塚は中世の遺物が出土しているものの，出土量が少ないことと，遺構の性格から近世まで下がる可能性も残されており，中世～近世の遺構として扱った。



第106図　K 調査区遺構配置図

①炉状遺構（第107図）

炉状遺構は長軸2.3m×短軸60～90cmで，円形の燃焼部（炉壁）と灰の掻き出し部を有し上面観で鍵穴状を呈するものである。埋土は３つに分層でき，上層が暗褐色土，中層が灰と炭化物の混在した暗褐色土で，掻き出し部側の底面に焼土が見られる。



第107図　炉状遺構

②中世墓（第108・109図）

中世墓は３基検出されている。K－25グリッドに集中しており，形状は円形・楕円形・方形と様様である。いずれも六道銭等が出土した。

中世墓１（第108図）

K－25グリッドから検出された。長軸1.6m×短軸1.5m，深さ70cm程のほぼ円形に近い形状を呈している。埋土は暗褐色土で，三足の付いた土師器と六道銭が副葬されていた。底面には部分的に黒褐色の粘質土が見られた。１は土師器の坏の底部に三足がついたものである。仏具と考えられる。本遺跡の低地部でさらに１点出土している。県内では鹿児島市加栗山遺跡，日置市柳原遺跡，霧島市弥勒院跡などの出土例がある。２～６は洪武通寶である。明銭で初鋳銭は1368年である。７・８は永楽通寶である。明銭で初鋳年は1408年である。

中世墓２（第108図）

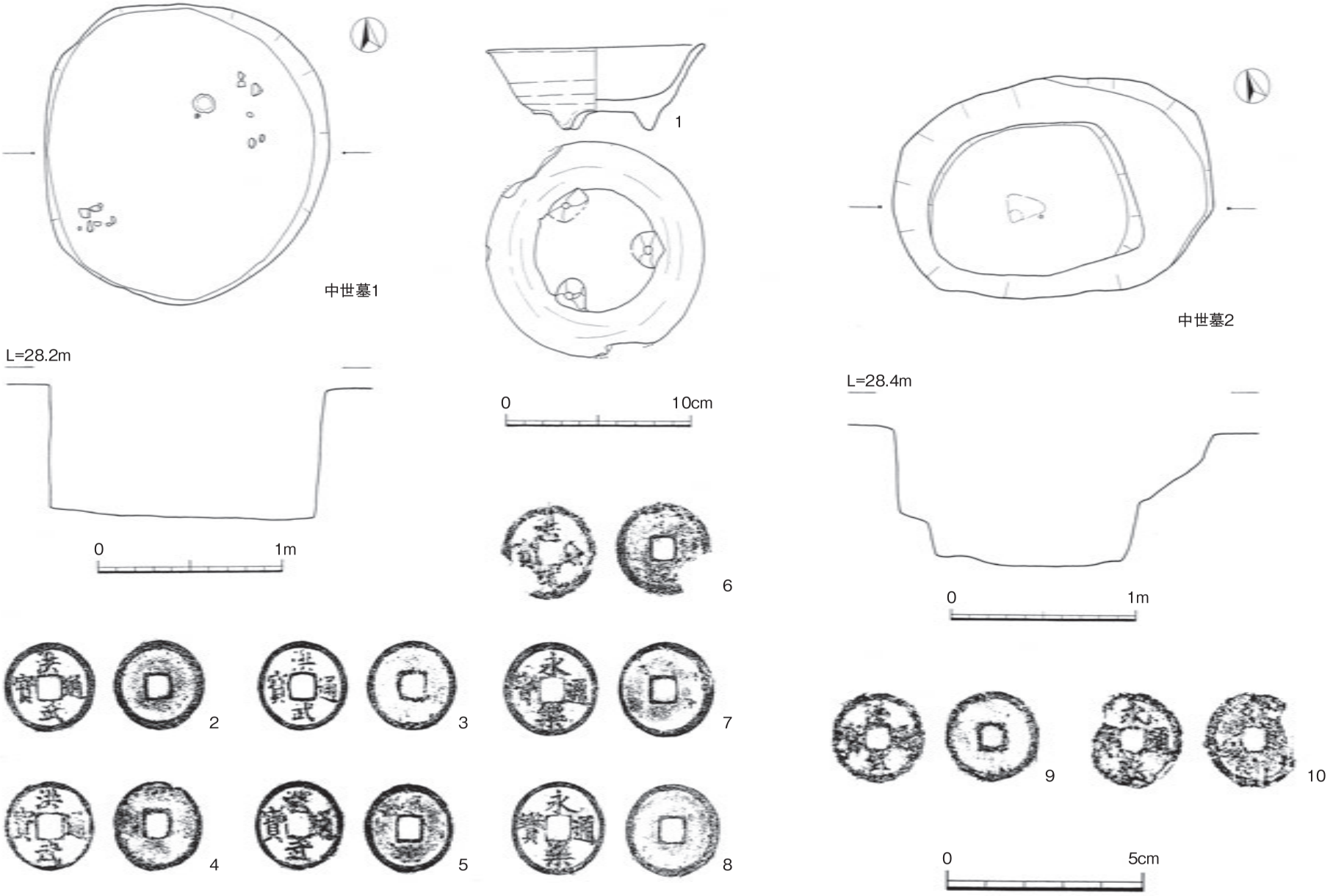
K－25グリッドから検出された。長軸1.7m×短軸1.2m，深さ75cm程の楕円形を呈する。深さ50cm程のところでさらに一段深くなる段掘りとなっている。埋土は暗褐色土で，底面には部分的に黒褐色の粘質土が見られた。粉化した人骨と歯が遺存していたほか，六道銭が２枚出土した。９は洪武通寶で，10は永楽通寶である。

中世墓３（第109図）

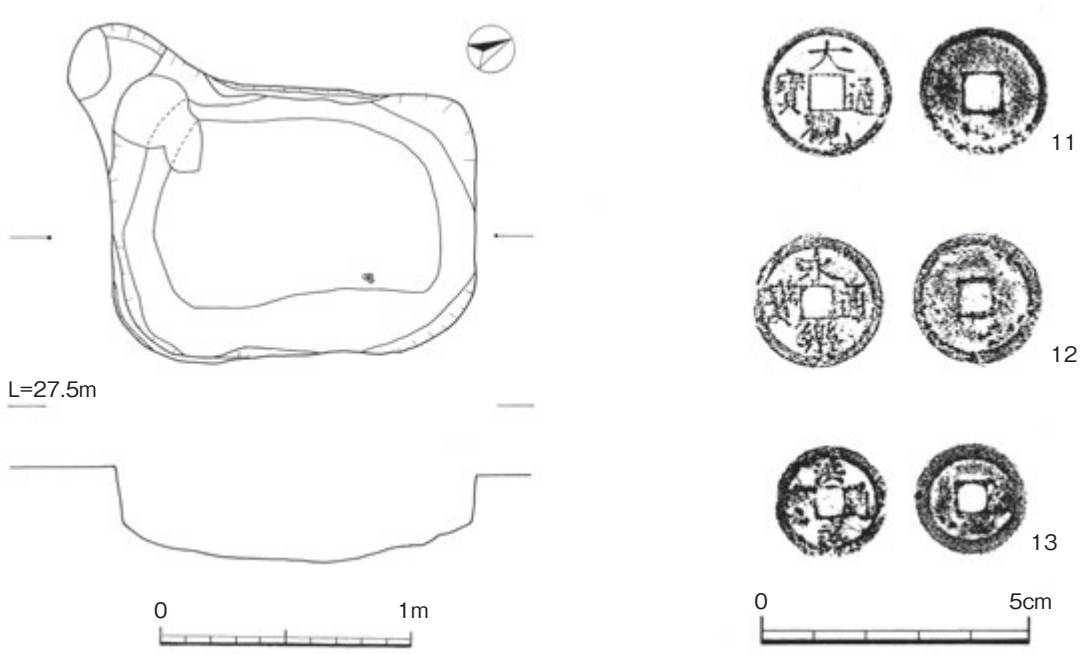
K－25グリッドから検出された。一部樹痕で変形しているが，長軸1.4m×短軸1.1m，深さ35cm程の隅丸方形を呈する。埋土は暗褐色土で，人骨は遺存していなかったが，北東方向から３枚の六道銭が副葬されていた。また一部炭化物もみられた。11は大観通寶である。北宋銭で初鋳年は1107年である。12は永楽通寶である。13は洪武通寶である。

③礫集積（第110～114図）

礫集積は７基検出された。これらの遺構は五輪塔の一部と礫が一緒にまとまって出土しているものである。一部には土坑を伴うものも見られる。宮崎市山内石塔群の出土状況などから推察して，五輪塔の敷石等である可能性が高い。



第108図　中世墓１・２と出土遺物（１：S=1/3，２～10：S=7/10）



第109図　中世墓３と出土遺物

礫集積１（第110・111図）

K－24グリッドから検出された。全長4.7m×幅1.5mほどあり，20～40cmほどの礫の集まりがある。その周囲には５cmほどの小礫がまとまっている。この礫集積の中央付近には宝塔の笠があり，その下からは蓮子碗が，また西側端には茶臼が２個並んで出土した。１は蓮子碗である。口縁部に波濤文が，胴部には芭蕉葉文が描かれている。小野編年のＣ群Ⅰ類の系統に属し，15世紀末～16世紀前半頃のものと思われる。２・３は茶臼である。２は上臼で，直径23cm×厚さ17cmで中央部に直径３cmの供給口が貫通している。３は受け皿部分の付いた下臼である。

礫集積２（第112図）

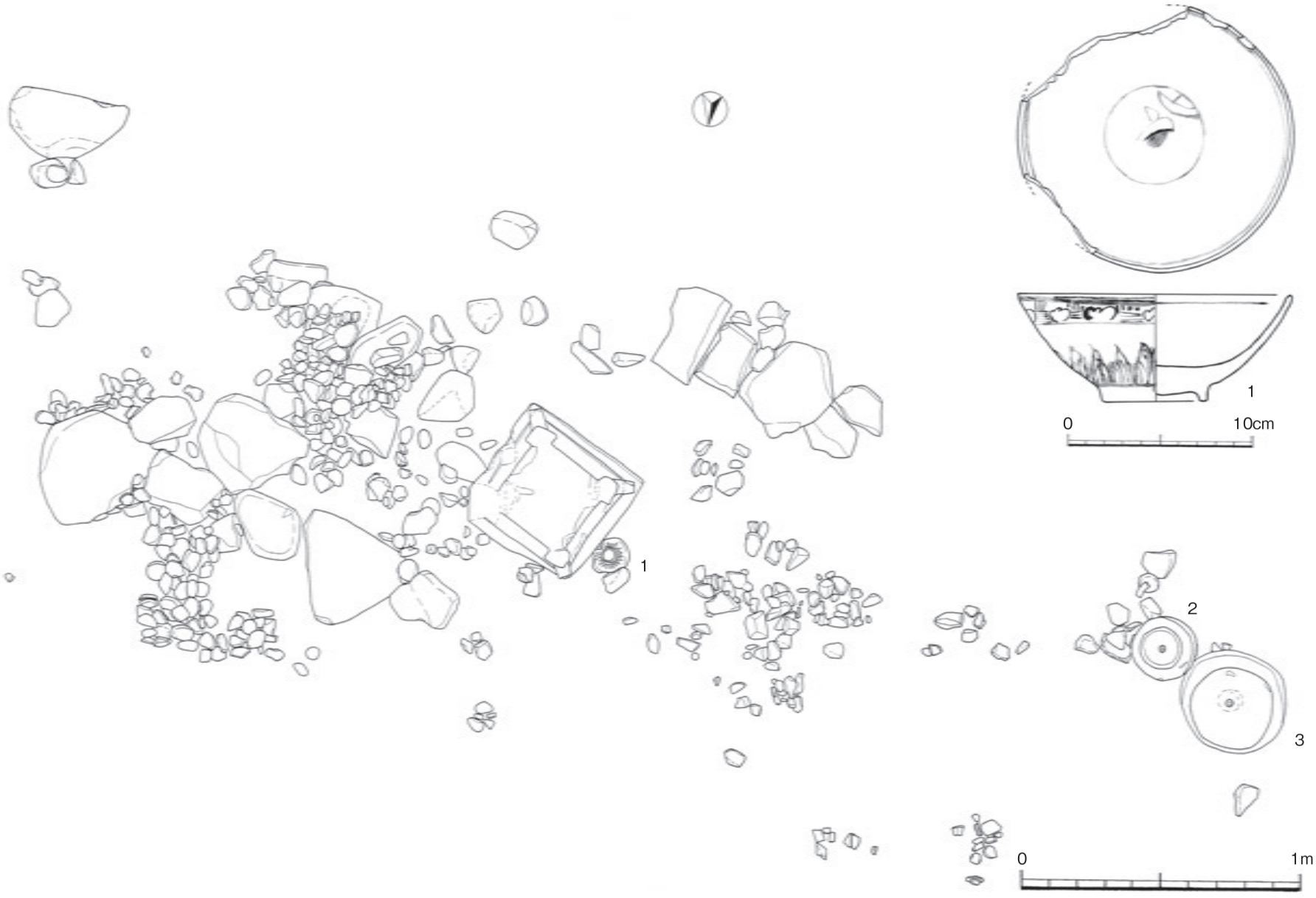
K－24・25グリッドから検出された。全長1.8m×幅0.6m程あり，中央に32cm×30cm程の赤色の地輪がある。周囲には５～25cm程の礫がまとまっている。上面の礫や五輪塔を除去したところ，全長1.7m×幅0.9m，深さ75cm程の土坑が検出され，その中に５～25cm程の礫が入り込んだ状態で出土した。

礫集積３（第113図）

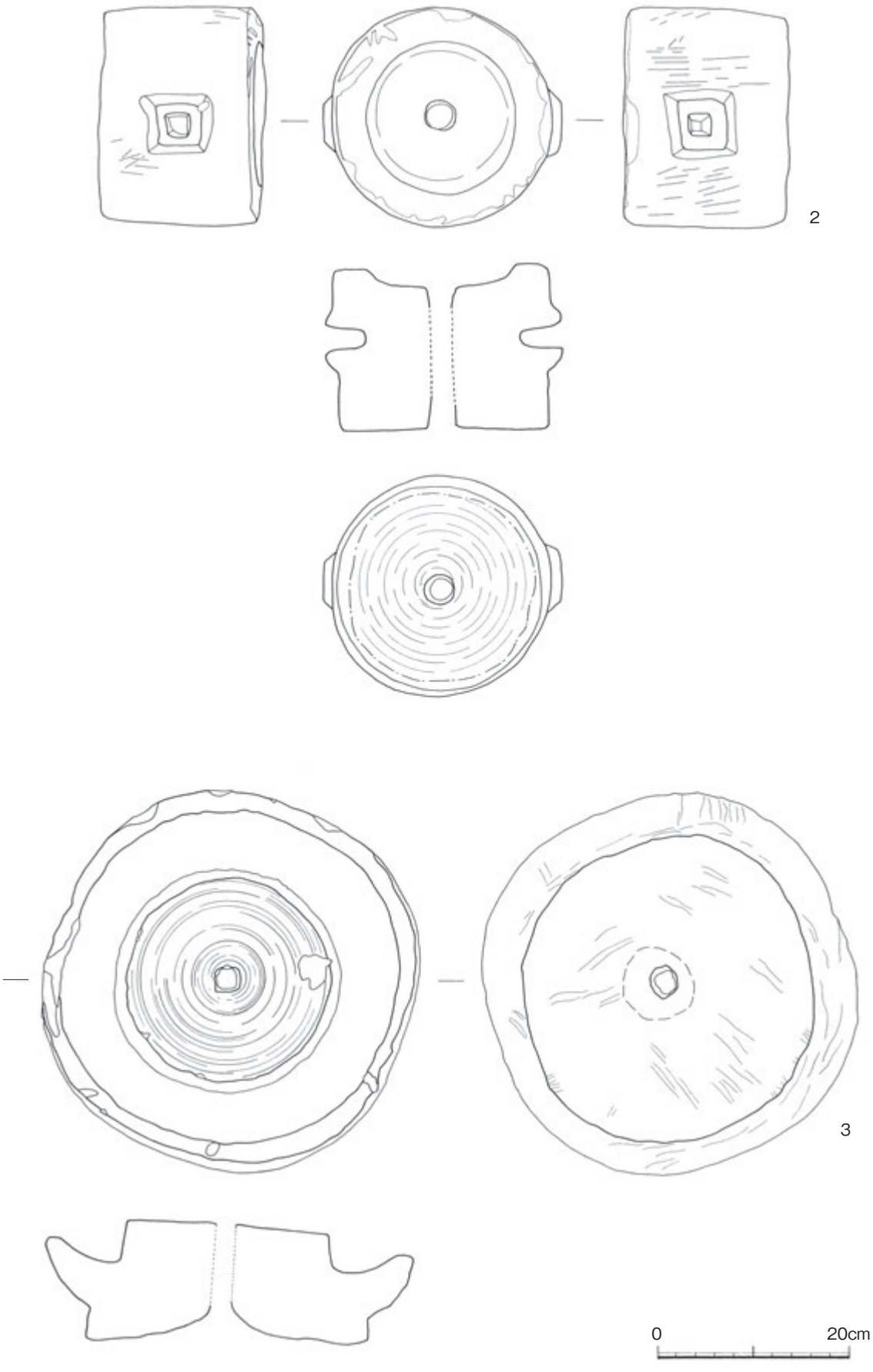
K－24・25グリッドから検出された。全長1.2m×幅1.2m，深さ40cm程の不整形の土坑である。その中に水輪と地輪が１基ずつ入っており，その上に５～50cm程の礫が入っている。

礫集積４（第114図）

K－24グリッドから検出された。全長2.7m×幅0.8m程のところに地輪３基が散在しており，他に45cmほどの凝灰岩の礫が見られる。



第110図　礫集積１と出土遺物１



第111図　礫集積１出土遺物２

礫集積５（第114図）

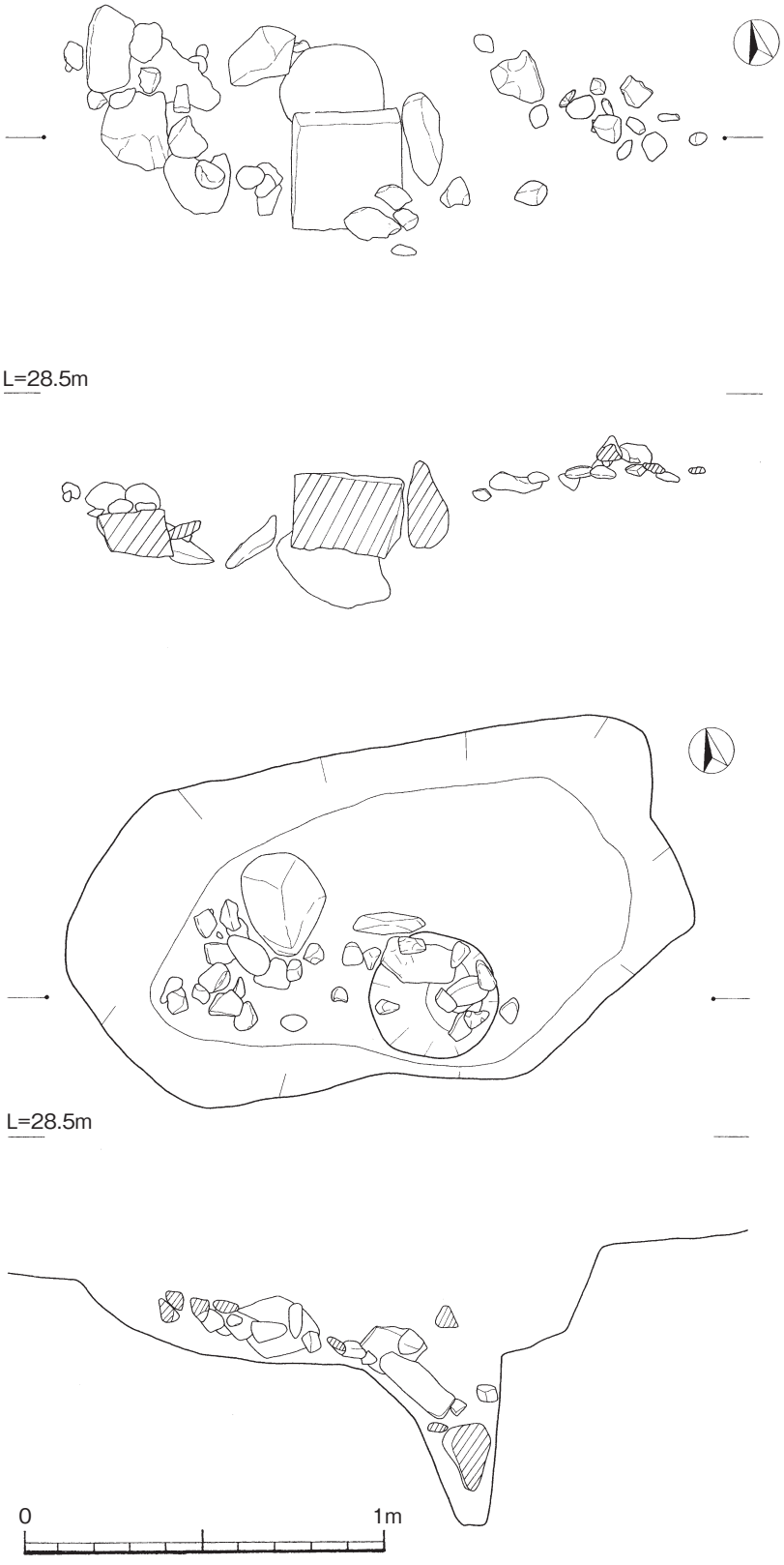
K－24グリッドから検出された。全長1.4m×幅70cm程のところに水輪と地輪，全長45cm程の礫が見られる。

礫集積６（第114図）

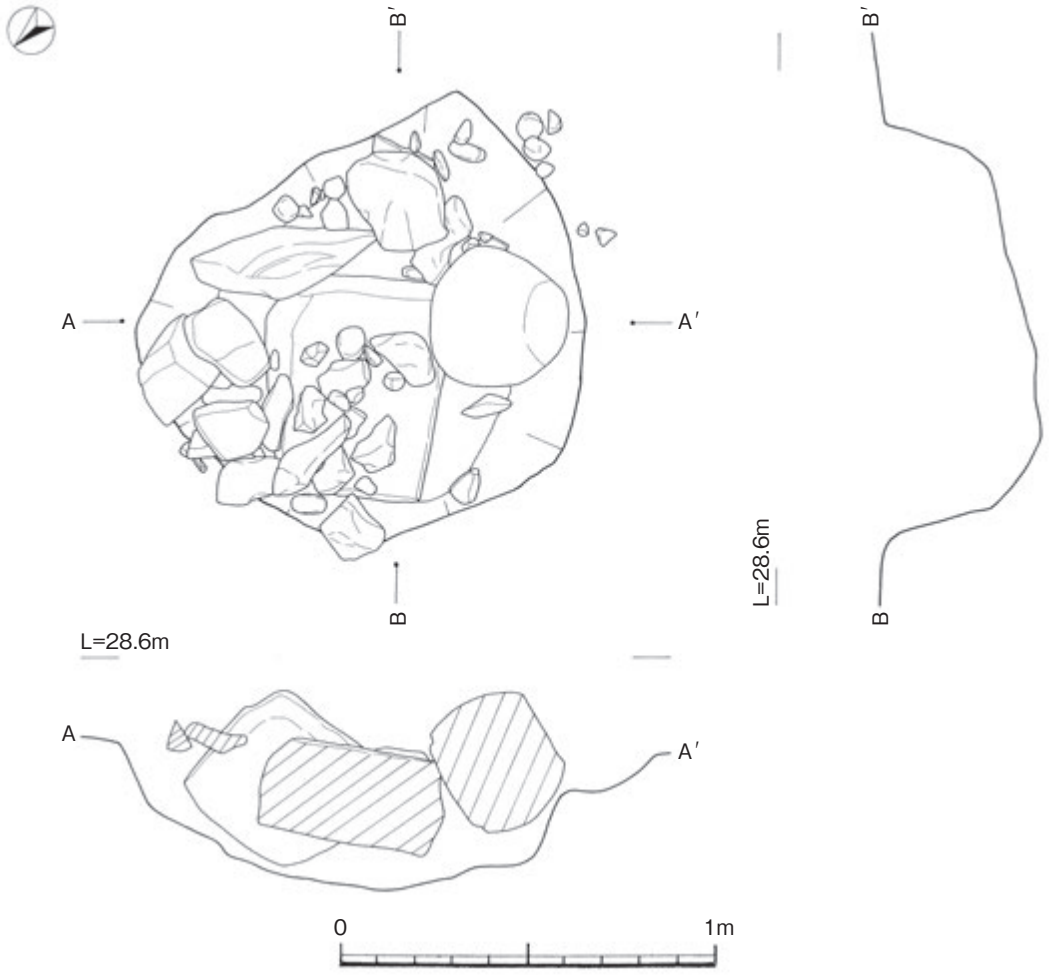
K－24グリッドから検出された。40cm×25cm程のところに礫が３個集中して見られる。

④五輪塔廃棄溝
（第115～133図）

K・J－25・26グリッドから検出された。溝が逆台形状に掘り込まれており，その底部に硬化面が見られることから，本来は道として利用されていたと思われる。溝の両側には轍状の跡も見られる。その溝の中に大量の五輪塔が投棄された状態で検出された。五輪塔の材質が石切場のものと同質であること，石切場内から未完成の五輪塔が検出されていることなどを踏まえると，五輪塔自体は別地点から搬入されたものではなく，石切場の石材を用いて遺跡内で製作されたものと考えられる。溝内の五輪塔は完全に製品として完成されたものであり，製作途中の



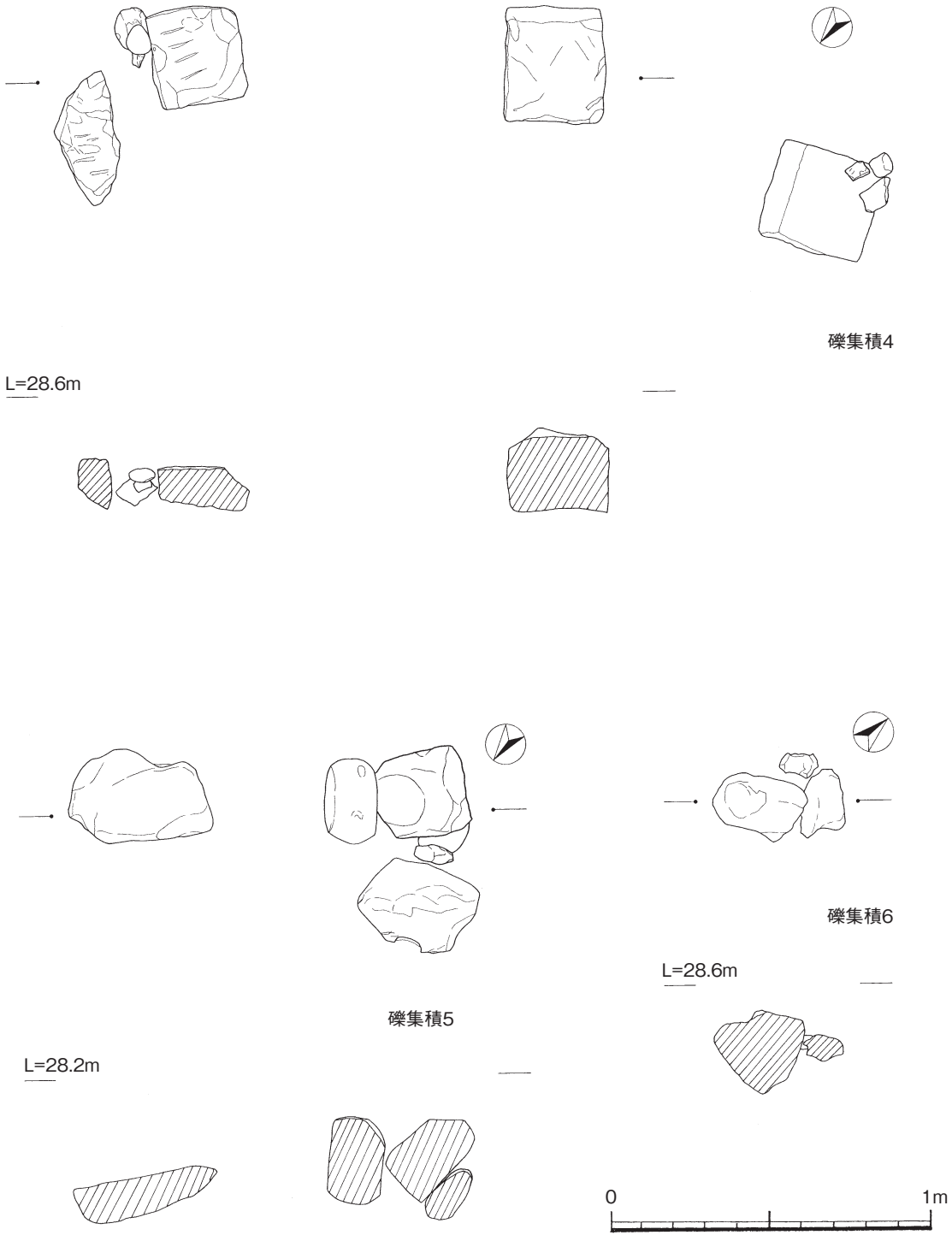
第112図　礫集積２



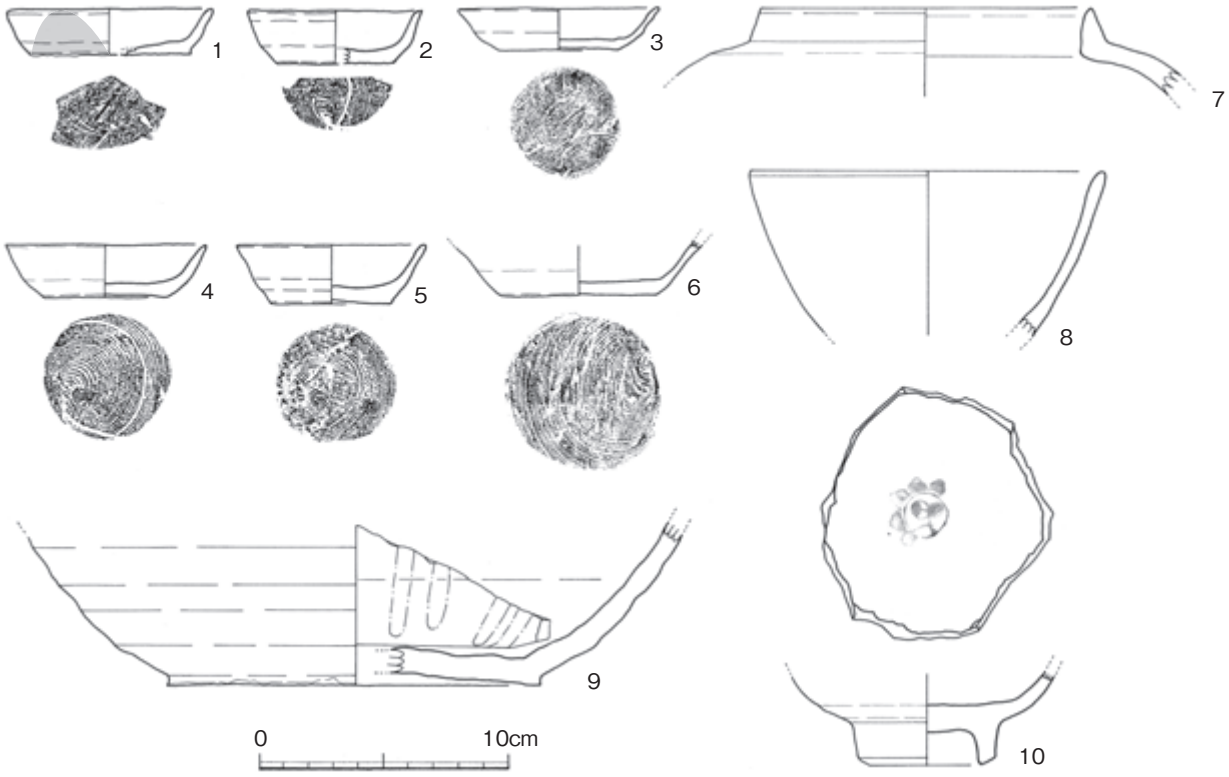
第113図　礫集積３

失敗品等を廃棄したようなものではない。Ｋ地区では他に宝篋印塔の相輪や中世墓３基なども検出されている。これらのことを踏まえると，古道内の五輪塔も本来はＫ地区に建立されていたものであり，何らかの理由によって廃棄された可能性が高いと考えられる。その際，Ｌ－25グリッドの崖に面した部分にはきちんと二段に五輪塔の地輪・火輪が並べてあったことから，この溝を封鎖する意図をもって行われたと思われる。ただし，五輪塔の時期は現在のところ15・16世紀のものではないかと判断しているが，五輪塔自体がいつ廃棄されたのかは不明である。五輪塔をきちんと並べた上で廃棄していることを考えると，廃仏毀釈等に関連している可能性も考えられるが，確証は見つかっていない。溝内から遺物が出土している（第115図）。

１～５は土師器の皿である。15世紀後葉～16世紀末にかけてのものと思われる。１は体部外面にススの付着が見られる。３は底部・体部ともに器壁の薄いものである。５は１～４のものと比べて赤味の強いものである。７は瓦質の壺である。丸く膨らんだ胴部から口縁部が直立するものである。復元口径13cm である。８・10は龍泉窯系の青磁椀である。８は丸みをもったものであり，無文のものである。10は高台畳付の外面端部が若干浮くもので，見込み部分に花文が描かれるものである。９は陶器の壺で底径15cm である。内面に釉が垂れ下がっている。中国南部産のものと思われる。



第114図　礫集積４～６



第115図　五輪塔廃棄溝出土遺物

五輪塔（第117～133図）

K調査区からは石塔240点が出土した。うち１点は宝塔の相輪であり，残りは五輪塔である。240点中161点を図化した。石塔はそれぞれヴァリエーションが認められたため，形態的特徴をもとに分類を行ったが，分類の内容については「まとめ」で言及することとし，ここでは概要についてふれることにする。

相輪（第117図）

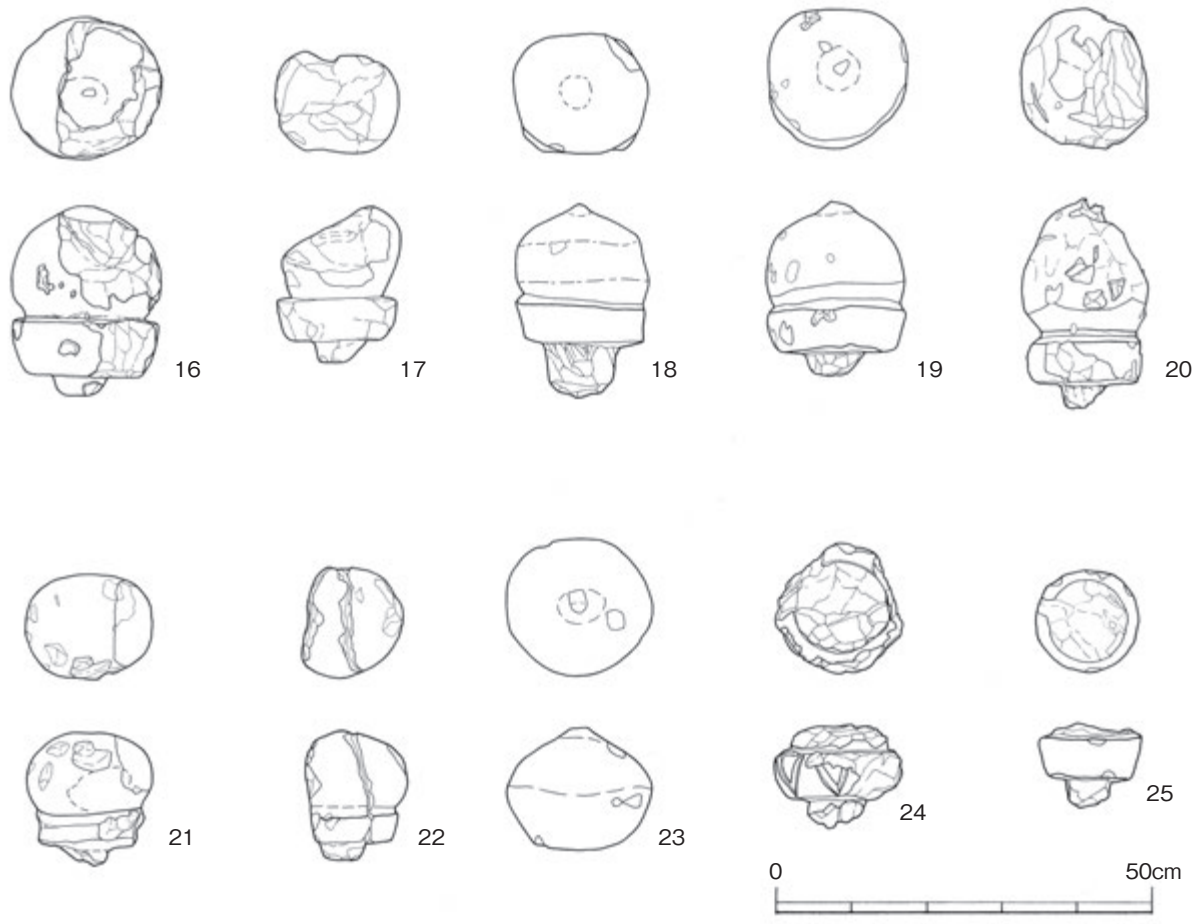
１は相輪である。K調査区からは１点出土した。上部の請花は二段重ねになっており，下部は請花と露盤を有するものである。請花は花弁をモチーフとしたもので，四角形を呈する。

空風輪（第117・118図）

２～25は空風輪である。２は空輪の最大径が下位にあり，空輪と風輪との間に抉りがみられない。空輪の厚さが薄く，風輪に比して空輪が小さい印象を受ける。３～６は空輪の最大径が中位にあり，空輪と風輪との間に抉りがみられる。風輪の厚さが２の倍ほどと厚くなり，空輪と風輪の幅はほぼ同じくらいである。７～12は空輪の最大径が上位にあり，空輪と風輪との間に深い抉りがみられる。風輪の厚さは薄く，空輪と風輪の幅はほぼ同じくらいである。13～17は空輪と風輪との間の抉りは弱く，風輪の厚さも薄いものである。風輪に比して空輪がほぼ同じかやや小さくなるものが多い。空輪の最大径は上位と中位とがみられる。18～22は空輪の最大径が中位にあり，空輪と風輪との間の抉りは弱い。風輪の厚さは薄く，風輪に比して空輪がほぼ同じかやや大きくなる。23～25は全体の形状が不明なものである。



第117図　相輪・空風輪１



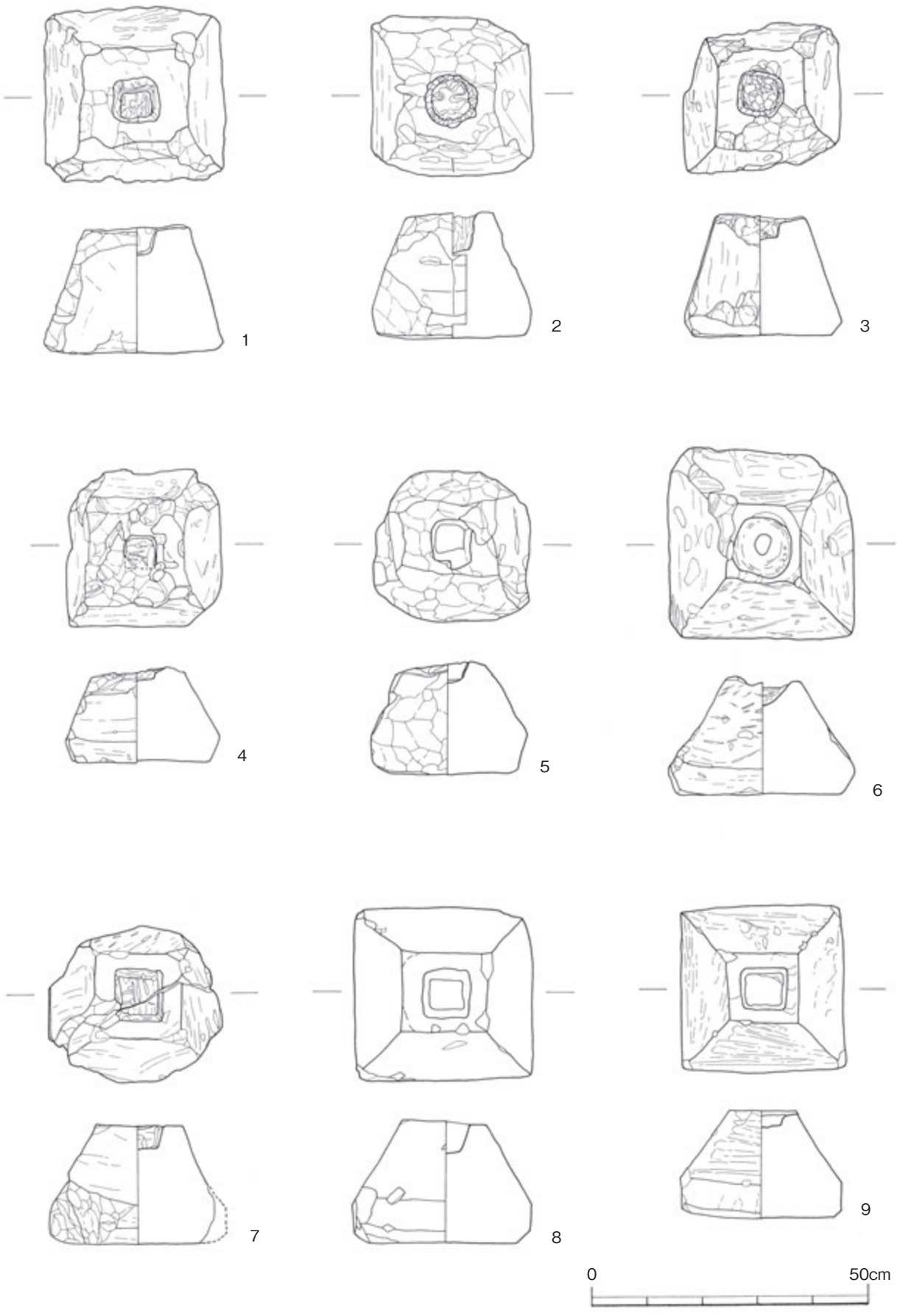
第118図　空風輪２

火輪（第119～124図）

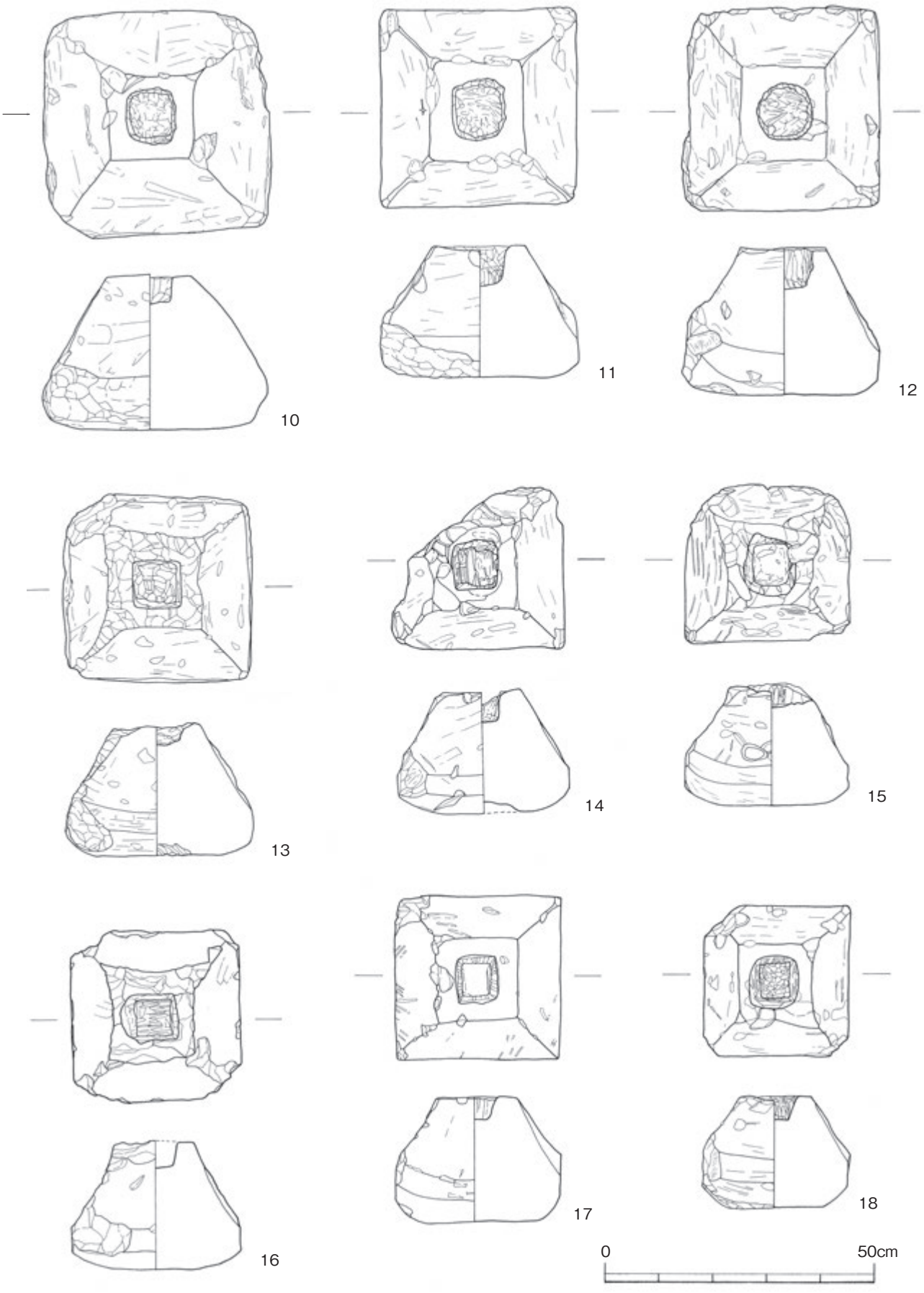
１～52は火輪である。１～３は厚手で，軒が無いかほとんど見られないものである。４～６は厚手で，下部から斜めに立ち上がることで軒を形成している。７～10は厚手で，下部からいったん斜めに立ち上がり，さらに直立に立ち上がることで軒を形成している。反りはみられない。11～24は厚手で軒を形成しており，反りがみられる。下部からの立ち上がりが丸みをもち，下部が膨らんだ印象を与えている。25～33は中くらいの厚さで軒を形成している。反りはあまりみられない。下部からの立ち上がりが丸みをもち，下部が膨らんだ印象を与えている。34～44は薄手で軒を形成するものである。反りは有るものと無いものとがある。下部からの立ち上がりが丸みをもち，下部が膨らんだ印象を与えるものが多い。45～47は薄手で反りがみられる。下部から直立に立ち上がることで軒を形成しており，下部に膨らみがないため，全体的に四角い印象を与えている。48～52は欠損等により全体の形状が不明なものである。

水輪（第125～128図）

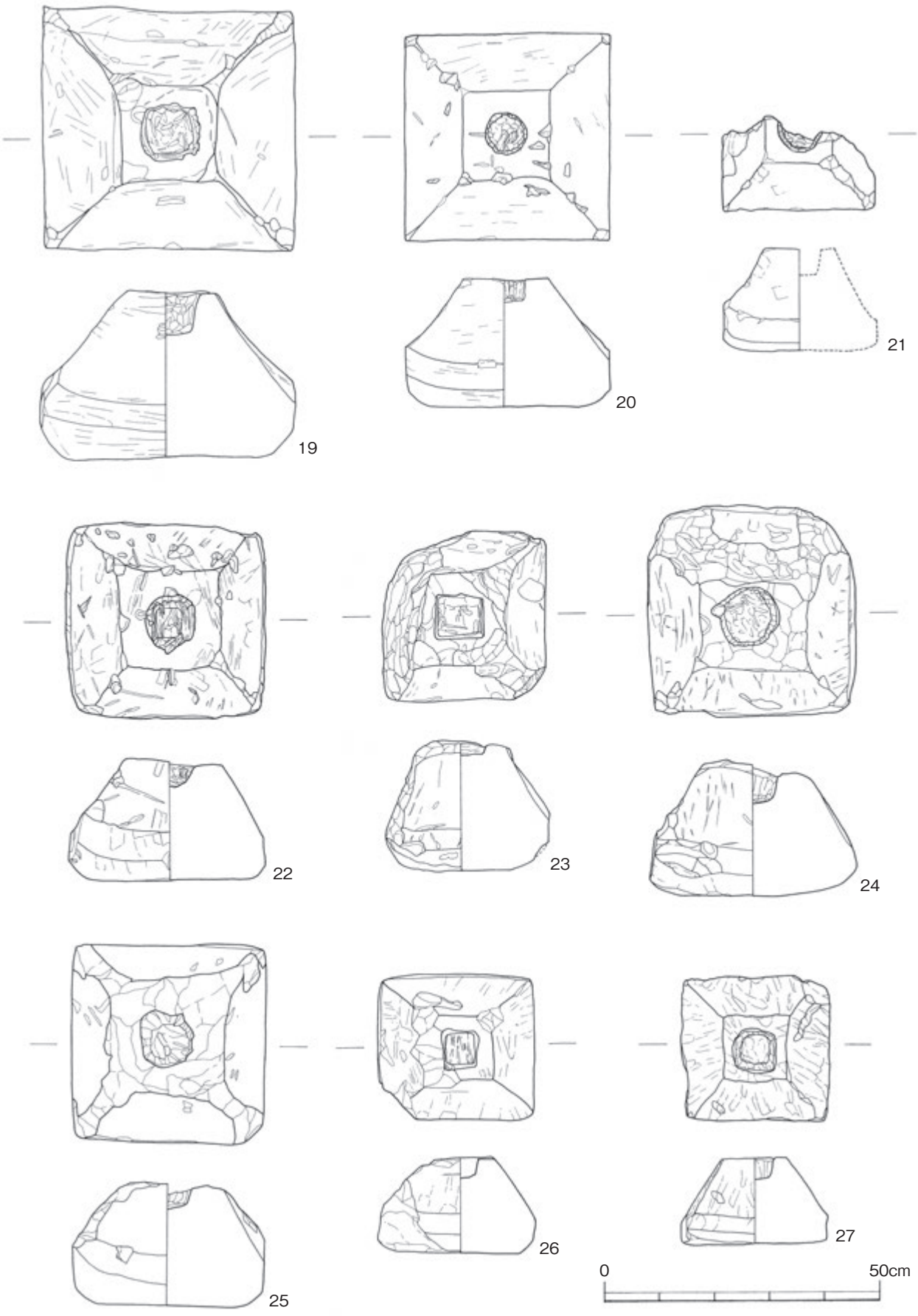
１～39は水輪である。１～６は薄手で断面形が小判形を呈するものである。７～11はやや厚めのものである。胴部最大径が上位にあり，肩が張った形状を呈している。12～19はやや厚めのもので，胴部最大径が中位にある。20～28は厚手で，胴部最大径が中位にある。



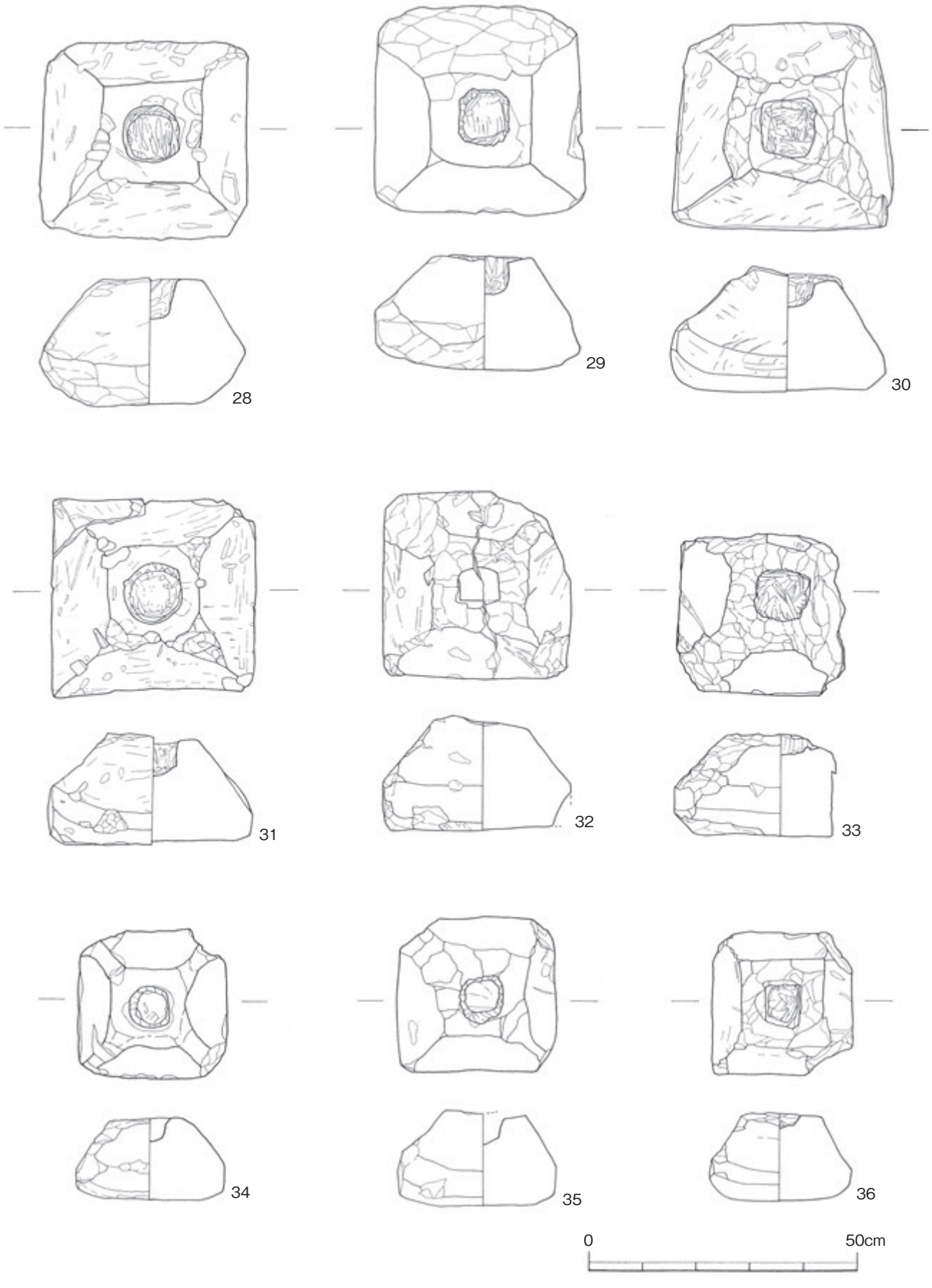
第119図　火輪１



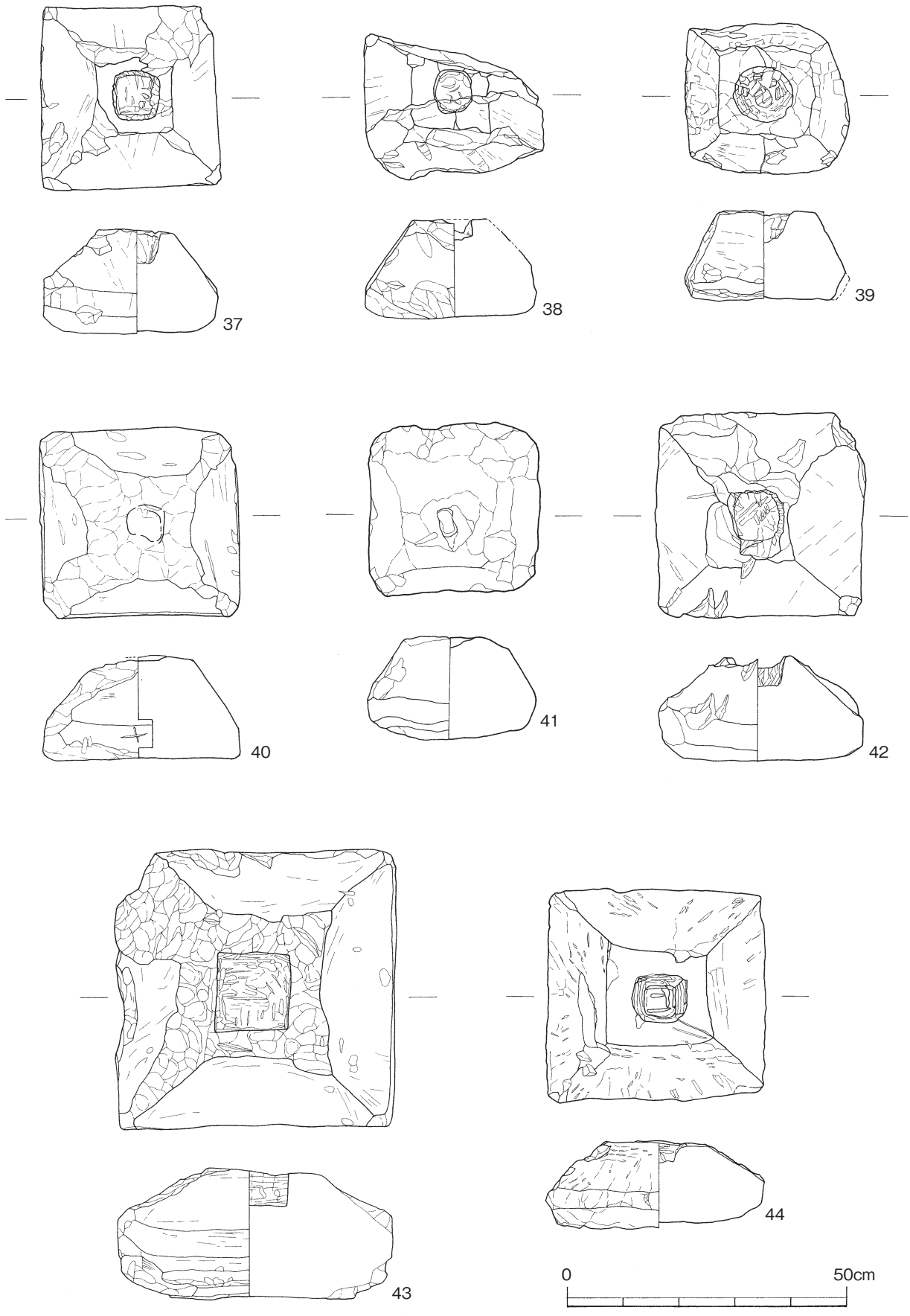
第120図　火輪２



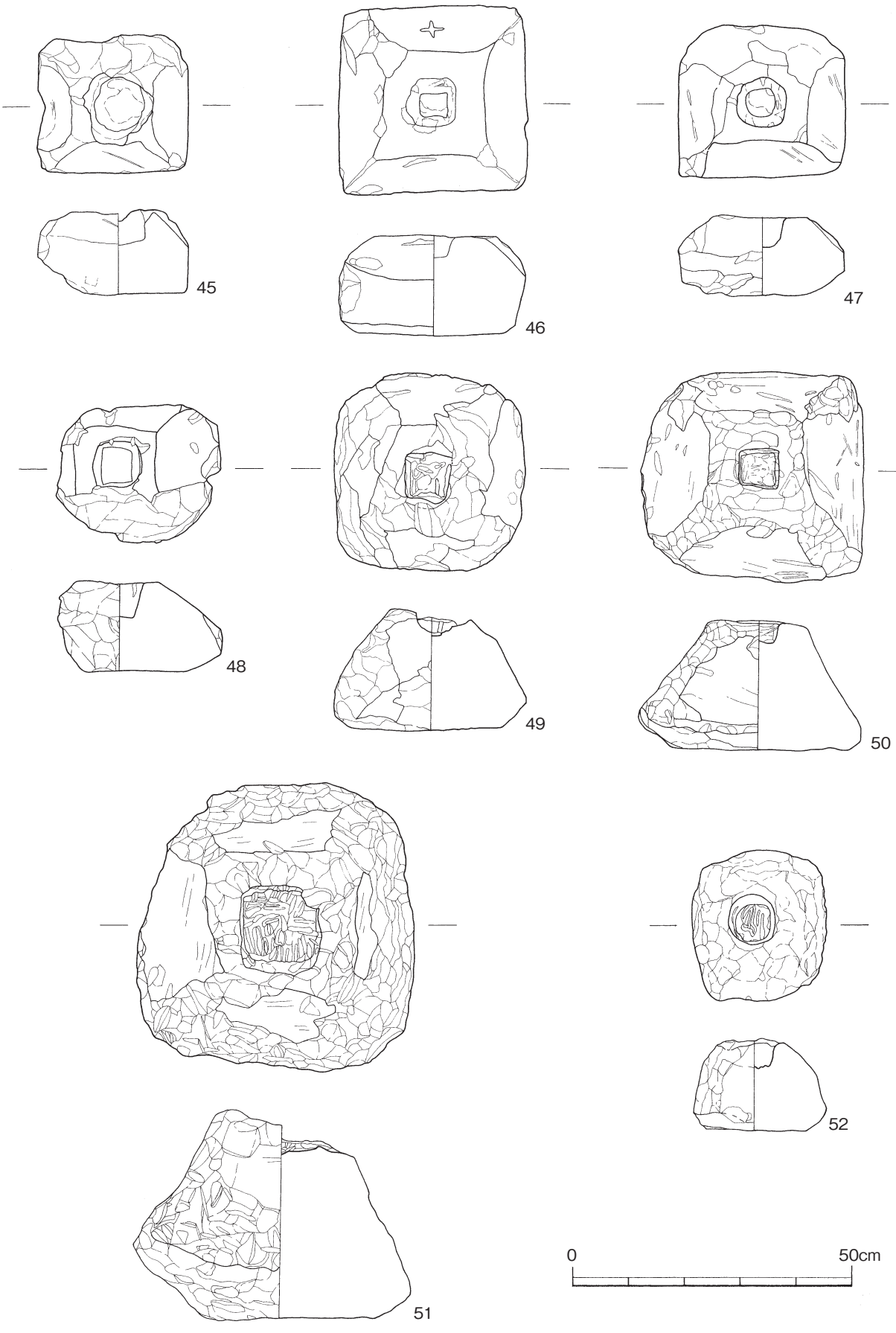
第121図　火輪３



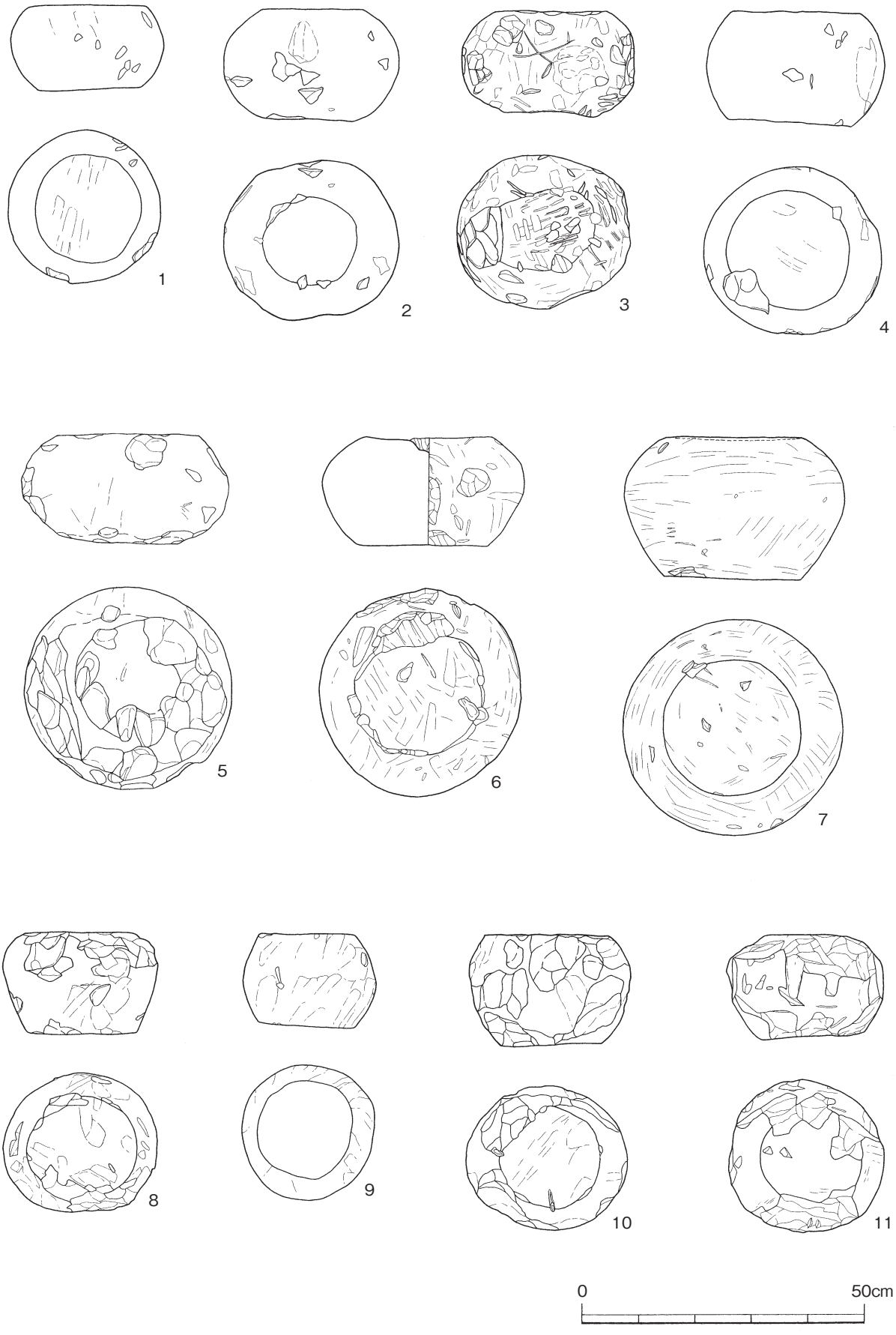
第122図　火輪４



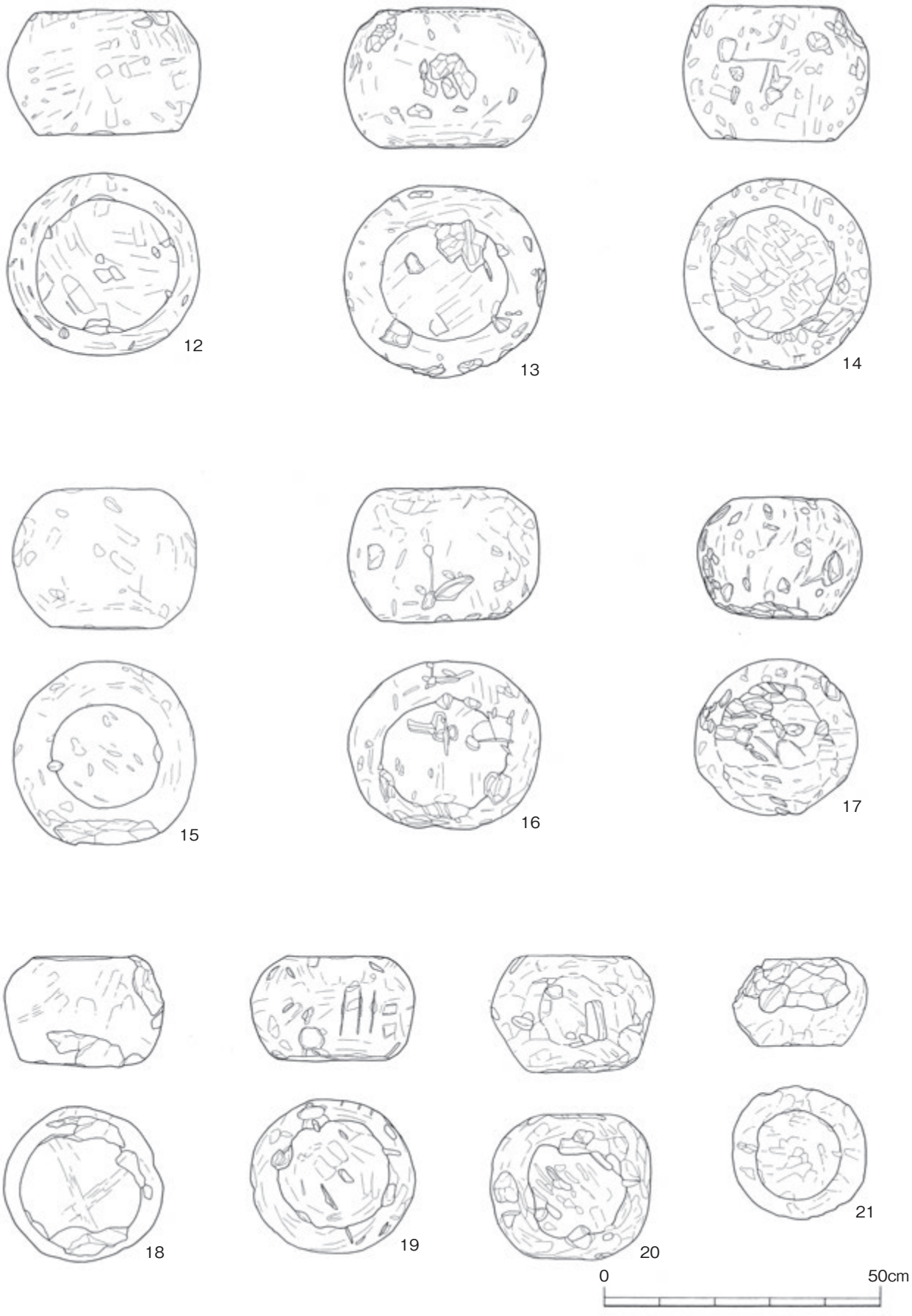
第123図　火輪５



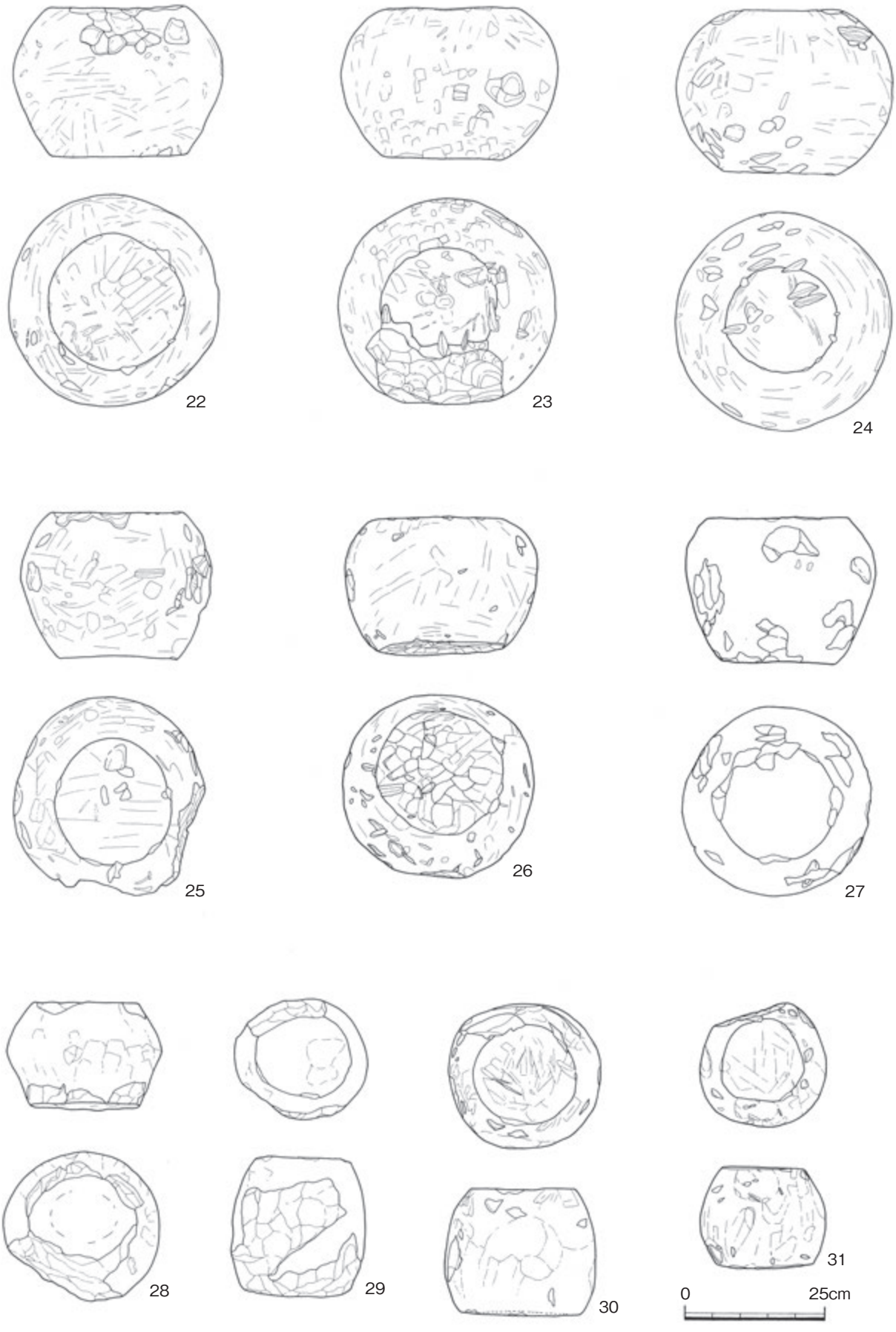
第124図　火輪６



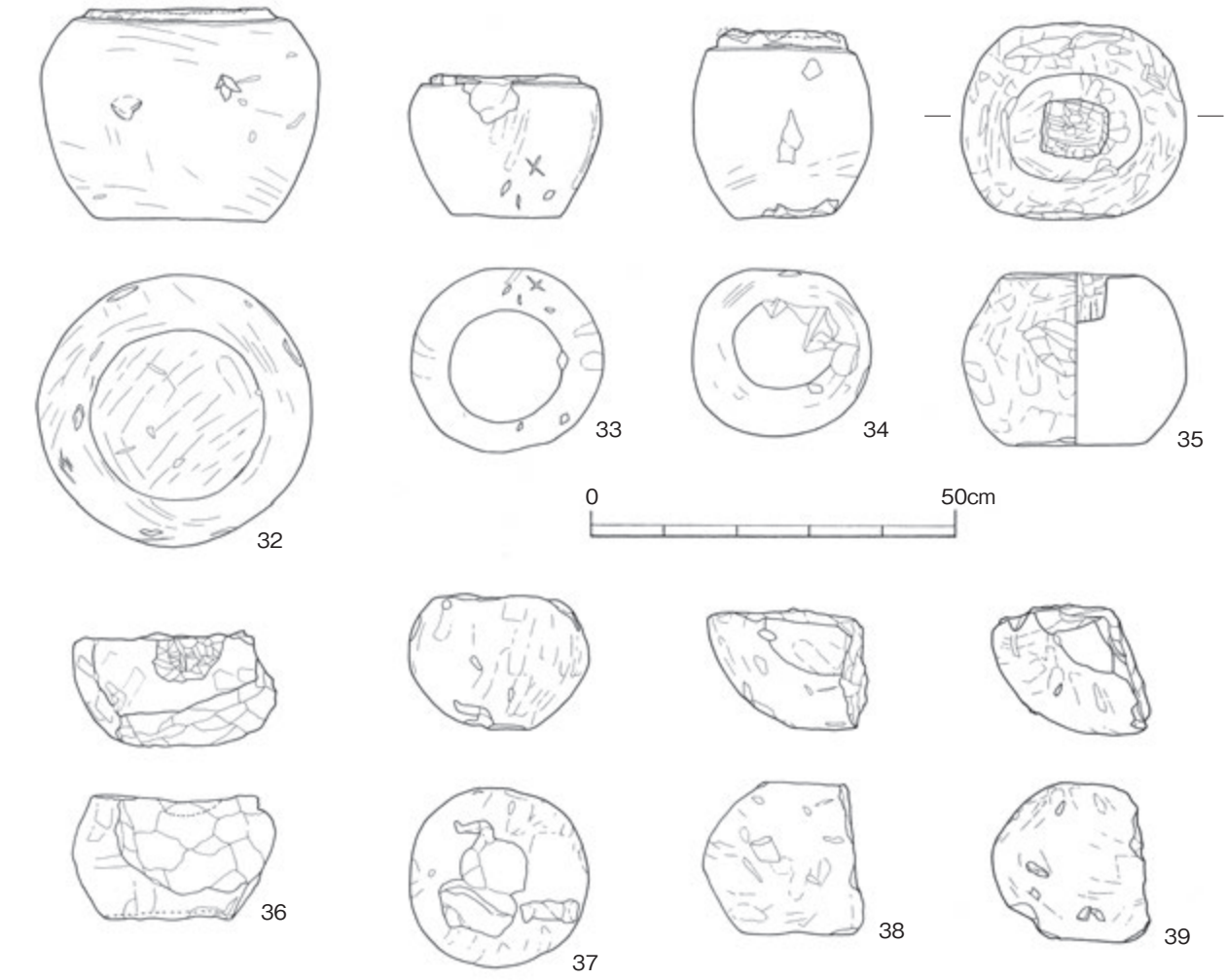
第125図　水輪１



第126図　水輪２



第127図　水輪３

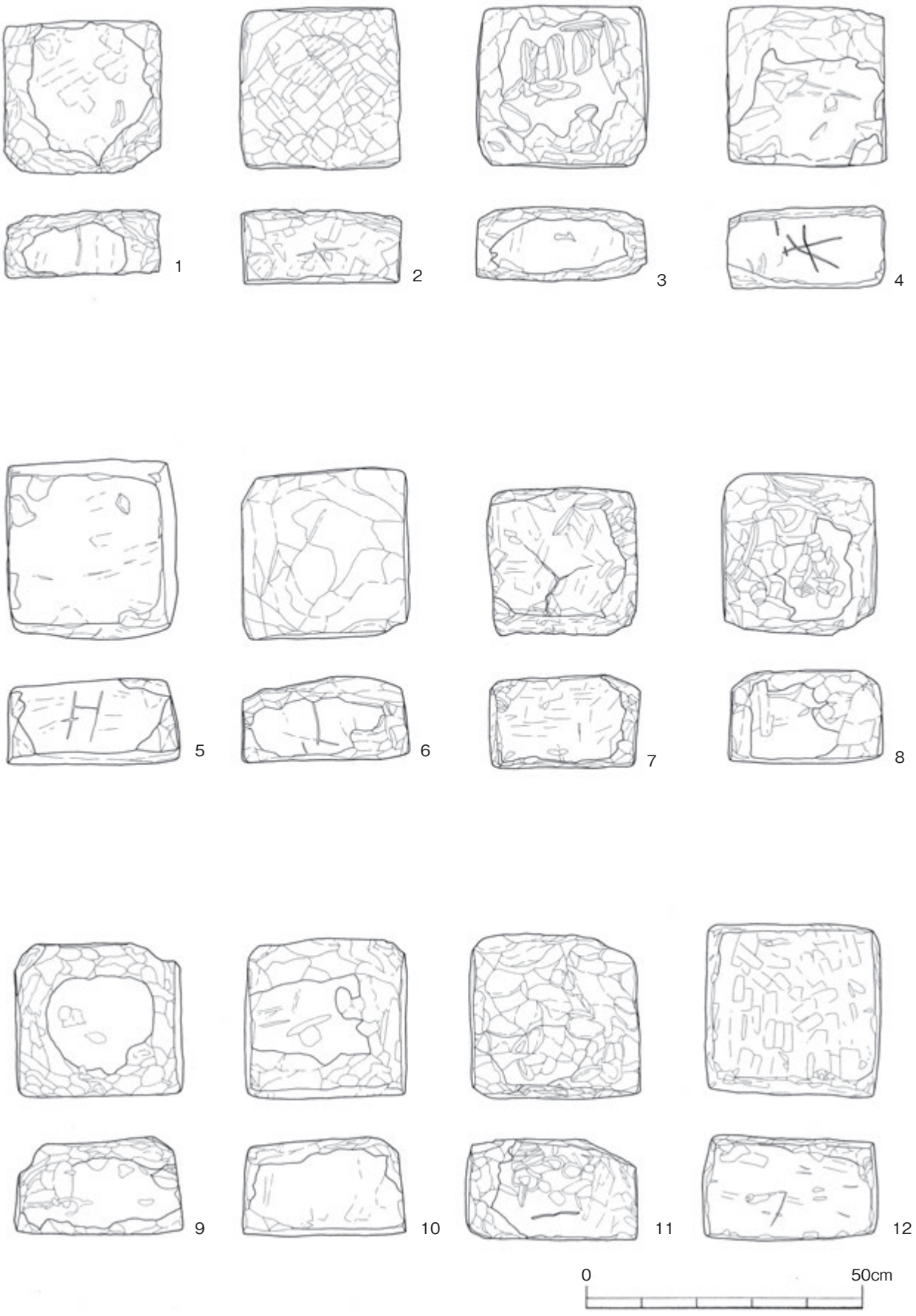


第128図　水輪４

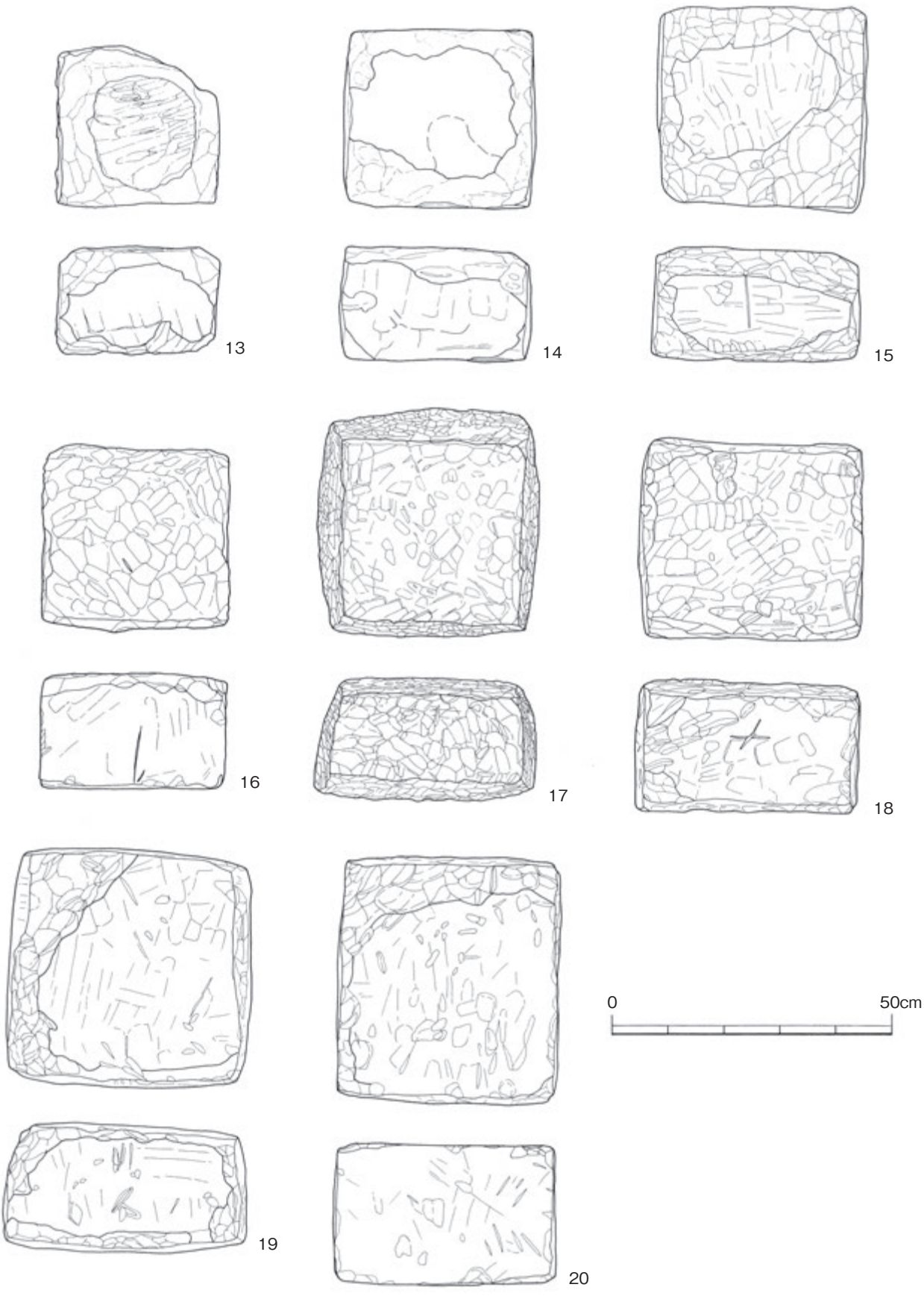
29～31は厚手で胴部最大径が中位にあり，断面形が樽形を呈するものである。32～34は胴部最大径が上位にあり，上面に火輪を受けるための首部が形成されている。35・36は胴部最大径が中位にあり，納骨孔が穿たれている。

地輪（第129～133図）

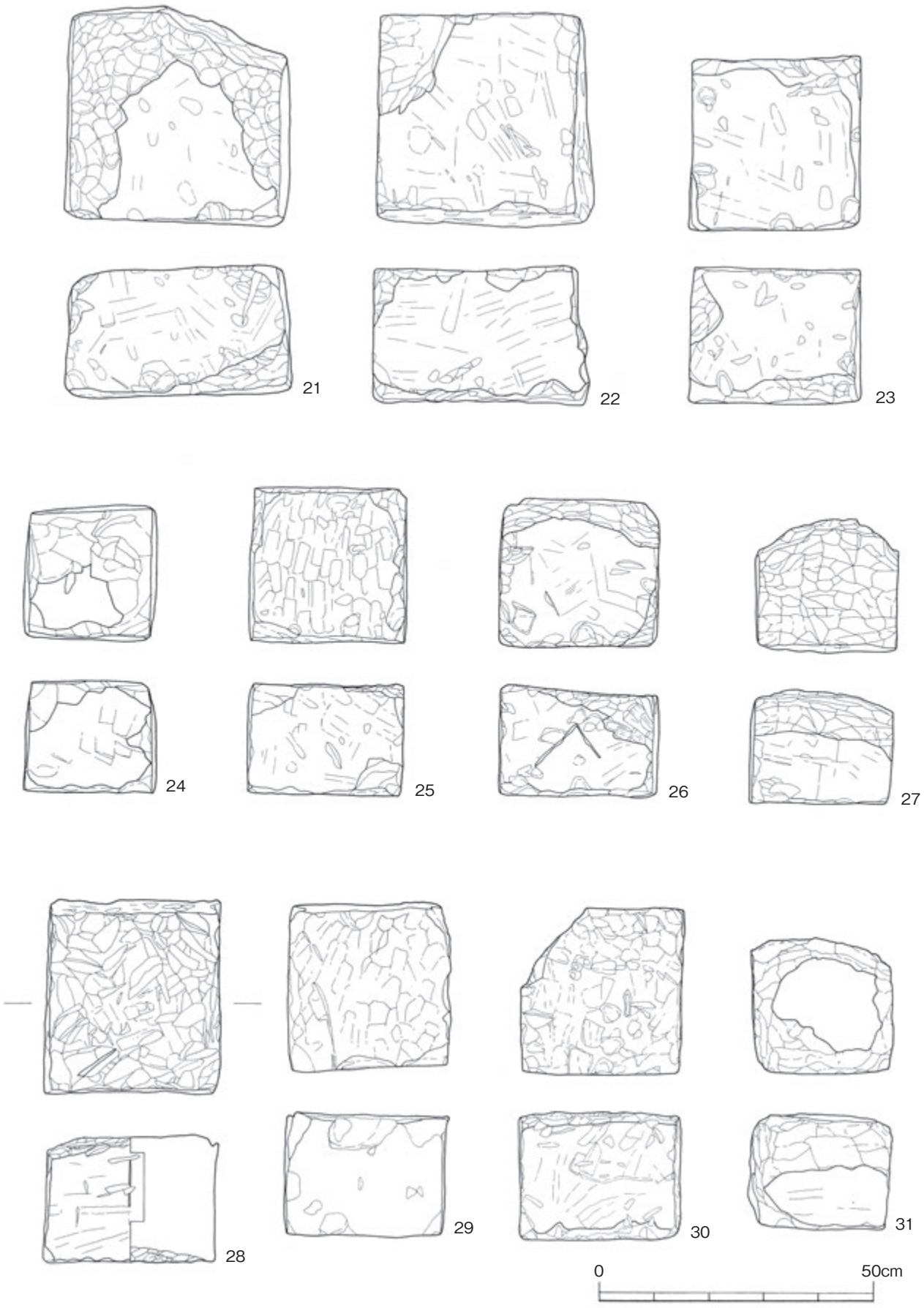
１～45は地輪である。１～６は薄手で断面形が長方形を呈するものである。７～22はやや厚みが増すもので，断面形が長方形を呈している。23～38は厚手で，断面形が正方形に近くなるものである。39は厚手で受け部が穿たれており，上面に花弁状の装飾がみられるものである。40は厚手で，上面に段が形成されている。側面には地輪を表すと思われる「地」の墨書が見られる。41～44は厚手で受け部が穿たれておりいる。44の側面には十字の記号が記されている。工人などの識別の記号と思われる。45は薄手で側面上位に蓮弁状の装飾が見られる。



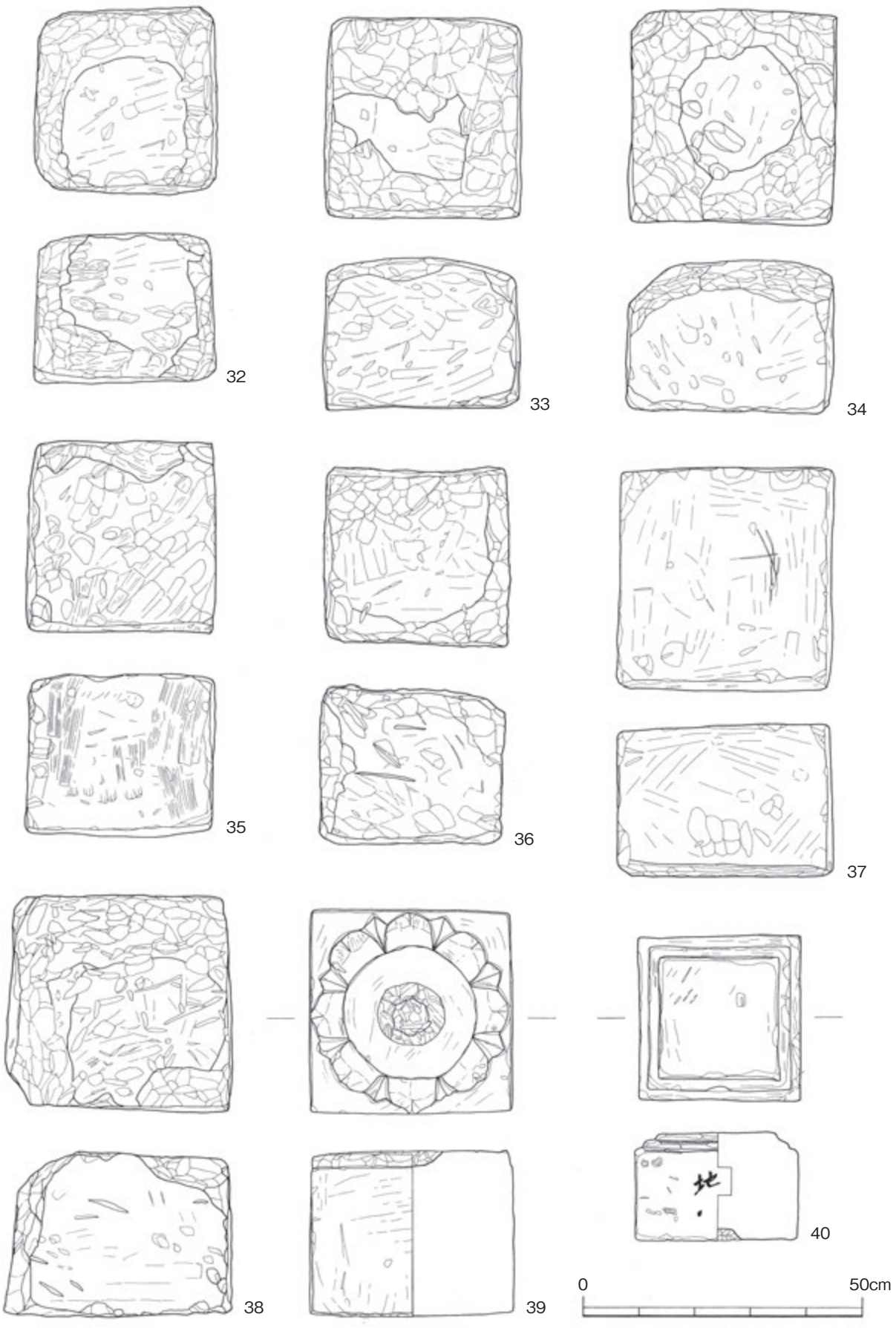
第129図　地輪１



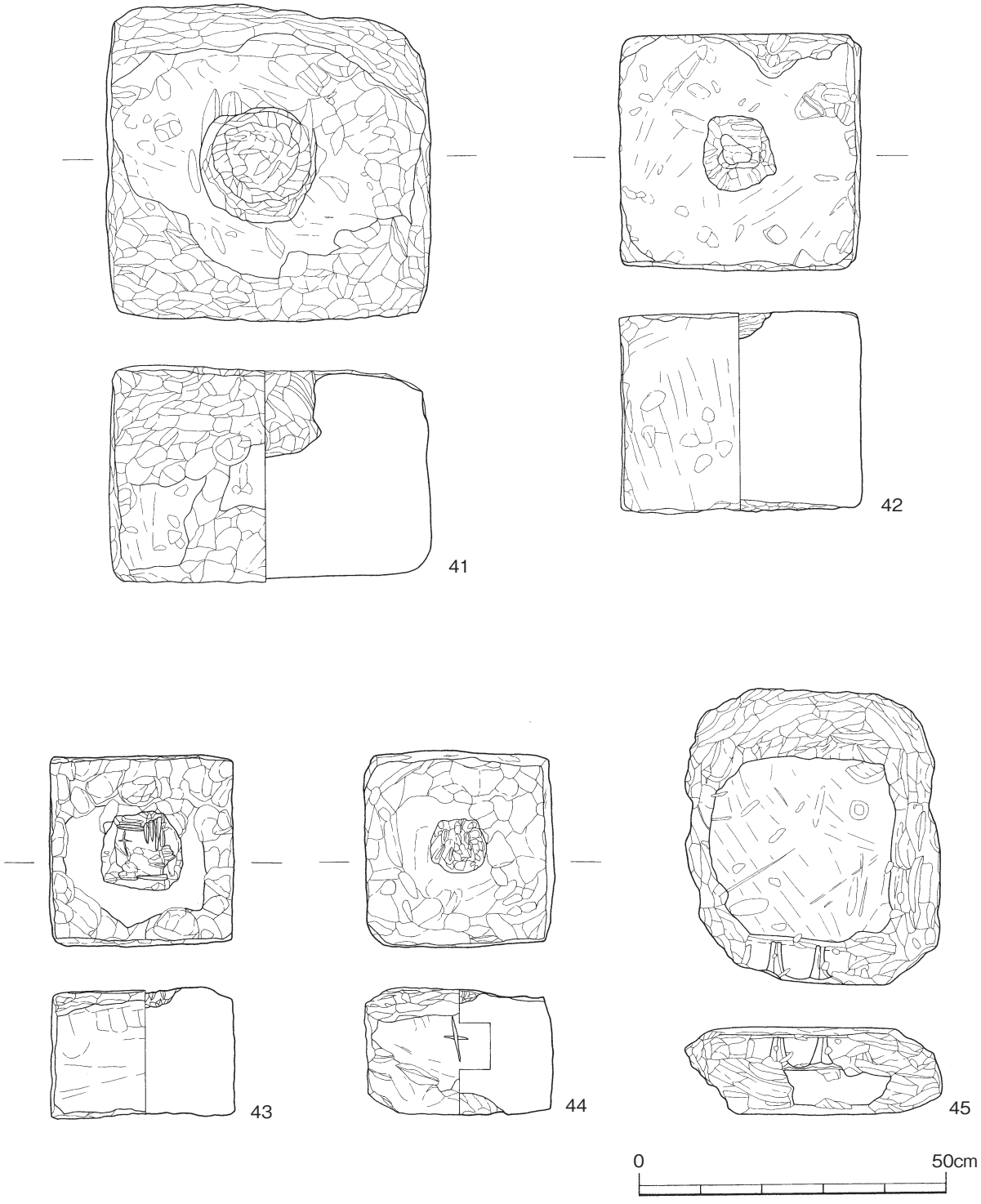
第130図　地輪２



第131図　地輪３



第132図　地輪４



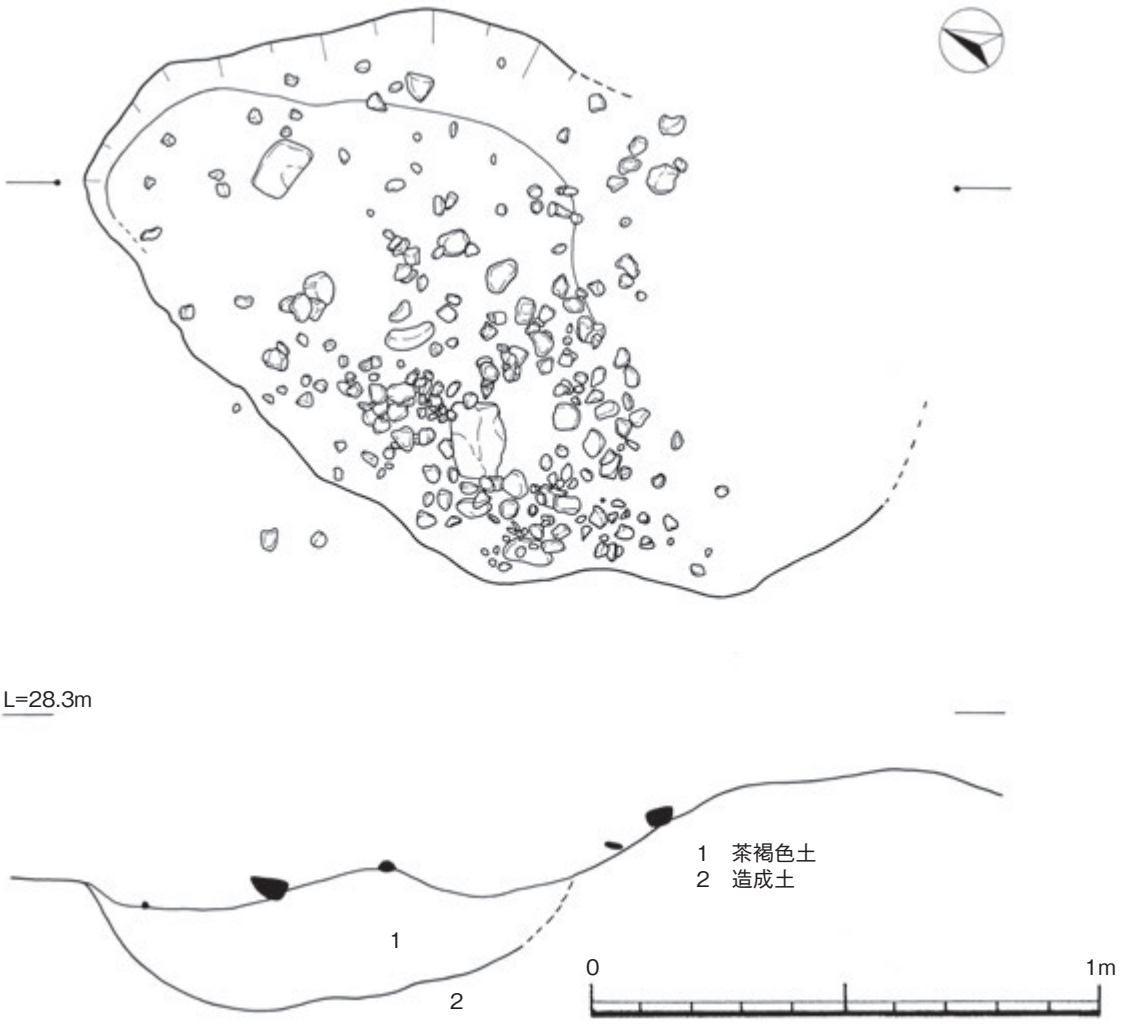
第133図　地輪５

⑤一字一石経塚（第134～147図）

一字一石経塚は全部で15基検出された。K・L－24・25グリッドに集中的に分布している。掘り込みの見られるものと見られないものとがある。石は２～５cm 程のものが主体であるが，一部５～10cm 程の大きさの石も見られる。墨書はほとんど小石に書かれているが，石の総量に比べると圧倒的に少ない。また一字一石経塚１と２～４に関しては，地形と分布のあり方から，本来は同一のものであった可能性が高いと思われる。一字一石経塚１と他の間に石の空白が見られるが，この部分は調査時に区境の壁を作っていた部分であり，一字一石経塚と気づかず小石を除去してしまったためと思われる。中世の遺物が出土しているが，資料が少ないうえ，青磁片とともに陶器片も出土しているものがあること，また一字一石経塚は近世のものが一般的であることなども考慮し，中世以降として扱った。

一字一石経塚１（第134図）

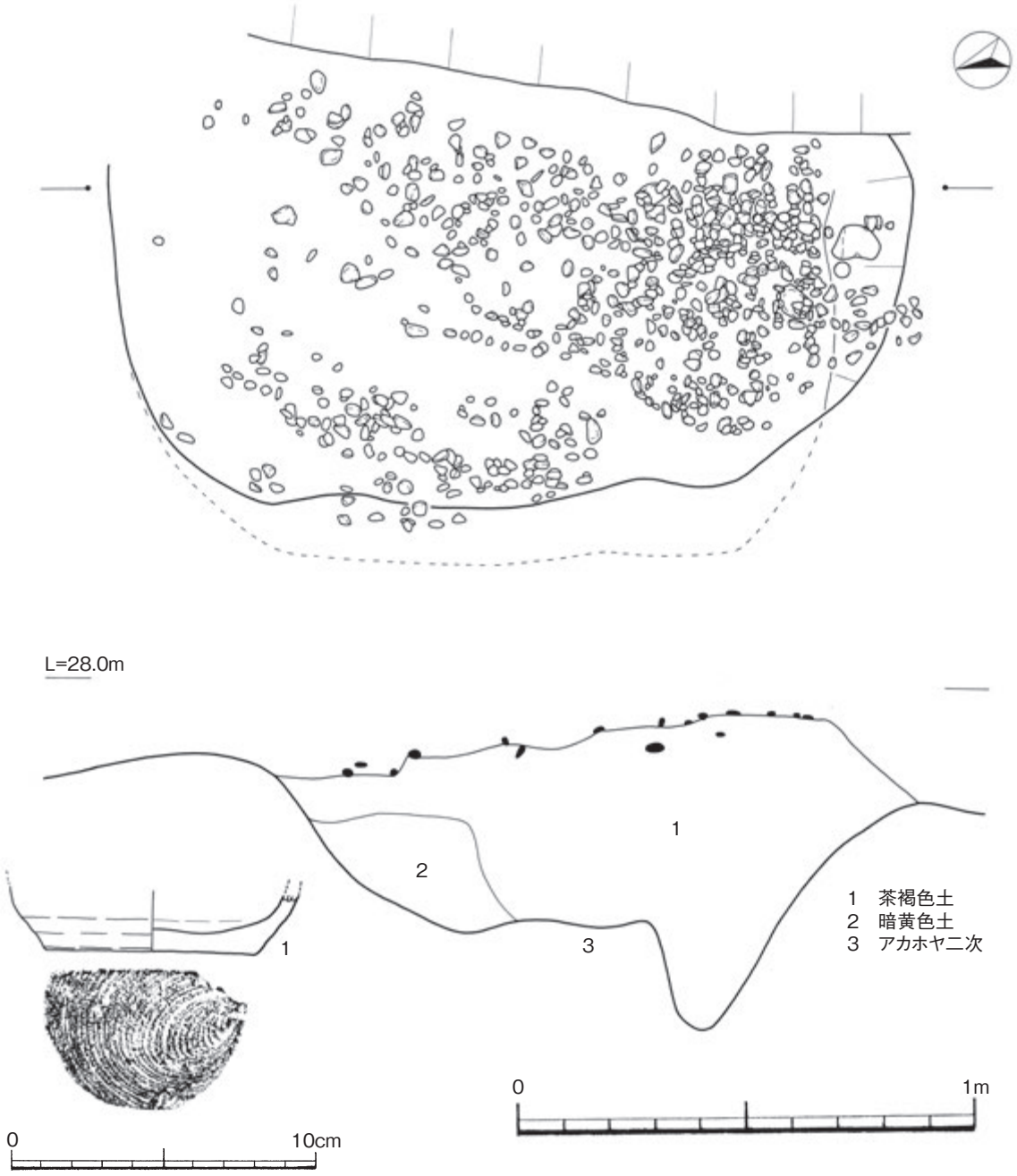
L－24グリッドから検出された。石は長軸1.5m×短軸95cm の範囲に集中しているが，南側は後世の造成によって削平されている可能性がある。底面は西側へ向かって傾斜している。埋土は茶褐色砂質土で，石は西側へ向けて多く，傾斜している上面部分のみに多い。小石の間から土師器の小片が出土した。



第134図　一字一石経塚１



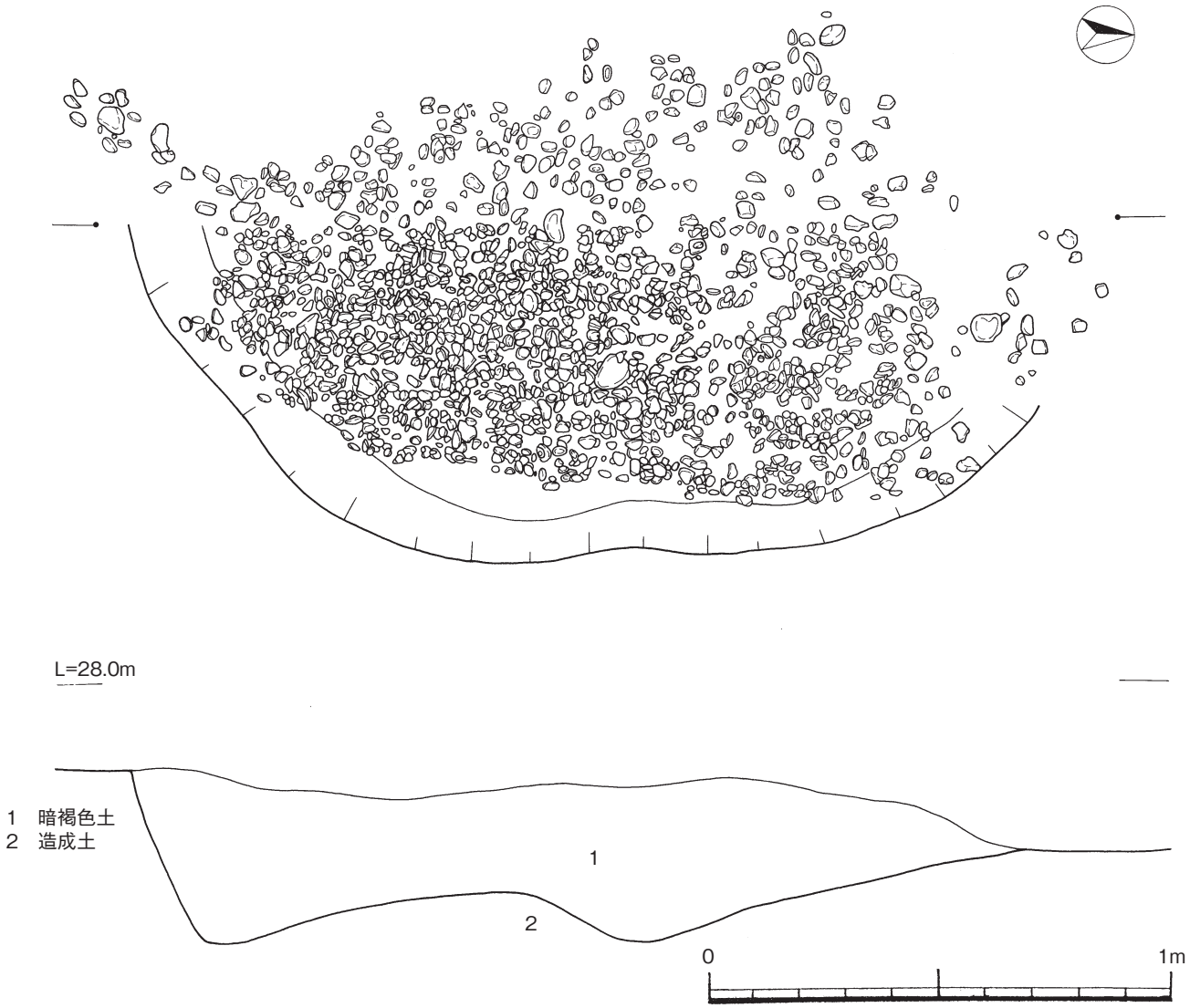
第135図　一字一石経塚２



第136図　一字一石経塚３

一字一石経塚２（第135図）

Ｌ－24グリッドから検出された。長軸2.7m×短軸1.2m程の範囲に石が集中している。地形が西側へ向かって傾斜しており，地形に沿って上面に石が広がっている状態である。石は１～７cm 程の大きさが中心であるが，東側の方に一部30cm程の大型の礫が見られる。埋土は５～20cm程あり，茶褐色砂質土と小石が混在している。



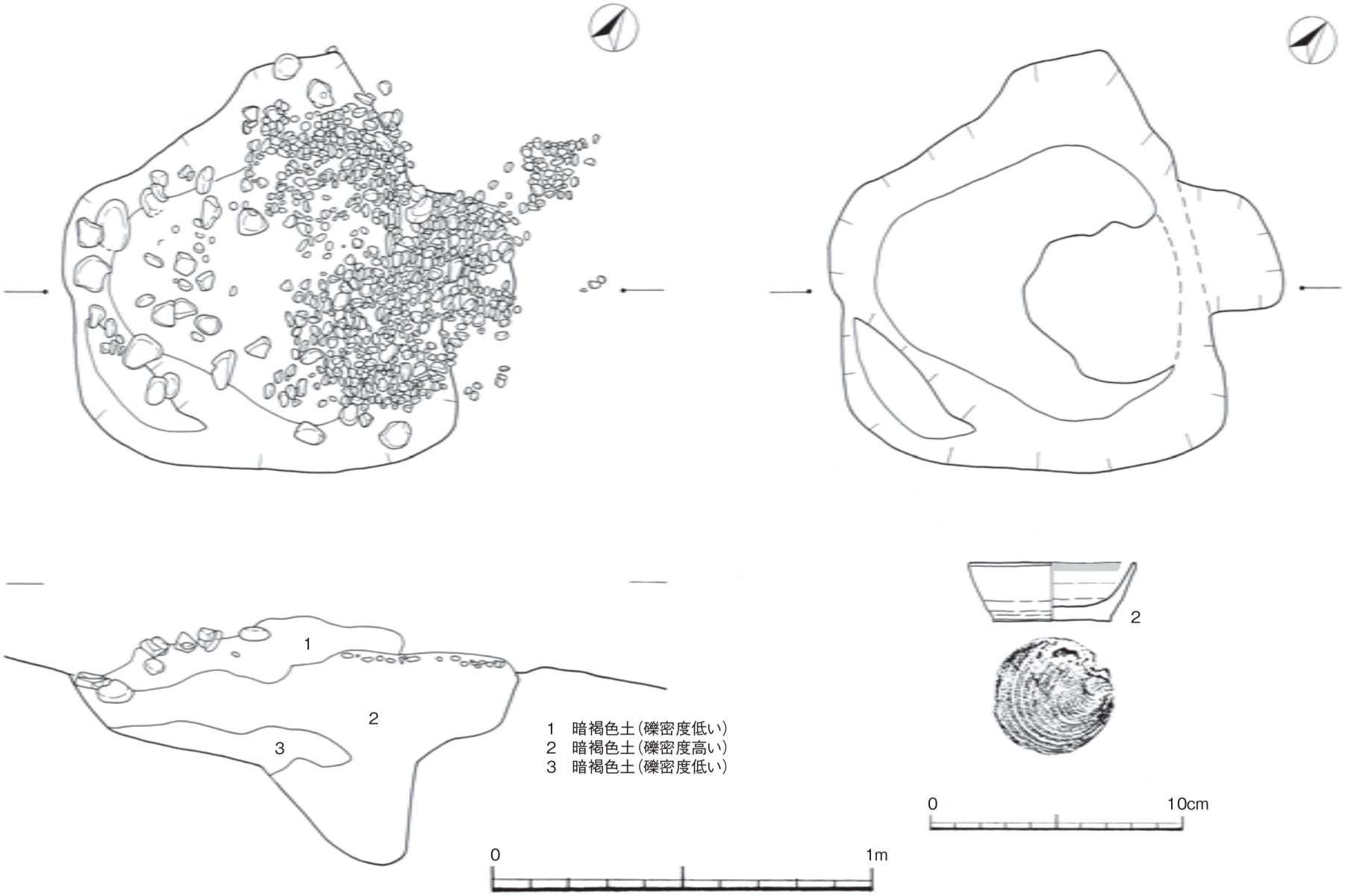
第137図　一字一石経塚４

一字一石経塚３（第136図）

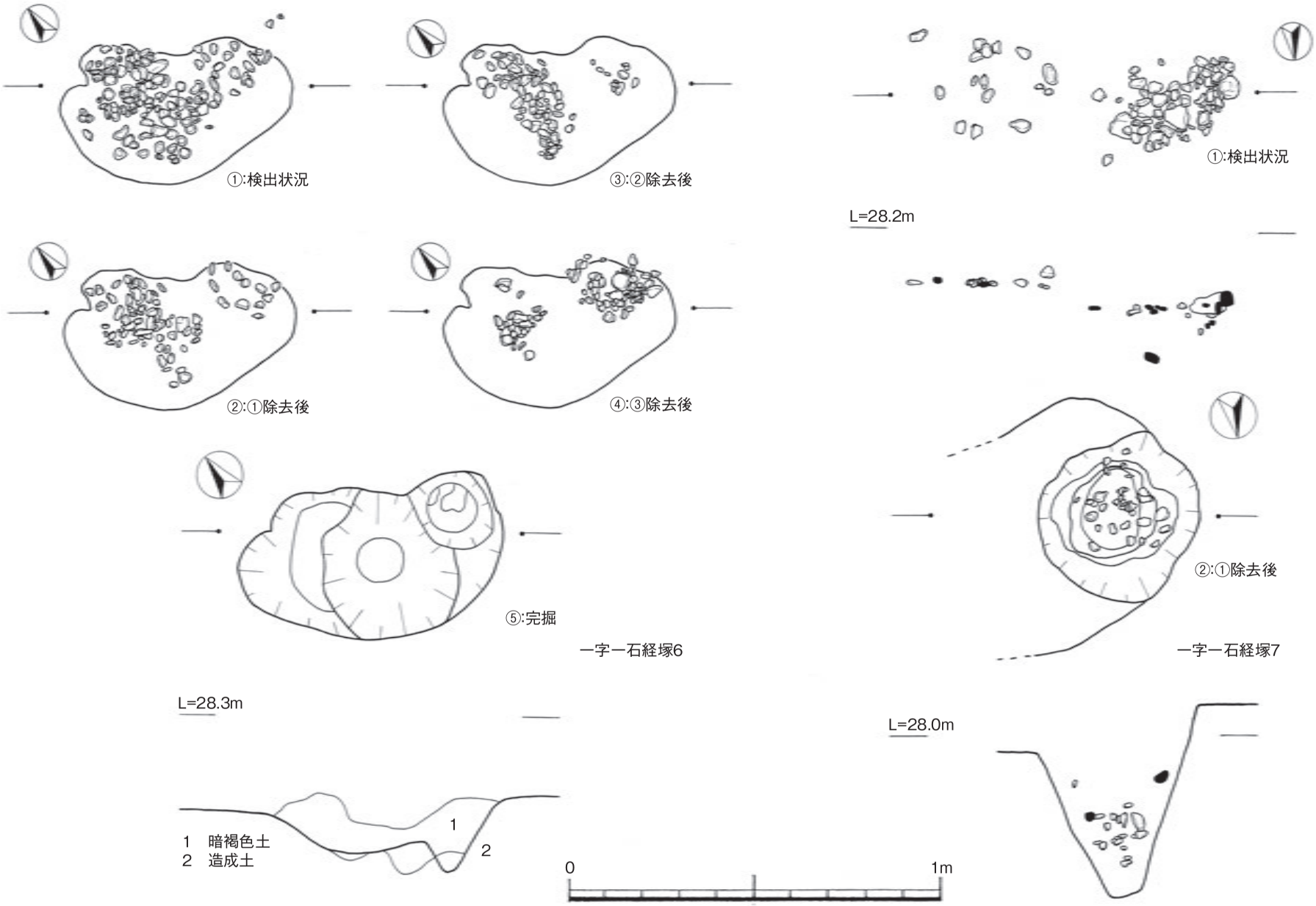
Ｌ－24グリッドから検出された。長軸1.4m，深さ30～50cm 程の掘り込みがあり，茶褐色砂質の埋土が入ったあと長軸1.8m×短軸１ｍ程の範囲に小石が集中している。調査区東側は削平を受けており，本来はまだ大きかった可能性も考えられる。石は１～４cm 程の大きさが中心である。土師器が出土した。１は土師器の坏である。底部から体部へと立ち上がる部分が残存しており，糸切り底である。15世紀後葉～16世紀代のものと思われる。

一字一石経塚４（第137図）

Ｌ－24グリッドから検出された。西側へ向かって傾斜している地形に，長軸２ｍ×短軸1.1ｍ程の範囲で小石が集中している。東側は土坑の掘り込みが確認できるが，地形的な影響からか，西側部分は確認できない。石は１～３cm 程の大きさのものが中心で，８cm 程度の大きさのものが少量認められる。掘り込みの深さは30cm 程あり，埋土は暗褐色土で，小石と混在している。表面の小石と混在して，青磁の小片と陶器片が出土した。



第138図　一字一石経塚５



第139図　一字一石経塚６・７

一字一石経塚５（第138図）

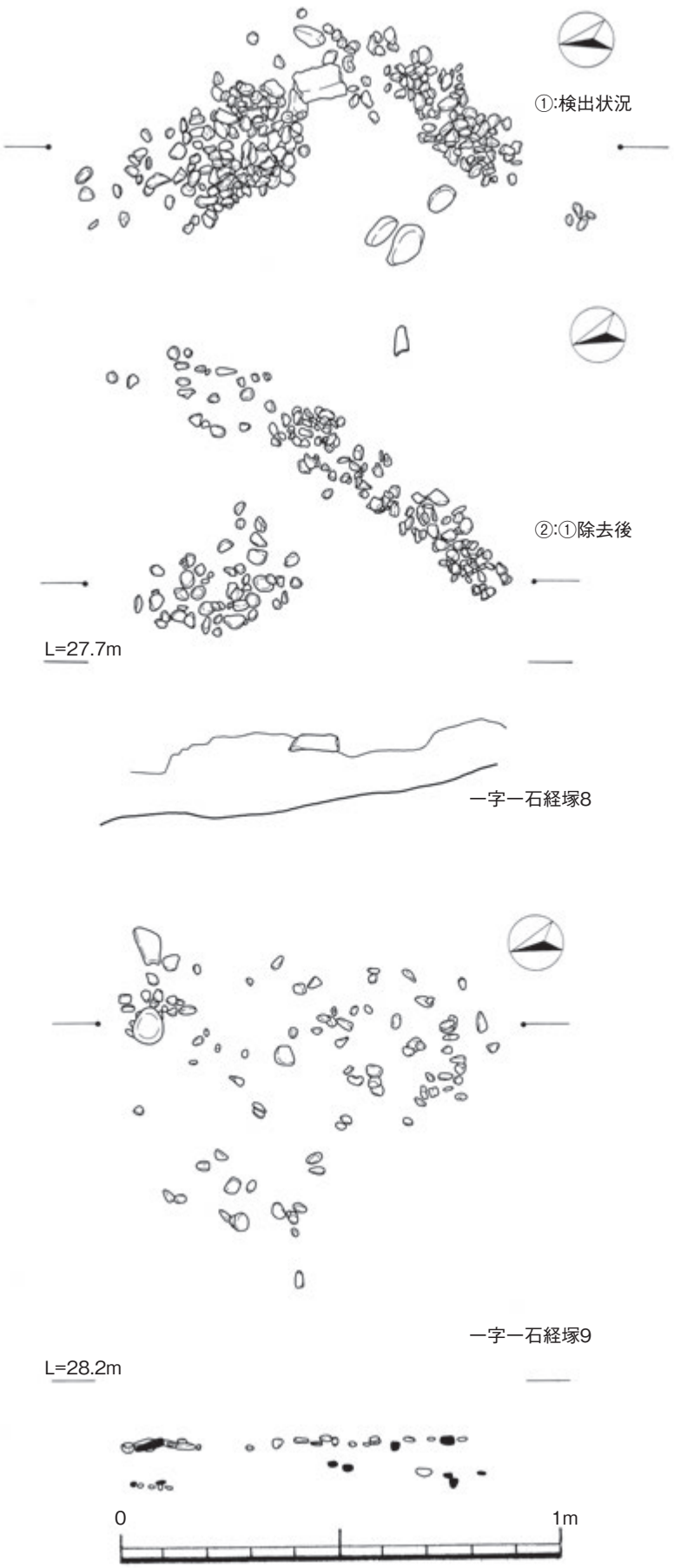
Ｌ－24・25グリッドから検出された。長軸1.1m×短軸１m，深さ55cm程の不整形土坑があり，暗褐色の埋土中に石が集中している。小石の中に「多」とも読める墨書があり，この石の存在によって，この種の遺構が一字一石経塚であることが判明した。石は２～５cm程の大きさのものが中心であるが，小石は東側半分に集中しており，西側半分は７～15cm程のやや大きめの石が散在的に見られる。埋土中から土師器が出土した。２は土師器の皿である。法量は口径6.5cm×器高2.3cm，糸切り底の完形品である。15世紀後葉～16世紀代のものと思われる。

一字一石経塚６（第139図）

Ｌ－25グリッドから検出された。長軸70cm×短軸40cm，深さ10～20cm弱の不整形土坑内に，小石が15cm程の厚さで入っている。土坑内の東側には柱穴状の掘り込みがあり，内部には硬化面が見られるほか，硬化面下にも小石が出土した。

一字一石経塚７（第139図）

Ｌ－25グリッドから検出された。80cm×30cm程の範囲に小石が集まっている。小石は１～６cm程の大きさで，西側半分に集中的なまとまりが見られ，その下は長軸45cm×短軸45cm，深さ30cm程の円形状の土坑がある。土坑内にも小石が入っている。一方，東側半分は散在的であり，プランも不明瞭である。

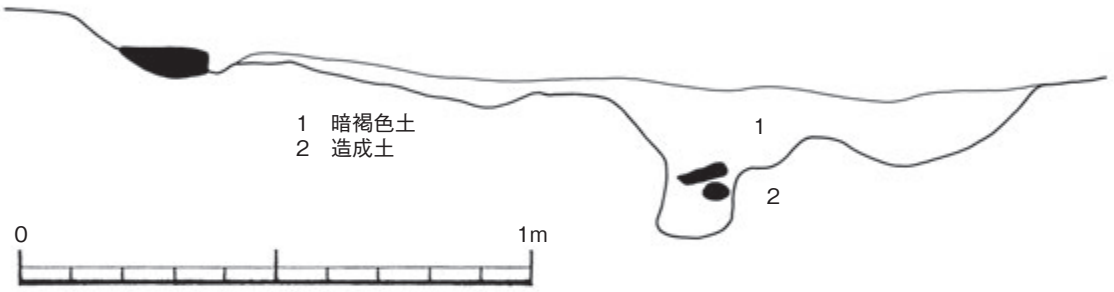


第140図　一字一石経塚８・９



一字一石経塚9

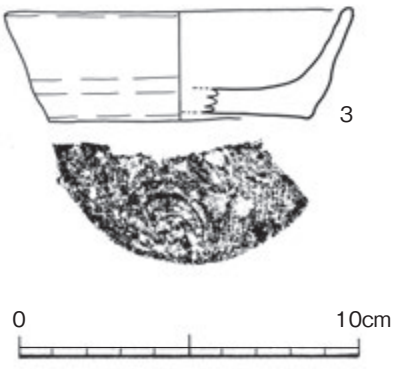
L=28.4m





一字一石経塚10

L=28.9m





第141図　一字一石経塚９（完掘）・10

一字一石経塚８（第140図）

Ｌ－25グリッドから検出された。90cm ×60cm 程の範囲に小石が集中している。小石群の厚さは15cm 程あり，上段の小石を除去するとさらにその下に小石があるといった状況であった。

一字一石経塚９（第140・141図）

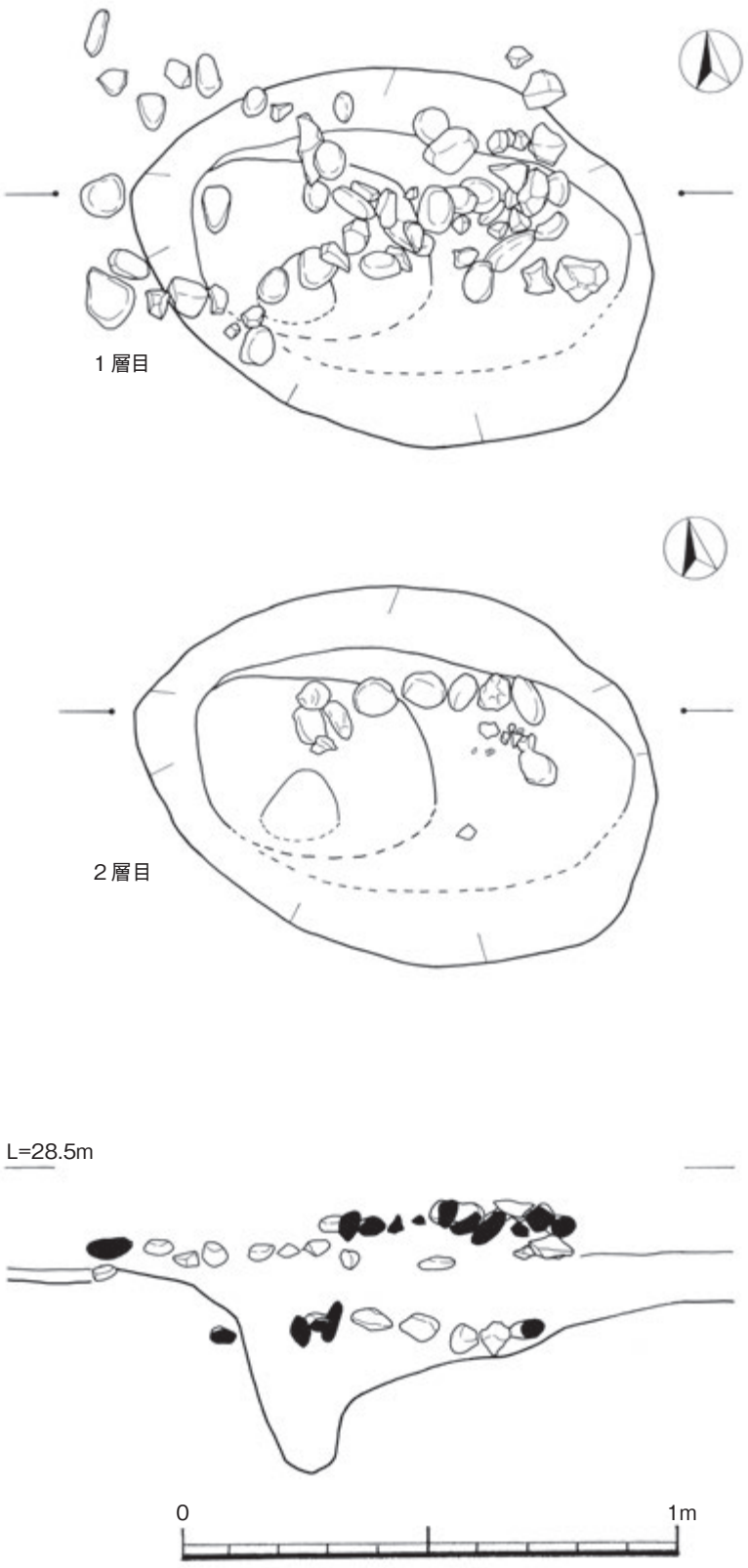
Ｌ－25グリッドから検出された。80cm ×70cm 程の範囲に小石がやや散在的に，10cm 程の厚さで見られた。小石は２～４cm 程のものが中心である。一字一石経塚９と８は隣接しているため，一つのまとまりとも考えられる。また一字一石経塚５とも近い位置にあり，この範囲に小石のまとまりが見られ，一字一石経塚１との位置を見ると直線状に並ぶようである。

一字一石経塚10（第141図）

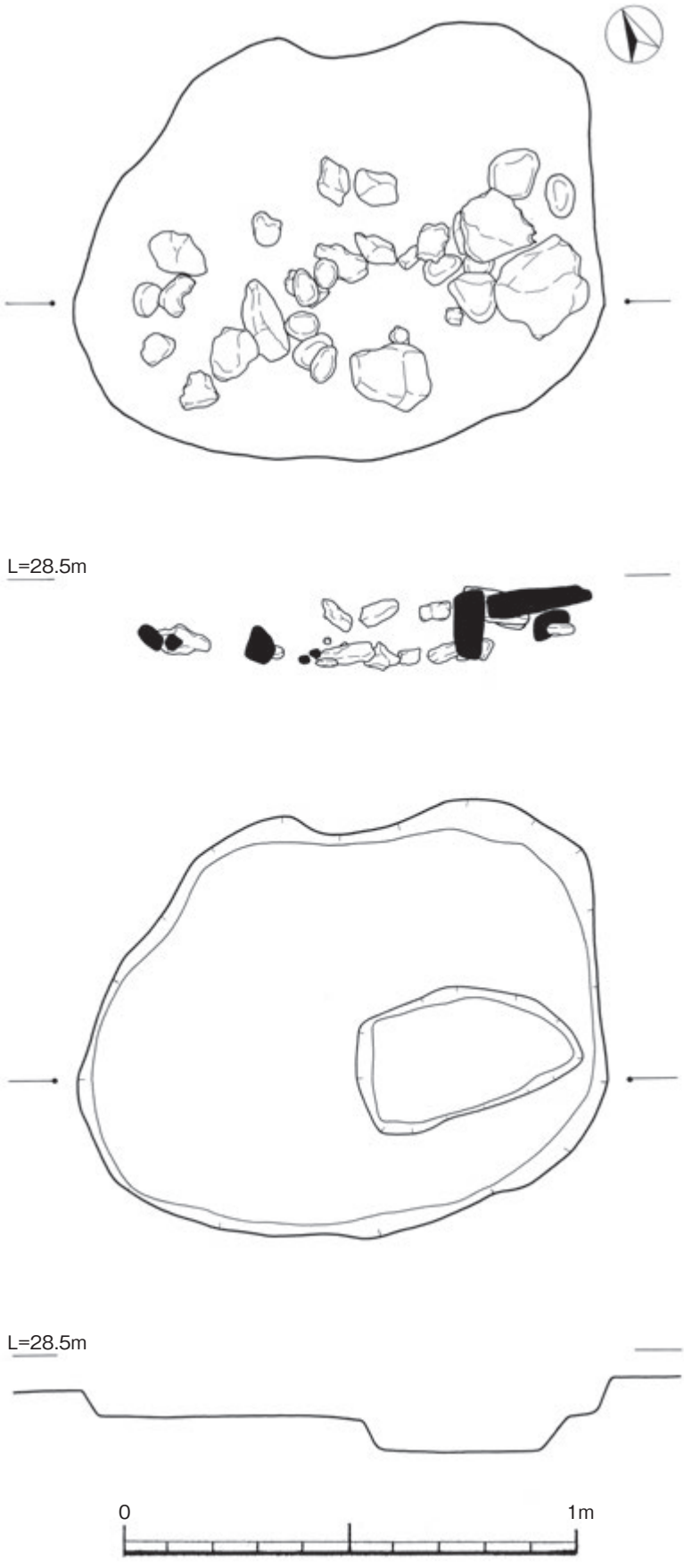
Ｋ－24グリッドから検出された。４～15cm 程の大きさの石が，80cm ×50cm 程の範囲に集中している。すぐ近くから土師器が出土した。３は土師器の皿である。口径10.2cm ×器高3.2cm 程の大きさで，糸切り底である。時期は15世紀後葉～16世紀代のものと思われる。

一字一石経塚11（第142図）

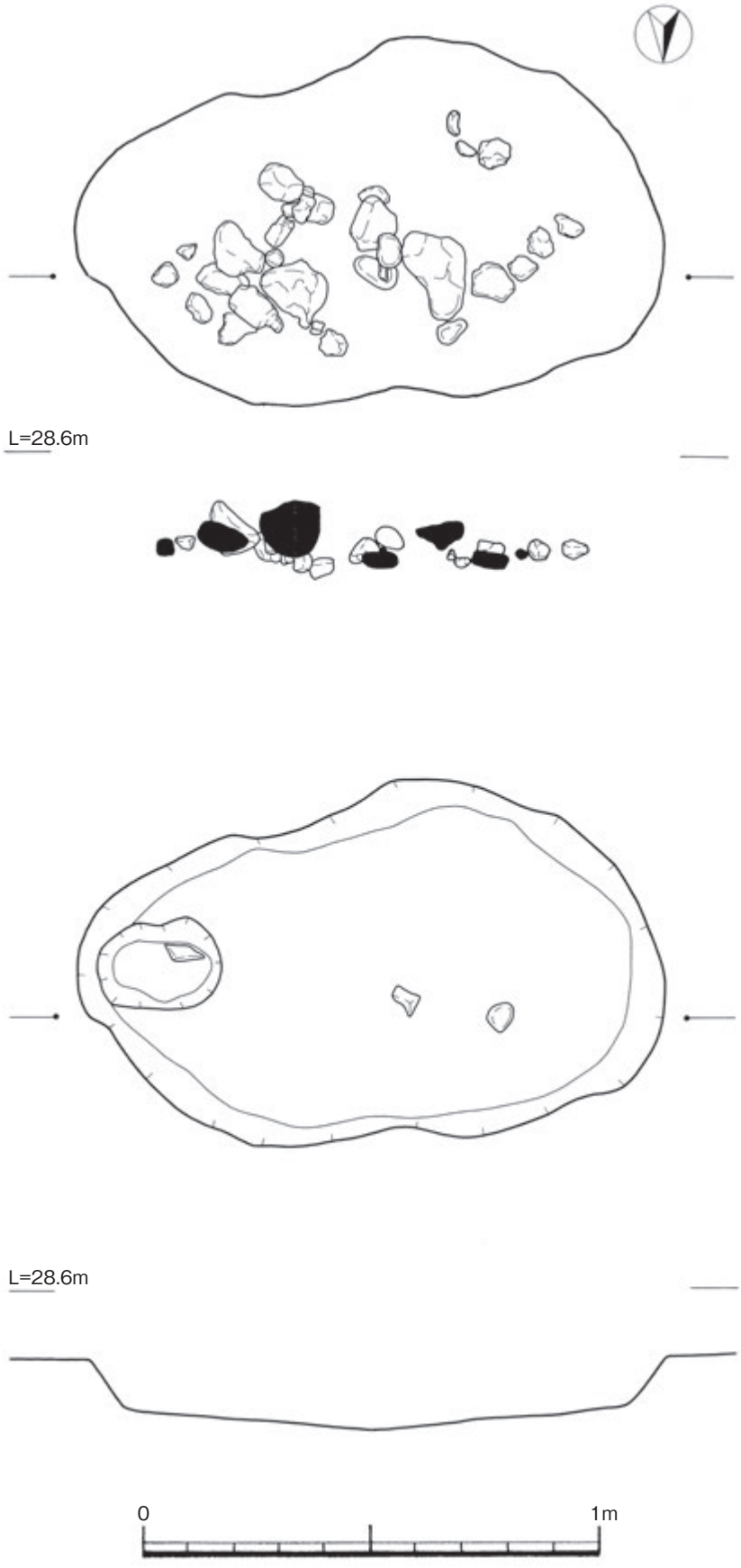
Ｋ－25グリッドから検出された。長軸1.2m × 短軸60cm，深さ40cm 程の楕円形の土坑に，４～10cm 程の石が入っている。石の集中は２層に分けることが可能であり，１層目が土坑検出面で見られ，２層目は土坑内の深さ25cm 程のところで見られる。



第142図　一字一石経塚11



第143図　一字一石経塚12



第144図　一字一石経塚13

一字一石経塚12（第143図）

K－25グリッドから検出された。1.2m×90cm，深さ15～25cm程の範囲に5～20cm程の石が集中している。厚さは15cm程である。石を除去したところ，長軸1.2m×短軸90cmの不整形の土坑が検出された。土坑内の東側部分が段掘りとなっている。

一字一石経塚13（第144図）

K－25グリッドから検出された。1.3m×70cm程の範囲に4～20cm程の石が集中している。石を除去したところ，長軸1.3m×短軸80cm，深さ15cmの不整楕円形の土坑が検出された。

一字一石経塚14（第145図）

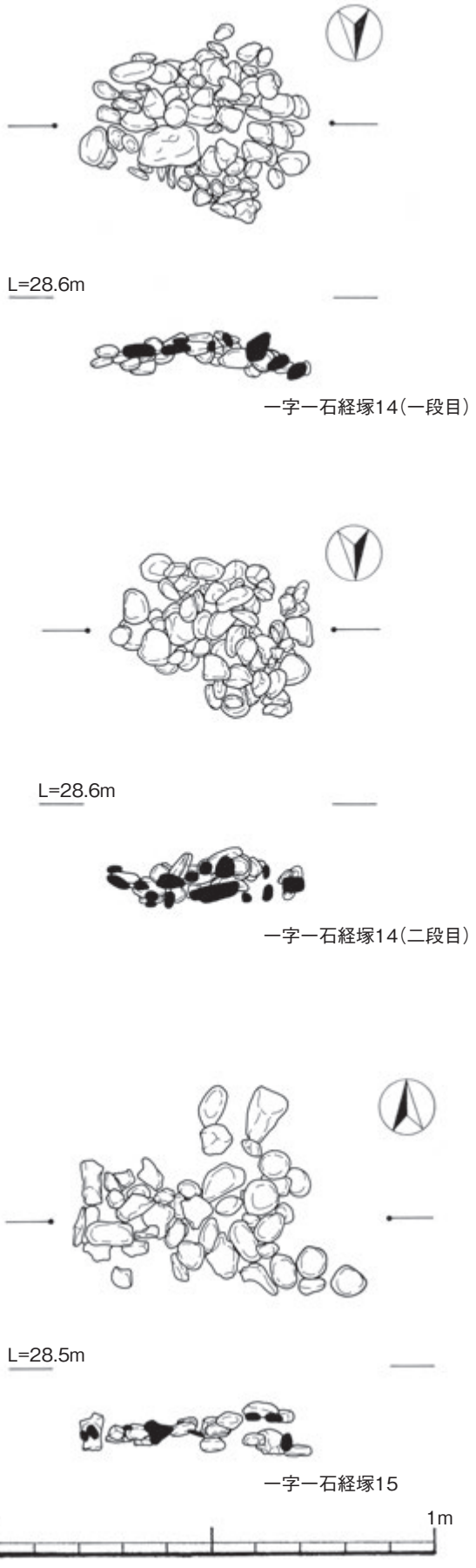
K－24グリッドから検出された。50cm×40cm程の範囲に3～10cm程の石が集中している。厚さは15cm程あり，石の間から土師器片が出土した。掘り込み等は見られなかった。

一字一石経塚15（第145図）

K－25グリッドから検出された。60cm×40cm程の範囲に4～10cm程の石が集中している。掘り込み等は見られなかった。

（2）出土文字

一字一石経塚からは20,680点の石が出土しており，全体量から見れば少量ではあるが，墨書された経石が確認されている。経石は判読が不明なものも多かったが，47点を図化した（第146・147図）。文字に関しては，確実に判読できたものが25点ある。基本的に一字1点ずつであるが，「生」と「世」に関しては2点ずつ確認できた。判読不明なものは，くずし字的なものや梵字のようなものがあった。判読可能な文字の内容に関しては「まとめ」の項でふれることにする。



第145図　一字一石経塚14・15



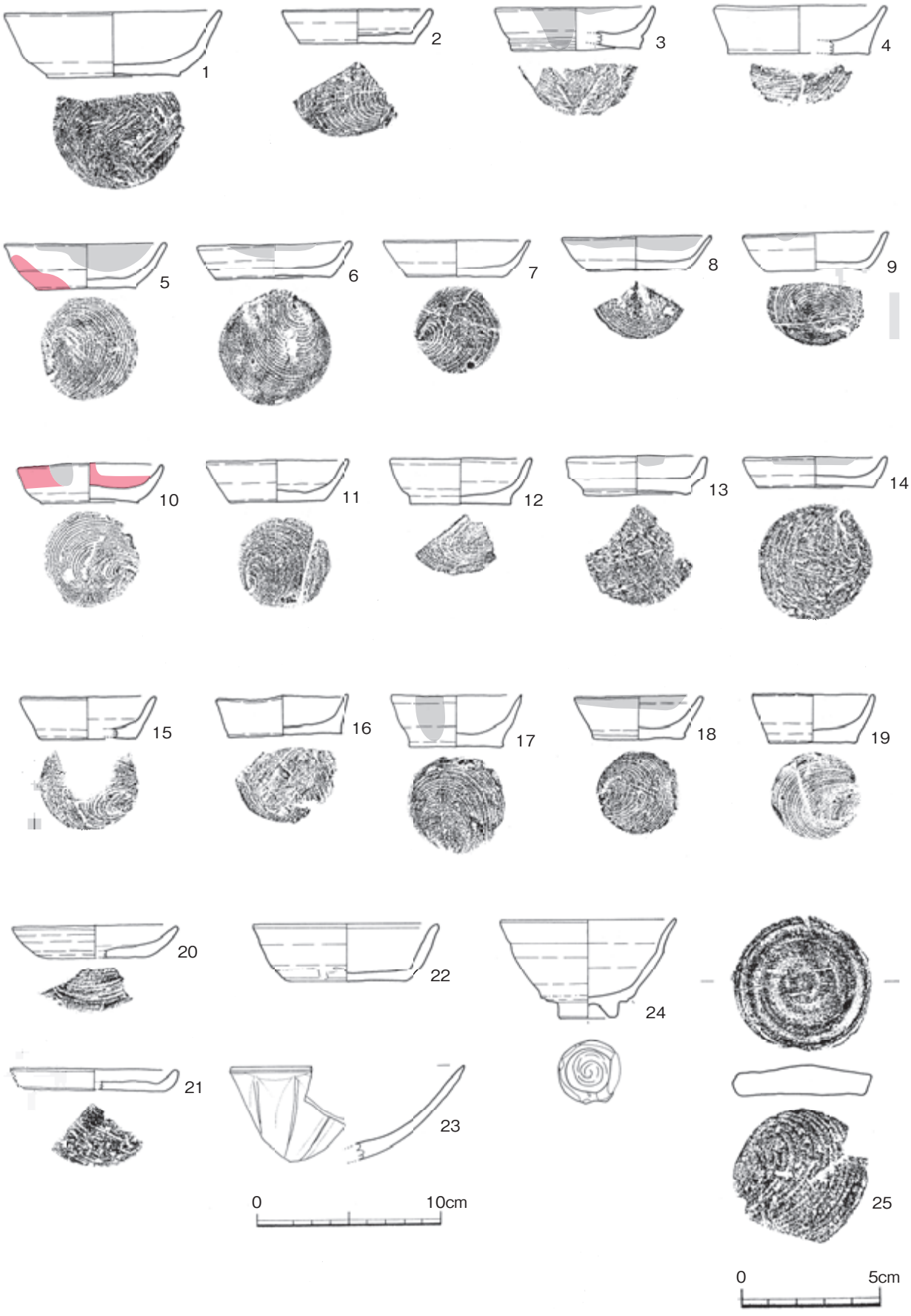
第146図　一字一石経１



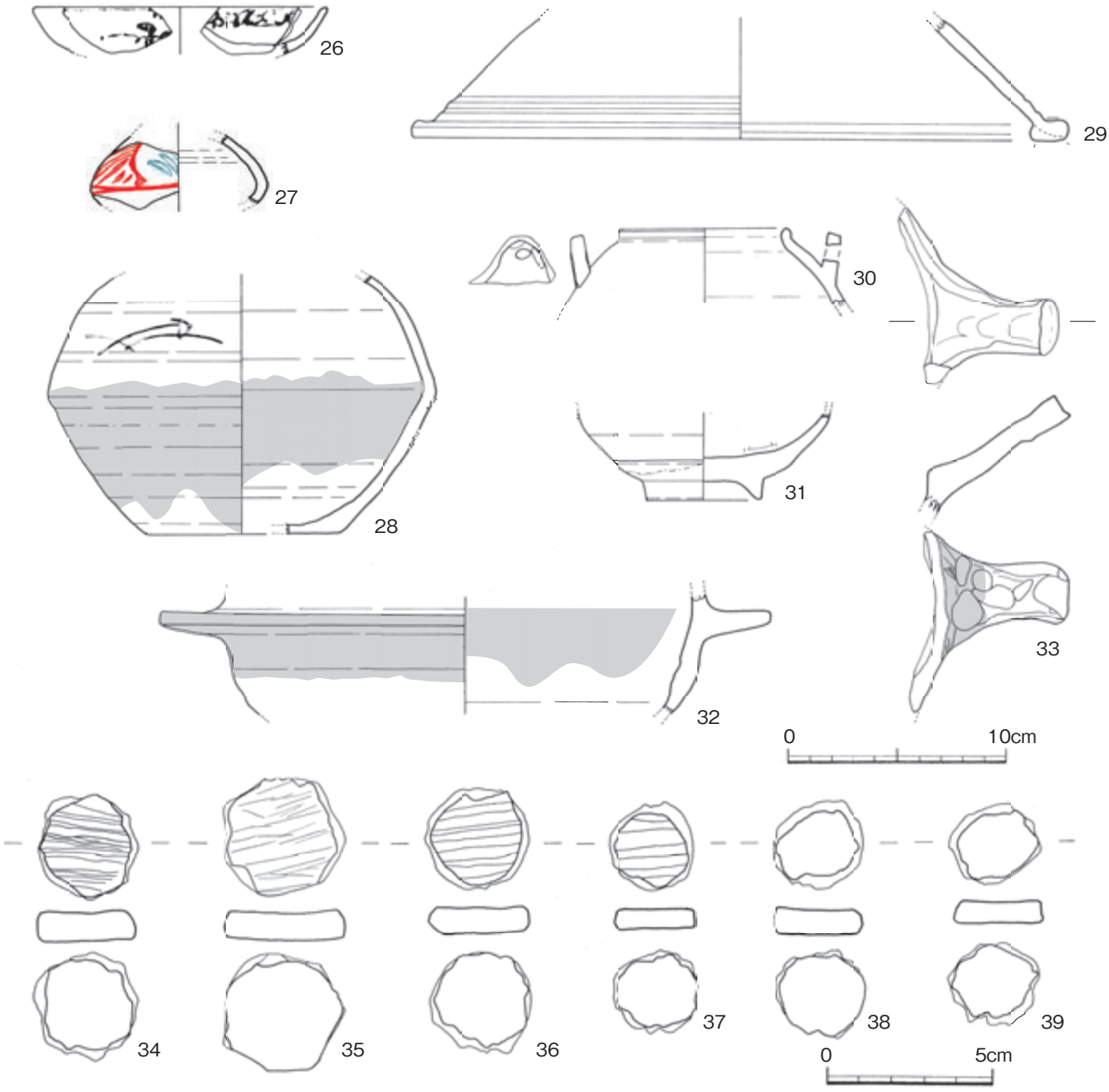
第147図　一字一石経２

（３）遺物（第148・149図）

１～21は土師器である。15世紀後葉～16世紀末にかけてのものと思われる。１は坏で，底部からの立ち上がり部分に強めのヨコナデが施され，凹むものである。２～21は皿である。３・５・６・８・９・10・13・14・17・18は口縁部周辺にススの付着が見られ，灯明皿として使用されたと思われる。うち５・10には一部に朱が認められるものである。20・21は口径が大きく，器高の低いものである。22は白磁の坏である。口縁部に口剥げが見られ，無文のものである。13世紀後半～14世紀前半頃のものと思われる。23は龍泉窯系の碗で，鎬蓮弁の見られるものである。蓮弁は盛り上がりが弱くなっており，退化傾向が伺える。15世紀頃のものと思われる。24は萩焼の碗である。25は土



第148図　中世の遺物（K 調査区）（1 ～24：S=1/3，25：1/2）



第149図　近世の遺物（K 調査区）（26～33：S=1/3，34～39：S=1/2）

師器の坏を転用したメンコである。糸切りの痕跡が認められる。26は染付の皿である。口縁は丸みをもっており，外面には草文が描かれている。27は色絵である。胴部片のため全形は不明だが，徳利のような形状と思われる。28は胴部下半にススの付着が認められ，煮沸具系の器種と思われる。胴部が算盤形の形状を呈するものである。肥前か関西系の可能性がある。29は薩摩焼の蓋である。口縁は断面が斜めに倒れたＴ字状を呈するもので，口縁上には沈線が２条廻っている。30は薩摩焼の土瓶である。復元口径８cm で，肩部に把手が付く。31は薩摩焼の碗である。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが認められる。姶良加治木系に属すると思われる。32は羽釜である。胴部部分で，鍔が付いている。鍔の下は強いヨコナデによって凹んでいる。内外面にススの付着が認められる。33は焙烙の把手である。ユビオサエが多く認められ，裏面にはススが付着している。34～39はメンコである。うち34～37は擂鉢を転用したものである。

第５節　Ｐ調査区の概要

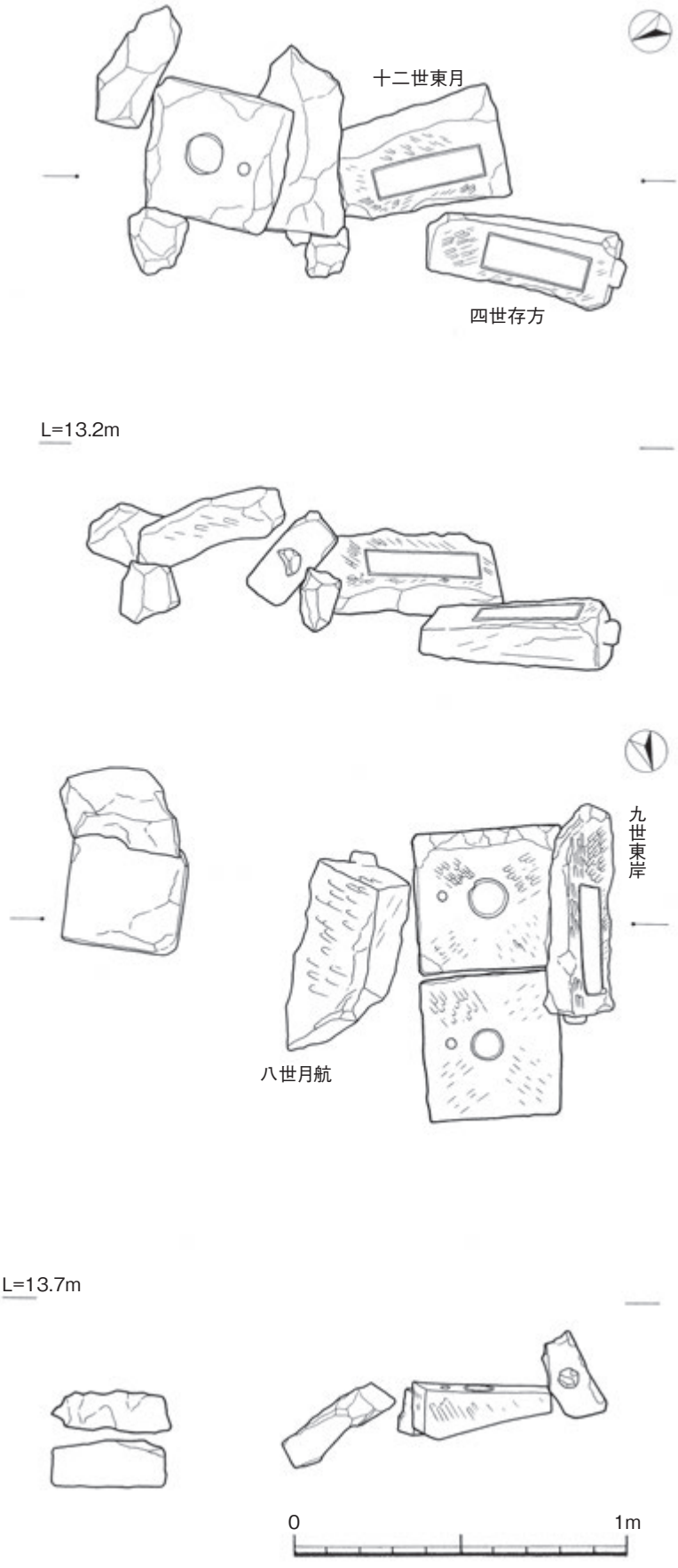
Ｐ調査区は低地部のＲ調査区に隣接しており，低地部よりやや高い微高地に立地する。ここからは167基に及ぶ近世墓群が検出されたほか，近世墓群に隣接する場所から，良福寺住職の墓石が検出されている。石材は石切場のものと一致する。無縫塔のいわゆる坊主墓とは異なり，方形を呈しているのが特徴である。

①良福寺住職墓石群（第150～153図）

Ｏ－23・24グリッドから検出された。近世墓群に隣接しており，近世墓から一段低くなった所が1.3～3.5m程の矩形のテラス状になっている。そこに良福寺の住職名を刻んだ墓石が４基検出された。それぞれ２基ずつで群をなしている。墓石の背後は凝灰岩の採石屑や自然礫・五輪塔・宝塔・墓石などの転用等によって石積みがされている（第151図）。このテラスのコーナー部分からほぼ真西に串木野城があり，方位と墓石の立地に意味がある可能性も考えられる。墓石の周辺を精査したが，墓壙等は確認されなかったため，拝み墓のようなものであったと思われる。

良福寺住職墓石群１（第150～152図）

位置としては東側の群である。台石からはずれ，やや散在的な状態で２基検出された。一つには「四世存方大和尚」，もう一つには「十二世東月大和尚」の銘が刻まれていた。周囲には石積みのものと思われる礫が散在していた。１は「四世存方大和尚」の墓石である。全長55cm×幅18cmで，厚さ



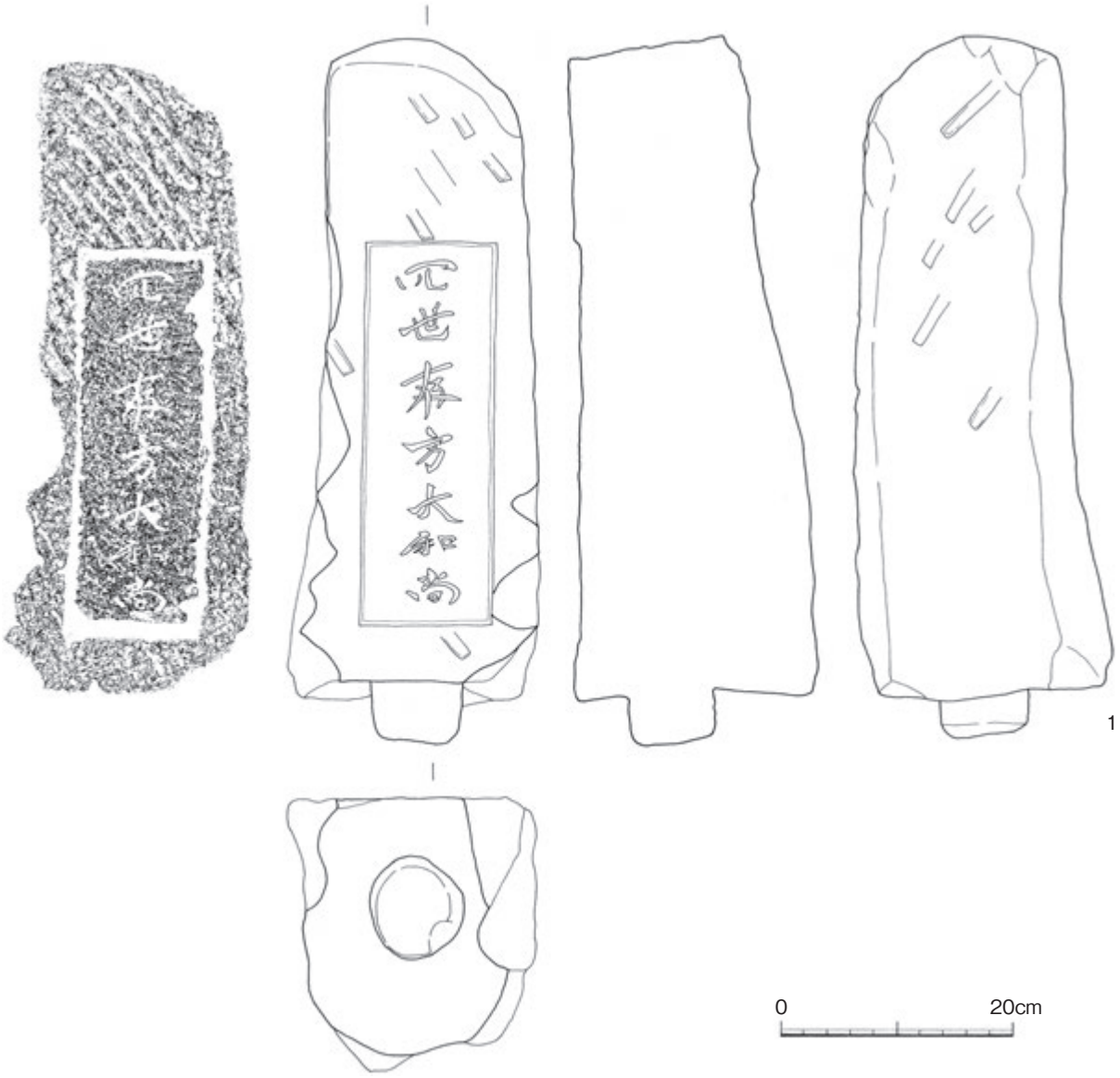
第150図　良福寺和尚墓出土状況１







第151図　良福寺和尚墓出土状況２

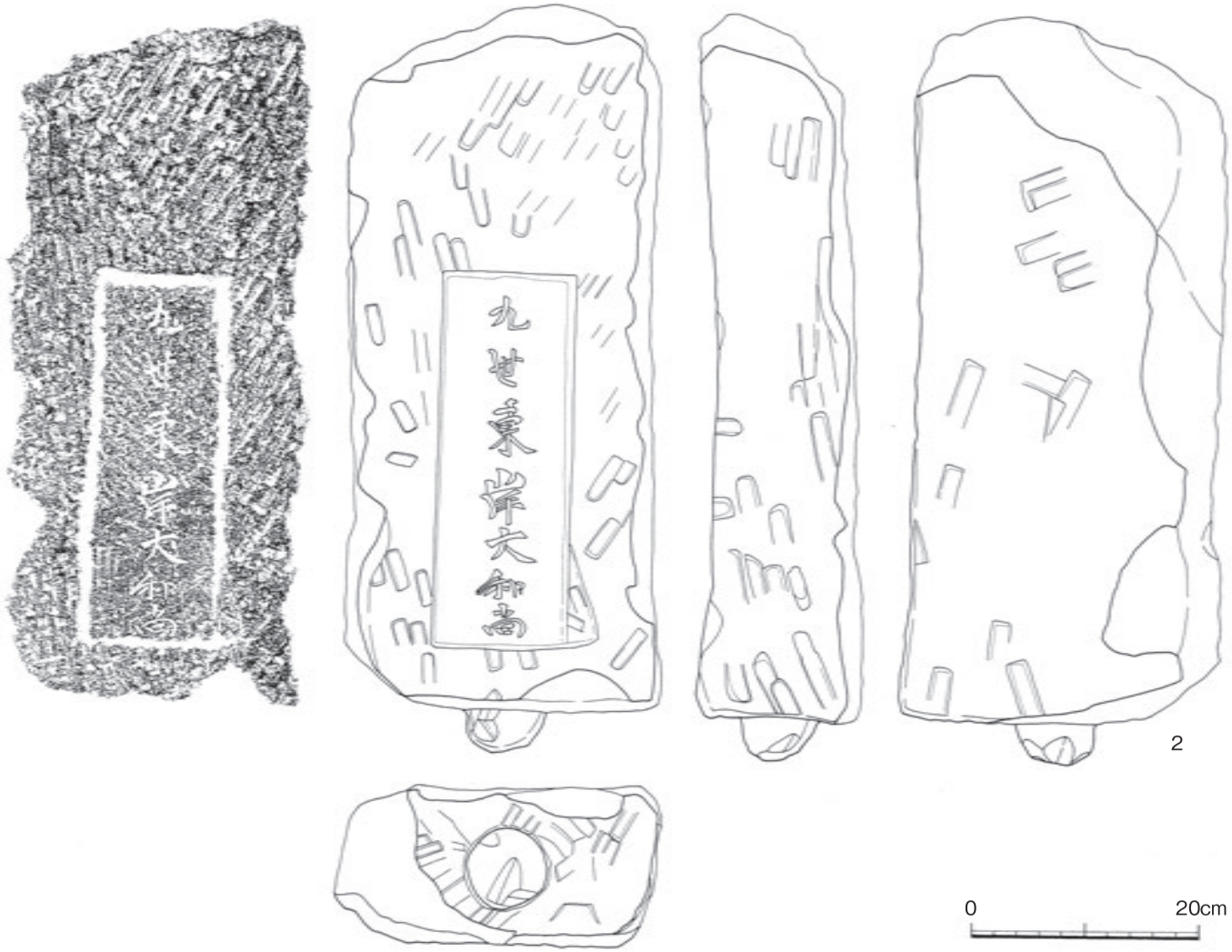


第152図　四世存方大和尚墓石

は18cm 程ある。表面はノミで平坦に整えられ，銘文を刻んでいる。裏面はノミの加工痕は見られるが，平坦に整えることはなく粗加工である。底面には台石に差し込むための突起が作られている。

良福寺住職墓石群２（第150・151・153図）

位置としては西側の群である。45cm 程の方形の台石が２つ並んであり，その両側に「八世月航和尚」，「九世東岸大和尚」の銘が刻まれた墓石が覆うような状態で検出された。墓石の北側と西側には礫が方形状に集積した箇所があり，墓壙の可能性が想定されたが，精査の結果，礫集積の下に明確な掘り込みが認められず，石積みの裏込めのようなものである可能性が高いと判断した。２は「九世東岸大和尚」の墓石である。全長60cm ×幅25cm で，厚さは14cm 程ある。表面はノミで平坦に整えられ，銘文を刻んでいる。裏面もノミの加工痕が認められ，粗加工ではあるがやや平坦気味に整えられている。底面には台石に差し込むための突起が作られている。



第153図　九世東岸大和尚墓石

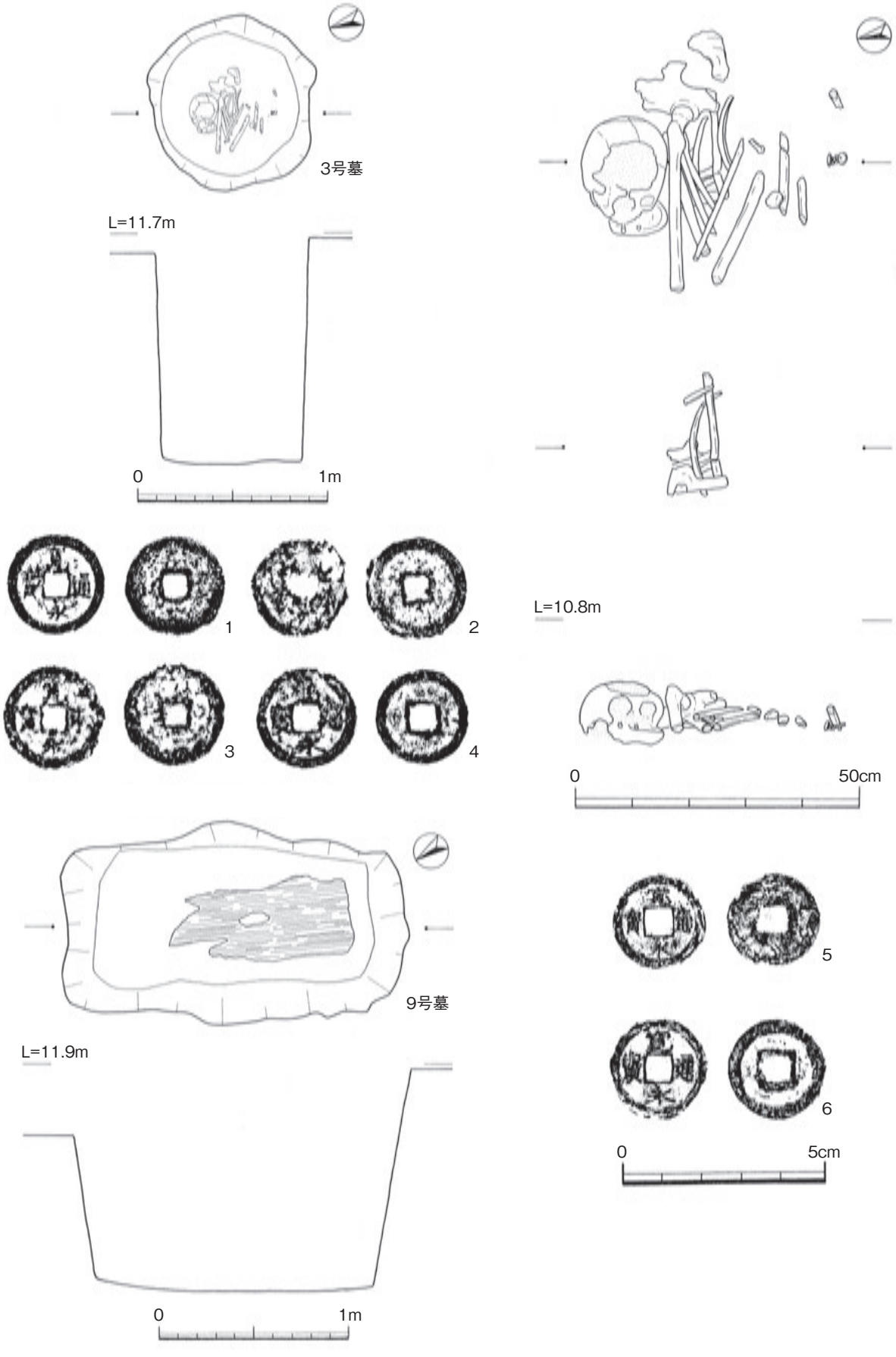
②近世墓群（第154～170図）

O・P－25・26グリッドから検出された。調査前は草が生い茂る空き地となっていた。墓壙は大部分が表土下のシラス面で検出されたが，北西側は低地部Ⅳ層の黒色土，Ⅲ層のアカホヤが検出面となり，南西側は造成土が検出面である。南西側の造成土部分は，墓域を広げるために，山裾部を埋め立てた可能性が考えられる。検出総数は167基である。うち９基は近現代墓であった。内訳は，方形墓壙127基，円形墓壙38基，不明２基である。大部分の墓から六道銭が出土したほか，キセルなどの副葬品も見られた。また人骨が遺存している例もあった。これら167基中人骨・副葬品等の見られた26基を抽出し掲載した。全167基の内容に関しては観察表にまとめたので，そちらを参照していただきたい。

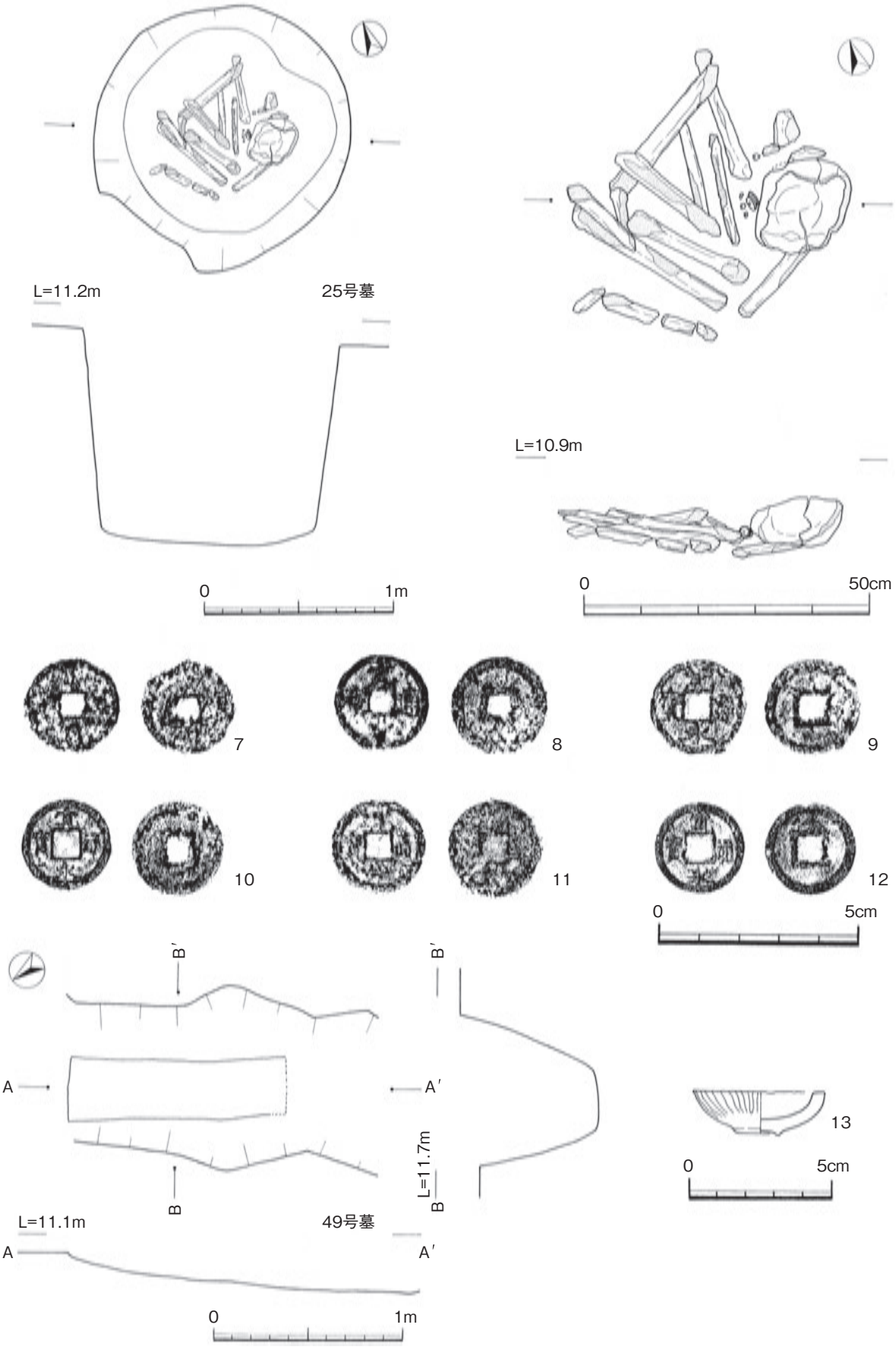
柊城跡近世墓データ（P 調査区）①

〈凡　例〉◎：良好、○：普通、△：悪い、×：存在せず　　切り合い関係：146/145：146号が145号を切っている　　4・5・63：切り合い順序不明

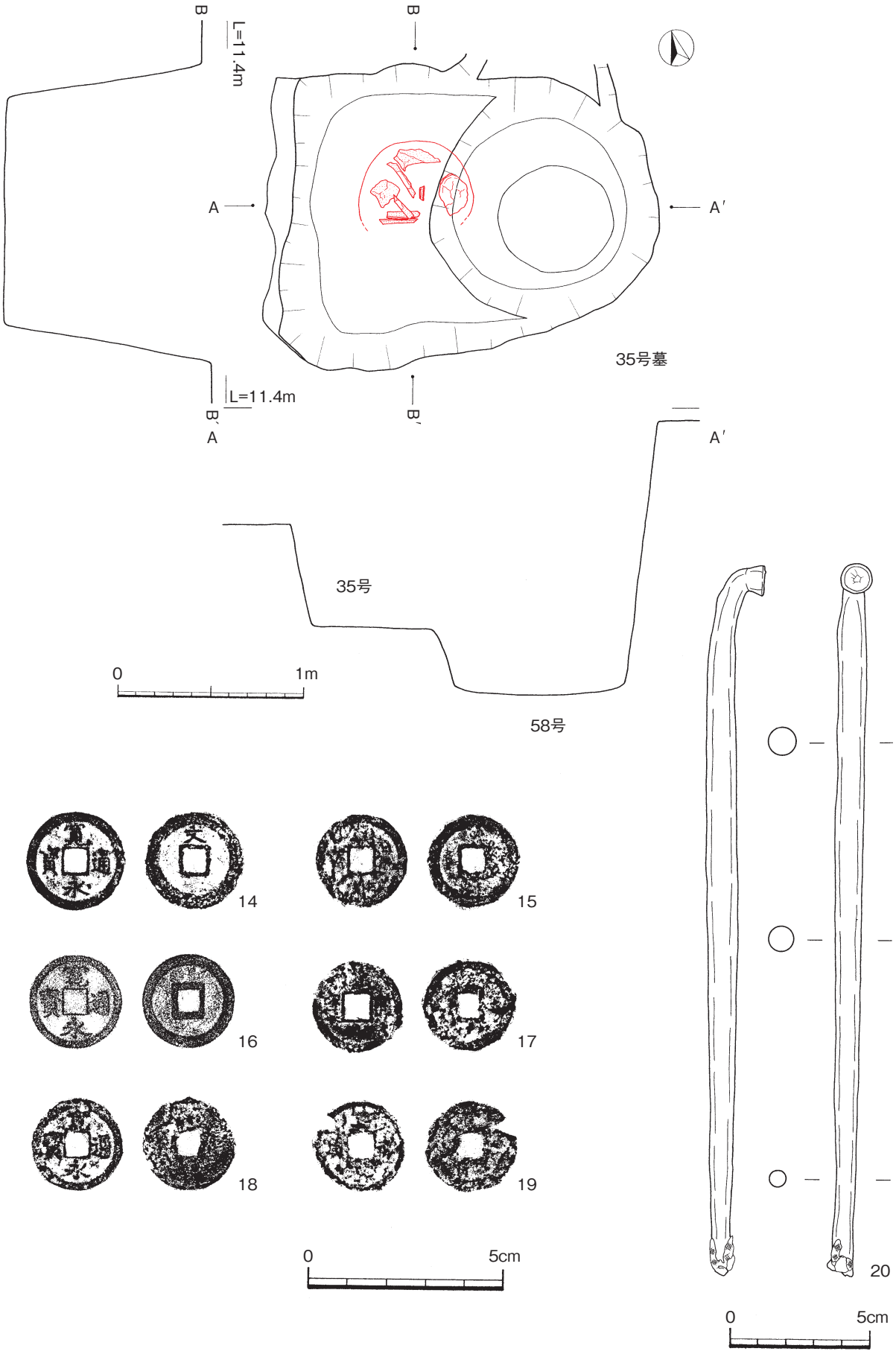
墓 No.	調査年度	墓壙形態	人骨残存	六道銭	副葬品	切り合い関係	備考
1	H14	寝棺	○	○		148/145	子供？
2	H14	座棺	○	○		2/4	
3	H14	座棺	◎	○	木製数珠		
4	H14	寝棺	△	○		4・5・63	
5	H14	座棺	○	○		5/63	
6	H14	寝棺	×	×			
7	H14	寝棺	○	○		7/5・6・8	
8	H14	寝棺	×	○			
9	H14	寝棺	×	○			
10	H14	寝棺	×	○			
11	H14	寝棺	△	○		11/14	
12	H14	寝棺	×	○			
13	H14	寝棺	×	○		13・14	
14	H14	寝棺	×	×			
15	H14	寝棺	×	×			
16	H14	寝棺	×	×			
17	H14	寝棺	△	○		17/8・9	
18	H14	寝棺	×	×			
19	H14	寝棺	×	○		19/13・15・90	
20	H14	寝棺	○	○	数珠（象牙？）	20/18・19・89　20・64	
21	H14	座棺	△	○			
22	H14	座棺	△	○	ビーズ玉		
23	H14	座棺	○	○		23・24	
24	H14	座棺	○	×			
25	H14	座棺	◎	○		25・85	
26	H14	座棺	△	×			
27	H14	寝棺？	×	○		27/26・58	35号墓 No.1が27号墓のものか
28	H14	座棺	△	×		28/86・88	
29	H14	寝棺	×	×		29・36	
30	H14	寝棺	○	○	数珠，青銅品？	30/29・36・38・60	
31	H14	寝棺	×	×			
32	H14	座棺	×	○			
33	H14	座棺	○	×		33/62	
34	H14	寝棺	○	○		34/33・62	
35	H14	座棺	○	○	キセル，扇子	35/27・86・88	
36	H14	座棺	△	○	キセル，青銅品		八角形木棺
37	H14	座棺	△	○		37・61	
38	H14	座棺	○	○			
39	H14	寝棺	○	○			
40	H14	寝棺	◎	×	数珠（プラスチック？）	40/52・83・100・140	現代墓
41	H14	寝棺	○	○			
42	H14	寝棺	○	○		42/41・43・81	
43	H14	寝棺	×	×			
44	H14	寝棺	○	×		44/45・46・77	
45	H14	寝棺	×	×			



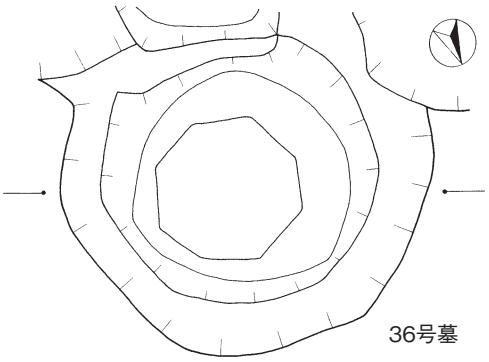
第155図　３号・９号墓（墓：S=1/30，骨 S=1/10，１～６：S=7/10）

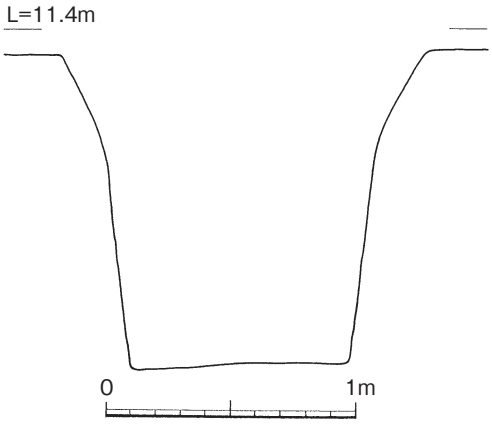


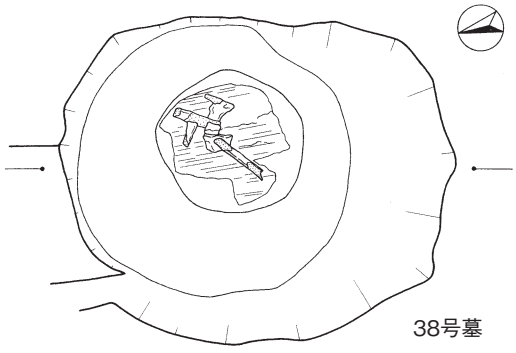
第156図　25号・49号墓（墓：S=1/30，骨：S=1/10，7～12：S=7/10，13：S=1/2）

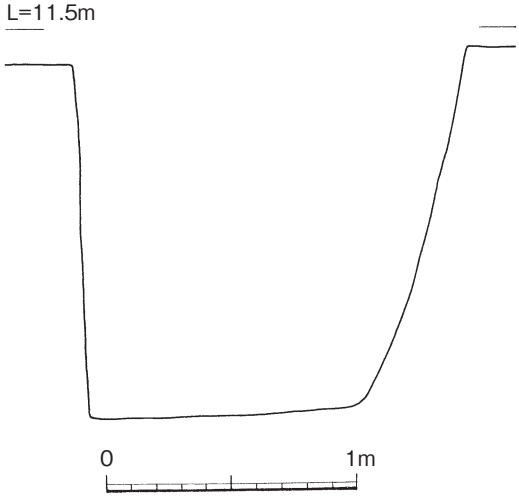


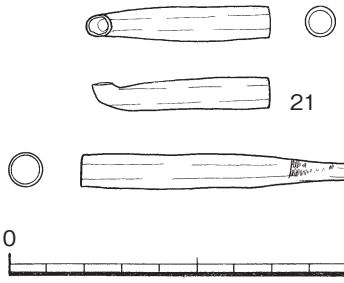
第157図　35号墓（14～19：S=7/10，20：S=1/2）

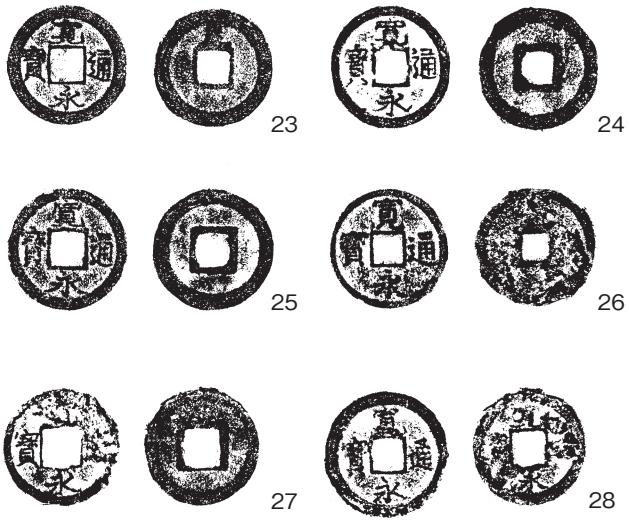


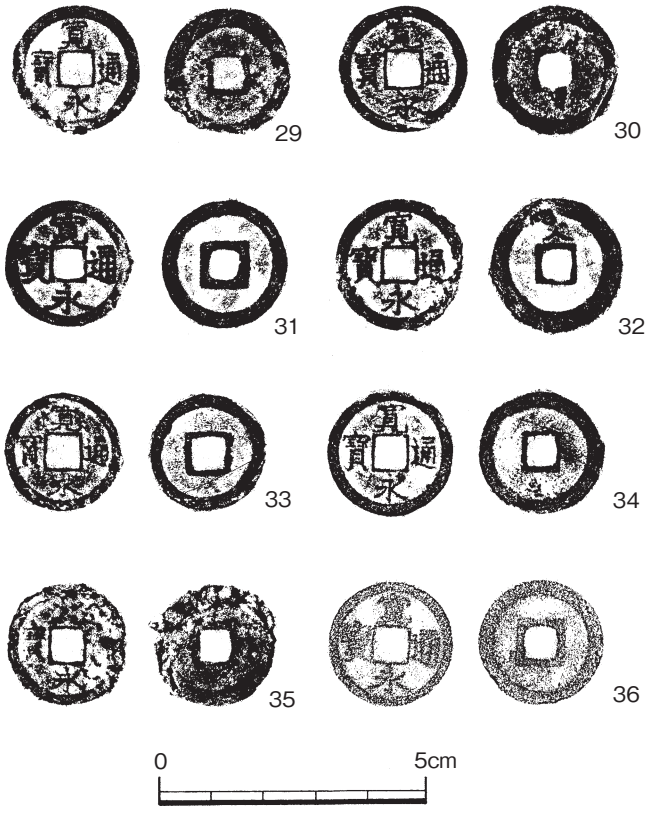




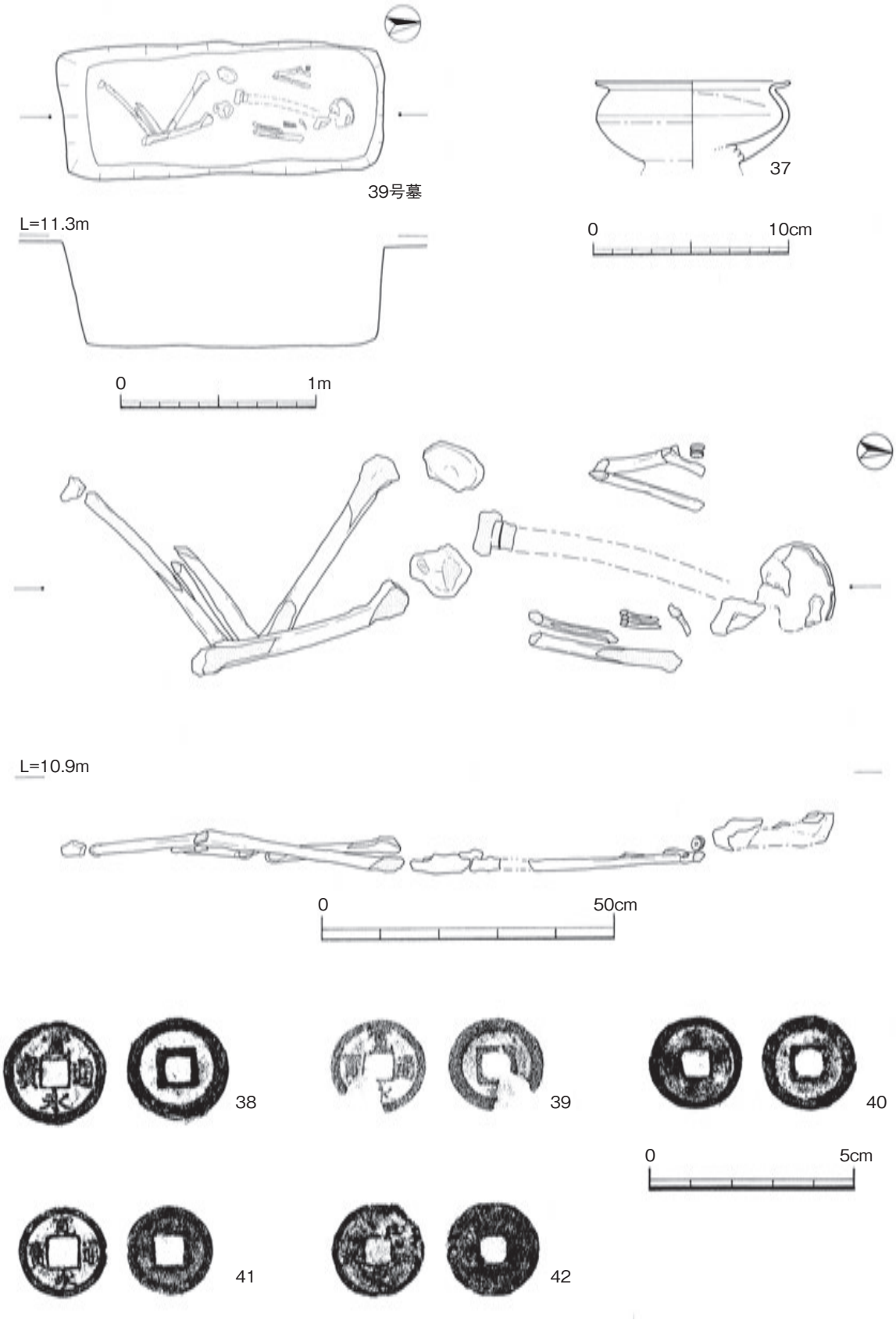




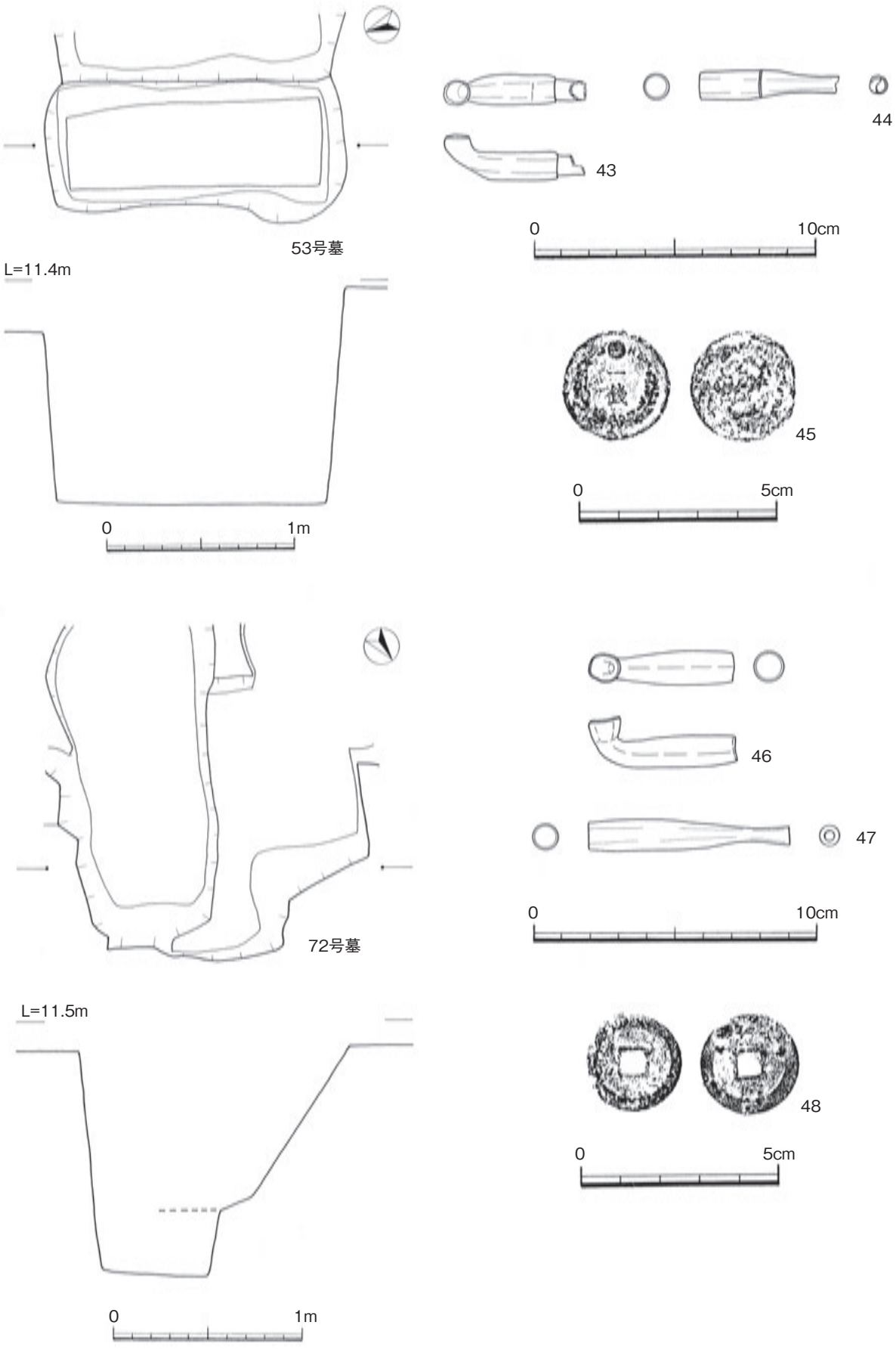




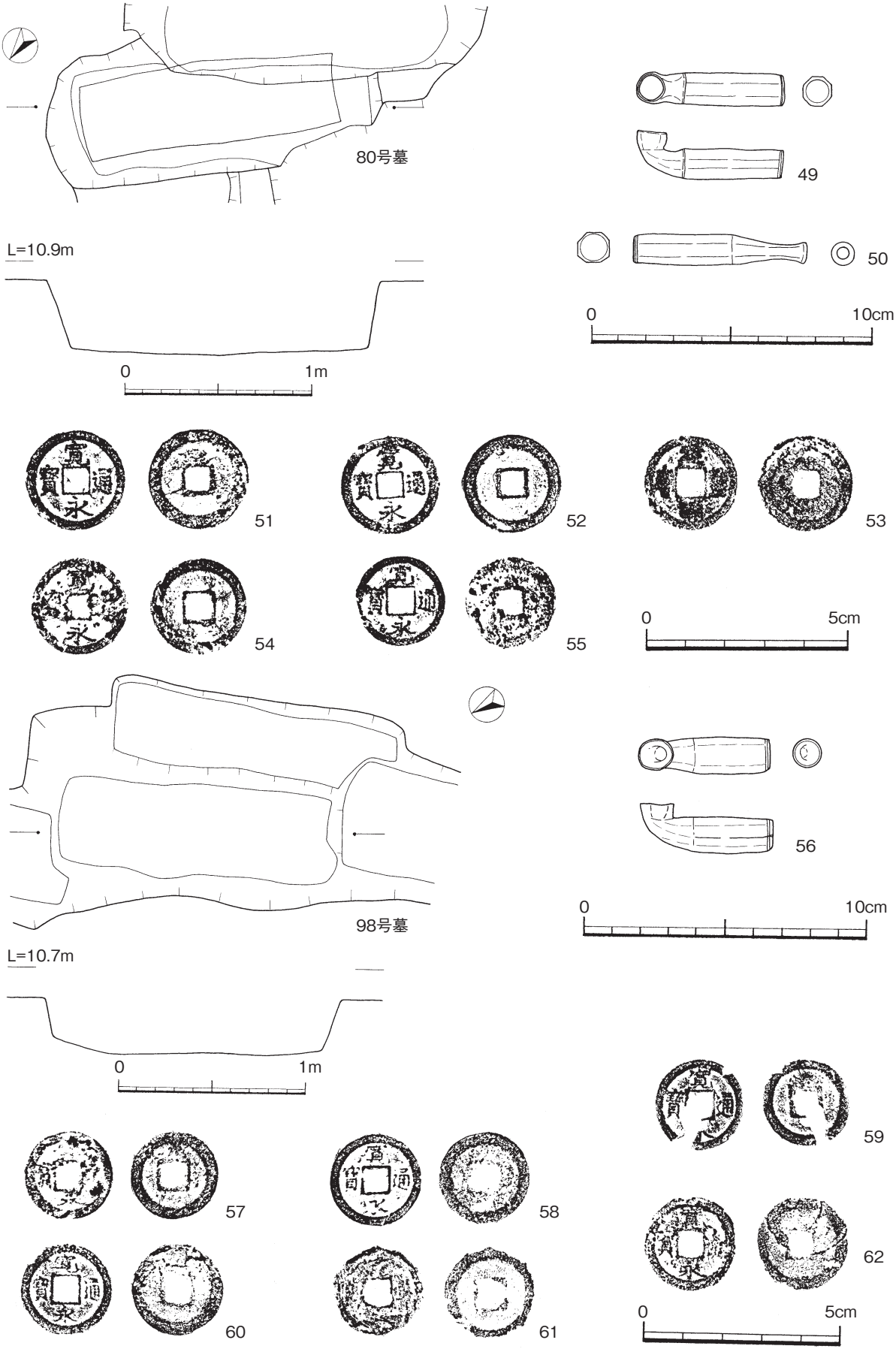
第158図　36号・38号墓（21・22：S=1/2，23～36：S=7/10）



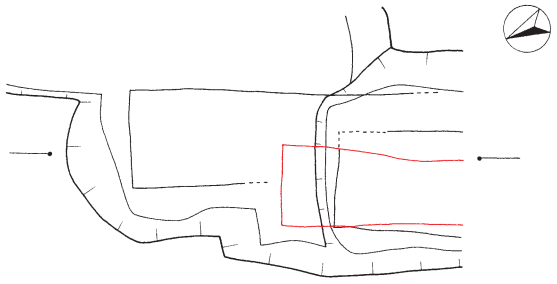
第159図　39号墓（墓：S=1/30，骨：S=1/10，37：S=1/3，38～42：S=7/10）



第160図　53号・72号墓（43・44・46・47：S=1/2，45・48：S=7/10）

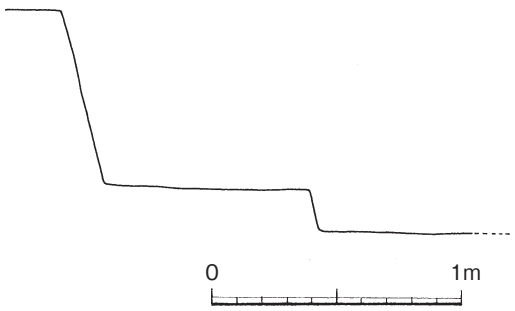


第161図　80号・98号墓（49・50・56：S=1/2，51～55・57～62：S=7/10）

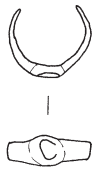


100号墓

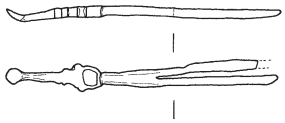
L=11.3m



0 1m

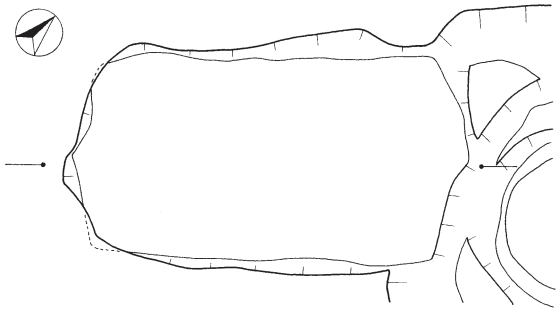


63



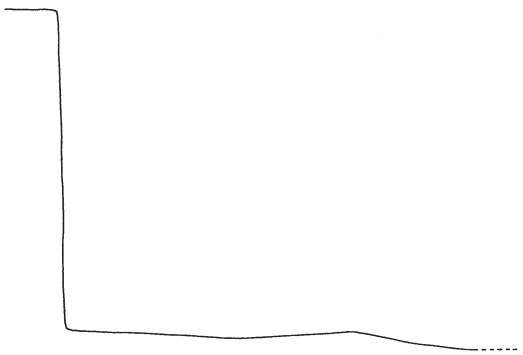
64

0 5cm

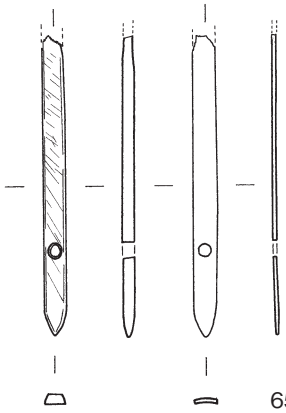


111号墓

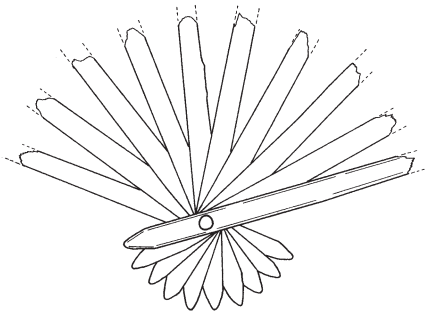
L=13.5m



0 1m

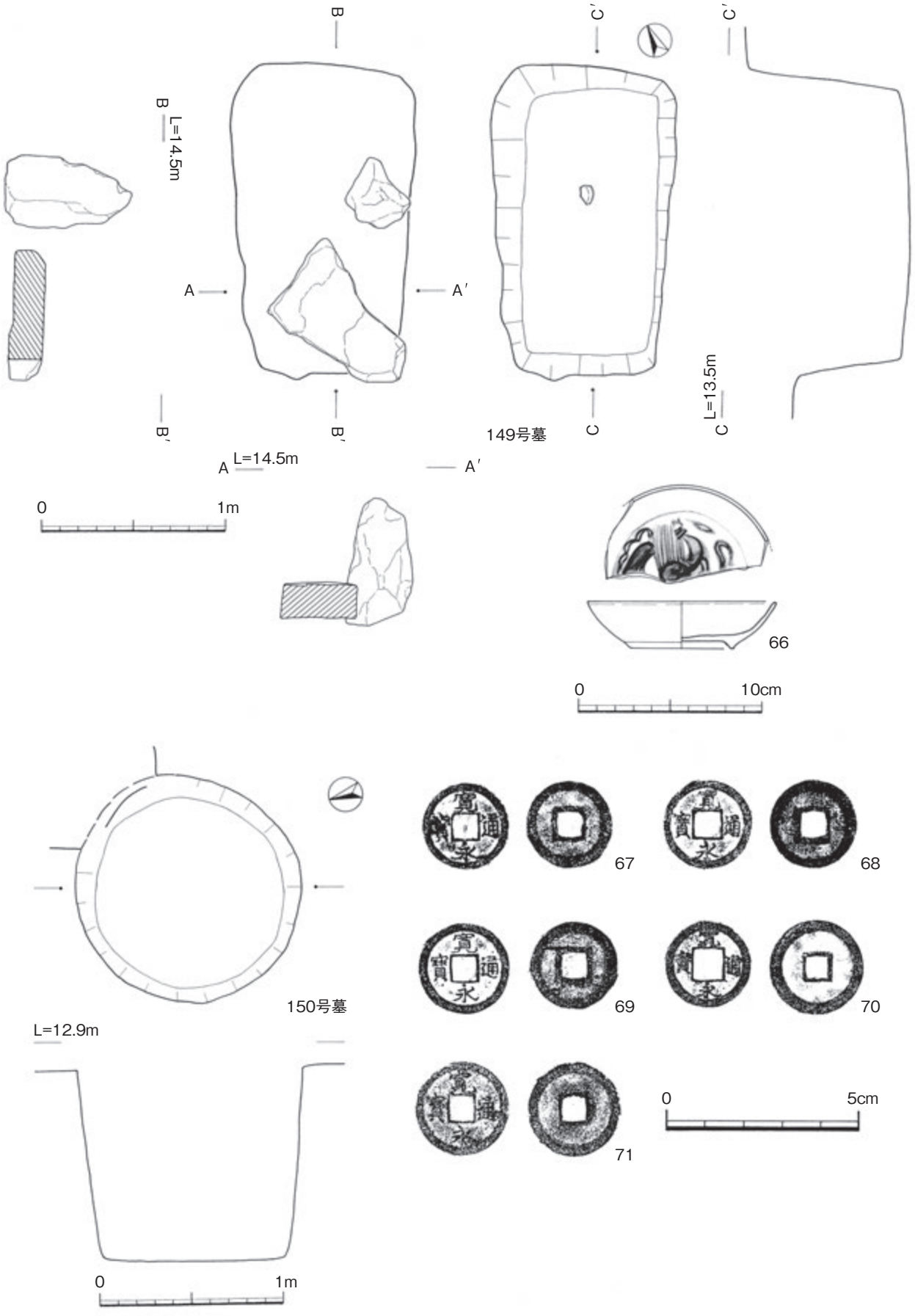


65

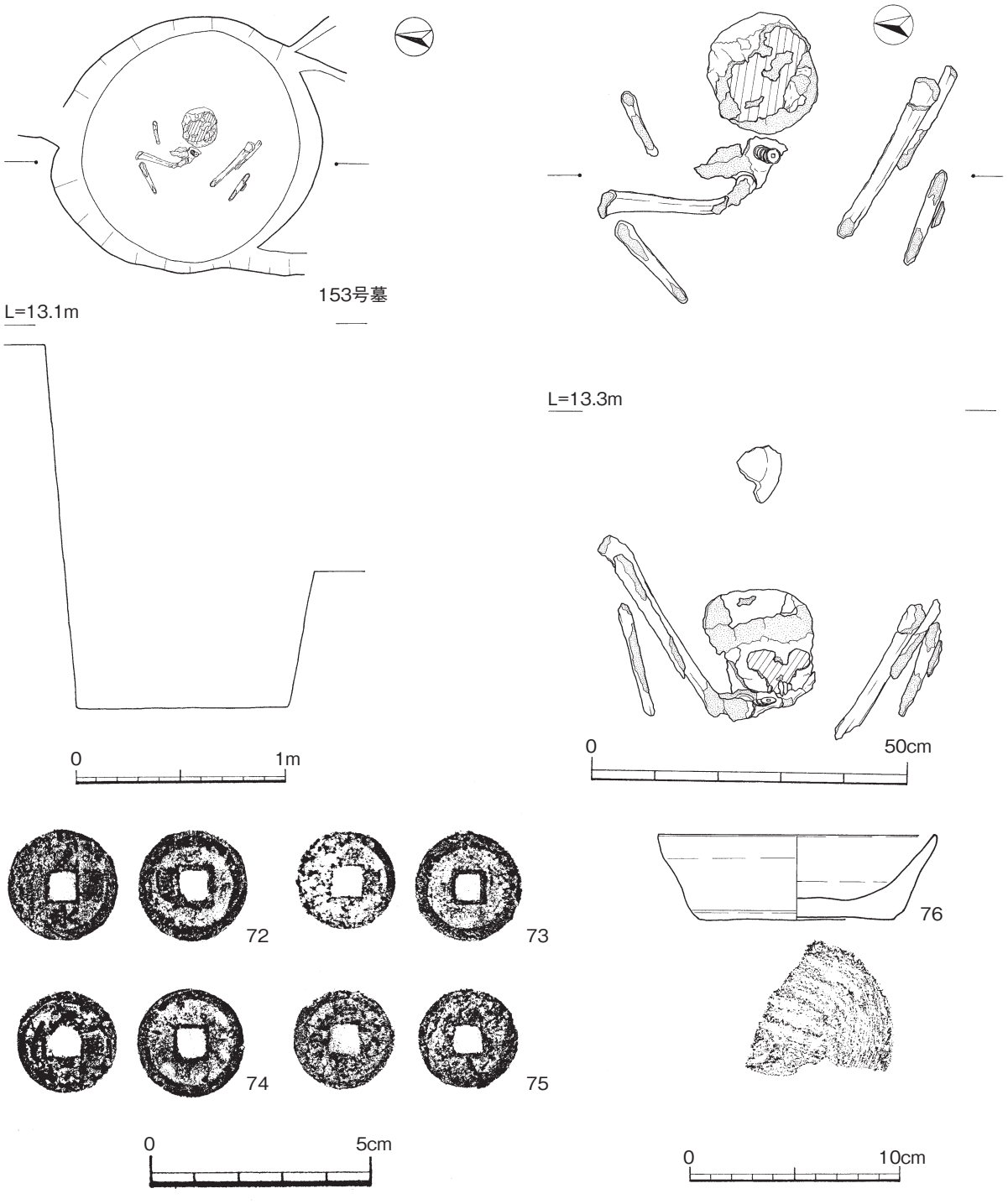


0 5cm

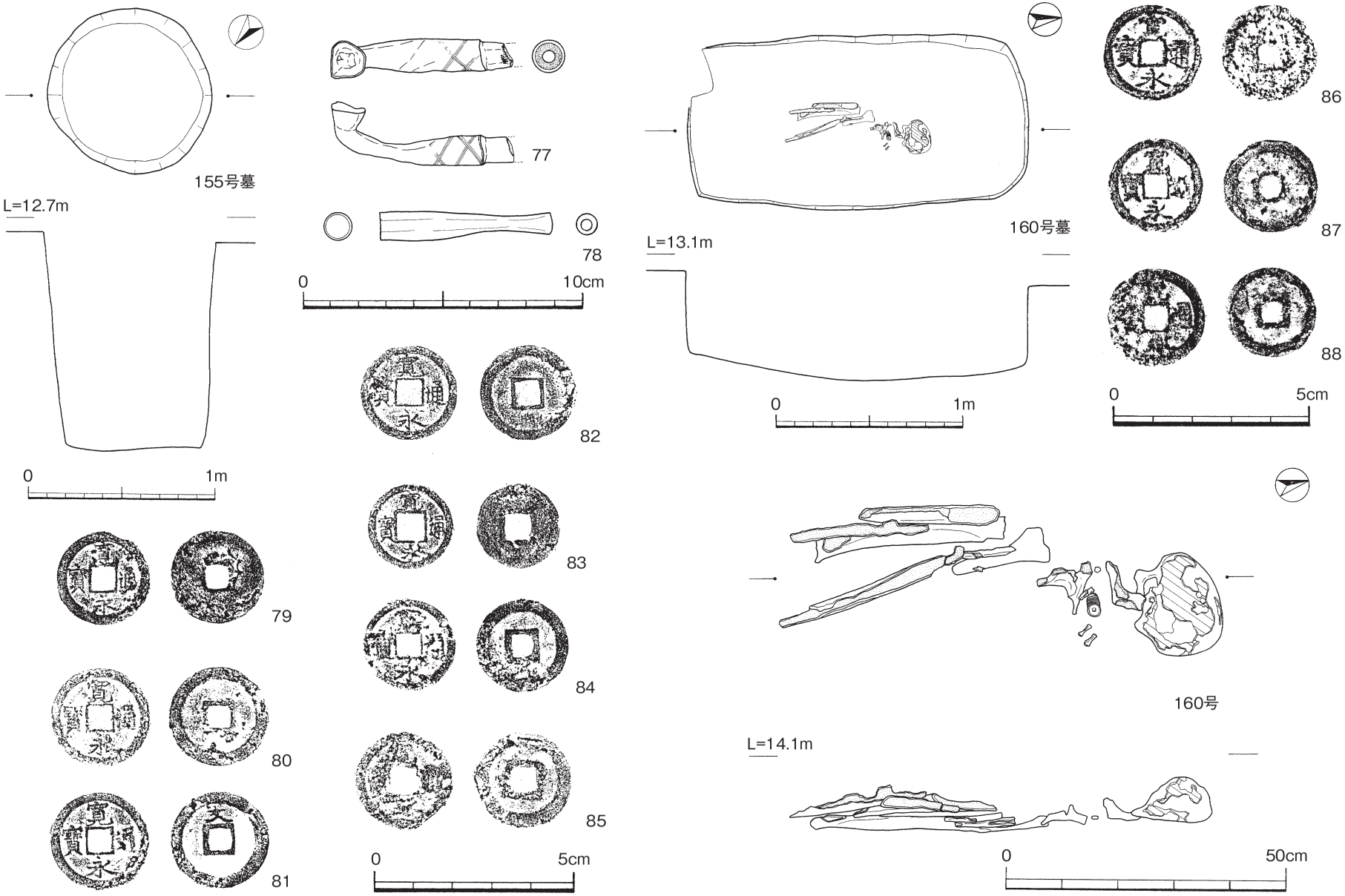
第162図　100号・111号墓



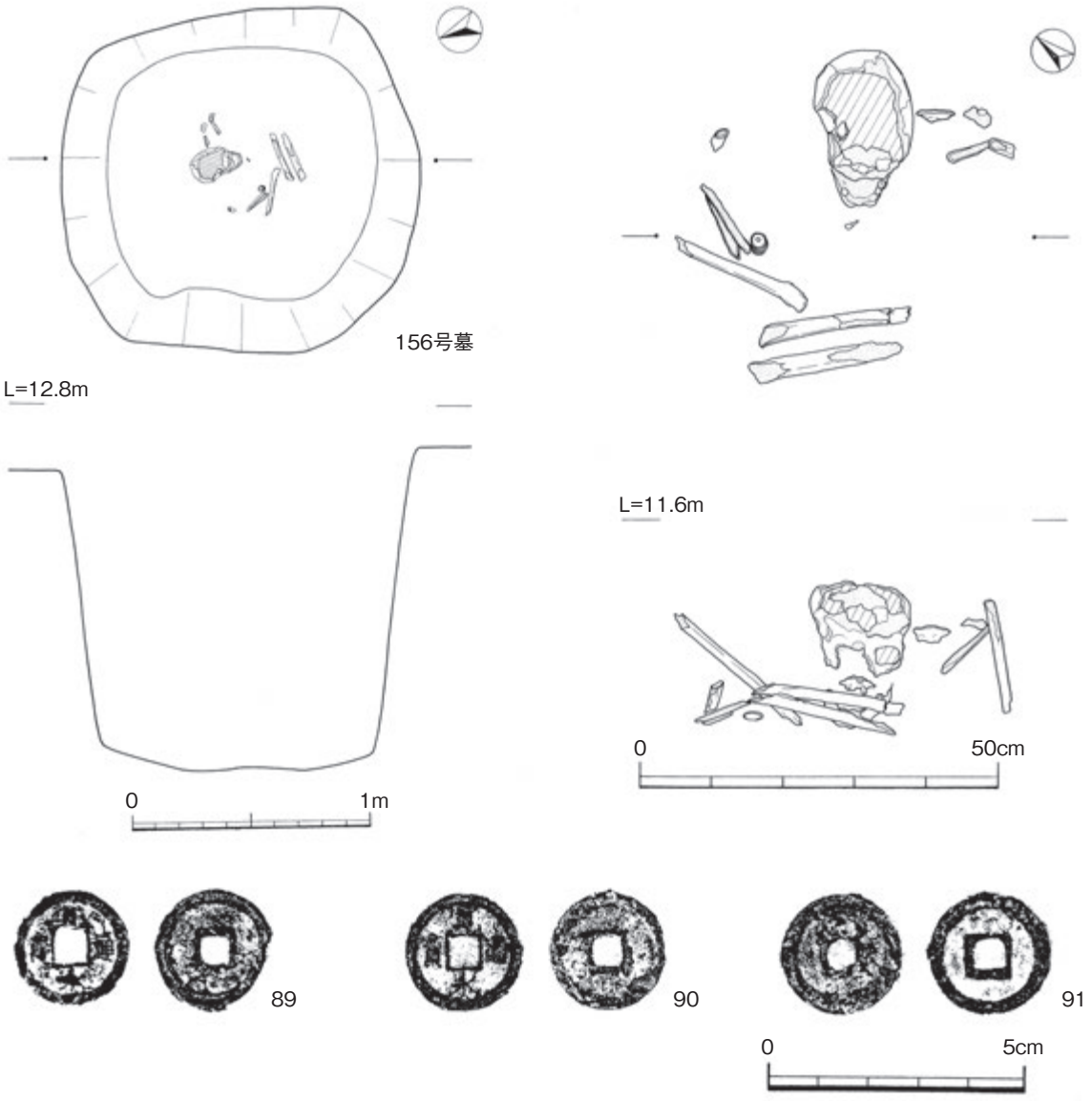
第163図　149号・150号墓（66：S=1/3，67～71：S=7/10）



第164図　153号墓（墓：S=1/30，骨：S=1/10，72～75：S=7/10，76：S=1/3）



第165図　155号・160号墓（墓：S=1/30，骨：S=1/10，77・78：S=1/2，79～88：S=7/10）

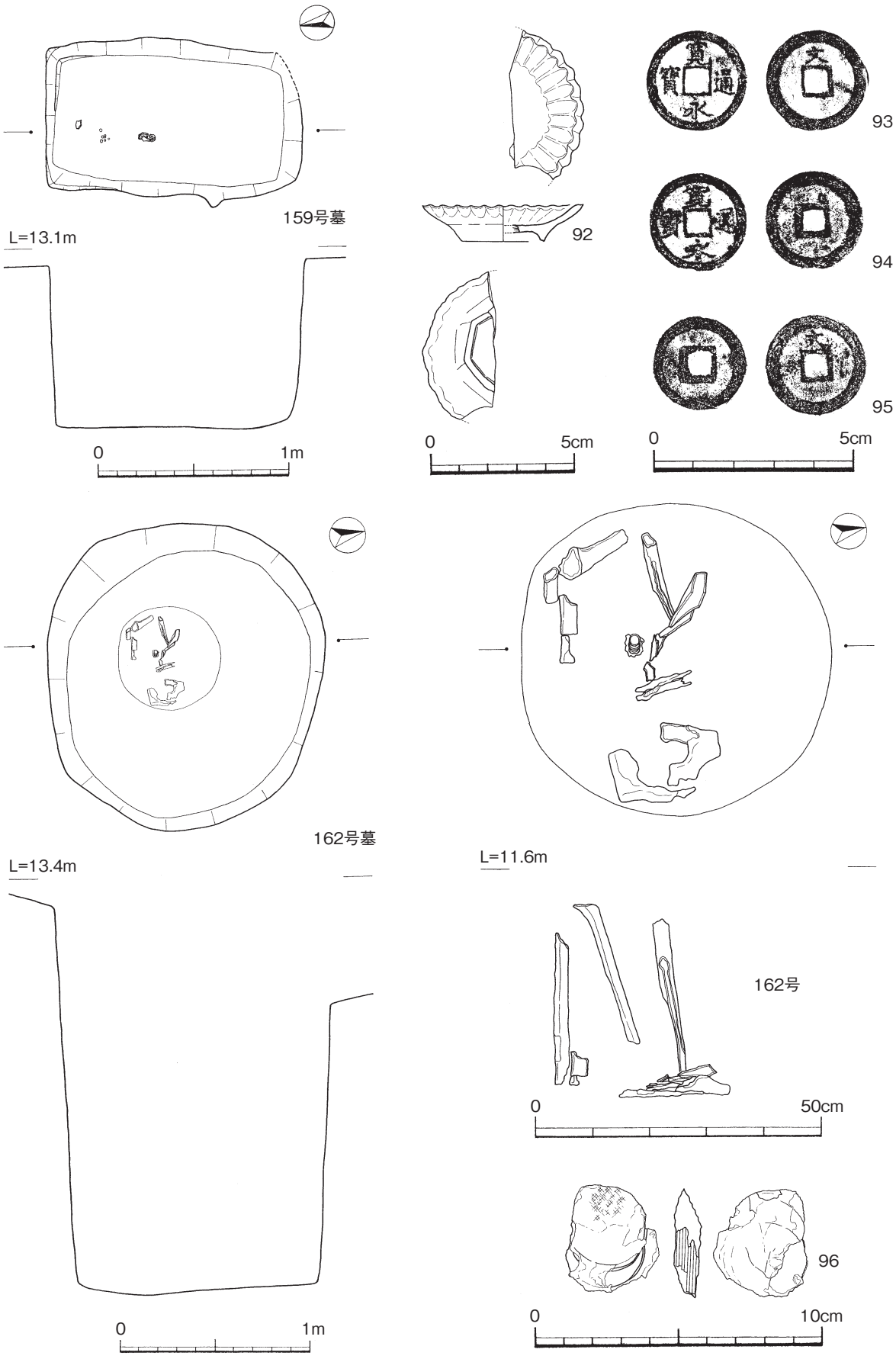


第166図　156号墓（墓：S=1/30，骨：S=1/10，89～91：S=7/10）

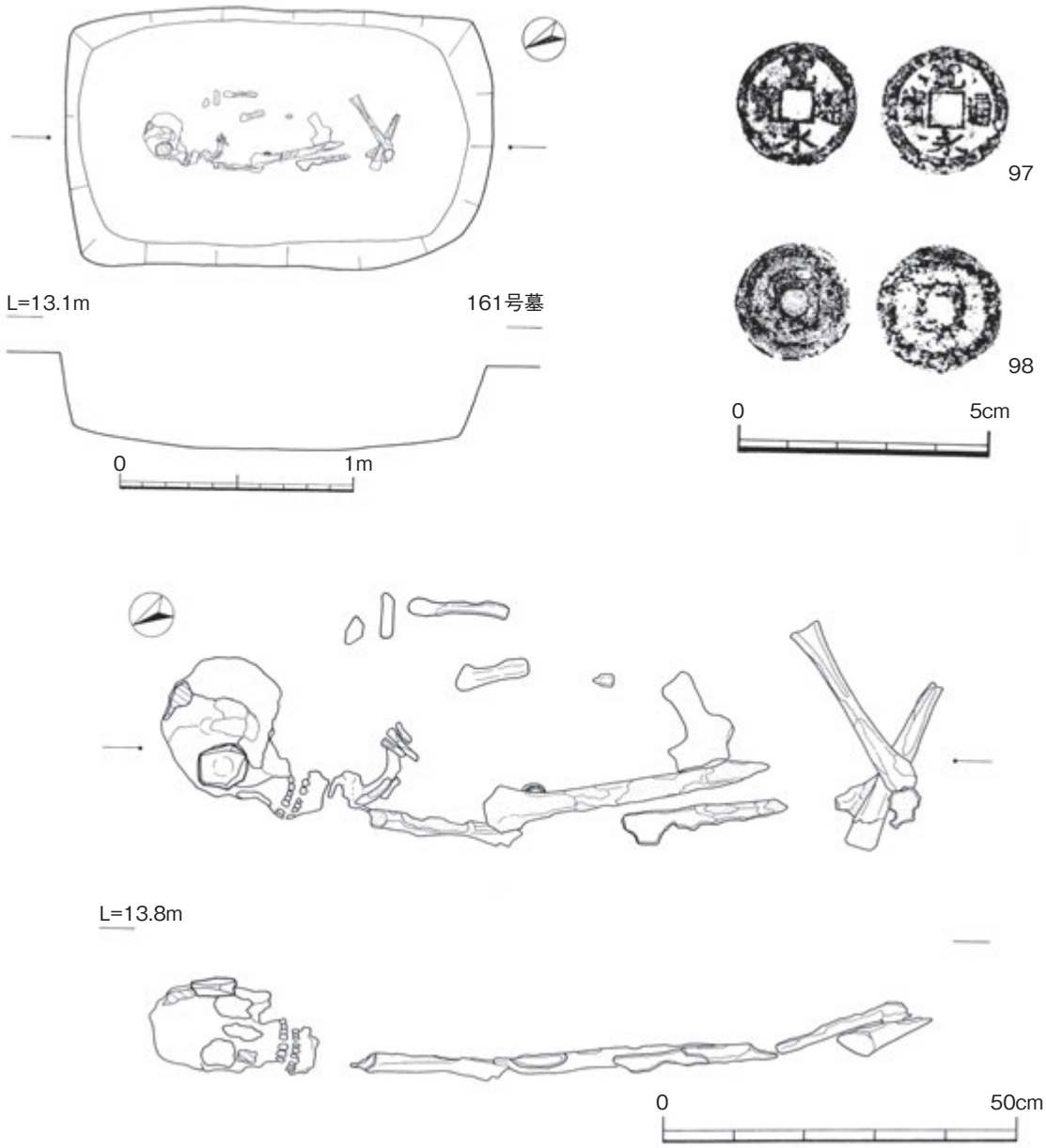
桝城跡近世墓データ（P 調査区）②

〈凡　例〉◎：良好、○：普通、△：悪い、×：存在せず　　切り合い関係：146/145：146号が145号を切っている　　4・5・63：切り合い順序不明

墓 No.	調査年度	墓壙形態	人骨残存	六道銭	副葬品	切り合い関係	備考
46	H14	寝棺	○	○		46/77・90	
47	H14	寝棺	○	○		47/46・76・78・47・143	
48	H14	寝棺	○	○		48/143・48・47・132・143	
49	H14	寝棺	△	○	木製数珠, 青銅製簪, ガラス製, 青銅製品	49/128・131	
50	H14	寝棺	◎	×	プラスチック製玩具	50/70・125	現代墓
51	H14	座棺	△	○		51・29	
52	H14	寝棺	○	○		52/99	
53	H14	寝棺	△	○?		53/138	現代墓，一銭銅貨（1枚）
54	H14	寝棺	○	○	キセル	54/74・128・135	
55	H14	寝棺	×	○		55/126	棺桶小さい
56	H14	寝棺	×	○			
57	H14	寝棺	○	×	数珠（白色物質）	57/48・68	
58	H14	座棺	△	○			
59	H14	寝棺	△	○		59/31・61	
60	H14	寝棺	○	○		60/38・59	



第167図　159号墓・162号墓（墓：S=1/30，骨：S=1/10，92・96：S=1/2，93～95：S=7/10）

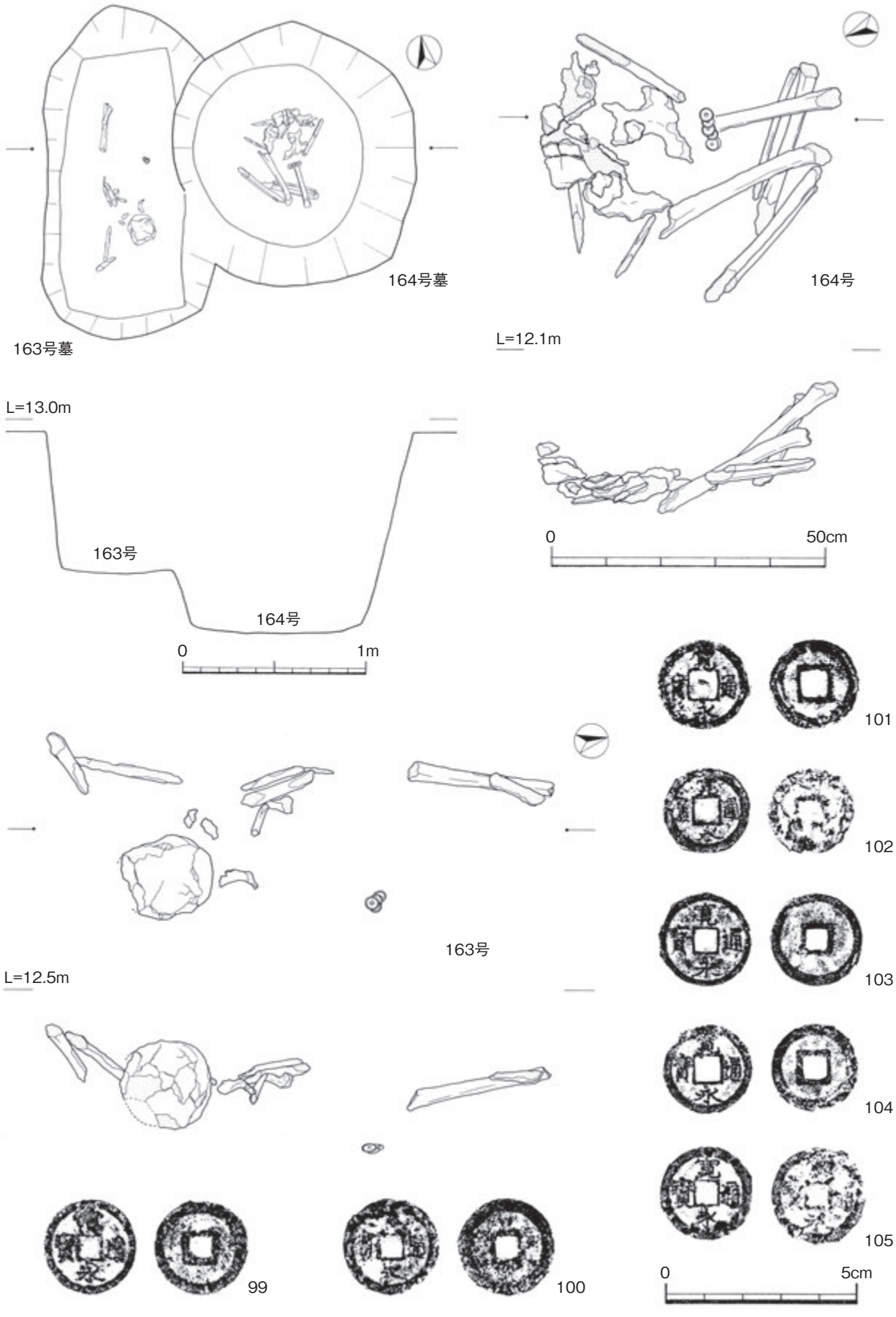


第168図　161号墓（墓：S=1/30，骨：S=1/10，97・98：S=7/10）

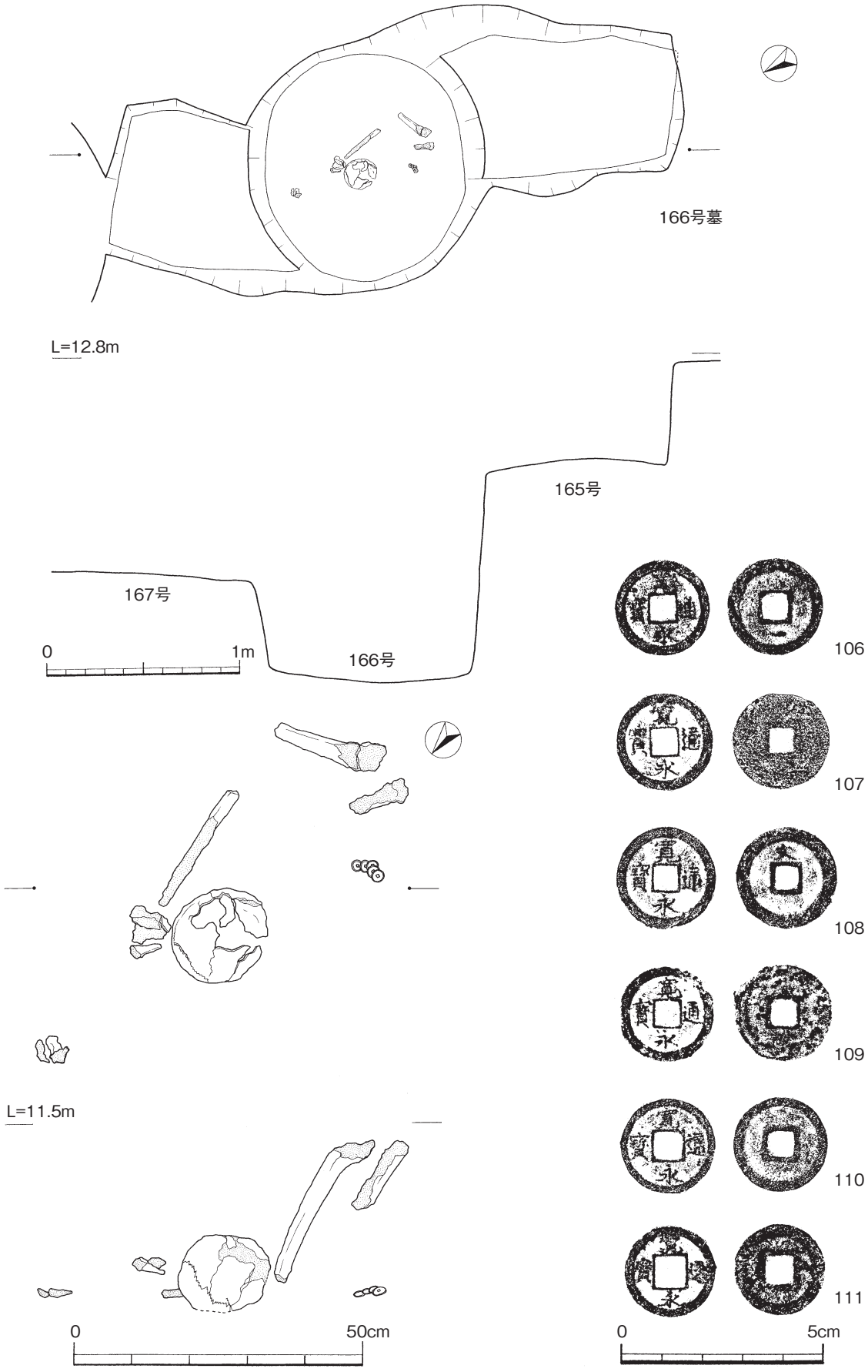
桁城跡近世墓データ（P 調査区）③

〈凡　例〉◎：良好、○：普通、△：悪い、×：存在せず　　切り合い関係：146/145：146号が145号を切っている　　4・5・63：切り合い順序不明

墓 No.	調査年度	墓壙形態	人骨残存	六道銭	副葬品	切り合い関係	備考
61	H14	寝棺	△	○			
62	H14	寝棺	△	○			33号墓埋土出土２枚か？
63	H14	座棺	△	○	木製数珠	63/93	
64	H14	寝棺	△	○		64/18・94	
65	H14	寝棺	△	○		65/82・65・131	
66	H14	寝棺	○	○		66/67・142	
67	H14	寝棺	×	○		67/68	
68	H14	寝棺	○	○		68・69	
69	H14	寝棺	△	○	キセル		
70	H14	寝棺	△	○		70/74	
71	H14	寝棺	○	×			
72	H14	寝棺	○	○	キセル	72/71・81・142・72・66	
73	H14	寝棺	○	○	ガラス製数珠	73/139	現代墓（改葬），一円玉（５枚）
74	H14	寝棺	×	×			
75	H14	寝棺	×	○		75/69・70・74	



第169図　163・164号墓（墓：S=1/30，骨：S=1/10，99～105：S=7/10）



第170図　166号墓（墓：S=1/30，骨：S=1/10，106～111：S=7/10）

桧城跡近世墓データ（P 調査区）④

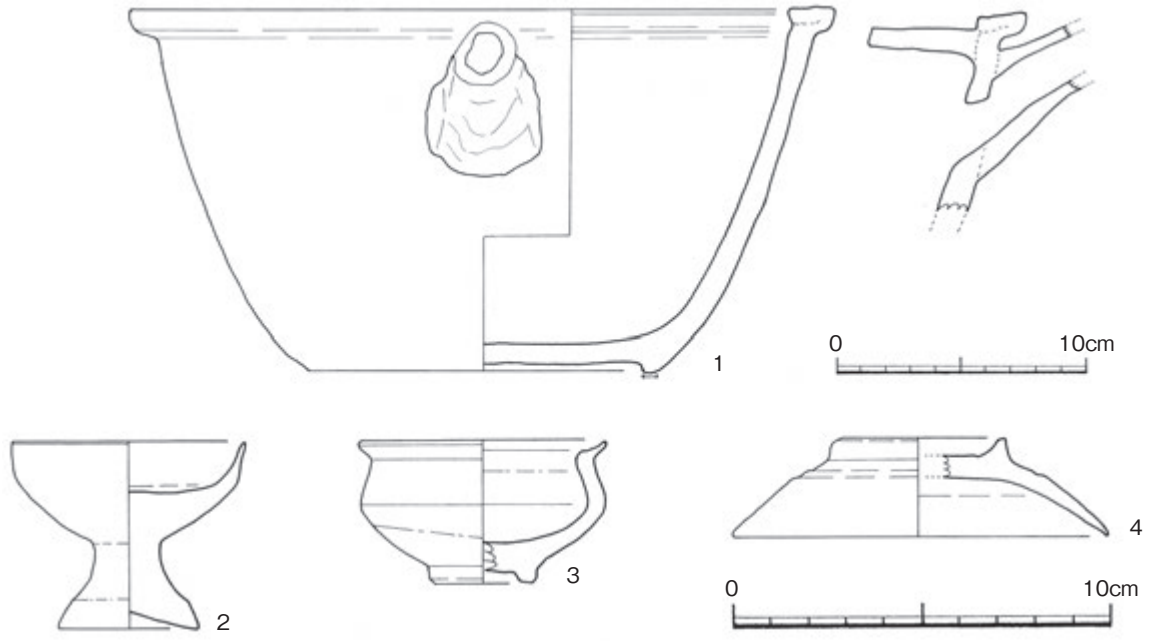
〈凡　例〉◎：良好、○：普通、△：悪い、×：存在せず　　切り合い関係：146/145：146号が145号を切っている　　4・5・63：切り合い順序不明

墓 No.	調査年度	墓壙形態	人骨残存	六道銭	副葬品	切り合い関係	備考
76	H14	寝棺	○	○		76/46・141	
77	H14	座棺？	○	○			
78	H14	寝棺	○	○		78/79・45	
79	H14	寝棺	×	○			78号墓埋土出土6～７枚か？
80	H14	寝棺	○	○	キセル，　数珠	80/43・78・81・142	
81	H14	？	○	×			
82	H14	寝棺	×	×			
83	H14	寝棺	○	×	櫛（プラスチック製？）	83/52・83・84	現代墓
84	H14	寝棺	○	×		84・91	現代墓(改葬)　埋土よりプラスチック製入れ歯
85	H14	寝棺	○	○	扇子	85/87・85・28	
86	H14	座棺	×	○	木製数珠，ビーズ玉	86/88	
87	H14	座棺	○	○		87・88	
88	H14	座棺	×	×			
89	H14	寝棺	△	○	木製数珠		棺桶小さい
90	H14	？	×	×			墓か不確定
91	H14	寝棺	○	×		91/52	現代墓(改葬か？)　埋土から墓石と義眼
92	H14	？	×	×			19号墓直下
93	H14	座棺	△	○	木製数珠		
94	H14	寝棺	×	○			64号墓埋土出土６枚か？
95	H14	寝棺	△	○		95/96	
96	H14	寝棺	×	○		96・97	
97	H14	寝棺	×	×		97・98	
98	H14	寝棺	×	○	キセル，数珠玉		
99	H14	寝棺	×	×			
100	H14	寝棺	○	×	簪，プラスチック製品	100/71・140	
101	H14	座棺	△	○	木製数珠		
102	H14	座棺	×	○			
103	H14	寝棺	×	○			寛永鉄銭（40枚弱），改葬の可能性
104	H14	寝棺	×	○	数珠玉		
105	H14	寝棺	×	○		105/106	寛永鉄銭含む,105墓以前に墓が存在した可能性あり
106	H14	寝棺	×	○			
107	H14	寝棺	×	○		107/108・116	
108	H14	座棺	×	○			
109	H14	寝棺	×	×		109/113・109・120	
110	H14	寝棺	×	○			寛永鉄銭含む
111	H14	寝棺	×	○	扇子		
112	H14	座棺	△	○		112/111・115・124	
113	H14	寝棺	×	○			寛永鉄銭含む
114	H14	寝棺	×	○		114・107・109・120・121	
115	H14	座棺	×	○			
116	H14	座棺	△	○			
117	H14	寝棺	△	○		117/112・119	寛永鉄銭含む
118	H14	寝棺	△	○		118/112・115	
119	H14	座棺	×	×			
120	H14	寝棺	×	×			109号墓と同一か
121	H14	寝棺	×	○		121/109・120	
122	H14	寝棺	△	○			埋土より青銅品（棺桶金具？）
123	H14	寝棺	×	×		123/110	
124	H14	？	×	×			
125	H14	寝棺	×	○		125/134・137・125・136	
126	H14	寝棺	×	○			
127	H14	寝棺	×	○		127/128・130	
128	H14	寝棺	×	○		128/129	
129	H14	寝棺	×	○		129/130	
130	H14	寝棺	×	○			寛永鉄銭含む
131	H14	寝棺	○	○		131/132	
132	H14	寝棺	△	○			
133	H14	寝棺	△	×			
134	H14	寝棺	×	○			
135	H14	寝棺	○	○			
136	H14	寝棺	×	○		136/134・135	
137	H14	寝棺	△	○		137/134	
138	H14	寝棺	○	×	数珠(白色物質･ガラス製？)	138/137	
139	H14	寝棺	△	×	プラスチック製櫛・容器	139/98	現代墓（改葬）
140	H14	寝棺	○	○			
141	H14	寝棺	×	×			
142	H14	寝棺	×	×		142/81	
143	H14	寝棺	×	○	数珠玉		49号墓埋土より出土
144	H15	寝棺	×	×			
145	H15	寝棺	○	○	陶磁器片		

楮城跡近世墓データ（P 調査区）⑤

〈凡　例〉◎：良好、○：普通、△：悪い、×：存在せず　　切り合い関係：146/145：146号が145号を切っている　　4・5・63：切り合い順序不明

墓 No.	調査年度	墓壙形態	人骨残存	六道銭	副葬品	切り合い関係	備考
146	H15	寝棺	×	×		146/145	
147	H15	寝棺	△	○	土師		埋土出土
148	H15	寝棺	×	○		148/146	
149	H15	寝棺	×	×	陶磁器片		墓石あり（自然石）
150	H15	座棺	○	○		150/151	
151	H15	寝棺	△	○			
152	H15	座棺	○	○		152/151・153	
153	H15	座棺	○	○	土師		埋土出土
154	H15	寝棺	○	○	陶磁器片	154/153	
155	H15	座棺	○	○	キセル		
156	H15	座棺	○	○			
157	H15	寝棺	△	×		157・158・159	
158	H15	寝棺	△	○	陶磁器片	157・158	
159	H15	寝棺	△	○	陶磁器片	159/157・160	
160	H15	寝棺	○	○		159/160	
161	H15	寝棺	○	○	土師（頭蓋直上）		
162	H15	座棺	○（軟化）	○			現代墓, 墓石あり, 六道銭は葉で包まれている
163	H15	寝棺	○	○			
164	H15	座棺	○	○			
165	H15	寝棺	×	×			
166	H15	座棺	○	○			
167	H15	寝棺	△	×			



第171図　近世の遺物（P 調査区）（S=1/3，２～４：S=1/2）

（2）遺物（第171図）

ここでは，P 調査区で出土した副葬品以外の遺物にふれることにする。１～４は近世の遺物である。近世墓域南西側の造成土から出土した。１は白薩摩の水差しである。２・３は磁器で，２は仏飯具，３は龍門司焼の香炉である。４は腰折れ碗の蓋である。

L・O・Q調査区遺構内遺物観察表①

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
15	1	O	E31	353 356 503	大型土坑４	黒色土器A類	椀	口縁～底部	浅黄橙	暗灰	－		○		赤色粒	摩耗	ミガキ	16.6	6.2	6.4	－	11～12c
	2	O	E31	297 351	大型土坑４	黒色土器A類	椀	口縁～胴部	灰黄	灰白	－			○	－	ミガキ	ミガキ	15.6	－	－	－	11～12c
	3	O	F31	489	大型土坑４	黒色土器A類	椀	胴～底部	浅黄橙	黒	－		○		－	ミガキ	ミガキ	－	6.8	－	－	底部刻書 11～12c
	4	O	－	159	大型土坑４	黒色土器A類	椀	底部	淡橙	灰白	－		○		－	摩耗	摩耗	－	6.2	－	－	底部刻書 11～12c
	5	O	－	143	大型土坑４	黒色土器A類	椀	底部	にぶい黄橙	灰	－		○		赤色粒	ナデ	ミガキ	－	－	7.6	－	底部刻書 11～12c
	6	O	E31	485	大型土坑４	黒色土器A類	椀	胴～底部	浅黄橙	オリーブ黒	－		○		－	ナデ	ミガキ	－	6.4	－	－	底部刻書 11～12c
	7	O	F31	580	大型土坑４	黒色土器A類	椀	底部	灰白	灰	－	○	○	○	白片岩	ミガキ	ミガキ	－	6.8	－	－	底部刻書 11～12c
	8	O	－	368	大型土坑４	黒色土器A類	椀	胴～底部	灰黄	暗灰	－		○		赤色粒	ミガキ	ミガキ	－	8.0	－	－	底部刻書 11～12c
	9	O	－	367	大型土坑４	黒色土器B類	椀	胴～底部	黒褐	灰白	－		○		赤色粒	ミガキ	ミガキ	－	6.6	－	－	底部刻書 11～12c
	10	O	F31	470	大型土坑４	黒色土器B類	椀	底部	黄灰	灰	－		○		－	ミガキ	ミガキ	－	6.6	－	－	底部刻書 11～12c
	11	O	E31	350	大型土坑４	黒色土器B類	椀	胴～底部	灰白	灰白	－	○			－	ミガキ	ミガキ	－	6.2	－	－	底部刻書 11～12c
	12	O	F30	435	大型土坑４	黒色土器B類	椀	胴～底部	黄灰	黄灰	－		○		赤色粒	ミガキ	ミガキ	－	－	－	－	底部刻書 11～12c
	13	O	－	154	大型土坑４	黒色土器B類	椀	底部	灰	灰	－		○		－	ミガキ	ミガキ	－	6.2	－	－	底部刻書 11～12c
	14	O	F31	446	大型土坑４	黒色土器B類	椀	底部	灰	灰	－		○		－	摩耗	摩耗	－	5.6	－	－	底部刻書 11～12c
	15	O	F31	476	大型土坑４	黒色土器B類	椀	底部	灰白	灰白	－		○		－	ミガキ	ミガキ	－	5.8	－	－	底部刻書 11～12c
	16	O	－	122	大型土坑４	赤色土器B類	椀	底部	にぶい橙	灰白	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	－	7.6	－	－	底部刻書 11～12c
16	17	O	E30	196	大型土坑４	土師器	椀	底部	にぶい黄橙	浅黄橙	－		○	○	白片岩	ナデ	ナデ	－	5.8	－	－	灯明皿？ 10c 前後
	18	O	E30	203	大型土坑４	土師器	坏	胴～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○	小石粒 赤色粒 白片岩	ナデ	ナデ	－	5.6	－	－	
	19	O	－	467	大型土坑４	土師器	皿	口縁～底部	にぶい橙	にぶい黄橙	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	12.4	9.6	3.0	－	ヘラ切り 内面ススク
	20	O	H29	35	大型土坑４	土師器	皿	口縁～底部	淡黄	淡黄	－			○	小石粒 赤色粒	摩耗	摩耗	9.8	8.5	2.6	－	
	21	O	E30	106	大型土坑４	土師器	耳皿	口縁～底部	橙	淡橙	－	○			赤色粒 白片岩	ナデ	ナデ	－	3.5	－	－	10c
	22	O	－	－	大型土坑４	土師器	甕	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ケズリ ナデ	－	－	－	－	
	23	O	E31	511	大型土坑４	須恵器	甕	口縁部	灰白	灰白	－	○	○		白片岩	ナデ	ナデ	19.0	－	－	－	
	24	O	F30	334	大型土坑４	須恵器	甕	口縁部	灰	灰	－		○		白片岩	ナデ	ナデ	－	－	－	－	
17	25	O	－	152	大型土坑４	土師器	坏	口縁～底部	浅黄橙	灰白	－	○			赤色粒	ナデ	ナデ	16.0	10.7	2.6	－	糸切り
	26	O	F31	495	大型土坑４	土師器	皿	口縁～底部	にぶい橙	にぶい橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	8.6	7.1	1.5	－	灯明皿 糸切り
	27	O	F31	445	大型土坑４	土師器	皿	口縁～底部	にぶい黄褐	黒褐	－	○			赤色粒	ナデ	ナデ	8.8	6.2	1.5	－	糸切り 灯明皿
	28	O	H29	15	大型土坑４	土師器	皿	口縁～底部	にぶい黄橙	灰白	－			○	赤色粒	摩耗	摩耗	7.0	4.1	1.9	－	
	29	O	－	364	大型土坑４	土師器	皿	口縁～底部	浅黄橙	にぶい橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	9.0	5.8	1.4	－	一部朱糸切り
	30	O	F31	461 573	大型土坑４	須恵器	甕	胴部	極暗赤褐	灰赤	－	○	○		小石粒 白片岩	タタキ	当て具 ナデ	－	－	－	－	
	31	O	F31	570	大型土坑４	樺万丈	－	胴部	黄灰	灰	－		○	○	－	格子目タタキ	ケズリ	－	－	－	－	胎土マーブル状
	32	O	F30	395	大型土坑４	瓦質	擂鉢	口縁～胴部	黄灰	灰白	－		○		－	ナデ	ナデ	31.0	－	－	－	
	33	O	－	155	大型土坑４	白磁	椀	胴～底部	灰白	灰白	灰白	－	－	－	－	－	－	－	5.8	－	－	11c 後半～12c 前半
	34	O	F30	409	大型土坑４	白磁	椀	胴～底部	灰白	灰白	灰白	－	－	－	－	－	－	－	6.8	－	－	11c 後半～12c 前半
18	35	O	－	296	大型土坑４	滑石製品	石鍋	口縁部	灰白	灰白	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	24.0	－	－	－	11c
	36	O	E31	509	大型土坑４	滑石製品	石鍋	口縁部	灰白	灰白	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	－	－	－	－	11c
	37	O	E30	466	大型土坑４	滑石製品	石鍋	口縁部	灰白	灰	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	21.6	－	－	－	12c
	38	O	E30	207	大型土坑４	滑石製品	石鍋	口縁部	黒褐	暗灰	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	20.0	－	－	－	鍔に縦位の穿孔 12c
	39	O	E31	484	大型土坑４	滑石製品	石鍋	口縁部	灰白	灰白	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	31.2	－	－	－	12c
	40	O	E31	504	大型土坑４	滑石製品	石鍋	胴部	暗灰	褐灰	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	－	－	－	－	12c
	41	O	E31	441	大型土坑４	滑石製品	石鍋	口縁部	灰黄褐	灰白	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	25.2	－	－	－	12c
19	42	O	－	342	大型土坑４	滑石製品	石鍋	口縁～胴部	にぶい黄橙	灰白	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	50.0	－	－	－	10c
	43	O	－	－	大型土坑４	滑石製品	石鍋	口縁～胴部	灰白	灰白	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	－	－	－	－	
	44	O	E30	200	大型土坑４	滑石製品	石鍋	底部	オリーブ黒	灰	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	－	8.9	－	－	
	45	O	F31	549	大型土坑４	石器	砥石	－	灰	灰黄	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	46	O	E30	99	大型土坑４	石器	砥石	－	にぶい褐	にぶい褐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	47	O	F31	469	大型土坑４	石器	砥石	－	にぶい黄褐	にぶい黄褐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	48	O	－	294	大型土坑４	陶器	蓋	口縁部	黄褐	黄褐	黄灰	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	口唇部に目跡
20	49	O	－	－	大型土坑４	木製品	建築部材	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	47.0	20.0	6.0	－	両側面と裏側にホゾ穴
21	50	O	－	－	大型土坑４	木製品	板材	側板？	－	－	－	－	－	－	－	－	－	32.0	8.0	0.6	－	曲物側板？
	51	O	－	－	大型土坑４	木製品	柄？	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	34.0	5.6	3.0	－	
23	52	O	G30	74	大型土坑５	黒色土器B類	椀	底部	灰	黒	－		○		－	ミガキ	ミガキ	－	6.0	－	－	底部刻書
	53	O	G30	43	大型土坑５	土師器	坏	口縁～底部	浅黄橙	浅黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	9.2	5.7	3.1	－	糸切り
	54	O	－	27 28 29 30	大型土坑５	土師器	坏	胴～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○	－	ナデ	ナデ	－	8.3	－	－	糸切り
	55	O	G30	20 64	大型土坑５	青磁	椀	口縁部	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白	－	－	－	－	－	－	26.2	－	－	－	龍泉窯系
	56	O	G30	15	大型土坑５	備前	擂鉢	口縁部	灰赤	にぶい赤褐	にぶい赤褐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	１６c 前半
	57	O	－	－	大型土坑５	鉄滓	椀形滓	－	明黄褐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○	一部に強い反応
	58	O	－	－	大型土坑５	鉄滓	椀形滓	－	褐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○	
	59	O	G30	－	大型土坑５	土製品	羽口	－	灰	灰黄	－	－	－	○	小石粒	－	－	－	－	－	△	
	60	O	G30	－	大型土坑５	土製品	羽口	－	にぶい黄褐	にぶい黄褐	－	○			小石粒 白片岩	－	－	－	－	－	○	
24	61	O	－	14	大型土坑６	鉄滓	鉄塊系遺物	－	橙	橙	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○	裏に強い反応
	62	O	－	16	大型土坑６	鉄滓	椀形滓	－	にぶい茶	にぶい茶	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○	一部に強い反応
	63	O	－	－	大型土坑６	鉄滓	椀形滓	－			－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○	裏に強い反応
25	64	O	H29	10	大型土坑７	土師器	坏	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	－	6.6	－	－	糸切り 外面にススク
	65	O	H29	29	大型土坑７	土師器	坏	胴～底部	灰白	灰白	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	－	7.2	－	－	糸切り
	66	O	H29	17	大型土坑７	土師器	坏	胴～底部	にぶい黄橙	灰黄褐	－		○		－	ナデ	ナデ	－	8.0	－	－	糸切り
	67	O	H29	20	大型土坑７	土師器	坏	胴～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	－	8.8	－	－	糸切り
	68	O	H29	14	大型土坑７	土師器	小皿	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	7.4	5.0	2.5	－	灯明皿 15・16c
	69	O	H29	－	大型土坑７	白磁	椀	口縁～胴部	灰白	灰白	灰白	－	－	－	－	－	－	16.6	－	－	－	11c 前～12c 後
	70	O	H29	26	大型土坑７	青磁	椀	胴～底部	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	71	O	H29	12	大型土坑７	須恵器	－	底部	黒褐	灰黄褐	－	○			小石粒 白片岩	平行タタキ	当て具	－	11.2	－	－	同心円当て具
28	1	O	G31	343	溝１	黒色土器A類	椀	胴～底部	灰白	褐灰	－		○		赤色粒	ミガキ	ミガキ	－	6.2	－	－	底部刻書 11～12c 頃
	2	O	F31	230	溝１	土師器	坏	口縁～底部	にぶい橙	にぶい橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	13.4	9.2	3.1	－	
	3	O	G30	373	溝１	土師器	坏	口縁～底部	浅黄橙	にぶい黄橙	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	15.6	9.8	3.0	－	糸切り 16c 頃
	4	O	－	－	溝１	須恵器	甕	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	－	○			白片岩	平行タタキ	当て具	14.4	－	－	－	
	5	O	F31	416	溝１	土師器	焼塩壺	口縁～胴部	灰褐	にぶい黄橙	－			○	－	指ナデ	布目	13.8	－	－	－	外面ユビオサエ
	6	O	F31	274	溝１	青磁	椀	口縁部	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白	－	－	－	－	－	－	14.6	－	－	－	龍泉窯系 雷文 15c
	7	O	G31	347	溝１	青花	碗	口縁～胴部	灰白	灰白	浅黄橙	－	－	－	－	－	－	12.0	－	－	－	15c 後～16c 前
	8	O	H30	336	溝１	土製品	羽口	－	にぶい黄橙	にぶい橙	－			○	小石粒	ユビオサエ	－	－	－	－	△	
	9	O	G30	389	溝１	土製品	羽口	－	にぶい黄橙	浅黄橙	－			○	小石粒	ユビオサエ	－	－	－	－	×	
30	10	O	G30・31	381 411	溝２	黒色土器A類	椀	口縁～胴部	灰白	暗灰	－		○		赤色粒	ミガキ	ミガキ	16.6	－	－	－	
	11	O	H30	31	溝２	土師器	坏	口縁～底部	褐灰	にぶい黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	11.6	6.0	2.9	－	回転篦削り 糸切り
	12	O	H29	38	溝２	土師器	坏	口縁～底部	浅黄	にぶい黄	－	－	－	－	小石粒 赤色粒 白片岩	ナデ	ナデ	11.2	6.4	3.2	－	14c ～15c
	13	O	H30	5	溝２	土師器	皿	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－		○		－	ナデ	ナデ	10.6	5.6	2.4	－	14c～15c 糸切り
	14	O	H29・30	10 12	溝２	土師器	皿	口縁～底部	浅黄橙	橙	－	○			小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	8.6	5.4	2.1	－	14c～15c 糸切り
	15	O	H29	43	溝２	土師器	皿	口縁～底部	橙	にぶい橙	－	○			赤色粒	摩耗	摩耗	7.2	5.2	1.9	－	14c～15c 糸切り
	16	O	H30	55	溝２	土師器	皿	口縁～底部	にぶい橙	にぶい橙	－	○			－	ナデ	ナデ	9.6	5.6	2.2	－	14c～15c 糸切り
	17	O	H29	32 37	溝２	白磁	椀	口縁～胴部	灰白	灰白	淡黄	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	玉縁口縁 11c～12c
	18	O	－	32	溝２	石器	石臼	完形	灰黄	－	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	31.2	－	9.0	－	
	19	O	－	67	溝２	鉄滓	鉄塊系遺物	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	○	一部に強い反応

L・O・Q調査区遺構内遺物観察表②

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
30	20	O	—	29 30	溝2	鉄滓	流動滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	
	21	O	—	—	溝2	鉄滓	椀形滓	—	にぶい黄褐	にぶい黄褐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	一部に強い反応
	22	O	—	—	溝2	鉄滓	椀形滓	—	橙	橙	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	裏に強い反応
	23	O	0・G30	435	溝2	土製品	羽口	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	—	—	—	—	ユビオサエ	—	8.5	—	—	○	
	24	O	H30	48	溝2	土製品	羽口	—	浅黄橙	浅黄橙	—	—	—	—	—	ユビオサエ	—	9.0	—	—	○	
34	1	Q	H31	—	土坑1	鉄床石	—	—	明黄褐	にぶい黄褐	—	—	—	—	—	—	—	24.0	—	7.4	—	被熱　敲打痕あり
	2	Q	H31	2	土坑3	炉壁	—	—	明褐	暗褐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	
	3	Q	H31	3	土坑3	炉壁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	
35	4	Q	G31	19	土坑5	鉄滓	流動滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	
	5	Q	G31	—	土坑5	鉄滓	鉄塊系遺物	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	裏に強い反応
	6	Q	G31	11	土坑5	鉄滓	炉内滓	—	橙	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	木炭痕
43	1	O	H-I-30-31	—	溝1	青磁	椀	口縁～胴部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	14.0	—	—	—	同安窯系　12c 後
	2	O	H-I-30-31	—	溝1	青磁	椀	口縁～底部	緑灰	緑灰	灰白	—	—	—	—	—	—	14.0	5.6	5.3	—	
	3	O	H-I-30-31	—	溝1	粉青沙器	皿	胴部	灰	灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内外象嵌
	4	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	碗	口縁～胴部	灰白	灰白	浅黄	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	蓮子碗　15c 前後
	5	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	碗	口縁～底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	10.2	4.8	5.6	—	饅頭心系　小野E群
	6	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	碗	口縁～胴部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	12.0	—	—	—	小野E群Ⅶ類　15c 後
	7	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	碗	底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	—	5.0	—	—	
	8	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	碗	底部	灰白	灰白	浅黄	—	—	—	—	—	—	—	5.2	—	—	
	9	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	皿	口縁～底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	18.2	10.8	3.3	—	玉取獅子　15c
	10	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	皿	口縁～胴部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	14.0	—	—	—	
	11	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	碗	口縁～胴部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	14.0	—	—	—	
	12	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	皿	胴～底部	灰白	明緑灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	7.4	—	—	花文　高台内字款
	13	O	H-I-30-31	—	溝1	青花	小坏	底部	明緑灰	明緑灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	2.4	—	—	
	14	O	H-I-30-31	—	溝1	陶器	碗	底部	明褐	暗灰黄	橙	—	—	—	—	—	—	—	4.0	—	—	貝目
	15	O	H-I-30-31	—	溝1	陶器	碗	胴～底部	灰黄褐	灰黄褐	灰黄褐	—	—	—	—	—	—	—	5.8	—	—	薩摩　堂平窯Ⅱ期
	16	O	H30	180	溝1	陶器	碗	胴～底部	褐	褐	灰赤	—	—	—	—	—	—	—	7.1	—	—	
	17	O	H30	179	溝1	陶器	甕	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	褐灰	—	—	—	—	—	—	18.2	—	—	—	薩摩
	18	O	H30	169	溝1	陶器	片口	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	マーブル状	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	薩摩　串木野窯？
	19	O	H-I-30-31	—	溝1	陶器	擂鉢	口縁部	灰オリーブ	浅黄	灰赤	—	—	—	—	—	—	18.0	—	—	—	薩摩　堂平窯Ⅱ期
	20	O	H-I-30-31	—	溝1	陶器	擂鉢	口縁部	浅黄	浅黄	灰褐	—	—	—	—	—	—	33.0	—	—	—	薩摩　堂平窯Ⅱ期
45	21	O	F·G-31	—	溝2	瓦質	擂鉢	口縁～底部	浅黄橙	浅黄橙	—	○			赤色粒	ケズリ ナデ	ナデ	29.6	10.1	11.6	—	8条1単位の櫛目
	22	O	F·G-31	—	溝2	瓦質	擂鉢	底部	にぶい黄褐	灰黄褐	—	—	—	—	小石粒	—	—	—	18.6	—	—	
	23	O	F31	290	溝2	陶器	擂鉢	口縁部	赤褐	赤褐	赤褐	—	—	—	—	—	—	32.6	—	—	—	肥前　黄褐釉
	24	O	F·G-31	—	溝2	陶器	擂鉢	口縁部	にぶい赤褐	褐灰	—	—	—	—	—	—	—	30.6	—	—	—	備前系　15c 前後
	25	O	F·G-31	—	溝2	陶器	擂鉢	底部	明黄褐	明黄褐	—	—	—	—	—	—	—	—	11.6	—	—	備前系
	26	O	F·G-31	—	溝2	陶器	擂鉢	底部	にぶい赤褐	赤褐	—	—	—	—	—	—	—	—	22.0	—	—	備前系
	27	O	F·G-31	430	溝2	陶器	擂鉢	底部	にぶい赤褐	褐灰	—	—	—	—	—	—	—	—	10.0	—	—	備前系
	28	O	F·G-31	—	溝2	陶器	擂鉢	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	褐灰	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	薩摩　18c 代
	29	O	F·G-31	—	溝2	陶器	壺	口縁部	オリーブ黒	浅黄	にぶい赤褐	—	—	—	—	—	—	14.4	—	—	—	薩摩
	30	O	F·G-31	—	溝2	陶器	壺	口縁部	暗オリーブ	灰オリーブ	橙	—	—	—	—	—	—	13.8	—	—	—	薩摩
	31	O	F·G-31	—	溝2	陶器	壺	胴～底部	黒褐	黒褐	灰褐	—	—	—	—	—	—	—	16.0	—	—	薩摩　底部に貝目
	32	O	F·G-31	—	溝2	陶器	甕	口縁部	黒褐	黒褐	黒褐	—	—	—	—	—	—	29.5	—	—	—	薩摩
	33	O	F·G-31	—	溝2	陶器	甕	口縁部	浅黄	浅黄	にぶい褐	—	—	—	—	—	—	29.8	—	—	—	薩摩
	34	O	F·G-31	—	溝2	陶器	甕	口縁部	浅黄	浅黄	暗灰黄	—	—	—	—	—	—	33.6	—	—	—	薩摩　口唇部に貝目
46	35	O	F·G-31	335	溝2	陶器	摺鉢	口縁部	浅黄	にぶい橙	—	—	—	—	—	—	—	32.2	—	—	—	薩摩
	36	O	F·G-31	—	溝2	陶器	擂鉢	胴部	暗灰黄	暗灰黄	灰赤	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	薩摩
	37	O	F·G-31	—	溝2	陶器	擂鉢	胴～底部	オリーブ褐	オリーブ褐	褐灰	—	—	—	—	—	—	—	14.6	—	—	
	38	O	F·G-31	—	溝2	陶器	甕？	胴～底部	にぶい黄	浅黄	にぶい橙	—	—	—	—	—	—	—	16.6	—	—	薩摩　底部に貝目
	39	O	F·G-31	—	溝2	陶器	甕	胴部	オリーブ黒	灰オリーブ	灰赤	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	薩摩　把手付
	40	O	F·G-31	—	溝2	陶器	蓋	口縁部	オリーブ黒	浅黄	灰赤	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	薩摩　17後～18c
	41	O	F·G-31	—	溝2	陶器	蓋	口縁部	オリーブ黒	浅黄	灰赤	—	—	—	—	—	—	28.6	—	—	—	薩摩
	42	O	F·G-31	192	溝2	瓦質	火舎	胴部	暗褐	褐	—			○	赤色粒	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	43	O	F·G-31	—	溝2	土師質	蓋	頂～底部	にぶい橙	灰黄	—		○		赤色粒	—	—	—	—	2.7	—	花弁状列点文
	44	O	F·G-31	—	溝2	石器	砥石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	45	O	F·G-31	—	溝2	土製品	羽口	—	灰黄	にぶい黄橙	—	○			小石粒	—	—	—	—	—	×	

L・O・Q調査区一般遺物観察表①

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
36	1	L	C27	1067 1068	Ⅱ	土師器	椀	口縁～底部	浅黄橙	橙	—		○	○	小石粒	ナデ	ナデ	13.0	7.2	6.7	—	10c 初
	2	L	B26	1168	Ⅱ	土師器	椀	口縁～底部	明黄褐	明黄褐	—			○	赤色粒	ナデ	ナデ	14.0	7.6	6.3	—	10c
	3	L	B27	842	Ⅱ	土師器	椀	口縁～底部	明黄褐	明黄褐	—	○		○	赤色粒	ナデ	ナデ	12.4	6.0	5.6	—	
	4	L	BC27	1270 1349 1380	Ⅱ	土師器	椀	口縁～底部	橙	橙	—			○	赤色粒	ナデ	ナデ	19.0	9.4	7.5	—	9c 中頃
	5	L	B27	1206	Ⅱ	土師器	椀	口縁～底部	黄橙	浅黄橙	—	○		○	赤色粒	ナデ	ナデ	12.2	6.6	4.0	—	10c
	6	L	B27	800	Ⅱ	土師器	椀	胴～底部	浅黄	浅黄	—			○	赤色粒	ナデ	ナデ	—	6.5	—	—	10c
	7	L	B27	867	Ⅱ	土師器	椀	胴～底部	浅黄橙	浅黄橙	—			○	赤色粒	摩耗	摩耗	—	6.6	—	—	10c
	8	L	C25	308	Ⅱ	土師器	椀	口縁～底部	浅黄橙	浅黄橙	—	○		○	小石粒 赤色粒	摩耗	摩耗	11.0	5.0	4.9	—	薩摩タイプ 10c 初
	9	L	C27	999	Ⅱ	土師器	椀	口縁～底部	黄橙	黄橙	—	○		○	—	ナデ	ナデ	12.8	5.9	3.3	—	10c
	10	L	C27	696	Ⅱ	土師器	椀	胴～底部	橙	橙	—	○		○	赤色粒	ナデ	ナデ	—	5.4	—	—	高台打欠き
	11	L	B27	817	Ⅱ	土師器	椀	胴～底部	黄橙	黄橙	—	○	○	○	小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	—	4.0	—	—	10c 高台打欠き
	12	L	—	—	—	土師器	坏	口縁～底部	明黄褐	明黄褐	—	○		○	—	ナデ	ナデ	14.2	8.0	4.7	—	10c
	13	L	C27	1367	Ⅱ	土師器	坏	口縁～底部	浅黄橙	浅黄橙	—	○		○	赤色粒	ナデ	ナデ	11.0	5.4	4.0	—	10c
	14	L	C27	1316 1319 683	Ⅱ	土師器	坏	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	○		○	赤色粒	ナデ	ナデ	13.4	6.8	4.3	—	10c
	15	L	B27	761	—	土師器	坏	口縁～底部	明黄褐	明黄褐	—	○		○	小石粒 赤色粒	摩耗	摩耗	14.4	7.6	3.8	—	10c
	16	L	C27	547	Ⅱ	土師器	坏	胴～底部	浅黄橙	浅黄橙	—			○	小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	—	5.8	—	—	10c
	17	L	B27	845	Ⅱ	土師器	坏	胴～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	○		○	小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	—	6.6	—	—	10c
	18	L	B27	164	Ⅱ	土師器	坏	胴～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	○	○	○	小石粒 赤色粒	摩耗	摩耗	—	8.0	—	—	10c
	19	L	C27	1070 1069 520	Ⅱ	黒色土器A類	椀	口縁～底部	浅黄橙	黒	—	○		○	赤色粒	ナデ	ミガキ	12.7	6.6	6.2	—	10c
	20	Q	I32	164	Ⅲ	黒色土器A類	椀	胴～底部	淡黄	黒	—	○			—	ナデ	ミガキ	—	7.0	—	—	10c
	21	L	B27	945	Ⅱ	黒色土器A類	椀	口縁～底部	淡黄	黒	—			○	—	ナデ	ミガキ	6.9	—	—	—	10c
	22	O	—	一括	—	黒色土器B類	椀	胴～底部	黒	黒	—			○	—	ミガキ	ミガキ	—	5.9	—	—	11～12c 底部刻書
	23	L	C27	1075	Ⅱ	赤色土器A類	椀	口縁～胴部	にぶい橙	赤褐	—			○	小石粒 赤色粒	ナデ	ミガキ	16.0	—	—	—	
	24	O	E30	120	Ⅱ	赤色土器A類	椀	胴～底部	橙	橙	—	○		○	小石粒	ミガキ	ミガキ	—	7.0	—	—	内面朱塗り
37	25	L	C27	1307	Ⅱ	土師器	皿	完形	浅黄橙	浅黄橙	—	○		○	赤色粒	ナデ	ナデ	16.0	8.6	1.9	—	9c
	26	L	B27	771	Ⅱ	土師器	皿	口縁～底部	黄橙	黄橙	—	○		○	小石粒 赤色粒	摩耗	摩耗	13.0	6.5	2.5	—	10c 初
	27	L	C27	1154	Ⅱ	土師器	椀？	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	○			—	ナデ	ナデ	9.6	—	—	—	
	28	L	B27	866	Ⅱ	土師器	耳皿	口縁～底部	浅黄橙	橙	—	○			小石粒 赤色粒 白片岩	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	29	L	C27	1061	Ⅱ	土製品	紡錘車	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—		○		赤色粒	摩耗	摩耗	—	—	—	—	土師椀を転用
	30	L	C27	1004	Ⅱ	—	土錘	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	○	○		赤色粒	摩耗	—	—	—	—	—	

L・O・Q調査区一般遺物観察表②

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
37	31	L	C27	597 754	—	土師器	甕	口縁～胴部	橙	橙	—	○		○	小石粒	ナデ	ナデ ケズリ	21.4	—	—	—	9ｃ中頃
	32	L	B27	777 751	Ⅱ	土師器	甕	口縁～胴部	橙	橙	—	○		○	赤色粒	ナデ	ケズリ ナデ	19.0	—	—	—	内面スス
	33	L	C27	729	Ⅱ	土師器	甕	口縁～胴部	橙	明黄褐	—			○	小石粒	ナデ	ナデ ケズリ	22.4	—	—	—	
	34	L	—	27	Ⅱ	土師器	甕	口縁～胴部	明褐	橙	—	○			赤色粒	ナデ	ナデ 指押え	28.5	—	—	—	
	35	L	C27	1053	Ⅱ	土師器	甕	口縁部	明褐	橙	—	○			小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	36	L	C27	1126	Ⅱ	土師器	甕	口縁～胴部	浅黄橙	浅黄	—	○	○	○	小石粒	ケズリ	ケズリ	24.6	—	—	—	
	37	L	C27	670	Ⅱ	土師器	甕	口縁～胴部	明褐	明黄褐	—	○		○	小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	21.8	—	—	—	
	38	L	B27	823 780 781	Ⅱ	土師器	甕	口縁～胴部	橙	にぶい黄橙	—	○		○	小石粒 赤色粒	ケズリ ナデ	ケズリ	25.0	—	—	—	
	39	L	B27	1414 943	Ⅱ	土師器	甕	口縁～胴部	にぶい黄橙	浅黄橙	—	○		○	小石粒	ナデ	ナデ 指押え	30.8	—	—	—	
38	40	L	D26	484	Ⅱ	須恵器	壺	口縁部	灰	灰	—			○	—	格子目タタキ	ナデ	—	—	—	—	
	41	L	C27	1102	Ⅱ	須恵器	—	胴部	灰黄褐	にぶい黄褐	—		○		赤色粒	格子目タタキ	同心円当て具	—	—	—	—	
	42	O	—	—	—	須恵器	甕	胴部	灰白	灰白	—	○			輝石	平行タタキ	ケズリ	—	—	—	—	
	43	L	—	—	—	須恵器	甕	胴部	にぶい黄褐	浅黄	—	○	○	○	赤色粒	格子目タタキ	板状当て具	—	—	—	—	
	44	L	B27	1219 854	Ⅱ	須恵器	甕	胴部	黄褐	灰黄	—		○		小石粒	平行タタキ	板状当て具	—	—	—	—	
39	45	Q	—	—	—	土師器	小皿	完形	淡黄	淡黄	—	○			—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	灯明皿　糸切り
	46	O	—	—	—	青磁	椀	口縁～胴部	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	蓮弁文
	47	O	—	—	—	青磁	椀	口縁～胴部	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白	—	—	—	—	—	—	12.6	—	—	—	龍泉窯系　15・16c
	48	O	—	—	—	青磁	椀	胴～底部	灰オリーブ	灰オリーブ	浅黄	—	—	—	—	—	—	—	4.8	—	—	龍泉窯系　15・16c
	49	O	—	—	—	青磁	椀	胴部	緑灰	緑灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	龍泉窯系　15・16c
	50	O	—	—	—	青磁	椀	胴～底部	緑灰	緑灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	8.0	—	—	14・15c　草花文
	51	O	N30	—	Ⅱ	粉青沙器	碗	胴～底部	淡黄	淡黄	灰	—	—	—	—	—	—	—	5.8	—	—	見込み象嵌
	52	O	—	—	—	青花	碗	口縁～胴部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	12.8	—	—	—	
	53	L	—	—	—	青花	碗	胴～底部	灰白	灰白	淡黄	—	—	—	—	—	—	—	5.5	—	—	小野分類碗Ｃ群１類
	54	O	—	—	—	青花	碗	胴部	明緑灰	明緑灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	小野分類碗Ｃ群１類
	55	O	F28	一括	表土	青花	碗	胴～底部	明緑灰	明緑灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	5.4	—	—	小野分類碗Ｃ群Ⅲ類
	56	L	—	31	Ⅰ	青花	皿	胴～底部	明オリーブ灰	明オリーブ灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	4.4	—	—	小野分類皿Ｃ群１類
	57	O	—	—	—	青花	皿	胴～底部	明緑灰	明緑灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	3.0	—	—	碁笥底　15・16ｃ
	58	O	I29	一括	—	青花	皿	口縁～底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	—	8.2	—	—	皿Ｅ群
40	59	O	—	—	—	樺万丈	—	胴部	灰	灰	—			○	小石粒	格子目タタキ	ケズリ	—	—	—	—	胎土マーブル　13c前
	60	O	—	—	—	樺万丈	—	胴部	灰	灰	—			○		格子目タタキ	ケズリ	—	—	—	—	胎土マーブル　13c前
	61	L	—	—	—	須恵器	擂鉢	口縁～胴部	灰	灰	—			○	小石粒	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	62	L	D26	131	Ⅰ	瓦質土器	擂鉢	口縁部	浅黄	灰黄	—		○		—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	63	L	—	—	—	瓦質土器	擂鉢	口縁～胴部	灰白	灰白	—	○		○	—	ナデ	ナデ	37.6	—	—	—	
	64	Q	—	—	—	瓦質土器	擂鉢	口縁～胴部	灰白	灰白	—		○		輝石	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	65	O	—	—	—	瓦質土器	擂鉢	口縁～胴部	浅黄橙	浅黄橙	—	○			赤色粒 白片岩	ナデ	ナデ	—	—	—	—	口縁部に煤
	66	O	—	—	—	瓦質土器	壺	口縁～胴部	灰白	灰白	—	○			小石粒	ナデ	ナデ	20.9	—	—	—	
41	67	O	—	—	—	滑石製品	石鍋	口縁部	暗灰	灰白	—	—	—	—	—	ケズリ	ケズリ	—	—	—	—	桶状　外面スス
	68	O	—	—	—	滑石製品	石鍋	胴部	—	—	—	—	—	—	—	ケズリ	ケズリ	—	—	—	—	
	69	O	H30	165	Ⅱ	土製品	羽口	—	—	—	—		○		—	ナデ	—	—	—	—	—	外面に溶鉄付着
	70	Q	一括	—	—	土製品	羽口	—	にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙	—	—	—	赤色粒	—	—	—	—	—	△	
47	46	O	I29	一括	表土	天目碗	碗	胴～底部	淡黄	黒	淡黄	—	—	—	—	—	—	—	4.5	—	—	中国α肥前　黒褐色鉄釉
	47	O	—	—	—	陶器	碗	口縁～底部	灰	灰	灰白	—	—	—	—	—	—	12.4	5.6	5.0	—	陶胎染付　肥前　18c前
	48	O	—	—	—	青磁	火入れ	胴～底部	灰オリーブ	灰黄	灰白	—	—	—	—	—	—	—	6.5	—	—	18c
	49	O	—	—	—	陶器	壺	口縁部	黄灰	黄灰	灰褐	—	—	—	—	—	—	13.0	—	—	—	薩摩焼　口唇部に貝目
	50	O	I29	一括	表土	陶器	擂鉢	胴～底部	にぶい褐	にぶい褐	灰黄	—	—	—	—	—	—	—	15.8	—	—	串木野窯か？
	51	O	F28	一括	表土	染付	皿	胴～底部	明オリーブ灰	明オリーブ灰	灰白	—	—	—	—	—	—	—	6.4	—	—	18c
	52	L	—	62	Ⅱ	陶器	めんこ	—	オリーブ黒	オリーブ黒	灰褐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	薩摩焼
48	53	Q	F－31	—	—	木製品	杭	先端部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	34.0	5.0	4.8	—	
	54	Q	F－31	—	—	木製品	杭	先端部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26.0	2.0	1.6	—	
	55	Q	F－31	—	—	木製品	杭	先端部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	27.0	3.0	2.8	—	
	56	Q	F－31	—	—	木製品	杭	先端部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26.4	3.6	3.6	—	
	57	Q	F－31	—	—	木製品	杭	先端部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	37.2	3.4	3.4	—	
	58	Q	F－31	—	—	木製品	杭	先端部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	29.4	3.4	3.0	—	
	59	Q	F－31	—	—	木製品	杭	先端部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23.8	2.6	2.6	—	
	60	Q	F－31	—	—	木製品	杭	先端部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	46.0	9.6	9.4	—	柱の可能性あり

N調査区遺構内遺物観察表①

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
53	1	Nn7	H26	—	中世墓２	六道銭	洪武通寶	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	初鋳年1368年
	2	Nn7	H26	—	中世墓２	六道銭	洪武通寶	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	初鋳年1368年
	3	Nn7	H26	—	中世墓２	六道銭	朝鮮通寶	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	初鋳年1423年
54	4	Nn10	G29	—	中世墓３	六道銭	洪武通寶	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	初鋳年1368年
	5	Nn10	G29	2	中世墓３	土師器	小皿	完形	橙	浅黄橙	—			○	—	ナデ	ナデ	8.6	5.6	1.8	—	
	6	Nn10	G29	1	中世墓３	土師器	小皿	完形	浅黄橙	浅黄橙	—			○	—	ナデ	ナデ	7.9	5.2	1.8	—	灯明皿　13~14ｃ
	7	Nn10	G29	4	中世墓３	土師器	小皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—			○	—	ナデ	ナデ	7.8	4.8	2.0	—	
	8	Nn10	G29	6	中世墓３	土師器	皿	完形	浅黄橙	浅黄橙	—		○		—	ナデ	ナデ	14.2	7.8	2.5	—	
	9	Nn10	G29	3	中世墓３	土師器	皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—			○	—	ナデ	ナデ	12.7	6.5	2.8	—	
	10	Nn10	G29	5	中世墓３	土師器	小皿	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—		○		—	ナデ	ナデ	8.6	6.0	2.1	—	
55	11	Nn5	M24	—	中世墓４	六道銭	不明	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	錆のため判読不能
	12	Nn5	M24	—	中世墓４	六道銭	不明	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	錆のため判読不能
	13	Nn5	M24	—	中世墓４	六道銭	不明	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	錆のため判読不能
70	21	N	—	—	石切場	染付	碗	口縁～底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	—	3.9	4.8	—	肥前系 焼きひずみ
	22	N	—	—	石切場	染付	碗	口縁～底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	8.8	3.6	4.4	—	肥前系
	23	N	—	—	石切場	染付	碗	口縁～底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	—	3.2	—	—	肥前系
	24	N	—	—	石切場	染付	碗	口縁～底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	—	4.4	—	—	肥前系 波佐見焼
	25	N	—	—	石切場	陶器	擂鉢	口縁～底部	黒褐	灰褐	灰赤	—	—	—	—	—	—	21.0	—	—	—	
	29	N	—	—	石切場	銭	寛永通寶	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	文字寛永通寶
76	1・2	Nn7	K27	—	鍛冶遺構１	鉄滓	炉底滓	一部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	
79	3	Nn7	K27	—	鍛冶遺構４	炉壁	—	一部	黒褐	橙	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	滓付着
80	4	Nn7	K27	—	鍛冶遺構５	鉄滓	椀形滓	一部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	
81	5	Nn7	K27	—	鍛冶遺構５	土製品	羽口	ほぼ完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	ユビオサエ
	6	Nn7	K27	—	鍛冶遺構５	土製品	羽口	ほぼ完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	ユビオサエ
87	7	Nn9	G27		鍛冶遺構15	石製品	鉄床石	ほぼ完形	にぶい赤褐	明褐灰	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	花崗岩　被熱
88	1	Nn7	J27	448	大型土坑１	土師器	杯	口縁～底部	にぶい橙	にぶい橙	—	○		○	赤色粒	摩耗	摩耗	—	7.0	—	—	糸切り　16c 前後
	2	Nn7	J27	449	大型土坑１	土師器	杯	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	○		○	—	摩耗	摩耗	12.7	10.5	3.2	—	糸切り　16c 前後
	3	Nn7	J27	457	大型土坑１	土師器	小皿	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	—	○			小石粒	ナデ	ナデ	8.0	5.6	2.1	—	灯明皿　16c 前後
	4	Nn7	J27	442 443	大型土坑１	須恵器	甕	胴～底部	灰	灰	—	○			小石粒	タタキ	ケズリ	—	13.8	—	—	
91	5	Nn7	I26	399	大型土坑２	赤色土器B類	杯	口縁～底部	橙	明赤褐	—			○	赤色粒	ナデ	ナデ	12.8	8.6	3.7	—	糸切り　15c
	6	Nn7	I26	397	大型土坑２	土師器	椀	胴～底部	橙	橙	—			○	赤色粒	ナデ	ナデ	—	6.8	—	—	糸切り

N調査区遺構内遺物観察表②

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
91	7	Nn7	I26	一括	大型土坑２	土師器	小皿	完形	黒褐	黒褐	－		○		小石粒　赤色粒	ナデ	ナデ	6.3	4.3	2.1	－	全面に煤付着
	8	Nn7	H26	258	大型土坑２	土師器	小皿	完形	にぶい橙	にぶい橙	－		○		白片岩	ナデ	ナデ	7.5	5.6	2.0	－	糸切り 外面に一部朱
	9	Nn7	H26	一括	大型土坑２	土師器	小皿	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	○			赤色粒	ナデ	ナデ	8.0	6.7	2.2	－	糸切り
92	10	Nn10	H29	15	大型土坑３	土師器	皿	ほぼ完形	浅黄橙	浅黄橙	－	○			－	－	－	8.7	3.7	2.4	－	糸切り
	11	Nn10	G28	101	大型土坑３	青磁	椀	口縁～胴部	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白	－	－	－	－	－	－	12.8	－	－	－	
	12	Nn10	H29	－	大型土坑３	石製品	鉄床石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	安山岩　被熱

N調査区遺構内遺物（石切場）観察表①

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	法量（cm）					備考
									最大長	最大幅	最大厚	刃部	その他	
67	2	N	－	－	石切場	金属製品	矢	完形	9.2	3.4	3.7	2.6	4.3	イッスン
	3	N	n6	－	石切場	金属製品	矢	完形	10.1	3.4	3.5	2.5	－	イッスン
	4	N	－	－	石切場	金属製品	矢	完形	8.0	4.7	3.8	3.4	4.8	チュウヤ
	5	N	－	－	石切場	金属製品	矢	完形	8.0	3.3	4.9	3.0	－	イッスン
	6	N	－	－	石切場	金属製品	矢	完形	7.4	3.4	3.0	2.6	4.9	チュウヤ
	7	N	－	－	石切場	金属製品	矢	完形	7.6	2.7	2.5	2.0	－	イッスン
	8	N	n6	－	石切場	金属製品	矢	完形	6.0	3.1	2.9	2.0	－	トビヤ
	9	N	－	－	石切場	金属製品	矢	完形	6.4	3.4	2.2	2.5	－	チュウヤ
	10	N	n3	－	石切場	金属製品	ツルハシ	完形	26.3	4.3	4.0	－	－	
	11	N	－	－	石切場	金属製品	ノミ	完形	25.4	2.5	2.3	－	－	
68	12	N	n3	－	石切場	金属製品	テコ	完形	44.1	2.6	2.3	4.7	－	
	13	N	n3	－	石切場	金属製品	用途不明	ほぼ完形？	42.4	1.6	1.5	－	－	先端の尖った棒状
	14	N	－	－	石切場	金属製品	用途不明	完形	16.3	2.1	0.7	0.8	－	ノミ状の形態

N調査区遺構内遺物（石切場）観察表②

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	法量（cm）					備考
									最大長	最大幅	最大厚	刃部	その他	
68	15	N	－	－	石切場	金属製品	用途不明	完形	21.5	2.6	1.1	－	－	ノミ状の形態
	16	N	n3	－	石切場	金属製品	用途不明	完形	18.4	2.4	1.0	－	－	ノミ状の形態
	17	N	n3	21	石切場	金属製品	用途不明	一部？	24.6	1.3	0.8	－	－	上端付近に留め具
	18	N	n6	－	石切場	金属製品	蹄鉄	完形	10.4	2.0	0.6	－	－	
69	19	N	n6	－	石切場	金属製品	鍬	完形	35.0	11.5	0.5	－	－	
	20	N	n6	－	石切場	金属製品	土掘り具	完形	31.0	6.4	2.9	8.3	－	柄の一部残存
70	26	N	－	－	石切場	金属製品	煙管	雁首	10.8	0.8	0.8	－	－	18c 後～19c
	27	N	－	－	石切場	金属製品	煙管	羅宇	7.0	0.7	0.7	－	－	18c 後～19c
	28	N	－	－	石切場	金属製品	煙管	吸口	6.0	0.6	－	－	吸口０．３	18c 後～19c

N調査区一般遺物観察表①

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
50	1	N-n9	G28	356	Ⅲ	黒色土器A類	椀	口縁～胴部	にぶい黄	黒	－		○		赤色粒	ミガキ	ミガキ	17.3	－	－	－	
	2	N-n9	G28	754	Ⅲ	黒色土器A類	椀	口縁～胴部	灰黄	黒	－		○		－	ミガキ	ミガキ	19.8	－	－	－	
	3	N-n9	G28	820	Ⅲ	黒色土器A類	椀	胴～底部	明黄褐	にぶい黄橙	－		○		赤色粒	ナデ	ミガキ	－	7.4	－	－	ヘラ切り ススト付着
	4	N-n9	G28	173 174	Ⅲ	黒色土器A類	椀	胴～底部	にぶい黄橙	黒	－			○	小石粒	ミガキ	ミガキ	－	7.2	－	－	
	5	N-n9	G28	751	－	黒色土器A類	椀	胴～底部	明赤褐	黒	－		○		－	ミガキ	ミガキ	－	6.8	－	－	9c 後半
	6	N-n9	G28	179	Ⅲ	黒色土器A類	椀	胴～底部	にぶい橙	黒	－		○		－	ミガキ	ミガキ	－	7.0	－	－	11～12c ススト付着
	7	N-n9	G28	64 81	Ⅲ	赤色土器B類	椀	胴～底部	明赤褐	明赤褐	－	○			小石粒 赤色粒	ミガキ	ミガキ	－	11.1	－	－	
	8	N-n9	G28	771 769 799	Ⅲ	土師器	椀	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	－		○	○	赤色粒	ナデ	ナデ	－	8.6	－	－	ススト付着
	9	N-n9	G28	770	Ⅲ	土師器	椀	胴～底部	にぶい橙	橙	－	○			赤色粒	ナデ	摩耗	－	8.3	－	－	
	10	N-n9	G28	593	Ⅱ	土師器	椀	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	－	6.0	－	－	
	11	N-n9	G27	504	Ⅲ	墨書土器	坏	胴～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	－	7.0	－	－	ヘラ切り
	12	N-n9	G28	28　55	Ⅲ	土師器	坏	ほぼ完形	橙	橙	－	○			赤色粒	ナデ	ナデ	12.6	6.0	4.2	－	ススト付着
	13	N-n9	G28	471	Ⅲ	土師器	坏	ほぼ完形	にぶい黄	にぶい黄	－		○		－	ナデ 箆削り	ナデ	14.8	6.7	4.0	－	ススト付着
	14	N-n9	H28	617	Ⅲ	土師器	坏	口縁～底部	明黄褐	明黄褐	－			○	小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	13.5	8.6	2.8	－	11～12c
	15	N-n9	－	13	Ⅱ	土師器	坏	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	○	○		小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	14.8	9.6	3.0	－	11～12c
	16	N-n9	H27	92	Ⅲ	土師器	杯	口縁～胴部	浅黄	浅黄	－		○		小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	12.0	－	－	－	
	17	N-n9	－	100	Ⅲ	土師器	皿	ほぼ完形	橙	橙	－	○			赤色粒	ナデ	ナデ	8.3	4.3	1.5	－	
	18	N-n9	H27	518	Ⅱ	土師質	紡錘車？	－	淡黄	淡黄	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	－	7.0	－	－	孔未貫通
	19	N-n9	G28	474	Ⅲ	土師器	甕	口縁部	にぶい黄橙	黄褐	－	○		○	－	ケズリ	ナデ	28.0	－	－	－	ススト付着
	20	N-n9	G27	1158	Ⅱ	土師器	甕	口縁～胴部	にぶい黄橙	暗灰黄	－	○			－	ケズリ ナデ	ナデ	14.6	－	－	－	ススト付着
	21	N-n9	G28	737	Ⅱ	須恵器	椀	胴～底部	灰黄	浅黄	－	○		○	小石粒	ナデ	ナデ	－	7.6	－	－	
	22	N-n9	－	33	Ⅱ	須恵器	壺	頚部	灰	灰	－	－	－	－	白片岩	ナデ	ナデ	－	－	－	－	
	23	N-n9	G28	363	Ⅲ	須恵器	甕	頚～肩部	灰オリーブ	にぶい黄橙	－	－	－	－	白片岩	平行タタキ	同心円当て具	－	－	－	－	
	24	N-n9	G28	194 545 591	Ⅱ Ⅲ	須恵器	甕	胴部	にぶい赤褐	橙	－	○			－	平行タタキ	－	－	－	－	－	
	25	N-n9	H28	244	Ⅲ	須恵器	甕	胴部	橙	橙	－	－	－	－	白片岩	平行タタキ	－	－	－	－	－	
51	26	N-n7	－	259	Ⅱ	黒色土器A類	椀	胴～底部	にぶい黄橙	黒褐	－		○		－	ミガキ	ミガキ	－	7.2	－	－	10c 中頃
	27	N-n7	G28	343	Ⅲ	土師器	甕	口縁～胴部	にぶい橙	○	○	○		○	小石粒	ナデ	ケズリ	28.0	－	－	－	
52	28	N-n10	G28	757 759 755	Ⅲ Ⅳ	黒色土器A類	椀	ほぼ完形	黒	灰白	－		○		赤色粒	ミガキ	ミガキ	18.4	7.8	5.4	－	11～12c
	29	N-n10	F28	一括	表土	須恵器	甕	胴部	灰オリーブ	灰白	－	○		○	－	格子目タタキ	板ナデ	－	－	－	－	
101	1	N-n7	J27	439	－	土師器	Ⅲ	口縁～底部	橙	橙	－			○	小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	8.6	7.5	1.3	－	12c 後半～13c 前半
	2	N-n7	J27	431	－	土師器	Ⅲ	口縁～底部	橙	橙	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	8.6	7.5	1.2	－	12c 後半～13c 前半
	3	N-n7	J27	一括	－	青磁	椀	口縁～胴部	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	龍泉窯系 13c 前後
	4	N-n7	－	－	－	土師質	茶釜	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－		○		－	ナデ	ナデ	15.4	－	－	－	中世末 ススト付着
	5	N-n7	J27	一括	－	滑石製品	石鍋	口縁～胴部	黒褐	明褐灰	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	18.0	－	－	－	ススト付着
	6	N-n7	－	－	－	石製品	石臼	上臼	褐灰	褐灰	－	－	－	－	－	－	－	－	－	15.0	－	安山岩製
102	7	N-n9	G28	196 197 200	Ⅲ	黒色土器A類	椀	胴～底部	浅黄橙	黒	－			○	赤色粒	ミガキ	ミガキ	－	7.0	－	－	糸切り 11～12c
	8	N-n9	H27	268 277	Ⅲ	黒色土器A類	椀	胴～底部	にぶい黄	黒	－		○		小石粒	ミガキ	ミガキ	－	6.0	－	－	糸切り 11～12c
	9	N-n9	H28	463	Ⅲ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	淡黄	淡黄	－		○		－	ナデ	ナデ	11.0	9.2	1.9	－	糸切り 11～12c
	10	N-n9	G27	66	Ⅲ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	浅黄橙	浅黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	8.6	7.6	1.2	－	糸切り 11～12c
	11	N-n9	G27	477	Ⅲ	須恵器	擂鉢	口縁部	灰	灰	－	－	－	－	小石粒 白片岩	ケズリ	ナデ	－	－	－	－	
	12	N-n9	－	－	Ⅲ	須恵器	擂鉢	口縁部	黄灰	黄灰	－	－	－	－	白片岩	ケズリ	ナデ	－	－	－	－	
	13	N-n9	H27	97	Ⅲ	瓦質	擂鉢	口縁～底部	灰白	灰白	－			○	小石粒	ケズリ	摩耗	27.2	11.2	10.3	－	
	14	N-n9	G27	122	Ⅲ	瓦質	擂鉢	口縁部	灰	淡黄	－			○	－	ケズリ	ナデ	－	－	－	－	
	15	N-n9	Q28	227	Ⅲ	青磁	椀	口縁～胴部	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白	－	－	－	－	－	－	16.2	－	－	－	鎬蓮弁 13c 前後
	16	N-n9	Q28	240	Ⅲ	青磁	椀	口縁～胴部	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白	－	－	－	－	－	－	15.4	－	－	－	鎬蓮弁 13c 前後
	17	N-n9	I29	一括	表土	青磁	椀	口縁～胴部	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	13c 後半～14c 前後
	18	N-n9	－	－	－	青磁	椀	口縁～胴部	緑灰	緑灰	灰白	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	19	N-n9	G27	77	Ⅲ	青磁	杯	口縁部	緑灰	緑灰	灰白	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	20	N-n9	G28	466	Ⅲ	土師質	把手	－	橙	橙	－	○			赤石粒	ケズリ	－	4.2	－	15.4	－	焙烙把手 ススト付着

N調査区一般遺物観察表②

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
102	21	N-n9	G27	121	Ⅲ	滑石製品	石錘	－	灰白	灰白	－	－	－	－	－	ｹｽﾞﾘ ﾐｶﾞｷ	－	－	－	－	－	
	22	N-n9	H28	343	Ⅲ	土製品	土錘	完形	明黄褐	明黄褐	－			○	赤石粒	摩耗	－	－	－	－	－	
103	23	N-n9	－	12	Ⅱ	滑石製品	石鍋	口縁部	黒	灰	－	－	－	－	－	ケズリ	ケズリ	30.2	－	－	－	桶形 11c
	24	N-n9	H28	137	Ⅲ	滑石製品	石鍋	口縁部	黒褐	黄灰	－	－	－	－	－	ケズリ	－	23.0	－	－	－	14c
	25	N-n9	H27	91	Ⅲ	滑石製品	石鍋	底部	灰	オリーブ黒	－	－	－	－	－	ケズリ	－	－	12.3	－	－	
	26	N-n9	H27	519	Ⅲ	土製品	羽口	－	にぶい黄	淡黄	－	－	－	－	－	ユビオサエ	ユビオサエ	8.2	－	－	○	被熱 磁力反応あり
104	27	N-n9	H28	700	Ⅱ	石器	砥石	－	明黄褐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	28	N-n9	G27	524	Ⅲ	石器	砥石	－	にぶい黄	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	砂岩製

K調査区遺構内遺物観察表①

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
108	1	K	K25	－	中世墓１	土師器	三足付坏	ほぼ完形	橙	橙	－		○		白色粒	ナデ	ナデ	11.8	6.8	4.5	－	糸切り 脚付 仏具
	2	K	K25	－	中世墓１	六道銭	洪武通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1368年
	3	K	K25	－	中世墓１	六道銭	洪武通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1368年
	4	K	K25	－	中世墓１	六道銭	洪武通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1368年
	5	K	K25	－	中世墓１	六道銭	洪武通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1368年
	6	K	K25	－	中世墓１	六道銭	洪武通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1368年
	7	K	K25	－	中世墓１	六道銭	永楽通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1408年
	8	K	K25	－	中世墓１	六道銭	永楽通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1408年
	9	K	K25	－	中世墓２	六道銭	洪武通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1368年
	10	K	K25	－	中世墓２	六道銭	永楽通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1408年
109	11	K	K25	－	中世墓３	六道銭	大観通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1107年
	12	K	K25	－	中世墓３	六道銭	永楽通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1408年
	13	K	K25	－	中世墓３	六道銭	洪武通寶	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	初鋳年1368年
110	1	K	K24	551	礫集積１	青花	蓮子碗	ほぼ完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白	－	－	－	－	－	－	14.8	5.7	5.9	－	小野Ｃ群Ⅰ類 15C 末～16C 前半
111	2	K	K24	－	礫集積１	茶臼	上臼	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	22.5	22.5	16.5	－	
	3	K	K24	－	礫集積１	茶臼	下臼	完形	－	－	－	－	－	－	－	－	－	21.0	29.5	12.0	－	受け皿あり
115	1	K	J26	985	五輪塔廃棄溝	土師器	Ⅲ	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－		○	○	－	ナデ	ナデ	8.0	6.4	1.8	－	糸切り ススけ着
	2	K	K26	993	五輪塔廃棄溝	土師器	Ⅲ	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－		○	○	－	ナデ	ナデ	6.9	4.6	2.1	－	糸切り
	3	K	K25・26	968 970 903 893	五輪塔廃棄溝	土師器	Ⅲ	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－		○	○	小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	7.9	4.6	1.6	－	糸切り
	4	K	K26	1008	五輪塔廃棄溝	土師器	Ⅲ	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－		○	○	小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	8.0	5.0	2.1	－	糸切り
	5	K	K26	893	五輪塔廃棄溝	土師器	Ⅲ	口縁～底部	にぶい橙	にぶい橙	－		○	○	小石粒	ナデ	ナデ	7.8	4.8	2.4	－	糸切り

K調査区遺構内遺物観察表②

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
115	6	K	J26	989	五輪塔廃棄溝	土師器	坏	胴～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○	－	ナデ	ナデ	－	6.3	－	－	糸切り
	7	K	J26	990	五輪塔廃棄溝	瓦質	壺	口縁部	褐灰	褐灰	－			○	－	ミガキ	ナデ	13.2	－	－	－	
	8	K	－	一括	五輪塔廃棄溝	青磁	椀	口縁～胴部	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白	－	－	－	－	－	－	16.0	－	－	－	龍泉窯系
	9	K	K26	1004	五輪塔廃棄溝	陶器	壺	胴～底部	黒褐	にぶい赤褐	暗灰黄	－	－	－	－	－	－	－	14.8	－	－	中国南部産
	10	K	J26	982	五輪塔廃棄溝	青磁	椀	胴～底部	灰オリーブ	灰オリーブ	浅黄橙	－	－	－	－	－	－	－	－	4.2	－	－	龍泉窯系 花文
136	1	K	－	－	－字－石経塚3	土師器	坏	胴～底部	明黄褐	明黄褐	－	○			小石粒	ナデ	ナデ	－	9.4	－	－	糸切り 15c後～16c
138	2	K	－	－	－字－石経塚5	土師器	Ⅲ	口縁～底部	浅黄	浅黄	－		○		－	ナデ	ナデ	9.0	6.2	3.2	－	糸切り 15c後～16c
141	3	K	－	－	－字－石経塚10	土師器	Ⅲ	口縁～底部	浅黄橙	浅黄橙	－			○	－	摩耗	摩耗	13.8	10.4	4.4	－	糸切り 15c後～16c

K調査区一般遺物観察表①

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
105	1	K	J25	381	Ⅱ	黒色土器Ａ類	椀	底部	灰白	黒	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	－	7.0	－	－	高台内底に刻書
	2	K	－	一括	－	土師器	坏	口縁～底部	浅黄橙	浅黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	11.5	8.0	2.8	－	11c 後～12c 前
	3	K	－	－	－	筮書土器	坏	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○	小石粒	ナデ	ナデ	13.5	8.0	4.0	－	ヘラ書「力」
148	1	K	－	－	－	土師器	坏	完形	浅黄橙	浅黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	11.8	7.0	3.5	－	糸切り
	2	K	－	－	－	土師器	小皿	完形	にぶい橙	にぶい橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	8.2	6.2	1.8	－	糸切り
	3	K	K24	545	Ⅱ	土師器	小皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○		ナデ	ナデ	8.4	6.8	2.2	－	糸切り 灯明皿
	4	K	K24	928	Ⅱ	土師器	小皿	完形	橙	橙	－			○	小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	9.2	7.6	2.5	－	糸切り
	5	K	K25	750	Ⅱ	土師器	小皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○		ナデ	ナデ	8.5	5.3	2.4	－	糸切り 灯明皿 朱
	6	K	K26	899	Ⅱ	土師器	小皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	8.2	6.2	1.9	－	糸切り 灯明皿
	7	K	I24 K25	617 937 941	Ⅱ	土師器	小皿	完形	浅黄橙	浅黄橙	－			○		ナデ	ナデ	8.0	5.4	2.0	－	糸切り
	8	K	K25	945	Ⅱ	土師器	Ⅲ	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	8.0	5.3	2.3	－	糸切り 灯明皿
	9	K	K25	935 938	Ⅱ	土師器	小皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○	赤色粒	ナデ	ナデ	7.8	5.4	2.0	－	糸切り 灯明皿
	10	K	L24	691	－	土師器	小皿	完形	橙	橙	－			○		ナデ	ナデ	7.8	5.2	2.1	－	糸切り 灯明皿 朱
	11	K	J25	700	Ⅱ	土師器	小皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○		ナデ	ナデ	7.6	5.0	2.3	－	糸切り
	12	K	J25	879	Ⅱ	土師器	小皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○		ナデ	ナデ	7.6	4.4	2.5	－	糸切り
	13	K	K24	544	Ⅱ	土師器	小皿	完形	浅黄橙	浅黄橙	－			○		ナデ	ナデ	7.4	5.5	2.1	－	糸切り 灯明皿
	14	K	J24	1015	Ⅱ	土師器	小皿	完形	橙	橙	－		○		小石粒 赤色粒	ナデ	ナデ	7.4	6.3	1.7	－	糸切り 灯明皿
	15	K	－	一括	－	土師器	小皿	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○		ナデ	ナデ	7.3	5.2	2.2	－	糸切り
	16	K	L25	887 886	Ⅱ	土師器	小皿	完形	にぶい橙	にぶい橙	－			○		ナデ	ナデ	7.0	6.0	2.0	－	糸切り
	17	K	L25	一括	表土	土師器	小皿	完形	浅黄	浅黄	－		○			ナデ	ナデ	7.0	5.0	2.7	－	糸切り 灯明皿
	18	K	－	一括	－	土師器	小皿	完形	浅黄橙	浅黄橙	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	7.0	5.0	2.2	－	糸切り 灯明皿
	19	K	K25	932	Ⅱ	土師器	小皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－			○		ナデ	ナデ	6.4	4.7	2.6	－	糸切り
	20	K	K24	923	Ⅱ	土師器	小皿	口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	8.8	6.0	1.7	－	糸切り
	21	K	－	295	Ⅰ	土師器	Ⅲ	口縁～底部	橙	橙	－		○		赤色粒	ナデ	ナデ	9.0	7.5	1.1	－	糸切り
	22	K	K24	917	Ⅱ	白磁	坏	口縁～底部	灰	灰	灰白	－	－	－	－	ナデ	ナデ	10.0	6.2	3.0	－	13c 後～14c 前
	23	K	J25	703	Ⅱ	青磁	椀	口縁～胴部	灰褐	灰褐	灰白	－	－	－	－	－	－				－	鎬蓮弁 15c
	24	K	－	－	－	陶器	碗	口縁～底部	黄褐	黄褐	にぶい黄橙	－	－	－	－	－	－	9.4	3.2	5.2	－	萩焼
	25	K	K25	774	Ⅱ	土師器	めんこ	－	灰黄	橙	－	○		○	小石粒	ナデ	ナデ				－	坏を転用 糸切り
149	26	K	K25	792	Ⅱ	染付	Ⅲ	口縁～胴部	明緑灰	明緑灰	灰白	－	－	－	－	－	－	13.6	－	－	－	外面に草文
	27	K	K24	554	Ⅱ	色絵	徳利？	胴部	灰白	灰白	灰白	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	28	K	－	一括	－	陶器	土瓶	胴～底部	黄褐	灰黄	浅黄	－	－	－	－	－	－	－	8.8	—	－	肥前か関西系
	29	K	J25	467	Ⅱ	陶器	蓋	口縁～胴部	灰褐	灰褐	明赤褐	－	－	－	－	－	－	30.0	－	－	－	薩摩焼
	30	K	－	－	－	陶器	土瓶	口縁～胴部	にぶい赤褐	赤褐	明赤褐	－	－	－	－	－	－	7.4	－	－	－	薩摩焼
	31	K	－	－	－	陶器	碗	胴～底部	褐	にぶい赤褐	明赤褐	－	－	－	－	－	－	－	5.2	－	－	薩摩焼（姶良加治木系）蛇ノ目釉剥ぎ
	32	K	J25	878	Ⅱ	土製品	羽釜	胴部	浅黄	浅黄	－	○	○	○	白片岩	ナデ	ナデ	－	－	－	－	内外面ススけ着
	33	K	L24	一括	表土	土師器	焙烙	取手	灰白	灰白	－			○	白色粒	ナデ	ナデ	－	－	－	－	ユビオサエ

K調査区一般遺物観察表②

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
149	34	K	—	一括	表土	陶器	めんこ	—	黄褐	暗褐	にぶい赤褐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	擂鉢転用
	35	K	—	—	—	陶器	めんこ	—	黄褐	暗褐	明赤褐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	擂鉢転用
	36	K	—	一括	—	陶器	めんこ	—	黒褐	灰褐	灰褐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	擂鉢転用
	37	K	—	一括	表土	陶器	めんこ	—	黄褐	明赤褐	灰褐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	擂鉢転用
	38	K	—	—	—	陶器	めんこ	—	オリーブ黒	オリーブ黒	灰褐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	39	K	J25	499	Ⅱ	陶器	めんこ	—	灰褐	灰褐	灰黄褐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

P調査区遺構内遺物観察表

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
152	1	P	O−23	—	良福寺住職墓石群1	石造物	石塔	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	61.0	—	四世存方大和尚
153	1	P	O−23	—	良福寺住職墓石群2	石造物	石塔	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	65.0	—	九世東岸大和尚
156	13	P	P−25	49①	49号墓	白磁	紅皿	完形	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	4.7	1.6	1.5	—	
157	20	P	P−26	35①	35号墓	金属製品	煙管	完形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25.5	—	
158	21	P	P−26	36①	36号墓	金属製品	煙管	雁首	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.0	—	
	22	P	P−26	36②	36号墓	金属製品	煙管	吸口	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.8	—	
159	37	P	P−25	39①	39号墓	陶器	線香立て	口縁部〜胴部	明赤褐	にぶい赤褐	明赤褐	—	—	—	—	—	—	10.0	—	—	—	
160	43	P	Q−25	53①	53号墓	金属製品	煙管	雁首	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.9	—	44と同一個体
	44	P	Q−25	53②	53号墓	金属製品	煙管	吸口	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.9	—	43と同一個体
	46	P	P−25	72①	72号墓	金属製品	煙管	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	47と同一個体
	47	P	P−25	72②	72号墓	金属製品	煙管	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	柄付き
161	49	P	P−25	80①	80号墓	金属製品	煙管	雁首	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.3	—	
	50	P	P−25	80②	80号墓	金属製品	煙管	吸口	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.2	—	柄付き
	56	P	P−25	98①	98号墓	金属製品	煙管	雁首	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.7	—	
162	63	P	P−25	100①	100号墓	金属製品	指輪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3	—	
	64	P	P−25	100②	100号墓	金属製品	簪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.4	—	
	65	P	O−25	111①	111号墓	竹製品	扇子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8.0	—	
163	66	P	O−26	149①	149号墓	青花	皿	口縁部〜底部	明青灰	明青灰	灰白	—	—	—	—	—	—	10.2	5.6	2.5	—	
164	76	P	O−26	153①	153号墓	土師器	坏	口縁部〜底部	橙	橙	—	○	○	○	赤色粒	ナデ	ナデ	13.4	9.2	4.0	—	糸切り　底部にスス
165	77	P	O−26	155①	155号墓	金属製品	煙管	雁首	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.5	—	
	78	P	O−26	155②	155号墓	金属製品	煙管	吸口	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.1	—	
167	92	P	O−25	159①	159号墓	青白磁	小皿	口縁部〜底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	5.6	4.0	1.3	—	

P調査区一般遺物観察表

挿図番号	遺物番号	調査地点	出土地点	取上番号	遺構名	種別	器種	部位	色調		胎土					調整		法量（cm）			磁力反応	備考
									外面	内面	色調	石英	長石	角閃石	その他	外面	内面	口径	底径	器高		
171	1	P	—	—	墓域表採	白薩摩	水差し	口縁部〜底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	26.2	13.6	14.3	—	
	2	P	—	—	墓域表採	磁器	仏飯器	口縁部〜底部	灰白	灰白	紫褐	—	—	—	—	—	—	6.2	3.8	5.0	—	
	3	P	—	—	墓域表採	磁器	線香立て	口縁部〜底部	黒褐	灰黄褐	褐	—	—	—	—	—	—	6.6	2.9	3.8	—	龍門司焼の香炉
	4	P	—	—	墓域表採	磁器	蓋	天井〜底部	灰白	灰白	灰白	—	—	—	—	—	—	10.0	4.8	2.6	—	腰折れ碗

空風輪法量

挿図番号	遺物番号	実測番号	A	a	c	e	f	g
117	2	12	19.0	10.0	6.0	15.0	18.0	9.0
	3	1	29.0	11.0	8.5	19.0	20.0	9.0
	4	13	29.5	13.0	10.0	12.5	13.0	7.0
	5	15	19.5	10.0	8.0	17.0	18.5	—
	6	5	26.0	11.5	11.5	18.5	19.0	8.0
	7	21	28.0	13.0	8.5	20.5	20.5	10.0
	8	6	23.0	14.0	9.0	19.0	19.0	—
	9	4	27.5	12.8	8.8	18.8	18.5	9.5
	10	20	23.5	13.0	8.0	17.0	16.5	7.5
	11	22	24.5	14.0	8.5	18.0	17.0	6.5
	12	11	26.5	14.0	8.0	17.5	16.5	6.0
	13	3	25.0	14.5	7.5	19.0	17.5	7.3
	14	23	24.0	13.5	7.0	16.5	17.0	6.5
	15	25	25.5	14.5	7.0	16.0	16.5	7.0
118	16	27	25.5	15.0	7.5	20.0	19.5	7.5
	17	9	21.0	12.0	6.0	—	—	—
	18	2	25.5	13.0	6.0	18.0	17.0	10.0
	19	10	23.5	14.0	6.5	18.5	18.5	8.0
	20	29	28.0	18.0	6.5	16.5	15.0	6.0
	21	14	17.5	9.5	6.0	17.0	14.0	6.5
	22	16・28	17.0	10.0	4.0	13.5	11.5	5.5
	23	7	—	16.5	—	19.5	—	—
	24	24	13.0	3.5	6.5	13.0	17.0	7.5
	25	17	11.0	—	7.5	—	13.5	5.5

火輪法量①

挿図番号	遺物番号	実測番号	B	r	i	k	l	q	o	m
119	26	40	23.0	5.5	—	—	2.0	15.5	16.5	19.0
	27	34	22.5	7.0	9.0	—	—	13.8	15.0	16.0
	28	66	21.5	4.0	3.0	—	—	12.0	14.0	16.0
	29	65	17.0	2.5	5.0	—	—	11.5	13.0	16.5
	30	51	20.0	3.5	7.0	5.0	2.0	13.5	14.0	—
	31	61	20.5	4.5	3.5	—	—	15.5	17.0	13.5
	32	72・73	21.0	4.0	5.0	—	—	16.0	15.5	15.8
	33	31	22.0	5.0	5.0	—	—	16.5	17.0	15.5
	34	32	19.5	3.0	5.0	—	—	14.3	14.8	12.0
120	35	57	28.5	5.5	4.5	—	—	18.0	19.5	15.5
	36	76	24.5	7.8	4.0	—	—	17.5	18.5	17.5
	37	45	27.0	7.5	5.0	9.5	—	19.0	18.0	16.0
	38	75	24.5	4.0	6.0	—	—	17.0	16.5	16.3
	39	64	22.5	6.0	3.5	—	—	15.5	16.0	14.0
	40	67	22.5	4.5	4.5	—	—	14.5	16.0	13.0
	41	43	23.5	5.0	4.0	4.5	3.0	15.0	15.5	14.5
	42	70	23.0	4.0	3.5	—	—	14.5	14.5	15.0
	43	68	20.5	4.5	4.5	—	—	13.5	13.5	13.5
121	44	79	30.0	8.0	5.0	—	—	22.5	23.0	16.5
	45	80	23.0	4.5	5.0	—	—	17.0	17.5	15.5
	46	81	18.5	5.0	4.0	—	—	13.8	13.8	12.5
	47	82	21.5	4.8	5.0	—	—	18.0	17.5	17.5
	48	63	23.0	2.0	4.0	—	—	11.0	14.0	15.0
	49	53	24.5	8.0	3.0	—	—	18.5	18.0	19.5
	50	54	21.5	4.5	5.5	—	—	16.5	17.0	17.0
	51	38	17.0	3.8	4.0	—	—	15.0	11.0	10.5
	52	41	15.5	4.0	4.0	3.5	0.5	13.0	13.5	11.5

火輪法量②

挿図番号	遺物番号	実測番号	B	r	i	k	l	q	o	m
122	53	35	23.5	8.3	5.0	—	—	17.5	20.5	18.5
	54	52	21.0	7.0	1.5	—	—	20.0	20.5	18.5
	55	58	23.0	7.0	4.0	—	—	21.5	21.0	16.0
	56	69	20.5	6.5	4.0	—	—	18.5	19.0	17.0
	57	55	21.0	—	—	—	—	18.0	18.5	17.5
	58	42	19.0	4.0	—	5.0	4.5	16.0	19.5	—
	59	39	15.0	4.0	4.5	—	—	13.3	13.5	14.0
	60	30	17.0	6.0	5.0	—	—	15.5	15.0	15.0
	61	71	16.0	2.8	3.0	—	—	13.0	13.0	15.0
123	62	44	18.0	6.0	4.0	6.5	3.5	16.5	16.5	13.5
	63	47	17.5	4.0	8.0	—	—	16.0	16.0	13.5
	64	49	16.0	6.0	5.5	—	—	13.0	14.0	17.0
	65	33	18.0	1.0	4.5	—	—	17.0	16.5	18.0
	66	196	18.0	1.5	5.0	0.0	0.0	14.0	14.5	18.0
	67	46	19.0	5.5	4.5	—	—	17.0	17.5	15.0
	68	78	23.0	6.5	9.0	—	—	23.0	23.5	20.0
	69	48	14.5	3.5	4.0	—	—	18.0	20.5	18.0
124	70	198	14.5	5.8	8.0	0.0	0.0	—	—	—
	71	197	18.3	4.0	1.8	0.0	0.0	16.5	16.0	21.5
	72	37	14.0	5.5	4.0	—	—	14.0	15.0	16.5
	73	50	16.0	6.5	5.0	—	—	—	10.0	—
	74	36	20.0	3.3	4.0	—	—	17.5	17.3	15.0
	75	77	23.0	4.0	2.5	—	—	15.0	21.0	18.0
	76	60	34.5	5.3	5.0	—	—	14.0	26.0	24.5
	77	199	16.0	5.0	3.5	0.0	0.0	—	11.0	—

水輪法量①

挿図番号	遺物番号	実測番号	c	t	w	v	u
125	78	103	15.5	18.5	20.5	27	8
	79	84	20	15	17.5	31.5	10.5
	80	125	19	15.5	19.5	30.75	10.5
	81	85	20.5	21.5	22.5	31.5	10.5
	82	115	19.5	—	25	36.5	11.5
	83	107	19	23.5	22.5	36.5	11.5
	84	87	25.5	24.5	24	39.5	13
	85	132	18	19.5	19.5	27.5	11.5
	86	95	16.75	17.5	17	24	8.25
	87	93	20	18	22	29	10
	88	100	19	18	11.5	28	13
126	89	90	22.5	25.5	24.5	34.5	12.5
	90	89	25	23.5	23.5	37	12.5
	91	101	24	22.5	22	33.5	13
	92	114	25	20.5	20	33	12.5
	93	105	24.5	22.5	22	34.5	12.5
	94	124	22	—	17.5	30	12
	95	98	20	21.5	18	29	11.5
	96	123	19	20	17.5	29.5	11.5
	97	122	21	17.5	18	26.5	11
	98	118	15.5	15.5	—	24	9

水輪法量②

挿図番号	遺物番号	実測番号	c	t	w	v	u
127	99	135	26.5	24	24.5	37.5	15.5
	100	104	27.5	21	24	39	15.5
	101	136	29	20	19.5	38.5	15.5
	102	137	25.5	21	24	34	14
	103	126	24.75	22.5	21.5	34.5	15.3
	104	86	26.5	20	25	34	14
	105	94	19.5	19.5	18.5	28	11
	106	97	25	17	19	24.5	12.5
	107	92	22.5	19	21.5	27	11.5
	108	130	15.75	15	17	22.5	6.8
128	109	88	29	23.5	26.5	38	14
	110	83	17	15	20	26.5	7
	111	99	26	18	18	24.5	13.5
	112	106	23.5	18	19	30.5	12
	113	117	16	22.5	17.5	27	7.5
	114	96	19	—	—	24.5	11
	115	121	20.5	—	—	—	11.5
	116	127	21.5	—	—	—	11.5

地輪法量①

挿図番号	遺物番号	実測番号	D	x
129	117	169	11.5	28.0
	118	151	13.5	29.0
	119	152	13.5	30.5
	120	170	14.5	28.0
	121	149	15.0	31.0
	122	150	15.0	30.5
	123	183	16.5	27.0
	124	155	17.0	28.0
130	125	139	17.5	30.0
	126	157	17.5	29.5
	127	177	18.0	31.0
	128	154	19.0	31.5
131	129	165	19.0	29.0
	130	141	20.0	34.5
	131	153	20.0	37.0
	132	163	20.5	33.0
	133	188	22.0	39.5
	134	144	23.5	40.0
	135	173	23.0	43.5
	136	174	25.0	39.0
	137	146	24.0	41.0
	138	190	25.5	39.5
	139	181	24.5	30.5

地輪法量②

挿図番号	遺物番号	実測番号	D	x
131	140	168	20.3	24.0
	141	142	20.5	28.0
	142	180	20.0	28.5
	143	194	20.5	26.0
	144	159	23.0	31.5
	145	140	22.0	30.0
	146	184	23.0	29.5
	147	176	21.0	26.5
132	148	171	26.5	32.8
	149	182	27.0	34.0
	150	143	27.0	37.0
	151	145	29.0	33.5
	152	167	28.5	33.0
	153	189	27.5	39.0
	154	161	29.5	31.0
	155	191	29.5	36.5
	156	187	19.0	28.5
133	157	195	34.5	52.5
	158	172	32.5	39.5
	159	162	21.0	30.0
	160	164	20.5	35.5
	161	193	14.5	41.5

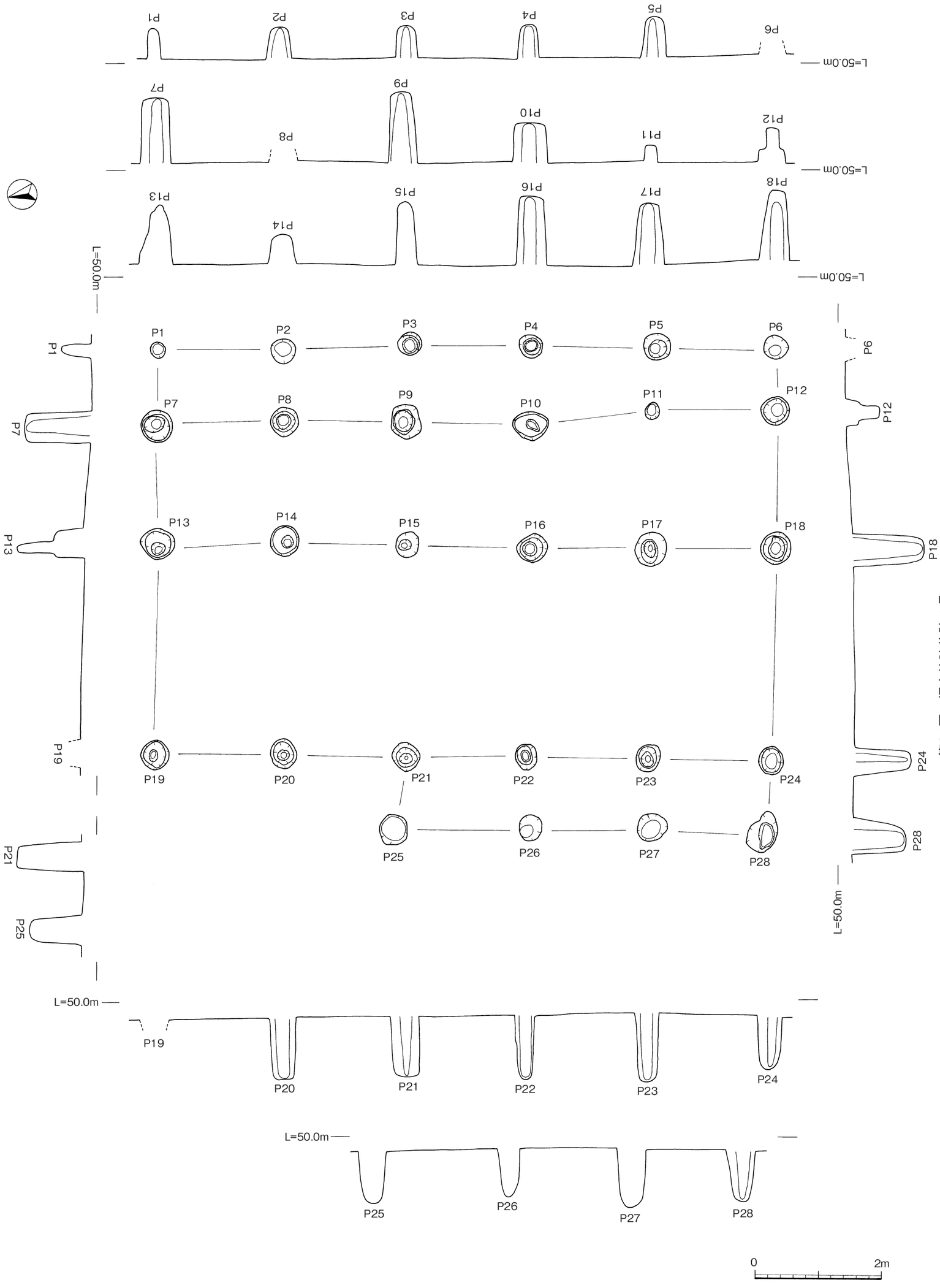
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（155）

榎城跡　第１分冊

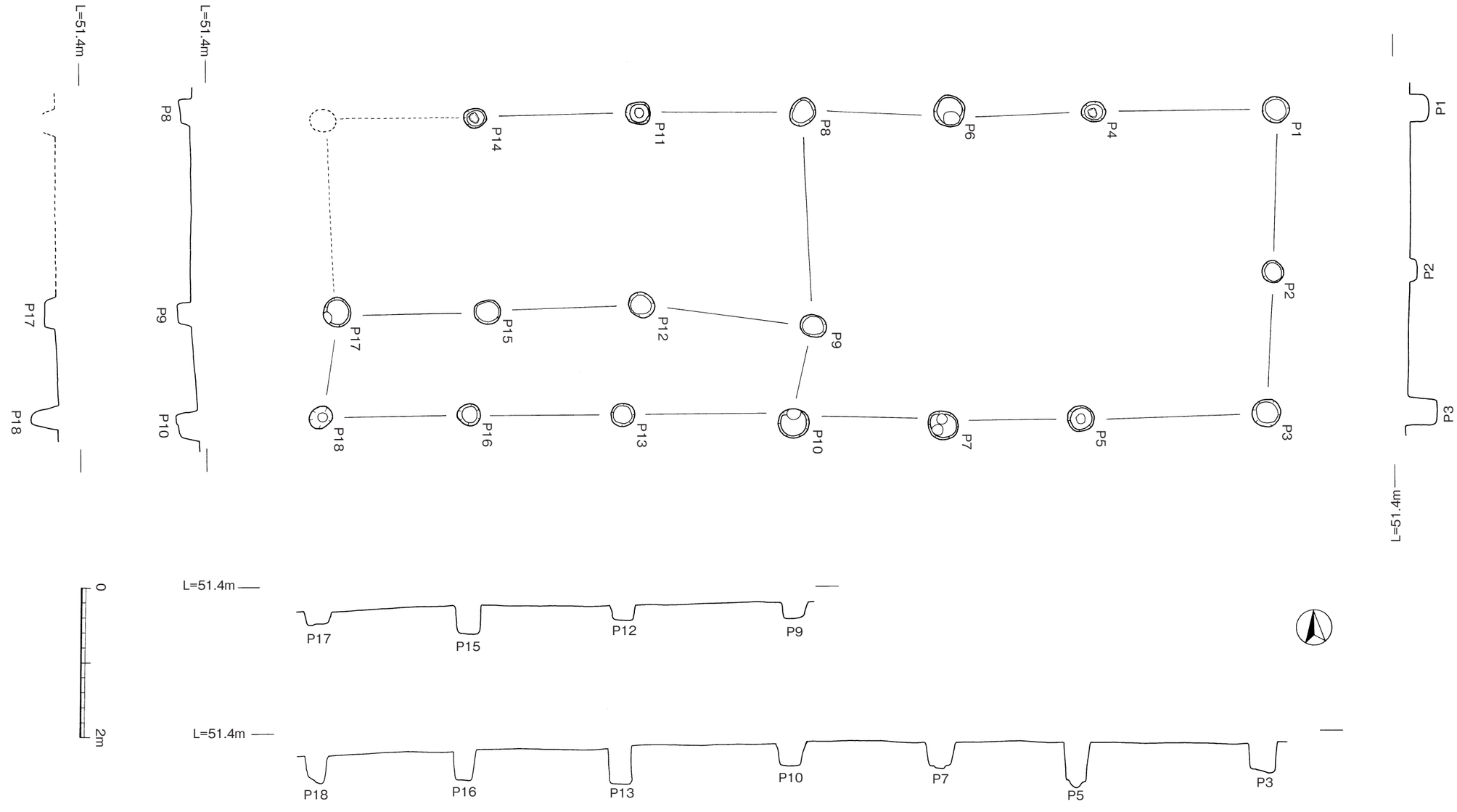
発行日　2010年３月

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL（0995）48-5811

印　刷　斯文堂株式会社
〒891-0122　鹿児島市南栄2-12-6
TEL（099）268-8211



第24図　掘立柱建物跡４号

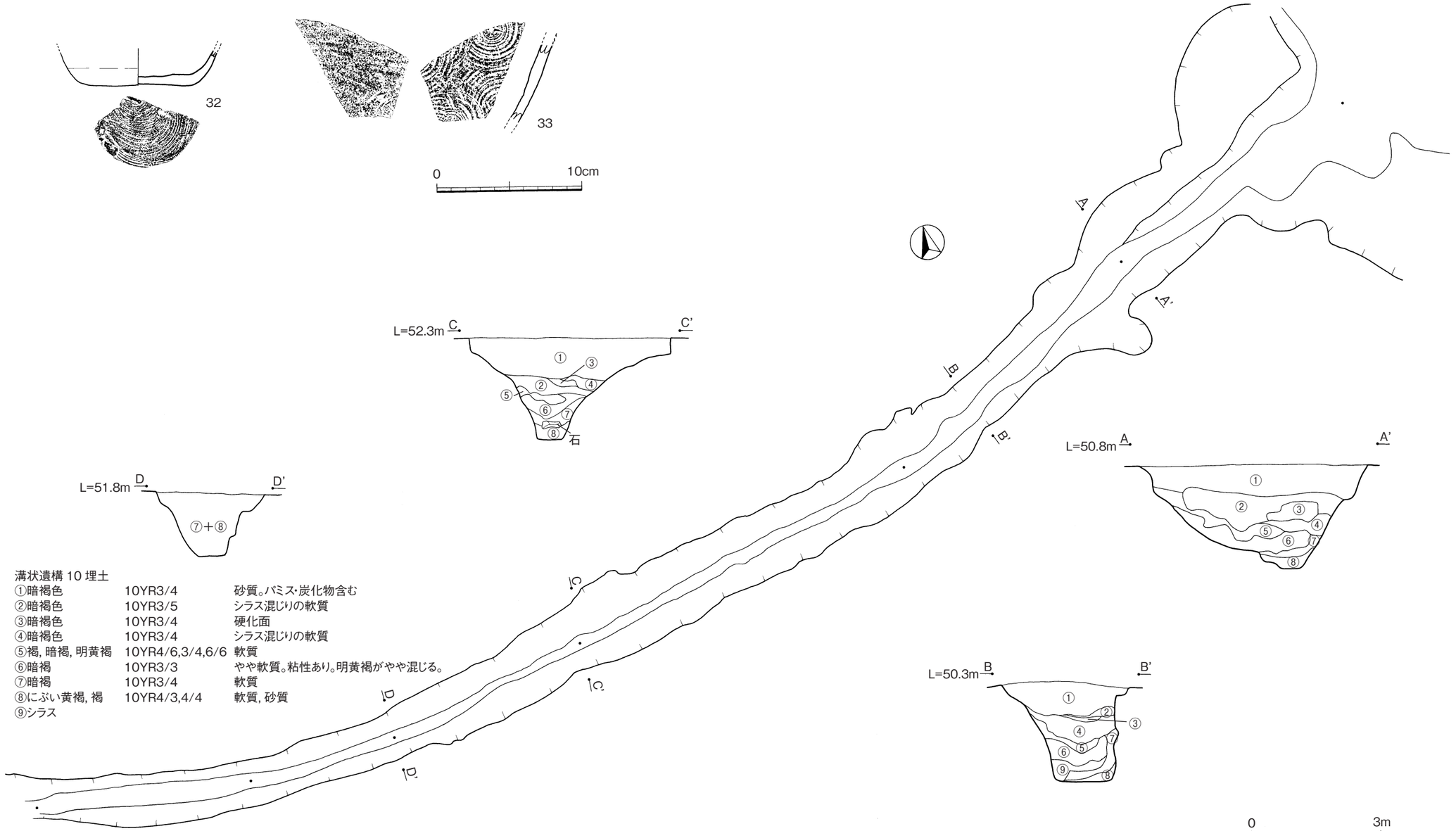


第27図　掘立柱建物跡７号

0 10cm

L=52.3m C C'

L=51.8m D D'



L=50.8m A A'

L=50.3m B B'

溝状遺構 10 埋土

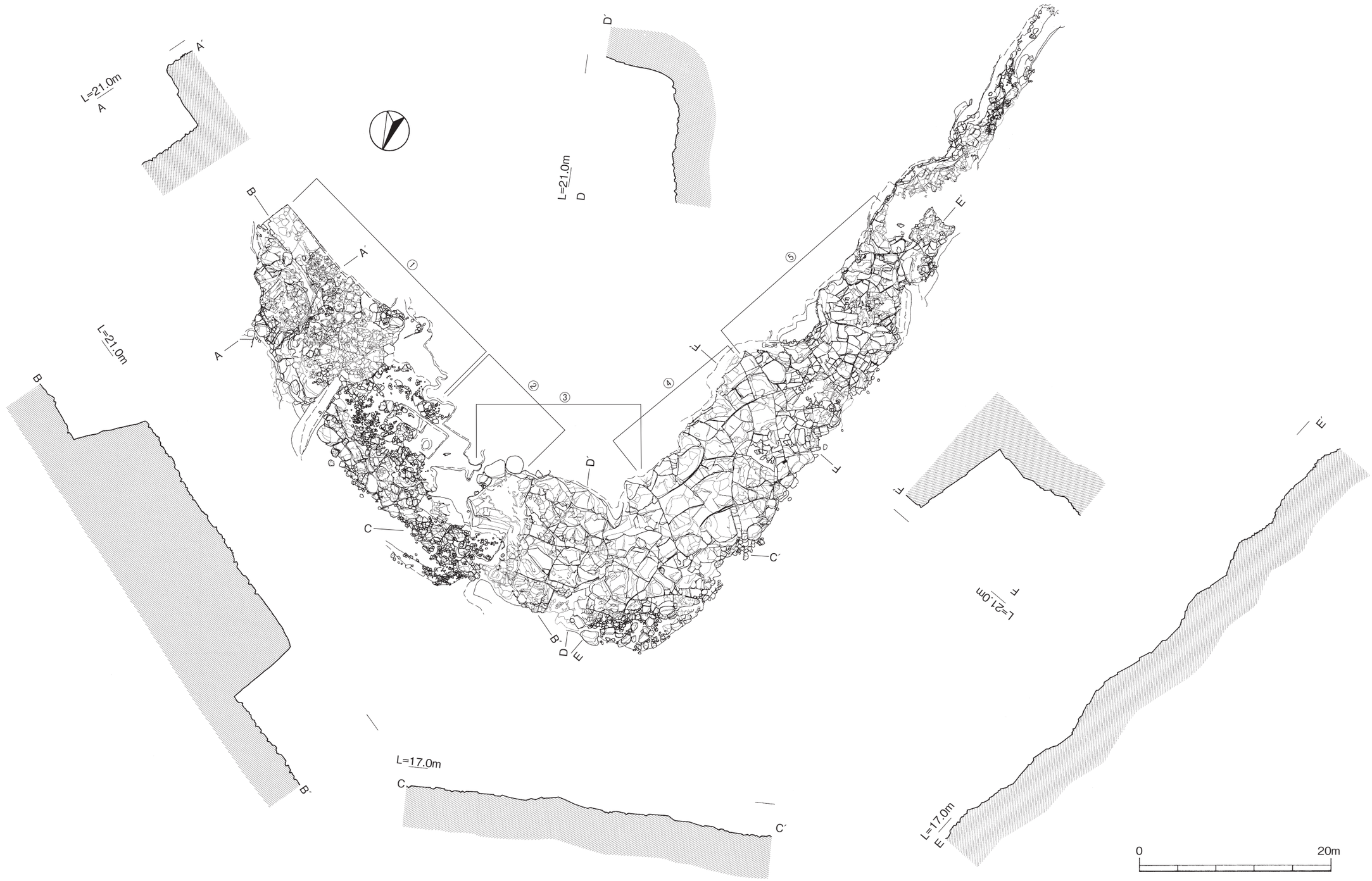
①暗褐色	10YR3/4	砂質。パミス・炭化物含む
②暗褐色	10YR3/5	シラス混じりの軟質
③暗褐色	10YR3/4	硬化面
④暗褐色	10YR3/4	シラス混じりの軟質
⑤褐, 暗褐, 明黄褐	10YR4/6,3/4,6/6	軟質
⑥暗褐	10YR3/3	やや軟質。粘性あり。明黄褐がやや混じる。
⑦暗褐	10YR3/4	軟質
⑧にぶい黄褐, 褐	10YR4/3,4/4	軟質, 砂質
⑨シラス		

0 3m

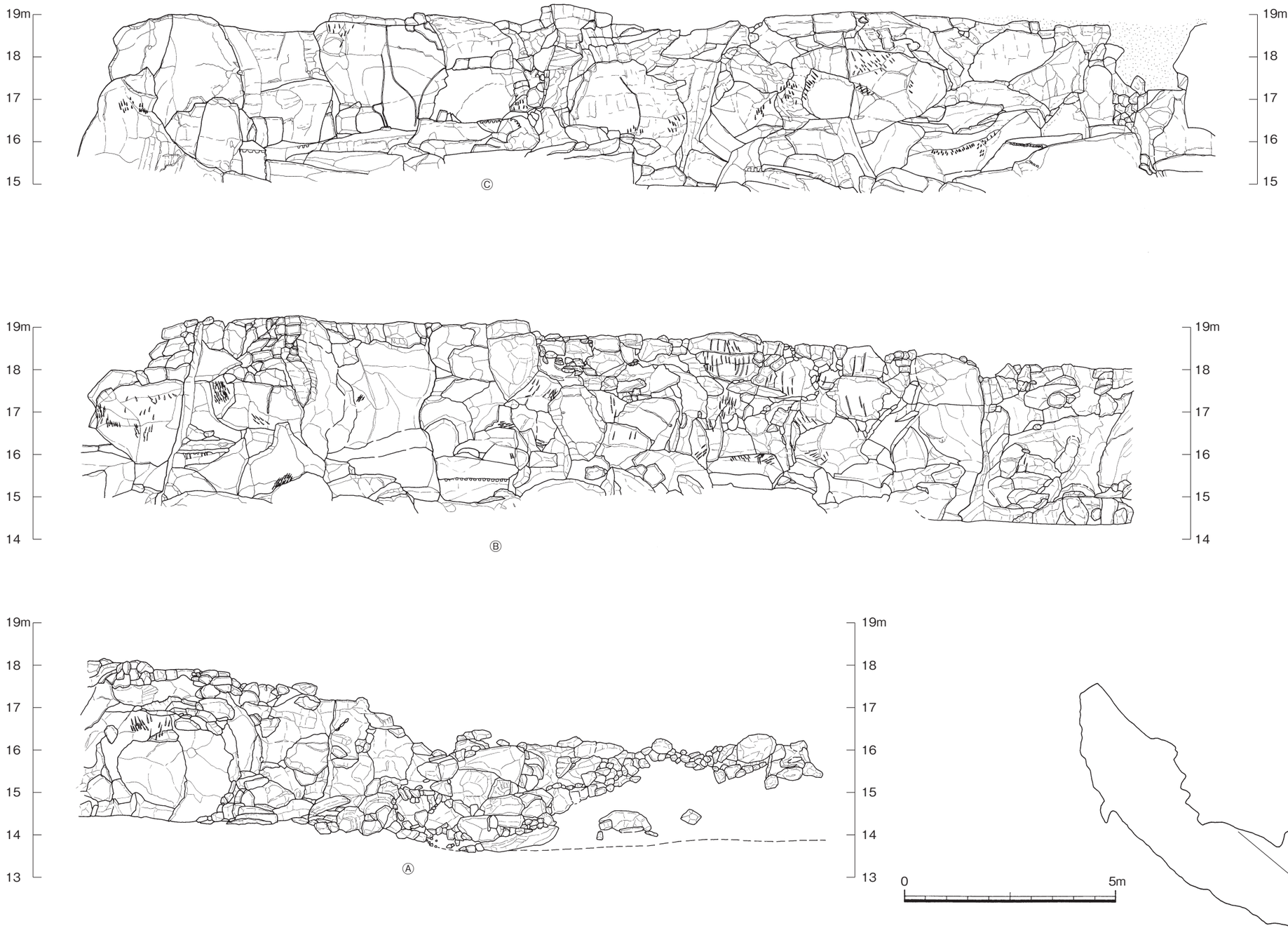
※埋土断面はＳ＝1/50

L=51.0m

第35図　溝状遺構10


L=21.0m
A
A'
L=21.0m
D
D'
L=21.0m
B
B'
A
A'
①
②
③
④
⑤
C
C'
D
D'
E
E'
T
T'
L=21.0m
T
L=17.0m
C
C'
L=17.0m
E
E'
0
20m

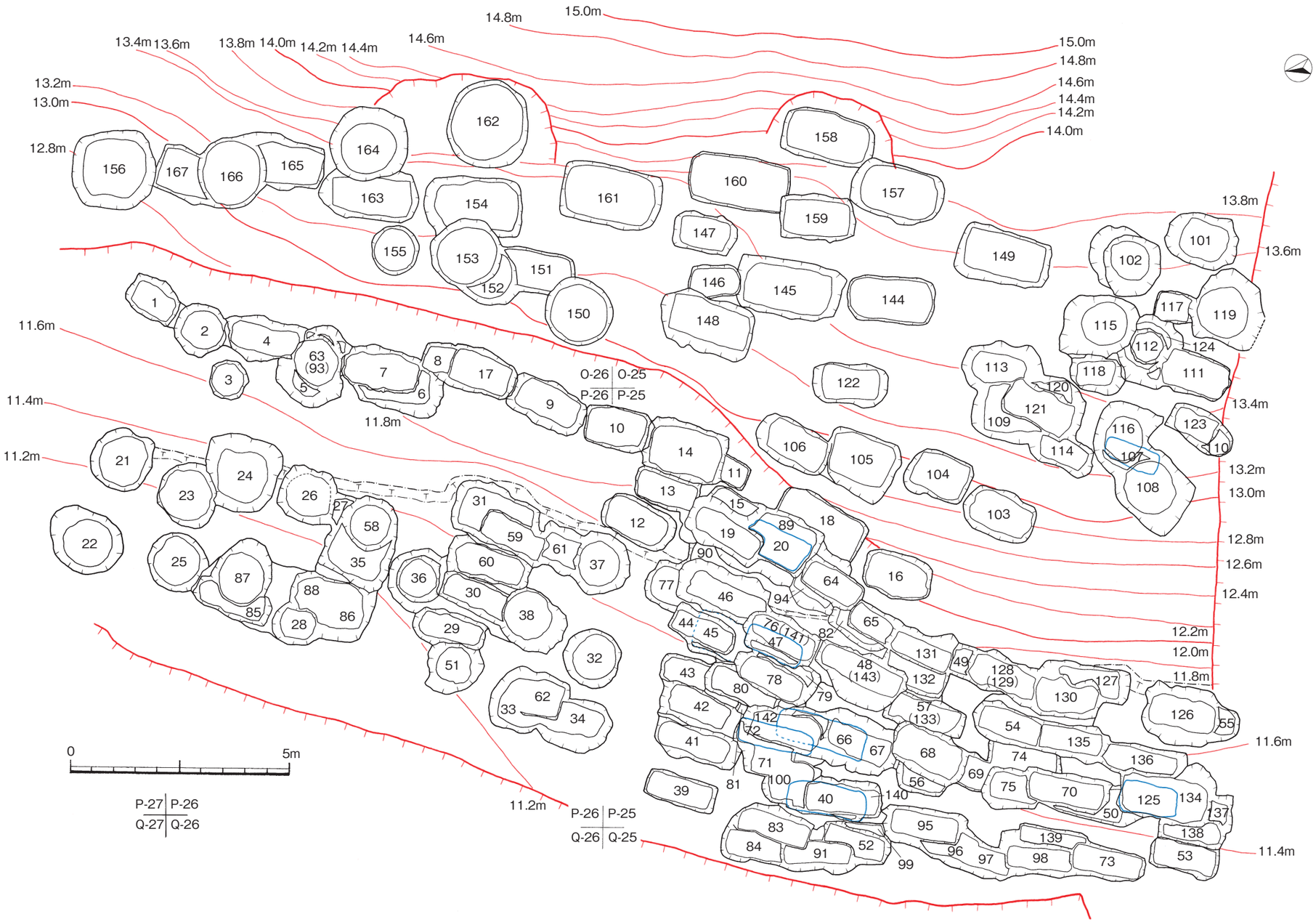
第57図　石切場全体図



第63図　石切場立面図１（A ～ C 部分）



第116図　五輪塔廃棄溝


14.8m
15.0m
13.4m
13.6m
13.8m
14.0m
14.2m
14.4m
14.6m
15.0m
14.8m
14.6m
14.4m
14.2m
14.0m
13.2m
13.0m
12.8m
13.8m
13.6m
11.6m
11.4m
11.8m
11.2m
13.4m
13.2m
13.0m
12.8m
12.6m
12.4m
12.2m
12.0m
11.8m
11.6m
11.4m
11.2m
0-26 0-25
P-26 P-25
P-27 P-26
Q-27 Q-26
P-26 P-25
Q-26 Q-25
0
5m

第154図　近世墓群